

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第470集

もとみやくまどう

本宮熊堂A遺跡第24次・本宮熊堂B遺跡第25次
発掘調査報告書

もとみやくまどう

一般国道46号盛岡西バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

2 0 0 6

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

本宮熊堂A遺跡第24次・本宮熊堂B遺跡第25次 発掘調査報告書

一般国道46号盛岡西バイパス建設事業関連遺跡発掘調査



遺跡全景



本宮熊堂A遺跡検出 旧河道断面



本宮熊堂B遺跡検出 RA130カマド

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道46号盛岡西バイパス建設事業に関連して平成16年度に発掘調査された本宮熊堂A遺跡第24次調査と本宮熊堂B遺跡第25次調査の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、本宮熊堂A遺跡からは古代の旧河道、本宮熊堂B遺跡からは奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡が多数見つかったことから、当時の集落の様相が僅かながら明らかになりました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合田 武

例 言

- 1 本報告書は、岩手県盛岡市本宮字熊堂69-6ほかに所在する本宮熊堂A遺跡24次、盛岡市本宮字熊堂44-2ほかに所在する本宮熊堂B遺跡25次の調査成果を取録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、一般国道46号盛岡西バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。
本宮熊堂A遺跡第24次・遺跡番号LE16-2107 遺跡略号OKO-04-24
本宮熊堂B遺跡第25次・遺跡番号LE16-2118 遺跡略号OKO-04-25
- 4 発掘調査面積は以下の通りである。
本宮熊堂A遺跡第24次・357㎡
本宮熊堂B遺跡第25次・7,366㎡
- 5 発掘調査期間及び発掘担当者は以下の通りである。
本宮熊堂A遺跡第24次・平成16年9月1日～11月15日 須原 拓・林 勲
本宮熊堂B遺跡第25次・平成16年6月1日～11月22日 村木 敬・林 勲
平成16年8月19日～11月22日 戸根貴之
平成16年8月1日～8月18日・9月1日～11月22日 溜 浩二郎・石崎高臣
平成16年10月21日～10月30日 島原弘征
平成16年10月21日～11月22日 菅野 梢
- 6 室内整理期間及び整理担当者は以下の通りである。
本宮熊堂A遺跡第24次・平成17年3月15日～3月31日・5月2日～5月31日 須原 拓
本宮熊堂B遺跡第25次・平成16年11月1日～平成17年3月31日 村木 敬・林 勲・石崎高臣
平成17年5月2日～5月31日 村木 敬
- 7 野外での写真撮影は調査員、遺物写真撮影は福士昭夫が行った。
- 8 本報告書の執筆は、第1章は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所に依頼している。第Ⅴ章と第Ⅶ章、第Ⅹ章1(2)「その他の遺構の検討」[旧河道]、2(3)「出土した木製品」は須原、それ以外は村木が担当している。編集も同様である。
- 9 測量、空撮、デジタル図化及び編集、分析鑑定、保存は以下の機関に委託した。
基準点委託業務 吉田測量設計株式会社
航空撮影 東邦航空株式会社
遺構図版デジタル調整図化、遺構図・遺物写真・実測図デジタル編集 株式会社セビアス
火山灰同定、C14年代測定、DNA分析、種実同定、樹種同定 株式会社古環境研究所

鉄製品保存処理・鉄製品・鉄滓成分分析 (株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ
釜石文化財保存センター

種実同定 高瀬克範 (東京都立大学)

須臾器胎土分析 株式会社 第四紀地質研究所

- 10 発掘調査、本報告書作成にあたっては下記の方々にご協力・ご指導を頂いた(敬称略)。
国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、盛岡市教育委員会、阿部朝衛、井上雅孝、鎌田祐二、小岩直人、小林正史、佐藤敏幸、佐藤良和、佐藤止彦、高木晃、高橋誠明、中川真人、松本秀明、森一欽
- 11 調査結果は、これまでに現地説明会資料や「平成16年度発掘調査報告書」第409集に掲載してきたが、本書がこれらに優先するものである。
- 12 土層の色調は、『新版標準1:色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1993)を使用している。
- 13 本報告で使用した地形図は、国土地理院発行1:50,000「盛岡」を使用している。
- 14 本書で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡概観	1
1	遺跡概略	1
2	位置・立地	2
3	地形・地質	2
4	周辺遺跡	4
III	野外調査と整理方法	8
1	野外調査の方法	8
2	調査経過	10
3	室内整理の方法	10
4	凡 例	11
IV	基本層序	13
1	本宮熊堂A遺跡	13
2	本宮熊堂B遺跡	13
V	分類基準	14
1	土器分類	14
2	石器分類	17
3	鉄滓分類	17
VI	本宮熊堂A遺跡第24次発掘調査	22
1	概 略	22
2	本宮熊堂A遺跡の基本層序	22
3	検出された遺構・遺物	22
VII	本宮熊堂B遺跡第25次発掘調査	42
1	概 略	42
2	検出された遺構・遺物	42
VIII	本宮熊堂A遺跡自然科学分析	258
IX	本宮熊堂B遺跡自然科学分析	292
X	調査の成果	334
1	遺構の検討	334
2	遺物の検討	339
3	遺構と遺物の変遷	353
4	ま と め	357
	報告書抄録	454

図 版 目 次

第1図	遺跡位置図	第41図	R A094	59
第2図	調査区範囲図	第42図	R A094柱穴・カマド	60
第3図	地形地質図	第43図	R A094出土遺物(1)	61
第4図	遺跡分布図	第44図	R A094出土遺物(2)	62
第5図	グリッド配置図	第45図	R A095	63
第6図	凡例	第46図	R A095出土遺物	64
第7図	土器分類図	第47図	R A096	66
第8図	遺構配置図	第48図	R A096カマド	67
第9図	遺構配置図(1)	第49図	R A096出土遺物	68
第10図	遺構配置図(2)	第50図	R A097	69
第11図	R G054	第51図	R A097カマド	70
第12図	旧河道	第52図	R A097出土遺物	71
第13図	旧河道断面	第53図	R A098	73
第14図	旧河道遺物詳細図-1	第54図	R A098カマド・出土遺物(1)	74
第15図	旧河道遺物詳細図-2	第55図	R A098出土遺物(2)	75
第16図	旧河道遺物詳細図-3	第56図	R A098出土遺物(3)	76
第17図	旧河道遺物詳細図-4	第57図	R A098出土遺物(4)	77
第18図	旧河道遺物詳細図-5	第58図	R A099	79
第19図	旧河道遺物詳細図-6	第59図	R A099カマド	80
第20図	旧河道遺物詳細図-7	第60図	R A099出土遺物	81
第21図	旧河道出土遺物(1)	第61図	R A100	83
第22図	旧河道出土遺物(2)	第62図	R A101	84
第23図	旧河道出土遺物(3)	第63図	R A101カマド	85
第24図	旧河道出土遺物(4)	第64図	R A101出土遺物	86
第25図	旧河道出土遺物(5)	第65図	R A102・カマド	88
第26図	旧河道出土遺物(6)	第66図	R A102出土遺物	89
第27図	旧河道出土遺物(7)	第67図	R A104	90
第28図	R D193・196	第68図	R A104カマド	91
第29図	R D193出土遺物(1)	第69図	R A104出土遺物	92
第30図	R D193出土遺物(2)	第70図	R A105	93
第31図	遺構外出土遺物	第71図	R A105カマド・出土遺物	94
第32図	R A091	第72図	R A106	95
第33図	R A091カマド・出土遺物(1)	第73図	R A106カマド	96
第34図	R A091出土遺物(2)	第74図	R A106出土遺物	97
第35図	R A092	第75図	R A107・出土遺物	99
第36図	R A092カマド	第76図	R A108	100
第37図	R A092出土遺物	第77図	R A108カマド	101
第38図	R A093	第78図	R A108出土遺物	102
第39図	R A093カマド	第79図	R A109	104
第40図	R A093出土遺物	第80図	R A109柱穴・カマド	105

第81図	R A 109 2号カマド遺物出土状況	106	第123図	R A 113カマド・出土遺物	157
第82図	R A 109出土遺物(1)	107	第124図	R A 114	159
第83図	R A 109出土遺物(2)	108	第125図	R A 114カマド	160
第84図	R A 109出土遺物(3)	109	第126図	R A 114出土遺物(1)	161
第85図	R A 118・出土遺物	111	第127図	R A 114出土遺物(2)	162
第86図	R A 121	112	第128図	R A 115	164
第87図	R A 121出土遺物	113	第129図	R A 115カマド	165
第88図	R A 123・出土遺物	114	第130図	R A 115出土遺物(1)	166
第89図	R A 125	116	第131図	R A 115出土遺物(2)	167
第90図	R A 125出土遺物	117	第132図	R A 115出土遺物(3)	168
第91図	R A 126	118	第133図	R A 116	169
第92図	R A 126カマド	119	第134図	R A 116カマド・出土遺物(1)	170
第93図	R A 126出土遺物	120	第135図	R A 116出土遺物(2)	171
第94図	R D 198・209・220・223・231	122	第136図	R A 119	173
第95図	R D 198・209・220・223・231・ 風倒木出土遺物	123	第137図	R A 119カマド	174
第96図	R A 050	125	第138図	R A 119出土遺物(1)	175
第97図	R A 050カマド	126	第139図	R A 119出土遺物(2)	176
第98図	R A 050出土遺物(1)	127	第140図	R A 120・出土遺物	177
第99図	R A 050出土遺物(2)	128	第141図	R A 124	179
第100図	R A 050出土遺物(3)	129	第142図	R A 124出土遺物	180
第101図	R A 051	131	第143図	R A 127	181
第102図	R A 051カマド	132	第144図	R A 127出土遺物	182
第103図	R A 051出土遺物	133	第145図	R A 128	183
第104図	R A 054	135	第146図	R A 128出土遺物	184
第105図	R A 054カマド	136	第147図	R A 129	186
第106図	R A 054出土遺物(1)	137	第148図	R A 129出土遺物	187
第107図	R A 054出土遺物(2)	138	第149図	R A 130	189
第108図	R A 054出土遺物(3)	139	第150図	R A 130柱穴・土坑	190
第109図	R A 110	141	第151図	R A 130カマド	191
第110図	R A 110土坑・柱穴・1号カマド	142	第152図	R A 130出土遺物(1)	192
第111図	R A 110 2号カマド	143	第153図	R A 130出土遺物(2)	193
第112図	R A 110出土遺物(1)	144	第154図	R A 130出土遺物(3)	194
第113図	R A 110出土遺物(2)	145	第155図	R A 130出土遺物(4)	195
第114図	R A 111	147	第156図	R A 130出土遺物(5)	196
第115図	R A 111カマド	148	第157図	R D 201・224・225・出土遺物	198
第116図	R A 111出土遺物(1)	149	第158図	R G 138	199
第117図	R A 111出土遺物(2)	150	第159図	R A 103	201
第118図	R A 111出土遺物(3)	151	第160図	R A 117	202
第119図	R A 112	153	第161図	R A 122	203
第120図	R A 112カマド	154	第162図	R E 017・018	204
第121図	R A 112出土遺物	155	第163図	R D 191・192・194・195・197・199	207
第122図	R A 113	156	第164図	R D 200・202~208	209
			第165図	R D 210~216	211

第166図	R D217・219・221・222・226～229 …215	第175図	柱穴配置図(5) ……226
第167図	R D230・232～234、R F02・03 ……217	第176図	竪穴住居床面積 ……331
第168図	R G118 ……219	第177図	土師器坏散布図(1) ……343
第169図	R G141～143 ……220	第178図	土師器坏散布図(2) ……344
第170図	柱穴配置索引図 ……221	第179図	非ロクロ土師器坏・鉢変遷図 ……354
第171図	柱穴配置図(1) ……222	第180図	非ロクロ土師器変遷図 ……355
第172図	柱穴配置図(2) ……223	第181図	竪穴住居時期変遷図 ……356
第173図	柱穴配置図(3) ……224	第182図	各時期ごとの規模の変遷図 ……356
第174図	柱穴配置図(4) ……225	第183図	竪穴住居配置図 ……358

表 目 次

第1表	柱穴観察表 ……227	第20表	本宮熊堂B遺跡観察表(18) ……246
第2表	本宮熊堂A遺跡観察表 ……228	第21表	本宮熊堂B遺跡観察表(19) ……247
第3表	本宮熊堂B遺跡観察表(1) ……229	第22表	本宮熊堂B遺跡観察表(20) ……248
第4表	本宮熊堂B遺跡観察表(2) ……230	第23表	本宮熊堂B遺跡観察表(21) ……249
第5表	本宮熊堂B遺跡観察表(3) ……231	第24表	本宮熊堂B遺跡観察表(22) ……250
第6表	本宮熊堂B遺跡観察表(4) ……232	第25表	本宮熊堂B遺跡観察表(23) ……251
第7表	本宮熊堂B遺跡観察表(5) ……233	第26表	本宮熊堂B遺跡観察表(24) ……252
第8表	本宮熊堂B遺跡観察表(6) ……234	第27表	本宮熊堂B遺跡観察表(25) ……253
第9表	本宮熊堂B遺跡観察表(7) ……235	第28表	本宮熊堂B遺跡観察表(26) ……251
第10表	本宮熊堂B遺跡観察表(8) ……236	第29表	本宮熊堂B遺跡観察表(27) ……255
第11表	本宮熊堂B遺跡観察表(9) ……237	第30表	本宮熊堂B遺跡観察表(28) ……256
第12表	本宮熊堂B遺跡観察表(10) ……238	第31表	竪穴住居一覧表 ……335
第13表	本宮熊堂B遺跡観察表(11) ……239	第32表	土器法量一覧 ……345
第14表	本宮熊堂B遺跡観察表(12) ……240	第33表	竪穴住居出土土器組成表(1) ……346
第15表	本宮熊堂B遺跡観察表(13) ……241	第34表	竪穴住居出土土器組成表(2) ……347
第16表	本宮熊堂B遺跡観察表(14) ……242	第35表	竪穴住居出土土器組成表(3) ……348
第17表	本宮熊堂B遺跡観察表(15) ……243	第36表	黒書土器一覧 ……350
第18表	本宮熊堂B遺跡観察表(16) ……244	第37表	刻書土器一覧 ……351
第19表	本宮熊堂B遺跡観察表(17) ……245		

写真図版目次

写真図版1	遺跡遠景・全景	363	写真図版41	R A 124・125	403
写真図版2	遺跡完掘	364	写真図版42	R A 126	404
写真図版3	竪穴住居出土遺物	365	写真図版43	R A 127・128	405
写真図版4	罌書土器・刻書土器	366	写真図版44	R A 128・129	406
写真図版5	旧河道(1)	367	写真図版45	R A 130・103・R E 017	407
写真図版6	旧河道(2)	368	写真図版46	R E 018・R D 191~197	408
写真図版7	旧河道(3)	369	写真図版47	R D 198~203・205・206	409
写真図版8	旧河道(4)・R G 051	370	写真図版48	R D 207~214	410
写真図版9	調査前風景	371	写真図版49	R D 215~217・219~223	411
写真図版10	R A 050	372	写真図版50	R D 224~231	412
写真図版11	R A 050・051	373	写真図版51	R D 232~234・R G 138・141~143	413
写真図版12	R A 054	374	写真図版52	旧河道出土土器	414
写真図版13	R A 091	375	写真図版53	旧河道出土土器	415
写真図版14	R A 092	376	写真図版54	R A 050・051・054出土土器	416
写真図版15	R A 093	377	写真図版55	R A 054・091~094・096出土土器	417
写真図版16	R A 094	378	写真図版56	R A 097~099・101・104・105・ 107~109出土土器	418
写真図版17	R A 095・096	379	写真図版57	R A 109~111出土土器	419
写真図版18	R A 097	380	写真図版58	R A 111・112・114出土土器	420
写真図版19	R A 098	381	写真図版59	R A 114・115出土土器	421
写真図版20	R A 099	382	写真図版60	R A 115・116出土土器	422
写真図版21	R A 100	383	写真図版61	R A 116・119・123・124・126・ 128出土土器	423
写真図版22	R A 101	384	写真図版62	R A 128~130出土土器	424
写真図版23	R A 102	385	写真図版63	R A 130出土土器	425
写真図版24	R A 104	386	写真図版64	R A 130・R D 193・209・220・ 224・225・風倒木1出土土器	426
写真図版25	R A 105	387	写真図版65	R A 050・051・054・091 出土土器	427
写真図版26	R A 106	388	写真図版66	R A 091~094出土土器	428
写真図版27	R A 107	389	写真図版67	R A 094・095出土土器	429
写真図版28	R A 108	390	写真図版68	R A 096・097出土土器	430
写真図版29	R A 109	391	写真図版69	R A 097・098出土土器	431
写真図版30	R A 110	392	写真図版70	R A 098・099・101出土土器	432
写真図版31	R A 111	393	写真図版71	R A 101・102・104・106・108 出土土器	433
写真図版32	R A 112	394	写真図版72	R A 109出土土器	434
写真図版33	R A 113	395	写真図版73	R A 110~112出土土器	435
写真図版34	R A 114	396	写真図版74	R A 113・119・121・124~126 出土土器	436
写真図版35	R A 115	397			
写真図版36	R A 116	398			
写真図版37	R A 117・118	399			
写真図版38	R A 119	400			
写真図版39	R A 120・121・122	401			
写真図版40	R A 123・124	402			

写真図版75	R A 126 · 127 · 129 · 130 出土土器 ……………437	写真図版85	R A 125 ~ 130出土土器 ……………447
写真図版76	R D 193 · 198 · 209 · 223 出土土器 ……………438	写真図版86	R D 193 · 201 · 209 · 223 · 225 · 231 · 遺構外風銅木出土土器 ……………448
写真図版77	R A 050 · 051 · 054出土土器 ……………439	写真図版87	R A 050 · 051 · 054 · 093 · 094 出土土器 ……………449
写真図版78	R A 054 · 091 ~ 093出土土器 ……………440	写真図版88	R A 094 · 096 · 098 · 099 · 101 · 105 · 108 · 110出土土器 ……………450
写真図版79	R A 094 · 095 · 098出土土器 ……………441	写真図版89	R A 111 · 112 · 114 ~ 116 出土土器 ……………451
写真図版80	R A 098 · 099出土土器 ……………442	写真図版90	R A 119 · 121 · 126 · 129 · R D 193 出土土器、R A 出土土製品 · 陶磁器 ……………452
写真図版81	R A 099 · 101 · 102 · 105 · 106 · 108 出土土器 ……………443	写真図版91	R A 出土鉄製品 ……………453
写真図版82	R A 109出土土器 ……………444		
写真図版83	R A 110 ~ 115出土土器 ……………445		
写真図版84	R A 116 · 118 ~ 121 · 124 出土土器 ……………446		



第1図 遺跡位置図

I 調査に至る経緯

「本宮熊堂A・B遺跡」は、盛岡西バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道46号は、盛岡市を起点に奥羽山脈を仙岩トンネルで越え、国道13号に接し、秋田市内に至る延長117kmの主要幹線道路であり、盛岡市で一般国道106号と接続することにより、太平洋と日本海を結ぶ大動脈の役割を担っている路線である。

盛岡西バイパスは、盛岡市永井第一地割字高屋と同市上厨川字前湯の間約7.8kmの区間で計画されている。近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、年々増大する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に昭和59年に事業着手、昭和62年から工事着手、一部供用し事業を進めている。

「本宮熊堂A・B遺跡」については、盛岡南新都市開発整備事業の区域に存する埋蔵包蔵地であり、過年度において岩手県教育委員会及び盛岡市教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。「本宮熊堂A・B遺跡」については平成15年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成16年6月1日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、「本宮熊堂A・B遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)

II 遺跡概観

1 遺跡概略

本宮熊堂A遺跡第24次調査と本宮熊堂B遺跡第25次調査を報告するにあたって、はじめに遺跡の概略について示しておく。両遺跡は、今回の調査原因である一般国道46号盛岡西バイパス建設事業を始め、盛岡南新都市土地区画整理事業を中心とした調査原因により数多くの発掘調査が行われている。これまでの成果として、本宮熊堂A遺跡は縄文時代晩期後葉から終末の集落跡、本宮熊堂B遺跡は奈良時代から平安時代の集落跡がそれぞれ確認され、各遺構に伴い多くの遺物が出土している。今回の調査においても両遺跡共に過去と同様の成果が得られている。

本宮熊堂A遺跡は平成8年、本宮熊堂B遺跡は平成5年にそれぞれ当センターにより行われ、それ以降、当センター及び盛岡市教育委員会により発掘調査が継続され、現在に至っている。それらの調査履歴を挙げておく。(以下、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書を岩文埋報と略す。)

(1) 本宮熊堂A遺跡

今年度まで当センターにより下記の調査が行われている。

次数	調査期間	調査面積	調査原因	内容	集数
第6次	1996.07.03～10.24	15,110㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡	岩文埋報281集
第7次	1996.09.02～10.23	3,800㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	散布地	岩文埋報266集
第17次	2003.04.12～06.20	1,588㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡	岩文埋報458集
第24次	2004.09.01～11.15	357㎡	国道46号盛岡西バイパス建設事業	川河道	岩文埋報470集
第26次	2004.06.07～10.19	2,636㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡	

(2) 本宮熊堂B遺跡

今年度まで当センターにより下記の調査が行われている。当センターが刊行した報告書において第5・10次のみ「熊堂B遺跡」、それ以外は「本宮熊堂B遺跡」として報告しているが、それらは同一の遺跡を報告しているものである。

次数	調査期間	調査面積	調査原因	内容	集数
第1次	1993.04.07～08.12	14,400㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(堅穴住居9棟)	岩文埋報226集
第4次	1997.04.04～05.30	4,181㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(堅穴住居8棟)	岩文埋報308集
第5次	1997.08.18～10.15	2,910㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(堅穴住居6棟)	岩文埋報293集
第9次	2000.05.18～05.31	186㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	散布地	岩文埋報370集
第10次	2000.04.14～06.16	3,235㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(堅穴住居4棟)	岩文埋報377集
第11次	2000.05.01～05.17	660㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(住居伏遺構1棟)	岩文埋報370集
第13次	2001.08.01～11.02	3,751㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(堅穴住居9棟)	岩文埋報467集
第14次	2002.06.17～09.06	1,954㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(堅穴住居5棟)	岩文埋報451集
第15次	2002.04.10～09.06	6,235㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(堅穴住居6棟)	岩文埋報467集
第18次	2003.04.11～06.30、08.18～10.08	5,452㎡	国道46号盛岡西バイパス建設事業	集落跡(堅穴住居7棟)	岩文埋報458集
第19次	2003.09.01～09.30	97㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	散布地	岩文埋報455集
第20次	2002.04.10～09.06	10,216㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(堅穴住居22棟)	岩文埋報467集
第25次	2004.06.01～11.22	7,366㎡	国道46号盛岡西バイパス建設事業	集落跡(堅穴住居43棟)	岩文埋報470集
第27次	2004.08.06～09.14	3,661㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業	集落跡(堅穴住居7棟)	岩文埋報487集

本宮熊堂A・B遺跡は第1次調査から両遺跡に跨り連番で次数が付されている。第27次までの調査において、上記及び本宮熊堂B遺跡16次以外は、盛岡市教育委員会により調査が行われていることとなる。

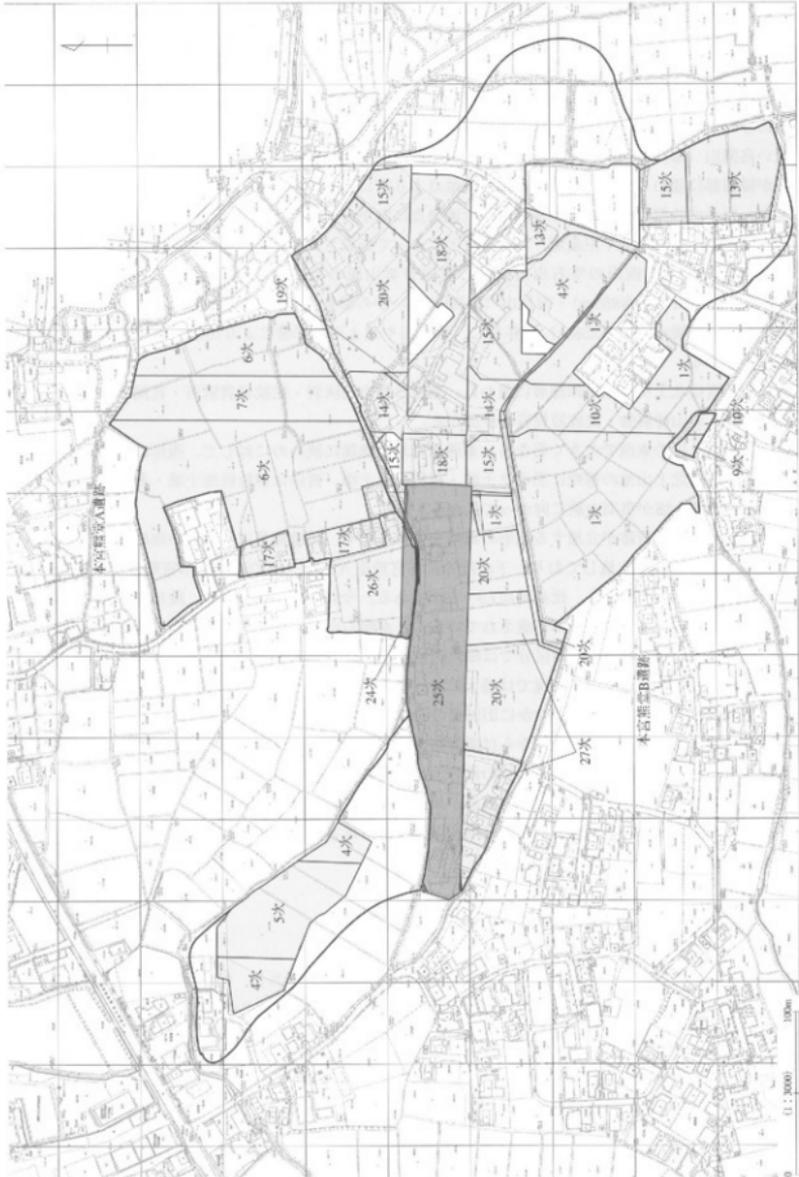
2 位置・立地

本宮熊堂A遺跡は盛岡市本宮字熊堂69-6ほか、本宮熊堂B遺跡は盛岡市本宮字熊堂44-2ほかにて所在しており、両遺跡は共にJR仙北町駅の西方約1.5kmに位置し隣接している。遺跡は雫石川南岸に形成された河岸段丘上に立地している。一つに見えるこの段丘も実際には小さな段丘が3つに分かれており、標高約123mの下位段丘に本宮熊堂A遺跡、標高約125mの中段段丘に本宮熊堂B遺跡、さらに上の段丘には稲荷遺跡がある。各段丘は2m前後の比高差をもって存在している。

遺跡が所在する盛岡市は、県庁所在地であり、総面積489.15ha、人口約28万8千人の都市である。県のほぼ中央部に位置し、北は玉山村、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、西は岩手郡滝沢村・雫石町、南は紫波郡矢巾町・紫波町・稗貫郡大迫町に接する。国土地理院発行の1:50,000地形図「盛岡」(N J-54-13-14-2)の図幅に両遺跡共に含まれ、本宮熊堂A遺跡は北緯39度41分08秒、東経141度07分44秒、本宮熊堂B遺跡は北緯39度40分52秒、東経141度08分00秒付近である(日本測地系)。

3 地形・地質

遺跡が立地する盛岡市は、北上山地と奥羽脊梁山脈に挟まれた北上平野の北部に位置している。その合間にある北上川が盛岡市の西寄りを南流しており、中津川・雫石川などの複数の支流が合流している。この北上川は延長243kmあり、西に奥羽脊梁山脈、東に北上山地の間を流れ、宮城県石巻湾に注ぐ。その両岸には沖積地が形成され市街地化や耕地として利用されている。



第2図 調査区輪画図

盛岡市周辺は北上川の中流域に相当し、地形・地質共に背後に控える山地構造の違いによってその様相が異なる。遺跡が存在する北上川と雫石川が合流する付近の地形・表層地質・土壌をまとめ、遺跡周辺の地形について示しておく。

盛岡市の地形は、北上川を挟んだ東と西、さらに西側は雫石川を挟んで南と北で異なり、大きく3つに分けられる。北上川東岸は地殻変動によって隆起し準平原化した北上山地が張り出して、標高の低い高洞山（標高522m）・岩山（標高340m）・鐘山（標高390m）と丘陵地、高位段丘など小規模な段丘が縁辺部に認められる。雫石川との合流地点より南に沖積地などが広がる。北上川西岸の雫石川北側は、岩手山の裾野が北上川と雫石川の合流地点に向かって伸び、標高の高い泥流地形や火山灰砂台地が広がる。低位段丘や氾濫原、旧河道などによって形成された標高の低い地形の面積は他と比較すると狭い。北上川西岸の雫石川南側は、奥羽脊梁山脈の東端の小起伏山地である箱ヶ森（標高865m）・赤林山（標高855m）・南昌山（標高848m）から標高を下げて字郷山（標高368m）・稲荷山（標高233m）・飯岡山（標高358m）が存在し、雫石川や北上川の影響により比較的平坦な砂礫段丘と沖積地が広がる。

表層地質は北上川流域は砂礫層に覆われ、東岸は輝力凝灰岩・蛇紋岩質岩石・花崗岩質岩石、西岸は集塊岩・火山砕屑物・流紋岩質岩石が広がる。

土壌は北上川の東西で大きく異なる。東岸は低地が極端に狭いのに対して、西岸はそれが大きく広がる。東岸は北上山地の裾野に黒ボク土壌・粗粒低地土壌、西岸は粗粒低地土壌・多湿黒ボク土壌・黒ボクグライ土壌が奥羽山脈に向かって広がる。

本宮熊堂A・B遺跡が立地する地形の概略を述べておく。西遺跡共に雫石川の南岸に形成された河岸段丘上に隣接して立地しており、下の段丘に本宮熊堂A遺跡、上の段丘に本宮熊堂B遺跡がある。この境には段丘崖が存在し、比高差は1.5～2mである。今回の調査によって、段丘崖直下に縄文時代から奈良時代にかけての河道が形成されていることが明らかになった。西遺跡共に砂礫段丘上に立地し、地形区分では砂礫層、土壌区分では細粒灰色低地土壌である。

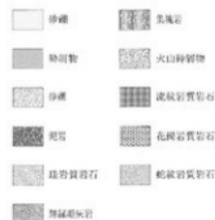
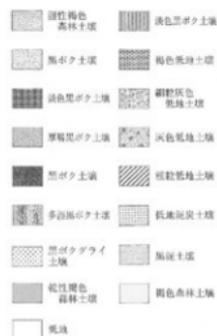
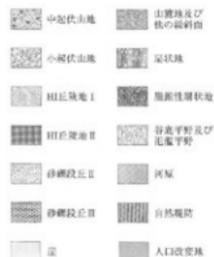
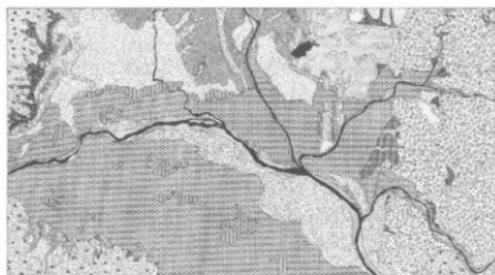
本宮熊堂A遺跡の地形は、現況では盛上によって平坦に見える地形であるが、検出後は調査区北端には平坦面が存在しており、緩やかに旧河道のある南方へ傾斜している。

本宮熊堂B遺跡の地形は、現況からは調査区内の北側に段丘崖が存在しており、全体的には緩やかに段丘崖に向かって傾斜しているものの部分的に平坦面を形成していることが確認できる。表土除去後から把握できた地形は、調査区の南西部が最も標高が高く、段丘の内陸部にあたる南以外の三方へ緩やかに下っていく。その傾斜は西方は高低差がなく、東方はより大きくなる。これら確認できたことはほぼ現況と同様である。

4 周辺遺跡

本宮熊堂A・B遺跡が存在する盛岡市には遺跡が多く存在しており、500遺跡以上が登録されている。それらは縄文時代草創期から近世にかけて所属している。遺跡は各時代ごとに継続して認められていることから、古くから生活する環境が整っていたと考えられる。

近年、盛岡市新都市土地区画整備に伴う発掘調査が継続して行われ、それらの成果により本遺跡が立地する雫石川南岸は、奈良時代から平安時代にかけての遺跡が多く存在していることが判明した。その結果、奈良時代の集落、志波城の形成、そして平安時代の集落とそれらの変遷が窺え、古代の様相が明らかになりつつある。各時代ごとの遺跡と段丘との関わり合いについての歴史的環境は西澤



第3図 地形地質図

(岩文埋2003 a)、遺跡と旧河道の関係については八木(岩文埋2003 b)により、詳細な報告がなされているのでそれらを参照願いたい。

今回の調査から本宮熊堂A遺跡は縄文時代晩期を中心とした集落、本宮熊堂B遺跡は奈良時代から平安時代にかけての大規模な集落という成果が得られた。しかし、今回報告対象となる本宮熊堂A遺跡の調査区からは、主に奈良時代の遺物が出土する旧河道が検出された。ここでは、本宮熊堂B遺跡の集落と本宮熊堂A遺跡の旧河道の主体時期である奈良から平安時代に焦点を当て、近隣の遺跡との位置関係を把握しておく。

奈良時代の集落遺跡は、台太郎遺跡は約1km南東、野古A遺跡は200m南、集落と円形周溝墓がセットで認められている飯岡沢出遺跡は500m南に位置している。

平安時代の集落遺跡は、上述した台太郎遺跡や野古A遺跡、飯岡林崎II遺跡は2km南西、小幡遺跡は1km西、飯岡才川遺跡は600m南に位置している。志波城は約2km東に位置する。

参考文献

(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書を岩文埋報、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターを岩文埋とする。)

岩手県企画開発室1978「北上川系南陸地域土地分類基本調査 -盛岡-」

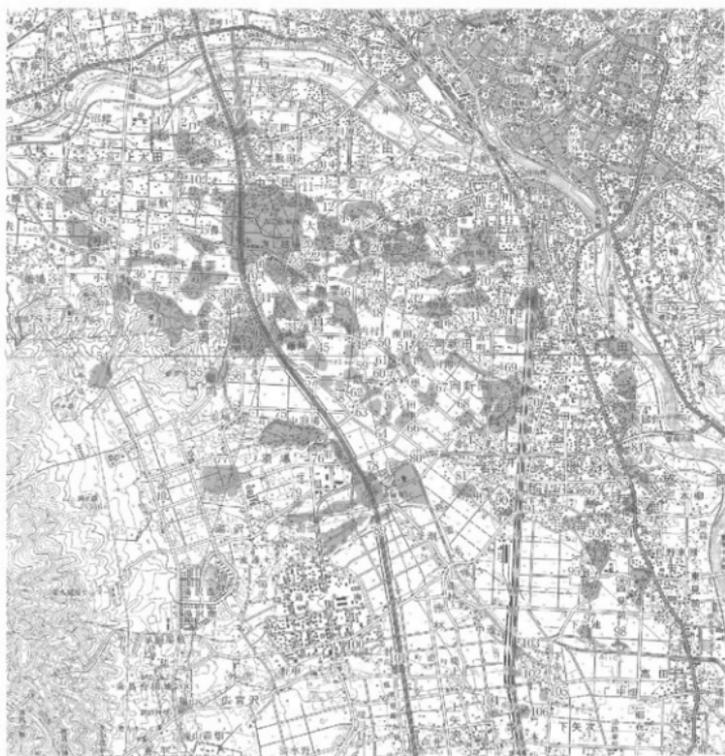
岩文埋2002 「熊堂B遺跡第10次発掘調査報告書」岩文埋報377集

岩文埋2003 a 「台太郎遺跡第35次発掘調査報告書」岩文埋報417集

岩文埋2003 b 「細谷地遺跡発掘調査報告書-第4・5次調査-」岩文埋報414集

岩文埋2004 「飯岡林崎II遺跡発掘調査報告書」岩文埋報427集

岩文埋2004 「細谷地遺跡第8次発掘調査報告書」岩文埋報454集



番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	種田	敷布地	2	太郎部	集落跡	3	上野原敷	集落跡	4	ハッロ	敷布地	5	八斗	敷布地
6	山上山	集落跡	7	新山部	集落跡	8	太郎部西森古堀	子受・敷布地	9	一本木	敷布地	10	畑中	集落跡
11	豊波城跡	集落跡	12	大宮北	集落跡	13	小堀	集落跡	14	本宮類立B	集落跡	15	六太郎	敷布地
16	大沼	集落跡	17	丸兵衛新田	集落跡	18	竹鼻	集落跡	19	上越町A	集落跡	20	大宮	集落跡
21	鬼柳A	集落跡	22	小林	集落跡	23	水門	集落跡	24	埴野	集落跡	25	鬼等目	集落跡
28	鬼柳C	集落跡	27	野古B	敷布地	28	野古A	敷布地	29	飯岡沢田	集落跡	30	飯岡才川	集落跡
31	畑谷地	集落跡	32	矢野	敷布地	33	南仙北	集落跡	34	向中野新	集落跡	35	二ツ沢	敷布地
36	蟹沢下	敷布地	37	山中	敷布地	38	月見山	敷布地	39	堤	敷布地	40	大塚I	集落跡
41	辻屋敷	集落跡	42	藤島I	集落跡	43	上総湯田	集落跡	44	二又	敷布地	45	飯岡林跡B	集落跡
46	西田A	集落跡	47	西田B	集落跡	48	飯田	集落跡	49	深堀I	集落跡	50	宮原敷I	敷布地
51	下久根I	敷布地	52	石坪	敷布地	53	少堂	敷布地	54	大ヶ森	敷布地	55	飯岡毒原	敷布地
56	赤坂I	敷布地	57	飯岡林跡I	集落跡	58	上野田	集落跡	59	深堀II	集落跡	60	西	集落跡
61	高尾敷目	敷布地	62	熊堂I	集落跡	63	熊堂II	集落跡	64	海母野	集落跡	65	飯岡目	集落跡
66	田中	集落跡	67	松島	集落跡	68	忍本	敷布地	69	生野	集落跡	70	陣宮	集落跡
71	堤田	敷布地	72	尻塚	集落跡	73	西院渡	集落跡	74	百目木	集落跡	75	新井田I	敷布地
76	新井田II	敷布地	77	木部	集落跡	78	小田II	集落跡	79	小田I	敷布地	80	大丘	敷布地
81	間本	敷布地	82	永井新	敷布地	83	下木林	敷布地	84	中島	敷布地	85	二本橋輪	集落跡
86	高岸A	集落跡	87	高橋B	敷布地	88	湯沢大船	敷布地	89	一本松	敷布地	90	神田	敷布地
91	下永井	敷布地	92	萬藤田	集落跡	93	三石野田	集落跡	94	青野	敷布地	95	見前原	集落跡
96	見前入保屋敷	敷布地	97	下谷地	集落跡	98	下谷地敷	敷布地	99	和山	敷布地	100	天戸	集落跡
101	宮田	敷布地	102	下森林II	集落跡	103	下森林I	集落跡	104	小代	敷布地	105	天畑	集落跡
106	高畑	敷布地	107	向中野敷	集落跡									

第4図 遺跡分布図

Ⅲ 野外調査と整理方法

1 野外調査の方法

(1) 調査区設定

調査区の設定は、盛岡市教育委員会の方針に準じている。平面直角座標第X系（日本測地系）を座標変換した調査座標を用いている。遺跡が所在する大宮地区の調査座標点X = -35000.000、Y = 25000.000を基点とし、50×50mの正方形の大グリッドを設定し、それを25等分し2×2mの小グリッドとしている。大グリッドの呼称は北西隅を基点として、南方向へ1～25、東方向へA～Y、小グリッドもこれと同様の方法を用い、南方向へ1～25、東方向へa～yとしている。小グリッドの呼称は1A1aとなる。

	X座標	Y座標	標高(m)	グリッド名
基準点1	-35240.000	25650.000	124.446	5 N15a
基準点2	-35240.000	25570.000	125.353	5 L21k
補点1	-35228.000	25650.000	124.199	5 N21a
補点2	-35240.000	25508.000	124.937	5 K21e
補点3	-35228.000	25476.000	124.895	5 J15n
補点4	-35228.000	25462.000	124.751	5 J15g

(2) 表土掘削・遺構検出・遺構精査

表土掘削は予め任意に設定したトレンチで遺構検出面を確認し、その面まで重機を使用し表土除去を行った。遺構検出面は遺構を確認できるまで人力によりジョレンを用いて行う。検出した遺構は適宜二分法ないし四分法を使用し精査を行った。

(3) 遺物の取り上げ方

遺構内出土遺物は遺構数が多く時間的制約から、埋土中に関しては一括、下位から床面にかけての遺物は原位置を図化し番号を付して取り上げた。

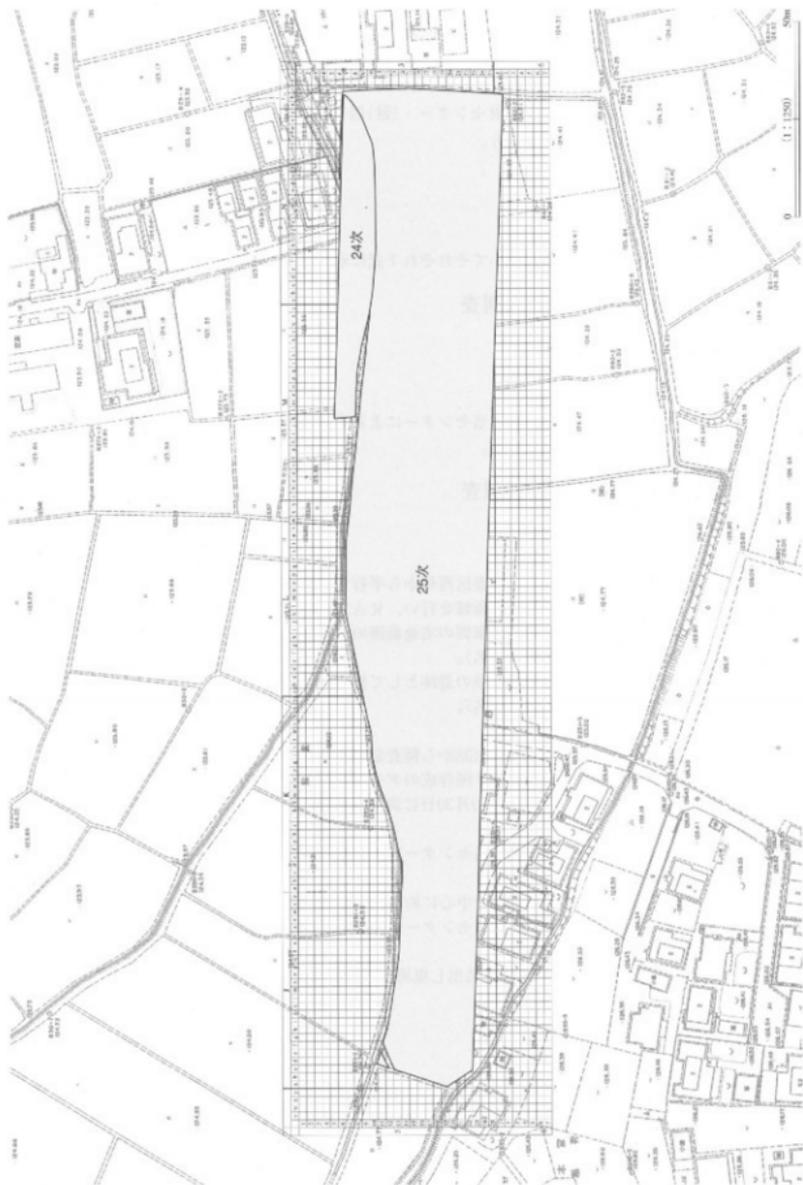
遺構外出土遺物は、遺構検出面より上位の表土から出土したものは基本土層単位、遺構検出面において出土したものは小グリッド単位で取り上げた。

(4) 実 測

遺構の平面実測は光波測距儀を用いて作成することを基本として、簡易遣り方測量で一部作成している。縮尺は堅穴住居や土坑などは原則として1/20、カマドは1/10、その他は必要に応じて任意の縮尺を用いている。コンタ図は株式会社セビアスのデジタルカメラによる撮影で作成している。

(5) 写 真 撮 影

写真撮影は、35mm判カメラ2台（モノクロ・リバーサル）と6×9cm判カメラ1台（モノクロ）を使用し、遺構や遺物の検出状況や出土状況に応じて行っている。また、デジタルカメラを使用して補助撮影をしている。



第5図 グリッド配置図

(6) 広報活動

平成16年10月30日に現地説明会を行う。(約70名参加)

平成17年1月22日岩手県立埋蔵文化財センター・(財)岩手県文化振興事業団主催の第26回埋蔵文化財講座・遺跡報告会において発表を行う。

2 調査経過

本宮熊堂A・B遺跡の調査経過についてそれぞれ下記に示しておく。

(1) 本宮熊堂A遺跡第24次調査

- 9月1日 調査開始。
- 10月20日 調査再開し、旧河道を確認。
- 10月27日 航空撮影を行う。
- 11月11日 委託者・岩手県教育委員会・当センターによる終了確認を行う。
- 11月15日 器材搬出し現場から撤収する。

(2) 本宮熊堂B遺跡第25次調査

- 6月1日 器材搬出し現場設営開始。
- 6月2日 試掘開始。
- 6月9日 重機稼働し租掘作業開始。調査区西側から平行して遺構検出を行う。
- 6月25～30日 文化財愛護協会発掘技術研修を行い、RA117の精査を行う。
- 7月5日 追加調査区の道路分と調査区東側の宅地範囲の租掘作業開始。
- 7月28日 10年研修による発掘体験(1名)。
- 8月1日 第26回埋蔵文化財展の発掘体験の遺跡として採用される。
- 8月5日 10年研修による発掘体験(1名)。
- 7月14日 租掘作業終了。
- 8月3日 調査区西側のRA091及びRG138から精査を開始する。
- 9月30日 株式会社セビアスによりコンタ図作成のデモンストレーションを行う。
- 10月1日 委託者との現地協議を行い、10月30日に調査区半分の引き渡しと11月中の調査期間延長の承諾を得る。
- 10月26日 委託者・岩手県教育委員会・当センターによる部分終了確認を行う。
- 10月27日 航空撮影を行う。
- 10月30日 現地説明会を行う。近隣住民を中心に約70名の参加がある。
- 11月11日 委託者・岩手県教育委員会・当センターによる終了確認を行う。
- 11月16日 航空撮影を行う。
- 11月22日 RA130の精査が終了し、器材搬出し現場から撤収する。

3 室内整理の方法

(1) 作業手順

遺物洗浄は概ね野外調査中に済ませていたが、若干残っていたため遺物洗浄から開始する。次に注記及び接合を行い、それと平行して遺物選別、登録作業をした。その後、拓本、実測、トレース、写真撮影を行った。各作業に平行して原稿執筆をしている。

(2) 遺構の整理

遺構図の整理は、業務委託によるデジタル調整図化で行っている。原図を取り込み、調整図において合成を行い、そのままレイアウトしてデジタル版下にした。このため今まで行っていたような第2原因作成及びそのトレース、台紙による版組作業を行っていない。また、遺物図と遺構・遺物写真も同様にデジタル編集作業を採用したため、版組作業は省略している。

竪穴住居の床面積の計測は、プランメーターを使用し三回計測を行い平均値を使用している。

(3) 遺物掲載基準・縮尺

遺物は、接合作業と平行して登録作業を行っており、以下の点を基準としている。

土器は、推定復元可能なものに限って実測を行った。口縁部は器形を、底部は立ち上がりを確認できるものに限定した。体部は反転可能なもの、須恵器は整形等が分かるものを中心としている。また、出土量が少ない竪穴住居に関してはこの限りではなく、残存率が低いものでも実測している。

遺物の図化については、細谷地遺跡(岩文埋2004)で行われた掲載方法を採用している。本報告書においても図の煩雑さを解消するため横ナデは表現していない。

縄文土器は、出土点数が少ないことから、文様帯を確認できるものは積極的に掲載した。

石器は、縄文時代の遺構外と奈良～平安時代の竪穴住居跡から点数は少ないながらも出土している。剥片石器は完形品のみを優先して掲載を行った。礫及び礫石器は、カマドの構築材及び住居内に廃棄されたもの、床面から出土したものを全て持ち帰り重量計測を行った。全ての礫を観察し使用痕跡が認められたものは登録を行い、二次選別を行い掲載資料としている。図化が不可能なものは観察表のみの報告としている。

土製品・石製品は、全点登録を行い掲載している。

鉄製品は、竪穴住居跡と土坑から出土したものに限定し選定を行い、形態が分かる小破片以外はすべて登録して掲載している。

木製品は、一部に加工痕が認められるものを実測している。

自然遺物は、炭化材や種実などがあり、それぞれ同定作業を行っている。

遺物の縮尺は1/3を基本とし、大きな礫石器を1/4、木製品は任意に縮尺を変えている。遺物図版にはそれぞれ縮尺を付している。

4 凡 例

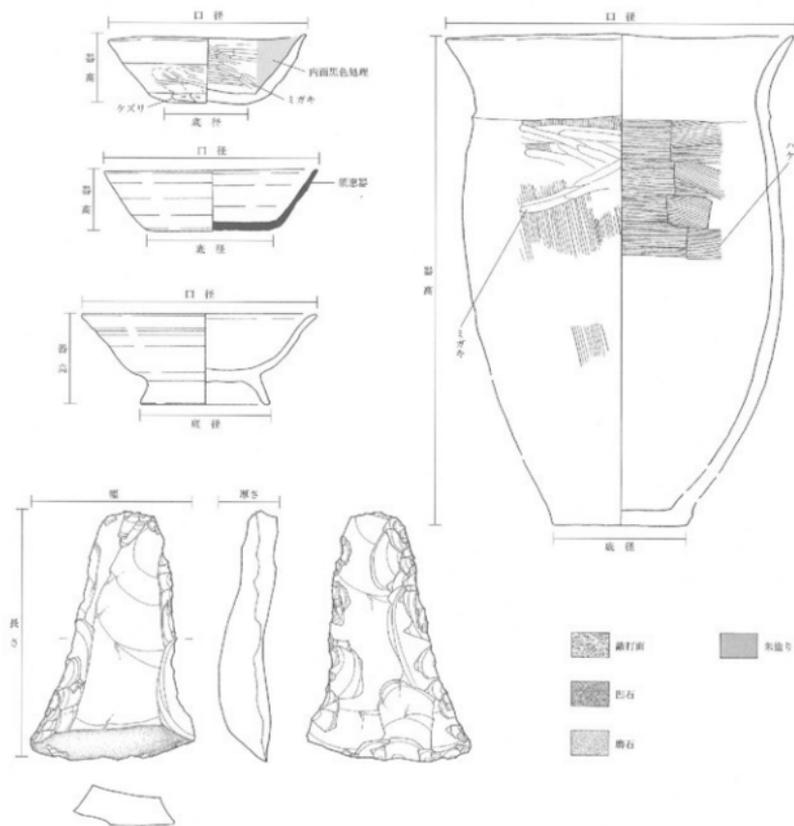
(1) 遺 構 名 称

遺構名称については盛岡市教育委員会で使用している略号に準じて付している。なお現場段階では略号を使用しておらず、整理作業の段階にて略号に振り替え、遺跡全体で通し番号としている。

遺跡略号は以下の通りである。

RA … 竪穴住居跡	RB … 掘立柱建物跡	RD … 土坑	RE … 竪穴状遺構
RF … 焼土遺構	RG … 溝跡	P … 柱穴状土坑	

その他の凡例については第6図を使用している。



第6图 凡例

IV 基本層序

1 本宮熊堂A遺跡

基本層序は、厚い盛土を除去すると遺構検出面であったことからここでは省略する。遺構検出面は暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2)。粘性としまり共に強い。

2 本宮熊堂B遺跡

基本層序は以下の通りである。調査区中央から西側においては遺構検出面より上層は表土であったため記載はしていない。なおⅠ層からⅥ層までは5 M25 h グリッドの南壁、ⅥからⅩⅤ層は5 L12 o グリッドの攪乱を利用して層序を把握している。本段丘の基盤は水性堆積層により形成されていることがⅦ層以下で確認できる。

Ⅰ層 黒褐色土 (10YR3/1)。粘性としまり共に強い。表土。

Ⅱ層 黒色土 (10YR2/1)。粘性やや強く、しまり強い。直径1～5 cmのブロック (10YR3/3) が混入。

Ⅲ層 黒色土 (10YR2/1)。粘性としまり共にやや強い。上層に比べやや明るみが増す。上層で認められたブロックが見られなくなる。調査区東側において部分的ではあるが土和田a火山灰がブロック状に入る。

Ⅳ層 黒褐色土 (10YR3/2)。粘性並、しまりやや強い。下層に礫が混入している箇所もある。5 N グリッドより東側では基本的に残存しており遺構検出面となる。

Ⅴ層 暗褐色土 (10YR3/4)。粘性なし、しまりやや強い。砂質シルトと礫層が確認できる層である。5 M グリッドでは遺構検出面となる。

Ⅵ層 におい黄褐色土 (10YR4/3)～褐色土 (7.5YR4/4)。粘性なし、しまり強い。5 K・L グリッドでは遺構検出面となる。

Ⅶ層 褐色土 (10YR4/4)。粘性弱く、しまり強い。

Ⅷ層 褐色土 (7.5YR4/4)。粘性やや弱く、しまり強い。

Ⅸ層 褐色土 (7.5YR4/4)。しまりやや強い。上層に類似しているが粘性はなくなる。

Ⅹ層 褐色土 (7.5YR4/4)。粘性並、しまり強い。

ⅩⅠ層 褐色土 (7.5YR4/4)。粘性としまり共にやや強い。

ⅩⅡ層 褐色土 (10YR4/6)。粘性としまり共にやや強い。

ⅩⅢ層 におい黄褐色土 (10YR4/3)。粘性としまり共に強い。

ⅩⅣ層 におい黄褐色土 (10YR5/3)。粘性としまり共に強い。

ⅩⅤ層 褐色土 (7.5YR5/6)。粘性なし、しまり並。

ⅩⅥ層 褐色土 (7.5YR5/6)。粘性やや弱く、しまり強い。

V 分類基準

1 土器分類

出土した土器は、土師器と須恵器が中心で、それらの器種は坏・高台付坏・鉢・蓋・甕・台付甕・甌などがある。ここでは器種ごとに細分を行い報告する。分類基準は以下の通りであり、詳細な報告は339頁に記載している。

(1) 土師器

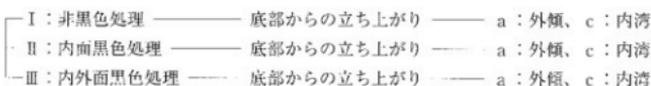
[坏]

非ロクロとロクロで大別している。

・非ロクロ



・ロクロ



I c類は4細分している。

- i : 体部が内湾しながら口縁部まで立ち上がる。
- ii : 体部が内湾しながら口縁部まで立ち上がり、口縁部で外反する。
- iii : 底部側縁で一度屈曲し、そのあと内湾しながら立ち上がる。
- iv : 底部が厚くやや柱状を呈している。

II c類は4細分している。

- i : 体部が内湾しながら口縁部まで立ち上がる。
- ii : 体部が内湾しながら口縁部まで立ち上がり、口縁部で外反する。
- iii : 底部側縁で一度屈曲し、そのあと内湾しながら立ち上がる。
- iv : 底部で一度屈曲するが体部は碗状に立ち上がる。

[蓋]

出土点数が1点であったため細分していない。

[高台付坏・鉢]

- | | | | | | | |
|------------|----|--------|---------|------------|----|--------|
| I : 内面黒色処理 | ┌ | 1 : 段有 | —— | 底部からの立ち上がり | —— | c : 内湾 |
| | | 2 : 段無 | - - - - | 底部からの立ち上がり | —— | a : 外傾 |
| II : 非黒色処理 | —— | 2 : 段無 | - - - - | 底部からの立ち上がり | —— | a : 外傾 |

[高坏]

出土点数が2点であったため細分していない。

[耳皿]

出土点数が1点であったため細分していない。

[鉢]

点数は少ないものの非ロクロとロクロに分けており、点数が多い非ロクロのみ細分を行っている。非ロクロに該当するもので坏の形状をしていないものはすべて含めており6細分している。

- i : 体部には段が存在せず、口縁部まで直立して立ち上がる。
- ii : 体部には段が存在せず、体部上半部に最大幅を持ち口唇部は内湾する。底部は平底である。稜から口縁部までは直立して立ち上がる。
- iii : 体部中央で段を有する。体部上半部に最大幅を持ち口唇部は内湾する。他に比べ明瞭な段が形成されている。
- iv : 体部には段が存在せず、甕の底部に類似した形状を呈するもの。
- v : 体部に段が存在しないものと有するものの2種類がある。体部上半部に最大幅を持ち口唇部は内傾する。底部は平底である。口縁部と器高の比で口縁の方が長い。内外面が入念に磨かれている。
- vi : 体部には段が存在せず、体部上半部に最大幅を持ち口唇部は内湾する。底部は丸底である。口縁部と器高の比で器形はvと同じだが、やや法量が小さいことから区分している。

[甕]

非ロクロとロクロで大別している。

・非ロクロ

- | | | |
|-----------|----|-----------|
| A : 長胴 | ┌ | 1 : 頸部に段有 |
| | | 2 : 頸部に段無 |
| B : 球胴 | —— | 1 : 頸部に段有 |
| C : 須恵器模倣 | —— | 1 : 頸部に段有 |

A 1は6細分できる。

- i : 口縁部が外傾して立ち上がる。
- ii : 口縁部が外反して立ち上がる。
- iii : 口縁部がほぼ直立して立ち上がる。
- iv : 外反するが口縁部に厚みがあり稜を形成する。
- v : 口縁部が受け口状を早するもの。
- vi : 口縁部は外反して立ち上がるが口唇部のみ直立する。

1 土器分類

B1は細分できる。

- i：口縁部が外傾して立ち上がる。
- ii：口縁部が直立気味に立ち上がる。

A2・C1は出土点数が少ないため細分していない。

・ロクロ

口縁部形状は複数確認できたものの、出土点数が少ないため細分していない。

[台付甕]

出土点数が1点であったため細分していない。

[甕]

個体を復元できたものではなく、底部のみの確認である。その底部に形成された孔の形状により細分している。

- I類：多孔式のもの。
- II類：単孔式のもの。

(2) 須 恵 器

[坏]

底部の切り離しはすべて回転ヘラ切りであり、それ以外は認められない。底部からの立ち上がりで細分している。

底部からの立ち上がり ——— a：外傾、b：外反。

aのみ3細分している。

- i：器高が低く、口径と底径が大きい。
- ii：iと類似した器形であるが、器高はiより高く、底径がiより小さい。
- iii：i・iiに比べ法量が大きい。

[蓋]

出土点数が1点であったため細分していない。

[高台付坏]

出土点数が1点であったため細分していない。

[甕・台付甕]

出土点数が少ないため細分していない。

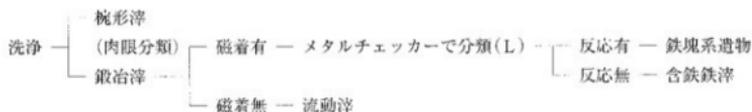
2 石器分類

礫石器は以下のように分類している。

- I類：先端部に敲打痕を有する。
- II類：表裏面に磨面を有する。
- III類：表裏面に凹面を有する。
- IV類：I類+III類の痕跡を有する。
- V類：II類+III類の痕跡を有する。
- VI類：台石。III類とは異なり規模が大きいものである。
- VII類：砥石。II類と異なり大きな面が形成されているもので石肌の状態に類似している。

3 鉄滓分類

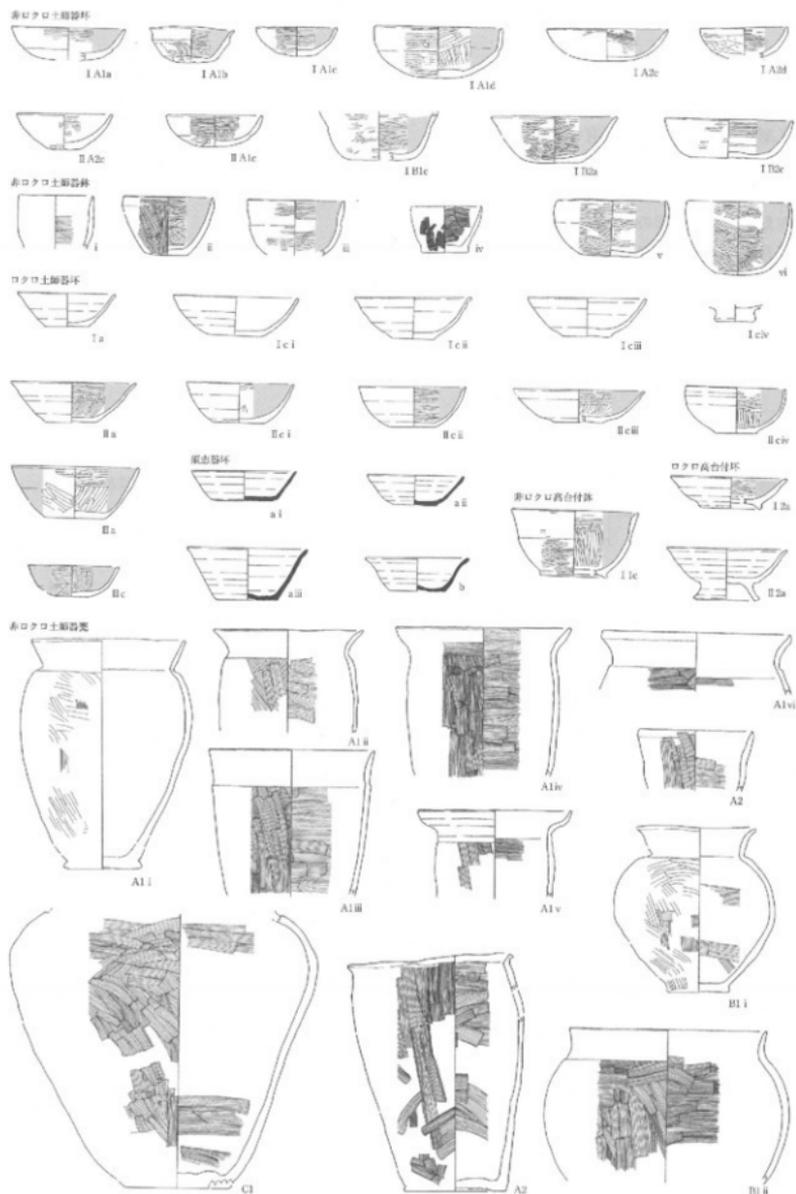
鉄滓は以下のように分類している。



メタルチェックは、メタルチェッカー埋蔵文化財用特殊金属探知器（鉄塊系遺物対応調整）／形式：MR50B／基準値設定者穴沢義功氏使用

磁着には、タジマツール製の強力磁石 品名：ピックアップ／品番PUP-M使用

3 上器分類



第7図 土器分類図

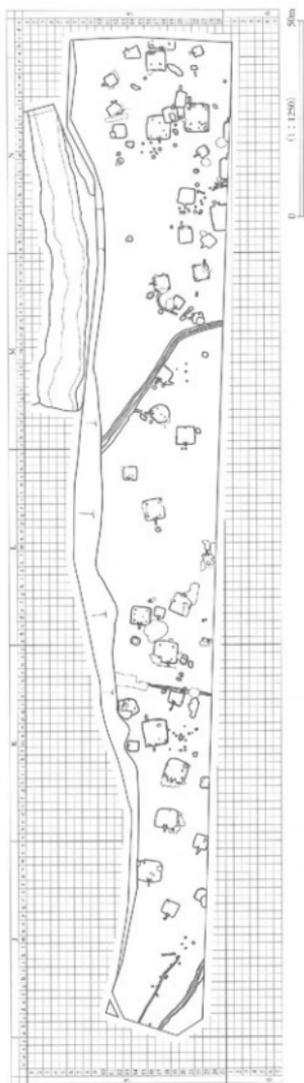
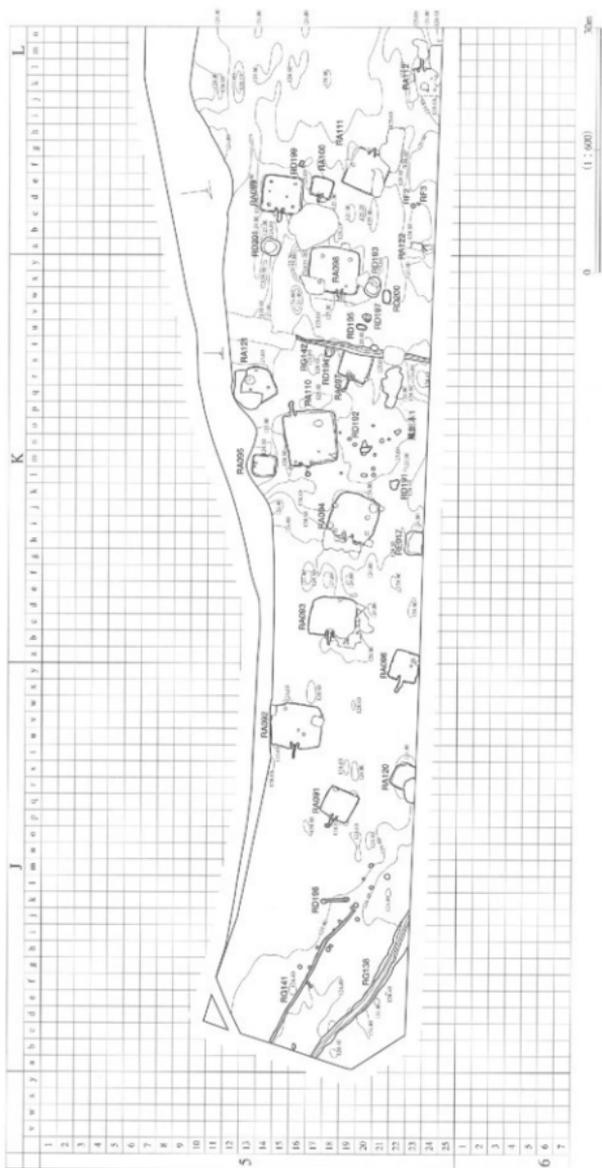


表5 遺跡配置図



第9図 遺構配置図 (1)



第10圖 遺構配置圖 (2)

VI 本宮熊堂A遺跡第24次調査

1 概 略

本宮熊堂A遺跡は、縄文時代晩期後葉と古代との複合遺跡であり、過去の調査において、縄文時代晩期後葉では竪穴住居跡2棟、炉跡17基、土坑41基、また古代では溝跡53条が確認されている。

第24次調査区は南北約9m、東西約78mを測り、東西方向に長く、推定される本遺跡推定範囲の南端に位置する。調査区北側は本遺跡第26次調査区（平成16年度調査）と、また調査区南側は本宮熊堂B遺跡第25次調査区と接している。第24次調査区内の地形はやや浅い窪地状を呈し、北から南にむかって緩やかに低くなるが、本調査区南端で急激に立ち上がり、本宮熊堂B遺跡に至る。本宮熊堂B遺跡の古代遺構検出面との比高差は2～3mを計る。

今回の調査で、古代の溝跡1条と縄文時代から古代まで継続して存在していた旧河道1条を検出した。旧河道は埋土の層毎に出土遺物が、縄文時代のもものと古代のものに明瞭に分かれる。また土壌が水気を帯びていたため、有機物が良好な状態で残存していた。これらの有機物を層毎に検討することで、縄文時代と古代、両時代の生活環境復元がある程度可能となる。そのような点で貴重な資料になるものと考えられる。

2 本宮熊堂A遺跡の基本層序

本遺跡は昭和20年頃までは水田であったため、表土（盛土）下には水田耕作土が堆積していた。水田耕作土直下の層からは、本宮熊堂B遺跡のⅢ層に比定する黒褐色土層が確認され、少量であるが土師器を包含する。この層下位面から旧河道、溝跡が検出した。また遺構検出面からは、灰白色を呈する火山灰（自然科学分析の結果、十和田aテフラと思われる）がブロック状に散在する。

本遺跡第26次調査区では、この黒褐色土層の下で縄文時代晩期の包含層を確認した。褐色を呈し、粘土に近いシルト層であるが、第24次調査区では検出した旧河道の規模が大きく、明確に縄文時代晩期の包含層と考えられる層はみつかっていない。また旧河道の南岸（調査区の南端）は旧河道検出面上が砂礫層である。何らかの理由（旧河道の水流など）から削平により、シルト層が消滅したものと思われる。

3 検出された遺構・遺物

(1) 溝 跡

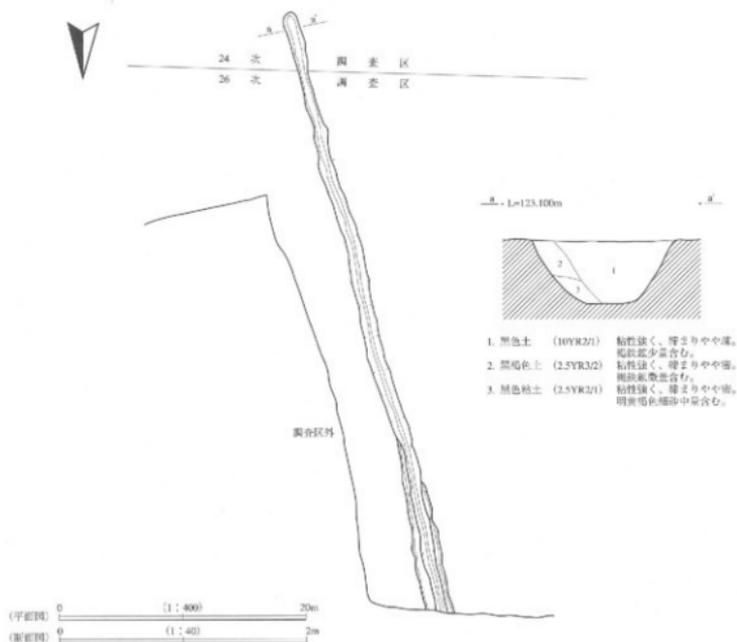
RG054溝跡

1条検出した。過去の調査で53条の溝跡が確認されており、それらに続くRG054とした。

〈位置〉調査区東側、5N6h～8hグリッドに位置する。

〈検出状況〉水田耕作土直下のⅢ層下面で、黒色の広がりとして、プランを確認した。

〈平面形・規模〉幅100～130cm、深さは約75cmを測る。調査区内での長さは約5mを測るのみだが、北側で調査区外へと伸び、第26次調査区へと続いている。第26次分を合わせると、長さ約51mを測る。また、南端は調査区南壁から約1.5m付近で途切れており、隣接する本宮熊堂B遺跡には達していない。断面形は逆台形状を呈する。



第11図 RG054

〈埋土〉3層に分層できる。黒色土を主体とし、粘性が強く、褐鉄鉱を含んでいる。

〈遺物〉なし

〈時期〉第26次調査区分の埋土中から、小片であるが、ロクロ系土師器が出土している。これを根拠とすれば、概ね古代（10世紀代）に比定されよう。

(2) 旧河道

〈位置〉調査区南壁から1.5～5m北側に位置する。北岸は第26次調査区に及んでおり、旧河道は第24次と第26次の調査区境をまたぐように位置する。

〈検出状況〉水田耕作土直下で黒色粘土の大きな広がりとして確認した。第24・26次調査区共に基本層序からは、黒褐色粘土層は確認されていないので、遺構の可能性を考え、黒褐色粘土の範囲にトレンチを数本入れたところ、トレンチ断面の土層から、粗砂によるラミナ層を確認した。また検出面から約150cm掘り下げた段階で、底部から水が湧きはじめ、これらの事象から旧河道と判断した。

〈平面形・規模〉東西方向に伸びており、調査区中央部付近で北東へと緩くカーブする。両端は調査区外に及んでいる。従って長さは不明である。幅は約10m、深さは110～160cmを測る。

〈埋上〉遺構検出面から、川底に相当する深さまでを主体土を基に5層に大別し（1～5層）、またそれぞれ混入物の差やラミナ層などを基準として、さらに細分（a層～）した。

まず1層は黒褐色粘土～灰色シルトを主体とする層で、約30cm堆積している。1a～1n層の14層に細分できる。やや粗い黄褐色砂が層状に堆積するラミナ層を5箇所確認した。南岸側では小礫が多量に混入する層（1n層）も見受けられた。ラミナ層や砂礫層は旧河道の西側で特によく確認され、東側では、あまり明確に残っていない。また層上位からは、灰白色火山灰が混入する。火山灰はブロックで少量、混入するのみで、二次堆積の可能性が高い。火山灰を自然化学分析した結果、十和田aテフラである可能性が高いことが判明している（第Ⅷ章参照）。2層は黄灰色粘土を主体とし、約10cm堆積する。混入物も少ない。2a～2c層の5層に細分できる。1・2層中からは土器などの遺物は検出していない。3層は黒褐色シルトを主体とし、約50cm堆積する。3a～3g層の7層に細分できる。3c層はほぼ、層中央部に形成されたラミナ層で、最も広い範囲に及んでいる。3層中から土師器片が出土し、また木製品を含んだ植物遺体が多数出土している。古代には3層下位が河底であったと推定される。4層は暗灰黄色～暗褐色シルトを主体とし、約30cm堆積する。層の機相に変化が乏しく、ラミナ層は4層中からは見受けられない。4a～4c層の3層に細分できるが、主体は4a層である。水気を強く帯び、腐葉土が多量に混入する。動植物遺体が非常に良好な状態で残存していた。4層中から縄文時代晩期後葉の遺物が出土している。

5層は旧河道西側のみで確認した。灰～灰オリーブ色砂を主体とする層で、縄文時代晩期の土器片が少量出土している。縄文時代晩期にはこの層下位が河底であった可能性が考えられる。

〈遺物〉3層中から古代の遺物が、また4層中からは縄文時代晩期の遺物が出土している。この点、明確に確認できた。また、動植物遺体では、主に3層中から木製品や樹木類が、4層中からは堅果類や昆虫類などが出土している。

3層からは土師器杯、土師器甕、須恵器杯が出土している。35点（943g）を確認し、そのうち9点を図化した。

1は球形の土師器甕で、ほぼ完形の状態で出土した。外面調整は縦方向のハケ、内面調整は横方向のハケである。ハケの条線は、内面の方がやや不明瞭である。

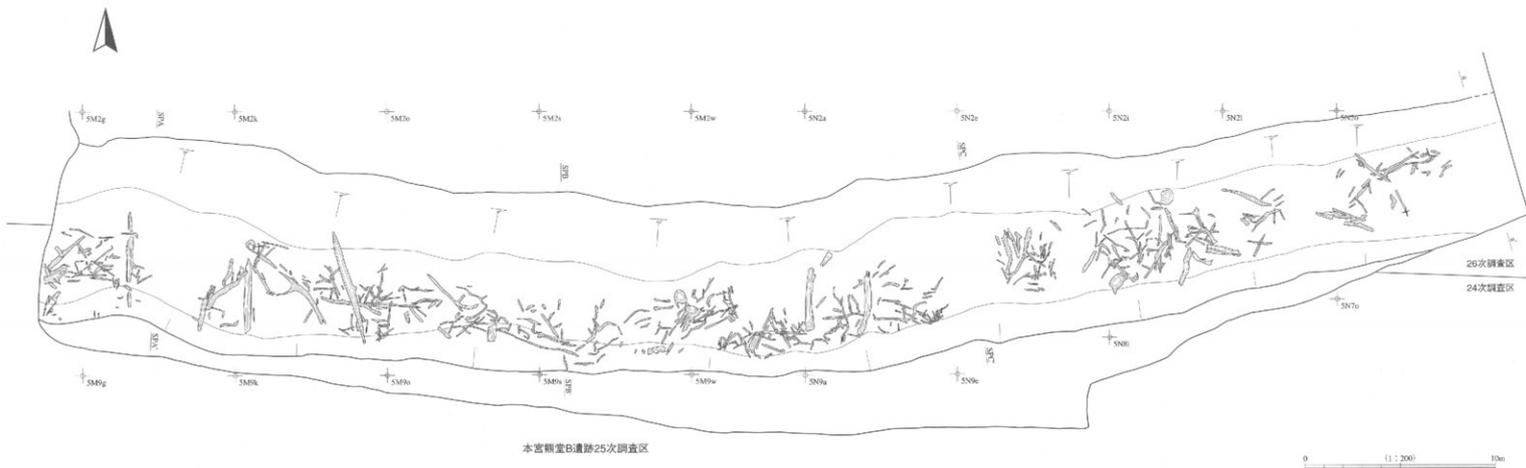
2～6も土師器甕であるが、全体の形態は不明。2・3は口縁部がやや内湾する器形で、内外面ともに回転ナデによる調整のみである。2は外面に朱が塗られており、また糊痕を4箇所確認した。4は底部片であり、外面調整は縦方向のハケ、内面調整は不明瞭であるが、横方向のハケが確認できた。5は口縁部片で、概ね2・3と同様の口縁部形態であると思われる。内外面ともに回転ナデのみの調整で、朱が塗られている。外面に糊痕がみられる。6は口縁部が大きく外反し、段を有する。外面調整は縦方向のハケ、内面調整は横方向のハケである。

7・8は内面黒色処理された土師器杯である。どちらも内面黒色の残りが良く、銀色の光沢がみられる。7は外面は横方向のケズリの後、口縁部のみ横方向のミガキを施す。内面は横方向のミガキである。8は口縁部片で、形状は不明。外面調整は横方向のケズリ、内面調整は横方向のミガキである。

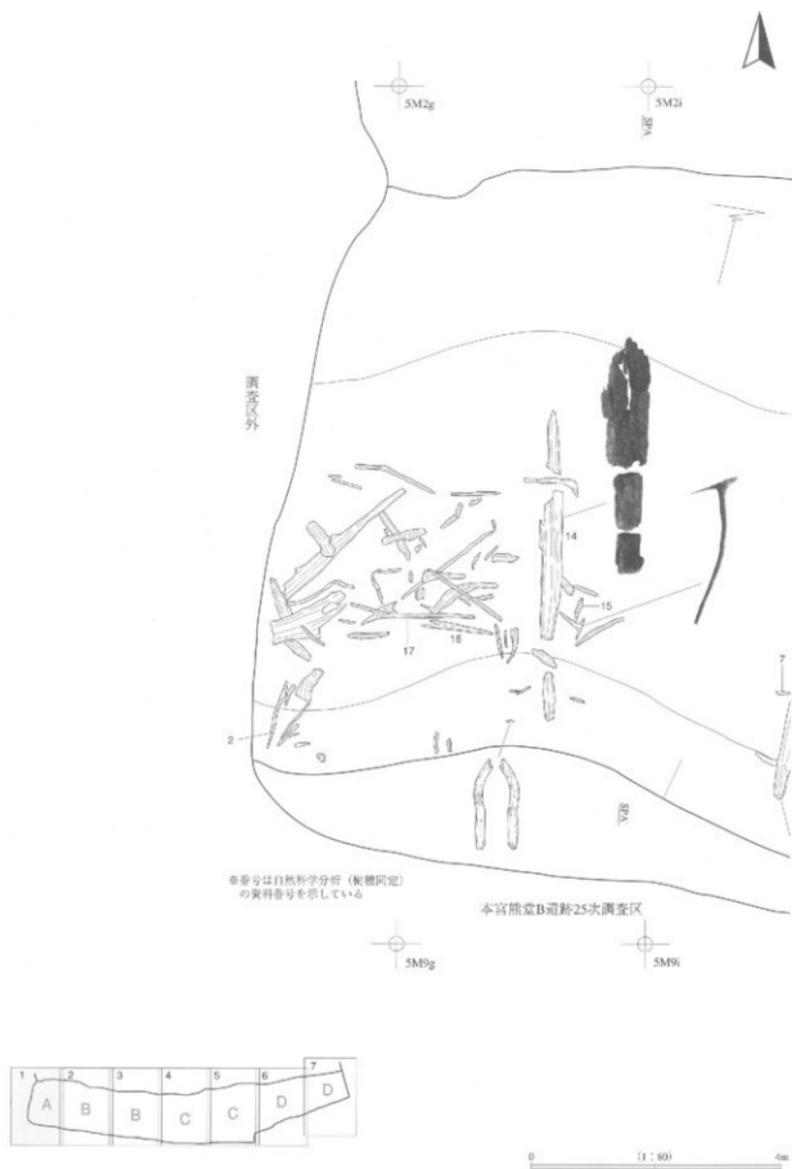
9は須恵器杯である。口縁部片で、形態は不明である。外内面ともに調整は回転ナデのみである。

3層中から出土した遺物は破片資料が多く時期決定の根拠となるものが少ない。ただし、2・3・5の土師器甕は形状が木宮熊堂B遺跡から出土している8世紀前半の甕に類似しており、概ねこの時期におさまるものと考えられる。

4層からは縄文土器、石器が出土している。縄文土器は37点（629g）確認され、そのうち15点を図化した。概ね晩期後葉（大洞C2～A式）に比定されるものである。10は深鉢の口縁部片で、波状口



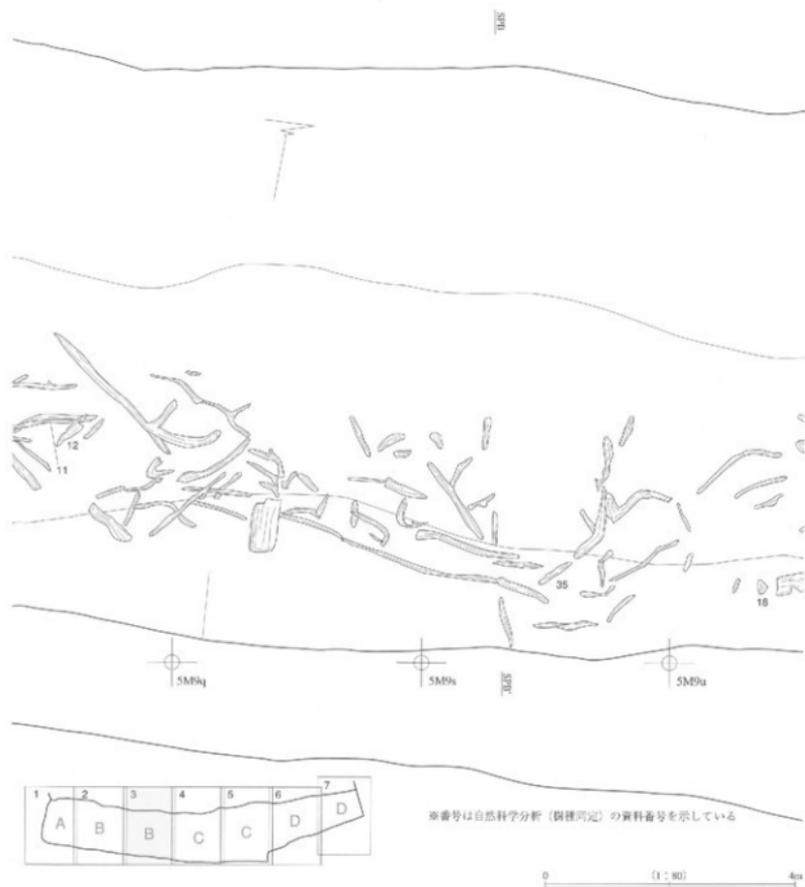
第12図 旧河道



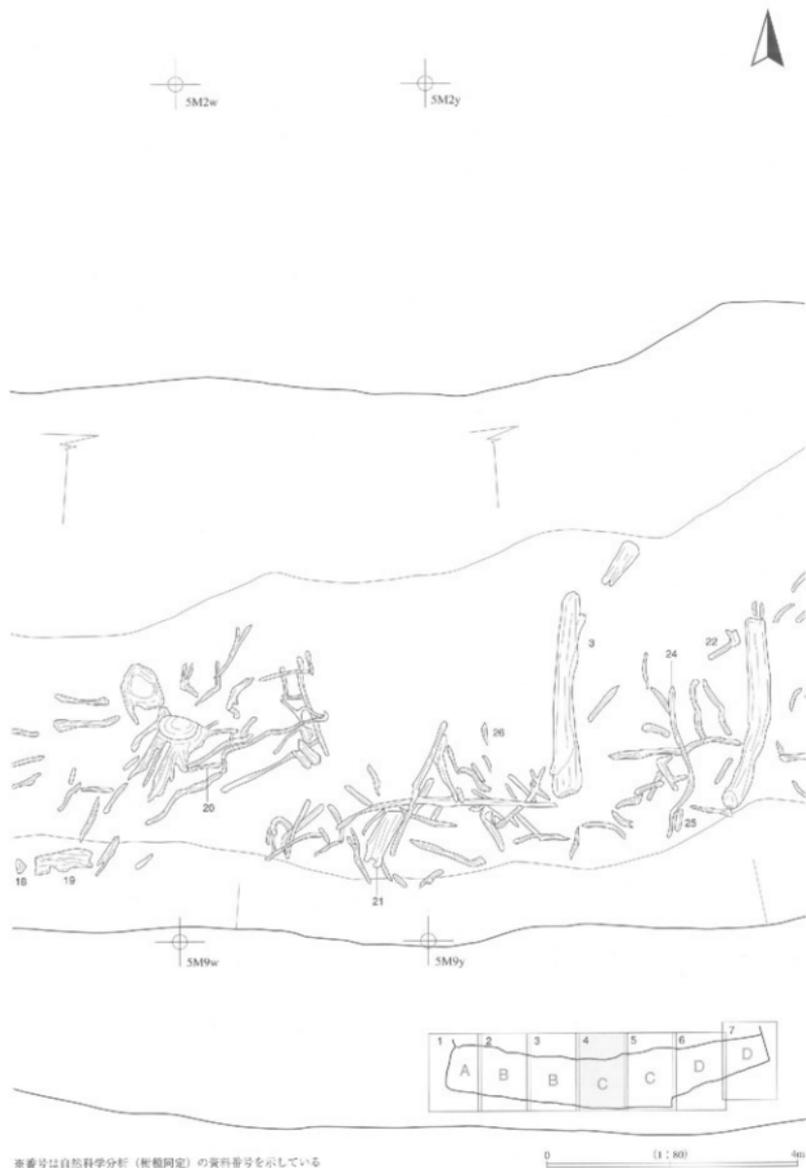
第14図 旧河道遺物出土状況図(1)



第15図 旧河道遺物出土状況図(2)

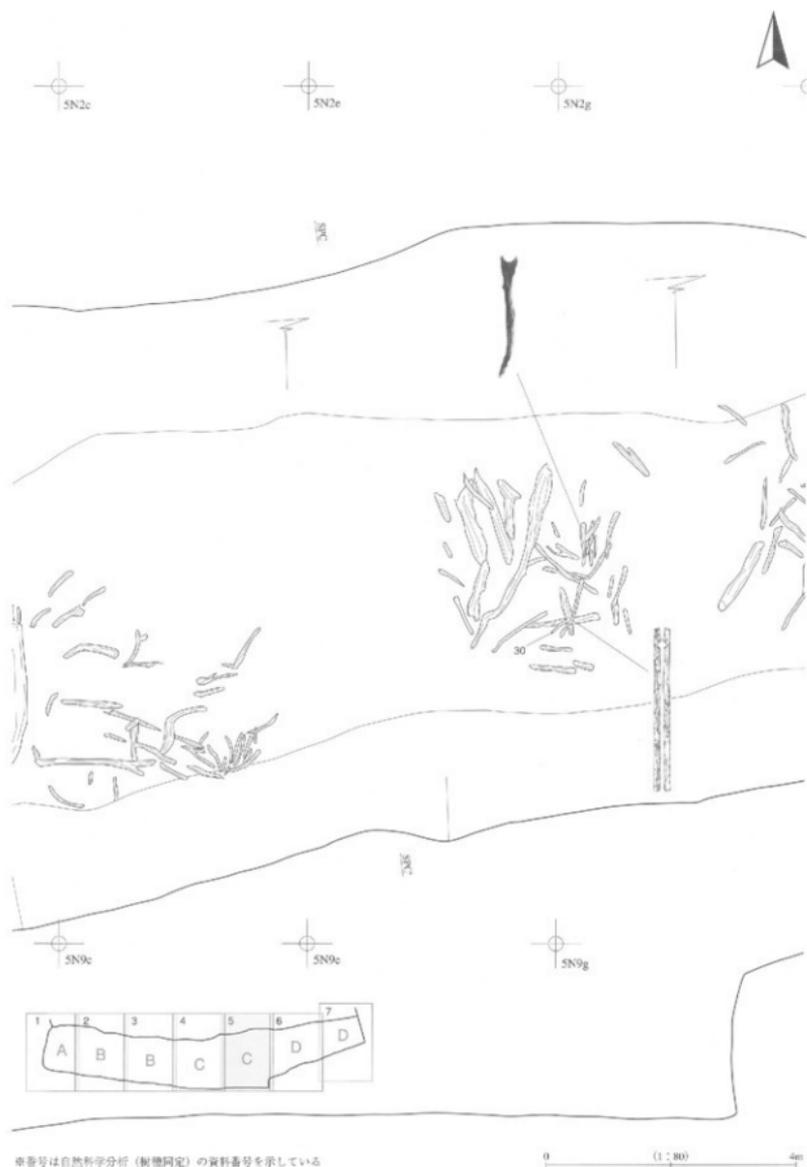


第16図 旧河道遺物出土状況図(3)



※番号は自然科学分析（樹種同定）の資料番号を示している

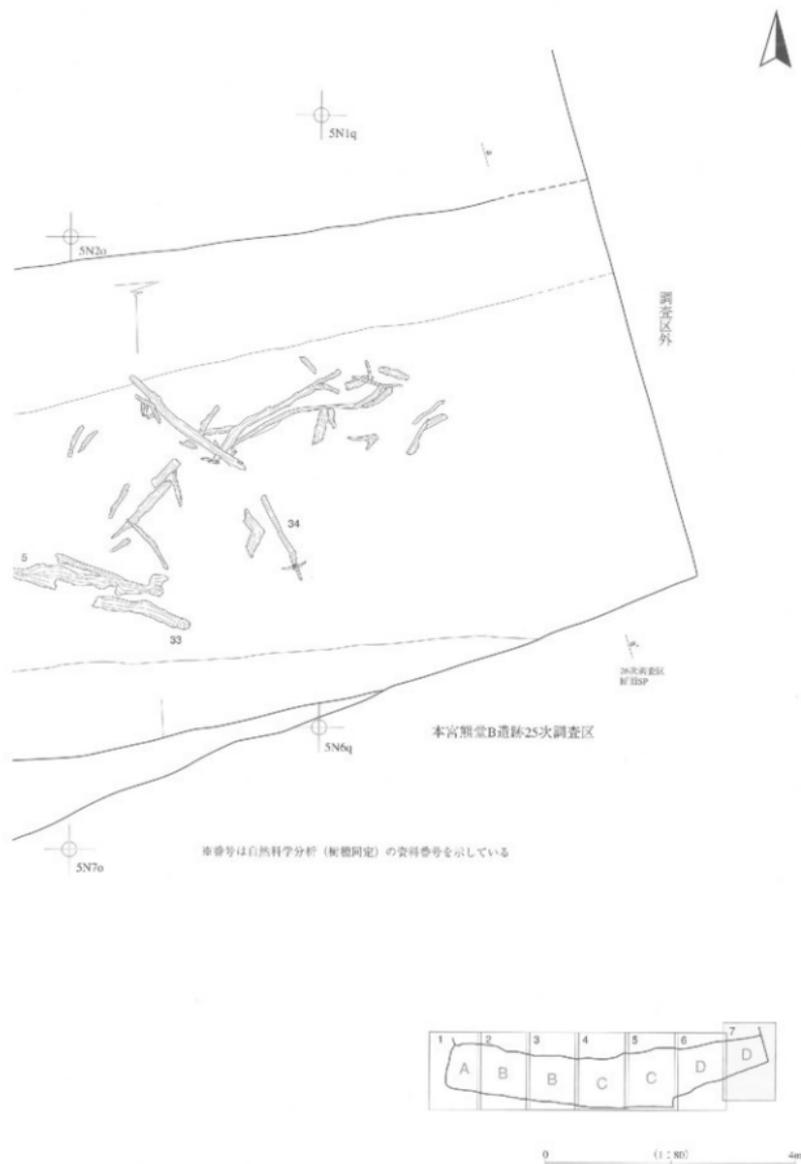
第17図 旧河道遺物出土状況図(4)



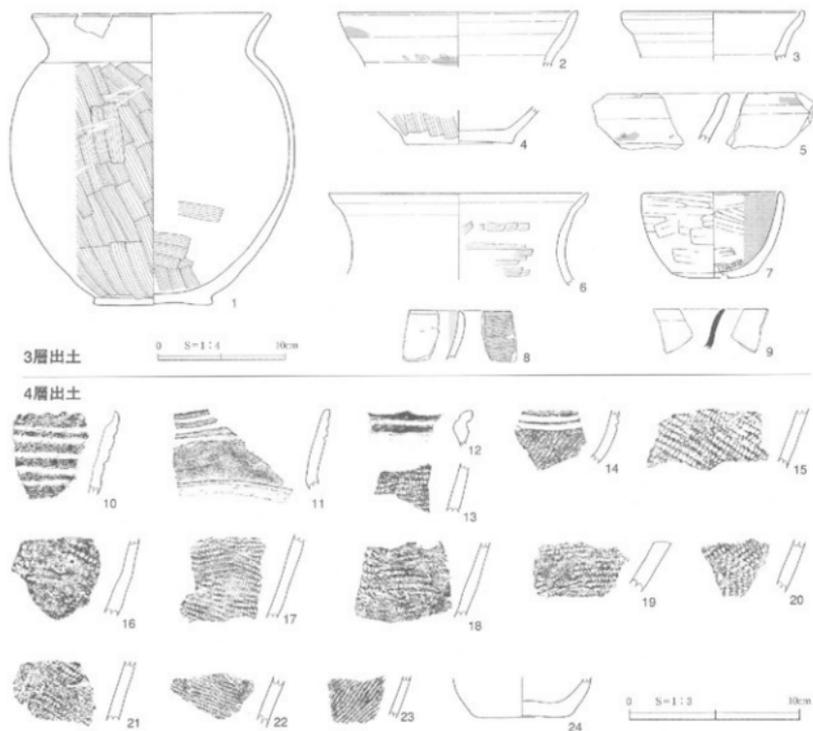
第18図 旧河道遺物出土状況図 (5)



第19図 旧河道遺物出土状況図(6)



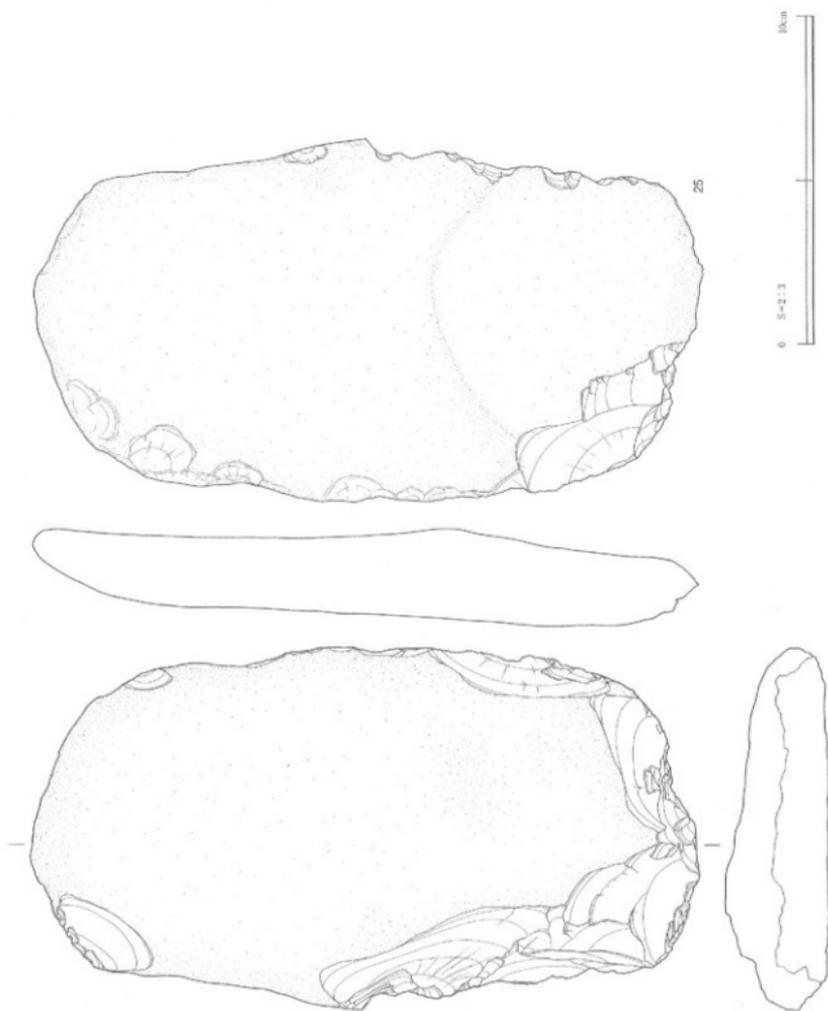
第20図 旧河道遺物出土状況図(7)



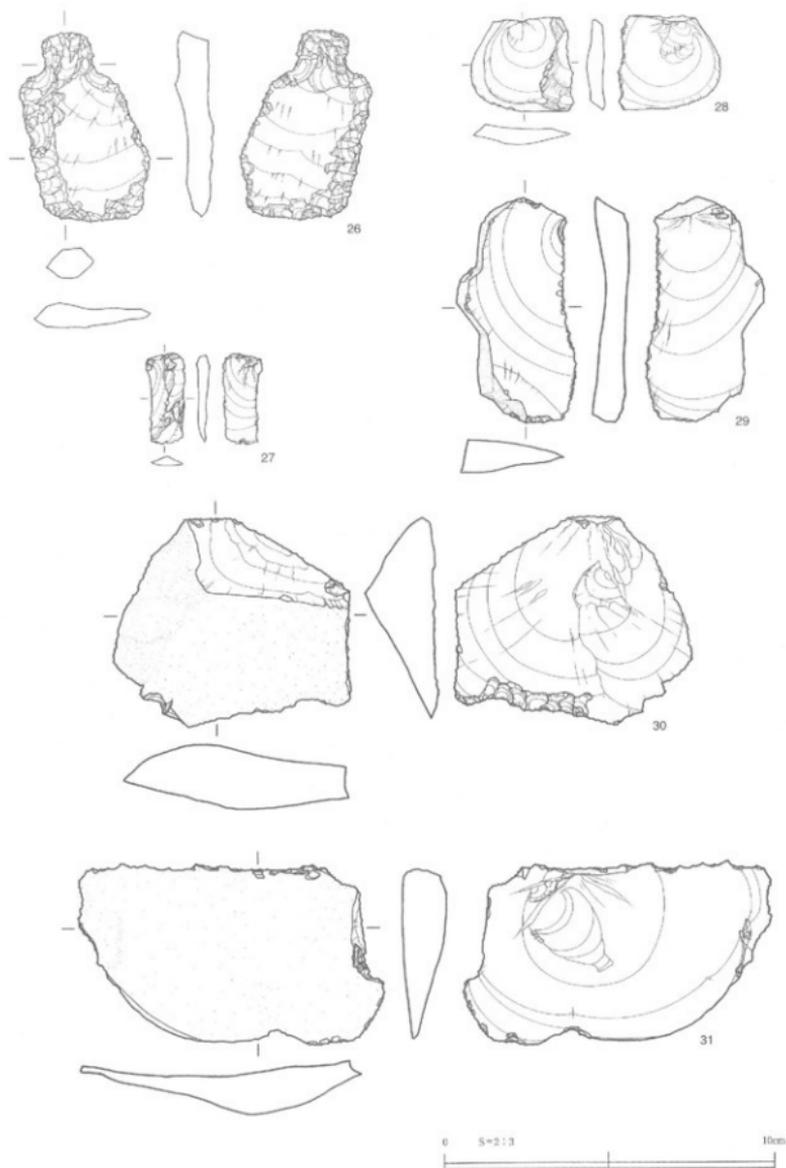
第21図 旧河道出土遺物(1)

縁を早し、横方向の沈線を施す。所謂「九年橋型深鉢」である。12は鉢の口縁部片で波状口縁を早し、横方向の沈線を施す。14は鉢の胴部片で、単節L R縄文を施文後、横方向に沈線を施す。13・15~23は縄文が施文された胴部片であるが、いずれも小片で、器種は不明である。24は深鉢の底部で、無文である。いずれも大洞C2~A式に相当すると思われる。ただし、23は施文される縄文原体が該期のものに比べ細く、弥生土器の可能性がある。

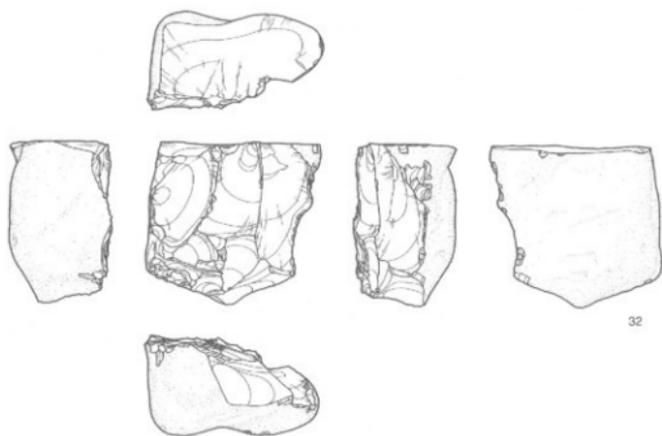
旧河道から出土する石器は第26次調査区側からのものが多く、第24次調査区側から出土した石器は図化した13点が全てである。25は頁岩製の打製石斧で、完形である。片刃片面加工により刃部が作出される。重量は816.09gである。26は頁岩製の石匙で、形状は縦長、刃部は両面加工により作出される。重量は18.06gである。27・28・30・31は剥片である。いずれも頁岩製である。27は縦長の剥片で、打面の剥離は2回以上、また正面、背面いずれも剥離面をなす。重量2.53gである。28は横長の剥片で、打面の剥離は1回で、正面の一部に自然面が残る。重量13.30gである。30は横長の剥片で、打面の剥離は1回で、正面に自然面が残る。側縁の一部に、二次加工が施される。重量81.80gである。31は横長の剥片で、自然面を打面とし、正面も自然面のみである。重量56.83gである。29は頁岩製のス



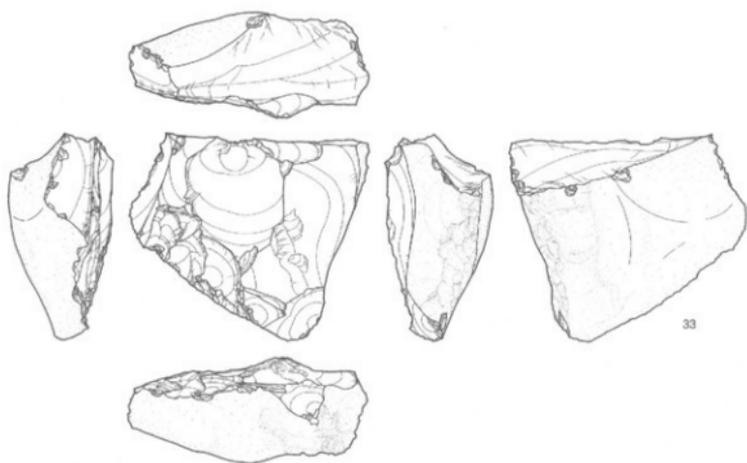
第22図 旧河道出土遺物(2)



第23図 旧河道出土遺物 (3)



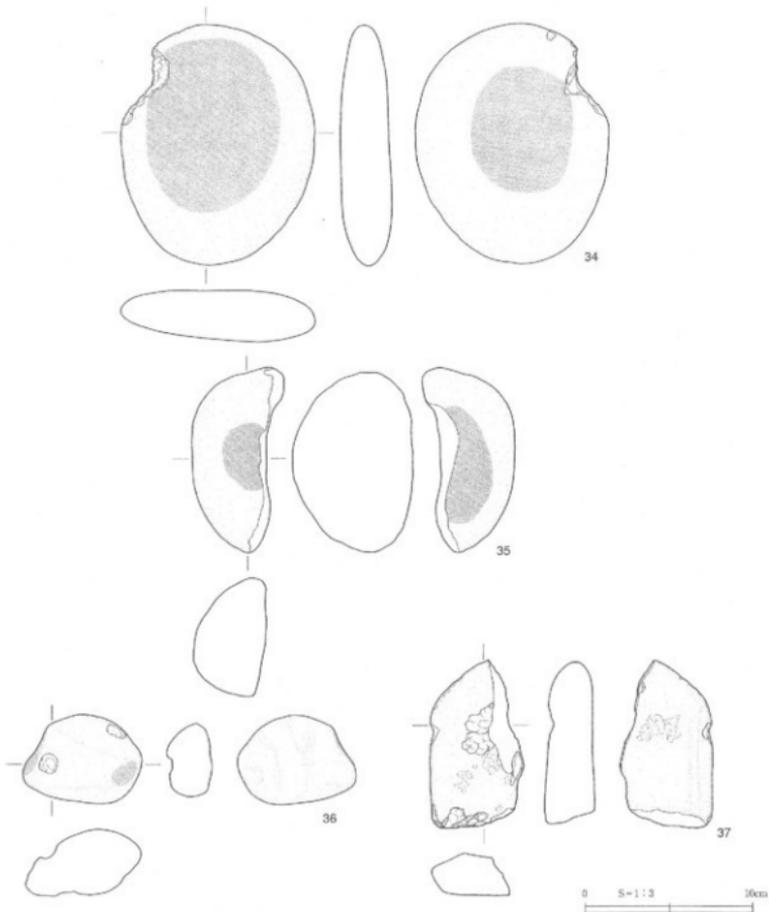
32



33



第24図 旧河道出土遺物 (4)



第25図 旧河道出土遺物 (5)

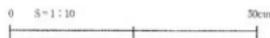
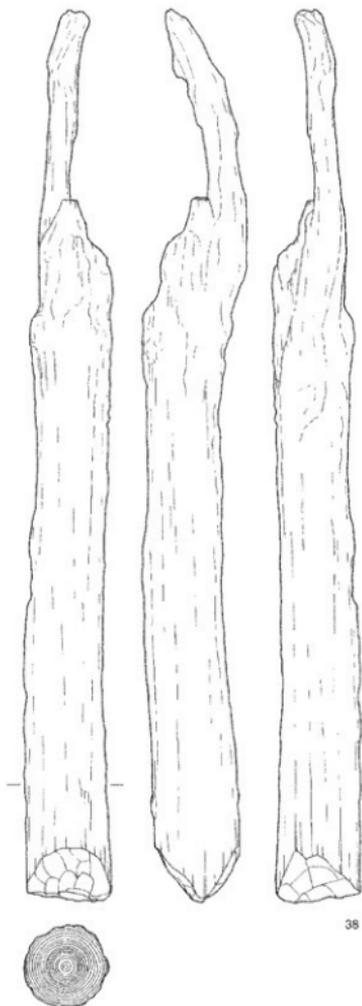
クレイバーである。素材は自然面の残る縦長剥片である。刃部は片側の側縁に両面加工で作出される。重量25.89gである。32・33は頁岩製の石核である。いずれも扁平な礫を使用し、幅の広い部分を作業面としている。何度か打面を転位しているのが確認できた。重量は32が88.91g、33は121.97gである。34～37は敲磨器類である。34・35は安山岩製で、両面に磨痕がみられる。重量は34が593.35g、35は387.05gである。36はデイサイト製で、磨痕と凹痕を確認した。重量は177.73gである。37は凝灰岩製で、敲打痕を確認した。重量216.73gである。4層中にみられる石器の出土状況は縄文土器と同様であり、したがってこれらの石器も縄文土器とほぼ同時期のものと推定される。

樹木類が3層中から出土している。一部、4層上位から出土したのものもあるが、3層中の樹木類が混

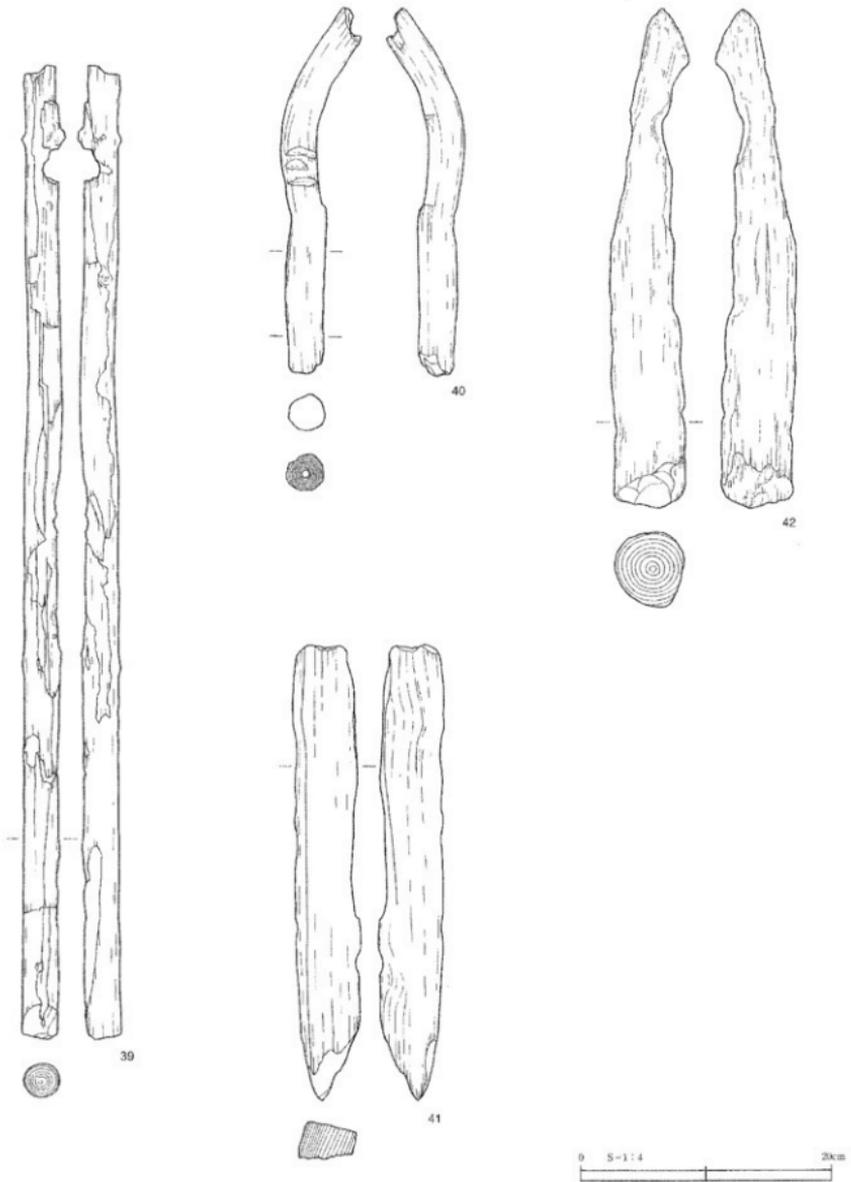
入したものと考えられる。出土した樹木類は507本に及んでいる。ほとんどが自然の状態のままであり、加工痕は見受けられない。明確に加工痕が確認できた木製品は18点であった。樹木類の出土位置は旧河道全域で確認され（第14～20図）、やや南岸に富んでいる。同じ3層中から出土する土師器などと同時期のものと思われる。

38はコナラ節で、長さ184cm、直径17cmを測る。丸木取りで全体に樹皮が残る。加工は一方の木口のみで、2方向から均等に切り込みを行っている。加工方向はほぼ一定である。建物の柱材であるか、あるいは木材から柱材を切り離した際に残った廃材であろうか。39はほぼ直線的に長く、長さ79.7cmを測る。丸木取りで樹皮が残っていない。木口の片面のみを鋭利な刃物で切った痕跡が見受けられる。杭の可能性が考えられる。このような形状の木製品は39、1点のみであった。40は長さ30.1cmを測る。木口に加工痕はないが、体部の3箇所切り込みを確認した。41は依存状態が悪く、加工痕が明瞭でないが、断面が長方形を呈する。何らかの角材であった可能性が考えられる。42は長さ40.7cmを計り、全体に樹皮が残る。木口の片面に切り込んだ痕跡がみられた。43は木口に一方からの加工痕がみられる。44は木根であるが、幹に対して直角に截断されている。平坦面には、刃物によって削られた痕跡が2箇所見受けられた。45は依存状態が悪く、取り上げの際、散在してしまっただが、形状から板材の可能性が高い。46・47は片方の先端部が二股になっており、その凹部につぶれたような痕跡が見受けられる。どちらも何かを受けるために使用されていた可能性がある。48は片方の先端部に平坦部を有するもので農耕具の柄か。49は先端部に刃物によって加工された痕跡が見受けられる。50は依存状態が悪いが板材と考えられる。51は凹部に鋭利な刃物で切られた痕跡が見受けられる。農工具の一部であろうか。

4層中からは、堅果類、昆虫類が出土している。自然科学分析の結果、堅果類はオニグルミ、トチノキ、ミズナラ、シキミなど、昆虫類はアオカナブン、アカガネオゴミムシ、ハナムグリなどであることが判明した（第Ⅷ章参照）。〈時期〉3層、4層から出土した遺物を根拠に判断するならば、旧河道は縄文時代晩期以前から存在し、8世紀前半頃まで機能していたものと考えられる。



第26図 旧河道出土遺物 (6)



第27图 旧河道出土遺物 (7)

Ⅶ 本宮熊堂B遺跡第25次調査

1 概 略

今回検出された遺構は、堅穴住居跡43棟（RA50・51・54・91～130）、堅穴状遺構2棟（RE017・018）、土坑43基（RD191～217・219～234）、焼土遺構2基（RF02・03）、溝5条（RG118・138・141～143）、柱穴74個、風倒木痕2箇所である。

出土遺物は、土師器・須恵器の坏と甕、刀子や紡錘車、鋤先などの鉄製品、紡錘車と勾玉などの土製品、礫石器である。遺物は主に堅穴住居に伴うもので、遺構外からの出土は極めて少ない。遺構数は多くはないものの土坑などから縄文時代の土器と石器が出土している。また風倒木痕からは周辺の遺構と同時期の遺物が出土している。

2 検出された遺構・遺物

(1) 縄文時代の遺構・遺物

土坑

RD193土坑

[位置・検出層位] 5K20w・xグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。遺構の北壁は攪乱により削平されている。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は2.43×1.93m、深さは51cmである。

[堆積土] 黒褐色～黒色土主体で8層に細分した。自然堆積である。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。床面は西側から中央にかけては平坦であり、そこから東側は一段低く皿状になる。

[遺物] 土器77点、石器63点が底面を中心に出土している。1・3は深鉢。口縁部はどちらとも指頭状工具により波状を呈している。2は鉢。口縁部には大小異なる突起が認められるが単位は不明である。横位沈線間に長方形の凹みを伴うものである。4～6は体部に沈線が施されているが、口縁部の形状はそれぞれ異なる。4は波状縁、5は頭頂部に刻みのある突起を有する波状縁、6は口唇部に沈線が施されている平縁である。2は大洞A式に比定されるが、その他のものは所属時期は不明である。7は両側縁に刃部が形成されたスクレイパーである。8～11は二次加工のある割片である。12は上下端に剥離が施され刃部が形成されている礫器である。13は土偶。掲載した石器石材はすべて真岩である。掲載できなかったものの中には鉄石英や凝灰岩などの石材がある。また埋土中からは鉄石英の原石が26点確認されている。

[所属時期] 出土土器から大洞A式期に属する。

[備考] 今回出土した土器は下位の段丘面に存在する本宮熊堂A遺跡と同時期のものである。

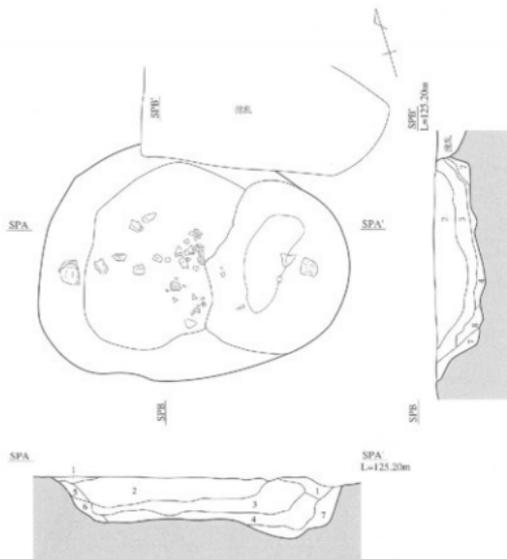
RD196土坑

[位置・検出層位] 5J17・18・19kグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。

[平面形・規模] 平面形は長楕円形である。規模は3.38×0.3m、深さは32cmである。

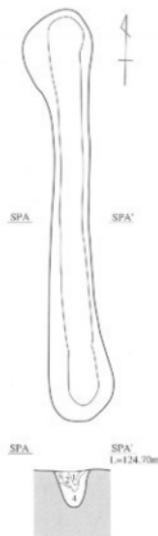
[軸線方向] N-3°-W。長軸を基準としている。

RD193



- RD193
- | | | |
|---------|-----------|--------------------------|
| 1. 黒褐色土 | (10YR2/2) | 砂状、 |
| 2. 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 3. 黒色土 | (10YR1/1) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 4. 黒色土 | (10YR1/3) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 5. 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 6. 黒褐色土 | (10YR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。湖山崩落土を少量含む。 |
| 7. 黒褐色土 | (10YR2/2) | 粘性弱く、しまりやや強い。湖山崩落土を多く含む。 |
| 8. 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |

RD196



- RD196
- | | | |
|---------|-----------|--------------------------|
| 1. 黒褐色土 | (10YR2/1) | 粘性強く、しまり強い。 |
| 2. 黒褐色土 | (10YR3/2) | 粘性、しまり共に強い。湖山崩落土を少量含む。 |
| 3. 灰黄色土 | (10YR6/2) | 粘性やや弱く、しまり強い。湖山崩落土を少量含む。 |
| 4. 褐色土 | (10YR4/4) | 粘性、しまり共に強い。湖山崩落土を少量含む。 |

0 (1:40) 2m

第28図 RD193・196

[堆積上] 褐色土主体で4層に細分した。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は僅かに凹凸が認められるものの、概ね平坦である。

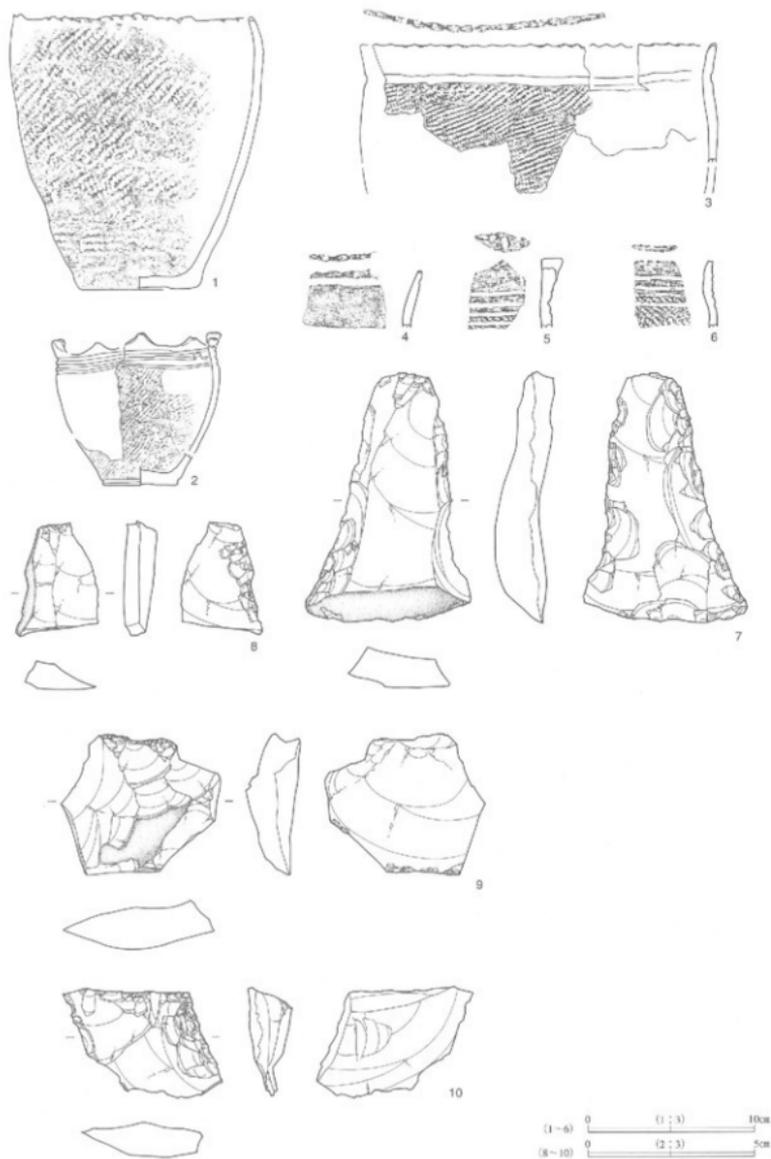
[遺物] なし。

[性格] 平面形状から陥し穴状遺構と思われる。

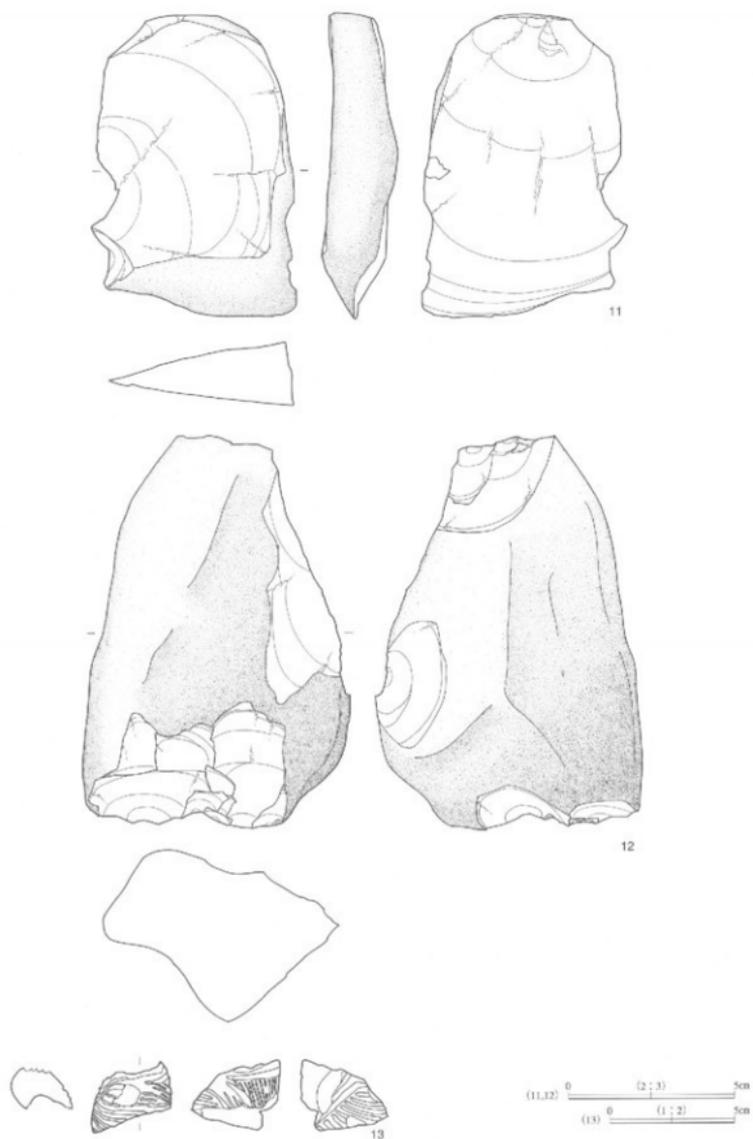
[所属時期] 縄文時代に属すると思われるが詳細は不明である。

遺構外遺物

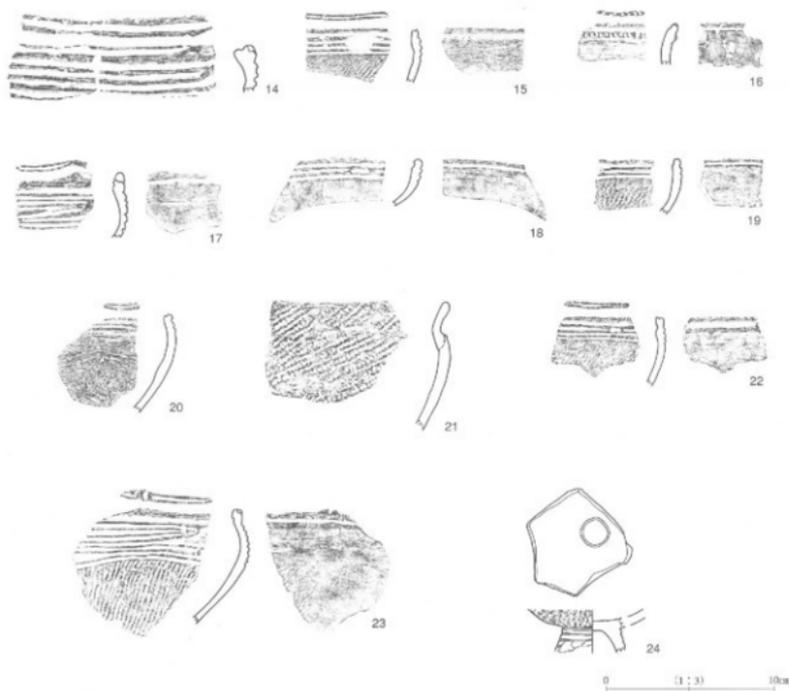
遺構外は基本的には調査区5Nグリッドを中心に出土しており、他グリッドからの出土は極めて少ない。鉢・浅鉢・台付浅鉢などの器種がある。14・17・23は変形工字文が認められ、口唇部に沈線が施されている。ただし17・23は突起を持つ。18・22は横位沈線間に長方形の凹みが施されている。前者は大河A'式、後者は大河A式に比定される。その他のものは沈線や縄文のみであり、所属時期は先述したどちらかの時期に含まれると思われる。



第29図 RD193出土遺物 (1)



第30図 RD193出土遺物(2)



第31図 遺構外出土遺物

(2) 奈良時代の遺構・遺物

竪穴住居跡

R A 091竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 J 18p・q、19p・qグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は緩やかに西と南に傾斜していく段丘縁辺部の平坦部であり、今回調査した竪穴住居の中で最も西端にある。北東壁から7m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との距離はR A 092は北東に6m、R A 093は東に16m、R A 096は南東に16mを測る。本遺構の上半部は強く削平されている。

[住居の方向] N-60°-W。北東壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は北西壁3.39m、北東壁3.15m、南東壁3.52m、南西壁3.47mである。

[堆積土] 黒褐～暗褐色土主体で8層に細分した。

[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。上半部が強く削平されているため壁の立ち上がりは低く壁高は6cm前後、残存状況が良好な南東壁は12cmである。床面は暗褐色土が部分的に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は2～6cm、掘り方はⅥ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-60°-Wである。袖は地山を削り出して構築している。燃焼部は緩やかに門む肌状をしており、平面形は不整形、規模が36×30cm、層厚4cmの焼成面がある。煙道部は燃焼部から段差が設けられ、そこから煙り出しに向かって緩やかに傾斜しており、焼成面から1.55mを測る。煙道部構築方法は芟抜式である。

[土坑・柱穴] 柱穴1個を北東隅の床面において検出した。P 1の平面形は楕円形、規模は68×39cm、深さは10cmである。

[遺物] 土器129点、礎2点がカマド周辺の床面から出土している。土師器杯・甕はすべて非口口である。25～27は土師器杯、25はI A 1c類、26はI B 2c類、27はI A 1a類である。28は土師器鉢iv類。29～32は土師器甕。30・32の底部には木葉痕が認められる。29・30・32はA 1 ii類、31はA 1 i類である。

[遺構時期] 8世紀中葉から後葉に属する。

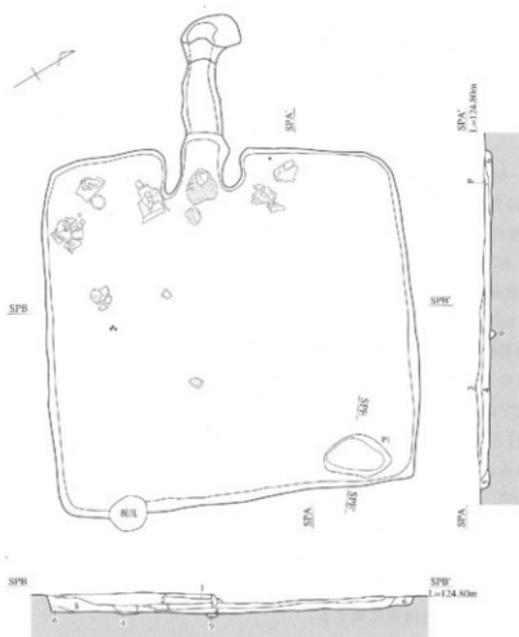
R A 092竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 J 15u・v、16u・v、17u・vグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は西に向かって緩やかに傾斜していく段丘縁辺部の平坦部にある。北壁から0.5m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との距離はR A 091は南西に6m、R A 093は南東に9m、R A 096は南南東に9mを測る。本遺構の南壁の一部と北東隅と遺構上半部は削平されているため、床面のみを精査となる。

[住居の方向] N-92°-W。南壁を基準としている。

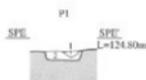
[平面形・規模] 平面形は南北に長い長方形である。規模は西壁5.66m、北壁3.47m、東壁5.08m、南壁4.66mである。

[堆積土] 暗褐色土主体で3層に細分した。2層上面において十和田a火山灰がブロック状に混入している。



RA091

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。湖山面遺土を少量含む。
3. 灰褐色土 (10YR4/2) 粘性強、しまり強い。湖山面遺土を少量含む。
4. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまりやや強い。
5. 灰褐色土 (10YR4/2) 粘性強、しまり強い。湖山面遺土を微量含む。
6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまりやや強い。其山面遺土を少量含む。
7. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強、しまりやや強い。φ3~5mmの焼土粒を少量含む。
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまりやや強い。
9. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。褐色土を多く含む。瓦片。

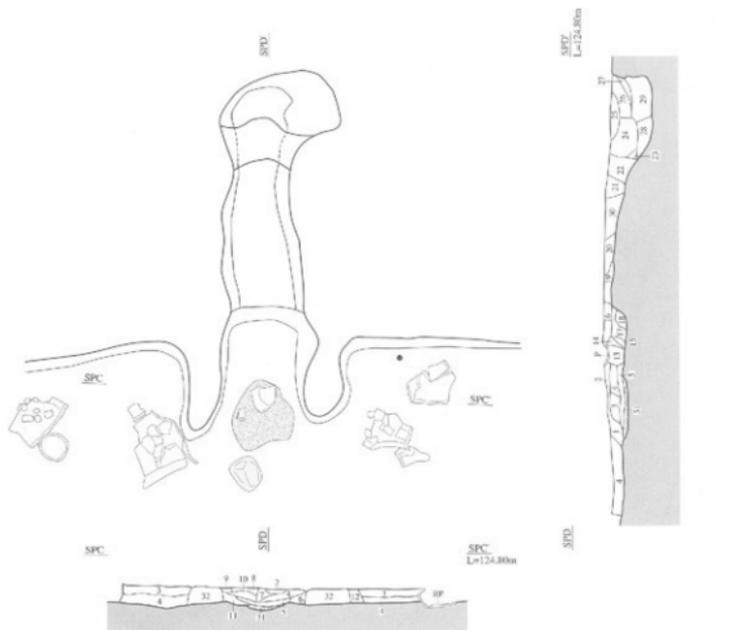


P1

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5mmの焼土・炭化粒を微量含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。上層の流入物がやや多く含む。

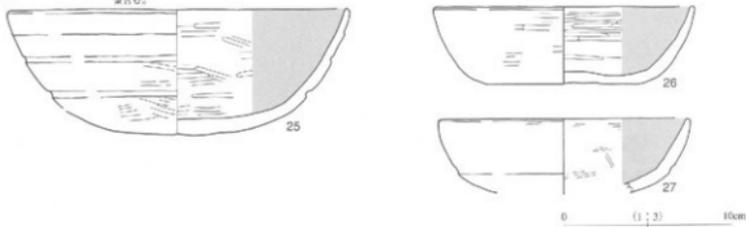
0 (1:20) 2m

第32図 RA091

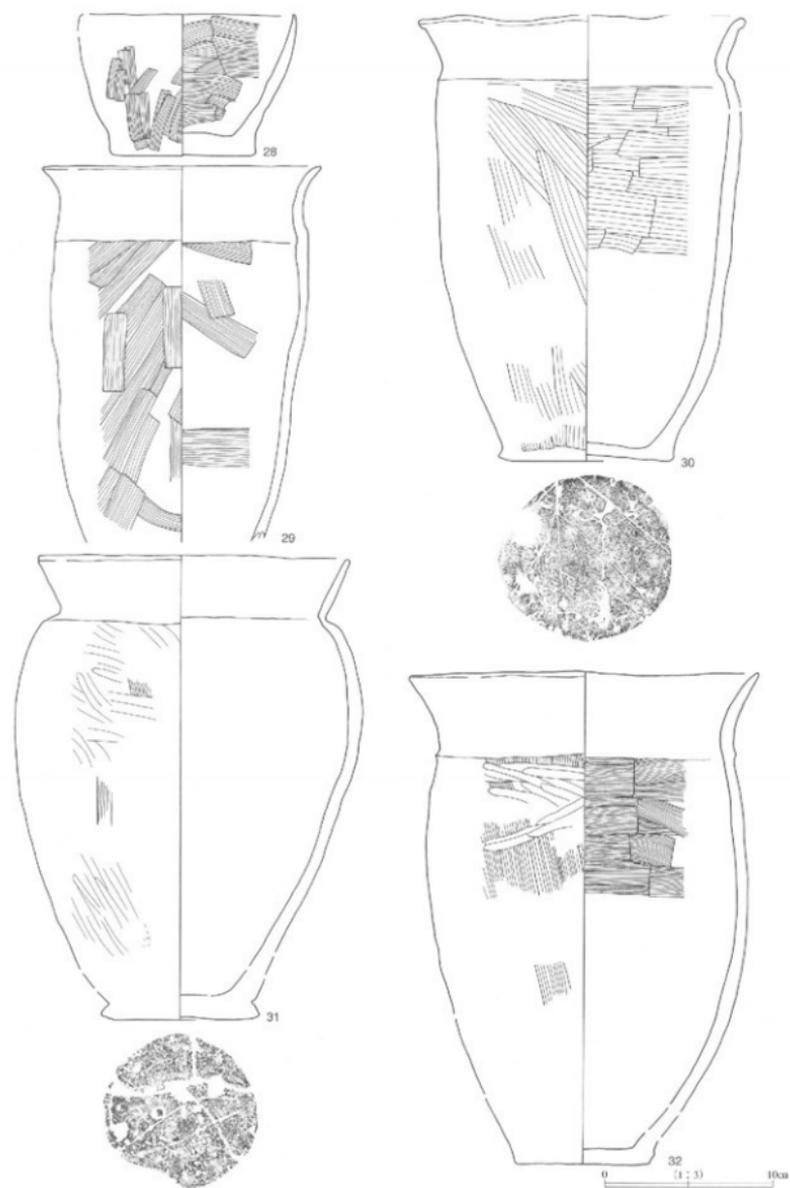


RA091カマド

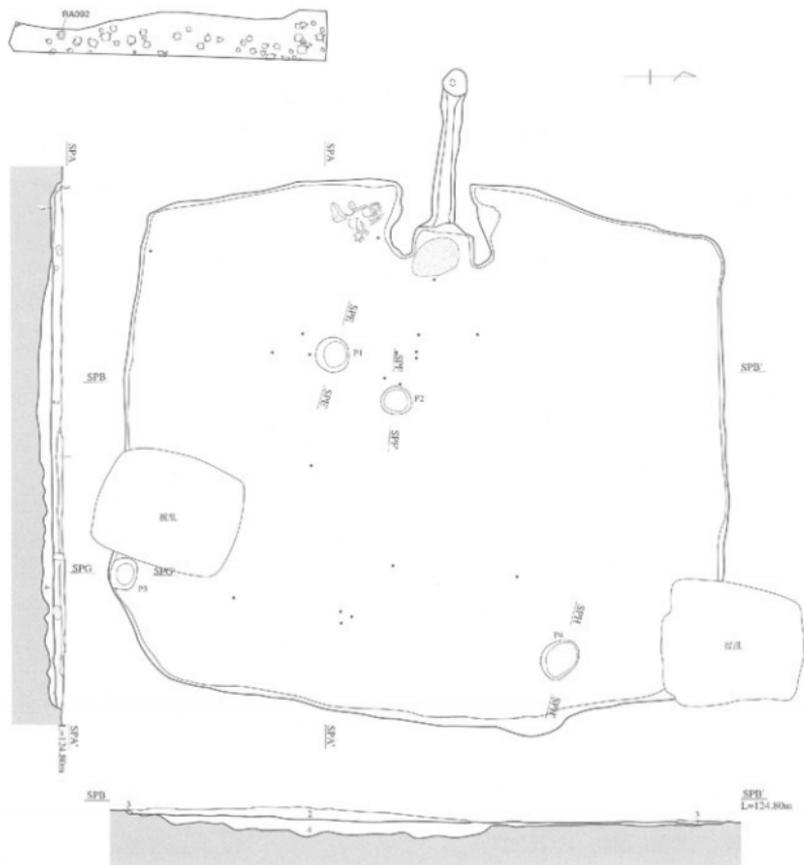
- | | | | | |
|-----------|--|------------|---|--|
| 1. 黒褐色土 | (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり強い。φ2~5cmの炭化粒・焼土を微量含む。 | 15. ぶい黄褐色土 | (10YR6/3) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 | (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ3~5cmの炭化粒を微量含む。 |
| 2. 灰青褐色土 | (10YR4/2) 粘性やや弱く、しまり強い。φ5cm前後の焼土屑部土(黄褐色)を含む。天井部土の可能性があります。 | 16. 黒褐色土 | (10YR6/3) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 | (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ3~5cmの炭化粒を微量含む。 |
| 3. ぶい黄褐色土 | (10YR4/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5~10cmの炭土・φ5cm前後の炭化粒を少量含む。 | 17. 褐色土 | (10YR4/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5~10cmの炭土・φ5cm前後の炭化粒を少量含む。 | (10YR4/4) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 |
| 4. 暗褐色土 | (10YR3/3) 粘性やや弱く、しまり強い。φ5~10cmの炭土を包含。 | 18. 褐色土 | (10YR4/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5~10cmの炭土・φ5cm前後の炭化粒を少量含む。 | (10YR4/2) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 |
| 5. 暗褐色土 | (7.5YR4/3) 粘性やや弱く、しまり弱。φ5~10cmの炭土・炭化粒をやや多く含む。 | 19. 褐色土 | (10YR4/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5~10cmの炭土・φ5cm前後の炭化粒を少量含む。 | (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまりやや強い。焼土屑部土を少量含む。 |
| 6. 褐色土 | (7.5YR4/3) 粘性やや弱く、しまり弱。φ5cmの炭土と炭化粒をやや多く含む。 | 20. 灰青褐色土 | (10YR4/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5~10cmの炭土・φ5cm前後の炭化粒を少量含む。 | (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。焼土屑部土を少量含む。 |
| 7. 暗褐色土 | (10YR3/4) 粘性弱く、しまり強い。φ3~5cmの焼土・炭化粒を少量含む。天井部土を含む。 | 21. 黒褐色土 | (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり弱。φ5cmの炭土と炭化粒を少量含む。 | (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5cmの炭土と炭化粒を少量含む。 |
| 8. 暗褐色土 | (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5cmの炭化粒・焼土を少量含む。 | 22. 黒褐色土 | (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり弱。φ5cmの炭土と炭化粒を少量含む。 | (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5cmの炭土と炭化粒を少量含む。 |
| 9. 褐色土 | (7.5YR4/2) 粘性なし。しまりやや強い。天井部土と焼土が混じった上。 | 23. 灰青褐色土 | (10YR4/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5cmの炭化粒・焼土を少量含む。 | (10YR4/4) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 |
| 10. 暗褐色土 | (10YR3/4) 粘性やや弱く、しまり強い。焼土と5層の混合層で、焼土の割合が多い。 | 24. 藍色土 | (10YR4/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5cmの炭化粒・焼土を少量含む。 | (10YR4/2) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 |
| 11. 褐色土 | (10YR4/6) 粘性やや弱く、しまり強い。焼土と5層の混合層で、焼土の割合が多い。 | 25. 黒褐色土 | (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり弱。φ5cmの炭土と炭化粒を少量含む。 | (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5cmの炭土と炭化粒を少量含む。 |
| 12. 黒褐色土 | (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 26. 黒褐色土 | (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり弱。φ5cmの炭土と炭化粒を少量含む。 | (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5cmの炭土と炭化粒を少量含む。 |
| 13. 黒褐色土 | (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 27. ぶい黄褐色土 | (10YR6/3) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 | (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5cmの炭化粒を微量含む。 |
| 14. 暗褐色土 | (10YR3/3) 粘性やや弱く、しまり強い。φ3~5cmの炭化粒を微量含む。 | 28. 黒褐色土 | (10YR6/3) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 | (10YR3/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5cmの炭化粒を微量含む。 |
| | | 29. 藍色土 | (10YR4/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5cmの炭化粒・焼土を少量含む。 | (10YR4/2) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 |
| | | 30. 灰褐色土 | (10YR5/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5cmの炭化粒・焼土を少量含む。 | (10YR4/1) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 |
| | | 31. 赤褐色土 | (10YR5/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5cmの炭化粒・焼土を少量含む。 | (10YR4/1) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 |
| | | 32. 灰青褐色土 | (10YR4/3) 粘性強。しまりやや強い。φ5cmの炭化粒・焼土を少量含む。 | (10YR4/1) 粘性弱く、しまり弱。天井部土を少量含む。 |



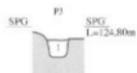
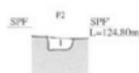
第33図 RA091カマド・出土遺物(1)



第34図 RA091出土遺物 (2)



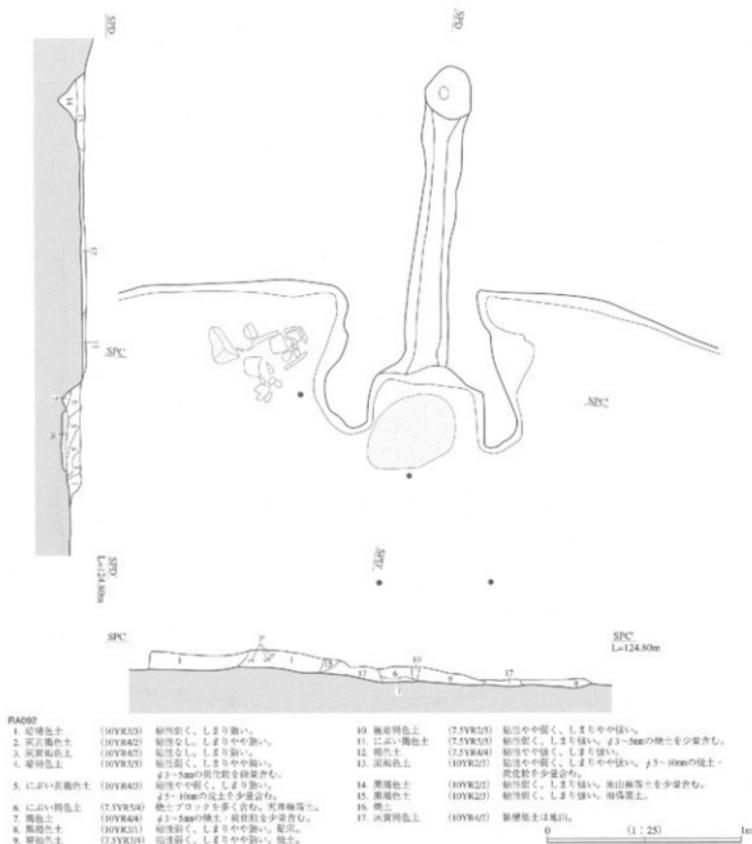
- RA092
1. 厚褐色土 (HVRM3) 粘性弱く、しまり強い。
 2. 濃褐色土 (HVRM2) 粘性弱く、しまりやや強い。p3~5mの深土・炭化灰を散見含む。
 3. 灰黄褐色土 (HVRM7) 粘性弱く、しまり強。埴土層含む。
 4. 濃褐色土 (HVRM3) 粘性弱く、しまり強い。埴土が混入する。参照。



- P1~4
1. 灰褐色土 (HVR20) 粘性弱く、しまりやや強い。

0 (1:50) 2m

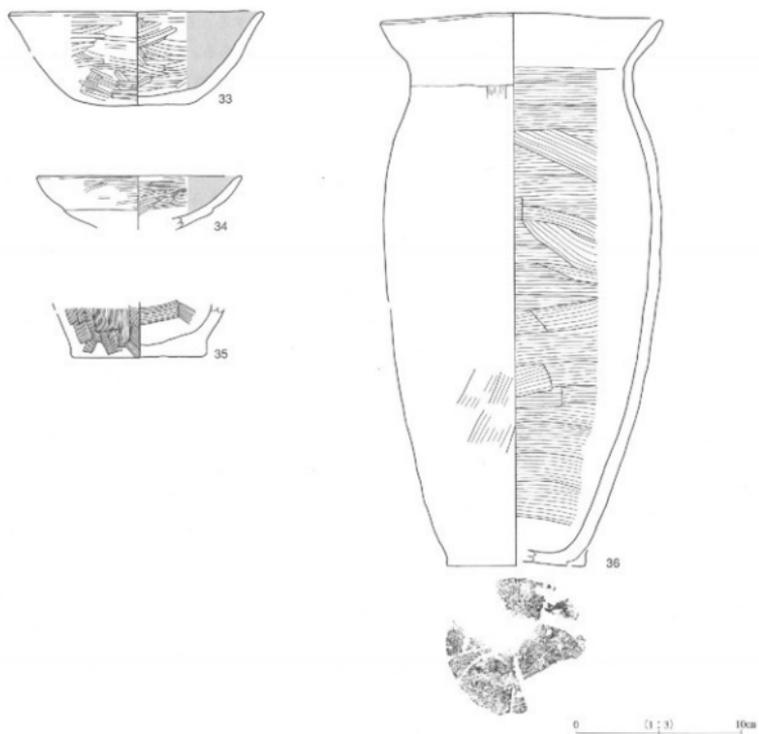
第35図 RA092



第36図 RA092カマド

〔壁・床面〕壁は外傾して立ち上がる。遺構上半部が強く削平されていることから壁高は2～6cmと低く、特に北壁の立ち上がりは僅かである。床面は黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、緩やかに北に傾斜している。貼床の層厚は2～20cm、掘り方は1層を掘り込んで形成されている。それらは床面全体で認められるが、南側が特に深く掘り込まれている。

〔カマド〕袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-85°-Wである。袖は地山を削り出して構築している。右袖の下端は構築土が削平され流出していることから不明瞭である。燃焼部は中央が凹皿状をしており、平面形は楕円形、規模が51×39cm、層厚4cmの焼成面がある。煙道は燃焼部から段差が設けられ、そこから煙り出しに向か



第37図 RA092出土遺物

ってほぼ平坦に形成されており、焼成面から1.71mを測る。煙道構築方法は残存状況が悪いことから不明である。

〔土坑・柱穴〕柱穴4個を貼床の掘り下げ時に検出した。P1～4は、平面形は円形もしくは楕円形、規模は28～42cm、深さは12～16cmである。柱穴の堆積土は黒褐色土主体で同じである。

〔遺物〕土器234点がカマド周辺の床面から出土している。土師器坏と甕はすべて非クロロである。33・34は土師器坏。33はI B2a類、34はI A1a類である。35・36は土師器甕。36はA1iv類、底部に木葉痕が認められる。礫は22点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。

〔遺構時期〕8世紀中葉から後葉に属する。

R A 093 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 K 17b・c、18b・c、19b・cグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。本遺構は西に向かって緩やかに傾斜していく段丘縁辺部の斜面上にある。北壁から4m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との距離はR A 091は西に16m、R A 092は北西に9m、R A 096は南西に6m、R A 094は東に8m、R A 095は北東に16mを測る。本遺構の南壁及び南西隅は強く削平されているため、残存状況は悪い。

[住居の方向] N-83°-W。北壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は東西壁が北壁よりやや長いがほぼ方形である。規模は西壁4.73m、北壁4.03m、東壁4.93m、南壁2.96mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で12層に細分した。

[壁・床面] 壁は垂直に立ち上がり、東壁のみ開き気味である。壁高は10~20cm、残存状況の良い北壁の壁高は20cm前後である。床面は黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、緩やかに北に向かって傾斜している。貼床の層厚は4~28cm、掘り方はVI層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-80°-Wである。袖はVI層の地山を削り出して構築している。燃焼部は煙道に向かって緩やかに傾斜しており、平面形は不整形、規模が58×30cm、層厚6cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜するように形成され、焼成面から1.36mを測る。煙道構築方法は、天井崩落土が確認できなかったことから掘込式である。

[土坑・柱穴] 検出されなかった。

[遺物] 土器は49点、陶磁器1点、鉄製品1点、礫石器4点がカマド周辺の床面から出土している。土師器環・甕はすべて非クロコである。37は土師器環I B 2a類。38・39は土師器甕。38はA I ii類、39はA I iv類である。前者は頸部の段が認められているのに対して、後者は僅かにしか存在しない。40は土師器甕II類。41は青磁。窯元は龍泉窯系と思われる。貼花が施されており、13世紀後半に属する可能性がある。42は刀子である。木質部の柄が残存しており、網目状に薄い皮が付着していることを確認できたことから装飾が施されていたと思われる。43~46は礫石器。43・44・46はI類、45はII類である。礫石器以外に礫は21点出土しているが、すべて自然礫である。これらの礫の半数近くは被熱していることから、カマド構築材として用いられたものが含まれている可能性がある。

[遺構時期] 8世紀中葉から後葉に属する。

R A 094 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 K 19i・j、20h・i・jグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。本遺構は、緩やかに南北方向と西方向に傾斜している段丘縁辺部の斜面上にある。北壁から7m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との距離は、R A 093は西に8m、R A 095は北北西に8m、R A 096は南西に14m、R A 097は東に14mを測る。西壁及び南西・南東隅は掘削に削平されているため残存状況は悪い。

[住居の方向] N-72°-W。南壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は残存している北東隅から方形と思われる。規模は西壁3.73m、北壁4.84m、東壁4.69m、南壁4.37mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で7層に細分した。

[壁・床面] 壁は概ね外傾して立ち上がり、残存状況の良い南壁のみ垂直である。壁高は22cm前後、



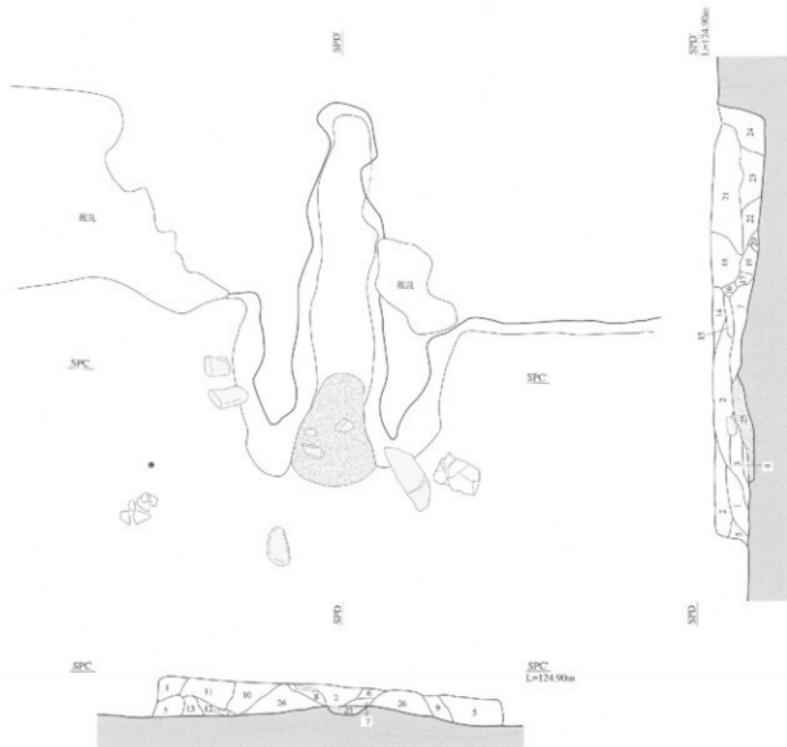
RA093

1. 掘削
2. 黒褐色土 (HVR32) 粘性弱く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (HVR22) 粘性やや弱く、しまり強い。
4. 黒褐色土 (HVR32) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
5. 黒褐色土 (HVR32) 粘性弱く、しまり強い。φ10cm前後の塚山遺物上、φ3-5mmの炭化粒を微量含む。
6. 黒褐色土 (HVR22) 粘性やや弱く、しまり強い。φ1cm前後の塚山遺物上、φ3-10mmの炭化粒・焼土を少量含む。
7. 黒褐色土 (HVR32) 粘性弱く、しまり強い。φ5mm程度の塚山遺物上を少量含む。
8. 黒褐色土 (HVR32) 粘性弱く、しまりやや強い。
9. 黒褐色土 (HVR22) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5-20mmの塚山遺物上を微量含む。
10. 黒色土 (HVR44) 粘性弱く、しまりやや強い。塚山遺物上。
11. 黒褐色土 (HVR32) 粘性弱く、しまりやや強い。
12. 黒褐色土 (HVR22) 粘性弱く、しまり強い。
13. 黒褐色土 (HVR32) 粘性弱く、しまり強い。油土を多く含む。掘削。

0 (1:50) 2m

第38図 RA093

2 検出された遺構・遺物

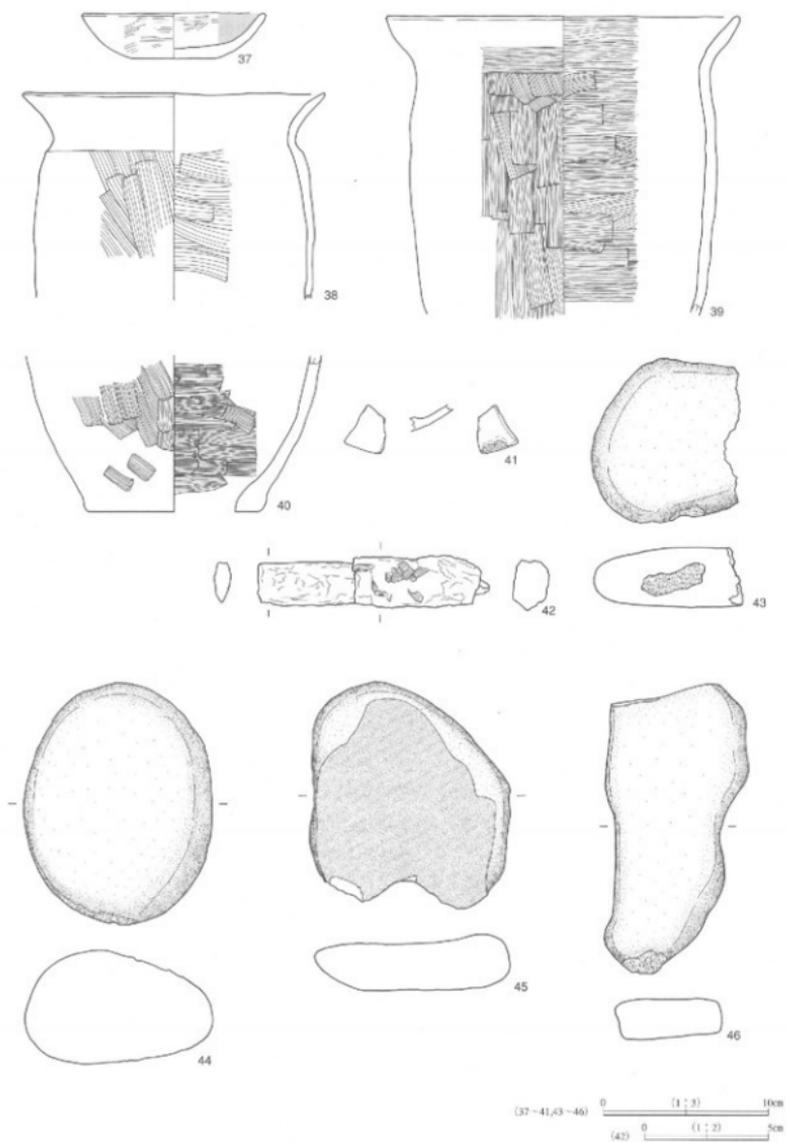


RA093カマド

- | | | |
|-------------|-----------|---|
| 1. 黒褐色土 | (10VR21) | 粘性やや強く、しまり強い。φ3-5mmの焼土・炭化灰を微量含む。 |
| 2. 黒褐色土 | (10VR21) | 粘性弱く、しまりやや強い。φ3-5mmの焼土・炭化灰を少量含む。 |
| 3. 黒色土 | (10VR21) | 粘性弱。しまりやや強い。2層分同じ個人数を混入。 |
| 4. 黒褐色土 | (7.5VR23) | 粘性やや強く、しまり強い。炭土をやや多く含む。 |
| 5. 黒褐色土 | (10VR21) | 粘性弱く、しまりやや強い。炭土粒を少量含む。 |
| 6. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性弱く、しまり強い。天井跡遺土。焼土粒を少量含む。 |
| 7. 褐色褐色土 | (7.5VR23) | 粘性やや弱く、しまり強い。炭土をやや多く含む。 |
| 8. 黒褐色土 | (7.5VR23) | 粘性弱く、しまり強い。焼土をやや多く含む。 |
| 9. 黒褐色土 | (10VR24) | 粘性弱く、しまり強い。焼山跡じり。焼山跡上。 |
| 10. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性弱く、しまりやや強い。φ3-5mmの焼土を微量含む。 |
| 11. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性弱く、しまりやや強い。2層と類似するが天井跡遺土を微量混入。 |
| 12. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 13. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性やや弱く、しまりやや強い。天井跡遺土を少量含む。 |
| 14. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性弱く、しまりやや強い。 |
| 15. 黒褐色土 | (10VR24) | 粘性弱く、しまりやや強い。道山跡遺土をやや多く含む。 |
| 16. にぶい赤褐色土 | (5VR42) | 粘性。しまり高にやや強い。焼土跡遺土。 |
| 17. 黒褐色土 | (7.5VR22) | 粘性やや強く、しまり強い。 |
| 18. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性やや弱く、しまり強い。道山跡遺土を少量含む。 |
| 19. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性やや弱く、しまり強い。道山跡遺土を微量含む。 |
| 20. にぶい黄褐色土 | (10VR42) | 焼山跡遺土。 |
| 21. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性やや弱く、しまり強い。φ1cmの焼土層遺土を少量含む。
φ3-5mmの炭化灰を微量含む。 |
| 22. 黒褐色土 | (10VR22) | 粘性やや弱く、しまり強い。道山跡遺土を少量含む。 |
| 23. 黒褐色土 | (10VR21) | 粘性弱く、しまり強い。焼山跡遺土を少量含む。 |
| 24. 黒色土 | (10VR21) | 粘性弱く、しまり強い。焼山跡遺土を少量含む。 |
| 25. 赤褐色土 | (5VR48) | 炭土。 |
| 26. 黄褐色土 | (10VR56) | 特殊粘土は焼土。 |

0 (1:25) 1m

第39図 RA093カマド



第40図 RA093出土遺物

削平された東壁の壁高は4cmと浅い。床面は地山を多く含んだ黒色土が全面に貼られて硬くしまり、中央付近が周囲よりも僅に高くなっている。貼床の層厚は2~22cm、中央部分は極端に深い壁近くではほとんど認められない。掘り方はⅥ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。煙道は攪乱により削平されていた。残存状況から軸線方向はN-75°-Wと推測される。袖は地山を削り出した後に黒色土を貼付て構築している。燃焼部は、中央が凹む皿状をしているが住居内部に向かって緩やかに傾斜しており、平面形は楕円形、規模が53×40cm、層厚10cmの焼成面がある。燃焼部のほぼ中央に支脚が認められ、土師器甕の内部に竈を入れ倒立させて配置している。煙道構築方法は残存していないことから不明である。

[土坑・柱穴] 土坑2基、柱穴4個を貼床の掘り下げ時に検出した。

土坑は北西隅、南東隅に1基ずつある。1号土坑は、規模は1.1×1.05m、深さは22cmである。土器29点が出土している。2号土坑は、規模は74×62cm、深さは16cmである。土器27点が出土している。どちらも遺物が出土していることから貯蔵穴の可能性がある。

柱穴は開口部径が40~60cmでほぼ同一規模であるが、深さは10~26cmと一律ではない。これらは平面プランと軸線がずれているものの、住居と同様の方形をしていることから主柱穴と考えられる。これらから柱痕は確認できていない。

[遺物] 土器423点、礫石器5点が床面を中心に出土している。土師器環と甕はすべて非黒クロクである。47~52は土師器環ⅠAⅠ類。口縁部形態に特徴が認められ、a類とd類の2種類がある。53は土師器鉢Ⅱ類。内外面共にミガキが施されている。54~60は土師器甕。AⅠⅡ類とAⅠⅥ類が認められ、59のみB類に含まれる可能性がある。58はカマドの支脚に使用されたものである。61の須恵器甕は貼床から出土している。胎土分析の結果から過去の分析資料と一致するものは存在していないことが明らかとなった(322頁参照)。62~66は礫石器。64がⅣ類と65がⅠ類以外はすべてⅢ類である。67は砥石である。礫石器以外に竈は19点出土しているが、すべて自然礫である。

[遺構時期] 8世紀前葉に属する。

R A 095 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 K 141・mグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は西に向かって緩やかに傾斜していく段丘縁辺部にある。北壁から0.5m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 093は南西に16m、R A 094は南南西に8m、R A 097は南東に13m、R A 121は東に7mを測る。本遺構の北壁は木根により不明瞭であったため、床面においてカマドの燃焼部底面と袖の下端の一部をようやく確認できた。その結果、カマドの断面図作成までには至らなかった。

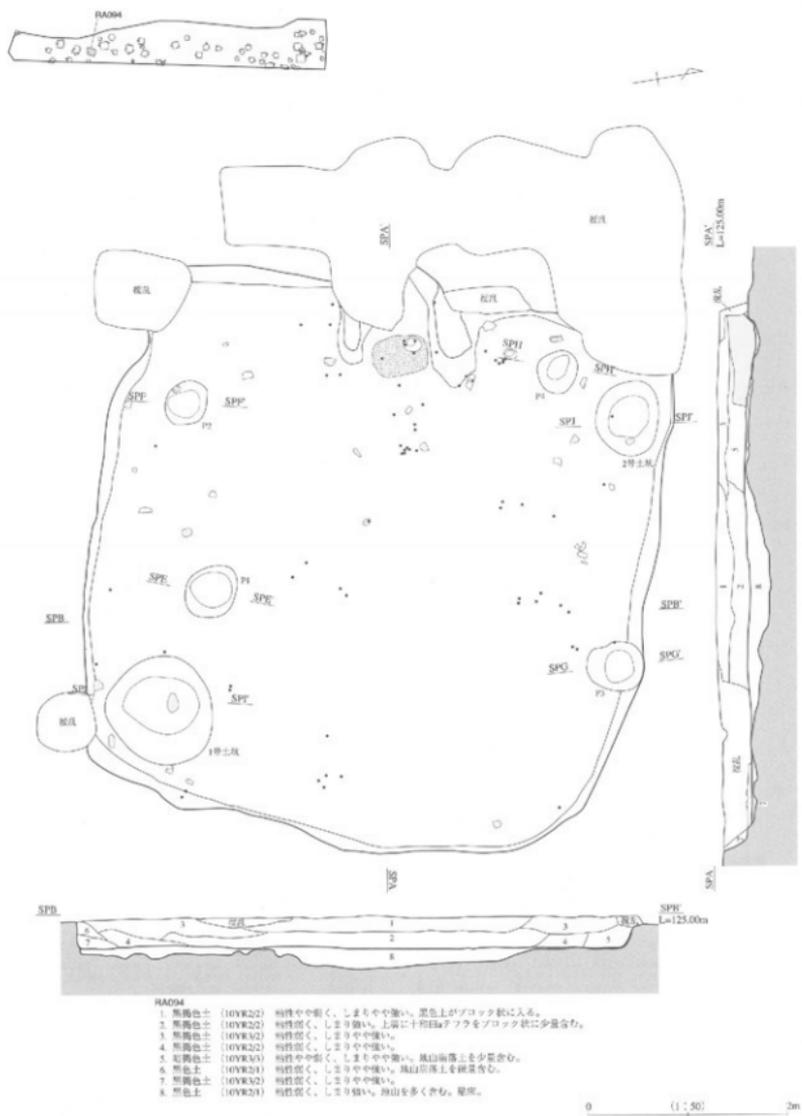
[住居の方向] N-5°-Eである。東壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は北壁2.29m、東壁2.62m、南壁2.33m、西壁2.43mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で7層に細分した。

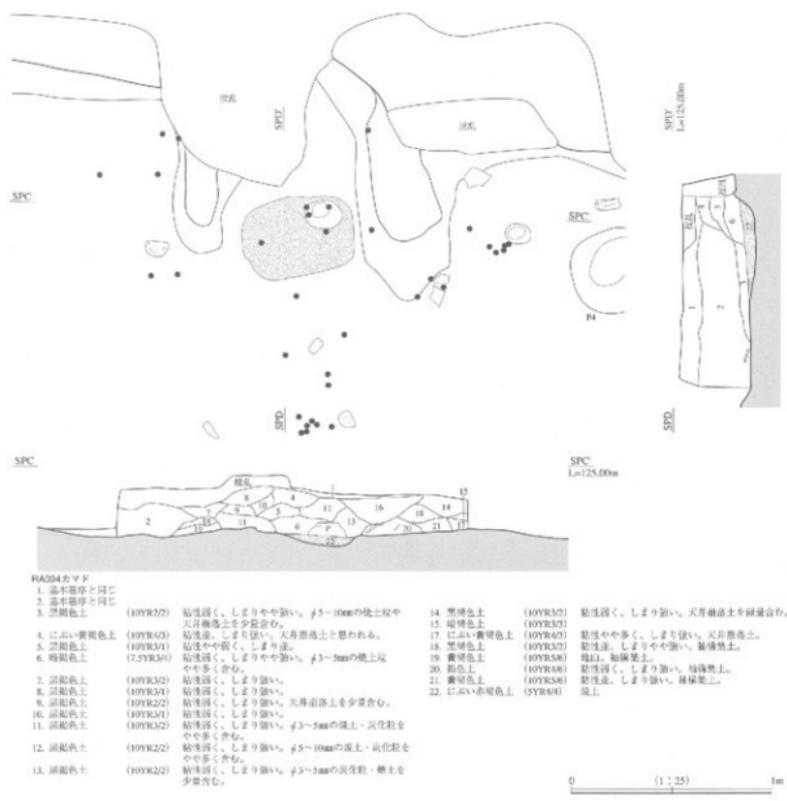
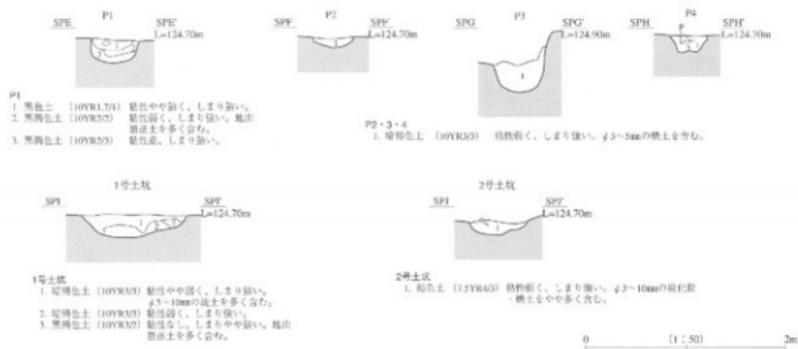
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は14~22cmである。床面は黒褐色土が全面に貼られてややしまり、カマドがある北壁に向かって緩やかに高くなっている。貼床の層厚は2~12cm、掘り方はⅥ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖の下端と燃焼部を検出した。北壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。煙道は木根により確認できなかった。軸線方向は袖と燃焼部の残存状況からN-15°-Eと推定され

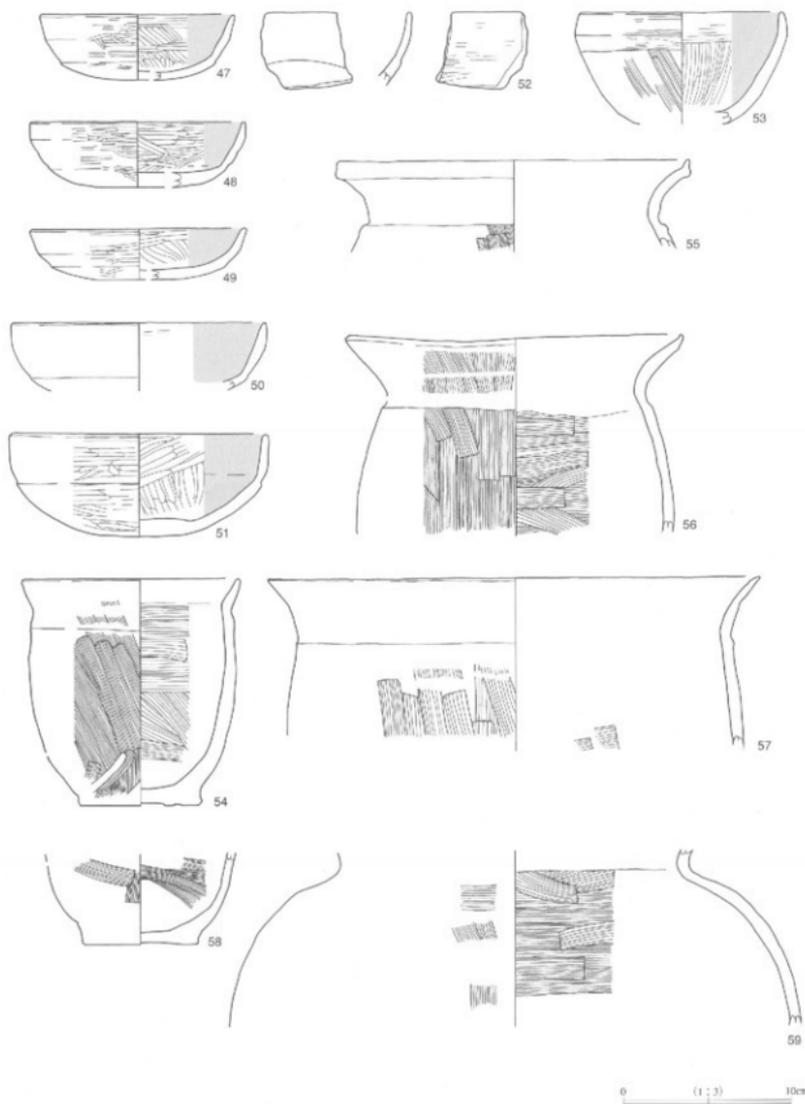


第41図 RA094

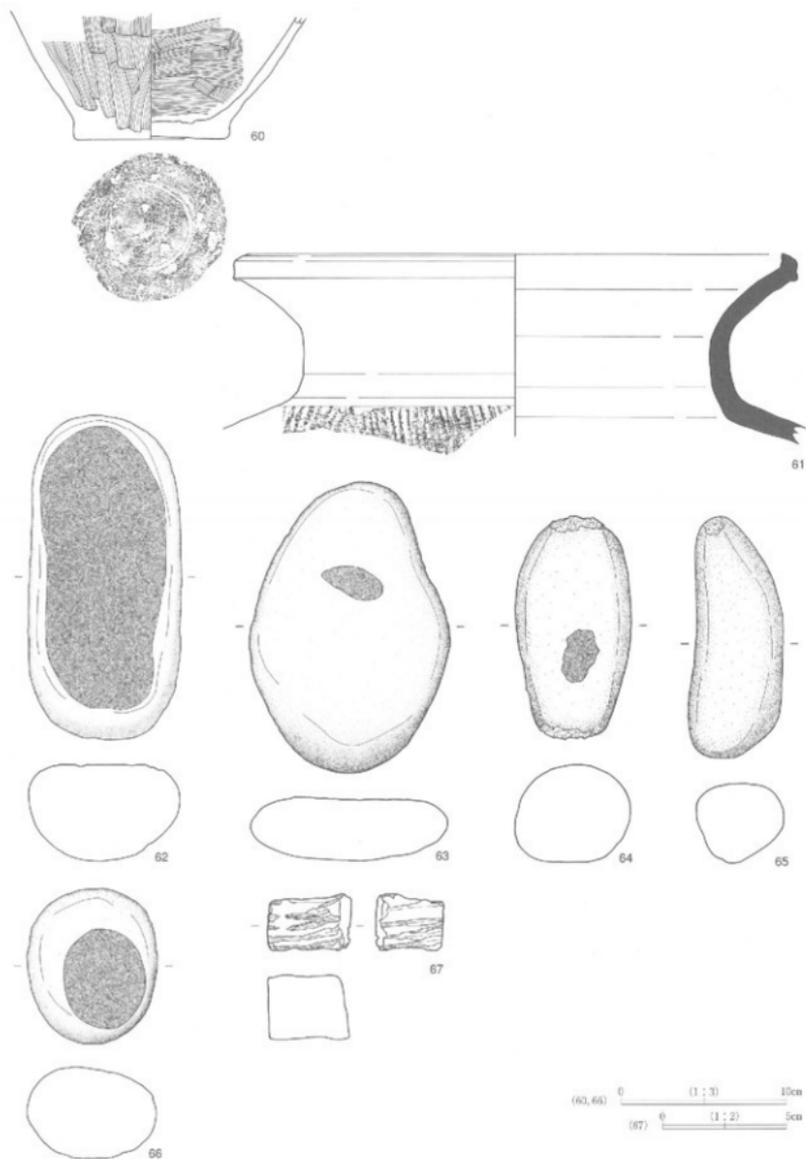
2 検出された遺構・遺物



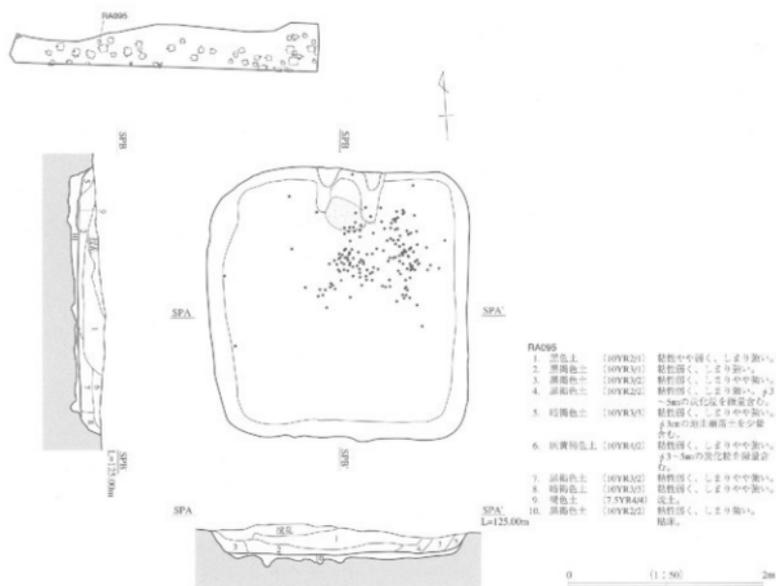
第42図 RA094柱穴・カマド



第43図 RA94出土遺物(1)



第44図 RA94出土遺物 (2)



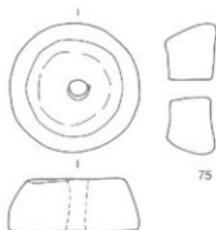
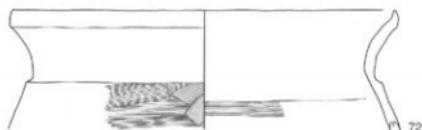
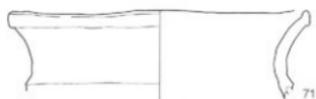
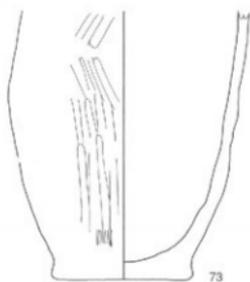
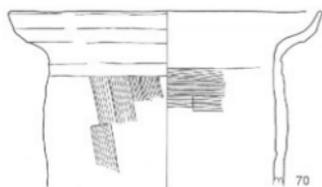
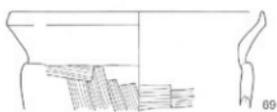
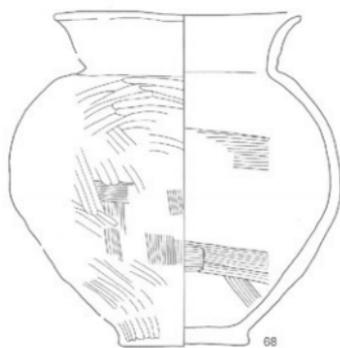
第45図 RA095

る。袖は褐色土を貼付て構築し、右袖には構築材として土師器甕を倒立させて配置している。然焼部は中央が凹む皿状であるが、住居内部に向かって緩やかに傾斜しており、平面器は楕円形、規模が43×31cm、層厚2cmの焼成面がある。煙道構築方法は煙道が攪乱されていることから不明である。

[土坑・柱穴] 検出されなかった。

[遺物] 土器560点、礫石器1点が埋土中位から床面にかけての床面中央と北東隅でまとまって出土している。これらは堆積土中に木根により攪乱を受けていることからほぼ原位置を留めている可能性は低い。土師器はすべて非ロクロである。甕が主体をなしており、坏は見受けられない。68~74は土師器甕。B類は68のみで他はA類である。A類にはvi類が多く、v類が僅かに存在している。73・74の底部には木葉痕が認められる。75は土製紡錘車。礫石器以外に礫は18点出土しているが、すべて使用痕跡と被熱が認められない自然礫である。

[遺構時期] 8世紀前葉に属する。



(68~74) 0 (1:3) 10cm
 (75) 0 (1:2) 5cm

第46図 RA095出土遺物

R A 096 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 J 21・22y、5 K 22a グリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は西と南に向かって緩やかに傾斜する段丘縁辺部の斜面上にある。周辺に検出された当該期の遺構との距離は、R A 093は北東に6m、R A 092は北北西に9m、R A 091は北西に16m、R A 094は北東に14mを測る。遺構上半部は強く削平されており、南壁側は床面付近で検出している。

[住居の方向] N-85°-W。南壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は西壁3.36m、北壁3.31m、東壁2.78m、南壁3.32mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で5層に細分した。

[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は4~16cmである。遺構上半部が削平されているため残存状況は悪く南西壁の壁高は4cmと低い。床面は黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は5~22cm、掘り方は床面中央が深くⅥ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-65°-Wである。袖は黒褐色土を貼付て構築し、袖の先端部には構築材として土師器を倒立させて配置している。燃焼部は中央が凹み皿状をしており、平面形は凹形、規模が約40cm、層厚7cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜するように形成され、焼成面から1.77mを測る。煙道構築方法は削平されているため不明である。

[土坑・柱穴] 柱穴3個を貼床の掘り下げ時に南東隅で検出した。P 1は平面形は楕円形、規模は60×51cm、深さは20cmである。P 2・3は平面形は円形、開口部径は30~46cm、深さは約20cmである。

[遺物] 土器67点、礫石器1点、鉄製品1点がカマド周辺の床面を中心に出土している。土師器環・甕はすべて非ロクロである。76・77は土師器環。76はI A 1a類、77はI B 1c類である。78は土師器高台付鉢である。非ロクロで体部に段を持ち高台を有するものは、過去の成果を含めても類例は存在しない。8世紀前葉に位置づけられる須臾器高台付環と器形が類似していることから、それを模倣したものと思われる。ここでは従来の土師器環と器形が異なり、鉢類に近いことから高台付鉢として扱っている。79~81は土師器甕。I 縁部が確認できたものはすべてiv類である。81の底部には木葉痕を有している。82は釘である。83は礫石器I類。礫石器以外に礫は2点出土しているが、使用痕跡と被熱が認められない自然礫である。

[遺構時期] 8世紀前葉に属する。

R A 097 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 K 18r・s、19r・s グリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は東西と北へ緩やかに傾斜する段丘縁辺部の斜面上にあり、この辺りには調査区内で最も標高が高い。北壁から13m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 094は西に14m、R A 095は北西に13m、R A 098は東に7m、R A 121は北北西に7mを測る。R G 142と攪乱によって削平されているため、東壁と南壁の一部は残存していない。

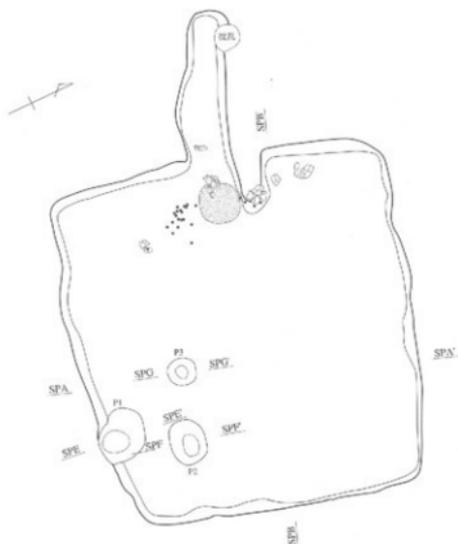
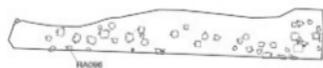
[重複] R G 142と重複し、本遺構の方が古い。

[住居の方向] N-26°-W。西壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は残存している北東・南東隅から方形である。規模は西壁3.29m、北壁2.83m、南壁3.51mである。

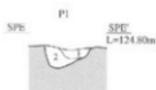
[堆積土] 黒褐色土主体で15層に細分した。

[壁・床面] 壁は概ね外傾して立ち上がり、北西隅付近のみ垂直気味である。壁高は20~28cmである。

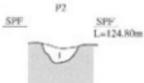


RA096

- 1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまり強い。
- 2. 黒色土 (10YR2/1) 粘性の中強く、しまり強い。龜山南麓土を少量混入。
- 3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性の中強く、しまり強い。龜山南麓土をやや多く含む。
- 4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりの中強い。
- 5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性の中強く、しまり強い。龜山南麓土を多く含む。
- 6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性、しまり共にやや強い。乱層。



- P1
- 1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
 - 2. P2 1層と同じ



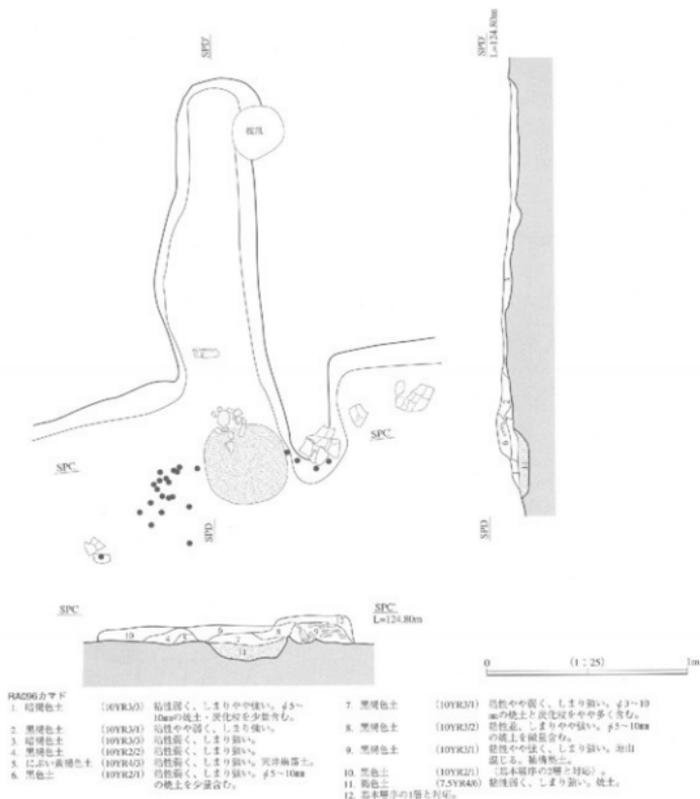
- P2
- 1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。



- P3
- 1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。

0 (1:50) 2m

第47図 RA096

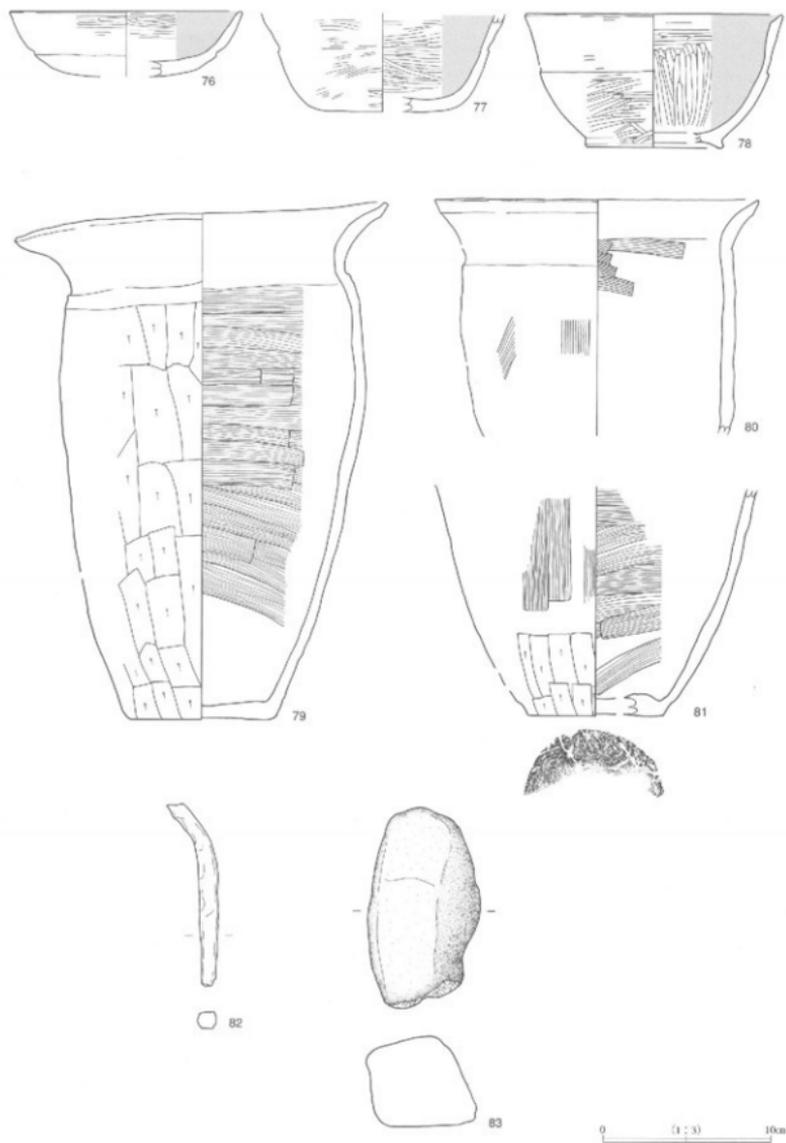


第48図 RA096カマド

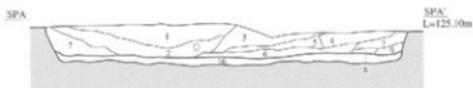
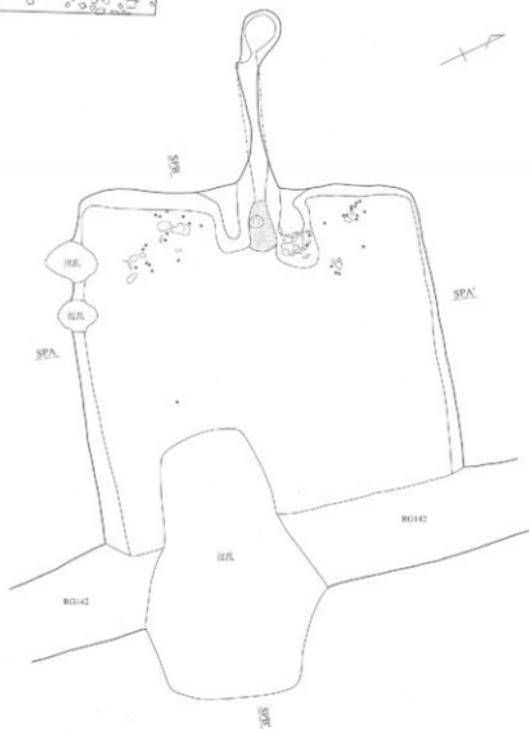
床面は暗褐色土が全面に貼られて硬くしまり、カマド周辺がやや高く南壁に向かって緩やかに傾斜している。貼床の層厚は4~8cm、掘り方はVI層を掘り込んで形成されている。カマドがある西壁付近はほとんど掘り込まれていない。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁とやや斜交するように設置されている。軸線方向はN-63°-Wである。袖は黄褐色土を貼付て構築し、右袖の先端には構築材として土師器甕を倒立させて配置している。燃焼部は中央が凹む皿状をしており、平面形は楕円形、規模が52×25cm、厚さ12cmの焼成面がある。焼成面中央より煙道側に支脚が認められ、土師器鉢を倒立させて配置している。煙道は焼成面からやや下るように形成され、焼成面から1.91mを測る。煙道構築方法は、天井崩落土は確認できなかったものの、煙道の両脇がオーバーハングしていることから例抜式である。

[土坑・柱穴] 検出されなかった。



第49図 RA096出土遺物

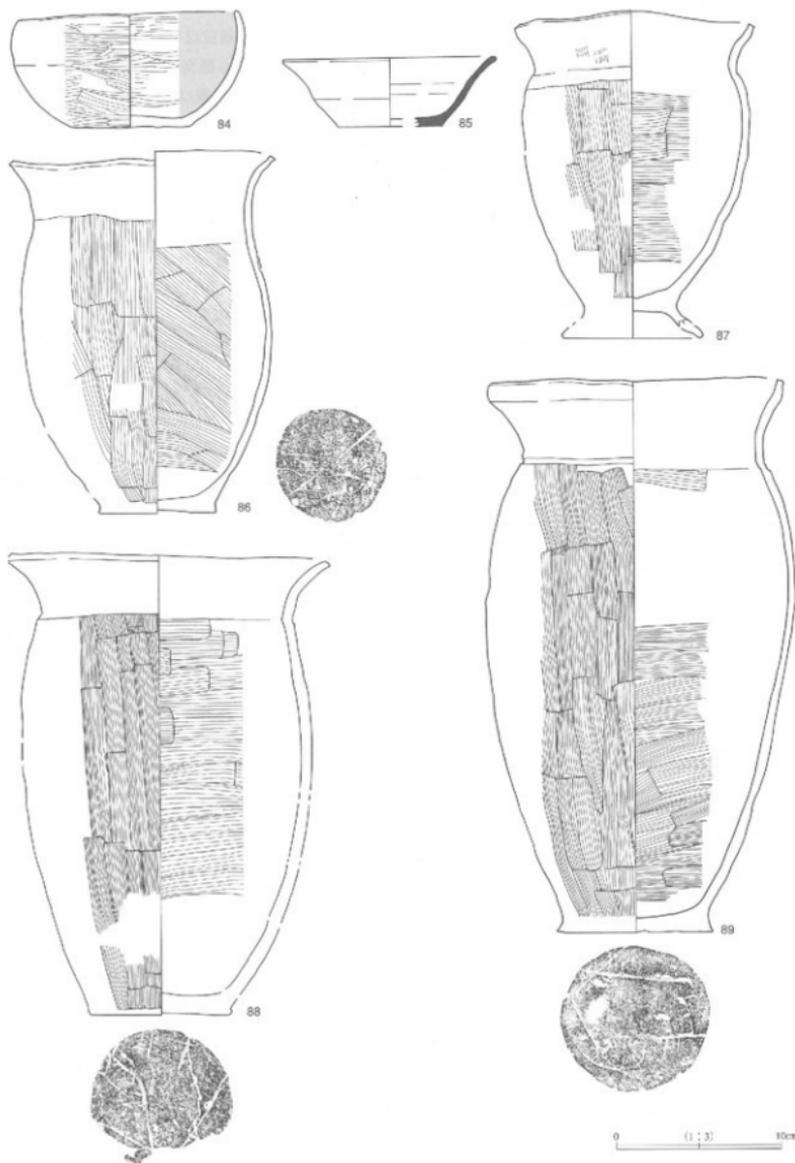


RA097

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強く、しまり強い。1層よりやや暗味を帯びる。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまりやや強い。
5. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性強く、しまり強い。
6. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強く、しまり強い。
7. 黒褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、しまり強い。黒山崩落土を微量含む。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまりやや強い。
9. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまりやや強い。池土崩落土を微量含む。
11. 黒色土 (10YR2/1) 粘性強く、しまり強い。
12. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強く、しまり強い。
13. 黒褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、しまり強い。
14. 黒褐色土 (10YR3/4) 粘性強く、しまり強い。池土崩落土を少量含む。
15. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強く、しまり強い。
16. 黒褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまり共にやや強い。肥田。

0 (1:50) 2m

第50図 RA097



第52図 RA097出土遺物

R A 098 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 K 17x・y、18x・yグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。本遺構は東西と北へ緩やかに傾斜する段丘縁部部の斜面上にあり、調査区内で最も標高が高い。北壁から10m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 099は北東に5m、R A 097は西に7m、R A 100は東に6m、R A 121は北西に12mを測る。攪乱により北西隅と南壁・東壁と煙道の一部が削平されている。

[住居の方向] N-88°-W。南壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は南北に長い長方形である。規模は西壁3.69m、北壁3.24m、東壁5.56m、南壁4.93mである。

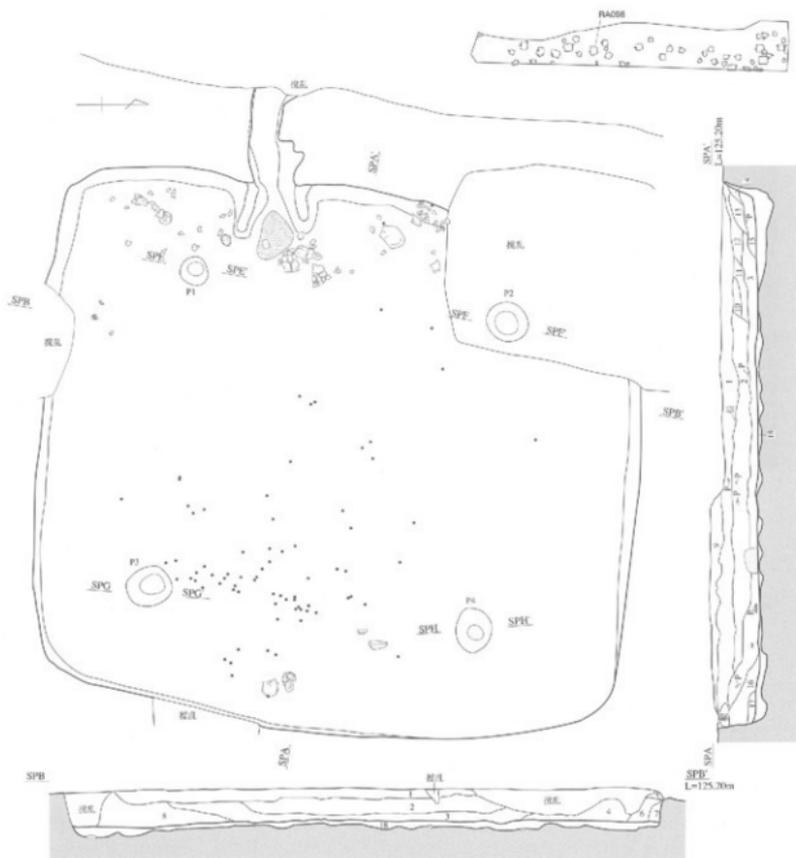
[堆積土] 黒褐色土主体で17層に細分した。

[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は北東隅以外の壁は16~30cmである。残存状況の悪い北東隅周辺は、ほぼ床面での検出であったことからほとんど残存していない。床面は暗褐色土が全面に貼られて硬くしまり、南西隅がやや高く北東隅に向かって緩やかに傾斜している。貼床の薄い床面では地山の層層が確認できる。貼床の層厚は2~16cm、掘り方はⅡ層を掘り込んで形成されている。

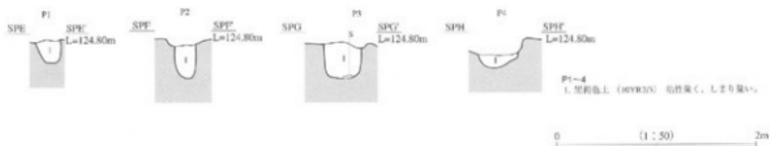
[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁のやや南壁寄り、中軸線が壁と直交するように設置されている。煙道は確認できたが煙り出しは攪乱により削平されている。軸線方向はN-93°-Wである。袖は黒褐色土を貼付て構築している。燃焼部は中央が凹む皿状をしており、平面形は楕円形、規模が50×32cm、層厚5cmの焼成面がある。焼成面中央に支脚が認められ、直立した櫛を配置している。煙道は燃焼部から緩やかに西に向かって下のように形成され、焼成面から1.28mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認されなかったことから掘込式である。

[土坑・柱穴] 柱穴は貼床の掘り下げ時に3個、攪乱除去中に1個の計4個を検出した。P 1~4は、平面形は円形、開口部径は30~48cm、深さは12~34cmである。それらは同一の平面形状をしており住居四隅の対角線上に配置されていることから主柱穴と判断できる。

[遺物] 土器685点、礫石器2点、土製品1点がカマド周辺の床面を中心に出土している。土師器はすべて非クロロである。他の遺構と比べて多様な器種が認められる。90~98は土師器杯I A類。90・92はI A 2d類。主に体部下半部はヘラ削りが認められ、口縁部はナデ整形である。胎土・色調・製作技法において他の杯とは異なる。97・98はI A 1b類。口縁部はナデにより大きく外反し、体部中央よりドはケズリとミガキが施されている。調整の変化点を段としているが他類とは異なることから、b類としている。90・92・97・98は整形技法と形態から他のものとは区分され、在地には認められないことから異系統のものと考えられる。それ以外の土師器杯は1a類に分類される。99・106は高杯。99の体部から口縁部にかけての製作技法は97・98と類似している。脚部は残存していないが剥落した痕跡が認められる。100~105は土師器鉢。100以外は内面に黒色処理が施されている。先述したように、鉢はⅢとⅣ類以外はすべて存在しており、杯と同様種類が多い。107~119は土師器甕。107~112はA 1類、i・ii・vi類が認められる。113・114はB類であるが、113のように口縁部が短く直立気味に立ち上がるような形状は、球胴の体部を有する甕の中でも稀な存在である。115はC類。この肩部が張るような器形は当該期の土師器甕には存在しない。須臾器甕に類似していることからそれを模倣したものと思われる。120・121は土師器甕Ⅱ類。両者共に複数の孔が存在しており、各孔との間隔は2cm前後である。122は貼床から出土した勾玉土製品である。大きさは5.2cmで、一端に穿孔が認められる。表面は剥落しているものの線状の痕跡が認められることから、表面は入念に磨かれていたものと思われる。礫は18点出土しているが、すべて使用痕跡と被熱が認められない自然礫である。

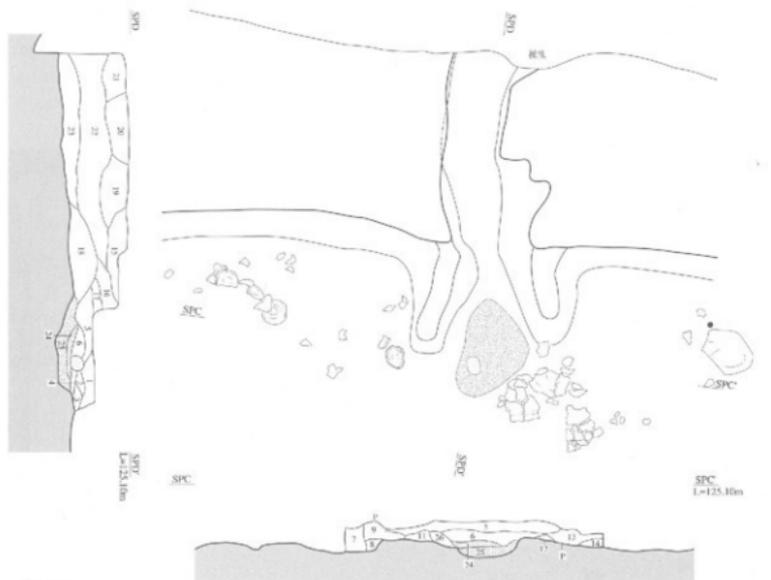


- RA098
- | | |
|---|---|
| 1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 10. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。黄褐色土は同層をブロック法に少量含む。 |
| 2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱く、しまり強い。φ3-5mmの炭土粒を少量含む。 | 11. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。炭山崩落土を少量含む。 | 12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまりやや強い。 |
| 4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 13. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。φ3mmの炭土粒を少量含む。 |
| 5. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。 | 14. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。炭山崩落土を少量含む。 |
| 6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱く、しまり強い。炭山崩落土を少量含む。 | 15. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 7. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性なし、しまり強い。炭山崩落土。 | 16. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。φ3-5mmの炭土、炭粒を少量含む。 |
| 8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。 | 17. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 9. 黒土 (10YR2/1) 粘性なし、しまり強い。 | 18. 黒褐色土 (10YR3/3) 粘性、しまり共にやや強い。黒褐色土を多く含む。灰床。 |



第53図 RA098

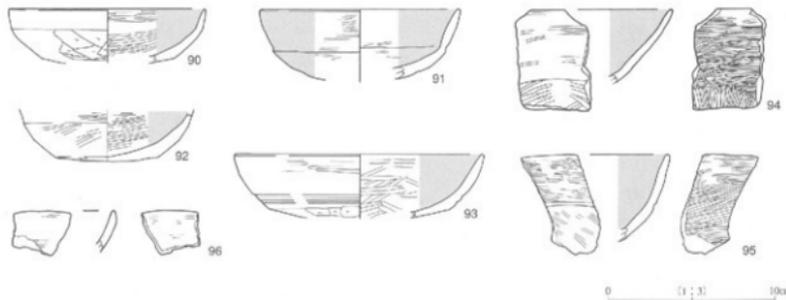
2 検出された遺構・遺物



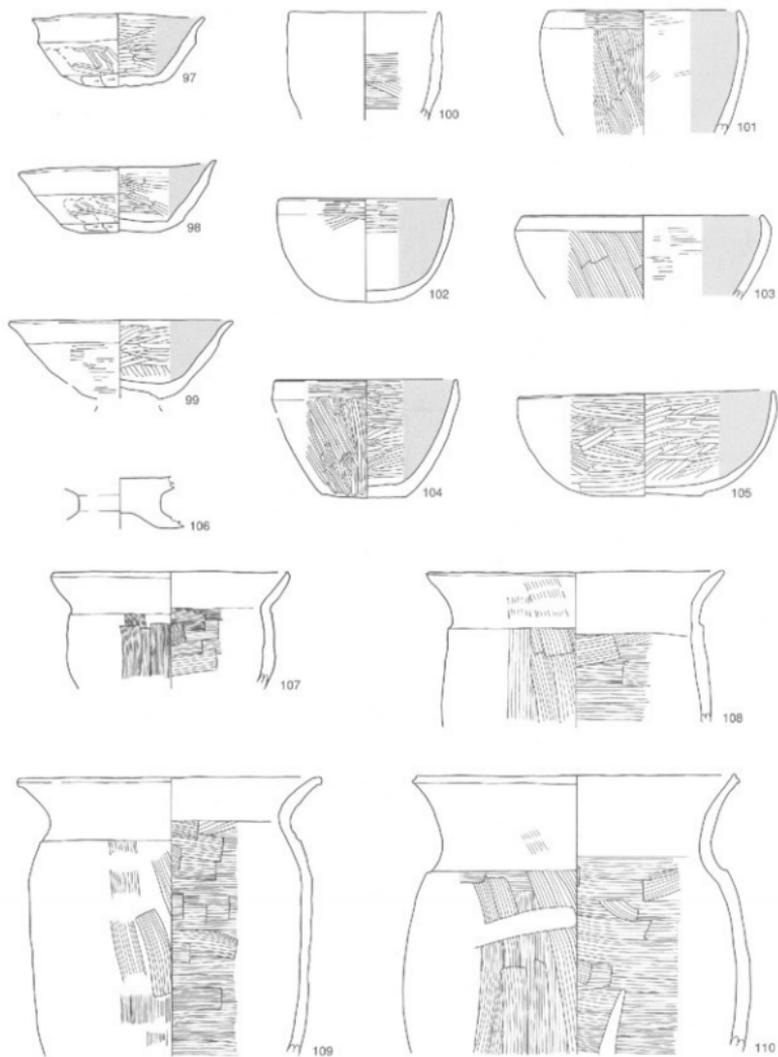
RA098カマド

- | | |
|---|---|
| 1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 14. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。φ3~5cmの焼土を微量含む。 | 15. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 16. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまりやや強い。φ3~5cmの焼土を微量含む。 |
| 4. 黒褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10cmの焼土をやや多く含む。 | 17. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。 |
| 5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。φ3~7cmの焼土・灰化粒を微量含む。 | 18. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性弱く、しまりやや強い。焼土を多く含む。 |
| 6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10cmの焼土・灰化粒を多く含む。 | 19. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性やや弱く、しまりやや強い。湖山崩落土をやや多く含む。 |
| 7. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。 | 20. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱く、しまり強い。湖山崩落土を多く含む。 |
| 8. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 21. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 9. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。 | 22. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 11. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり強い。層積層上。 | 23. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまりやや強い。φ3~5cmの灰化粒を焼土を少量含む。 |
| 12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 24. 灰白色土 (7.5YR8/4) 粘性なし。しまり強い。焼土。 |
| 13. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 25. 灰白色土 (5YR8/1) 粘性なし。しまり強い。焼土。 |
| | 26. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。焼土を副層状に含む。 |

0 (1:25) 10m

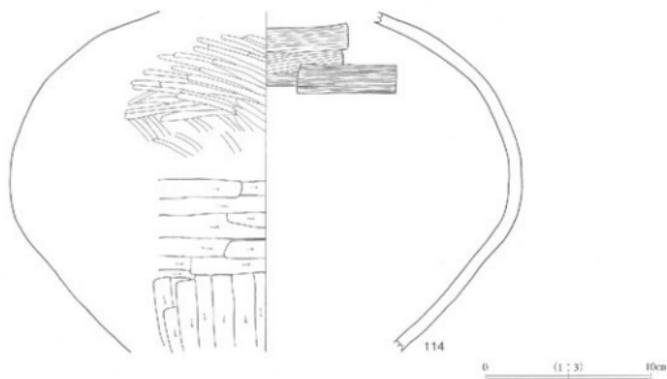
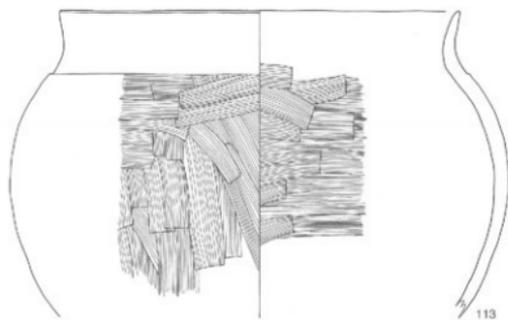
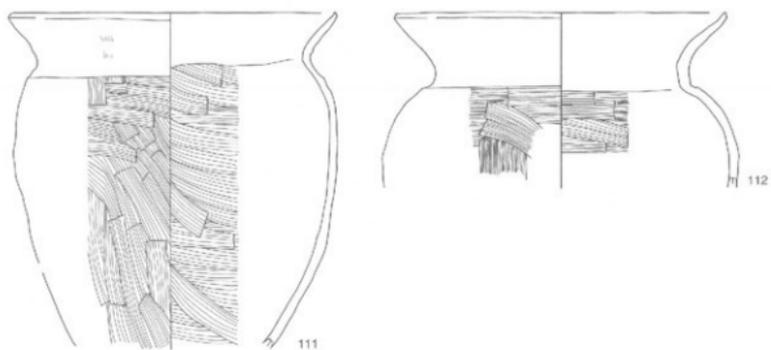


第54図 RA098カマド・出土遺物 (1)

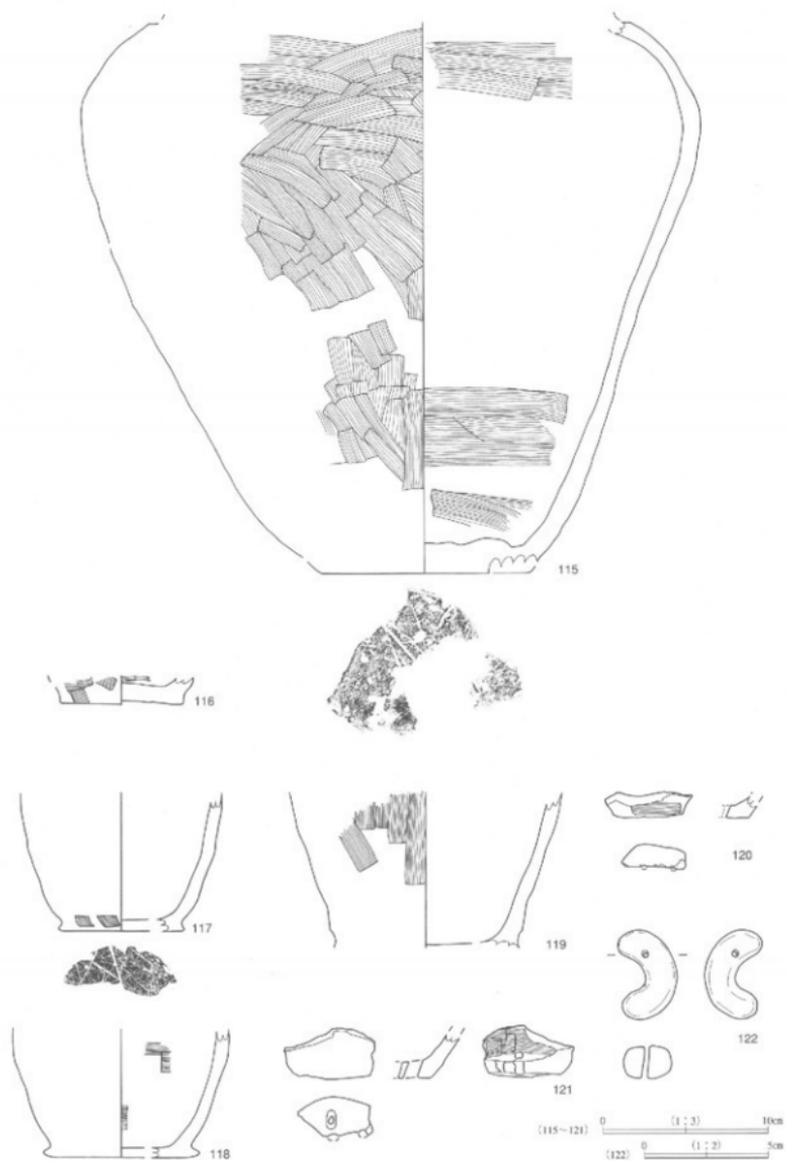


0 (1:3) 10cm

第55図 RA098出土遺物 (2)



第56図 RA098出土遺物 (3)



第57図 RA098出土遺物(4)

[遺構時期] 8世紀前葉に属する。

R A 099 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 L 14d・e、15d・eグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は東西と北へ緩やかに傾斜する段丘縁辺部の斜面上にあり、調査区内で最も標高が高い。北壁から3.5m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 098は南西に5m、R A 100は南に1m、R A 101は東に22m、R A 121は西に19mを測る。南東壁は攪乱により削平されている。

[住居の方向] N-84°-W。北壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は西壁3.79m、北壁4.27m、東壁4.32m、南壁3.88mである。

[堆積上] 黒褐色土主体で8層に細分した。

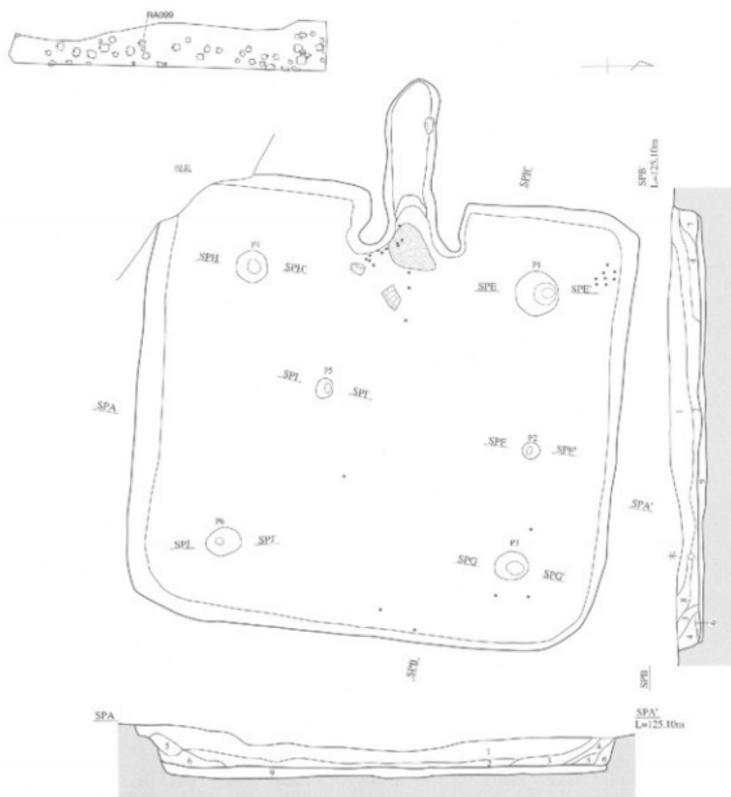
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は残存状況の良い西壁は38cm、他の壁は20cm前後である。床面は暗褐色土が全面に厚く貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の厚さは4~12cm、掘り方はⅥ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-86°-Wである。袖はふい貴褐色土主体に暗褐色土を貼付て構築している。燃焼部は煙道に向かって登っており、平面形は不整形、規模が52×31cm、層厚5cmの焼成面がある。煙道は燃焼部から段差が設けられ、そこから煙り出しに向かって傾斜しており、焼成面から1.52mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。

[土坑・柱穴] 柱穴6個を貼床の掘り下げ時に検出した。P 1・3・4・6は四隅に配置されている。平面形は円形、開口部径は32~45cm、深さは16~22cmである。P 2・5は、北壁と南壁側の柱穴の間に配置されている。平面形は円形をしているものの、規模や平面形状共に先述したものより小さい。それらは規模が異なるものの主柱穴と考えられる。

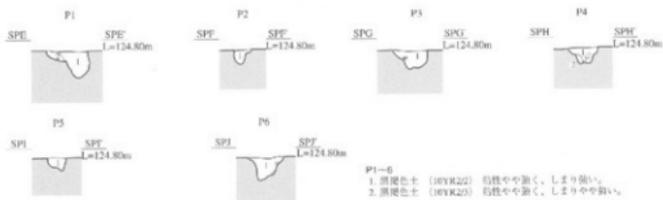
[遺物] 土器347点、礫石器1点が床面から主に出土している。土師器杯・甕はすべて非ロクロである。123・124・127・128は土師器杯。123はI A 2d類。体部下半はケズリとミガキ、口縁部はナデにより整形されている。R A 098において先述したように本類は胎土・色調・製作技法において他のものとは異なる。125・126は土師器鉢。どちらも内面に黒色処理されており皿類である。129~134は土師器甕。口縁部が残存しているものでは、130がA 2類に分類されている以外はすべてA 1類である。135は礫石器Ⅱ類。礫石器以外に礫は2点出土しているが、使用痕跡と被熱が認められない自然礫である。

[遺構時期] 8世紀前葉に属する。

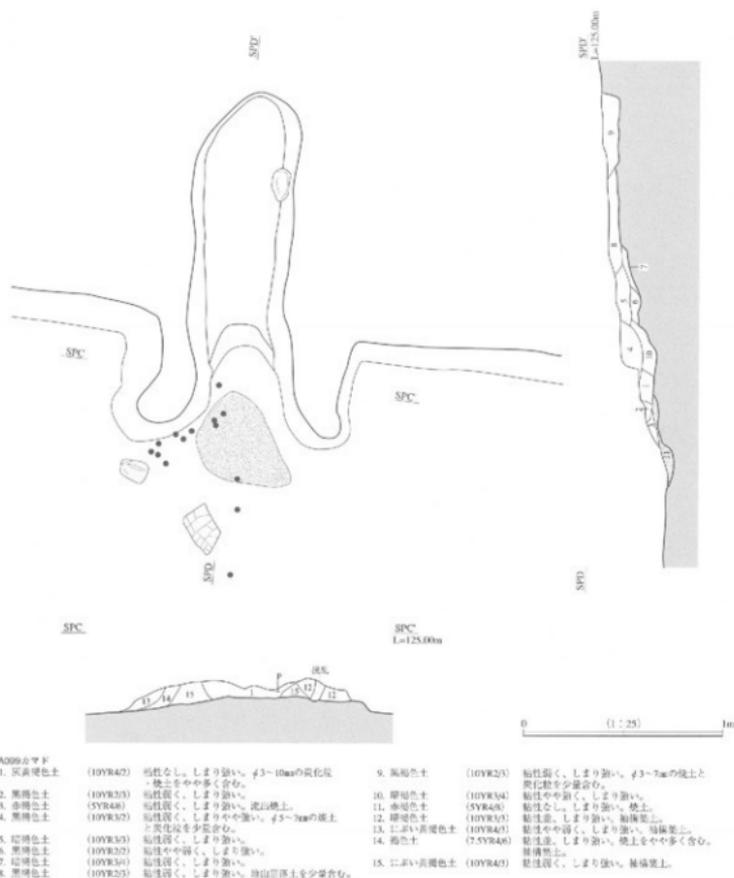


RA099

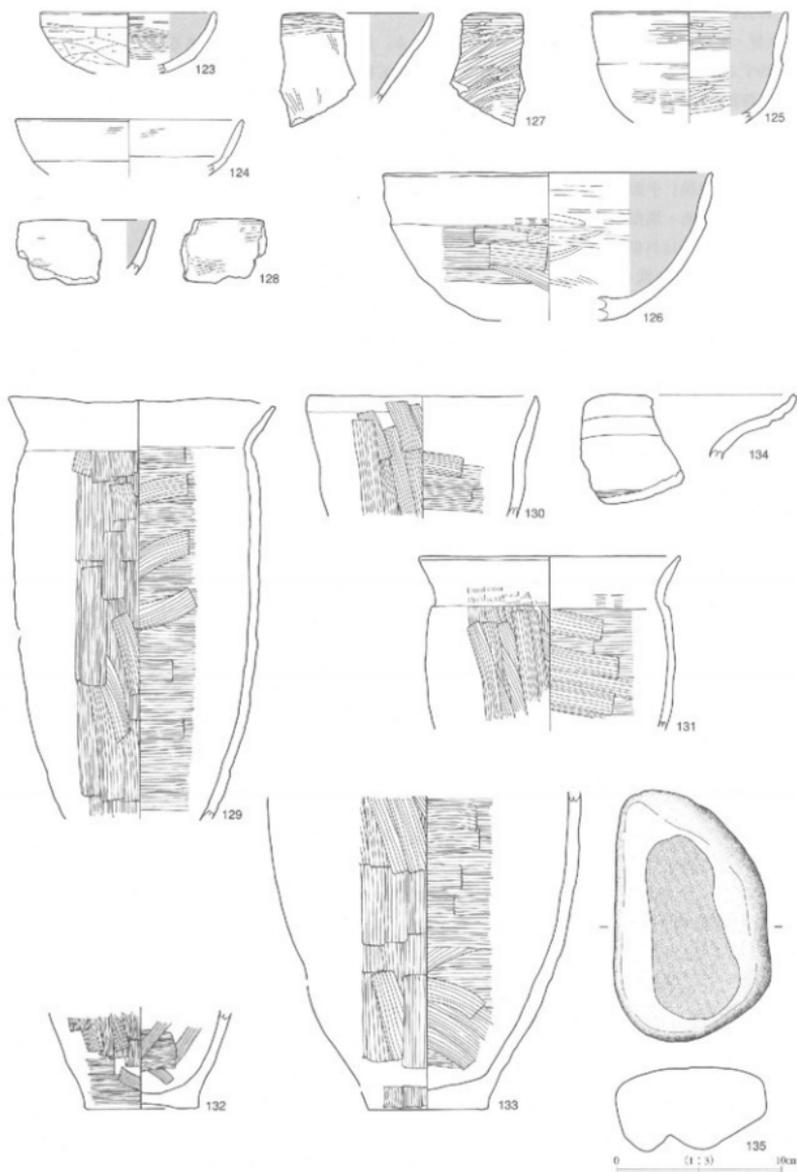
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性や中強く、しまり強い。本層上面に十数個のテフラがブロック状に入る。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強、しまり強い。黒山崩落土を少量含む。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性や中強く、しまりや中強い。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強、しまりや中強い。
6. 暗褐色土 (10YR2/3) 粘性強く、しまり強い。黒山崩落土を多く含む。
7. 灰白色土 (10YR7/1) 粘性強、しまり強い。黒山崩落土を微量含む。
8. 黒色土 (10YR2/1) 粘性や中強く、しまり強い。黒山崩落土を微量含む。
9. 暗褐色土 (10YR2/4) 黒色土をやや多く混入。弱味。



第58図 RA099



第59図 RA099カマド



第60図 RA099出土遺物

R A 100 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 L 17 d・eグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。北と東へ緩やかに傾斜する段丘縁辺部の斜面上にあり、調査区内で最も標高が高い。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 099は北に1m、R A 098は西に6m、R A 101は東に23mを測る。攪乱により西壁の一部と煙道が削平されている。

[住居の方向] N-76°-W。南壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は西壁2.41m、北壁2.25m、東壁2.44m、南壁2.29mである。

[堆積土] 黒色・黒褐色土主体で6層に細分した。

[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は23~31cmである。床面は黒褐色土が貼られて硬くしまり、北壁隅がやや低くなっている。貼床の層厚は2~10cm、床面中央が浅く壁付近が厚い。掘り方はⅥ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-73°-Wである。袖はⅥ層の地山を削り出して構築している。燃焼部は中央が凹み皿状をしており、平面形は不整形、規模が66×55cm、層厚8cmの焼成面がある。煙道は燃焼部から段が設けられ、そこから煙り出しに向かって傾斜しており、焼成面から1.02mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認できないことから掘込式である。

[土坑・柱穴] 検出されなかった。

[遺物] 土器48点、礫2点が床面から出土している。土師器坯と甕はすべて非ロクロである。それらは磨滅しているため図化していない。礫はすべて自然礫である。

[遺構時期] 8世紀代に属すると思われる。

R A 101 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 L 16 q・r、17 q・rグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は北と西に向かって緩やかに傾斜する段丘縁辺部の斜面上にある。北壁から11m北に段丘崖、東壁から約12m東には比高差50cm前後の斜面が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 099は西に23m、R A 100は西に23m、R A 102は北東に6m、R A 105は東に19m、R A 104は東に30mを測る。攪乱により遺構上面と北・南壁の一部が削平されている。

[住居の方向] N-96°-W。南壁を基準としている。

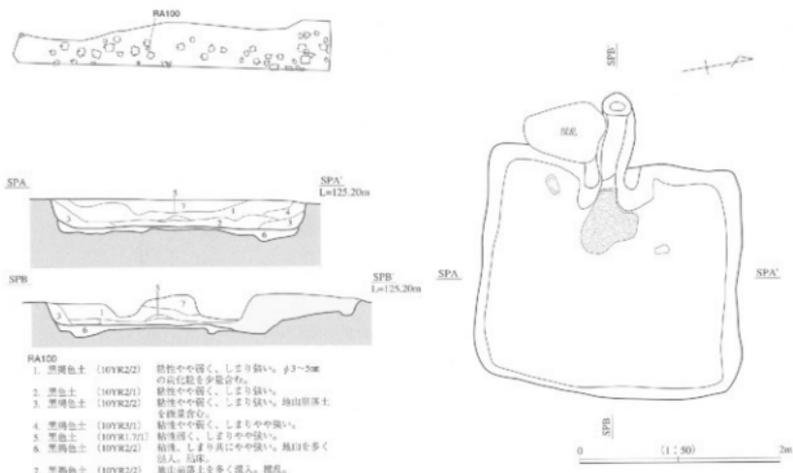
[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は西壁4.78m、北壁4.81m、東壁4.46m、南壁4.89mである。

[堆積土] 黒褐色土である。

[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。残存状況が悪いことから壁は全体的に低く、壁高は8~14cmである。床面は黒色土が全周に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床は層厚4~24cm、掘り方はⅥ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-97°-Wである。袖は削り出した地山に黒褐色土を貼付て構築している。両袖共に構築材が認められ、左袖は礫、右袖は土師器甕を倒立させて配置している。燃焼部は中央が凹み皿状をしており、平面形は不整形、規模が83×71cm、層厚10cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜するように形成され、焼成面から1.78mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認でき、煙道の両脇がオーバーハングしていることから掘込式である。

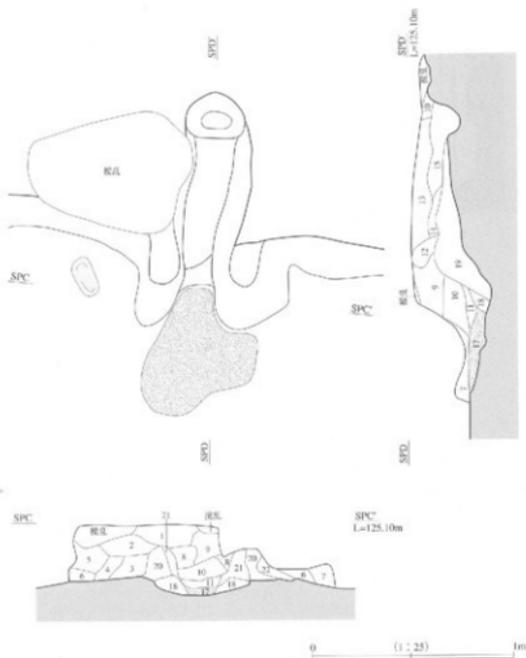
[土坑・柱穴] 柱穴5個を貼床の掘り下げ時に検出した。平面形は円形、開口部径は32~52cm、深さ



- RA100
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。p3-5cmの炭化粒を少量含む。
 2. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱く、しまり強い。
 3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。黒山崩落土を微量含む。
 4. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
 5. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性弱く、しまりの強い。
 6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性、しまり共にやや強い。黒山を多く含む。石灰。
 7. 黒褐色土 (10YR2/2) 黒山崩落土を多く含む。石灰。

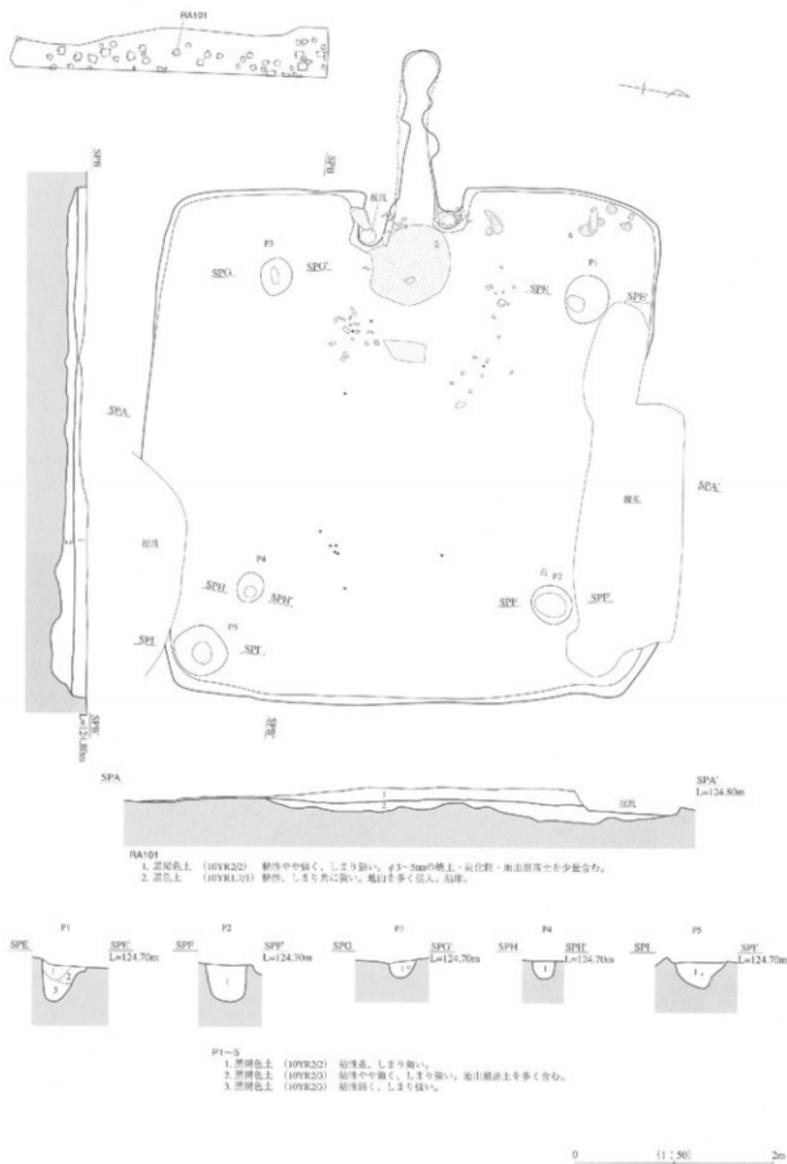
RA100の方

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性やや弱く、しまり強い。p2-5cmの炭化粒を微量含む。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
5. 基本層の1の層と対応。
6. 基本層の2の層と対応。
7. 基本層の3の層と対応。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。黒山崩落土をやや多く含む。炭化粒を微量含む。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
10. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱く、しまり強い。
11. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまりやや強い。p3-5cmの炭化粒を微量含む。
12. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。
13. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。黒山崩落土を微量含む。
14. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。
15. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性やや弱く、しまり強い。
17. 濃い赤褐色土 (5YR4/4) 粘性弱く、しまり強い。炭上。
18. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
19. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。
20. 赤褐色土 (10YR5/6) 粘性弱く、しまり強い。黒山崩落土を微量含む。
21. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。黒山崩落土を微量含む。
22. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性、しまり共に強い。黒山崩落土を多く含む。炭化粒を微量含む。



第61図 RA100

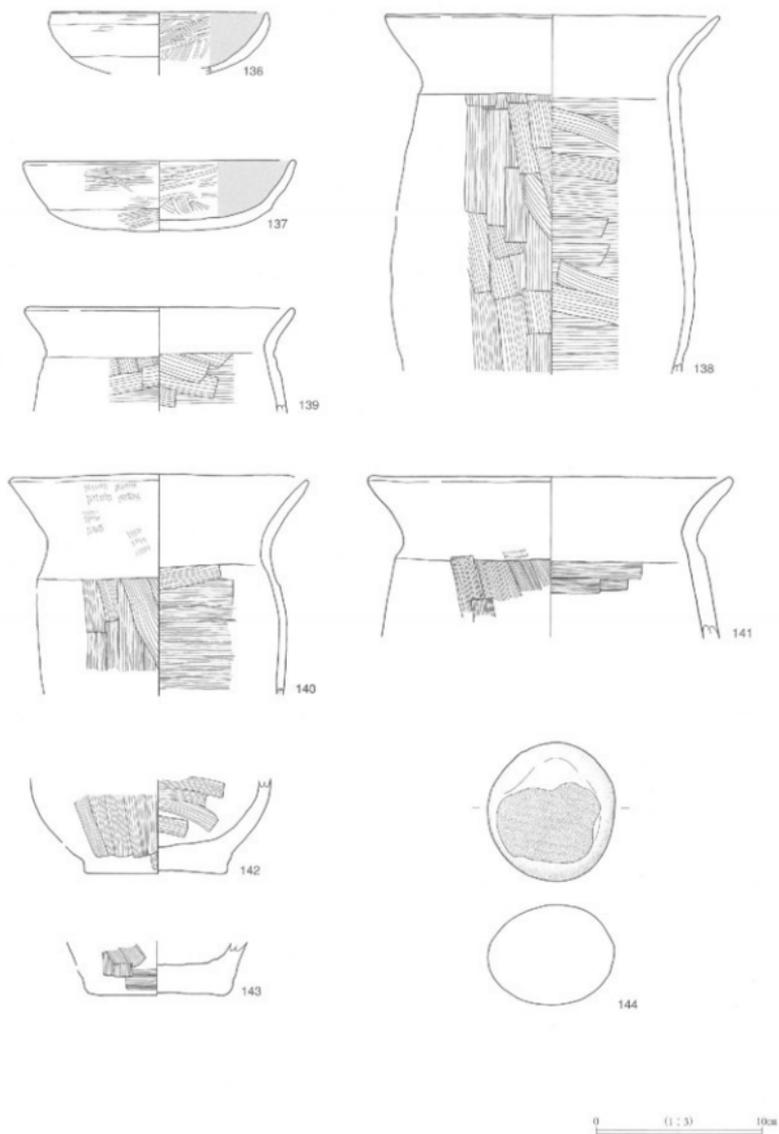
2 検出された遺構・遺物



第62図 RA101



第63図 RA101カマダ



第64図 RA101出土遺物

は15～40cmである。P 4は他の柱穴に比べやや小さいが基本的に平面形と規模共に類似している。P 1～4は住居四隅の対角線上にあることから支柱穴と判断できる。P 5は貯蔵穴として使用された可能性が考えられる。

〔遺物〕土器382点、礫石器2点が床面から出土している。土師器環・甕はすべて非ロクロである。136・137は土師器環。136はI A 1d類、137はI A 1a類である。137は丸底に分類したが他のものと異なり、平底風の形状である。138～140は土師器甕A 1 ii類。頸部に段を有する1類に含めているものの、段は他のものと比べて浅く段部付近の張りがなくなり体部は寸胴である。144は礫石器Ⅱ類。礫石器以外に礫は17点出土しているが、すべて使用痕跡と被熱が認められない自然礫である。

〔遺構時期〕8世紀中葉から後葉に属する。

R A 102 竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕5 L 13v・w、14v・wグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は南東方向から北東へ下る段丘縁辺部の緩斜面上にある。北壁より5m北に段丘崖、東壁より3m東には比高差50cm前後の斜面が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 101は南西に6m、R A 105は南東に13mを測る。攪乱により遺構の大半は削平され、南壁と西壁の一部のみの検出となる。

〔住居の方向〕N-90°-W。南壁を基準としている。

〔平面形・規模〕平面形は残存状況から方形をしていたと思われる。規模は東西3.47×南北3.51mである。

〔堆積土〕黒褐色土主体で7層に細分した。

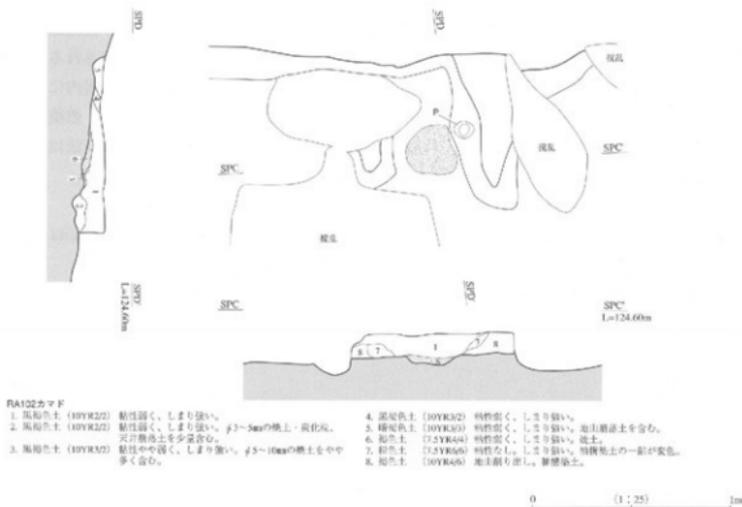
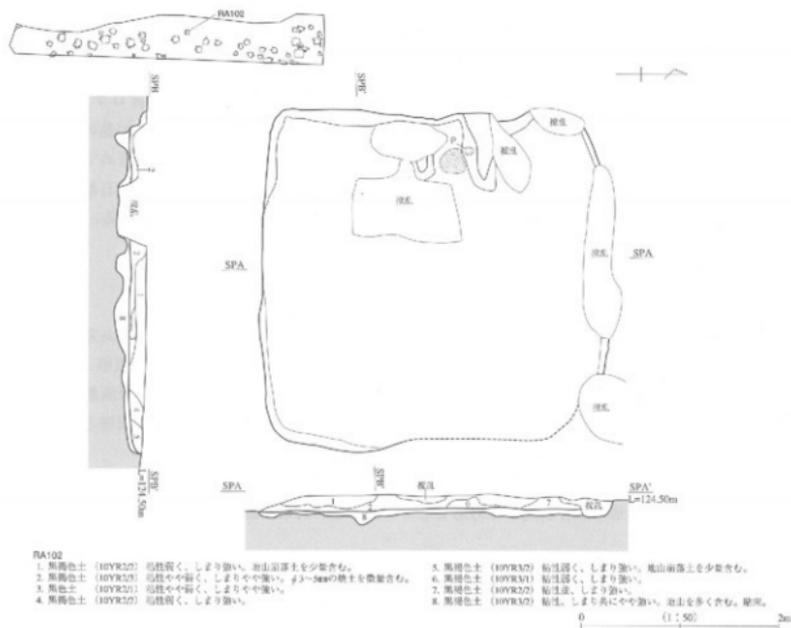
〔壁・床面〕壁は外傾して立ち上がる。西壁の壁高は20cm、それ以外の壁は残存状況が悪く壁高は10cm前後である。床面は地山を多く含む黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、南壁から北壁に向かって傾斜している。貼床の層厚は2～16cm、掘り方はⅤ層を掘り込んで形成されている。

〔カマド〕煙道を中心としたカマドの大半が攪乱により削平されていたものの袖と燃焼部の一部を検出した。西壁中央に設置されている。残存状況から軸線方向はN-92°-Wと推定される。袖は褐色土を貼付て構築している。燃焼部は、概ね中央が凹む皿状をしているが全体的に住居内に向かって緩やかに傾斜しており、平面形は不整形、規模が25×22cm、層厚4cmの焼成面がある。燃焼面の中央よりやや袖寄りに支脚が認められ、土師器甕を倒立させて配置している。煙道構築方法は削平されていることから不明である。

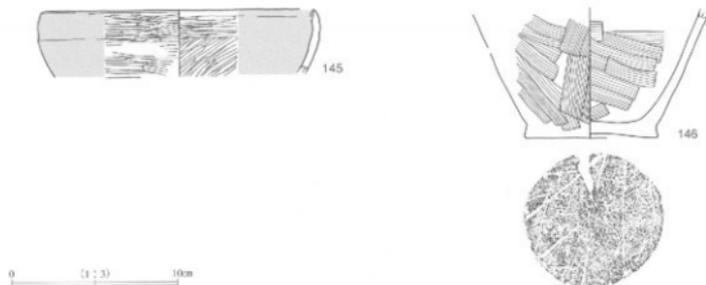
〔土坑・柱穴〕検出されなかった。

〔遺物〕土器26点が床面から出土している。土師器環・甕はすべて非ロクロである。145は土師器鉢Ⅴ類。146は土師器甕。支脚に転用されたもので底部には木炭痕が認められる。

〔遺構時期〕8世紀前葉に属する。



第65図 RA102・カマド



第66図 RA102出土遺物

R A104竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 M17・18グリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。本遺構はやや北に向かって傾斜する段丘縁辺部の平坦部上にある。北西壁から15m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A105は西に5m、R A106は東に15m、R A107は南東に14mを測る。調査以前に宅地が存在していたことと重複している遺構が多いことから残存状況は悪い。

[重複] R D204・R G143と重複し、本遺構が古い。

[住居の方向] N-54°-W。南西壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は北西壁3.11m、南東壁2.99m、南西壁3.52mである。北東壁はR G143に切られているため確認できない。

[堆積土] 黒褐色土主体で4層に細分した。

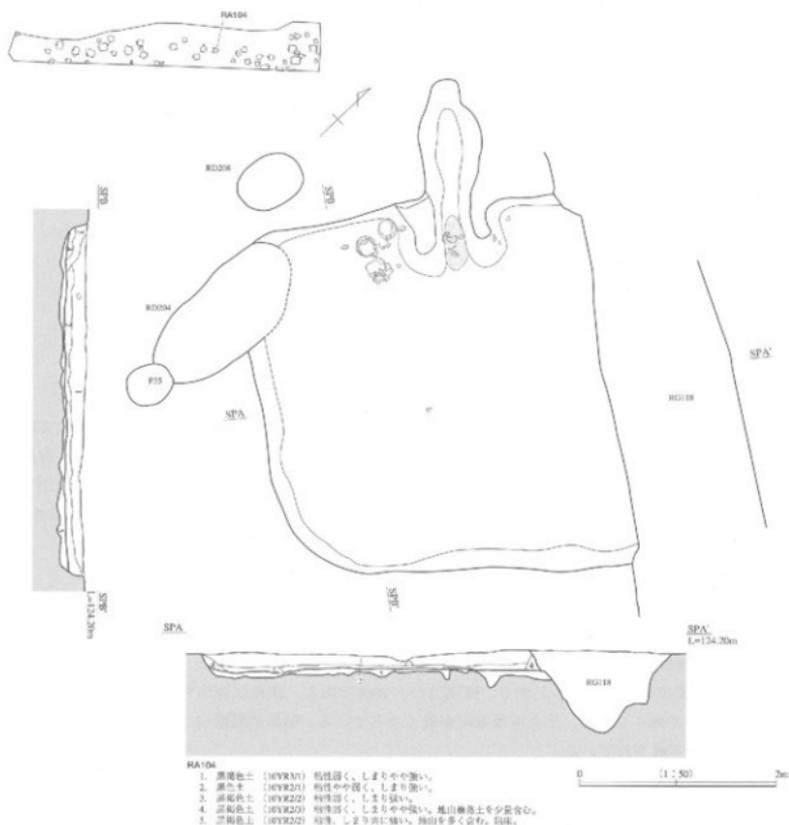
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は11~18cmである。床面は地山を多く含んだ黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、やや南西方向が低くなっている。貼床の層厚は2~18cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。北西壁、中軸線が壁と直角するように設置されている。北東隅が残存していないため設置箇所までは把握できていない。軸線方向はN-50°-Wである。袖は暗褐色土である地山に黒色土と黒褐色土を貼付て構築している。燃焼部は中央が凹み皿状をしており、平面形は楕円形、規模は58×21cm、層厚6cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から1.41mを測る。煙道構築方法は、天井崩落土が確認できなかったことから掘込式である。

[土坑・柱穴] 検出されなかった。

[遺物] 土器31点がカマド左脇の床面から出土している。土師器環・甕はすべて非ロクロである。147・148は土師器環。147はI A1c類、148はII A1c類である。両者は刻書土器である。147は「×」が、148は「罍」が底面に線刻されている。後者は九字である。内外面の色調にも特徴が見られ、前者が一般的な外面は灰褐色で内面黒色処理されているのに対して、後者は内外面共ににぶい褐色をしている。後者は過去の成果においても類例が認められない極めて稀な例である。149・150は土師器甕A1ii類。甕は2点出土しているが、使用痕跡が認められない自然窯である。

[遺構時期] 8世紀前葉に属する。



第67図 RA104

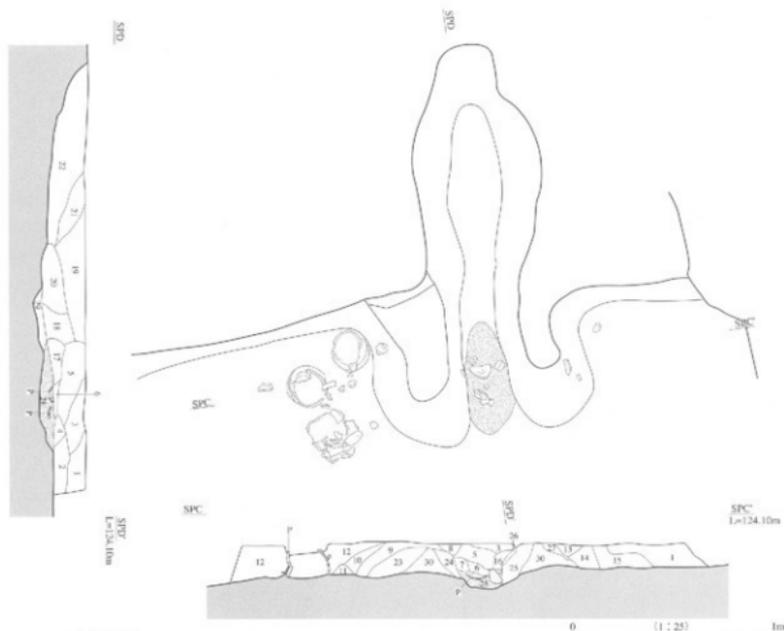
R A 105竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕 5 M16d・e、17d・e、18d・eグリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。本遺構は北に向かって緩やかに傾斜しく段丘縁辺部の平坦部上にある。北壁から12m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 101は西に19m、R A 102は北西に13m、R A 104は東に5mを測る。調査開始以前に本遺構の上に宅地が存在していたことと攪乱により西壁・南壁は一部削平されていることから残存状況は悪い。

〔住居の方向〕 N-7°-W。平面形状から計測できないためカマドの軸線を表記している。

〔平面形・規模〕 平面形は北西隅付近が他の箇所と異なり凹凸が見られるものの概ね楕円形である。他に見られるような隅を本遺構では検出できなかった。規模は南北4.81m×東西4.61mである。

〔堆積土〕 黒褐色土主体で4層に細分した。



RA104カマド

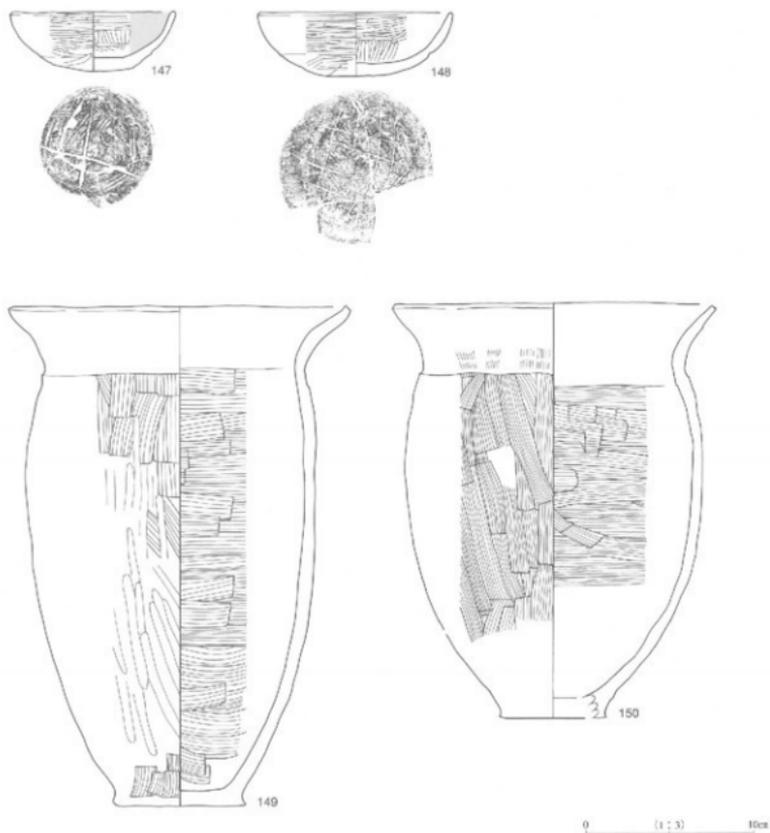
- | | | |
|----------|---------|----------------------------------|
| 1. 黒褐色土 | (HOVR2) | 粘性弱く、しまりや強い。 |
| 2. 黒色土 | (HOVR7) | 粘性やや強く、しまり強い。 |
| 3. 黒色土 | (HOVR3) | 粘性強、しまり強い。φ3-5mmの焼土と炭化灰を少量含む。 |
| 4. 黒褐色土 | (HOVR2) | 粘性弱く、しまりや強い。 |
| 5. 黒色土 | (HOVR2) | 粘性弱く、しまりや強い。φ5-15mmの焼土と炭化灰を多く含む。 |
| 6. 黒色土 | (HOVR7) | 粘性強く、しまり強い。 |
| 7. 黒褐色土 | (HOVR2) | 粘性弱く、しまりや強い。 |
| 8. 黒色土 | (HOVR7) | 粘性強く、しまり強い。φ5-10mmの焼土を少量含む。 |
| 9. 黒色土 | (HOVR7) | 粘性強く、しまり強い。 |
| 10. 黒褐色土 | (HOVR2) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 11. 黒褐色土 | (HOVR3) | 粘性強く、しまり強い。 |
| 12. 黒褐色土 | (HOVR3) | 粘性強く、しまりや強い。 |
| 13. 黒色土 | (HOVR7) | 粘性強く、しまりや強い。φ5-10mmの焼土を少量含む。 |
| 14. 黒色土 | (HOVR7) | 粘性強く、しまりや強い。φ5-15mmの炭化灰を少量含む。 |

- | | | |
|-----------|----------|--------------------------------------|
| 15. 黒色土 | (HOVR3) | 粘性強く、しまりや強い。 |
| 16. 黒褐色土 | (HOVR3) | 粘性やや強く、しまり強い。φ3-5mmの焼土と炭化灰を少量含む。灰海上。 |
| 17. 黒色土 | (HOVR4) | 粘性、しまり共に強い。天井灰海上。 |
| 18. 黒褐色土 | (HOVR2) | 粘性強、しまりや強い。 |
| 19. 黒色土 | (HOVR3) | 粘性やや強く、しまりや強い。 |
| 20. 黒褐色土 | (HOVR3) | 粘性強く、しまりや強い。 |
| 21. 黒褐色土 | (HOVR3) | 粘性強、しまりや強い。 |
| 22. 黒褐色土 | (HOVR2) | 粘性やや強く、しまりや強い。 |
| 23. 黒色土 | (HOVR2) | 粘性、しまり共にや強い。焼物跡上。 |
| 24. 黒褐色土 | (7.SVR3) | 粘性、しまり共に強い。層積層上。 |
| 25. 黒褐色土 | (HOVR2) | 粘性、しまり共に強い。層積層上。 |
| 26. 灰黄褐色土 | (HOVR5) | 粘性、しまり共に強い。層積層上。 |
| 27. 黒褐色土 | (HOVR2) | 粘性強、しまり強い。焼物跡上。 |
| 28. 黒色土 | (7.SVR4) | 粘性強く、しまり強い。焼土。 |
| 29. 黒褐色土 | (7.SVR2) | 粘性強、しまり強い。φ3-5mmの焼土を少量含む。カマド跡上。 |
| 30. 黒褐色土 | (HOVR3) | 粘性強く、しまり強い。焼土。 |

第68図 RA104カマド

[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は11~16cmである。床面は地山を多く含む黒褐色土が全面に貼られてややしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は4~24cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。貼床の薄い所では隙層が確認できる。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。北壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-7°-Wである。袖は暗褐色土と黒褐色土を貼付て構築している。燃焼部は中央が凹んでいるが煙道に向かってやや登り、平面形は楕円形、規模が1.16×0.38m、層厚6cmの焼成面がある。燃焼部のやや右袖寄りに支脚が認められ、方形の隙を直立させて配置している。煙道は燃焼部から煙り出しに向かって下のように形成され、焼成面から1.11mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認できないことから掘込式である。

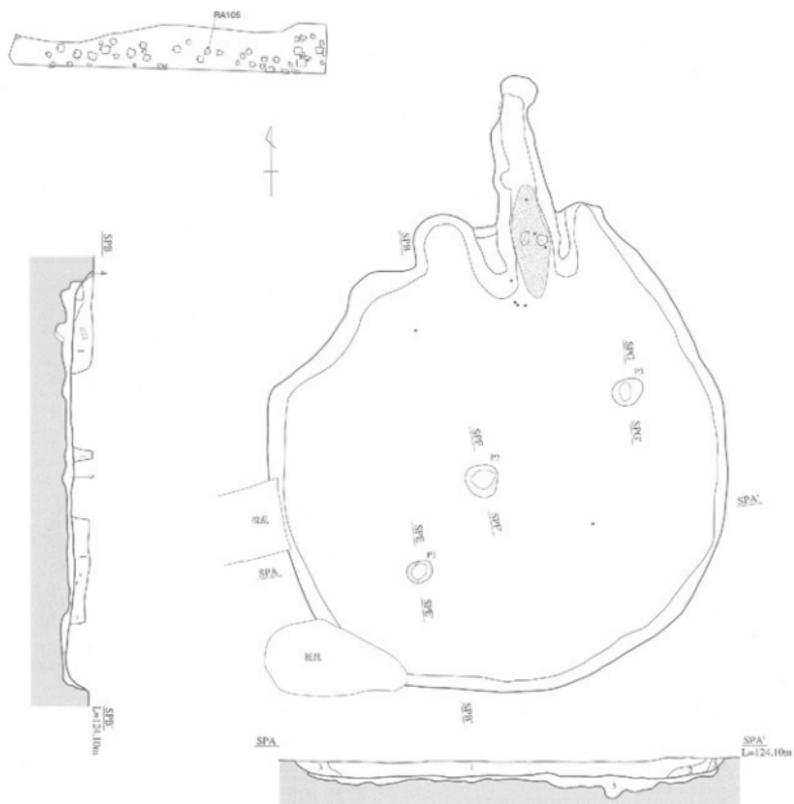


第69図 RA104出土遺物

[土坑・柱穴] 柱穴3個を貼床の掘り下げ時に検出した。平面形・規模共に類似しており、開口部径は約30cm、深さは約20cmである。それらの配置からP1・3が主柱穴となる可能性がある。

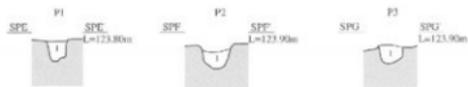
[遺物] 土器23点、礫石器1点が床面から出土している。151～154は非ロクロの土師器杯。I A類が主体をなしており、151のように内面が黒色処理されず体部に段が存在しないII A2c類も含まれている。155は礫石器Ⅲ類。礫石器以外に礫は3点出土しているが、すべて被熱が認められない自然礫である。また、西壁付近では炭化米がまとまって出土しており、分析の結果、熱帯ジャボニカと温帯ジャボニカであった。詳細は296頁に報告している。

[遺構時期] 8世紀前葉に属する。



RA105

1. 赤褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや強い。
2. 赤色土 (10YR1/1) 粘性やや強く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。崖山崩落土も少量含む。
4. 黄褐色土 (10YR3/3) 粘性弱く、しまりやや強い。
5. 黄褐色土 (10YR2/5) 粘性やや強く、しまり強い。片麻。

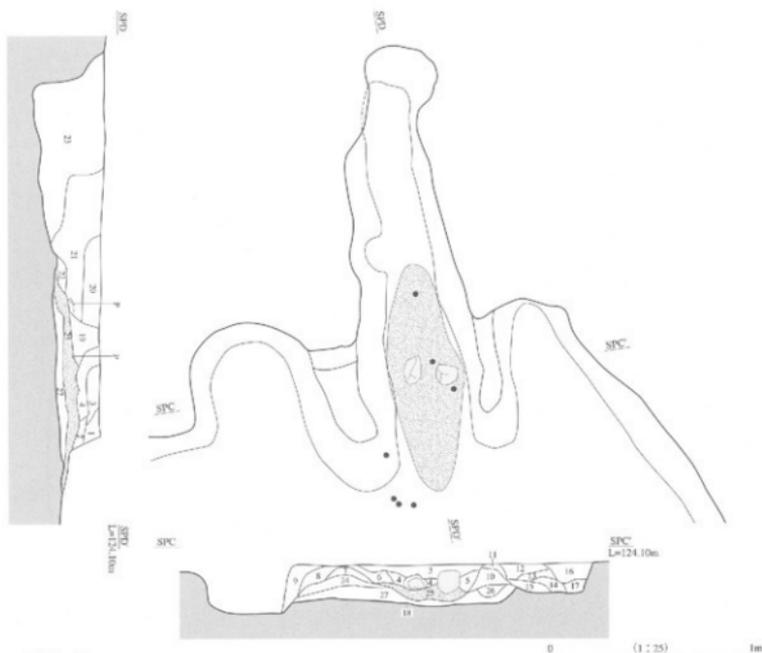


RA105pit

1. 赤褐色土 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。

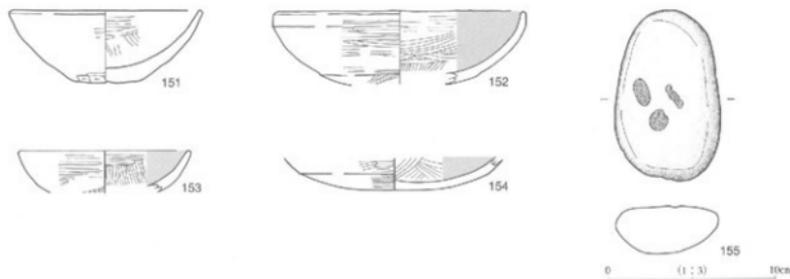
0 (1:50) 2m

第70図 RA105

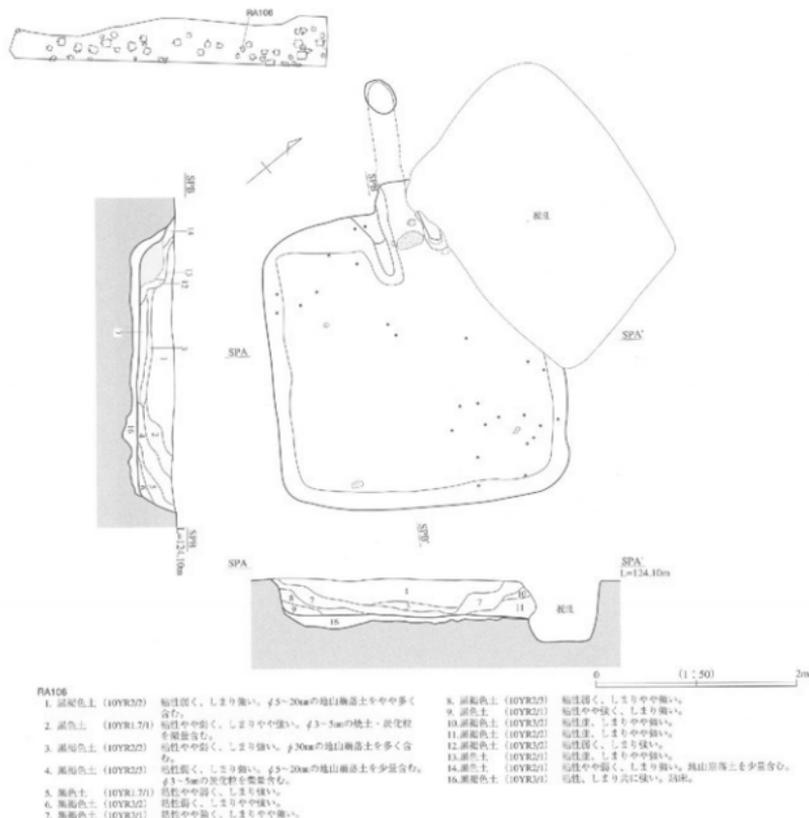


RA105カマド

- | | | | |
|---------------------|------------------------------------|---------------------|----------------------------------|
| 1. 黒色土 (10YR2/1) | 粘性弱く、しまりや中強い。 | 15. 黒褐色土 (10YR3/3) | 粘性、しまり共に強い。β5-7mmの炭化灰を散見含む。 |
| 2. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性やや強く、しまり弱い。 | 16. 赤茶褐色の2層に付定。 | |
| 3. 黒色土 (10YR2/1) | 粘性弱、しまりや中強い。 | 17. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性やや強く、しまり強い。黒山岳赤土を少量含む。 |
| 4. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性やや弱く、しまりや中強い。β3-5mmの炭上・炭化灰を散見含む。 | 18. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性やや強く、しまり強い。β3-5mmの粘土・炭に灰を少量含む。 |
| 5. 黒褐色土 (10YR2/1) | 粘性やや弱く、しまりや中強い。 | 19. 黒色土 (10YR1/2.1) | 粘性、しまり共に中強い。 |
| 6. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性弱、しまりや中強い。元井瀬赤土をプロットに少量含む。 | 20. 黒色土 (10YR1/2.1) | 粘性、しまり共に中強い。 |
| 7. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性、しまり共に強い。粘質粘土。 | 21. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性、しまり共に中強い。 |
| 8. 黒色土 (10YR1/2.1) | 粘性、しまり共に中強い。 | 22. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性やや弱く、しまりや中強い。 |
| 9. 赤茶褐色の層に付定。 | | 23. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱、しまりや中強い。 |
| 10. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性、しまり共に強い。粘質粘土。 | 24. 灰褐色土 (10YR3/5) | 粘性、しまり共に強い。雑質粘土。 |
| 11. 7と同じ | | 25. 赤褐色土 (5YR4/6) | 粘性弱く、しまり弱い。炭土。 |
| 12. 黒色土 (10YR1/2.1) | 粘性やや弱く、しまり強い。 | 26. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 13. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性弱、しまり強い。 | 27. 灰褐色土 (10YR3/5) | 粘性弱、しまり弱い。カマド裏り方。 |
| 14. 黒色土 (10YR1/2.1) | 粘性、しまり共に中強い。 | | |



第71図 RA105カマド・出土遺物



第72図 RA106

R A106竪穴住居跡

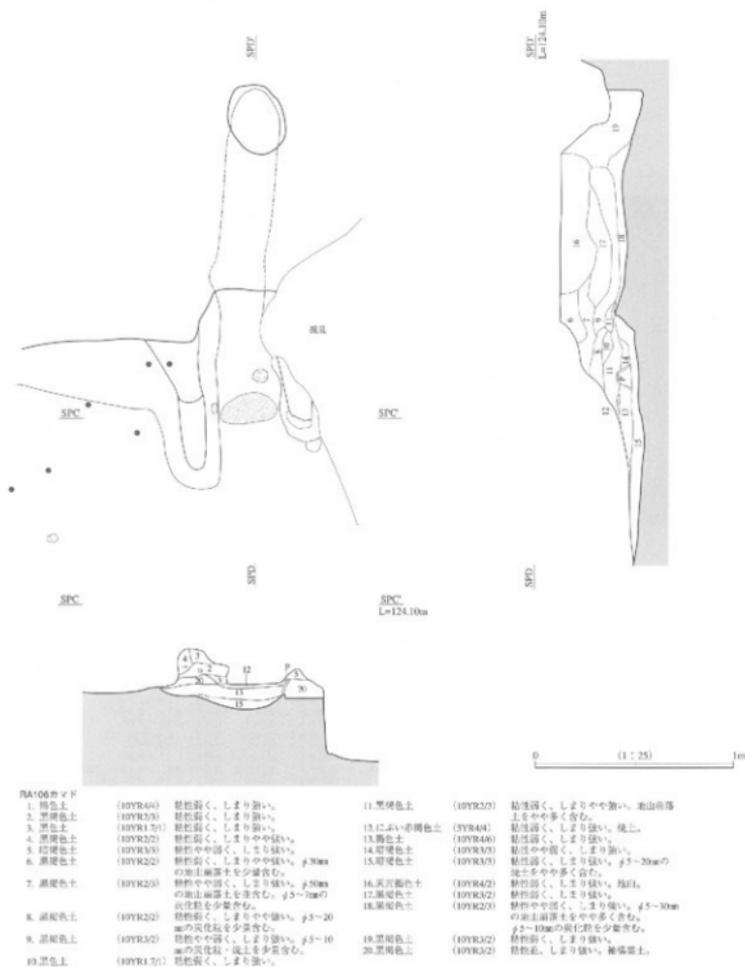
[位置・検出層位] 5 M20s・メグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は東と北に向かって緩やかに傾斜していく段丘縁辺部の斜面上にある。北東壁から18m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A104は西に15m、R A107は南西に3m、R A123は南東に14mを測る。攪乱により北西隅が削平されている。

[住居の方向] N-59°-W。南西壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は北西壁1.47m、北東壁1.08m、南東壁2.77m、南西壁2.49mである。

[堆積土] 黒色土・黒褐色土が主体で14層に細分した。

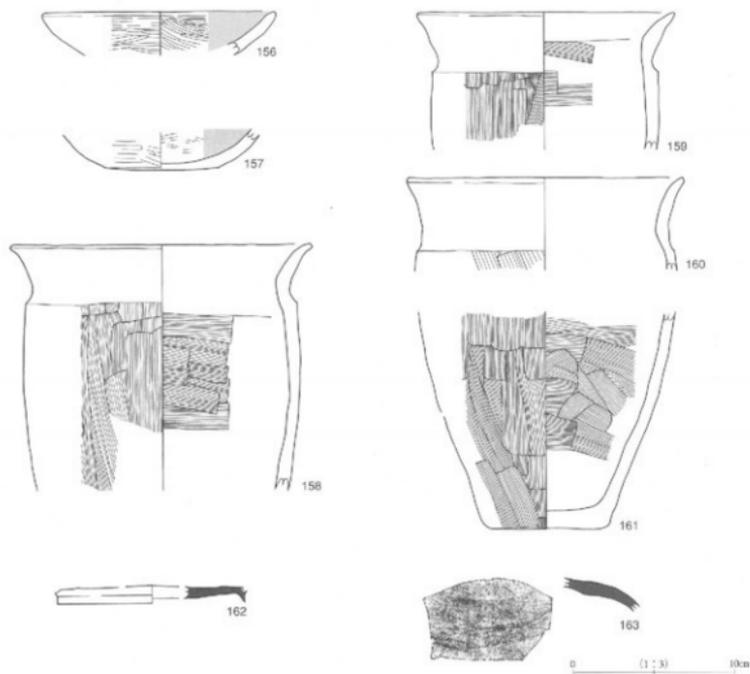
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は34~40cm、壁の残存状況は周辺の遺構に比べて攪乱さ



第73図 RA106カマド

れていないことから良好である。床面は黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は6~15cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。北西壁中央、中軸線が壁とやや斜交するように設置されている。軸線方向はN-62°-Wである。袖は黒褐色土を貼付て構築しており、右袖の先端には構築材として土師器壺を倒立させて配置している。燃焼部はほぼ平坦、平面形は楕円形、規模が28×16cm、



第74図 RA106出土遺物

層厚 2 cm の焼成面がある。燃焼部中央より右袖寄りで支脚が認められ、土師器甕を倒立させて配置している。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜するように形成され、支脚から 1.48m を測る。煙道構築方法は列拔式である。

〔土坑・柱穴〕土坑や柱穴は確認されなかった。

〔遺物〕土器 72 点がカマド周辺の床面から出土している。土師器・甕はすべて非ロクロである。156・157 は土師器環Ⅰ類。158～161 は土師器甕。158、159 は A1 ii 類、160 A1 iii 類である。161 は甕の底部で口縁部が欠損している。支脚として用いられたものである。162 は須恵器蓋。163 は須恵器甕。礫は床面から 2 点出土しているが、使用痕跡と被熱が認められない自然礫である。

〔遺構時期〕8 世紀代に属すると思われる。

R A107 竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕5 M22q・r、23q・r グリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。本遺構は北に緩やかに登る段丘縁辺部の斜面上にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A106 は北東に 3m、R A104 は北西に 14m、R A123 は東に 17m を測る。R D213 と重複しているうえに、遺構上半部を強く削平されていることから残存状況は悪く、本遺構はほぼ床面のみの精査となる。

[重複] R D213と重複し、本遺構の方が古い。

[住居の方向] N-13°-W。東壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は北壁2.26m、東壁2.55m、南壁1.76m、西壁0.74mである。

[堆積土] 黒色土主体で4層に細分した。

[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は6~8cm、残存状況が悪く北西隅はほぼ床面のみ確認となる。床面は黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、西壁側が僅かに低くなっている。貼床の層厚は2~20cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 遺構上半部が削平されていることから燃焼部と煙道のみを検出であった。北壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-3°-Wである。燃焼部はほとんど確認できなかったが、平面形は不整形、規模が56×52cm、層厚4cmの焼成面が残存していた。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜するように形成され、焼成面から95cmを測る。煙道構築方法は残存状況が悪いことから構築方法は不明である。カマドの掘り方に土師器環が倒立した状態で埋設されていたことが確認できた。

[土坑・柱穴] 柱穴2個を貼床の掘り下げ時に北東・南東隅で検出した。P1・2は、平面形は円形、開口部径は38~40cm、深さは10~20cmである。各隅に配置されていることと同一の平面形状であることから主柱穴と考えられる。

[遺物] 土器31点が床面から出土している。図化できたのは1点のみである。164は非クロロの土師器環。カマドの掘り方から底部を上にして出土している。底部には「×」の線刻がある。礫は5点出土しているがすべて自然礫である。

[遺構時期] 8世紀中葉から後葉に属する。

R A108竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 N11r・s、12r・sグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は北に向かって緩やかに傾斜していく段丘縁辺部の斜面上にある。北西壁から9m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A109は南西に7m、R A125は東に4m、R A126は南東に17mを測る。攪乱により北西隅や南東壁の一部が削平されている。

[住居の方向] N-42°-W。北東壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は南東壁1.57m、北西壁2.25m、北東壁2.58m、南西壁2.75mである。

[堆積土] 黒色土・黒褐色土主体で7層に細分した。

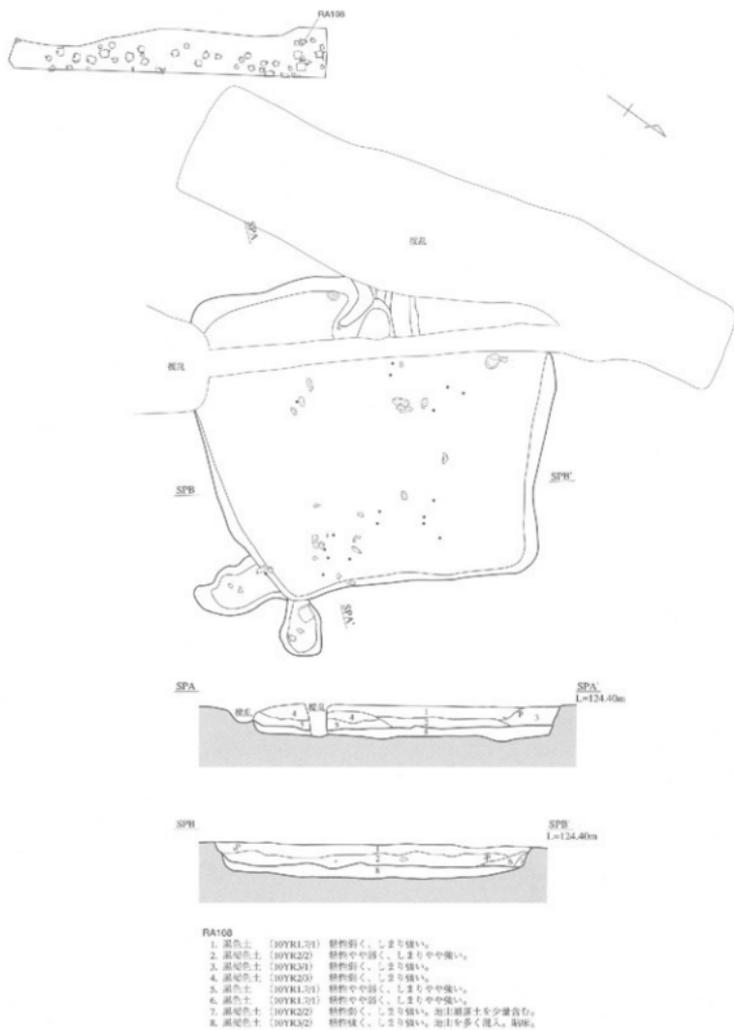
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は18~22cm、攪乱を受けている南東壁の壁高のみ2~8cmである。床面は黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、南東壁側に向かって緩やかに傾斜している。貼床の層厚は6~18cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。カマドがそれぞれ異なる壁で設置されていることから、それに伴い床面は再構築されていたと考えられる。

[カマド] 南西壁に1基、北東隅に2基が設置されている。北西壁のカマドを1号カマド、南東壁のカマドを2・3号と付している。1号カマドは袖と燃焼部、2・3号カマドは煙道のみを検出した。

1号カマドは、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-118°-Wである。袖は攪乱により大半が削平されている。確認できた袖は地山に黒濁土を貼付て構築している。燃焼部は中央がやや凹み皿状をしているが焼成面は確認されなかった。煙道構築方法は不明である。

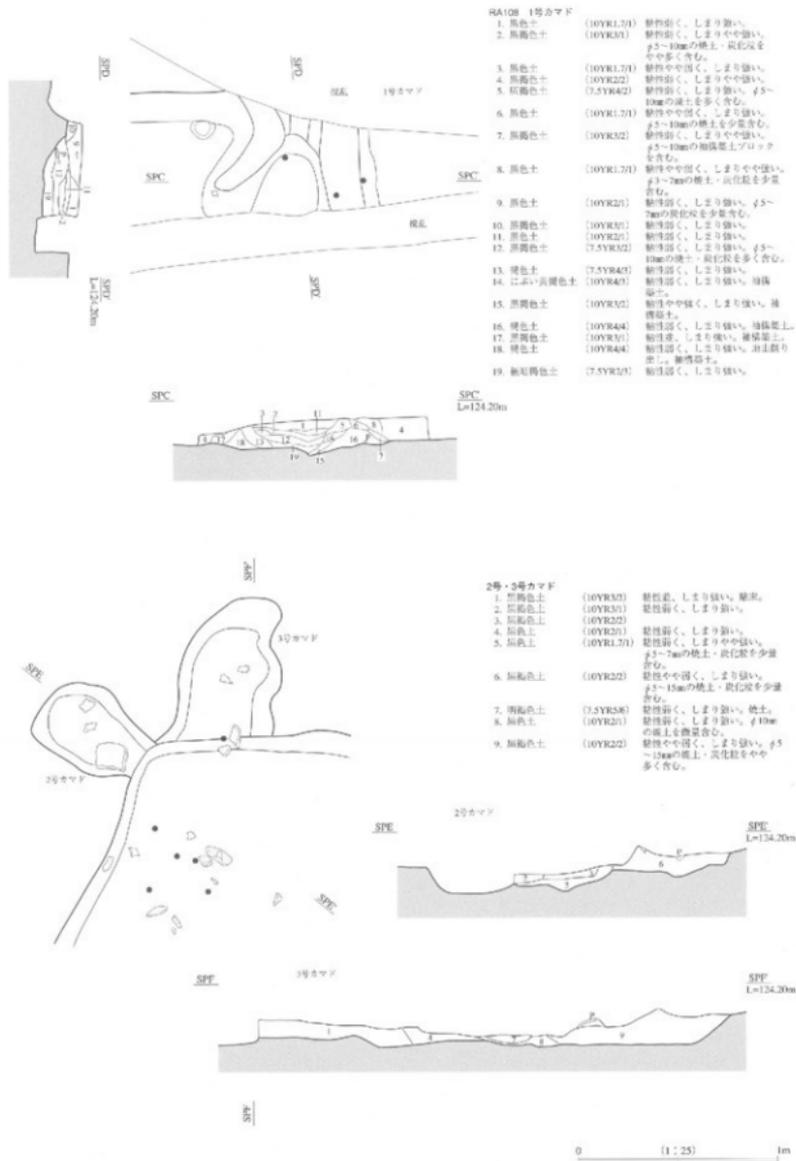
2号カマドは、中軸線が壁と斜交するように設置されている。軸線方向はN-41°-Eである。煙

2 検出された遺構・遺物

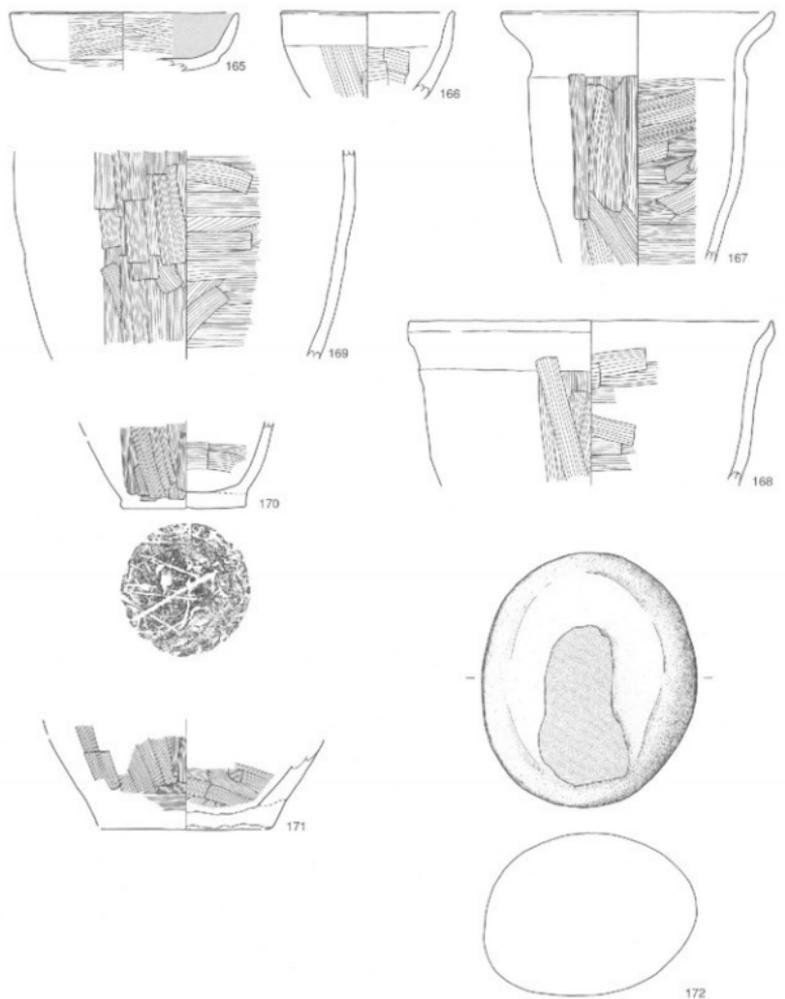


0 (1 : 50) 2m

第76図 RA108



第77図 RA108カマド



0 (1:3) 10cm

第78図 RA108出土遺物

道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜しており、壁から56cmを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。

3号カマドは、中軸線が壁と斜交するように設置されている。軸線方向はN-117°-Eである。煙道は煙り出しに向かってほぼ平坦に形成され、壁から72cmを測る。煙道構築方法は2号カマドと同じである。

[土坑・柱穴] 検出されなかった。

[遺物] 土器267点、礫石器1点が床面から出土している。土師器杯・鉢、甕はすべて非クロコである。165は土師器杯I A1a類。A類に分類したが平底風の形状に近いと思われる。166は土師器鉢皿類。167～171は土師器甕。すべてA類である。172は礫石器Ⅱ類。礫石器以外に礫は14点出土しているが、すべて自然礫である。これらの礫には被熱されているものもあることから、カマド構築材に用いられたものが含まれていると思われる。

[遺構時期] 8世紀中葉から後葉に属する。

R A109竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 N17p・q、18p・qグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。本遺構は北に向かって緩やかに傾斜していく段丘縁辺部の平坦面上にある。北壁から18m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A108は北に7m、R A118は南西に8m、R A125は北東に12m、R A126は東に17mを測る。

[重複] R A128と重複しており、本遺構の方が古い。

[住居の方向] N-88°-W。北壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は西壁5.52m、北壁5.56m、東壁3.71m、南壁3.99mである。

[堆積土] 黒色土・黒褐色土主体で14層に細分した。埋土上層である1・2層中から土和田aテフラがブロック状に堆積していた。

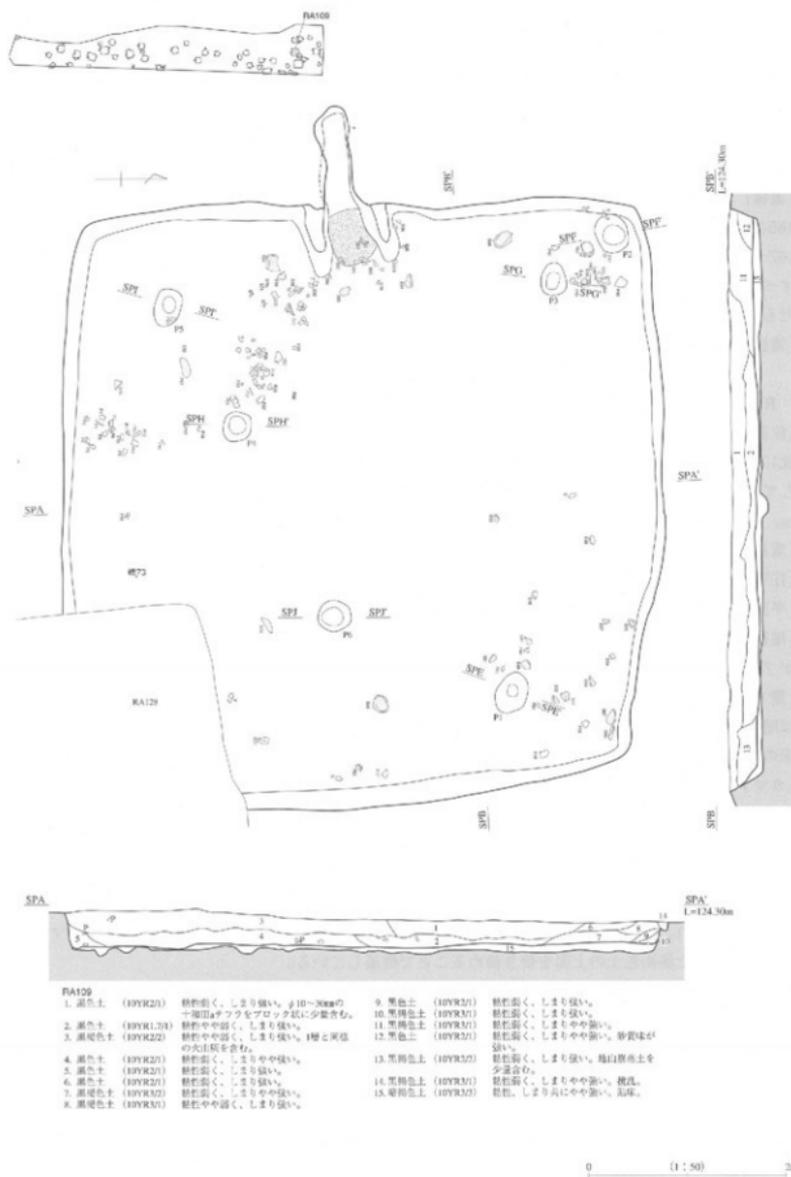
[壁・床面] 壁は概ね外傾して立ち上がり、南壁のみ垂直気味である。壁高は22～34cmである。床面は暗褐色土が全面に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦であるものの南東方向がやや低くなっている。貼床の層厚は1～14cm、掘り方はⅤ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 西壁中央、中軸線が壁とやや斜交するように設置されている。同一箇所において作り替えが行われていることを確認できた。新しいカマドを1号、古いものを2号と付している。

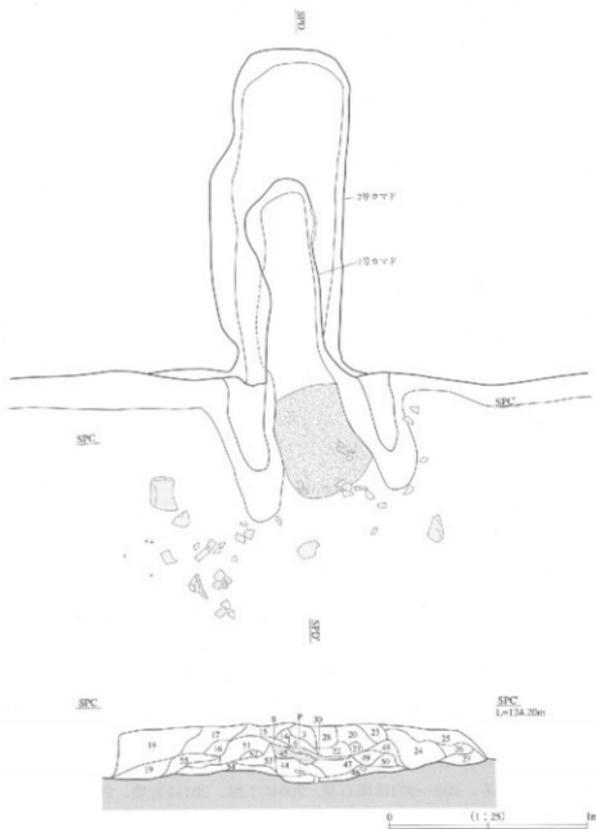
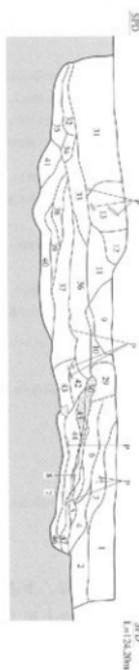
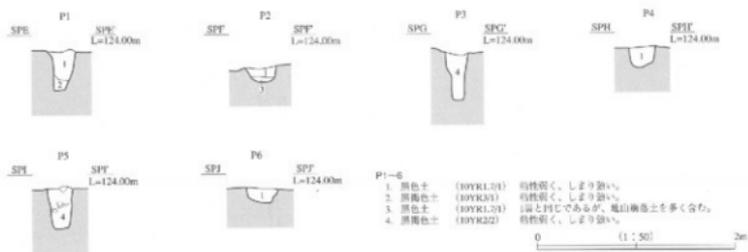
1号カマドは軸と燃焼部、煙道を検出した。軸線方向はN-95°-Wである。軸はにぶい黄褐色土と黒褐色土を貼付て構築している。燃焼部は中央が凹んでいるが住居内へ緩やかに傾斜しており、平面形は楕円形、規模が58×52cm、層厚4cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から1.07mを測る。煙道構築方法は掘込式である。本カマドは2号カマドの煙道に堆積した黒褐色土の上面を焼き締めることで構築している。

2号カマドは煙道を検出した。軸線方向は1号カマドと同様である。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜して形成され、1号カマドの煙道より67cm長い。煙道構築方法は天井崩落土が確認できないことから掘込式である。

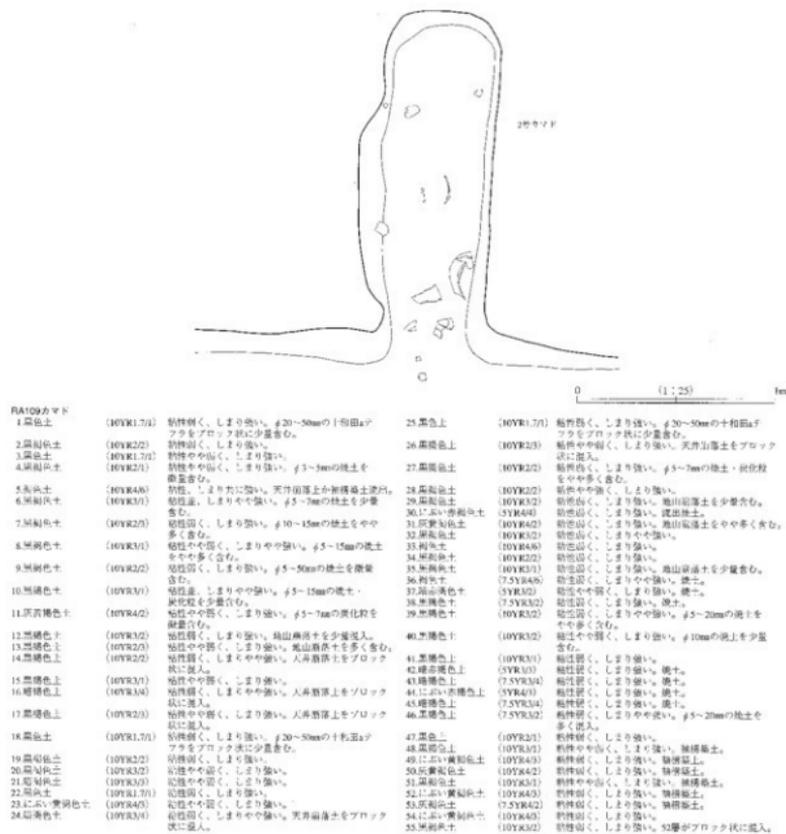
[土坑・柱穴] 柱穴6個を貼床の掘り下げ時に検出した。これらの平面形は円形ないし楕円形である。開口部径は32～44cmとほぼ同一径であるが、深さは20cm以下と40cm前後のものに分けられる。柱穴の深さは、前者がP2・4・6、後者がP1・3・5である。後者は住居四隅の対角線上に配置されていることから主柱穴と考えられる。



第79図 RA109

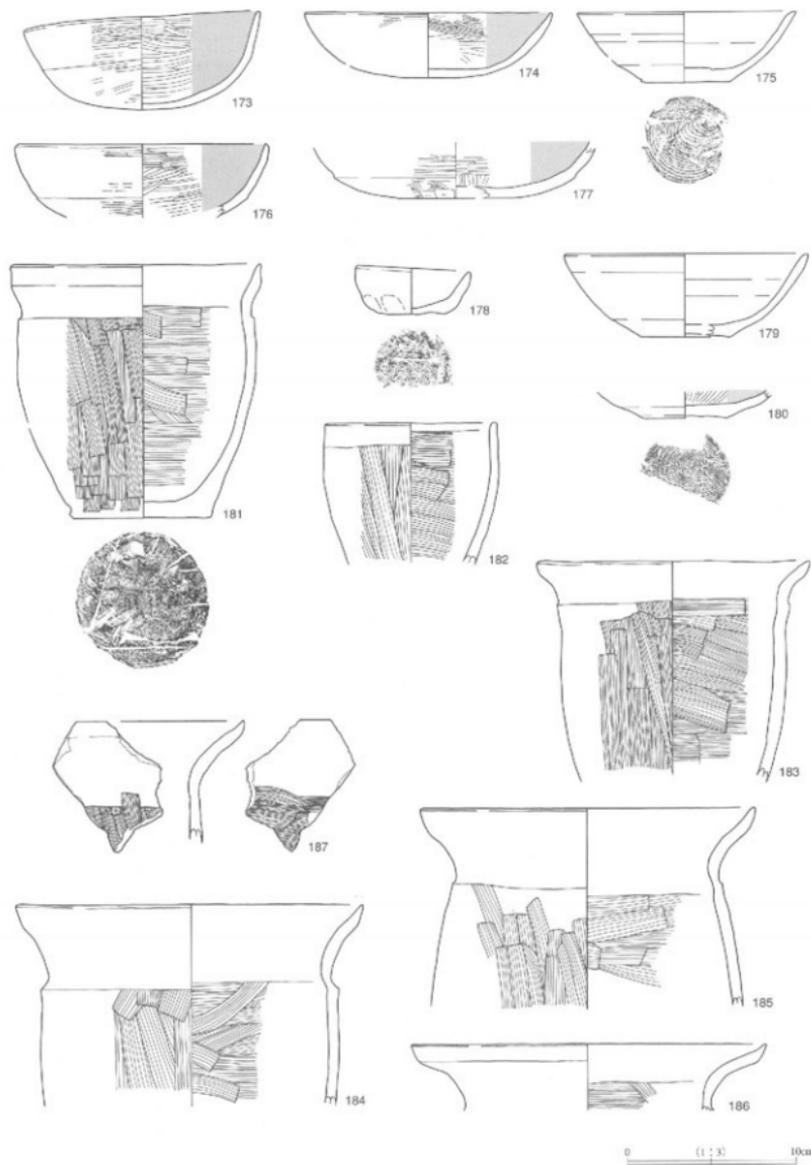


第80図 RA109柱穴・カマド

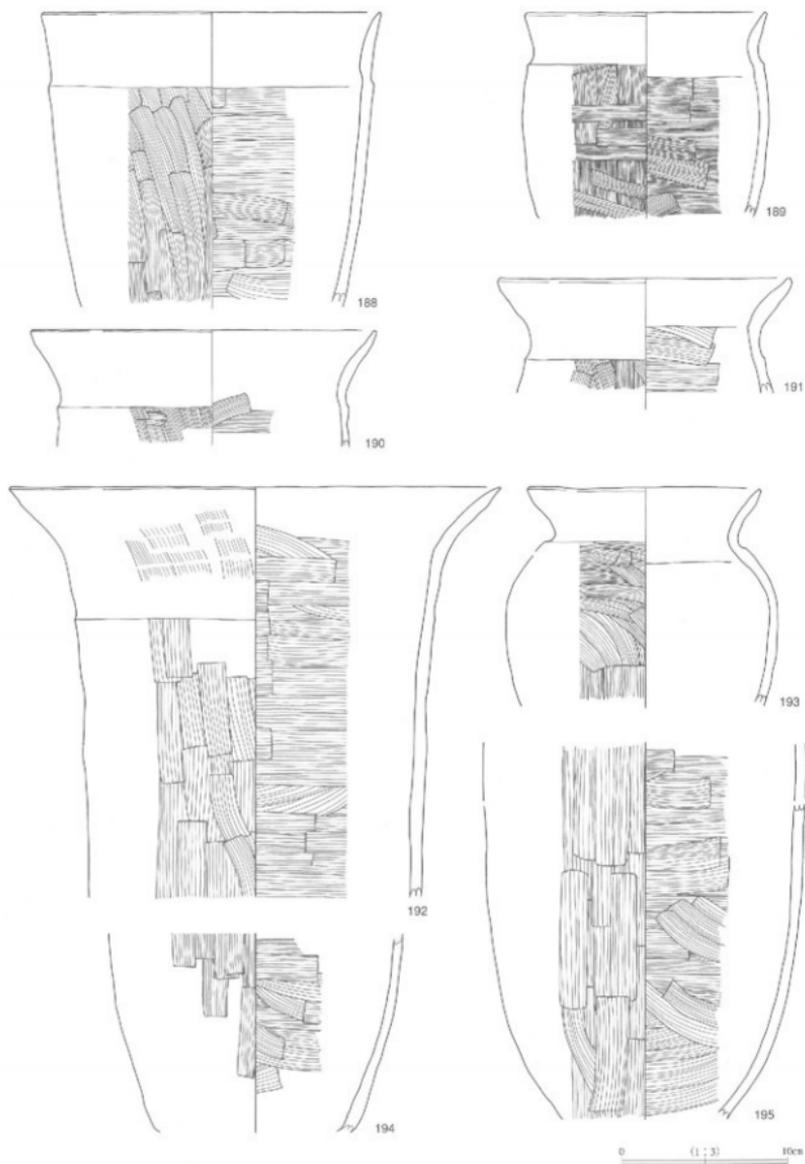


第81図 RA109 2号カマド遺物出土状況

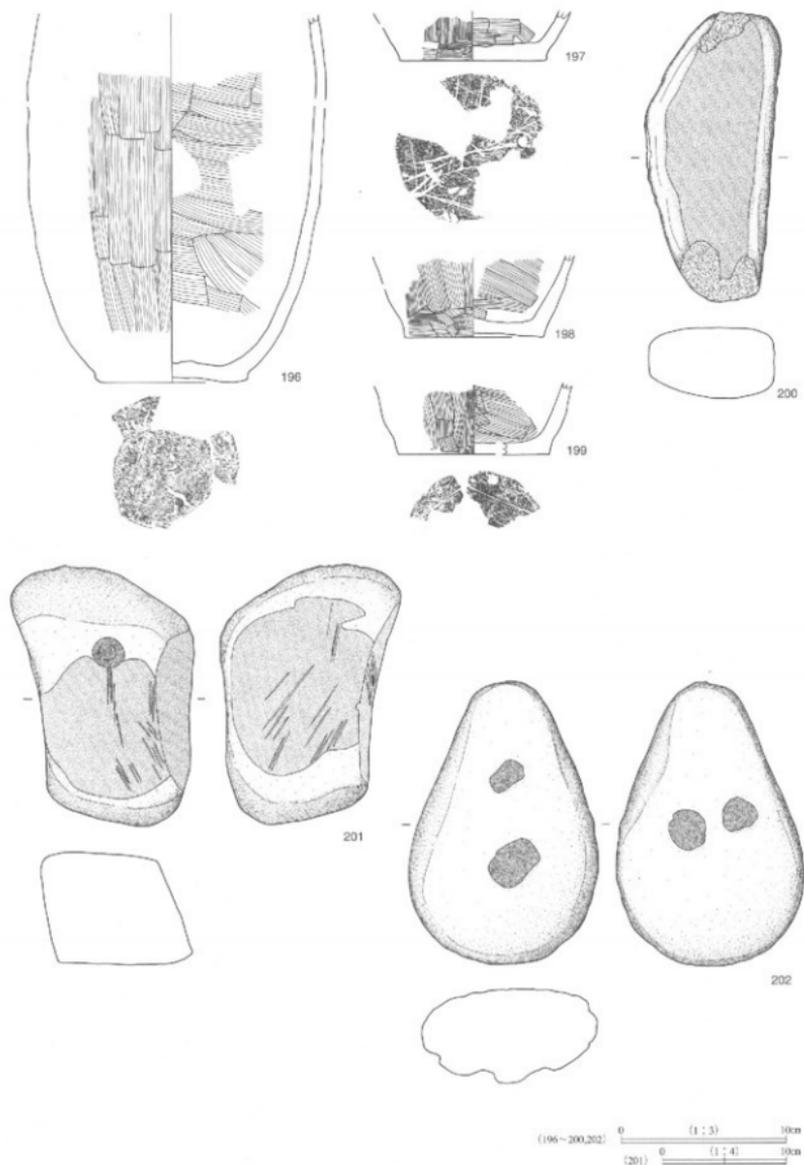
[遺物] 土器883点、礫石器3点がカマド周辺の床面から出土している。土師器杯・鉢、甕は、本遺構に属するものはすべて非口クロである。175・179・180は、RA128と重複している南東隅から出土したものであり、誤って本遺構のものとして取り上げたことから、これらはRA128で報告する。173・174・176~178は土師器杯。173はI A1a類、176はI A1d類、174はI A2c類である。174と177は丸底に分類しているが平底風の形状に近いと思われる。182は土師器鉢・類。181・183~199は土師器甕。口縁部が残存しているものはすべてA I類である。ii・iii・ivの3種類を確認できているが、主体はiv類である。192は体部にある段の貼りが弱く寸胴である。底部が残存している196・197・199は木葉痕が認められる。200~202は礫石器。200はI類、201はV類、202はⅢ類である。201は磨面が四方に面として形成され、表面に凹面が伴うことから石皿と紙石の両方の役割を果たしていたと思われる。



第82図 RA109出土遺物 (1)



第83図 RA109出土遺物 (2)



第84図 RA109出土遺物 (3)

礫石器以外に礫は30点出土しているが、すべて自然礫である。これらの礫の被熱及び破損率が高いことから、カマド構築材として用いられていたものが含まれていると思われる。

〔遺構時期〕 8世紀中葉から後葉に属する。

R A 118 竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕 5 N 23m・nグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は段丘の北側に向かって緩やかに傾斜していく手前の段丘縁辺部の平坦面にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 109は北東に8m、R A 123は西に21mを測る。遺構上半部が削平され、床面のみが残存となる。

〔住居の方向〕 N-37°-W。北東壁を基準としている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形である。規模は北西壁2.36m、北東壁2.71m、南東壁2.23m、南西壁2.11mである。

〔堆積土〕 黒色土・黒褐色土主体で8層に細分した。

〔壁・床面〕 壁は外傾して立ち上がる。壁高は10~16cmである。南東壁の壁高は6cmと残存状況は他の壁に比べ悪い。床面は黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は4~12cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。貼床が浅い所では礫層を確認できる。

〔カマド〕 煙道と袖を検出した。北西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-38°-Wである。袖は下端付近のみ残存し、暗褐色土を貼付て構築している。燃焼部は中央が僅かに凹むもののほぼ平坦であり、焼成面は確認されなかった。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜するように形成され、壁から1.28mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。

〔土坑・柱穴〕 柱穴4個を床面検出時に検出した。すべて南東壁に平行して一列に配置されている。規模と形状は共に類似しており、規模は開口部径が20~25cm、平面形状は円形である。これらの性格は不明である。

〔遺物〕 土器24点が床面から出土している。203は非ロクロの土器器環I A 1a類。自然礫が1点出土している。

〔遺構時期〕 8世紀前葉に属する。

R A 121 竪穴住居跡

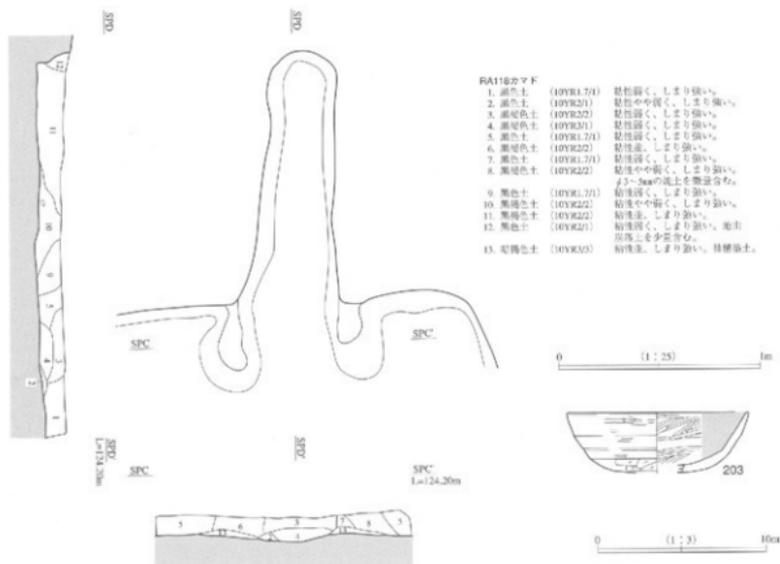
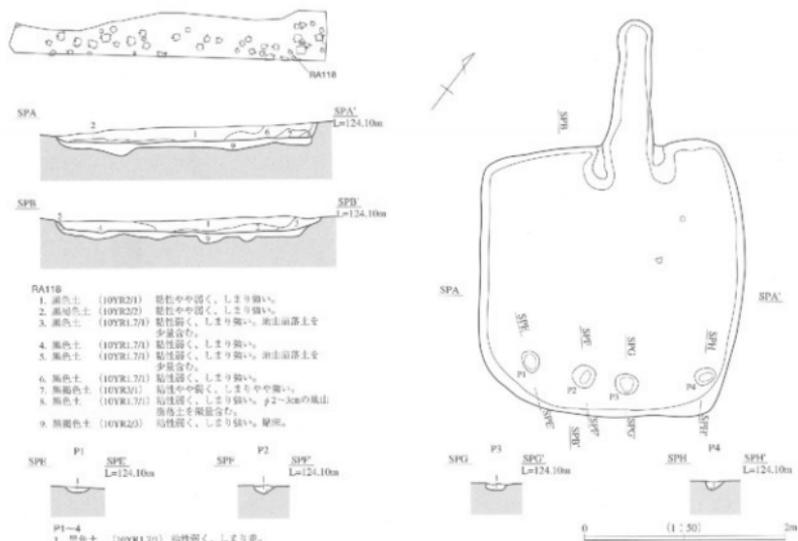
〔位置・検出層位〕 5 K 13q・r、14q・rグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。本遺構は調査区の北側に向かって緩やかに下っていく段丘縁辺部の斜面上にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 095は西に7m、R A 097は南南東に7m、R A 098は南東に12m、R A 099は東に19mを測る。本遺構の北半部は攪乱により削平されているが、残存していた北側では焼土が多く分布していたことと複数の柱穴が確認できたことから竪穴住居として精査をしている。

〔住居の方向〕 N-35°-W。西壁を基準としている。

〔平面形・規模〕 確認できた平面形はほぼ方形と思われる。規模は東壁2.17m、南壁3.43m、西壁2.32mである。

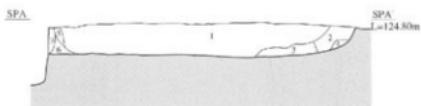
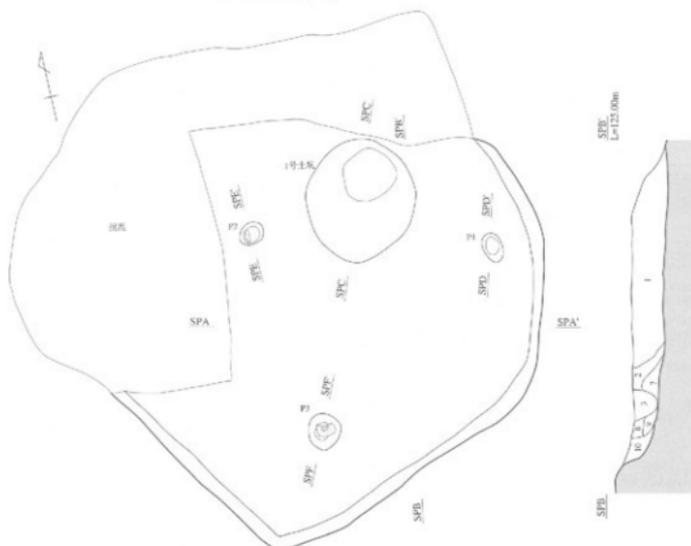
〔堆積土〕 黒褐色土主体で10層に細分した。

〔壁・床面〕 壁は外傾して立ち上がる。壁高は20~30cmである。床面は北壁側が低くなっており、VI層を掘り込んで形成されている。貼床及び硬化面は認められない。



第86図 RA118・出土遺物

2 検出された遺構・遺物



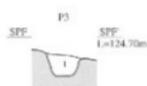
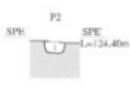
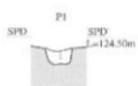
RA121

- | | | |
|----------|---------|------------------------------|
| 1. 黒埴色土 | (OYR32) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 2. 黒色土 | (OYR21) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 3. 灰褐色土 | (OYR34) | 粘性やや弱く、しまりやや強い。堆山崩落土をやや多く含む。 |
| 4. 黒色土 | (OYR45) | 粘性やや強く、しまり強い。堆山崩落土。 |
| 5. 黒色土 | (OYR21) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 6. 黒埴色土 | (OYR22) | 粘性やや弱く、しまり強い。堆山崩落土を少量含む。 |
| 7. 黒埴色土 | (OYR31) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 8. 黒埴色土 | (OYR31) | 粘性強。しまり強い。 |
| 9. 黒埴色土 | (OYR22) | 粘性強く、しまりやや強い。堆山崩落土を含む。 |
| 10. 黒埴色土 | (OYR22) | 粘性強く、しまり強い。 |



1号土坑

- | | | |
|---------|---------|-------------------------------|
| 1. 黒埴色土 | (OYR22) | 粘性弱く、しまりやや強い。 |
| 2. 黒埴色土 | (OYR22) | 粘性やや弱く、しまり強い。約3-5cmの粘土殻を少量含む。 |
| 3. 灰褐色土 | (OYR42) | 粘性弱く、しまり強い。 |

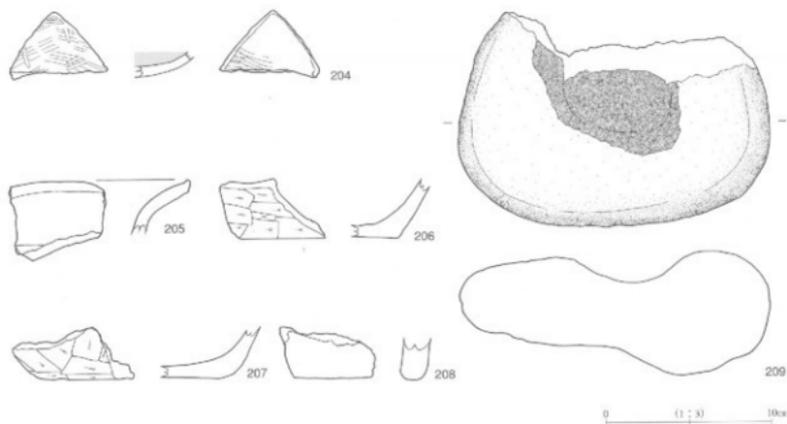


P1-3

- | | | |
|---------|---------|-------------|
| 1. 黒埴色土 | (OYR22) | 粘性弱く、しまり強い。 |
|---------|---------|-------------|

0 (1:50) 2m

第86図 RA121



第87図 RA121出土遺物

〔カマド〕 カマドの設置位置は不明である。焼土が床面の北側で多く確認できたことから、北壁に設置されていた可能性がある。

〔土坑・柱穴〕 土坑1基、柱穴3個を床面精査時に検出した。

土坑は、平面形は楕円形、規模は $1.2 \times 1.07\text{m}$ 、深さは 19cm である。

柱穴は、平面形は円形と楕円形、開口部径は $27 \sim 38\text{cm}$ 、深さは $10 \sim 20\text{cm}$ である。

〔遺物〕 土器55点、礫石器1点が床面を中心に出土している。土師器環・甕・瓶はすべて非クロロである。204は土師器環。205～207は土師器甕。208は土師器瓶Ⅱ類。209は礫石器Ⅵ類。

〔遺構時期〕 8世紀代に属すると思われる。

R A123竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕 5 N23a・b、24bグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。本遺構は北に存在する段丘崖に向かって緩やかに登る段丘縁辺部の斜面上にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A106は北西に 14m 、R A107は西に 17m 、R A118は東に 21m を測る。攪乱により削平され本遺構の西半分は床面のみの精査となる。

〔住居の方向〕 $N-38^\circ-W$ 。北東壁を基準としている。

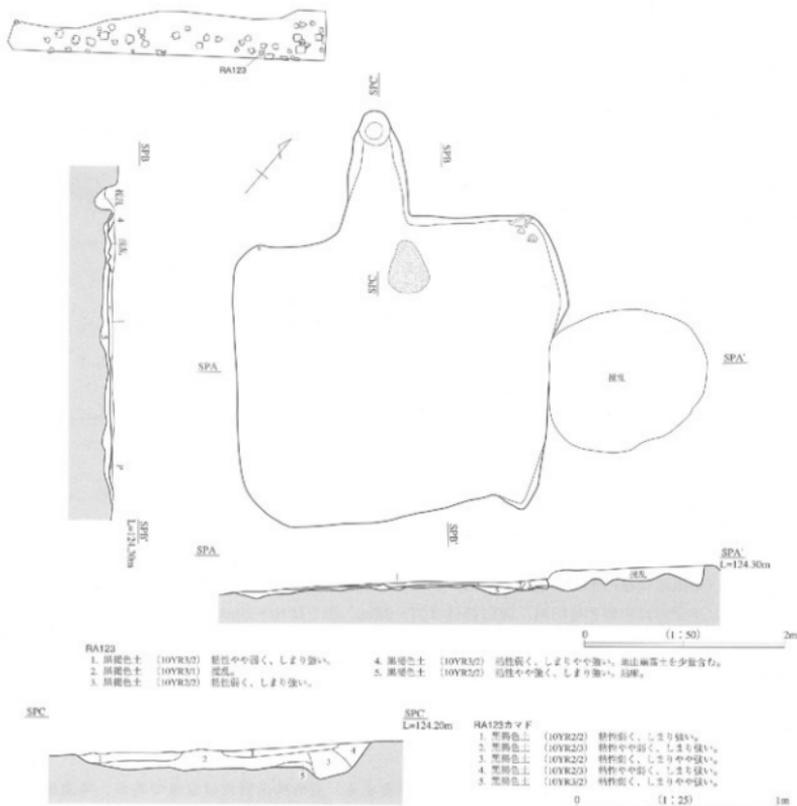
〔平面形・規模〕 平面形は残存状況から方形と思われる。規模は北西壁 3.11m 、北東壁 2.95m 、南東壁 2.49m 、南西壁 2.63m である

〔堆積土〕 黒褐色土主体で4層に細分した。

〔壁・床面〕 確認できた北西隅付近の壁は外傾して立ち上がる。壁高は $6 \sim 10\text{cm}$ である。床面は地山を多く含む黒褐色土が全面に貼られてややしまる。東半分はほぼ平坦であるが全体的には北西側がやや低くなっている。貼床の層厚は $2 \sim 8\text{cm}$ 、掘り方はⅣ層を掘り込んで形成されている。

〔カマド〕 煙道と燃焼部のみを検出した。北西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向は $N-40^\circ-W$ である。燃焼部は焼成面のみ残存していた。平面形は不整楕円形、規模が

2 検出された遺構・遺物



53×41cm、層厚は2cmである。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜するように形成され、焼成面から1.35mを測る。煙道構築方法は削平されているため不明であるが、天井崩落土を確認できないことから掘込式である。

〔土坑・柱穴〕 検出されなかった。

〔遺物〕 土器11点が北東隅の床面から出土している。210は土師器鉢v類である。

〔遺構時期〕 8世紀代に属すると思われる。



0 (1:3) 10cm

R A 125 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 N11v・w、12v・wグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。本遺構は北に向かって緩やかに下っていく段丘縁辺部の平坦部にある。北壁から8m北側には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 108は西に4m、R A 109は南西に12m、R A 126は南東に12mを測る。攪乱により北西隅と南東壁が削平されている。

[住居の方向] N-27°-W。北東壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は確認できた形状から方形と思われる。規模は北西壁2.24m、北東壁2.53m、南東壁2.52、南西壁1.68mである。

[堆積土] 黒色土主体で13層に細分した。

[壁・床面] 壁は概ね外傾して立ち上がり、南壁のみ垂直である。壁高は30cm前後、削平されている南東壁の壁高は18cmである。床面は地山を多く含む黒色土が全面に貼られて硬くしまり、中央が若干凹むもののはほぼ平坦である。貼床の層厚は12~30cm、掘り方はⅤ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 煙道のみを検出した。北西壁中央よりやや北東壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-34°-Wである。煙道は煙り出しに向かって僅かに登るように形成され、北西壁から1.38mを測る。煙道構築方法は天井崩落上が確認できなかったものの、東側がオーバーハングしていることから削抜き式と考えられる。

[土坑・柱穴] 検出されなかった。

[遺物] 土器180点が床面を中心に出土している。土師器環・甕はすべて非クロコである。211は土師器環ⅠA1d類。212~214は土師器甕。213は底部から体部にかけての立ち上がりからB類に属する可能性がある。底部には木炭痕が認められる。自然礫が1点出土している。

[遺構時期] 8世紀代に属すると思われる。

R A 126 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 O17・18・19bグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。本遺構は北に位置する段丘岸に向かって緩やかに下っていく手前の段丘縁辺部の平坦部にある。北壁から18m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 108は北西に17m、R A 109は西に17m、R A 125は北北西に12mを測る。本遺構の東側は、本来ならば第18次の調査区に続いているが、本調査区と接する範囲は攪乱により削平されていたため残存していない。検出した範囲のみが存在していることとなり、西壁のカマド周辺のみを精査となる。

[重複] R A 119と重複しており、本遺構の方が古い。

[住居の方向] N-7°-W。西壁を基準としている。

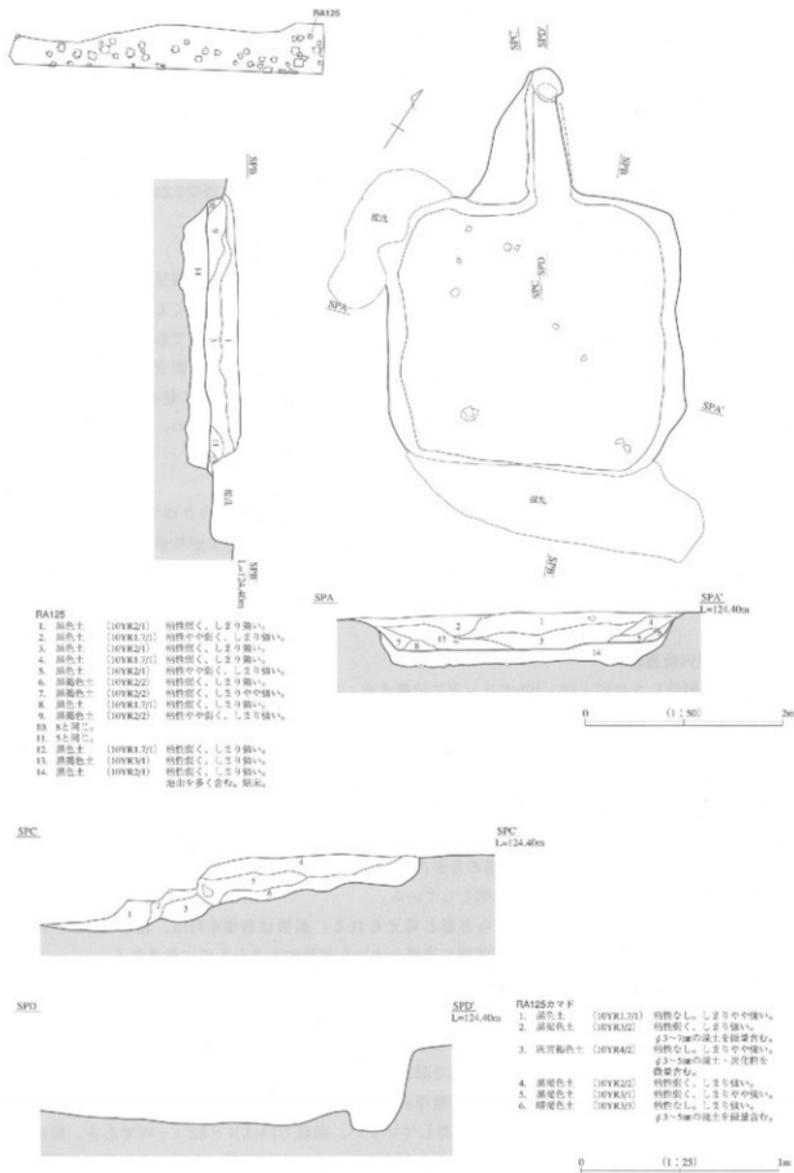
[平面形・規模] 平面形は残存状況から方形と考えられる。規模は西壁6.31m、北壁1.45m、南壁1.61mである。確認できた規模から、当該期の遺構の中でも規模の大きなものに含まれる。

[堆積土] 黒色土主体である。

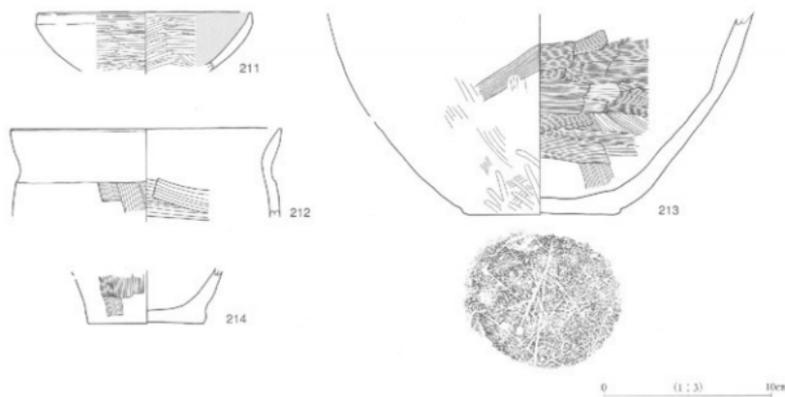
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。西壁の壁高は20cm前後、残存状況の悪い北・南壁は10cm前後である。床面は黒褐色土が全面に貼られてややしまり、若干の凹凸があるもののはほぼ平坦である。貼床の層厚は2~10cm、掘り方はⅤ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。ただし煙り出しはR A 119と重複するため残存していない。軸線方向はN-82°-Wである。袖はにぶい黄色土を貼付て構築している。両袖共に構築材が認められ、左袖は礫、右袖のみ先端に土師器甕

2 検出された遺構・遺物



第89図 RA125



第90図 RA125出土遺物

を倒立させて配置している。燃焼部は中央が凹む皿状をしており、平面形は楕円形、規模が74×34cm、層厚14cmの焼成面がある。燃焼部の中央には支脚が認められ、礫を直立させて配置している。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜するように形成され、焼成面から48cmを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認できなかったことから掘込式である。

〔土坑・柱穴〕土坑2基、柱穴3個を床面精査時に検出した。

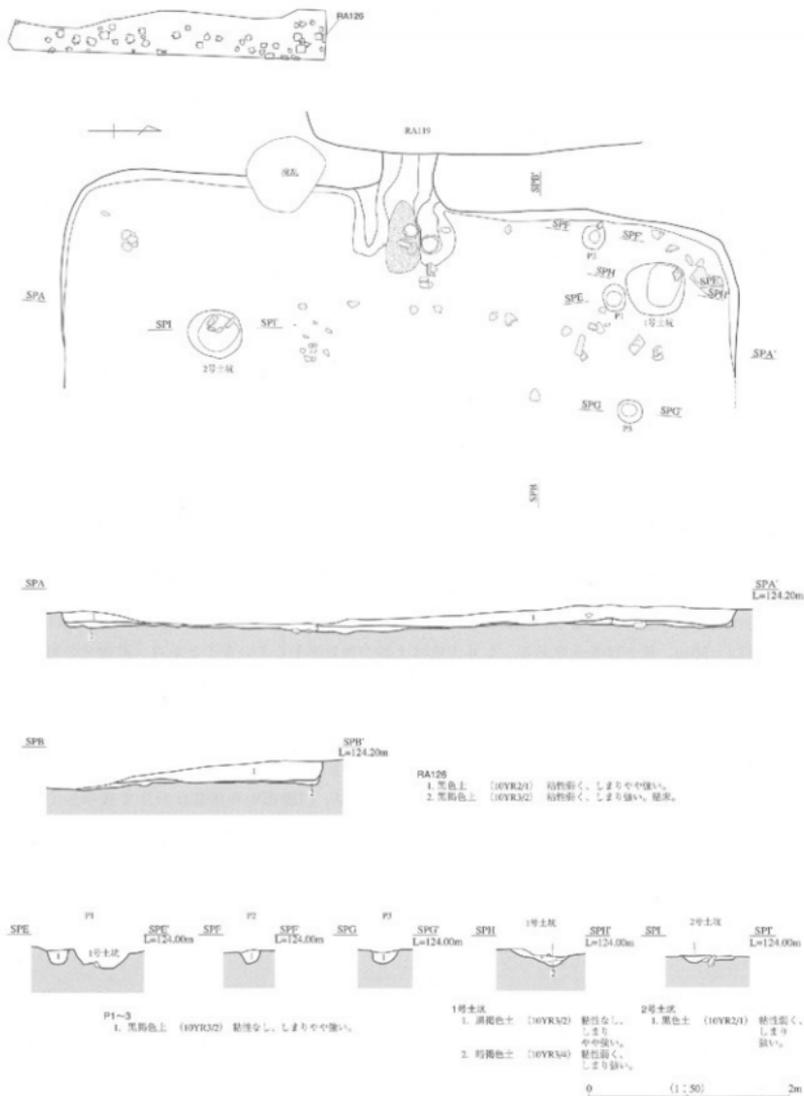
1号土坑は、平面形は不整形、規模は62×54cm、深さは12cmである。2号土坑は、平面形は円形、規模は54×50cm、深さは8cmである。1号土坑は土器が複数出土していることから、貯蔵穴の可能性がある。

柱穴は平面形と規模が共に類似しており、平面形は円形、開口口径は24～28cm、深さは12cmである。西壁付近でしか確認できなかったが、P1～3のいずれかは主柱穴に該当するものと考えられる。

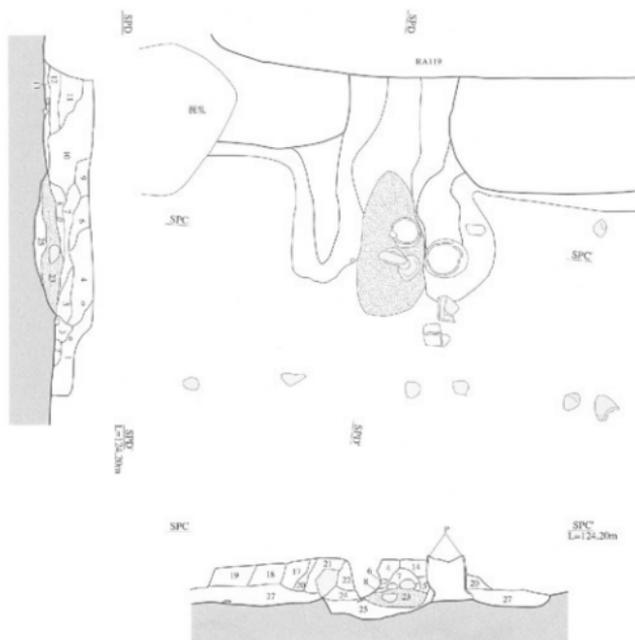
〔遺物〕土器45点、礫石器1点がカマド周辺の床面から出土している。土師器坏・甕はすべて非ロクロである。215は土師器坏I B2c類。216～221は土師器甕。口縁部から体部にかけて残存している216・217はA1ii類である。220・221の底部には木炭痕が認められる。222は礫石器II類。礫石器以外に礫は34点出土しているが、すべて自然礫である。これらの3割は被熱していることから、カマド構築材などに用いられたものが含まれていると思われる。

〔遺構時期〕8世紀中葉から後葉に属する。

2 検出された遺構・遺物



第91図 RA126

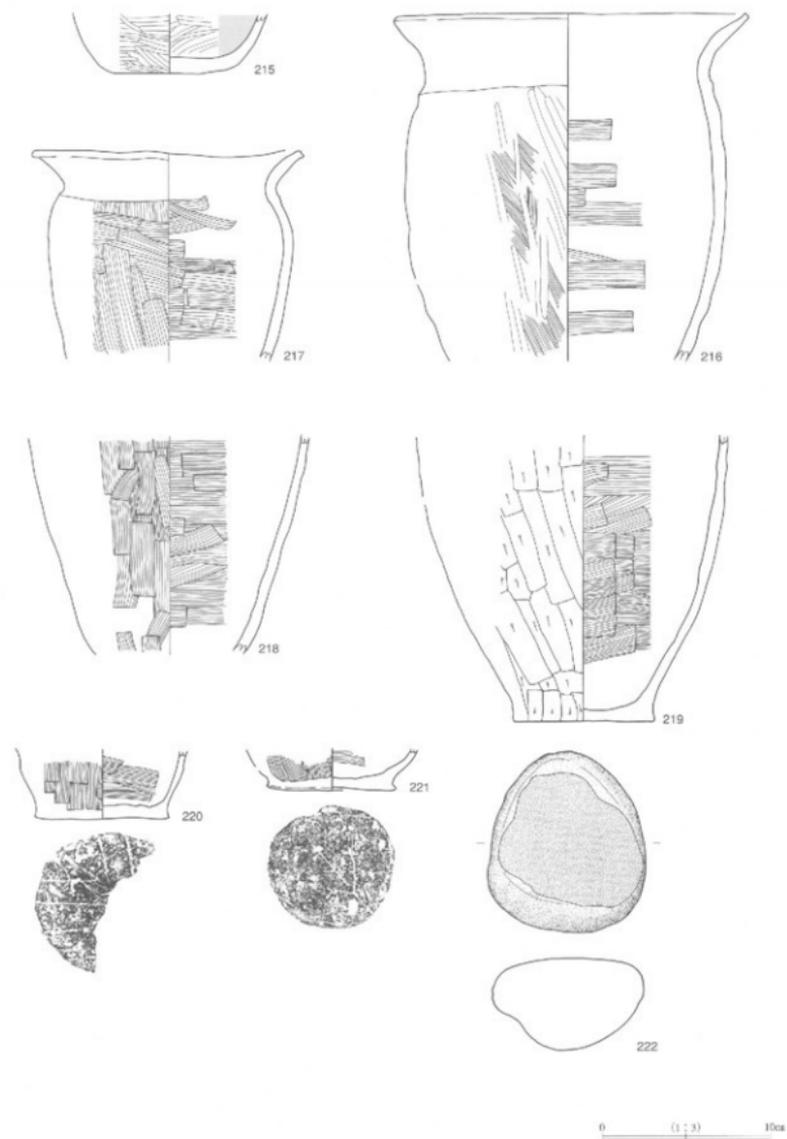


RA126

- | | | | | | |
|------------|-------------|--------------------------------------|----------------|------------|----------------|
| 1. 黒色土 | (10YR1.7/1) | 粘性弱く、しまり強い。 | 14. 黒褐色土 | (10YR2/3) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 2. 赤褐色土 | (5YR4/5) | 粘性弱く、しまり強い。泥質粘土。 | 15. 黒褐色土 | (10YR3/3) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 3. 黒褐色土 | (10YR2/2) | 粘性弱く、しまりやや強い。φ3-5mmの
炭土・炭化粒を少量含む。 | 17. 黒褐色土 | (10YR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 4. 黒褐色土 | (10YR2/3) | 粘性やや弱く、しまり強い。 | 18. 黒褐色土 | (10YR3/3) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 5. 黒褐色土 | (10YR3/2) | 粘性弱く、しまり強い。 | 19. 基本壁跡1層に対応。 | | |
| 6. 黒褐色土 | (10YR3/3) | 粘性弱く、しまり強い。 | 20. 褐色土 | (10YR4/6) | 粘性非。しまり強い。 |
| 7. にぶい黄褐色土 | (10YR6/4) | 粘性、しまり強い。天洋面等上。 | 21. にぶい赤褐色土 | (5YR4/5) | 粘性非。しまり強い。 |
| 8. 褐色土 | (7.5YR4/5) | 粘性なし、しまり強い。 | 22. にぶい黄褐色土 | (10YR6/4) | 粘性非。しまり強い。 |
| 9. 黒褐色土 | (10YR3/2) | 粘性非。しまり強い。 | 23. にぶい赤褐色土 | (5YR4/4) | 粘性弱く、しまり強い。炭土。 |
| 10. 黒褐色土 | (10YR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。 | 24. 黒褐色土 | (7.5YR3/2) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 11. 黒褐色土 | (10YR3/3) | 粘性弱く、しまり強い。 | 25. 褐色土 | (7.5YR4/4) | 粘性弱く、しまりやや強い。 |
| 12. 黒褐色土 | (10YR3/2) | 粘性弱く、しまりやや強い。φ3mmの粘土
を少量含む。 | 26. 褐色土 | (10YR4/6) | 粘性非。しまり強い。 |
| 13. 黒褐色土 | (7.5YR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。 | 27. 暗褐色土 | (10YR3/3) | 粘性非。しまり強い。 |

0 (1:25) 1m

第92図 RA126カマド



第93図 RA126出土遺物

土坑

RD198土坑

[位置・検出層位] 5 L17oグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。一部攪乱により削平されている。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形である。規模は1.41×1.24m、深さは33cmである。

[堆積土] 黒褐色～灰黄褐色土主体で4層に細分した。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は中央が凹む皿状である。

[遺物] 西壁付近で土器26点が出土している。223は土師器甕A1ii類。

[遺構時期] 8世紀代に属すると思われる。

RD209土坑

[位置・検出層位] 5 M16sグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は2.09×1.48m、深さは48cmである。

[堆積土] 黒褐色土主体で7層に細分した。底面よりやや上の4・6層中から多くの焼土ブロックと遺物が出土しており、これらは人為堆積である。それより上位は自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。床面は中央がやや凹んでいるもののほぼ平坦である。

[遺物] 土器94点、礫25点が埋土中位と底面から出土している。土師器環・甕は非ロクロである。224・225は土師器環I A1d類。225はやや平底風の底部である。226は土師器甕である。出土した礫はすべて自然礫である。

[遺構時期] 8世紀代に属すると思われる。

RD220土坑

[位置・検出層位] 5 N13・14nグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。

[平面形・規模] 平面形は隅丸長方形である。規模は2.11×1.64m、深さは33cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸が認められるもののほぼ平坦である。

[堆積土] 黒色・黒褐色土主体で4層に細分した。

[遺物] 土器9点、礫3点が底面を中心に出土している。227は非ロクロ土師器環I B2c類。出土した礫はすべて自然礫である。

[遺構時期] 8世紀中葉から後葉に属する可能性がある。

RD223土坑

[位置・検出層位] 5 N15・16wグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。

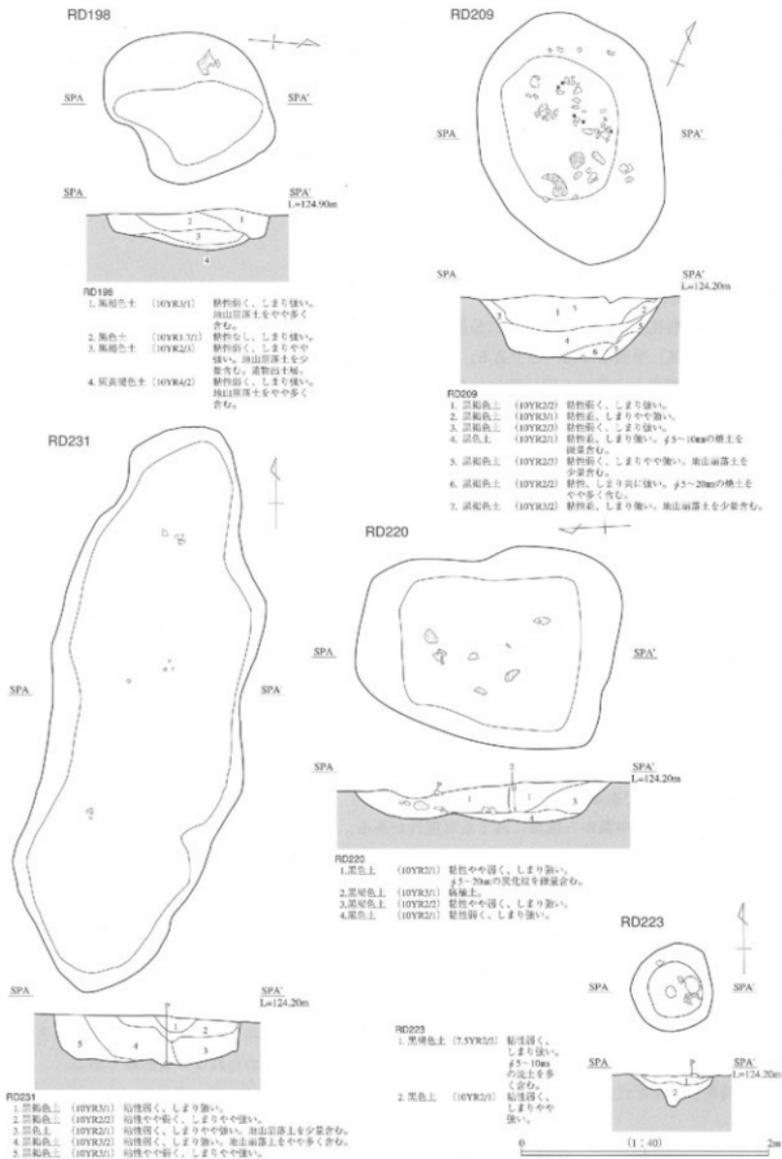
[平面形・規模] 平面形は円形である。規模は71×66cm、深さは24cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は皿状であるが中央が強く凹む。

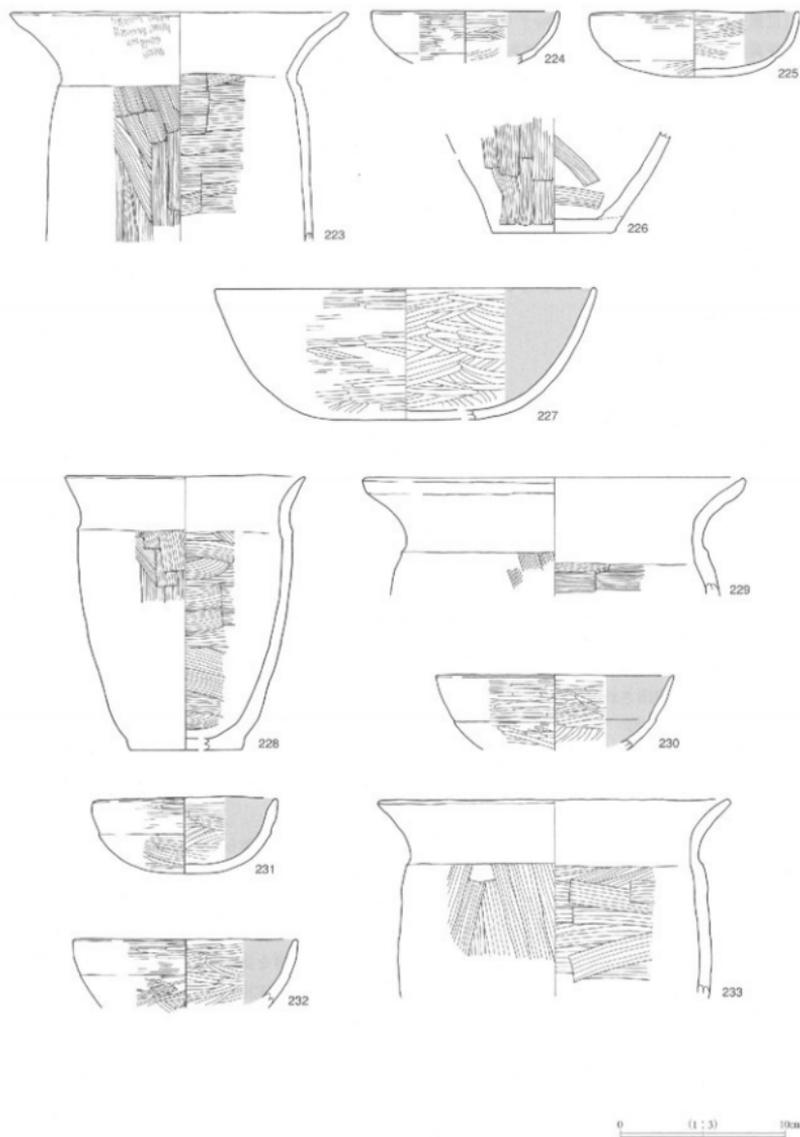
[堆積土] 黒色・黒褐色土主体で2層に細分した。

[遺物] 土器96点、礫7点が埋土中から出土している。228・229は非ロクロの土師器甕で、iiとiv類である。礫は被熱を受けているものが僅かにあるが、使用痕跡は認められない自然礫である。

[遺構時期] 8世紀代に属すると思われる。



第94図 RD198・209・220・223・231



第95図 RD198・209・220・223・231・風倒木出土遺物

R D 231土坑

[位置・検出層位] 5 N 19x、20wグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は4.69×1.61m、深さは37cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は凹凸が認められるものの、概ね平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で5層に細分した。

[遺物] 土器6点が埋土下位と床面から出土している。230は非ロクロの土師器坏I A 1a類。

[遺構時期] 8世紀前葉に属する可能性がある。

風倒木1

[位置] 5 k 20q・rグリッドに位置する。

[遺物] 埋土中から土師器が出土している。231と232は非ロクロの土師器坏。231はI A 1d類、232はI A 1a類である。

風倒木2

[位置] 5 M 17・18rグリッドに位置する。

[遺物] 233は非ロクロの土師器甕である。

(3) 平安時代の遺構・遺物

竪穴住居跡

R A 050竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 N 25k・1、6 N 1k・1グリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は段丘縁辺部より内陸部で南北にある段丘崖の中間に位置し、緩やかに北に向かって登っていく手前の平坦部にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 51は東に4 m、R A 54は西に6 m、R A 116は北西に16m、R A 130は北東に8 mを測る。本遺構は平成13年度に発掘が行われた調査区と跨って検出されていることから、今回は遺構の北端半分を精査したこととなる。

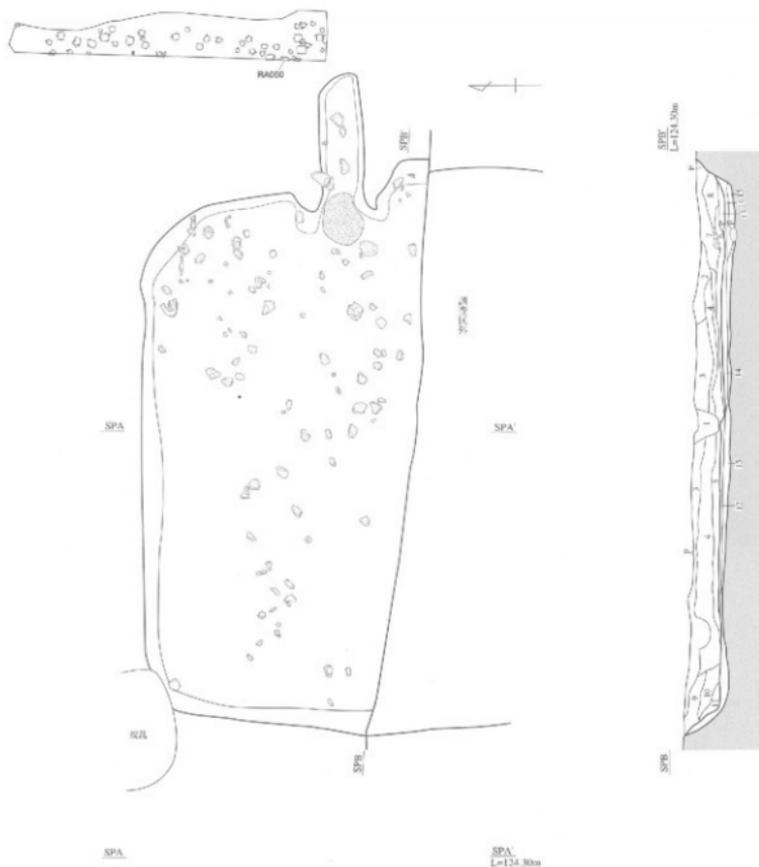
[住居の方向] N-93°-E。北壁を基準としている。

[平面形・規模] 北西隅は攪乱により削平されているが、確認できた形状及び過去の調査成果から平面形は方形である。規模は東壁2.61m、西壁1.95m、北壁4.51mである。過去に調査が行われた南壁は5.4mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で18層に細分した。床面よりやや上位の4層から5層中にかけて十和田aテフラがブロック状に堆積していた。

[壁・床面] 壁はほぼ外傾して立ち上がる。壁高は16~26cmである。過去に行われた調査と遺構検出層位が異なることから壁高の残存値に差が認められる。床面は黒色土と黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は2~16cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。過去の調査時に床面硬化と指摘した部分は、検出できなかった。今回検出した床面は比較的しまっていたこととそれらの堆積が礫層の直上で確認できたことから、前回の調査時に指摘したそれらの範囲は貼床の可能性が考えられる。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。東壁中央よりやや北壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-88°-Eである。袖はにぶい黄褐色土に黒褐色土を貼付て構築している。燃焼部は圓状をしており、平面形は楕円形、規模が54×51cm、層厚3cmの焼成面がある。煙道は



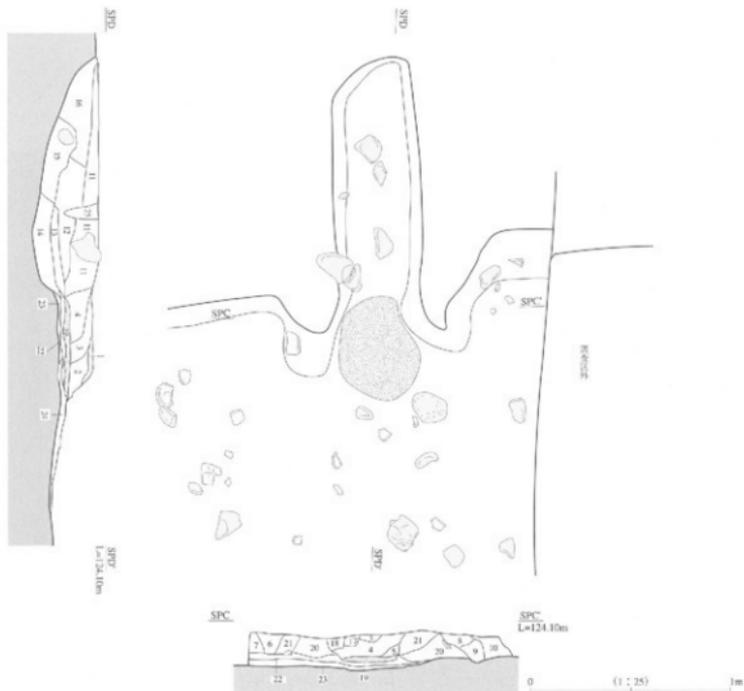
RA050

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性、しまり共になし。新作土。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。
5. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。φ10~20mmの十和田系テフラを少量含む。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。φ5~10mmの粘土・炭化粒を少量含む。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~7mmの粘土を微量含む。
8. 黒褐色土 (10YR1/1) 粘性弱く、しまり強い。
9. 黒褐色土 (10YR1/1) 粘性やや弱く、しまり強い。
10. 黒褐色土 (10YR1/1) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
11. 黒褐色土 (10YR1/1) 粘性やや弱く、しまり強い。φ30~50mmの粘土団粒を生をやや多く含む。

12. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性やや弱く、しまり強い。硬末。
13. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。
14. 灰褐色土 (7.5YR4/2) 粘性やや弱く、しまり強い。
15. 灰褐色土 (10YR3/1) 粘性やや弱く、しまり強い。硬末。
16. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
17. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。
18. 黒褐色土 (10YR1/1) 粘性やや弱く、しまり強い。十和田系テフラをブロック状に少量含む。
19. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
20. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。

0 (1:50) 2m

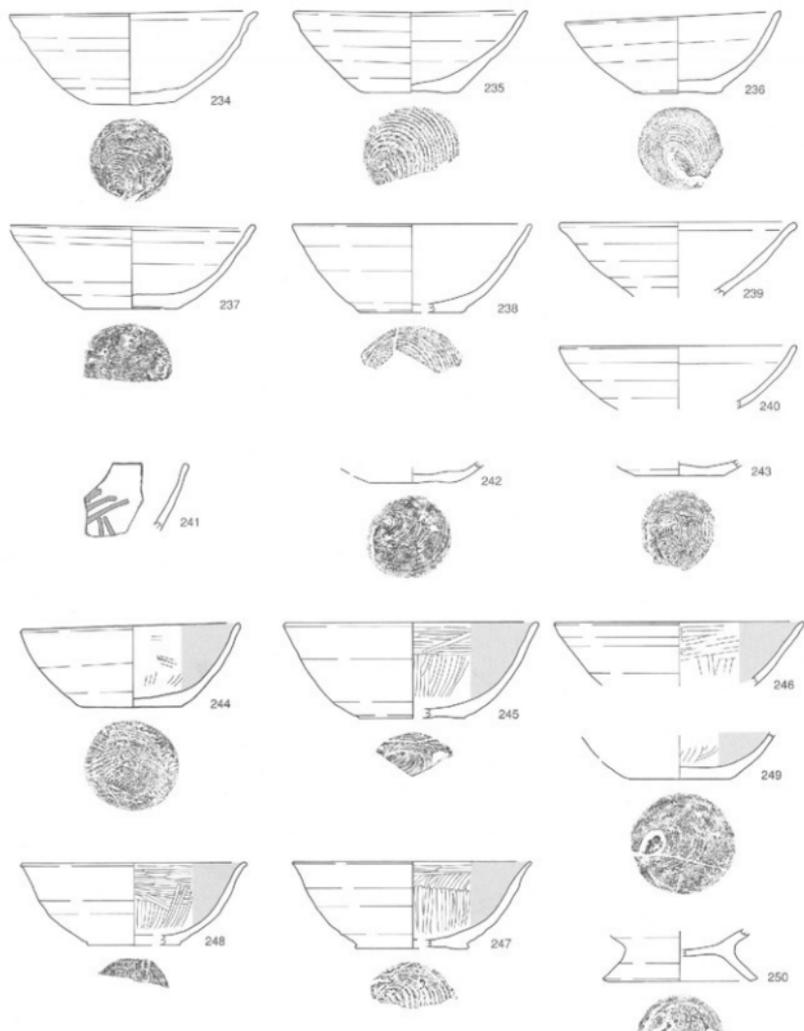
第96図 RA050



RA050カマド

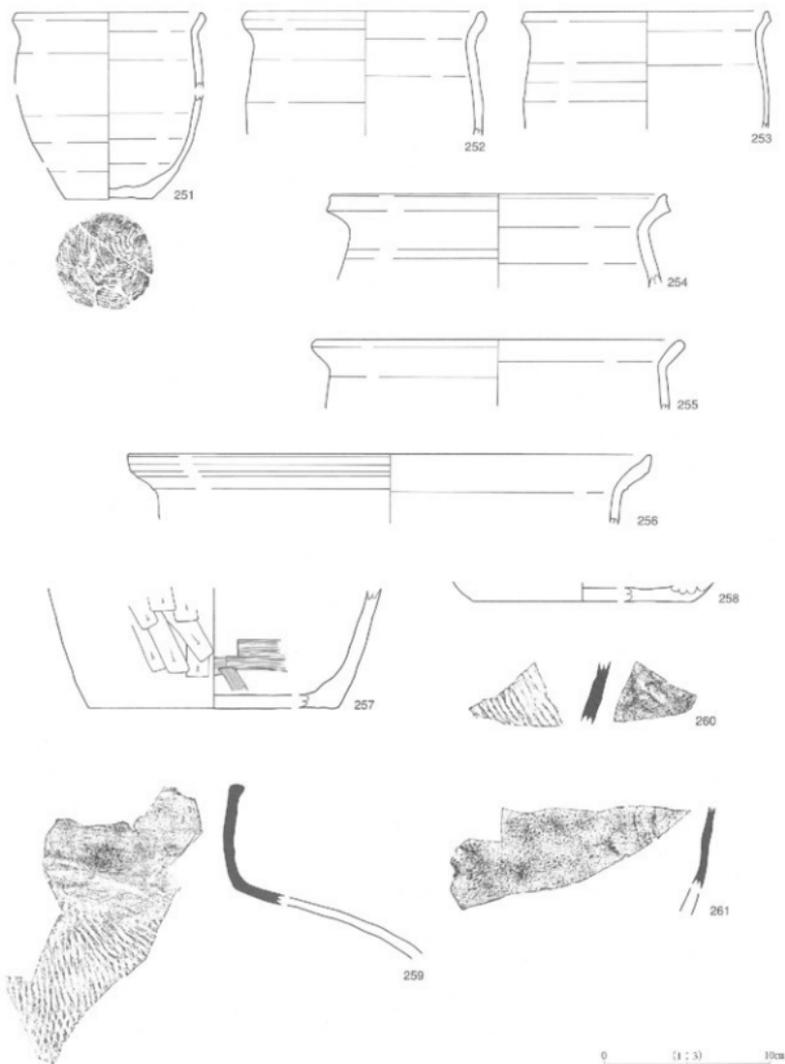
- | | | | |
|----------|---|------------|--|
| 1. 黒褐色土 | (0YR2/2) 粘性強く、しまり強い。 | 14. 黒褐色土 | (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 2. 黒褐色土 | (0YR3/2) 粘性強く、しまり強い。 | 15. 黒褐色土 | (10YR2/2) 粘性強く、しまりやや強い。 |
| 3. 黒褐色土 | (0YR3/2) 粘性やや弱く、しまり強い。 | 16. 黒色土 | (10YR2/1) 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 4. 黒褐色土 | (0YR3/1) 粘性強く、しまり強い。
底土を少量含む。 | 17. 黒色土 | (10YR2/1) 粘性強く、しまり強い。 |
| 5. 黒褐色土 | (0YR2/2) 粘性強く、しまりやや強い。 | 18. 黒褐色土 | (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。 |
| 6. 黒褐色土 | (0YR2/2) 粘性強く、しまり強い。 | 19. 赤褐色土 | (5YR4/2) 粘性強く、しまり強い。底土。 |
| 7. 黒色土 | (0YR1/1) 粘性強く、しまり強い。 | 20. 濃い黄褐色土 | (10YR4/5) 粘性やや弱く、しまり強い。層構築上。 |
| 8. 黒褐色土 | (0YR2/2) 粘性強く、しまりやや強い。 | 21. 黒褐色土 | (10YR2/2) 粘性強、しまりやや強い。層構築上。 |
| 9. 黒褐色土 | (0YR2/2) 粘性強く、しまり強い。 | 22. 黒色土 | (10YR2/1) 粘性強く、しまり強い。 |
| 10. 黒色土 | (0YR2/1) 粘性強く、しまり強い。 | 23. 黒褐色土 | (7.5YR4/2) 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 11. 黒褐色土 | (7.5YR3/4) 粘性やや弱く、しまり強い。
p3~5cmの底土をやや多く含む。 | 24. 黒褐色土 | (10YR3/2) 粘性やや弱く、しまり強い。
p3~10cmの底土・黄化を少量含む。 |
| 12. 黒褐色土 | (7.5YR3/1) 粘性強、しまり強い。 | 25. 層構築土 | |
| 13. 黒褐色土 | (0YR2/2) 粘性強く、しまり強い。 | | |

第97図 RA050カマド

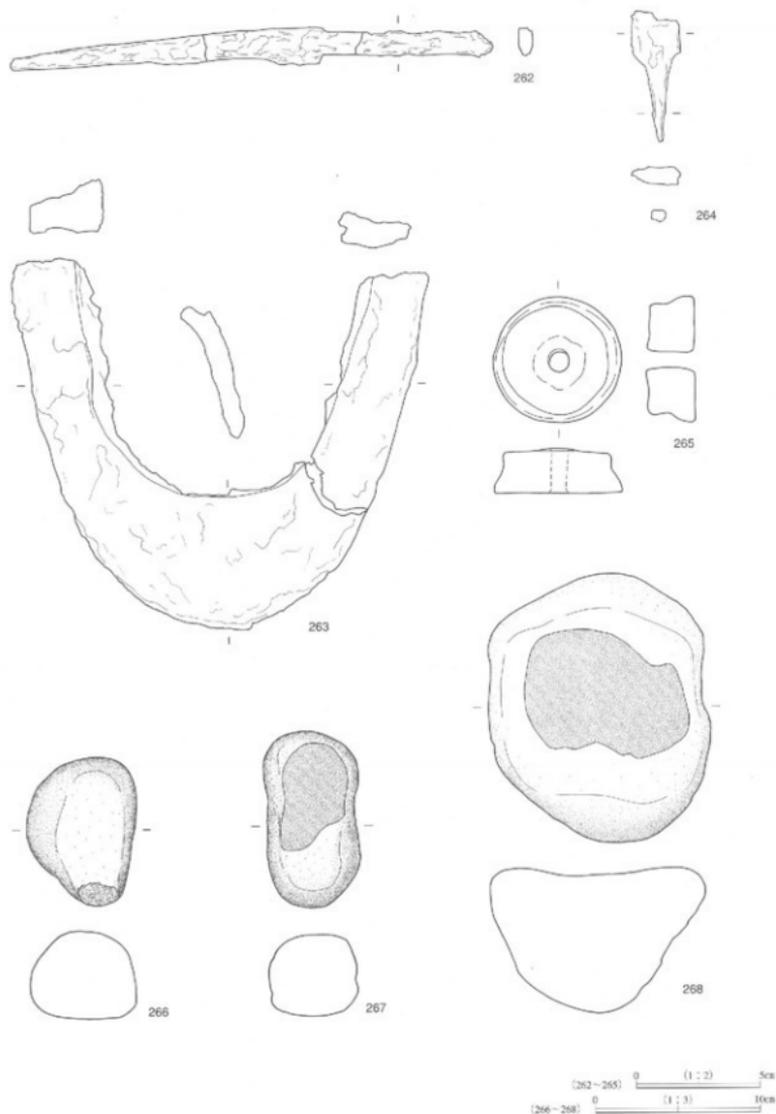


0 (1:3) 10cm

第98図 RA050出土遺物(1)



第99図 RA050出土遺物(2)



第100図 RA050出土遺物(3)

煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から1.23mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。また、カマド燃焼部の下と煙道に複数層が堆積している状況を確認できたことから、カマドの掘り方が深くにまで及んだか作り替えが行われたものと想定される。

〔土坑・柱穴〕今回調査した床面においては土坑や柱穴は確認できなかった。過去の調査において柱穴4個が確認されている。

〔遺物〕土器565点、礫石器3点、鉄製品3点が主に床面から出土している。土師器環・甕はすべてロクロ整形である。231~243は土師器環Ⅰ類。a・cⅰ・cⅱ類が認められる。241は墨書土器で体部外面に「生方」と記されている。244~249はⅡc類上体の土師器環。ⅰ・ⅱ類が認められる。250は土師器高台付環。251~258は土師器甕。口縁部が外傾するものと外傾して口唇部のみ垂直に立ち上がるものの2種類がある。259~261は須恵器甕である。262~264は鉄製品。262は先端部が欠損した刀子。263は鋤先。264は基部が残存している鉄鍬。265は土製紡錘車。266~268は礫石器。266はⅠ類、267はⅡ類、268はⅢ類である。礫石器以外に礫は64点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。これらの礫の5割近くは被熱していることから、カマドの構築材として用いられていたものが含まれていると思われる。

〔遺構時期〕9世紀後半に属する。

R A 051 竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕6N10・p・qグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。本遺構は段丘縁辺部より内陸部で南北にある段丘岸の中間に位置し、緩やかに北に向かって登っていく手前の平坦部にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 50は西に4m、R A 124は北東に18m、R A 130は北に4mを測る。本遺構は平成13年度に発掘が行われた調査区と跨って検出されていることから、今回は遺構の北側半分を精査したこととなる。

〔住居の方向〕N-3°-E。過去の調査区において南東隅が確認できていたことから東壁を基準としている。

〔平面形・規模〕平面形は方形である。規模は西壁1.06m、東壁1.79m、北壁4.03mである。過去に調査された南壁は5.0mである。

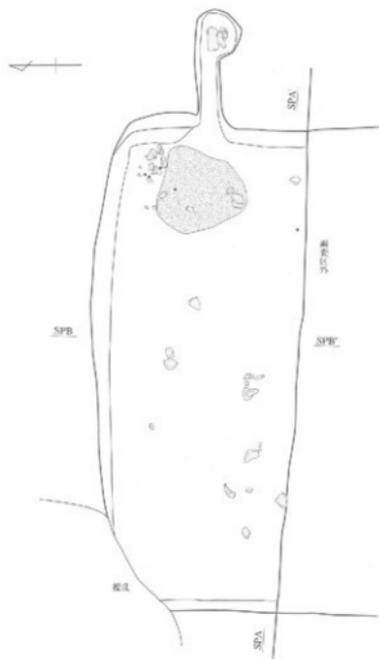
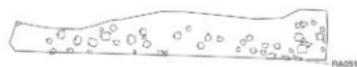
〔堆積土〕黒色・黒褐色土主体で15層に細分した。東壁付近の床面よりやや上位の6層中において十和田aテフラがブロック状に堆積していた。過去の調査でも同様のことが確認されている。

〔壁・床面〕壁はほぼ外傾して立ち上がる。壁高は22~36cmである。過去に行われた調査と遺構検出層位が異なることから壁高の残存値に差が認められる。床面は黒色土が全面に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は2~22cm、北壁付近ではそれはほとんど認められない。掘り方はⅤ層を掘り込んで形成されている。

〔カマド〕煙道と燃焼部を検出した。東壁中央より北壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-87°-Eである。燃焼部は皿状をしており、平面形は不整形、規模が90×88cm、層厚1~5cmの焼成面がある。煙道は床面から煙り出しに向かって急傾斜に形成され、焼成面から1.45mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認できないことから掘込式である。

〔土坑・柱穴〕今回の検出した床面からは確認できなかった。過去の調査において柱穴4個が確認されている。

〔遺物〕土器467点、礫石器1点が床面を中心に出土している。土師器環・鉢・甕はすべてロクロ整形



RA051

- | | | | |
|--------------------|---|--------------------|-----------------------|
| 1. 黒色土 (10YR2/1) | 粘性弱く、しまり強い。 | 10. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。砂質味が強い。見所。 |
| 2. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性弱く、しまりやや強い。 | 12. 黒土 (10YR1/3.1) | 粘性弱く、しまりやや強い。 |
| 3. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性やや弱く、しまり強い。 | 13. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 4. 黒色土 (10YR1/3.1) | 粘性弱く、しまり強い。 | 14. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性やや弱く、しまりやや強い。 |
| 5. 黒色土 (10YR2/1) | 粘性やや弱く、しまりやや強い。 | 15. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 6. 黒色土 (10YR1/3.1) | 粘性弱く、しまり強い。φ10~20mmの十物
田ナヲをブロック状に少量含む。 | 16. 黒色土 (10YR2/1) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 7. 黒色土 (10YR2/1) | 粘性やや弱く、しまりやや強い。 | 17. 黒色土 (10YR2/1) | 粘性弱く、しまり強い。見所。 |
| 8. 黒褐色土 (10YR2/1) | 粘性強く、しまり強い。 | | |
| 9. 黒色土 (10YR2/1) | 粘性弱く、しまりやや強い。鬼山山麓土を
同量含む。 | | |

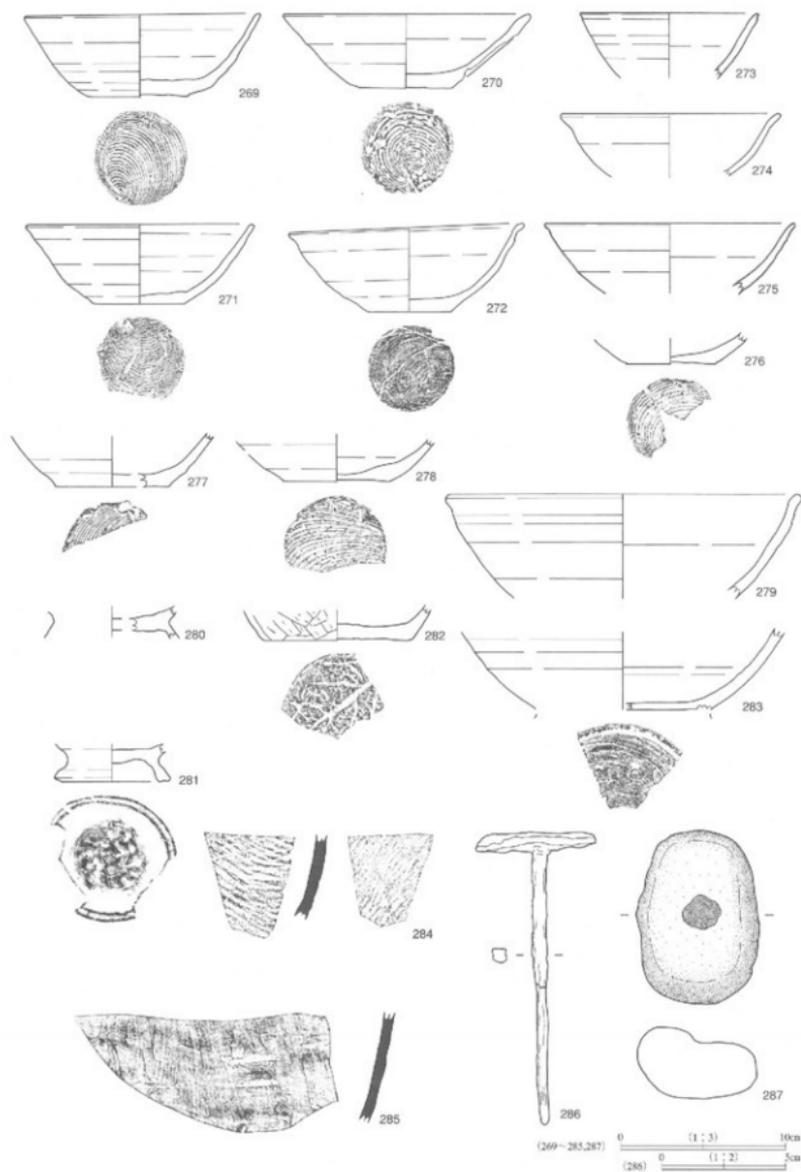
0 (1:50) 2m



第102図 RA051カマド

である。269~278は土師器坏Ⅰ類。c類が主体であり、僅かにa類が認められる。主体となるc類は口縁部が外反するiiが多い。底部切り離しは回転系切りが主体である。279・283土師器高台付坏。それらは胎土などから同一個体である。高台を有する坏よりも本資料は法量大きい。280・281は土師器高台付坏Ⅱ類。282は土師器甕。底部には木葉痕が認められる。284・285は須恵器甕。286は軸棒が欠損している紡錘車。287は礫石器Ⅲ類。礫石器以外に礫は14点出土しているが、すべて使用痕跡と被熱が認められない自然礫である。

[遺構時期] 9世紀後半に属する。



第103図 RA051出土遺物

R A 054 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 N25d・e・fグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は段丘縁辺部より内陸部で南北にある段丘崖の中間に位置し、緩やかに北に向かって登っていく手前の平坦部にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A115は北西に10m、R A116は北西に6m、R A050は東に6mを測る。本遺構は平成13年度に発掘が行われた調査区と跨って検出されていることから、今回は遺構の北側半分を精査したことになる。

[住居の方向] N-83°-E。北壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。確認できた規模は東壁4.79m、西壁3.74m、北壁5.95mである。過去に調査された南壁は6.3mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で25層に細分した。埋土中位から下位にかけて大量の礫と遺物が人為的に投げ込まれていた。

[壁・床面] 壁はほぼ傾斜して立ち上がる。壁高は20~42cmである。ただし攪乱により削平を受けている西壁の壁高は12cm程度である。床面は暗褐色土と黒褐色土が全面に貼られて全体的に硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は2~21cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 東壁中央より北壁側に設置されている2基のカマドが確認できた。北壁側に設置されている新しいカマドを1号、その南側の古いカマドを2号と付している。

1号カマドは燃焼部と煙道を検出した。中軸線が壁と斜交するように設置されている。軸線方向がN-73°-Eである。燃焼部は皿状をしており、平面形は不整形、規模が76×68cm、層厚2cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から1.76mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。

2号カマドは煙道のみを検出である。中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向がN-76°-Eである。煙道は煙り出しが攪乱により削平されており、緩やかに登るように形成されている。残存している煙道は東壁から76cmを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。

[土坑・柱穴] 今回の床面から土坑や柱穴は確認できなかった。過去の調査において柱穴4個が確認されている。

[遺物] 土器1382点、礫石器1点、鉄滓7点が埋土下層から床面を中心に出土している。土師器環・甕はすべてロクロ整形である。288~300はIc類主体の土師器環である。292のみIa類となる以外は、Ic類の中のi・ii・iiiがほぼ同じ割合で存在している。301~306はII類の土師器環でci類が主体である。底部切り離しは概ね回転系切りであり、305の底部のみ再調整されている。307は土師器環Iciv類。今回出土した土師器環の中で柱状を呈した底部は本遺物のみである。308・309は土師器高台付環。312・314は土師器甕。310・311・313~327は須恵器甕。313が小型に含まれる以外は大型である。328・329は鉄製品。328は鉄鏝、329は環状を呈したものであるが詳細は不明である。330は礫石器VI類。礫石器1点以外に礫は99点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫であった。これらの多くは埋土中位から下位にかけて出土していることから、時期にまとめて投げ込まれたものと判断することができる。

[遺構時期] 9世紀後半に属する。

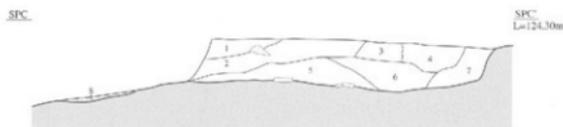
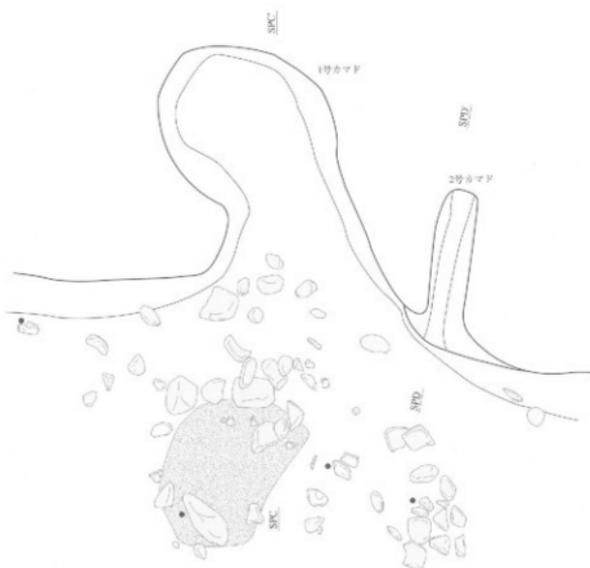


RA054

- | | |
|---|---|
| 1. 粘質土 (10YR1.7/1) 粘質弱く、しまりや強い。 | 14. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性强、しまりや強い。 |
| 2. 黒色土 (10YR2/1) 粘質弱く、しまり強い。 | 15. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性や中弱く、しまり強い。 |
| 3. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘質弱く、しまり強い。 | 16. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘質弱く、しまりや強い。 |
| 4. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘質弱く、しまりや強い。 | 17. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘質弱く、しまりや強い。 |
| 5. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘質や中弱く、しまり強い。 | 18. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘質弱く、しまりや強い。 |
| 6. 黒色土 (10YR2/1) 粘質弱く、しまりや強い。 | 19. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘質弱く、しまりや強い。 |
| 7. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘質や中弱く、しまり強い。 | 20. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 8. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性强、しまり強い。p3-3mmの塊土・炭粒を少量含む。 | 21. 黒色土 (10YR2/1) 粘性や中弱く、しまり強い。 |
| 9. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘質弱く、しまりや強い。 | 22. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまりや強い。 |
| 10. 黒色土 (10YR2/1) 粘性强、しまり強い。 | 23. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 11. 粘質土 (10YR3/4) 粘質や中弱く、しまり強い。 | 24. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 12. 粘質土 (10YR3/2) 粘性や中弱く、しまり強い。炭色や黒多量含む。炭粒。 | 25. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまりや強い。 |
| 13. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘質や中弱く、しまり強い。粘厚。 | 26. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。 |
| | 27. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。油土を多く含む。粘厚。 |

0 (1:50) 2m

第104図 RA054



RA054 1号カマド

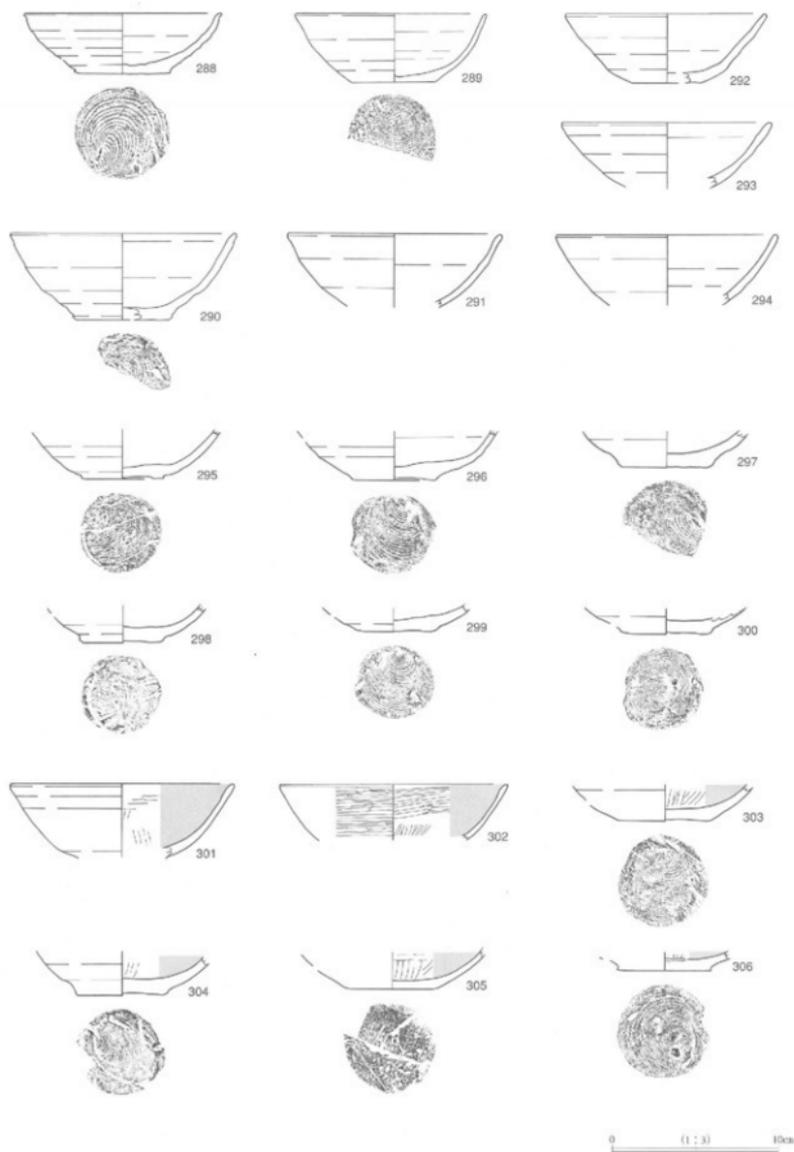
1. 黒色土 (HVR1.77) 粘性やや弱く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (HVR32) 粘性やや弱く、しまりやや強い。φ5-10mmの炭土・炭粒混入を多く含む。
3. 灰褐色土 (HVR37) 粘性弱く、しまり強い。
4. 黒褐色土 (HVR37) 粘性弱く、しまり強い。
5. 黒褐色土 (HVR25) 粘性やや弱く、しまり強い。
6. 黒褐色土 (HVR22) 粘性弱く、しまり強い。
7. 黒色土 (HVR27) 粘性やや弱く、しまり強い。
8. 明褐色土 (7.5VR36) 粘性弱く、しまり強い。硬土。



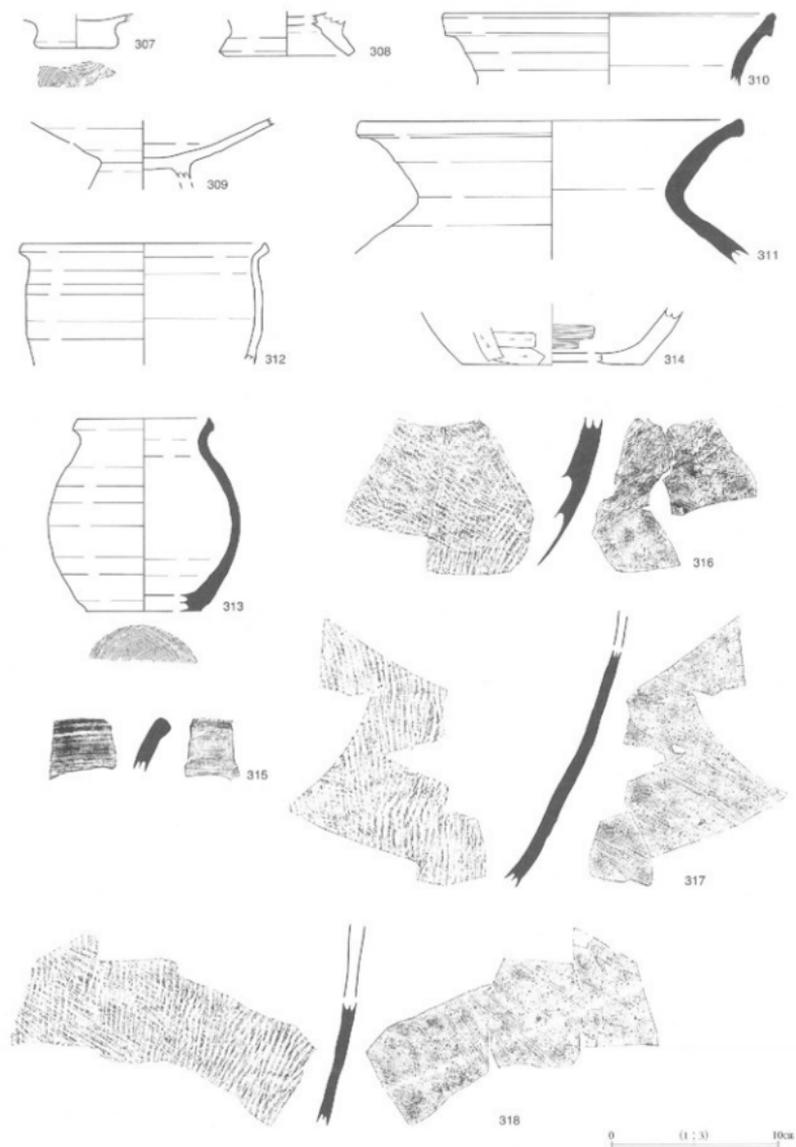
RA054 2号カマド

1. 黒色土 (HVR24) 粘性弱く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (HVR23) 粘性やや弱く、しまり強い。

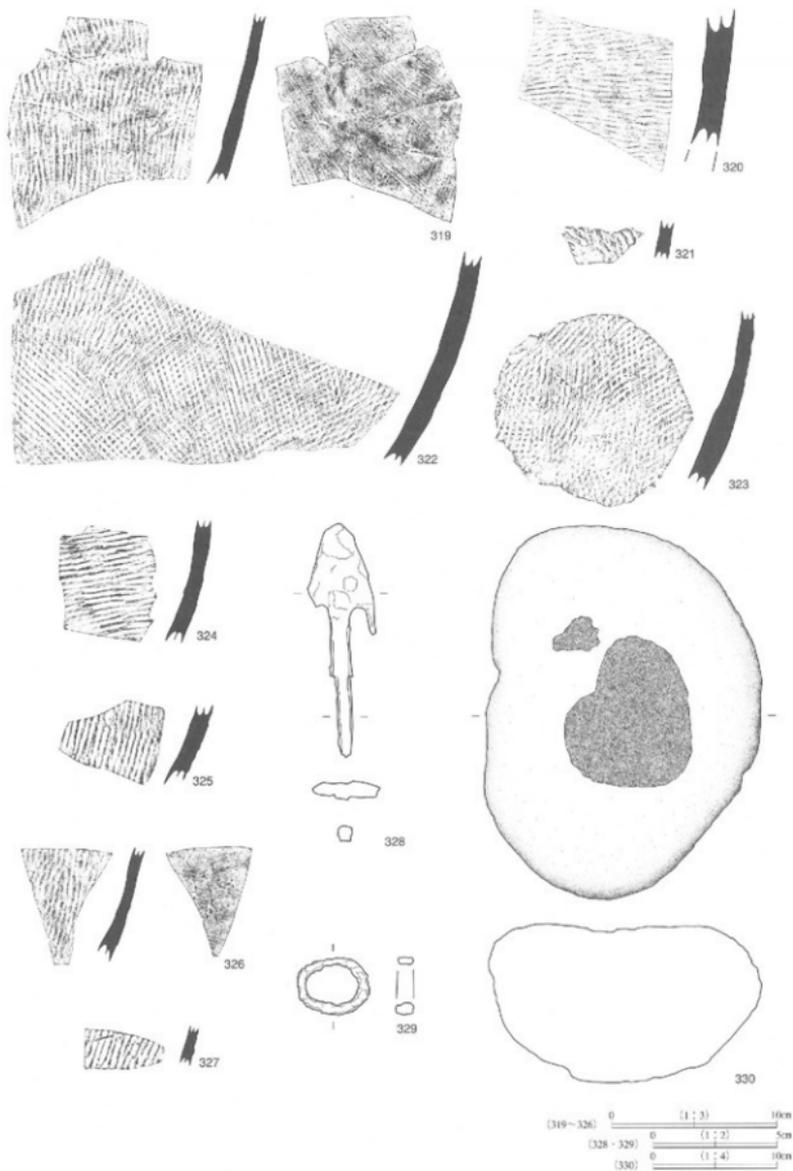
0 (1:25) 1m



第106図 RA054出土遺物 (1)



第107図 RA054出土遺物 (2)



第108図 RA054出土遺物 (3)

R A 110 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 K16n・o、17n・o、18n・oグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。本遺構は調査区において当該期の遺構の中で最も西端に所在しており、西と北側へ下る段丘縁辺部の緩斜面上にある。北壁から3m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 111が東に27mを測り、周辺に当該期の遺構が存在していないことが窺える。

[住居の方向] N-81°-W。南壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は西壁5.18m、北壁6.11m、東壁6.03m、南壁5.71mである。[堆積土] 黒色土と黒褐色土主体で13層に細分した。2層から3層にかけてI和田aテフラがブロック状に堆積している。

[壁・床面] 壁は概ね外傾して立ち上がり、残存状況の良い南壁のみ垂直である。北壁の一部は削平されているため他の壁に比べ残存状況は悪い。壁高は42~56cm、北壁のみ16cm前後である。床面は暗褐色土が全面に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は2~18cm、掘り方はVI層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 東壁と西壁において1基ずつ検出した。中軸線が壁と直交するように設置されている。前者を1号カマド、後者を2号カマドと付している。

1号カマドは袖と燃焼部、煙道を検出した。軸線方向はN-89°-Eである。袖はVI層である地山を削り出して構築している。燃焼部は中央が凹む皿状をしており、平面形は楕円形、規模が1.49×0.54m、層厚13cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から1.24mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。

2号カマドは袖と燃焼部、煙道を検出した。軸線方向はN-104°-Wである。袖は黒色土を貼付て構築している。燃焼部は中央が強く凹む碗状をしており、平面形は不整形、規模が77×58cm、層厚18cmの焼成面がある。焼成面のほぼ中央には支脚が認められ、土師器甕を倒立させて配置している。煙道は煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から1.52mを測る。構築方法は倒立式である。

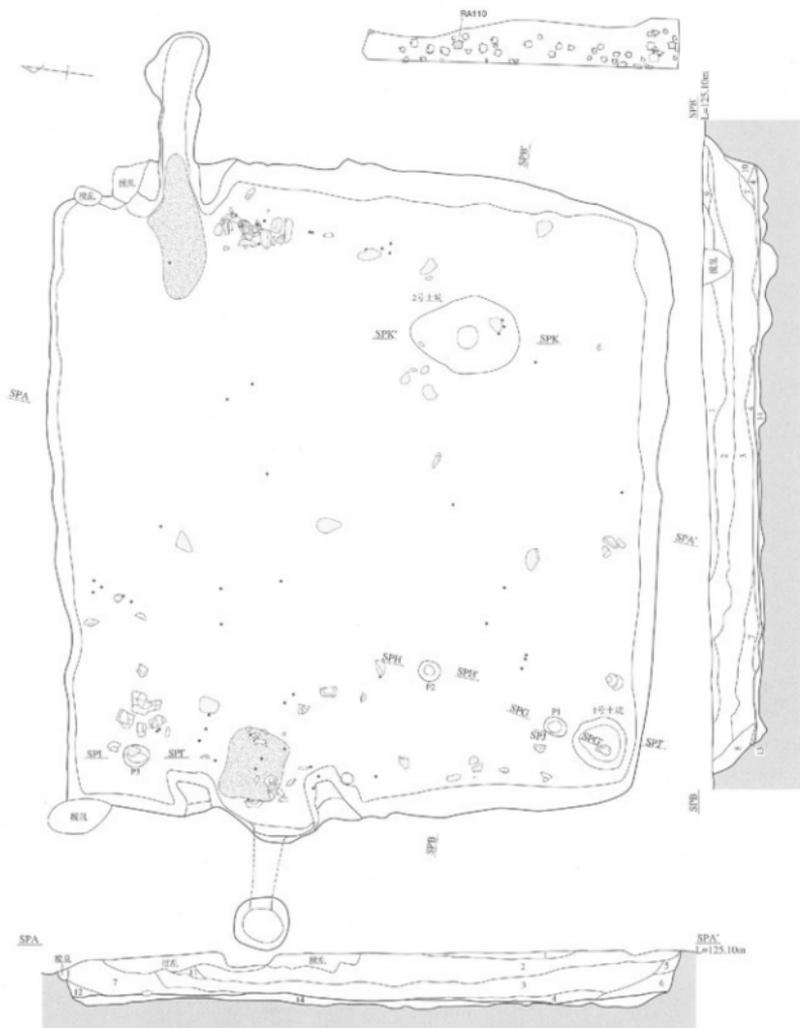
カマドの新旧関係は、2号カマド周辺の方が遺物の出土量が極端に多いことなどから、1号カマドより新しいと考えられる。

[土坑・柱穴] 土坑2基を貼床の掘り下げ時、柱穴3個を床面精査時に検出している。

1号土坑は、平面形は円形、規模は60×53cm、深さは11cmである。須恵器片が1点出土している。2号土坑は、平面形は楕円形、規模は1.1×0.79m、深さは23cmである。1号土坑は配置箇所と土器が出土していることから貯蔵穴と考えられる。

P1~3は、平面形は円形、開口部径は20~30cm、深さは5~10cm、平面形状・規模共に類似している。規模は小さいものの配置位置からP1・3は主柱穴の可能性がある。

[遺物] 土器608点、礫石器6点、鉄製品1点が主に2号カマド周辺の床面から出土している。須恵器坏と土師器坏・甕の大半はロクロ整形によるものだが、353・355の土師器甕は非ロクロである。須恵器坏が主体をなしており、その他の器種は極端に少ない。今回報告する住居の中ではこのように須恵器が多く出土する例は本遺構のみである。331~348は須恵器坏。底部の切り離しはすべて回転へら切りである。これらは分類において示したように4分類でき、体部から口縁部にかけて外反するb類が主体である。a類は、331・334・337・343のような器高の低いi類の割合が高く、340はii類、347・348は器高の高いiii類などが僅かにある。これらの中に黒書土器が4点ある。333は体部に「王」、335・338は底部に「工」、341は底部に「一」と記されている。352は須恵器甕。349・350は土師器坏。



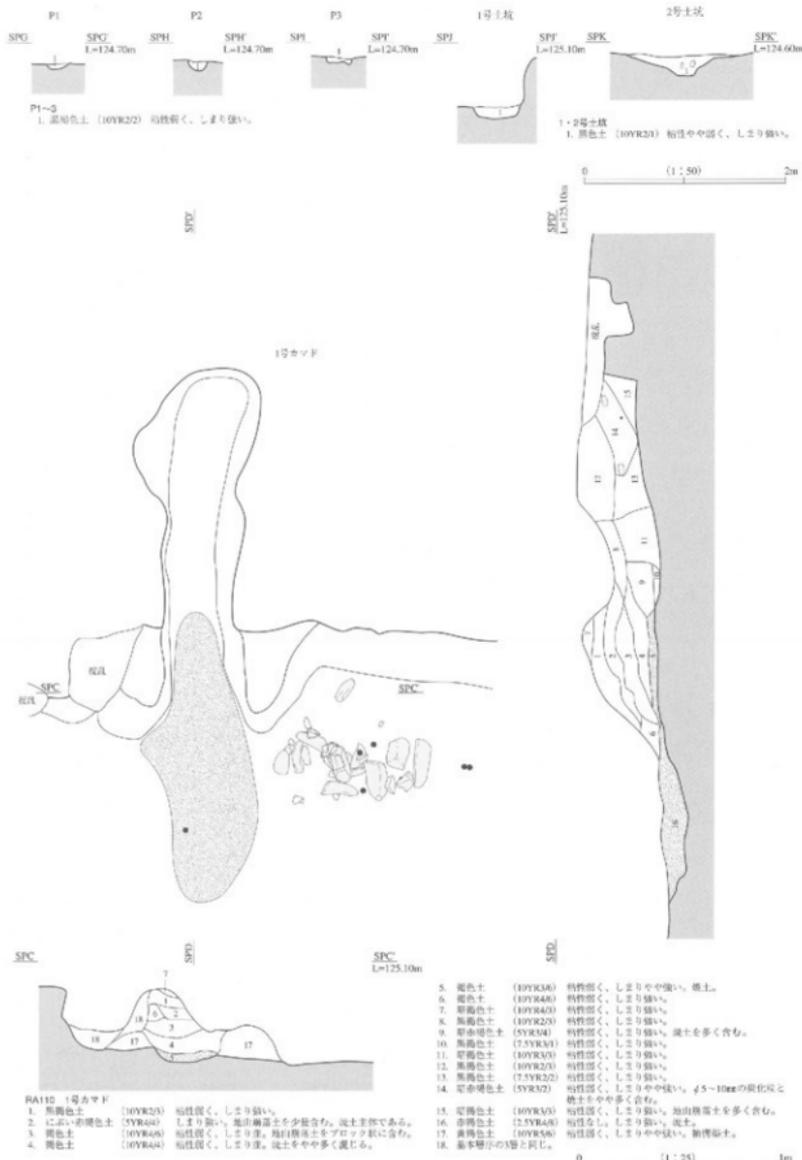
RA110

- | | | |
|--|--|---|
| 1. 黒色土 (HVR21) 粘性弱く、しまりや強い。 | 6. 黒褐色土 (HVR23) 粘性弱く、しまりや強い。地山崩落土をブロック状に少量含む。 | 10. 灰褐色土 (HVR36) 粘性強。しまり強い。地山崩落土。 |
| 2. 黒色土 (HVR17) 粘性や中強く、しまり強い。 | 7. 黒褐色土 (HVR22) 粘性弱く、しまり強い。 | 11. 黒色土 (HVR21) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 3. 黒褐色土 (HVR22) 粘性や中強く、しまり強い。4.3~5cmの平らなアワネブロック状に少量含む。 | 8. 黒色土 (HVR21) 粘性や中強く、しまり強い。地山崩落土をブロック状に含む。 | 12. 暗褐色土 (HVR35) 粘性や中強く、しまり強い。地山崩落土を少量含む。 |
| 4. 暗褐色土 (HVR35) 粘性弱く、しまりや強い。 | 9. 暗褐色土 (HVR22) 粘性や中強く、しまり強い。地山崩落土をブロック状に少量含む。 | 13. 黒色土 (HVR21) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 5. 黒褐色土 (HVR22) 粘性弱く、しまり強い。地山崩落土をブロック状に少量含む。 | | 14. 暗褐色土 (HVR34) 粘性強。しまりや強い。同層。 |

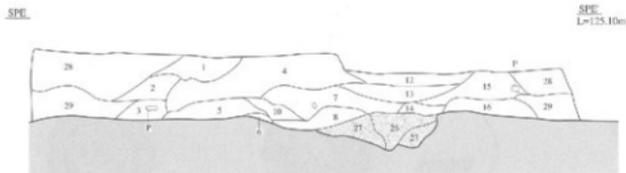
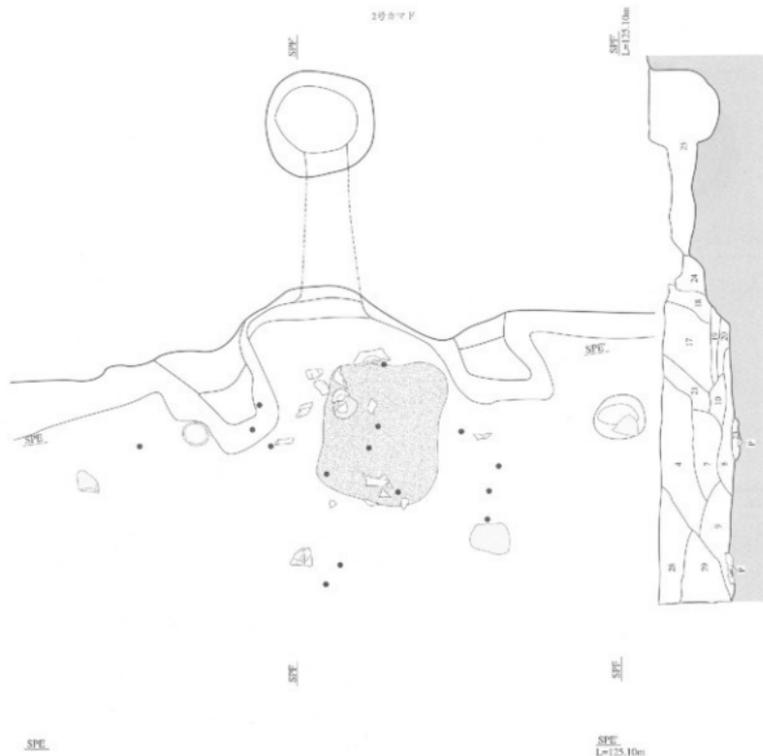
0 (1:50) 2m

第109図 RA110

2 検出された遺構・遺物



第110図 RA110土坑・柱穴、1号カマド

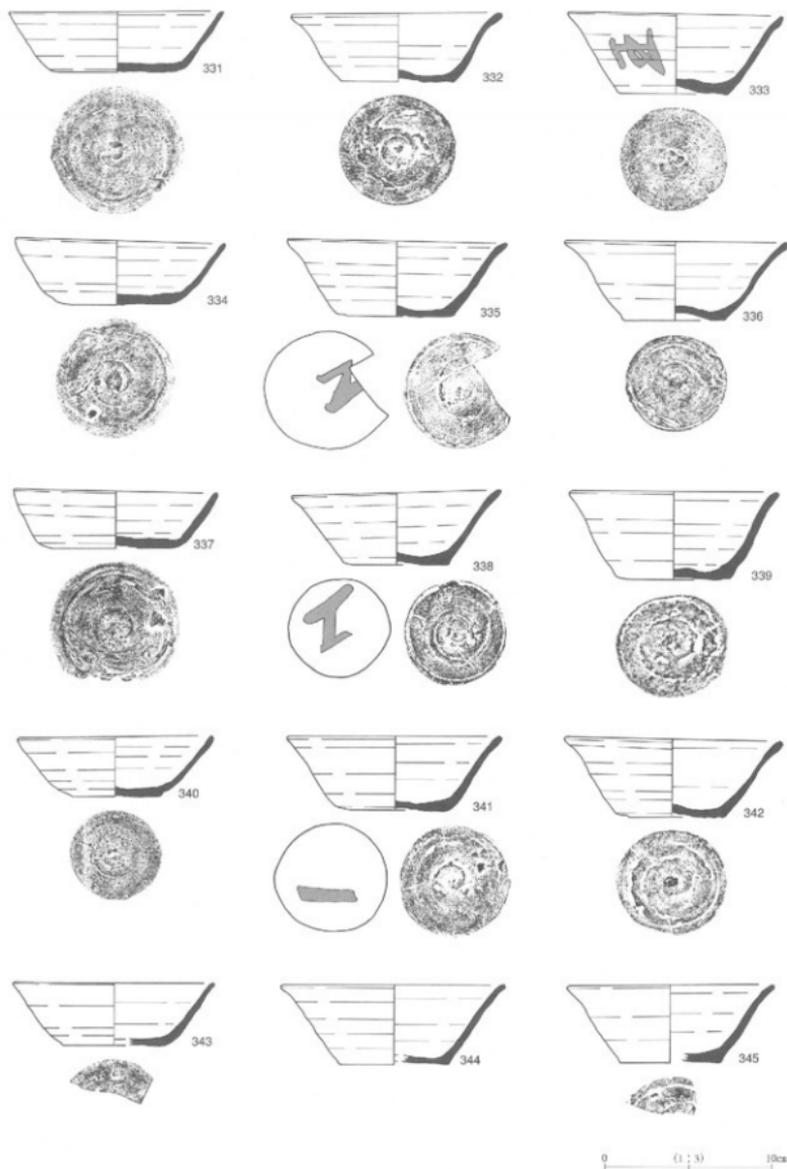


RA110 2号カマド

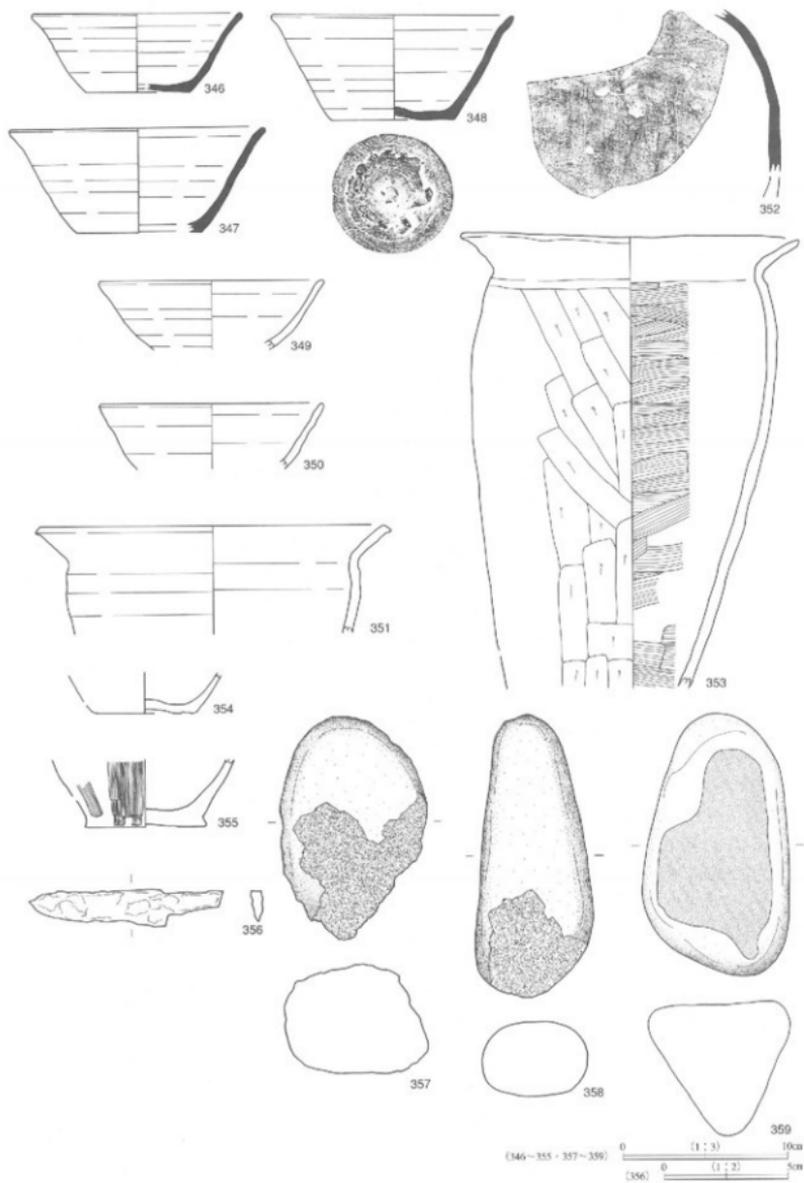
- | | | | |
|------------------|----------------------------------|-------------------|----------------------------|
| 1. 黒褐色土 (OYR22) | 粘性弱く、しまり強い。 | 17. 黒褐色土 (OYR22) | 粘性強、しまりやや強い。 |
| 2. 黒褐色土 (OYR23) | 粘性弱く、しまり強い。 | 18. 灰黄褐色土 (OYR22) | 粘性なし、しまり弱。風山崩落土を少量含む。 |
| 3. 黒褐色土 (OYR22) | 粘性やや強、しまり強い。 | 19. 黒褐色土 (OYR21) | 粘性弱く、しまりやや強い。風山崩落土をやや多く含む。 |
| 4. 黒褐色土 (OYR21) | 粘性弱く、しまり強い。 | 20. 黒褐色土 (OYR22) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 5. 黒土 (OYR1.7/9) | 粘性やや強、しまり強い。燻煙層土。 | 21. 黒褐色土 (OYR23) | 粘性弱く、しまり強い。風山崩落土を少量含む。 |
| 6. 黒褐色土 (SVR22) | 粘性弱く、しまり強い。燻煙層土。 | 22. 黒褐色土 (OYR23) | 粘性弱く、しまり強い。3~5mmの炭化灰を微量含む。 |
| 7. 黒褐色土 (OYR23) | 粘性やや強、しまり強い。 | 23. 黒褐色土 (OYR23) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 8. 黒褐色土 (OYR23) | 粘性やや強、しまり強い。4.3~5mmの燻土と炭化灰を少量含む。 | 24. 灰黄褐色土 (OYR22) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 9. 黒褐色土 (OYR23) | 粘性やや強、しまり強い。4.3~5mmの燻土と炭化灰を微量含む。 | 25. 灰褐色土 (OYR20) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 10. 灰褐色土 (OYR23) | 粘性弱く、しまり強い。4.3~5mmの燻土と炭化灰を微量含む。 | 26. 焼土。 | |
| 12. 灰褐色土 (OYR23) | 粘性やや強、しまり強い。 | 27. 焼土。 | |
| 13. 灰褐色土 (OYR23) | 粘性弱く、しまりやや強い。 | 28. 基本層序の2層に対応。 | |
| 14. 灰褐色土 (OYR23) | 粘性やや強、しまりやや強い。 | 29. 基本層序の3層に対応。 | |
| 15. 灰褐色土 (OYR23) | 粘性やや強、しまりやや強い。 | | |
| 16. 灰土 (OYR21) | 粘性弱く、しまり弱。燻煙層土。 | | |

0 (1:25) 1m

第111図 RA110 2号カマド



第112図 RA110出土遺物 (1)



第113図 RA110出土遺物(2)

351・353～355は土師器甕。先述したように353と355以外は非ロクロである。残存している354の底部切り離しは回転ヘラ切りである。356は刀子。357～359は礫石器。357・358はⅠ類、359はⅡ類である。礫石器以外に礫は61点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。これらの礫の6割近くは被熱していることから、カマド構築材として用いられたものが含まれていると思われる。
[遺構時期] 9世紀初頭に属する。

RA111竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 L21e・fグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は調査区の中でも標高が高く南側から続く平坦面上にあり、本遺構が存在する面から緩やかに北東に向かって下っていく。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、RA110は西に27m、RA112は南東に9mを測る。攪乱により南東・南西隅及び北壁の一部は削平されている。

[住居の方向] N-28°-E。西壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は確認できた北西隅から方形と思われる。規模は東西4.91×南北4.80mである。

[堆積土] 黒褐色上主体でⅡ層に細分した。4・6層中において十和田a火山灰がブロック状に堆積している。

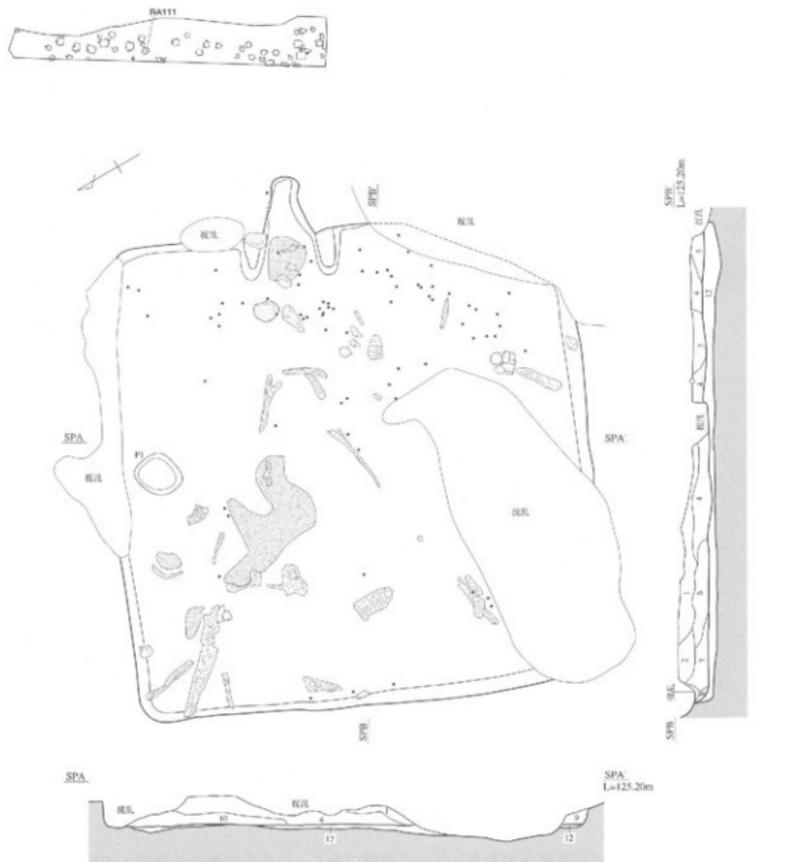
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は20～33cmである。床面は地山を多く含む黒褐色土が全面に貼られて履くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は2～9cm、掘り方はⅥ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。東壁中央よりやや北壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-123°-Eである。袖は黒褐色土を貼付て構築し、左袖には構築材として礫を直立させて配置している。燃焼部は中央が凹む皿状をしており、平面形は楕円形、規模は44×37cm、層厚8cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって登るように形成され、焼成面から59cmを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認できたことと、煙道の脇がオーバーハングが認められることから刳抜式である。燃焼部の手前にある大きな礫は被熱していることから、天井もしくは袖の構築材に用いられたものと思われる。

[土坑・柱穴] 柱穴1個を貼床の掘り下げ時に検出した。平面形は楕円形、規模は49×43cm、深さは10cmである。

[炭化材・焼土] 床面より僅かに上位で炭化材とブロック状の焼土を検出した。炭化材は南北壁と平行するものと直交するものが大半であり、壁際で直立しているものを僅かに確認できた。またカヤ状の炭化物は炭木材より出土量が少ないものの、床面の西半部で認められる。カヤ状のものも住居の軸線に平行するものと直交するものがある。焼土は床面中央から北内にかけてブロック状に点在している。これらはすべて焼失時に伴うものと考えられる。炭化材は樹種同定を行ったが、クリ材との結果が得られている(305頁参照)。

[遺物] 土器352点、礫石器3点がカマド周辺の床面から出土している。土師器はロクロ整形であるのに対して、土師器甕は非ロクロである。360～366は土師器環Ⅰa・c類。361のみa類、他はⅠc・Ⅱ・Ⅲ類である。367は土師器環Ⅲa類。368～372は土師器環Ⅱ類。369のa類以外はすべてc類である。底部切り離しは概ね回転系切りが主体をなし、371のみ再調整されている。373～375は土師器高台付環。376～378は土師器甕。376と377は先述したように非ロクロであることから体部は酷く歪んでおり、どちらの口縁部も横ナデにより短く折り返されている。それらの底部には木炭痕が認められる。379は須恵器甕。380～382は礫石器。380はⅡ類、381はⅠ類、382はⅥ類である。礫石器以外に礫は35点

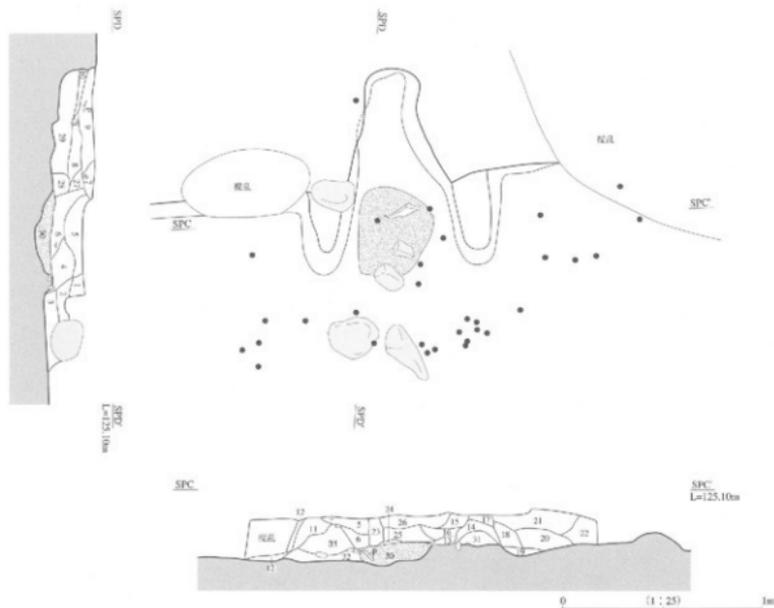


RA111

1. 黒灰土 (01YR1/2) 粘性强、しまり強い、 $\delta 5 \sim 10\text{mm}$ の炭化粒を少量含む。
2. 黒褐色土 (01YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い、 $\delta 3 \sim 5\text{mm}$ の炭化粒を複数含む。
3. 黒褐色土 (01YR2/2) 粘性强く、しまり強い、堆積層末を少量含む。
4. 黒褐色土 (01YR2/2) 粘性强く、しまり強い、 $\delta 3 \sim 7\text{mm}$ の炭化粒と焼土を少量含む。
5. 黒色土 (01YR1/3) 粘性强く、しまり強い。
6. 黒褐色土 (01YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い、焼土・炭化粒を伴う層。十和田マツラをブロック状に散見する。
7. 黒褐色土 (01YR3/1) 粘性强く、しまり強い。
8. 黒褐色土 (01YR2/2) 粘性强く、しまり強い、堆積層末を少量含む。
9. 黒褐色土 (01YR2/2) 粘性强く、しまりや強い、堆積層末を少量含む。
10. 黒褐色土 (01YR3/1) 粘性强く、しまり強い、 $\delta 3 \sim 7\text{mm}$ の炭化粒を少量含む。
11. 黒褐色土 (01YR2/2) 粘性强く、しまり強い、層末。

0 (1:50) 2m

第114図 RA111



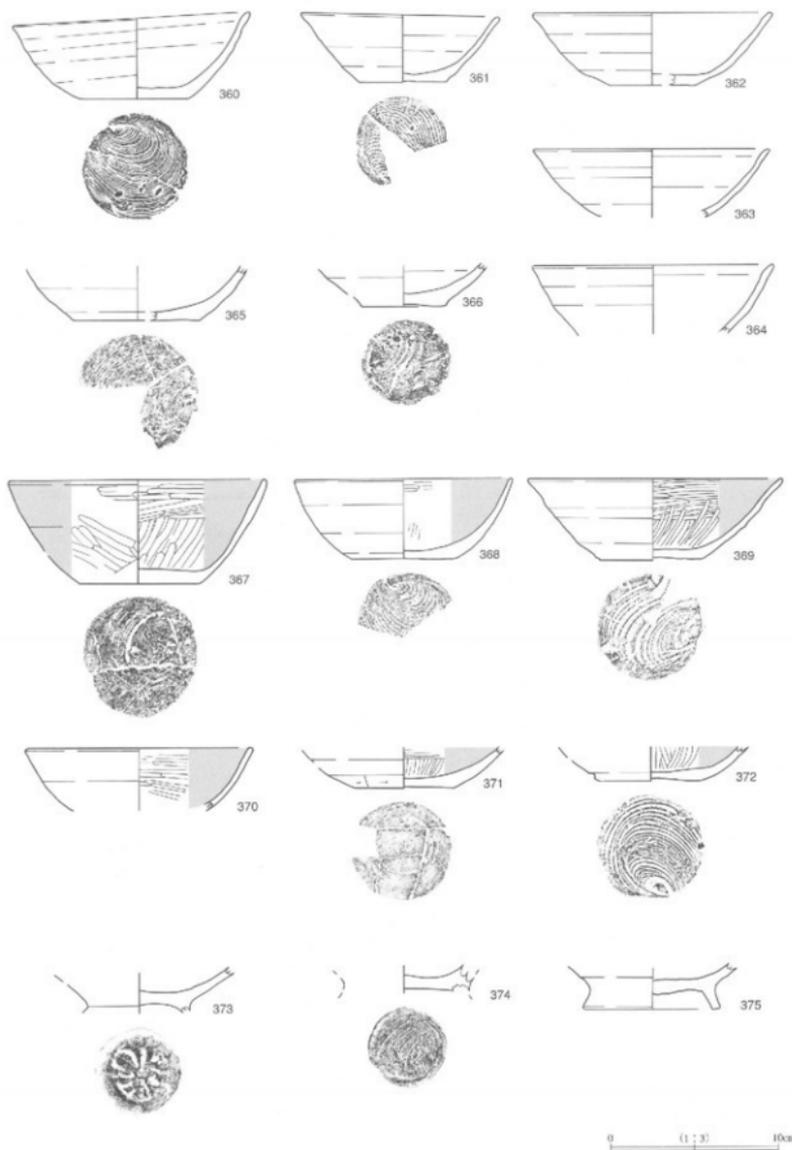
RA111カマド

- | | | | |
|---------------------|---|---------------------|--------------------------------------|
| 1. 黒褐色土 (10YR2/2) | 焼粘土、しまり強い。 | 18. 黒色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 2. 黒褐色土 (10YR2/3) | 焼粘土、しまりやや弱い。 | 19. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 3. 黒褐色土 (10YR2/2) | 焼粘土、しまり強い。 | 20. 黒色土 (10YR1/2) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 4. 黒褐色土 (10YR3/1) | 焼粘土、しまりやや弱い。 | 21. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性やや強く、しまり強い。 |
| 5. 黒褐色土 (10YR2/2) | 焼粘土、しまりやや弱い。 | 22. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 6. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。#3-5mの
灰化層・灰土多量を含む。 | 23. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。#3-7mの
粘土・灰化粒を多量含む。 |
| 7. 黒色土 (10YR1/2) | 粘性やや強く、しまり強い。#5-20m
の灰化層・灰土をやや多く含む。 | 24. 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 8. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。 | 25. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 9. 明赤褐色土 (5YR3/8) | 燻土の灰土と混じられる。 | 26. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 10. 暗褐色土 (7.5YR3/5) | 粘性弱く、しまり強い。#5-10mの
粘土・灰化粒を多量含む。 | 27. 暗褐色土 (10YR3/4) | 粘性弱く、しまり強い。#5-10mの
粘土・灰化粒を含む。 |
| 11. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。 | 28. 褐色土 (10YR4/6) | 粘性弱く、しまり強い。灰土・灰化粒を多量含む。
もしくは燻土層上。 |
| 12. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまりやや弱い。 | 29. 暗褐色土 (10YR3/4) | 粘性弱く、しまり強い。#3-5mの
灰化粒を多量含む。 |
| 13. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性やや強く、しまりやや強い。#3-
5mの粘土・灰化粒をやや多く含む。 | 30. 暗赤褐色土 (5YR3/0) | 粘性弱く、しまり強い。#5-7mの
粘土・灰化粒を多量含む。 |
| 14. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性やや強く、しまり強い。燻土層上。 | 31. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性弱く、しまりやや強い。燻土層上。
#5cm程度の層を含む。 |
| 15. 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性弱く、しまりやや弱い。 | 32. 暗褐色土 (10YR3/5) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 16. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性やや強く、しまりやや強い。 | | |
| 17. 黒褐色土 (10YR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。 | | |

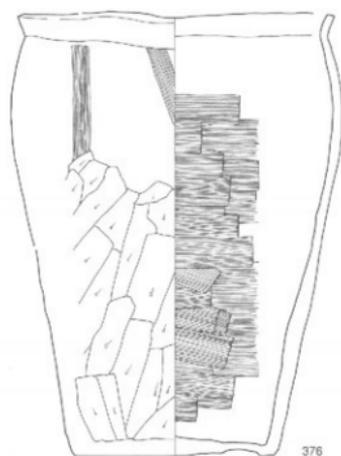
第115図 RA111カマド

出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然産である。これらの礫の5割近くが燻熱していることから、カマド構築材として用いられていたものが含まれていると思われる。

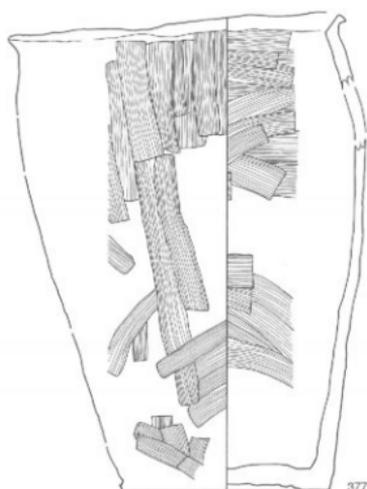
[遺構時期] 9世紀後半に属する。



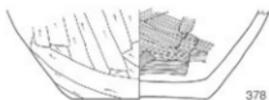
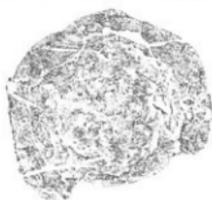
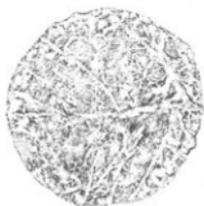
第116図 RA111出土遺物(1)



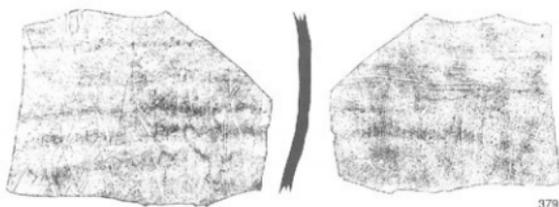
376



377



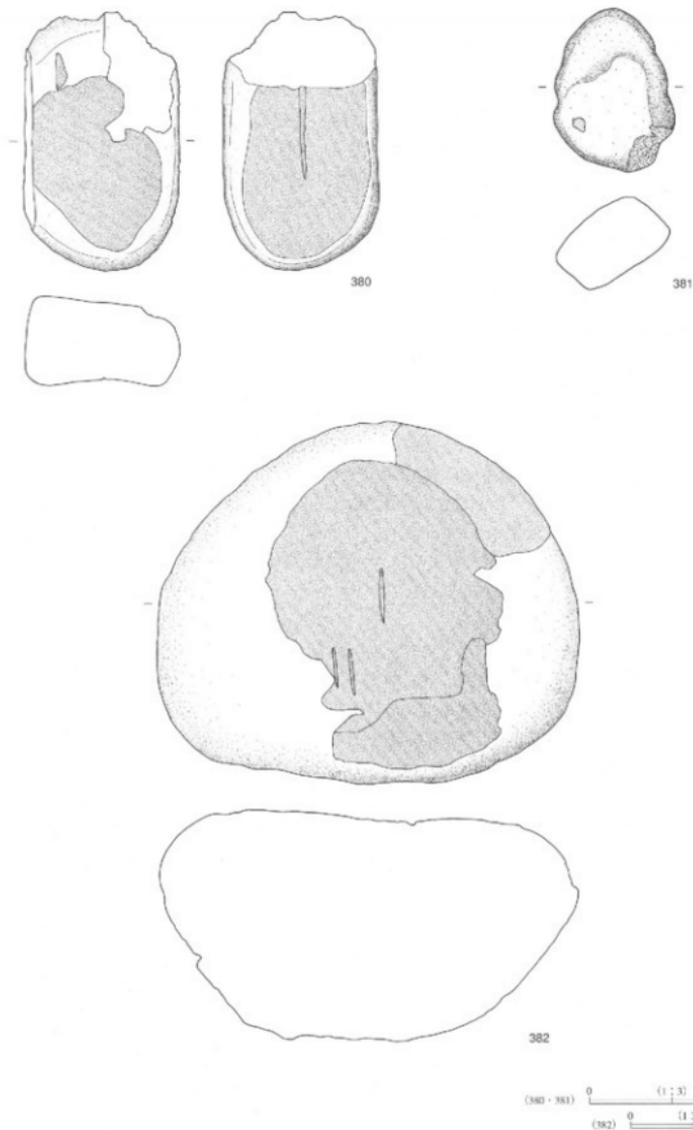
378



379

0 (1:3) 10cm

第117図 RA111出土遺物 (2)



第118図 RA111出土遺物(3)

R A 112 竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕 5 L 22・23c・1グリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は、東へ緩やかに下る段丘縁辺部の斜面上にあり、調査区の中で最も標高の高い。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 111は北東9m、R A 113は北東に29mを測る。掘乱により西壁、北西・南東隅及び床面の一部が削平されているため、西側半分はほぼ床面のみを構成する。

〔住居の方向〕 N-88°-E。北壁を基準としている。

〔平面形・規模〕 平面形は残存している北東隅から方形と思われる。規模は東壁2.07m、南壁1.79m、北壁1.41mである。

〔堆積土〕 黒色・黒褐色土主体で4層に細分した。

〔壁・床面〕 壁は大半が削平されていることから残存状況は悪い。確認できた壁は外傾して立ち上がる。東壁や北壁の壁高は4~12cmである。床面は地山を多く含む暗褐色土が全面に貼られてややしまり、東壁付近が高く西に向かって緩やかに傾斜している。貼床の厚層は2~12cm、掘り方はⅥ層を掘り込んで形成されている。

〔カマド〕 袖と燃焼部、煙道を検出した。東壁中央よりやや北壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。北壁と中軸線の距離は1.02mを測り、軸線方向はN-91°-Eである。袖は黒褐色土を貼付て構築している。両袖には構築材が認められ、共に礫を直立させて配置している。燃焼部は中央が僅かに凹み皿状をしており、焼成面は残存していない。煙道は煙り出しが掘乱に削平されている。煙り出しに向かって傾斜するように形成され、壁から1.09mを測る。煙道構築方法は煙道の脇がオーバーハンクしていることから削抜式である。

〔土坑・柱穴〕 柱穴3個を床面において検出した。平面形は円形、開口部径は20~30cm、深さは8~14cmである。P 2以外の平面形の規模は類似している。柱穴から柱痕を確認できなかったが、それらの配置からP 1・3は主柱穴と思われる。

〔遺物〕 土器173点、礫石器2点、鉄製品1点がカマド周辺の床面から出土している。土器器坏・甕はロクロ整形である。383~386は土器器坏。c類が主体をなし、僅かにa類が認められる。387は土器器坏Ⅱ類。墨書土器で外面に「佳」と記されている。底部切り離しは回転糸切りが主体である。388・389は土器器高台付坏。388はⅠ2a類、389はⅡ2類である。390の土器器甕は体部にタタキ目が見られる。391は須恵器甕。低いものが高台を有している。形状から瓶の可能性もある。392は軸棒の端部が欠損している紡錘車である。393・394は礫石器。393はⅡ類、394はⅢ類である。礫石器以外に礫は22点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。これらの礫はカマド左袖の前方にまとまって出土していることと8割近くが被熱していることから、カマド構築材として用いられていたと思われる。

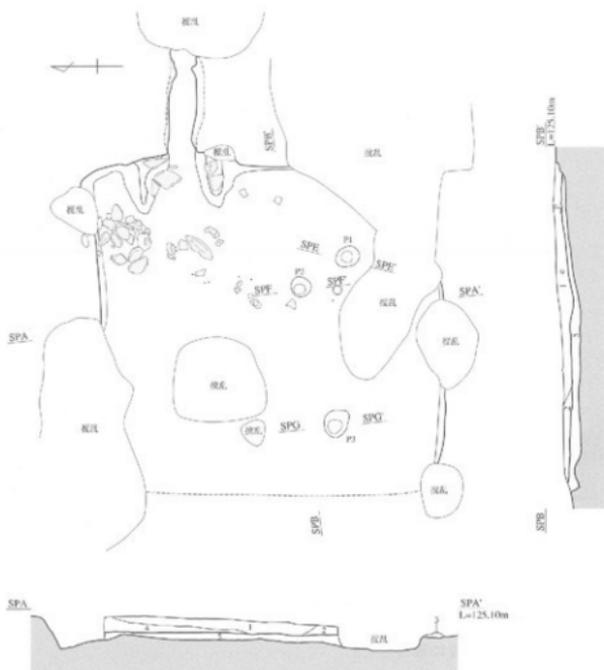
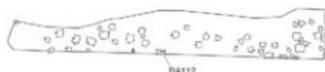
〔遺構時期〕 9世紀後半に属する。

R A 113 竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕 5 K 20a・b・c、21a・b・cグリッドに位置する。遺構検出面はⅤ層である。本遺構は北に向かって緩やかに登っていく段丘縁辺部の平坦部にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 112は南西に29m、R A 115は東に37m、R A 114は北東に35mを測る。掘乱により東壁中央は削平されている。

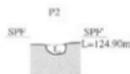
〔住居の方向〕 N-92°-W。南壁を基準としている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形である。規模は西壁4.61m、北壁4.27m、東壁4.39m、南壁4.29mである。



RA112

1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性強く、しまりやや強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強く、しまり強い。
4. 黒色土 (10YR2/1) 粘性強く、しまりやや強い。崩山腐葉土を少量含む。
5. 紅褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、しまり弱い。腐葉。

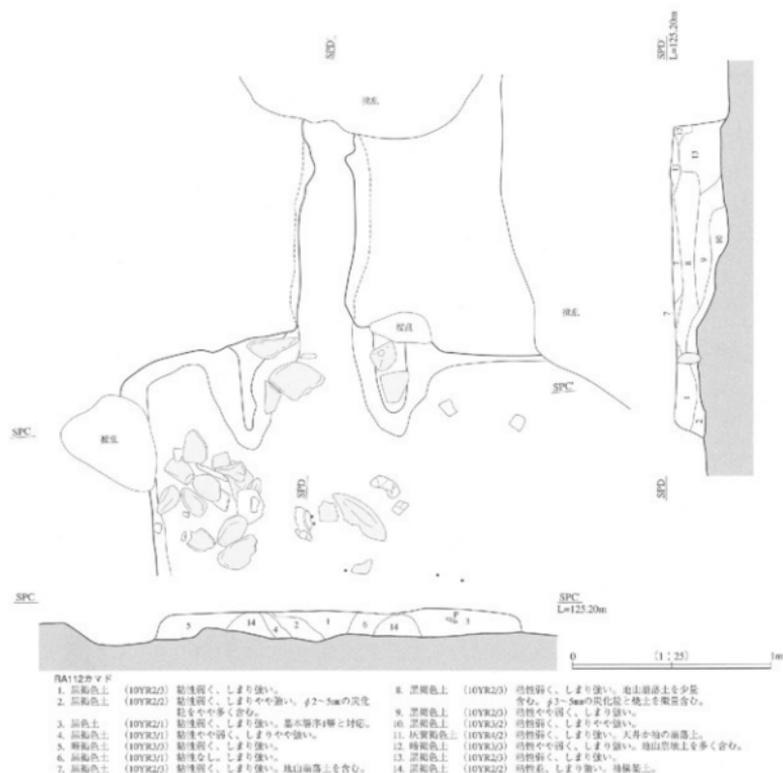


P1-3

1. 黒色土 (10YR1/1) 粘性強く、しまりやや強い。

0 (1:50) 2m

第119図 RA112

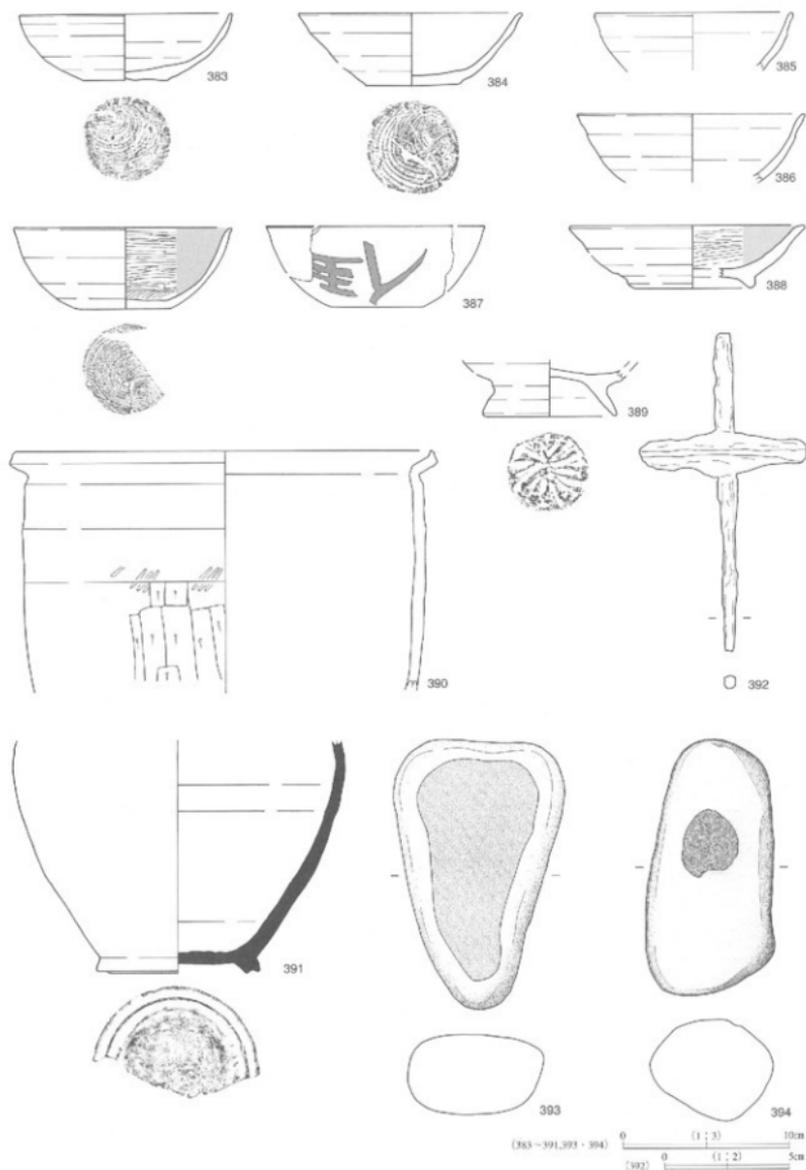


第120図 RA112カマド

[堆積土] 黒色土主体で3層に細分した。

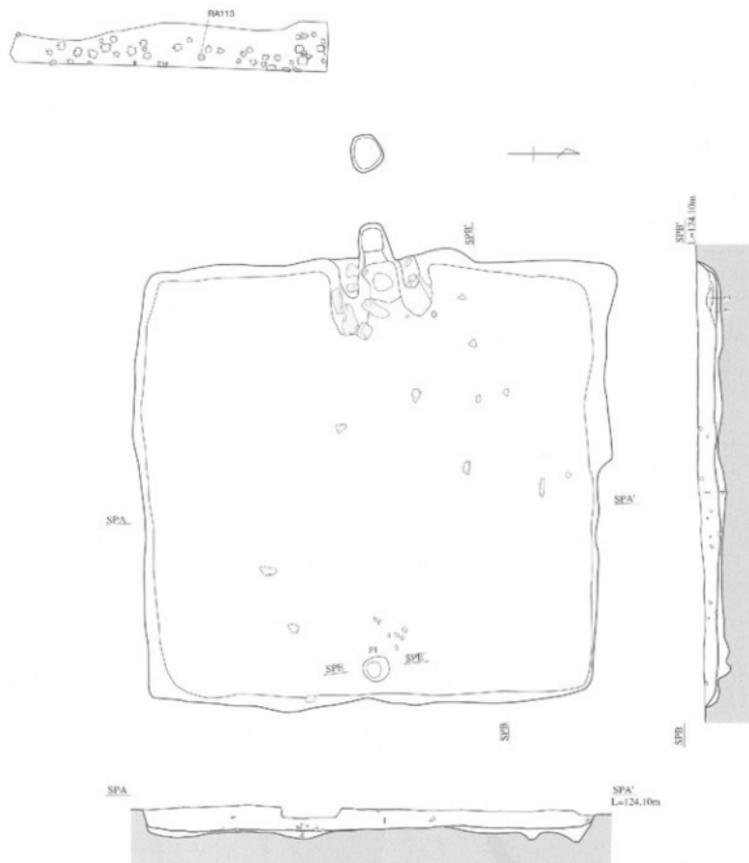
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は10～18cmである。床面は黒色土が全面に貼られて硬くしまり、北壁から南壁に向かって緩やかに傾斜している。貼床の層厚は1～12cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。貼床の層高が薄い床面では地山の礫が認められる。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。西壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-100°-Wである。袖は黒褐色土主体に褐色土を貼付けて構築している。両袖には構築材が認められ、共に複数の礫を組み合わせ配置している。燃焼部は中央部が凹む皿状をしているが、焼成面は残存していない。煙道は中央部が一部削平されていることから西壁と煙り出し付近のみの精査である。煙り出しに向かって傾斜するように形成され、燃焼部から1.31mを測る。煙道構築方法は残存状況が悪いことから不明である。燃焼部や左袖から出土した礫は、被熱していることや袖に使用されている礫の形状が同一規模であることから、カマド構築材として用いられていたものが崩落したと考えられる。



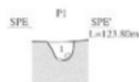
第121図 RA112出土遺物

2 検出された遺構・遺物



RA113

1. 黒色土 (10YR2/1) 粘質や中硬土、L2より硬い。
2. 暗褐色土 (10YR3/5) 粘質弱土、L2より硬い。
3. 黒色土 (10YR2/1) 粘質や中硬土、L2よりやや軟い。
4. 黒色土 (10YR2/1) 粘質、L2よりやや硬い、断面を多く含む、結核。

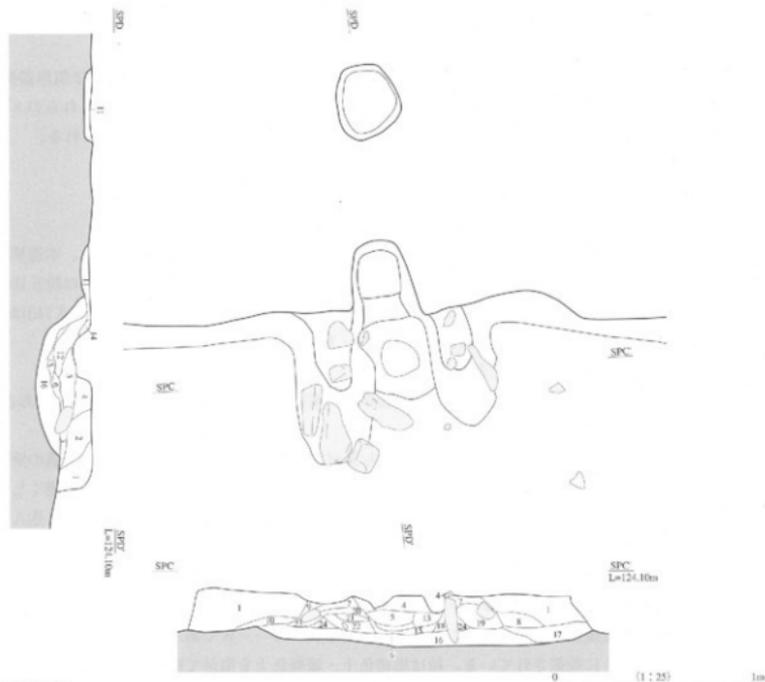


P1

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘質弱土、L2より硬い。

0 (1:50) 2m

第122図 RA113



RA113カマド

1. お多野舟の形と同じ。
2. 黒色土 (HYR21) 黏性やや強く、しまり強い、 $\phi 3-5\text{mm}$ の焼土・炭化粒を少量含む。
3. 黒褐色土 (HYR22) 黏性弱、しまりやや弱い。
4. 黒色土 (HYR17) 黏性やや強く、しまりやや強い。
5. 黒褐色土 (HYR23) 黏性強く、しまりやや強い、 $\phi 5-10\text{mm}$ の焼土・炭化粒をやや多く含む。
6. 灰褐色土 (HYR42) 黏性、しまり共に強い。黒緑装土。
7. 黒色土 (HYR17) 黏性、しまり共に強い。
8. 黒褐色土 (HYR21) 黏性、しまり共に強い。
9. 黒色土 (HYR21) 黏性、しまり共に強い。
10. 黒褐色土 (HYR21) 黏性、しまり共に強い。
11. 黒色土 (HYR21) 黏性やや弱く、しまりやや強い、 $\phi 5\text{mm}$ の炭化粒を少量含む。
12. 黒褐色土 (HYR22) 黏性、しまり強い、 $\phi 5-10\text{mm}$ の焼土・炭化粒を微量含む。

13. 褐色土 (HYR46) 粘性、しまり強い。天押面落土。
14. 灰黄褐色土 (HYR42) 粘性、しまり共にやや強い。天押面落土。
15. 黒褐色土 (HYR22) 粘性弱く、しまり強い、 $\phi 5-10\text{mm}$ の炭化粒・焼土を多く含む。
16. 黒色土 (HYR17) 粘性、しまり共にやや弱い。
17. 黒色土 (HYR21) 粘性弱く、しまりやや強い。張り方。
18. 褐色土 (HYR46) 粘性、しまり共に強い。黒緑装土。
19. 褐色土 (HYR46) 粘性、しまり共に強い。黒緑装土。
20. 黒褐色土 (HYR21) 粘性、しまり共にやや強い。黒褐色土。
21. 褐色土 (HYR17) 粘性、しまり共に強い。黒緑装土。
22. に近い黒褐色土 (HYR24) 粘性、しまり共にやや弱い。黒褐色土を少量含む。黒緑装土。
23. に近い黒褐色土 (HYR49) 粘性、しまり共に強い。黒緑装土。
24. 黒褐色土 (HYR22) 粘性、しまり共にやや弱い。黒褐色土。



第123図 RA113カマド・出土遺物

[土坑・柱穴] 柱穴1個を貼床の掘り下げ時に検出した。南壁中央に位置しており、平面形は円形、開口部径は26cm、深さは18cmである。

[遺物] 土器76点が床面を中心に出土している。395はロクロ整形の土師器甕。396～398は須恵器甕。礫石器以外に礫は21点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。これらの8割近くは被熱していることから、カマド構築材として用いられたものが含まれていると思われる。

[遺構時期] 9世紀後半から10世紀前半に属する。

RA114竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5M17u・v、18u・vグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は段丘のほぼ平坦面から緩やかに登っていく段丘縁辺部の斜面上にある。北壁から12m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、RA113は南西に35m、RA115は南に6m、RA116は南東に9mを測る。攪乱により西壁・東壁が削られている。

[住居の方向] N-8°-W。西壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は北壁3.68m、東壁3.53m、南壁3.70m、西壁3.53mである。

[堆積土] 黒褐色土が主体で19層に細分した。

[壁・床面] 壁は垂直もしくはやや外傾しながら立ち上がる。壁高は20～26cmである。北東隅の壁の残存状況が悪く他の壁と比べ壁高は低い。床面は地山を多く含む黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、北東隅が僅かに高いもののほぼ平坦である。貼床の層厚は1～14cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。貼床の薄い箇所では礫層が確認できる。

[カマド] 北壁中央と東壁の中央より南壁側において1基ずつ、中軸線が壁と直交するように設置されている。前者を1号、後者を2号カマドと付している。

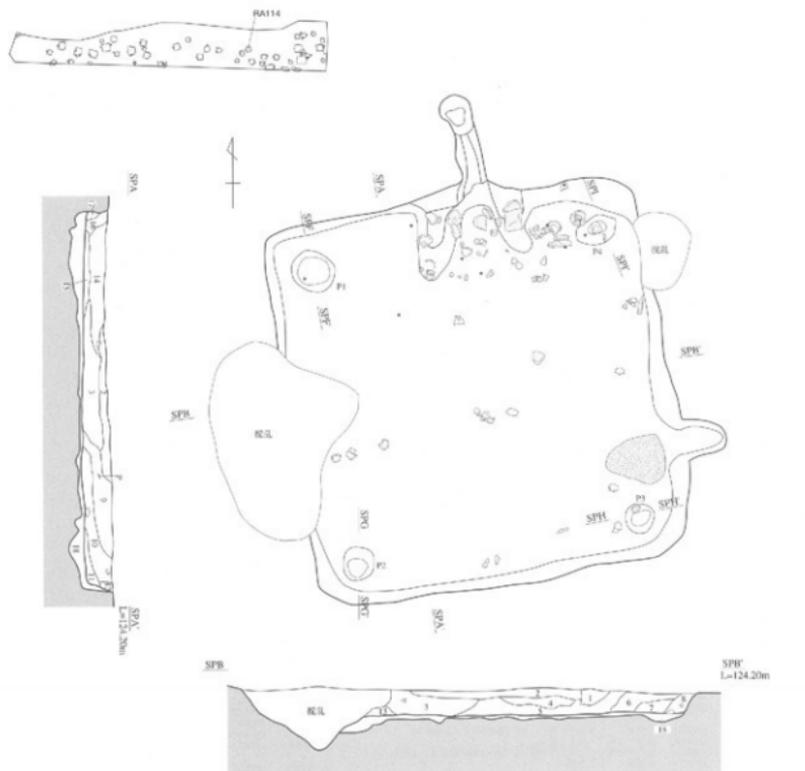
1号カマドは袖と燃焼部、煙道を検出した。軸線方向がN-8°-Wである。1号カマドは北壁中央より僅かに東壁寄りに設置されている。袖は黒褐色土・暗褐色土を貼付て構築している。両袖には構築材が認められ、共に礫を直立させて配置している。燃焼部は中央が凹み皿状であるが、焼成面は残存していない。煙道は燃焼部において段差が設けられ、そこから煙り出しに向かって緩やかに登っており、壁から94cmを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。

2号カマドは煙道と燃焼部を検出した。軸線方向はN-77°-Eである。燃焼部はほぼ平坦であり、平面形は不整形、規模は59×51cm、厚さ2cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から63cmを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。

カマドの新旧は残存状況と遺物の出土状況から1号カマドが新しいものと考えられる。

[土坑・柱穴] 柱穴4個を床面検出時に検出した。P1～4は、平面形状は円形、開口部径は33～44cm、深さは6～12cm、平面形状と規模共に類似している。これらは住居四隅の対角線上に配置されていることから主柱穴と考えられる。

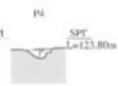
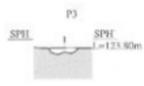
[遺物] 土器187点、礫石器1点、鉄製品1点が1号カマドの右袖脇の床面を中心に出土している。土師器杯・蓋はすべてロクロ整形である。399～413は土師器杯I類。c類が主体をなし、僅かにa類が認められる。主体であるIc類の中ではiiiが最も多い。414・415・417～423は土師器杯II類。i・iiiがほぼ同数存在している。底部切り離しは回転系切りが主体であり、414・415のみ再調整されている。416は土師器杯III類。他類の杯と比べて法量が極めて小さい。424はI2a類の土師器高台付杯で高台が欠損している。425は土師器蓋。つまみと天井部はそれぞれ穿孔されている。天井部に穿孔が2カ



RA114

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 腐葉土、散乱。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
5. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまりやや強い。
6. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱く、しまり強い。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。残山崩落土と少量存在。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。

10. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱く、しまり強い。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
13. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまり強い。
14. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
15. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱く、しまり強い。
16. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
17. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
18. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。散乱。

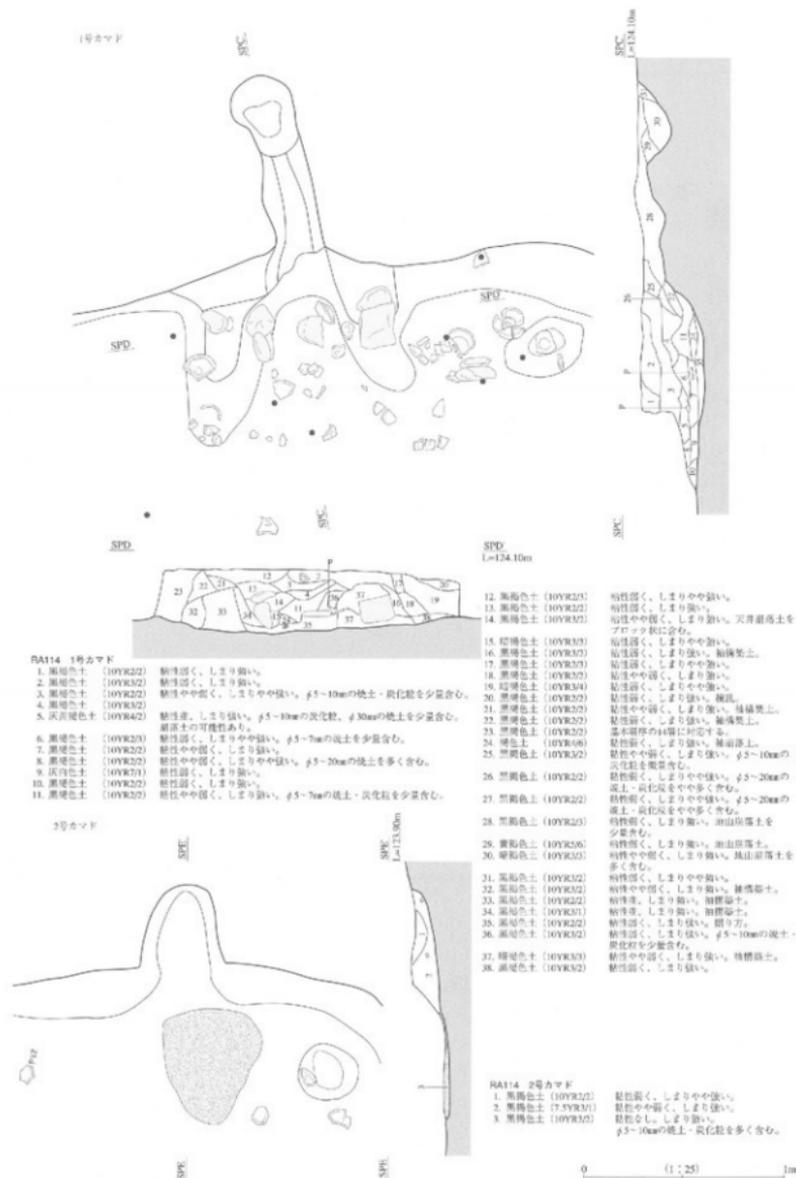


P1-4

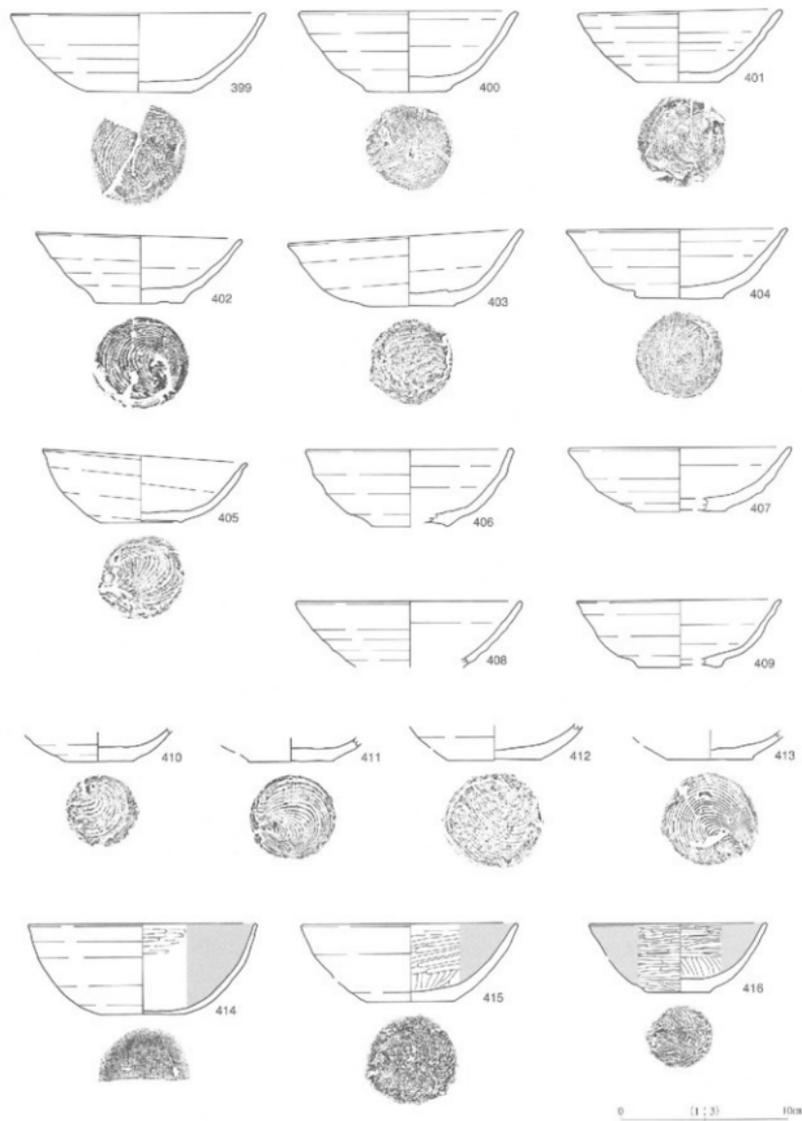
1. 褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。

0 (1:50) 2m

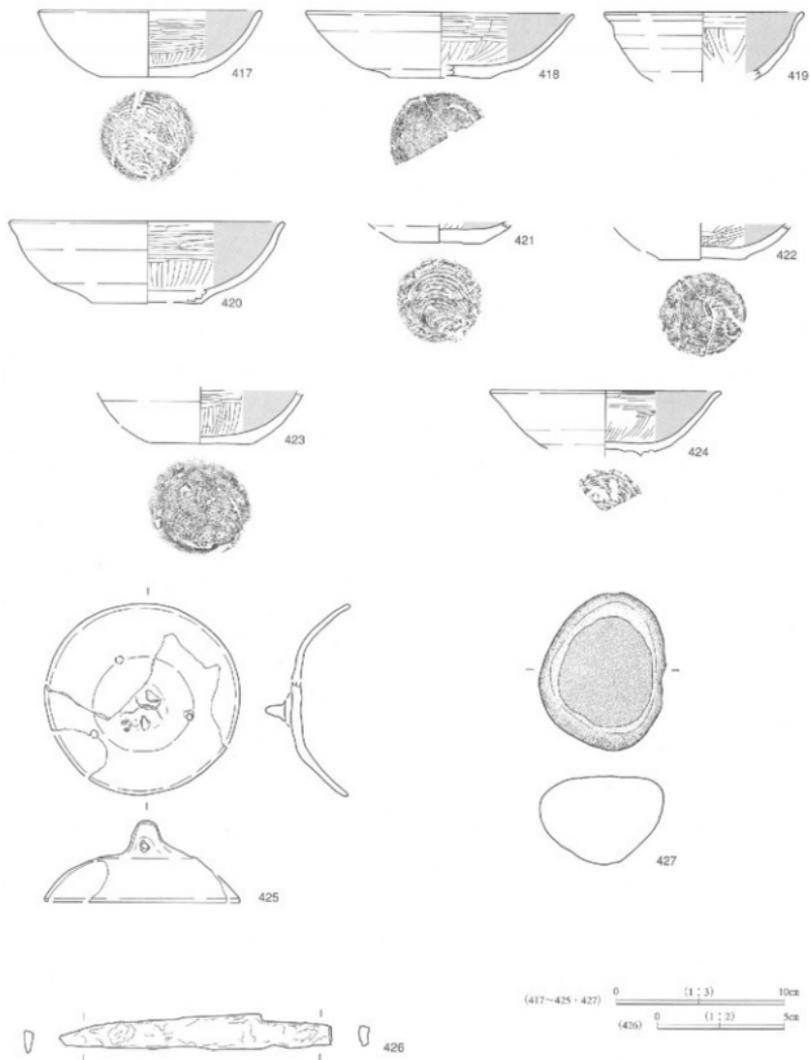
第124図 RA114



第125図 RA114カマド



第126図 RA114出土遺物(1)



第127図 RA114出土遺物 (2)

所認められるが、それらの位置関係から本来は3カ所に存在していたものと思われる。過去の成果を含めても本遺物のようなものは認められないことから極めて稀な例である。426は柄部が欠損した刀子である。427は礫石器Ⅱ類。礫石器以外に礫は15点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。これらの礫は6割近くは被熱していることから、カマド構築材として用いられていたものが含まれていると思われる。

[遺構時期] 10世紀前半に属する。

RA115竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5M22v・w、23v・wグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。本遺構は段丘縁辺部より内陸部で南北に存在する段丘岸との中間に位置し、緩やかに北に向かって登っていく手前の平坦部にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、RA114は北に6m、RA116は北東に9m、RA54は北東に10mを測る。攪乱により東壁及び南壁は削平されているため、本遺構の中で北東隅の残存状況は悪い。

[住居の方向] N-83°-E。北壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形はやや北壁が長いほぼ方形である。規模は東壁3.62m、南壁3.47m、西壁3.67m、北壁4.07mである。

[堆積土] 黒褐色土層が主体で14層に細分した。

[壁・床面] 壁は概ね垂直に立ち上がり、削平された東・南壁のみ外傾する。壁高は25~38cmである。床面は黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の厚層は1~8cm、掘り方はⅤ層を掘り込んで形成されている。

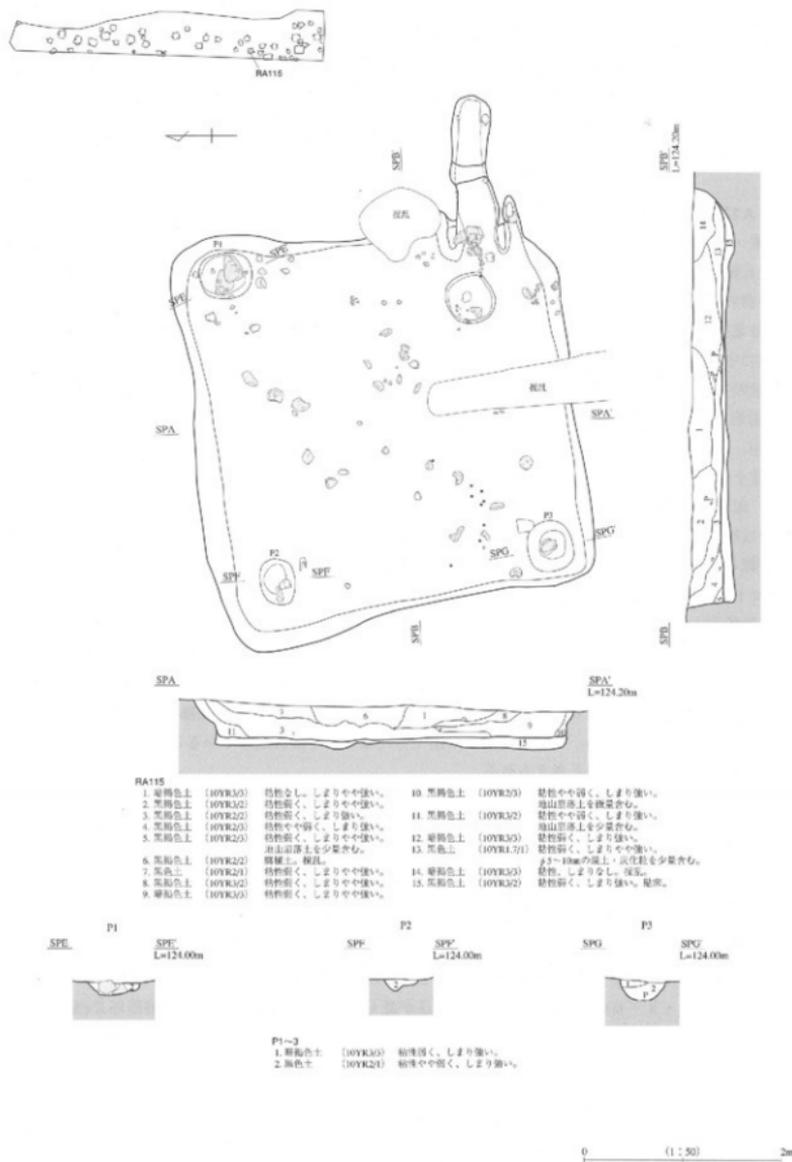
[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。東壁の南壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-89°-Eである。袖はにぶい黄褐色土に黒・暗褐色土を貼付て構築している。左袖のみ構築材が認められ、直立させた礫を配置している。燃焼部は中央がわずかに凹んでいるが、焼成面は残存していない。燃焼部中央には支脚が認められ、大きな礫の上に土師器環を倒立させて配置している。煙道は煙り出しに向かって僅かに傾斜するように形成され、燃焼部から1.33mを測る。煙道構築方法は刳抜式である。カマド周辺から出土した礫の多くは被熱していることから、カマドの構築材として用いられたものと考えられる。

[土坑・柱穴] 南東隅以外の各隅において柱穴3個、カマドの手前で土坑1基を床面精査時に検出した。

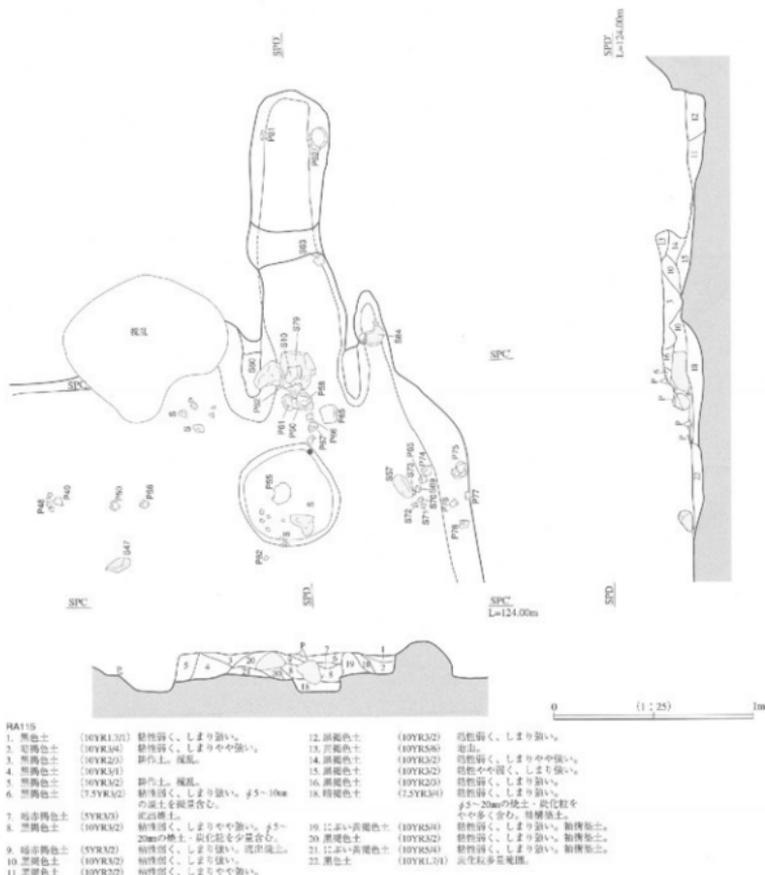
P1~3は、平面形は円形ないし楕円形、開口部径は48~52cm、深さは10~15cmである。それらは住居四隅の対角線上に配置され、同一の規模と形状であることから主柱穴と考えられる。

土坑は堆積土に多量の炭化粒が認められることと設置位置から、カマドに伴う廃棄遺構と考えられる。

[遺物] 土器469点、礫石器5点、鉄製品2点が埋土下位から床面を中心に出土している。土師器環はロク口整形である。428~456は土師器環Ⅰ類。c類が主体をなし、僅かにa類が含まれる。主体であるc類の中ではi・ii・iiiの3種類が認められ、iiiが最も多い。457・459~461は土師器環Ⅱc類。口縁部の立ち上がりを確認できるものはすべてi類である。底部切り離しは大半は回転系切りである。458は土師器環Ⅲc類、底部は再調整されている。462~464は土師器高台付環Ⅱ2類。465・466は須恵器甕。467・468は共に棒状鉄製品である。釘の可能性はあるが詳細は不明である。前者はL字状、後者はU字状をしている。469~473は礫石器。469・471はⅡ類、470・472・473はⅢ類である。礫石器以外に礫は37点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。これらの半数近くは



第128図 RA115



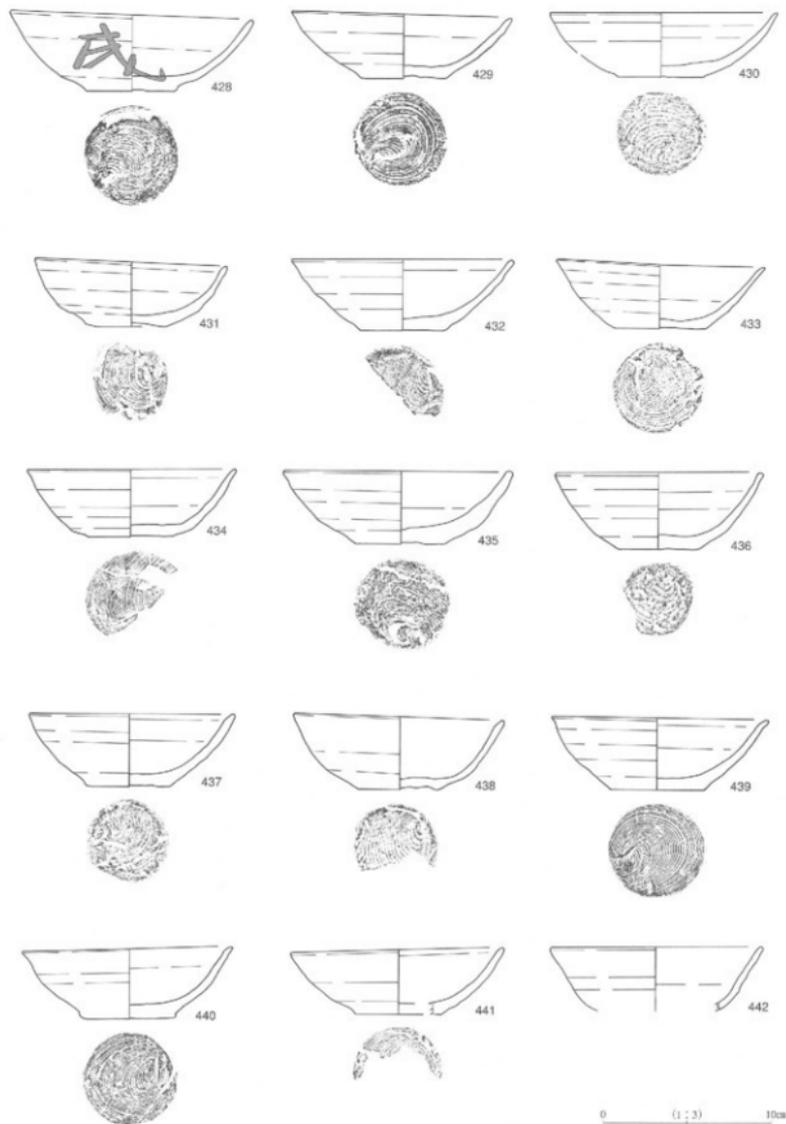
第129図 RA115カマド

被熱していることから、カマド構築材として用いられたものが含まれていると思われる。

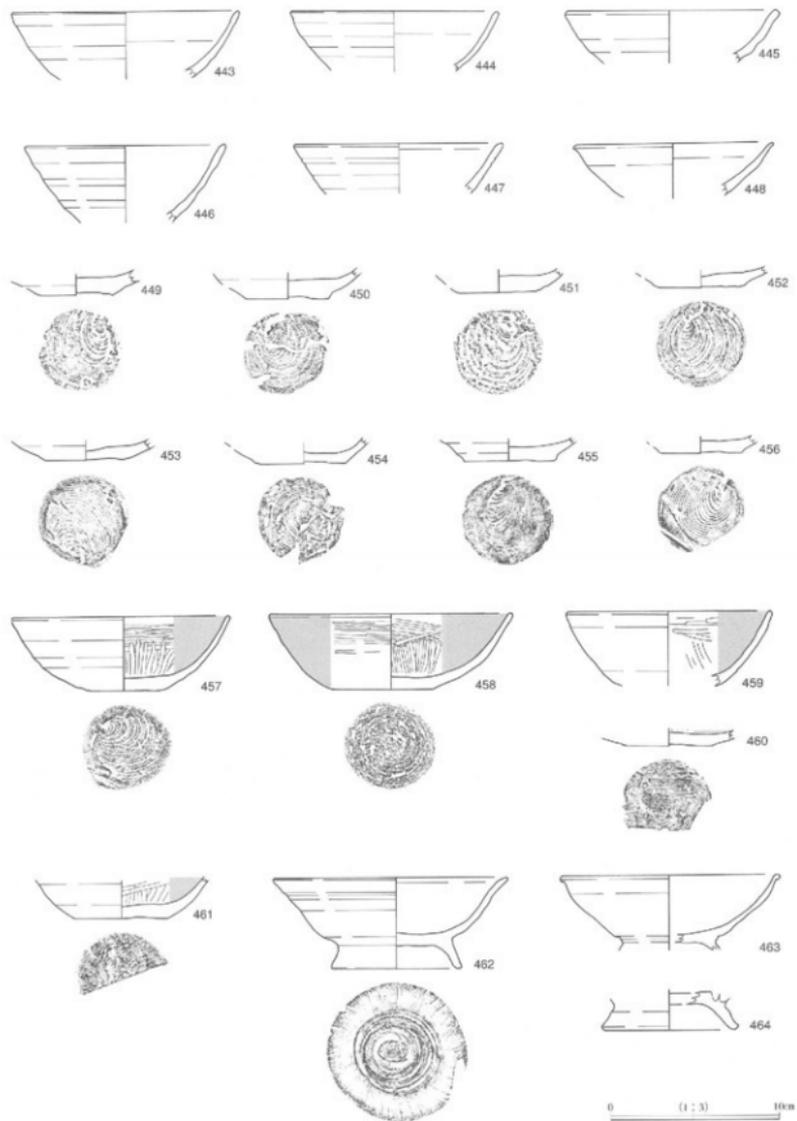
〔遺構時期〕10世紀前半に属する。

R A116竪穴住居跡

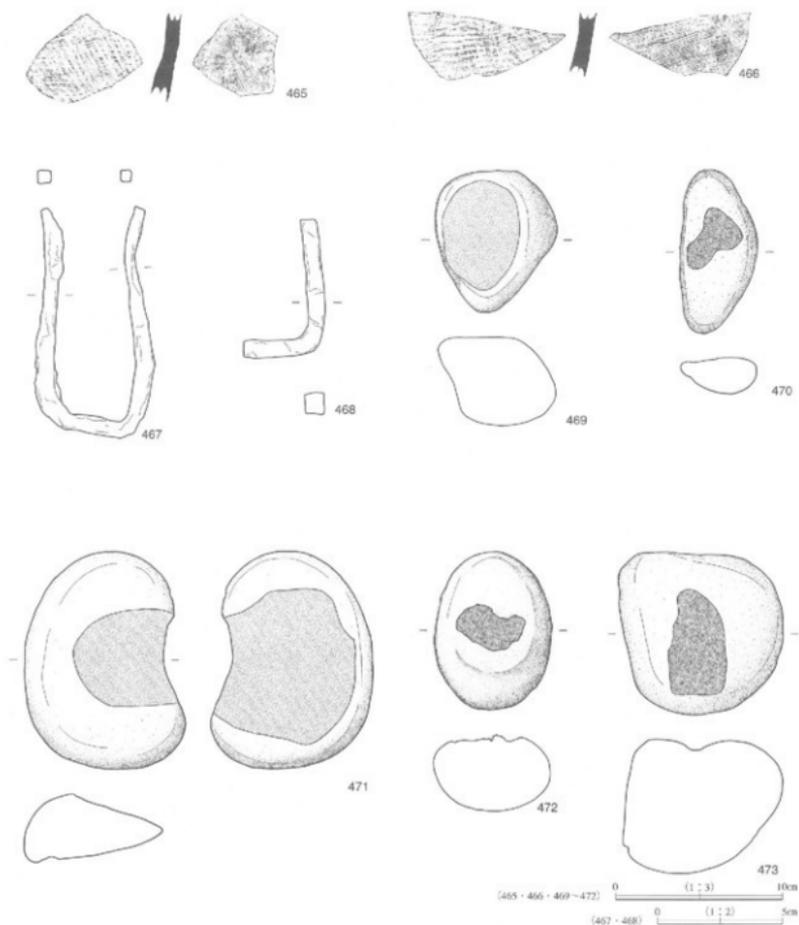
〔位置・検出層位〕5 N20b・c、21b・cグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は北に位置する段丘崖に向かって緩やかに登っていく段丘縁辺部の斜面上にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A114は北西に9m、R A115は南西に6m、R A54は南東に6m、R A050は南東に15mを測る。北壁より18m北には段丘崖が存在している。掘削により東壁と煙道の一



第130図 RA115出土遺物 (1)



第131図 RA115出土遺物(2)



第132図 RA115出土遺物 (3)

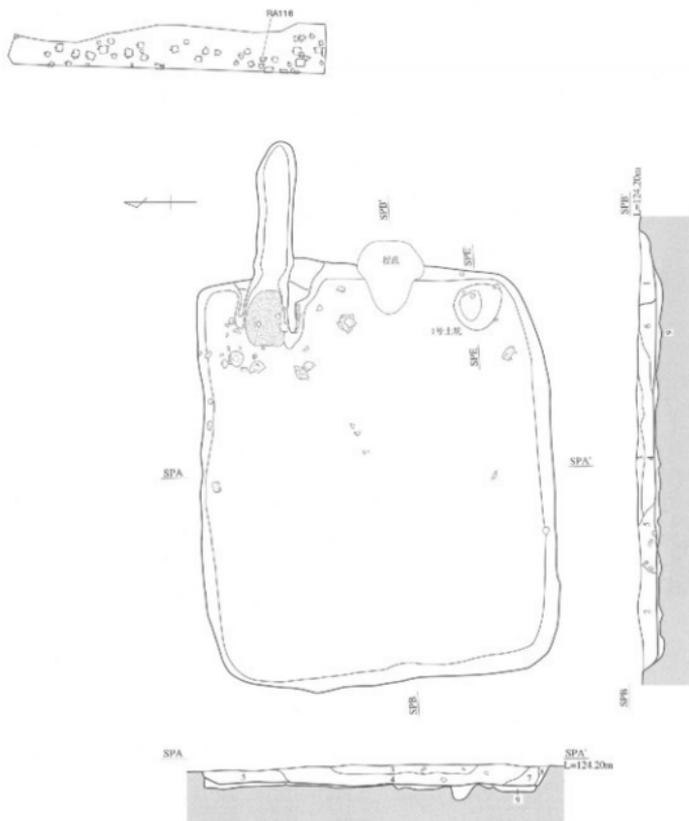
部が削平されている。

〔住居の方向〕 N-85° - E。北壁を基準としている。

〔平面形・規模〕 平面形は東西にやや長い長方形である。規模は東壁3.07m、南壁3.91m、西壁3.05m、北壁3.89mである。

〔堆積土〕 黒褐色土主体で8層に細分した。

〔壁・床面〕 壁は概ね外傾して立ち上がり、北壁のみ垂直である。床面は黒褐土が全面に貼られて硬くしまり、ほぼ平坦である。貼床の層厚は1~14cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。貼



RA116

1. 黒色土 (10YR2/1) 多量の現代のゴミを含む。
2. 黒褐色土 (10YR3/4) 均質なし、しまりや強い。
3. 黒色土 (10YR1/1) 均質なや弱く、しまりや強い。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 均質弱く、しまり差。φ5-10cmの炭化炭、φ30-50cmの風山崩落土を含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 均質弱く、しまりや強い、φ5-7cmの根上・炭化炭を微量に散見。
6. 黒褐色土 (10YR2/1) 均質弱く、しまりや強い。
7. 褐色土 (10YR4/2) 均質なや弱く、しまり強い。
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 均質なし、しまりや強い、遊山崩落土をブロック状に少量含む。
9. 黒褐色土 (10YR3/2) 均質な、しまり強い、粘厚。

1号土坑
SPT: L=124.30m

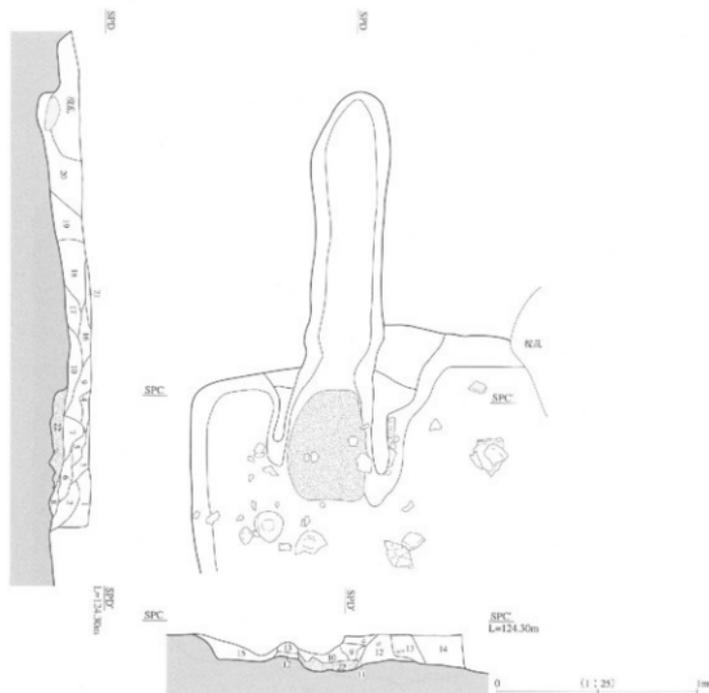


1号土坑

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 均質弱く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 均質なや弱く、しまり強い。

0 (1:50) 2m

第133図 RA116

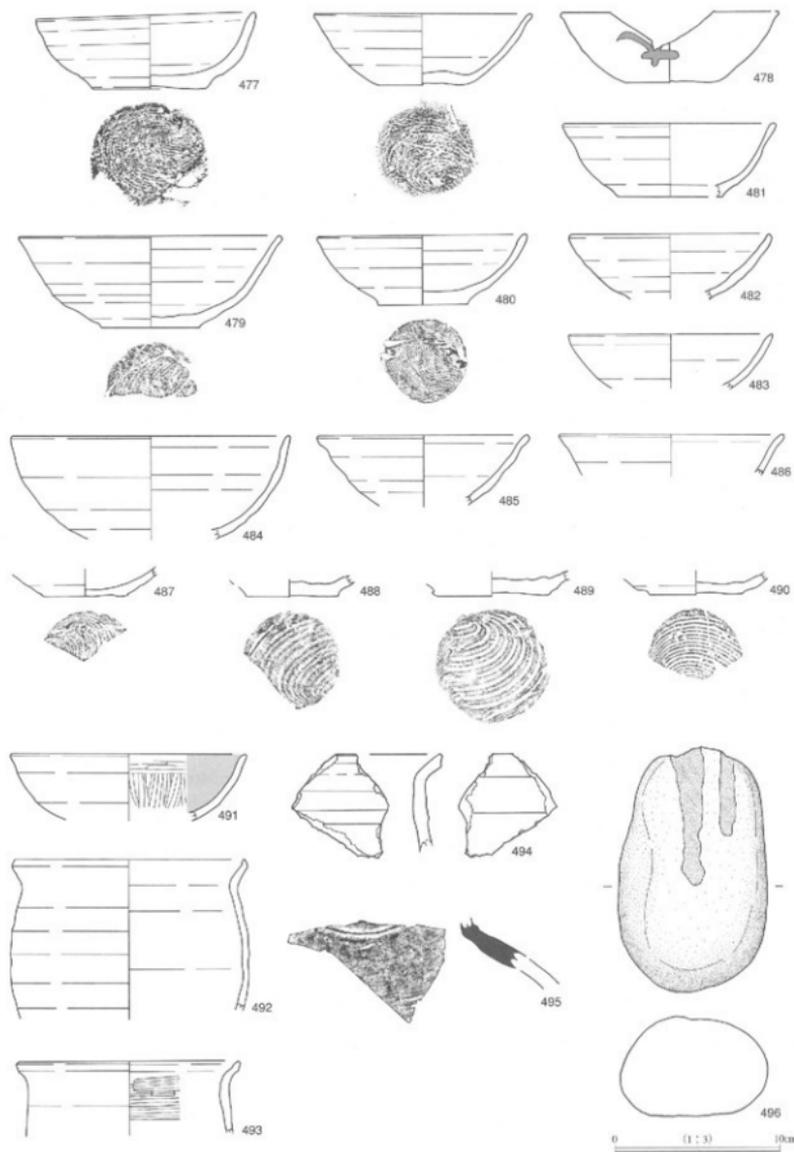


RA116カマド

- | | | | |
|-------------------|-----------------------------------|-------------------|----------------------|
| 1. 黒褐色土 (OVR20) | 粘性弱く、しまり強い。 | 11. 黒褐色土 (OVR20) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 2. 黒褐色土 (OVR20) | 粘性やや弱く、しまりやや強い。φ5~7cmの破土を軽量含む。 | 12. 黒褐色土 (OVR22) | 粘性強。しまり強い。焼陶片上。 |
| 3. 黒色土 (OVR22) | 粘性弱く、しまり強い。 | 13. 黒色土 (OVR2) | 粘性やや弱く、しまりやや強い。焼陶片上。 |
| 4. 黒色土 (OVR1.7) | 粘性弱く、しまり強い。 | 14. 黒褐色土 (OVR22) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 5. 黒褐色土 (OVR20) | 粘性やや弱く、しまり強い。 | 15. 黒褐色土 (OVR22) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 6. 黒褐色土 (OVR20) | 粘性強。しまり強い。元浮ブロック・燧石類土ブロックをやや多く含む。 | 16. 黒褐色土 (OVR20) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 7. 黒色土 (7.5VR20) | 粘性やや弱く、しまり強い。 | 17. 黒褐色土 (OVR22) | 粘性。しまり非常に強い。 |
| 8. 黒褐色土 (7.5VR34) | 粘性弱く、しまり強い。凝土。 | 18. 黒褐色土 (OVR20) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| 9. 凝土褐色土 (5VR32) | 粘性弱く、しまり強い。凝土。 | 19. 黒色土 (OVR20) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 10. 黒褐色土 (OVR22) | 粘性やや弱く、しまり強い。 | 20. 黒褐色土 (OVR34) | 粘性やや弱く、しまり強い。 |
| | | 21. 黒褐色土 (OVR1.7) | 凝土。 |
| | | 22. 粘赤褐色土 (5VR32) | 粘性弱く、しまり強い。凝土。 |



第134図 RA116カマド・出土遺物 (1)



第135図 RA116出土遺物(2)

床が薄い所では礫層が認められる。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。東壁中央より北壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-93°-Eである。袖は黒褐色土を貼付て構築している。燃焼部は中央が凹む皿状をしており、平面形は楕円形、規模が54×39cm、層厚4cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から1.52mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認できないことから掘込式と思われる。

[土坑・柱穴] 南東隅で土坑1基を貼床の掘り下げ時に検出した。平面形は楕円形、規模は51×42cm、深さは10cmである。埋土中から土器が34点出土していることから、貯蔵穴と考えられる。

[遺物] 土器228点、礫石器1点がカマド周辺の床面から出土している。土師器環・甕は口クロ整形である。474～490は土師器環Ⅰ類。c類が主体をなし、僅かにa類が含まれる。口縁部が確認できたc類ではi・ii・iiiの3種類が認められ、iiiが最も多い。478は墨書土器で体部外面に「大」と記されている。491は土師器環Ⅱ類。他の住居に比べⅡ類の占める割合が少ない。492～494は土師器甕。495は須恵器甕。496は礫石器Ⅱ類。礫石器以外に礫は7点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。これらの礫の半数近くは被熱し、カマド周辺から出土していることから、カマド構築材として用いられたものが含まれていると思われる。

[遺構時期] 10世紀前半に属する。

RA119型穴住居跡

[位置・検出層位] 5N17x・y、18x・y、5O17・18aグリッドに位置する。遺構検出面はN層である。本遺構は北東に存在する段丘崖に向けて緩やかに下っていく手前の平坦部にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、RA124は南に6m、RA127は南西に7m、RA128は西に10m、RA129は北に1m、RA130は南西に10mを測る。掘乱により北西隅が削平されている。

[重複] RA126と重複しており本遺構の方が新しい。

[住居の方向] N-2°-W。東壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は東壁4.85m、南壁4.84m、西壁4.62m、北壁4.57mである。

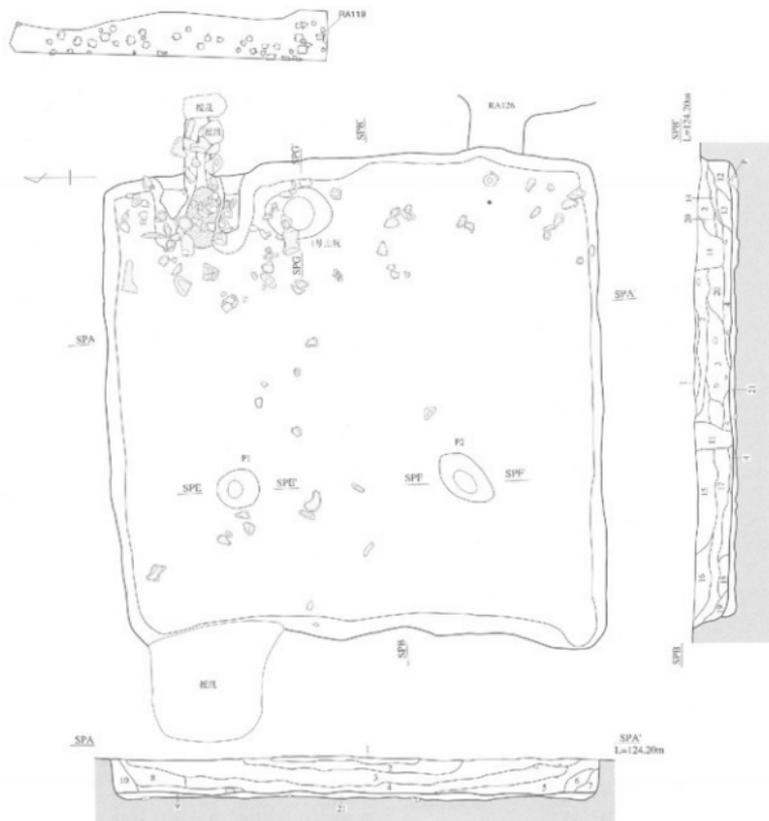
[堆積土] 黒褐色土主体で9層に細分した。

[壁・床面] 壁は概ね垂直に立ち上がり、西壁のみ外傾する。壁高は30～34cmである。床面は地山を多く含む黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、北西方向が若干高いもののほぼ平坦である。貼床の層厚は1～8cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。貼床が薄い所では多くの礫が認められる。

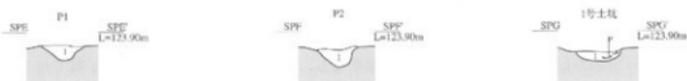
[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。東壁中央より北壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。左袖と北壁の間は38cmを測り、軸線方向はN-84°-Eである。袖は暗褐色土と黒褐色土を貼付て構築している。両袖には構築材が認められ、直立させた礫を共に配置している。燃焼部は中央が凹む皿状をしており、平面形は楕円形、規模が63×33cm、層厚8cmの焼成面がある。燃焼部の中央には文脚が認められ、倒立させた土師器環を3つ重ねて配置している。煙道は煙り出しは掘乱により削平されているが、煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から71cmを測る。煙道構築方法は、煙道の両脇に礫が配されていることから暗渠状の構造をしていたものと考えられる。

[土坑・柱穴] カマドの南脇で土坑1基、西壁寄りで柱穴2個を床面精査時に検出した。

1号土坑は、平面形は楕円形、規模は68×51cm、深さは11cmである。土坑から土器が9点出土している。配置位置や出土遺物の存在から貯蔵穴と考えられる。



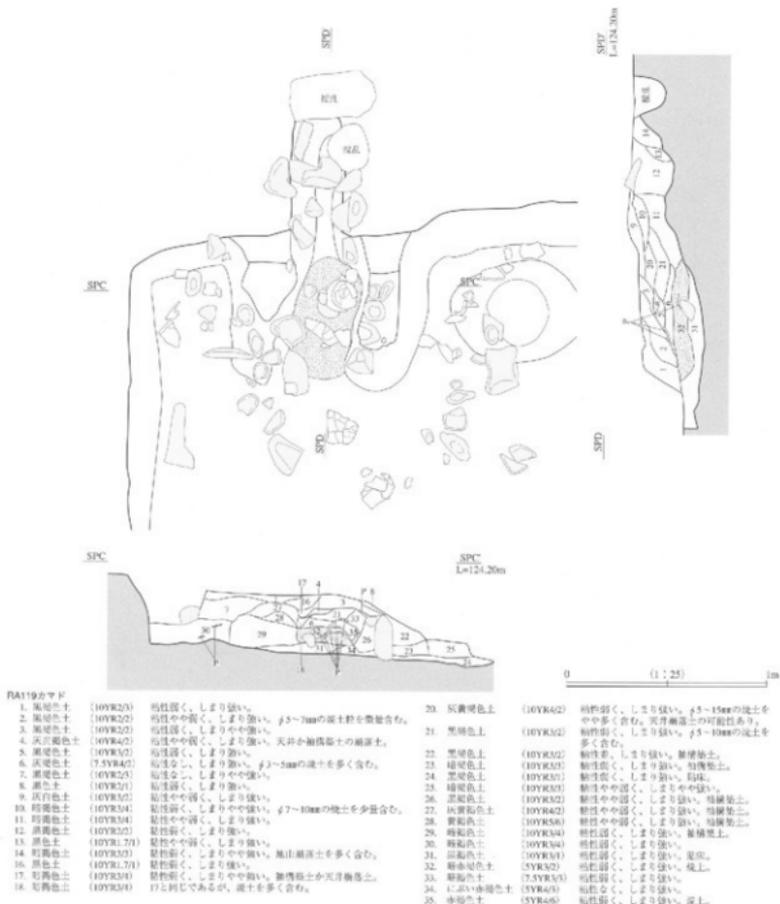
- | | | | |
|-------------------|--------------|-------------------|----------------|
| 1. 黒色土 (HVR2/1) | 粘性弱く、しまり強い。 | 12. 黒色土 (HVR1/2) | 粘性中程度、しまり強い。 |
| 2. 黒褐色土 (HVR3/1) | 粘性中程度、しまり強い。 | 13. 黒褐色土 (HVR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 3. 黒褐色土 (HVR2/3) | 粘性弱く、しまり強い。 | 14. 黒褐色土 (HVR3/3) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 4. 黒褐色土 (HVR1/2) | 粘性弱く、しまり中程度。 | 15. 黒褐色土 (HVR2/2) | 粘性中程度、しまり強い。 |
| 5. 黒褐色土 (HVR3/2) | 粘性弱く、しまり強い。 | 16. 黒色土 (HVR1/2) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 6. 黒褐色土 (HVR3/2) | 粘性弱く、しまり強い。 | 17. 黒褐色土 (HVR2/2) | 粘性中程度、しまり強い。 |
| 7. 黒色土 (HVR1/2) | 粘性中程度、しまり強い。 | 18. 黒褐色土 (HVR3/2) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 8. 黒褐色土 (HVR2/3) | 粘性弱く、しまり中程度。 | 19. 黒褐色土 (HVR3/1) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 9. 黒褐色土 (HVR1/2) | 粘性弱く、しまり強い。 | 20. 黒褐色土 (HVR3/2) | 粘性弱く、しまり強い。 |
| 10. 黒褐色土 (HVR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。 | 21. 黒褐色土 (HVR2/2) | 粘性弱く、しまり強い。泥化。 |



1号土坑とP1-2
L. 黒褐色土 (HVR3/1) 粘性弱く、しまり強い。

0 (1:50) 2m

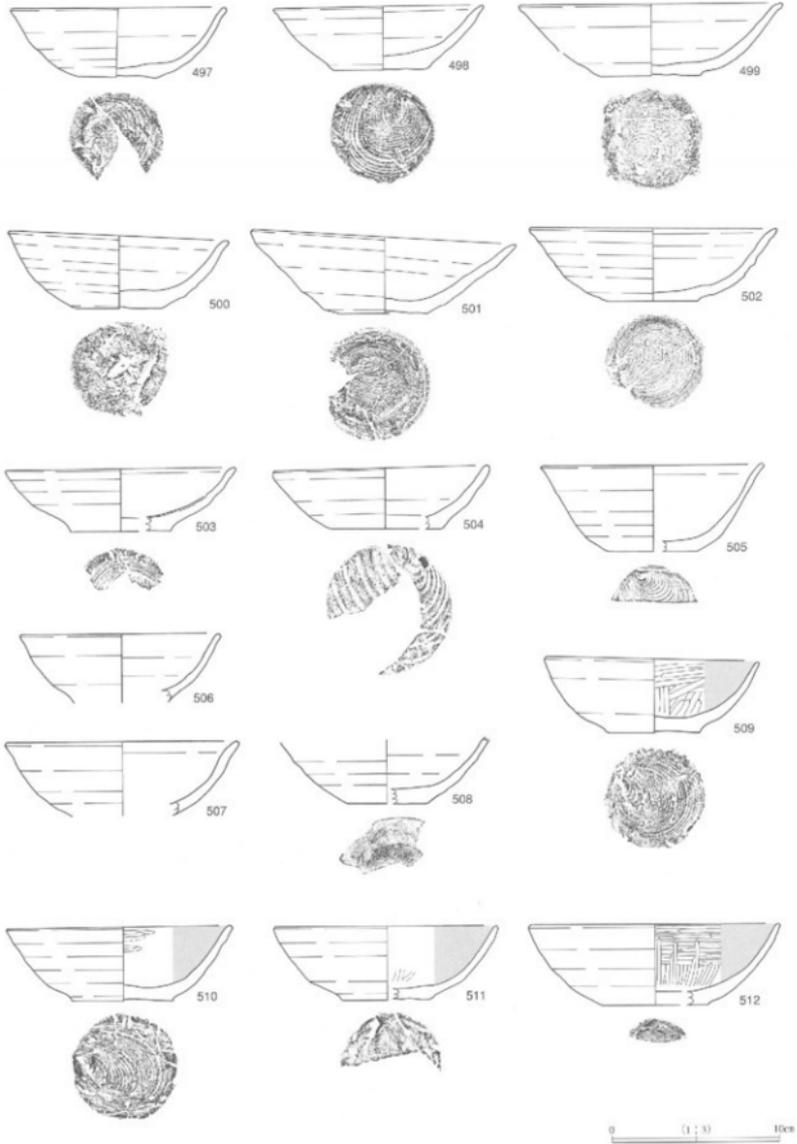
第136図 RA119



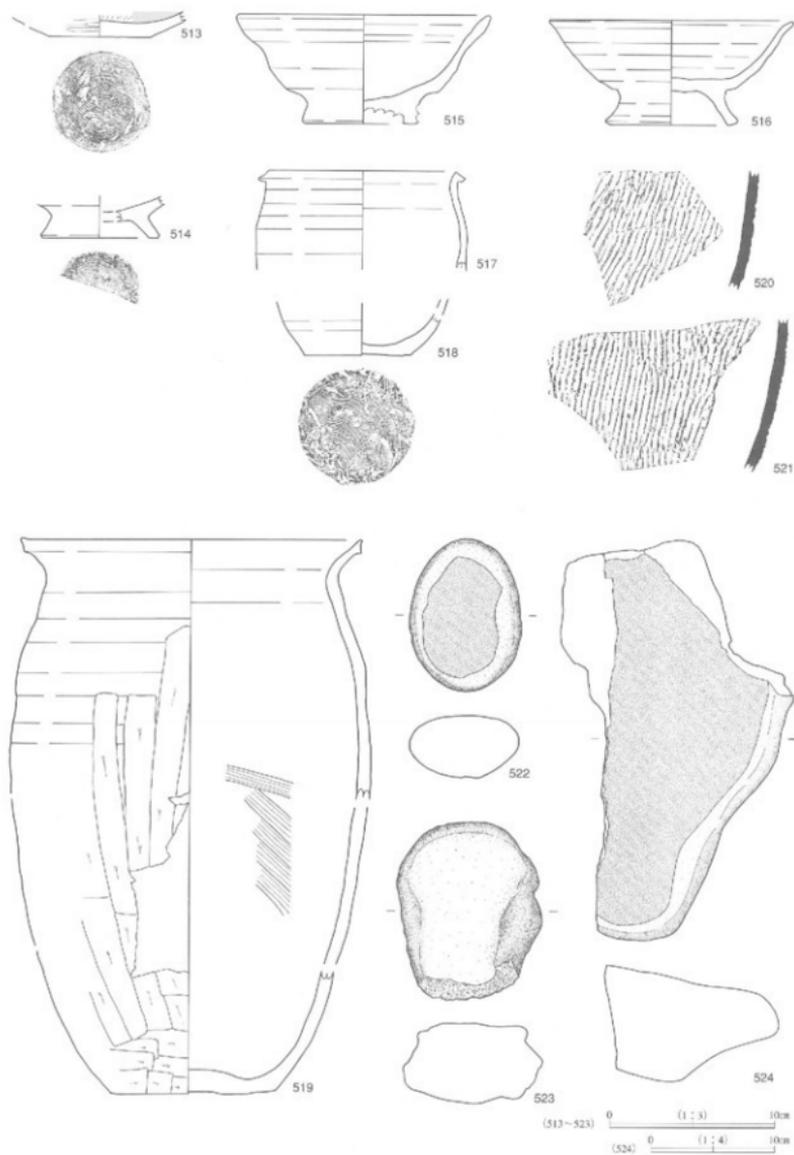
第137図 RA119カマダ

P1・2は、平面形は楕円形、開口部径は44と62cm、深さは16cmである。これらは住居四隅の対角線上に配置されていることから支柱穴と考えられる。

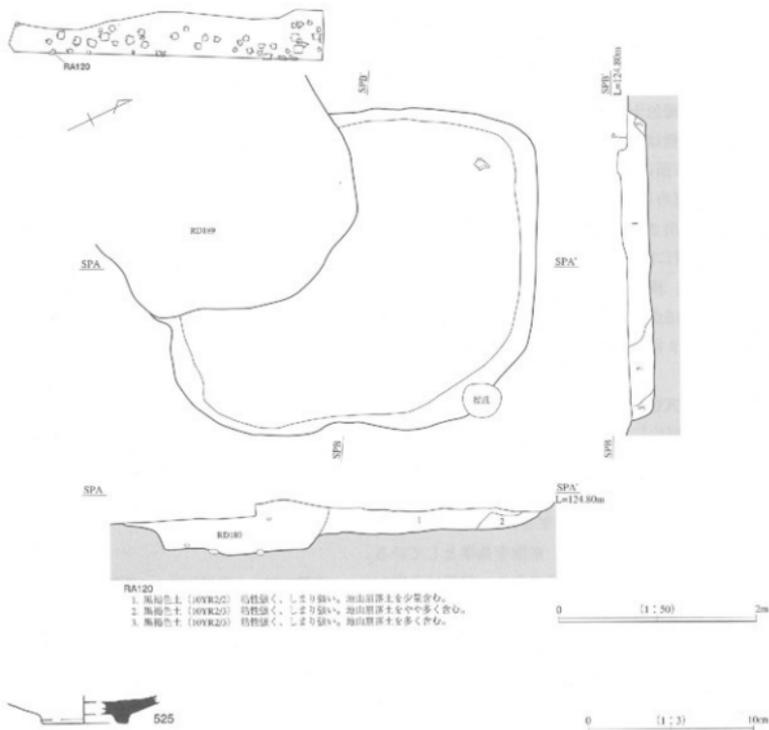
[遺物] 土器1102点、礫石器3点がカマダ周辺の床面から出土している。土器器環・甕はロクロ整形である。497~508は土器器環Ⅰ類。c類が主体をなし、a類が僅かに含まれる。c類ではi・ii・iiiの3種類が認められ、iとiiiの占める割合が高い。底部切り離しは大半が回転系切りであり、500のみ再調整されている。509~513はすべて土器器環Ⅱc類。514~516は土器器環高台付環。高台の高さが低いものと高いものがある。517~519は土器器甕。520・521は須恵器甕。522~524は礫石器。522は



第138図 RA119出土遺物(1)



第139図 RA119出土遺物(2)



第140図 RA120・出土遺物

Ⅱ類、523がⅠ類、524はⅤ類である。524は袖の構築材として用いられていたものであり、廃棄後に構築材として転用されたと考えられる。礫石器以外に礫は76点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。これらの半数近くは被熱していることから、カマド構築材として用いられたものが含まれていると思われる。

〔遺構時期〕10世紀前半に属する。

R A120堅穴住居跡

〔位置・検出層位〕5 J 22r・sグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。本遺構は西と南に緩やかに下っていく段丘縁辺部の斜面上にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 110は北東に38mを測る。ただし、第27次の調査区には平安時代に属する住居を確認できたが、ここではそれらとの距離を計測していない。堆積土中から遺物と焼土を確認できたため堅穴住居として精査を行っている。

[重複] RD189と重複しており、本遺構の方が古い。

[住居の方向] N-35°-E。北西壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は北西壁1.96m、北東壁2.88m、南東壁2.64m、西南壁1.08mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で3層に細分した。1層において焼土と炭化粒が多く含む範囲を確認できた。

[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は20cm前後であるが、残存状況の悪い北西壁の壁高は6cmである。床面は北東壁から南西壁に向かって緩やかに傾斜しているものの、ほぼ平坦である。貼床や硬化面は認められない。

[カマド] 検出されなかった。焼土と炭化粒が埋土中において比較的まとまって確認できたことからいずれかの壁に設置されていたものと思われる。

[土坑・柱穴] 検出されなかった。

[遺物] 土器16点が埋土中から出土している。525は須恵器高台付坏である。

[遺構時期] 9世紀後半以降に属すると思われる。

R A 124 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 O 22aグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は北西と北へ傾斜していく手前の平川面にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 119は北に6m、R A 127は北西に9m、R A 128は北西に14m、R A 130は西に12mを測る。攪乱により遺構上面とカマドの煙り出しの先端が削平されている。

[住居の方向] N-23°-W。東壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は北壁2.12m、東壁2.36m、南壁2.07m、西壁2.27mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で6層に細分した。

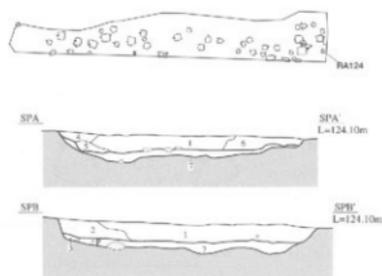
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は16~20cmであるが、残存状況の悪い東壁の壁高は7cmである。床面は地山を多く含む黒色土が全面に貼られてややしまり、南東隅は周辺より僅かに低くほぼ平坦である。貼床の層厚は3~12cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。貼床の薄い東壁付近では多くの礫が認められる。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。北壁中央、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-4°-Wである。袖は黒褐色土を貼付て構築している。燃焼部はほぼ平坦で焼成面は残存していない。煙道は煙り出しが攪乱により削平されていることから残存状況は悪い。煙り出しに向かって登るように形成され、壁から43cmを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認できないことから掘込式である。

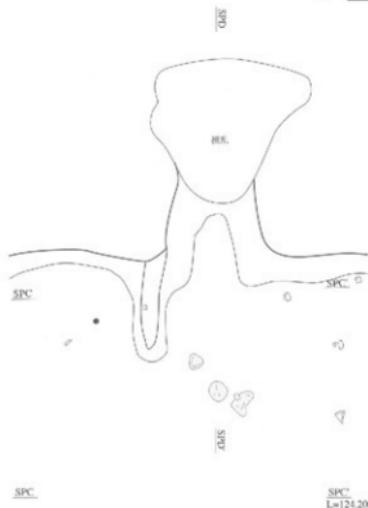
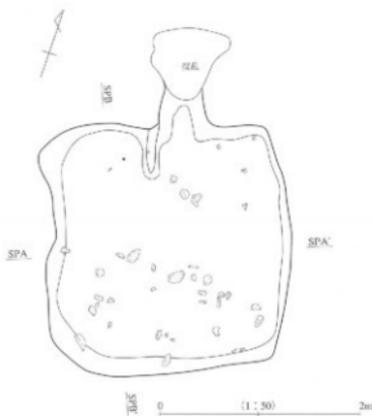
[土坑・柱穴] 検出されなかった。

[遺物] 土器109点が埋土上下位から床面を中心に出土している。土師器環・甕はロク口整形である。526~528・531は土師器環I類。531は黒書土器で体部外面に文字が記されている。529は土師器環II類。530は土師器甕。礫石器以外に礫は20点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。

[遺構時期] 9世紀後半以降に属すると思われる。



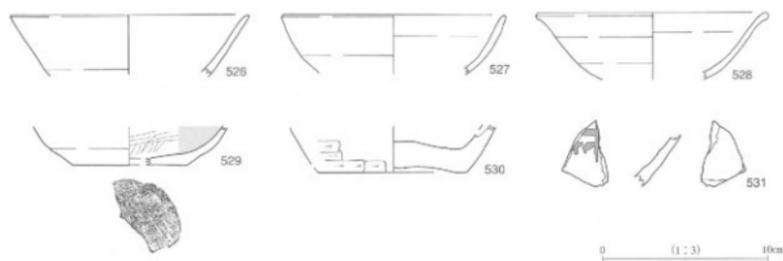
- RA124
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘土質で、しまりや強い。φ5~10mmの粘土・炭化粒を微量含む。
 2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘土質で、しまり強い。φ3~5mmの土口ブロックを微量含む。
 3. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘土の中層で、しまりや強い。
 4. 黒褐色土 (10YR3/2) 灰褐色土。
 5. 黒色土 (10YR2/1) 粘土質で、しまりや強い。
 6. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘土の中層で、しまり強い。
 7. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘土質で、しまり強い。灰褐色。



RA124カマド

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘土質で、しまり強い。黒が炭層1層に対応。
2. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘土質で、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘土質で、しまり強い。φ5~7mmの粘土・炭化粒を少量、灰褐色土を微量含む。
4. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘土質で、しまり強い。
5. 黒色土 (10YR2/1) 粘土質で、しまり強い。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘土質で、しまり強い。φ3~7mmの粘土を微量含む。
7. 黒色土 (10YR2/1) 粘土質で、しまり強い。φ3~5mmの粘土と灰褐色土を微量含む。
8. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘土質で、しまり強い。
9. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘土質で、しまり強い。φ5~10mmの粘土を微量含む。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘土質で、しまり強い。
11. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘土質で、しまり強い。
12. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘土質で、しまりや強い。φ3~5mmの粘土を微量含む。
13. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘土質で、しまりや強い。
14. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘土質で、しまり強い。
15. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘土質で、しまりや強い。
17. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘土質で、しまり強い。

第141図 RA124



第142図 RA124出土遺物

RA127竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕 5 N20s・Iグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は北に向かって緩やかに登っていく手前の平坦面にある。北壁から25m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、RA119は北東に7m、RA124は南東に9m、RA128は北西に1m、RA129は北東に15mを測る。攪乱により煙道は削平されている。

〔重複〕 RA130と重複している。本遺構の方が新しい。

〔住居の方向〕 N-94°-E。北壁を基準としている。

〔平面形・規模〕 平面形は東西に長い長方形である。規模は東壁2.49m、南壁3.62m、西壁3.34m、北壁3.93mである。

〔堆積土〕 黒色土主体で8層に細分した。

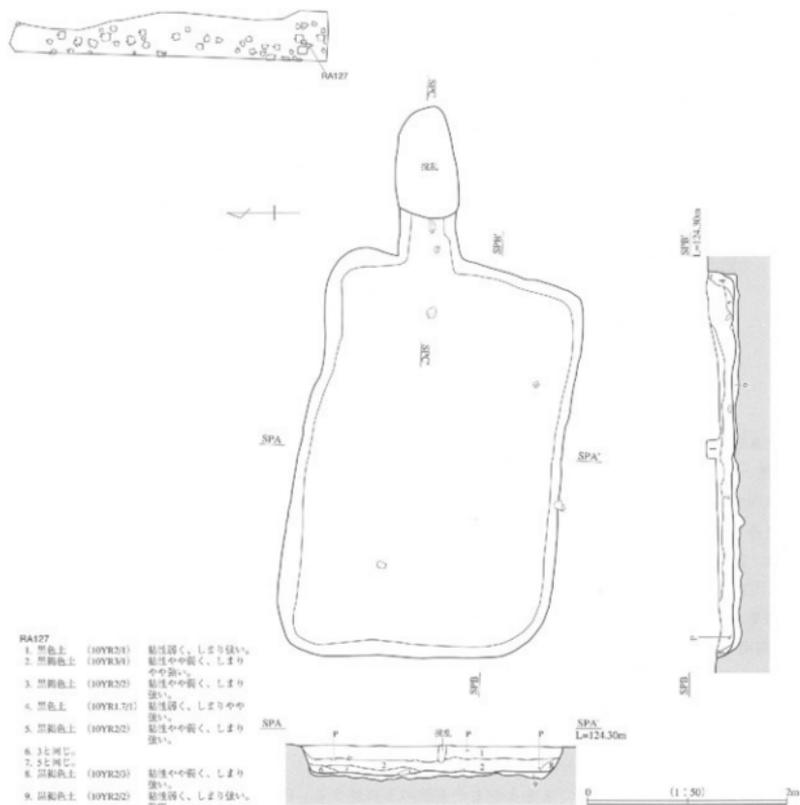
〔壁・床面〕 壁は概ね外傾して立ち上がり、東壁のみ垂直である。壁高は16~24cmである。床面は黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、平坦である。貼床の厚層は2~8cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。

〔カマド〕 煙り出しが攪乱により削平された煙道のみを検出した。東壁中央よりやや北壁寄り、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-87°-Eである。燃焼部から煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、東壁から1.28mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が認められないことから掘込式である。

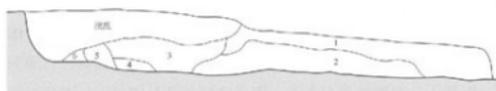
〔土坑・柱穴〕 検出されなかった。

〔遺物〕 土器が241点が埋土中から床面を中心に出土している。532はロクロ整形の土師器坏I類。533は非ロクロの土師器甕。534・535は須恵器甕。自然礫が3点出土している。

〔遺構時期〕 10世紀前半以降に属する。



SPC

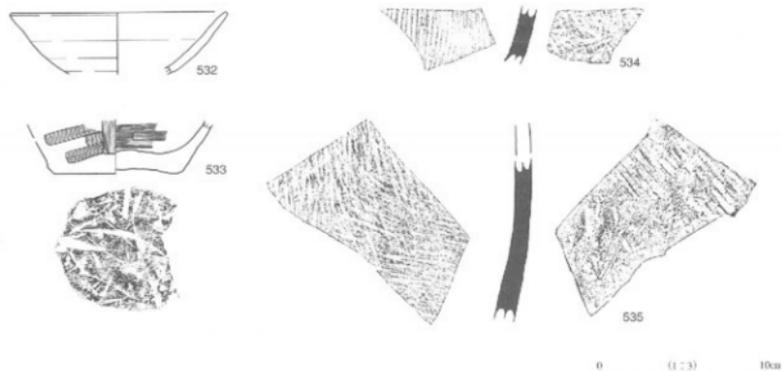


RA127カマド

1. 黒褐色土 (01YR2/2) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
 2. 黒色土 (01YR2/1) 粘性弱く、しまりやや強い。
 3. 黒色土 (01YR1.7/1) 粘性やや弱く、しまり強い。
 4. 黒色土 (01YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。
 5. 黒褐色土 (01YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
 6. 濃い黄褐色土 (01YR4/3) 粘性なし、しまり強い。埴山崩落土。

0 (1:25) 1m

第143図 RA127



第144図 RA127出土遺物

R A 128竪穴住居跡

〔位置・検出層位〕 5 N18r・s、5 N19r・sグリッドに位置する。検出層位はIV層である。本遺構は北に向かって緩やかに傾斜していく段丘縁辺部の平坦面にある。北壁から22m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 127は南東に1m、R A 124は南東に14m、R A 129は北東に15m、R A 130は南に1mを測る。北西方向は攪乱により削平されていると判断して掘り下げていたが、遺物が多く出土したことからカマドが確認できたことから竪穴住居へ変更して精査を行った。

〔重複関係〕 R A 109と重複しており、本遺構の方が新しい。

〔住居の方向〕 N-82° - E。北壁を基準としている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形である。南東隅のみやや丸みを帯びている。規模は東壁3.54m、南壁3.33m、西壁3.41m、北壁3.53mである。

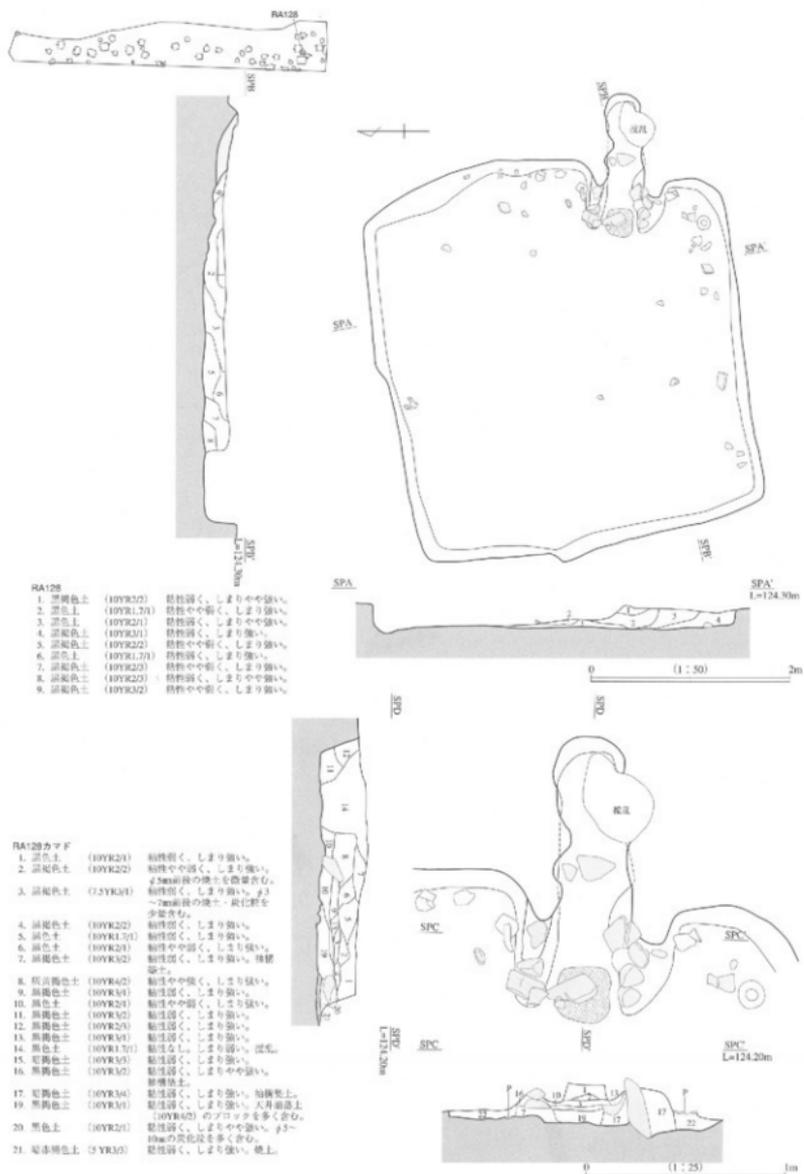
〔堆積土〕 黒色土・黒褐色土主体で9層に細分した。

〔壁・床面〕 壁はほぼ垂直して立ち上がるが東壁のみ外傾する。壁高は20~30cmである。南壁は他の壁に比べ残存状況が悪く壁高は15cm以下である。床面は北西隅の標高が低いもののほぼ平坦であり、V層を掘り込んで形成されている。貼床や硬化面は存在していないことから、床面において多くの礫を確認できた。

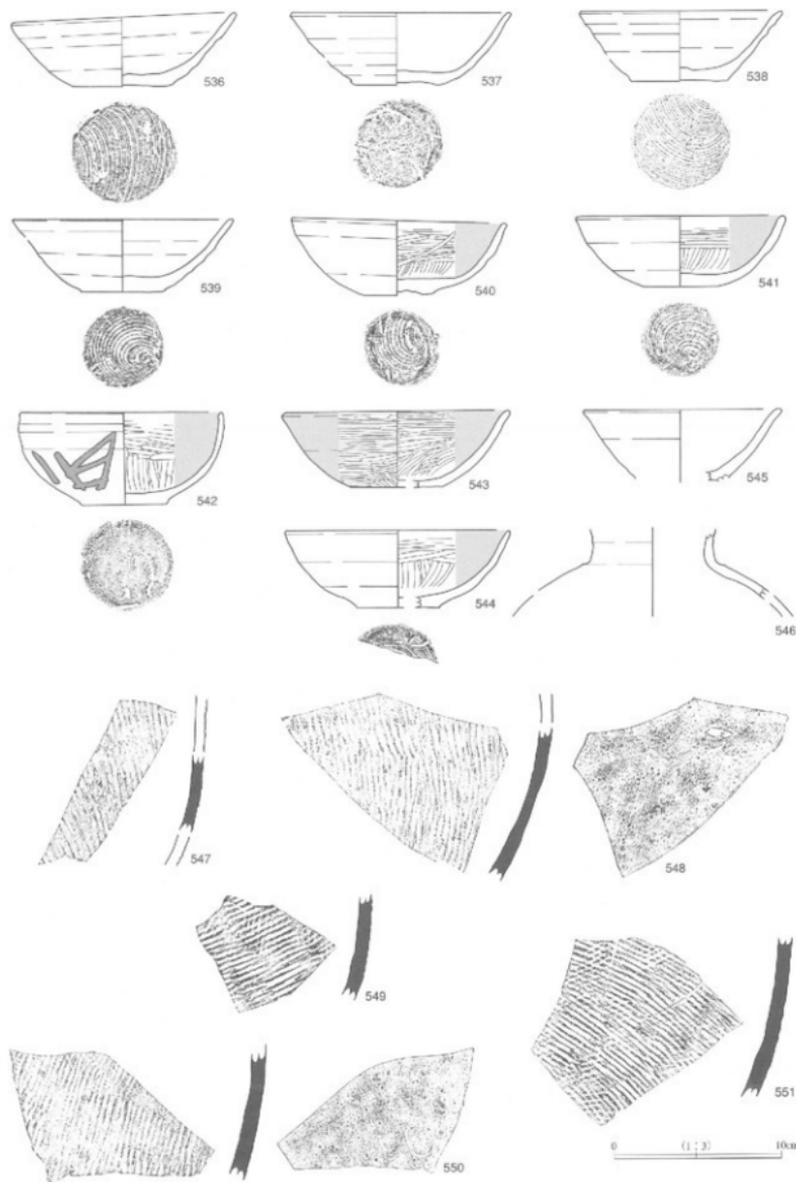
〔カマド〕 袖と燃焼部、煙道を検出した。東壁中央よりやや南壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。軸線方向はN-86° - Eである。袖は黒褐色土と暗褐色土を貼付て構築している。両袖には構築材が認められ、礫を重ねるか直立させて配置している。燃焼部はほぼ平坦で、平面形は不整形、規模が25×22cm、層厚1cmの焼成面がある。煙道は煙り出しに向かって緩やかに下るように形成され、焼成面から1.15mを測る。煙道構築方法は天井崩落土が確認できたことと、煙道の脇がオーバーハングしていることから削抜式と思われる。燃焼部で検出された礫は、カマド構築材として用いられていたと考えられる。

〔土坑・柱穴〕 検出されなかった。

〔遺物〕 土器248点がカマド周辺の床面から出土している。土師器環・甕はロクロ整形である。175・



第145図 RA128



第146図 RA128出土遺物

179・180・536～539は土師器環Ⅰa類。土師器環Ⅰa類で占められているのは本遺構のみである。540～542・544は土師器環Ⅱ類でⅢが主体である。542は底部からの立ち上がりⅢと同一であることからそれに含めることは可能であったが、口縁部の立ち上がりが強く内湾していることからⅡiv類としている。本遺物は墨書土器で体部外面に「成」と記されている。543は土師器環Ⅲc類。底部切り離しは主に回転糸切りであり、543のみ再調整されている。545は土師器高台付環で高台が欠損している。546は土師器甕の頸部。547～551は須恵器甕の体部。礫石器以外に礫は31点出土しているが、すべて自然礫である。これらの礫は被熱している割合が多いことから、カマド構築材に用いられたものが含まれていると思われる。

[遺構時期] 9世紀後半に属する。

R A 129 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 O 13・14・15aグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。本遺構は北東へ下っていく段丘縁辺部の斜面上にある。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 119は南に1m、R A 127は南西に13m、R A 128は南西に15m、R A 130は南西に18mを測る。埋土と地山の判別ができず、サブトレンチを入れたことで南壁と東壁の一部を確認できたことにより精査に入る。攪乱により北壁・西壁共に削平されている。

[住居の方向] N-26°-W。残存している北東壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は残存している南東隅から方形と思われる。確認できた規模は東壁3.79m、南壁2.26mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で2層に細分した。

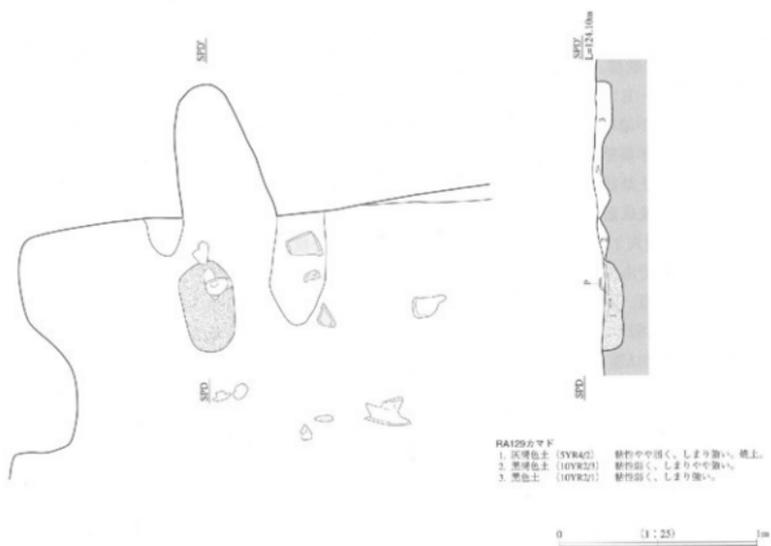
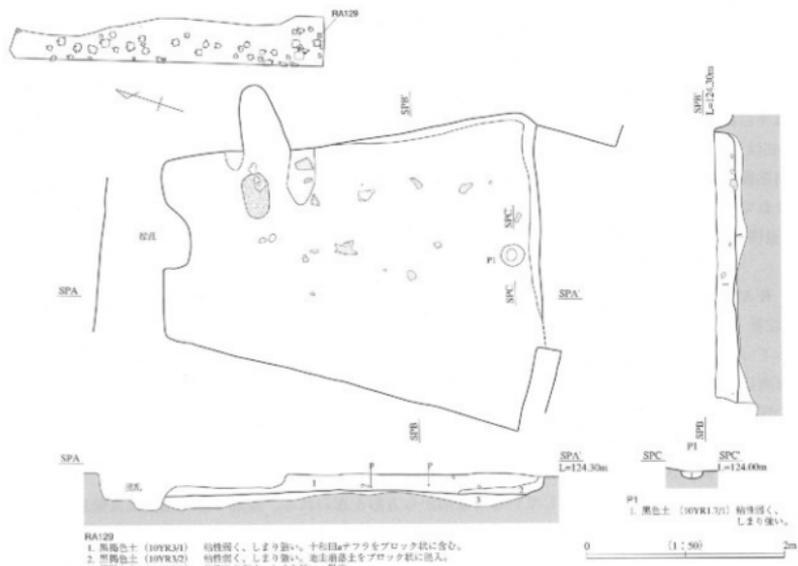
[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がる。壁高は東壁は20cm、南壁は14cmである。床面は地山が多く含まれた黒褐色土が全面に貼られてややしまり、ほぼ平坦である。貼床の厚層は2～16cm、掘り方はV層を掘り込んで形成されている。貼床の薄い床面では礫層が確認できた。

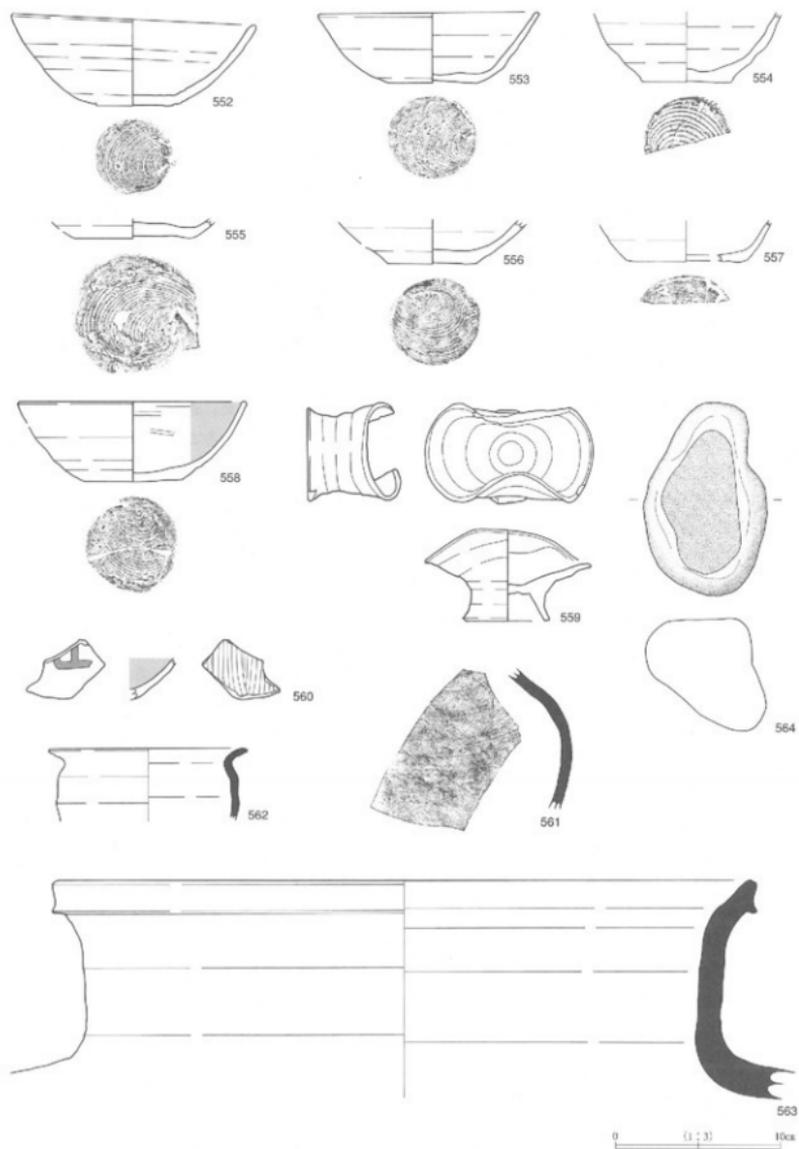
[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。東壁、中軸線が壁と直角するように設置されている。軸線方向はN-57°-Eである。袖は両袖共に下端のみの確認であったが暗褐色土を貼付て構築している。右袖には構築材が認められ、方形の礫を配置している。燃焼部は削平されているためほとんど残存していないが、平面形は楕円形、規模が46×27cm、層厚8cmの焼成面がある。焼成部には支脚が認められ、礫の上に土師器環を倒立させて配置している。煙道は煙り出しに向かって緩やかに傾斜するように形成され、焼成面から91cmを測る。煙道構築方法は強く削平されているため不明である。

[土坑・柱穴] 柱穴1個を貼床の掘り下げ時に南東壁付近で検出した。平面形は円形、開口部径は14cm、深さは4cmである。

[遺物] 土器140点、礫石器1点がカマドを中心とした床面から出土している。土師器環・耳皿はロクロ整形である。552～556は土師器環Ⅰ類。ⅠcⅢ類が主体でa類が僅かに存在している。558・560は土師器環Ⅱ類。560は墨書土器で体部外面に文字が記されている。559は耳皿。557は土師器甕。561～563は須恵器甕。大小異なる法量が認められる。564は礫石器Ⅱ類。

[遺構時期] 10世紀前半に属する。





第148図 RA129出土遺物

R A 130 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 N22p・q・r、23p・q・rグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。木遺構は北に向かって緩やかに傾斜していく段丘縁辺部の平坦面にある。北壁から28m北には段丘崖が存在している。周辺に検出された当該期の遺構との直線距離は、R A 119は北西に10m、R A 124は東に12m、R A 128は北に1m、R A 129は北東に18mを測る。北壁の一部は掘乱れにより削平されている。

[重複関係] R A 127と重複しており、本遺構の方が古い。

[住居の方向] N-7°-E。東壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は東壁5.53m、南壁6.74m、西壁5.75m、北壁5.86mである。

[堆積土] 黒色土・黒褐色土主体で15層に細分した。

[壁・床面] 壁は概ね外傾して立ち上がり、南壁のみ垂直気味である。壁高は24~32cmである。床面は地山を多く含む黒褐色土が全面に貼られて硬くしまり、やや南壁付近が高いもののほぼ平坦である。貼床の層厚は2~16cm、掘り方はⅤ層を掘り込んで形成されている。

[カマド] 袖と燃焼部、煙道を検出した。東壁中央より北壁側、中軸線が壁と直交するように設置されている。カマドの中軸線と北壁との距離は1.3mを測る。軸線方向はN-92°-Eである。袖は灰黄褐色土と暗褐色土を貼付て構築している。両袖には構築材が認められ、共に礫を直立させて配置している。袖と壁が接する箇所に置かれた礫は、大きな礫を分割して置いていることが接合したことから明らかとなった。燃焼部は中央が凹む皿状をしており、平面形は楕円形、規模が81×44cm、層厚6cmの焼成面がある。焼成面中央より煙道付近に支脚が認められ、礫を直立させて配置している。煙道は煙り出しに向かって緩やかに登るように形成され、焼成面から1.82mを測る。煙道構築方法は煙道の両脇に礫が配されていることから、暗渠状の構造をしていたと考えられる。

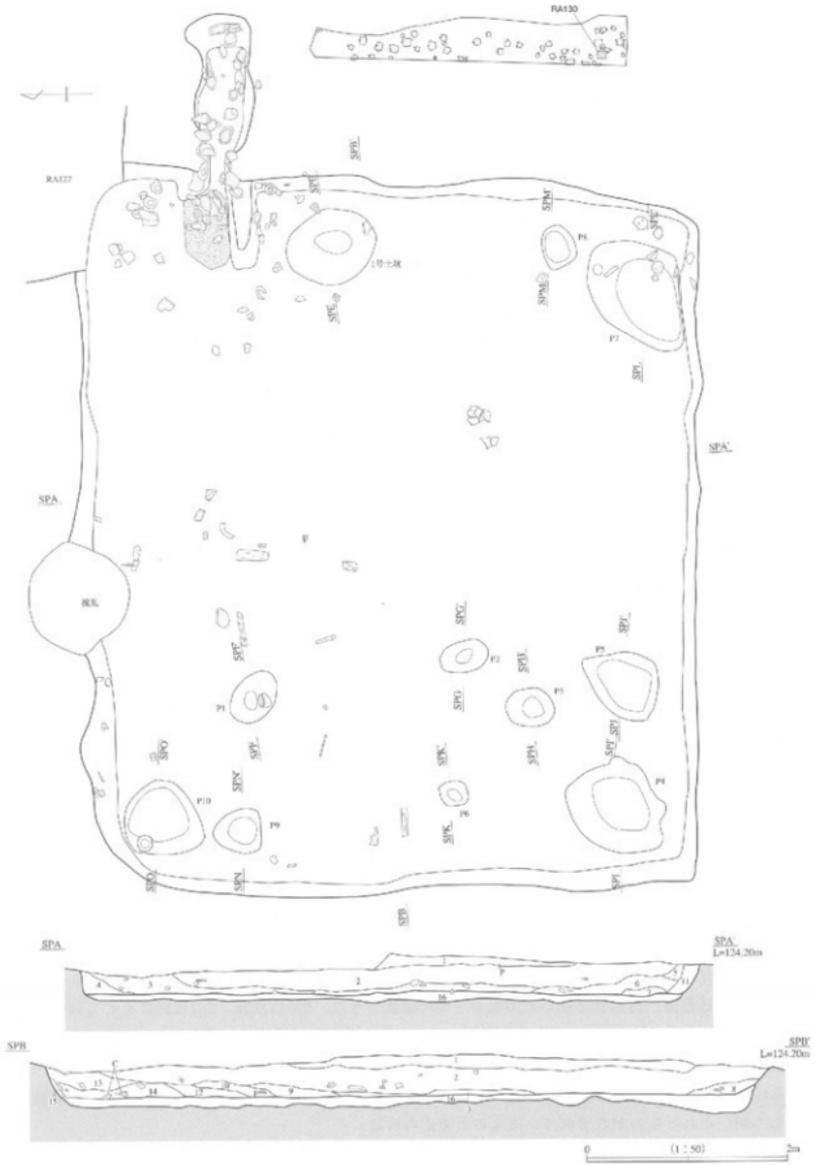
[土坑・柱穴] 土坑1基、柱穴10個を貼床除去時に検出した。

1号土坑は、カマド脇に位置しており、平面形は楕円形、規模は89×78cm、深さは22cmである。埋土中から土器が77点出土し、ほぼ完形の上師器環が認められたことから貯蔵穴と考えられる。

柱穴は平面形と規模から、P1~3・6・8・9とP4・5・7・9に分けられる。前者は平面形は円形もしくは楕円形、開口部径は31~62cm、深さは14~22cmである。後者は、平面形は不整形、開口部径は87~132cm、深さは8~28cmである。前者と後者の配置から検討すると、P1・3・8とP4・7・10が北東隅以外の隅の対角線上に配置されている。両者共に位置関係から主柱穴と考えられる。

[炭化材・焼土] 床面において炭化材が北西隅において西壁や北壁にそれぞれ平行するように検出された。住居焼失時によるものかどうかは不明である。

[遺物] 土器957点、鉄製品7点がカマドを中心とした床面から出土している。土師器環・鉢・甕は口クロ整形である。565~596は土師器環Ⅰ類。ciii類が主体をなし、ci類とa類が僅かに認められる。底部切り離しはすべて回転系切りである。567・572は墨書土器。567は体部外面に「上」、572は体部外面に「成」と記されている。569・588には体部外面に線刻されているがいずれも文字は不明である。597は土師器環Ⅲc類。内面に粗雑な暗文が施され、一筆書きを複数回試みている。598~605は土師器環Ⅱ類。ciii類が主体をなし、ci類とa類が僅かに認められる。この傾向は土師器環Ⅰ類と同じである。底部切り離しは主体は回転系切りであるが、598・599・603・605はヘラケズリである。598・599・605は墨書土器で記された文字は不明である。598・599は多文字、605は1文字しか確認できていないが、土師器環の同じ特徴を持つことから多文字の可能性が高い。これらの墨書土器は他の土器に比べ胎土や色調に違いが見られる上に、先述したように底部の整形方法まで異なっている。このよ

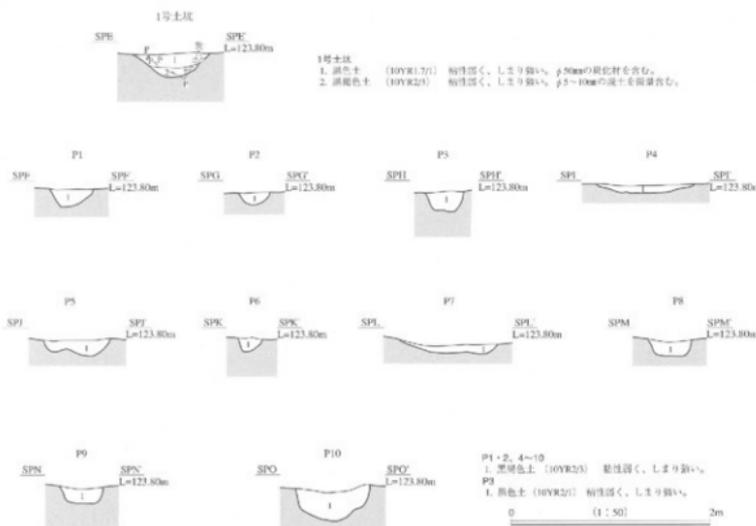


第149図 RA130

RA130

1. 黒褐色土 (HOVK31) 粘性弱く、しまりやや強い。
2. 黒色土 (HOVK1.71) 粘性弱く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (HOVK22) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
4. 黒色土 (HOVK1.71) 粘性やや弱く、しまり強い。
5. 黒褐色土 (HOVK22) 粘性弱く、しまりやや強い。
6. 黒褐色土 (HOVK22) 粘性やや弱く、しまり強い。
7. 黒色土 (HOVK21) 粘性弱く、しまり強い。
8. 黒色土 (HOVK21) 粘性弱く、しまりやや強い。

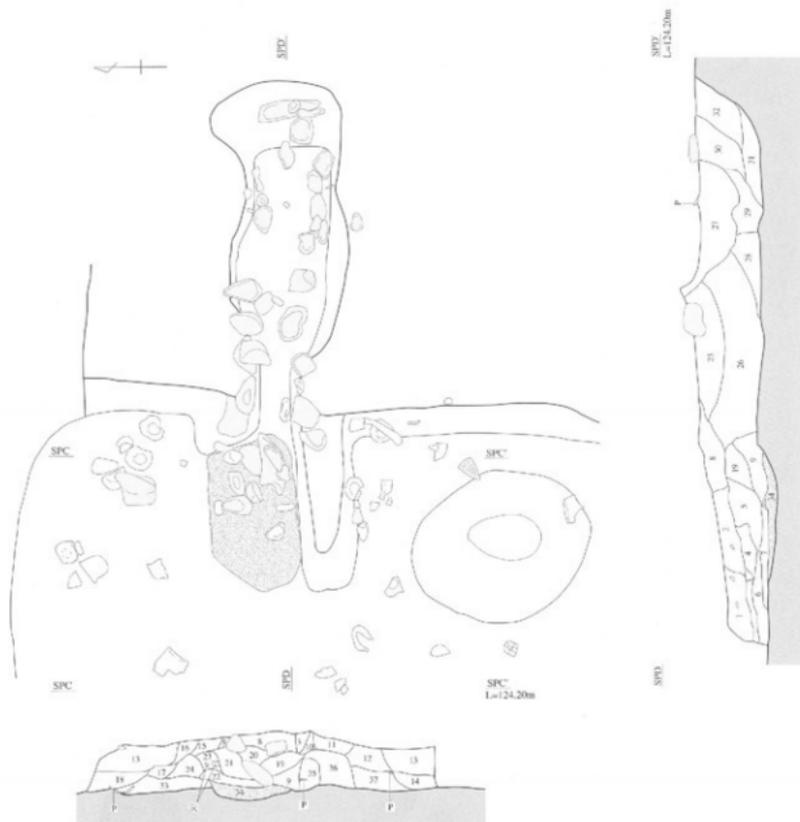
9. 黒褐色土 (HOVK31) 粘性弱く、しまり強い。
10. 黒色土 (HOVK21) 粘性やや弱く、しまり強い。
11. 黒褐色土 (HOVK22) 粘性弱く、しまり強い。
12. 黒色土 (HOVK1.71) 粘性弱く、しまりやや強い。断面跡土をブロック状に少量含む。
13. 黒褐色土 (HOVK21) 粘性弱く、しまり強い。
14. 黒褐色土 (HOVK22) 粘性弱く、しまり強い。炭化屑を少量含む。
15. 黒褐色土 (HOVK31) 粘性弱く、しまり強い。風化面礫土をブロック状に含む。
16. 黒褐色土 (HOVK31) 粘性やや弱く、しまり強い。結実。



第150図 RA130柱穴・土坑

うに整形方法と墨書されるという違いが認められることから、使用方法を含めて他のものと区別されていた可能性がある。606~608は土師器高台付坏。606・607はⅡ類、608はⅠ類である。609は鉢で口径が大きく器壁も厚いことから坏と区分している。610・611・613は土師器甕。いずれも小型に含まれるものである。612・614~616は須恵器甕である。617~623は鉄製品。617・619は刀子。617は炭化物が認められる方が床面と接して出土した。この炭化物は床面の敷物の可能性がある。618は不明鉄製品。保存処理後、留め具と思われる鋸を2カ所確認できた。620は鉄鎌。621は釣針もしくは鉤。形状は釣針と同じであるが、カマドの付近から出土していることから鉤の可能性も考えられる。622・623は釘。礫石器以外に礫は52点出土しているが、すべて使用痕跡が認められない自然礫である。これらの礫は、カマド周辺から出土していることと8割前後が被熱していることから、カマドの構築材として用いられたものが含まれているものと考えられる。

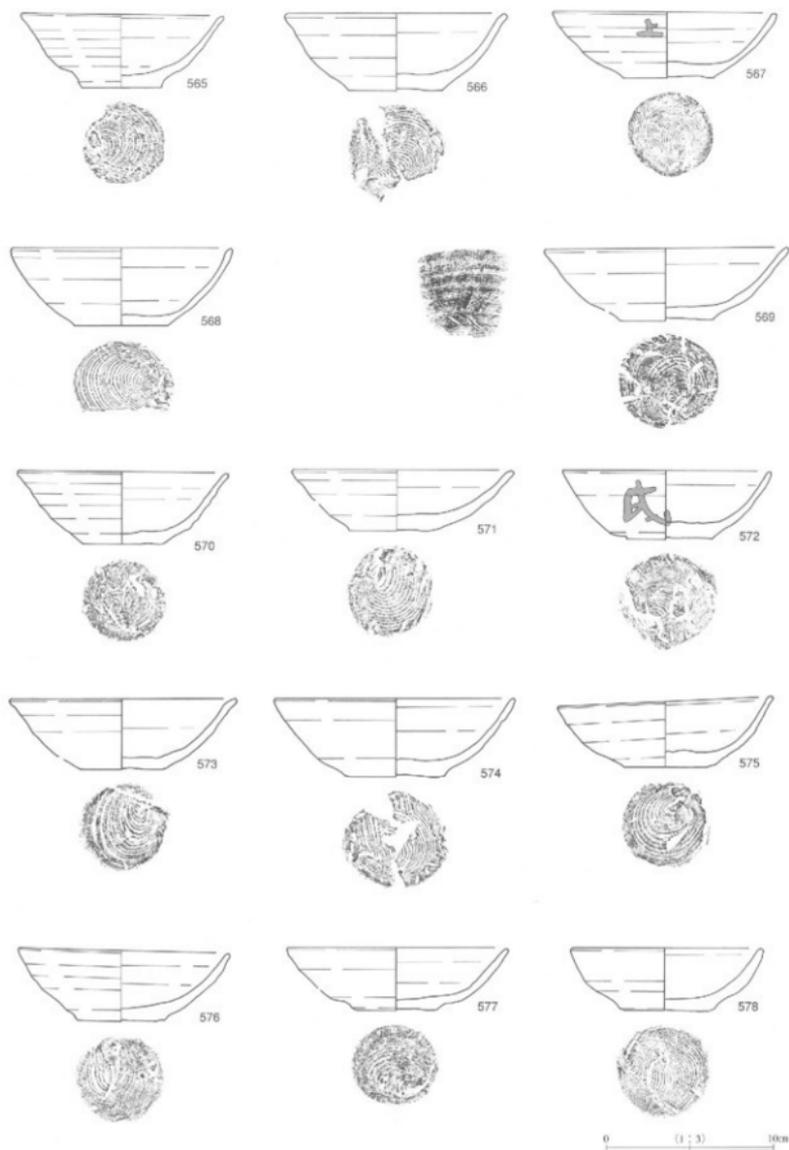
〔遺構時期〕10世紀前半に属する。



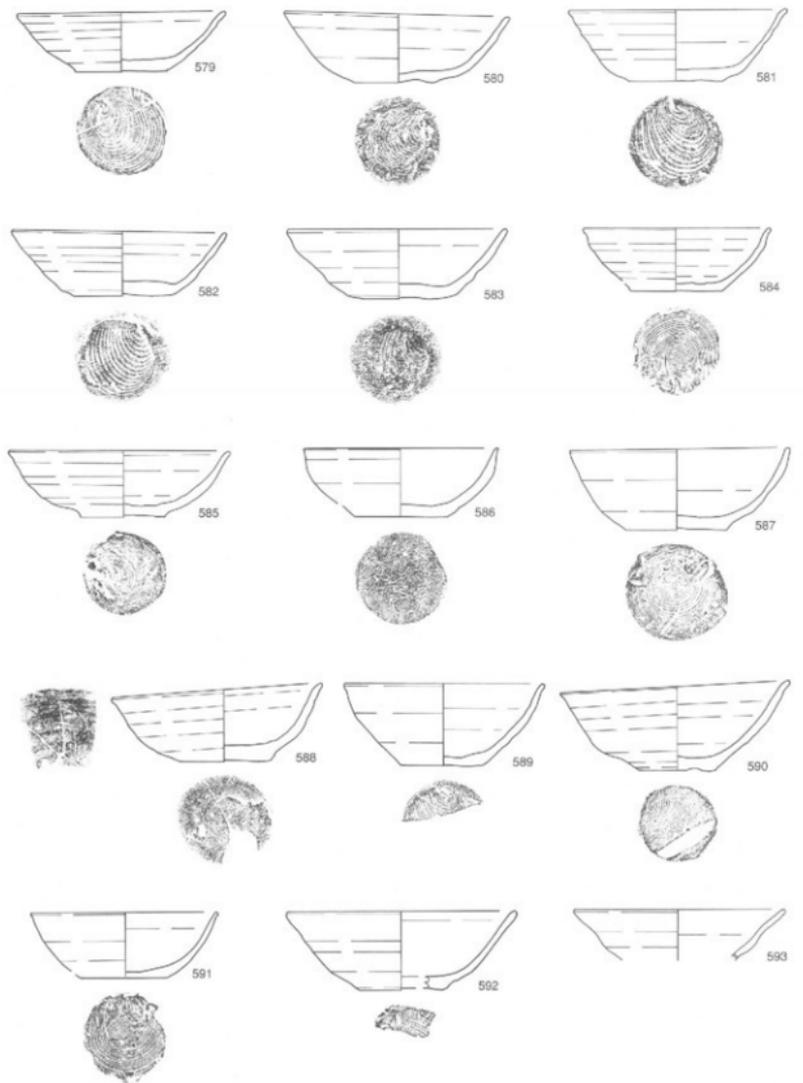
RA130カマド

- | | |
|---|--|
| 1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10mmの焼土を少量含む。 | 20. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10mmの焼土を少量含む。若干意味をみる。 |
| 2. 黒褐色土 (10YR3/4) 粘性弱く、しまり強い。 | (7.5YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~30mmの焼土を多く含む。 |
| 3. 黒褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱く、しまり強い。 | (7.5YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。φ30mmの炭化粒を少量含む。 |
| 4. 黒褐色土 (5YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | (7.5YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10mmの焼土を少量含む。 |
| 5. 暗赤褐色土 (5YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。φ3~7mmの焼土を微量含む。 | 23. 灰褐色土 (7.5YR4/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10mmの焼土を少量含む。 |
| 6. 赤褐色土 (5YR3/3) 粘性弱く、しまり強い。 | 24. 灰褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。φ5~7mmの炭化粒を少量含む。 |
| 7. 赤褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 25. 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。焼土を少量含む。 |
| 8. 灰褐色土 (5YR4/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~15mmの焼土を多く含む。 | 26. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 9. 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。 | 27. 黒色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。風化腐葉土を少量含む。 |
| 10. 黒色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。 | 28. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。焼土を少量含む。 |
| 11. 黒色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~15mmの焼土を少量含む。 | 29. 黒色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。焼土を少量含む。 |
| 12. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。 | 30. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。焼土を少量含む。 |
| 13. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。 | 31. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 14. 黒褐色土 (5YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10mmの焼土を微量含む。 | 32. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 15. 黒褐色土 (7.5YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10mmの焼土を微量含む。 | 33. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~15mmの焼土を多く含む。 |
| 16. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。φ5~7mmの焼土を少量含む。 | 34. 黒褐色土 (5YR4/4) 粘性弱く、しまり強い。焼土を少量含む。 |
| 17. 暗褐色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。天骨腐葉土を含む。 | 35. 黒褐色土 (10YR4/2) 粘性弱く、しまり強い。腐葉土を含む。 |
| 18. 暗褐色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10mmの焼土を少量含む。 | 36. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱く、しまり強い。腐葉土を含む。 |
| 19. 暗褐色土 (10YR3/1) 粘性弱く、しまり強い。 | 37. 黒色土 (10YR3/3) 粘性弱く、しまり強い。腐葉土を含む。 |
| 20. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~10mmの焼土を少量含む。 | 38. 黒色土 (10YR3/3) 粘性弱く、しまり強い。 |
| 21. 20層と同じだが、若干意味をみる。 | |
| 22. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。φ5~30mmの焼土、φ5~20mmの炭化粒を多く含む。 | |

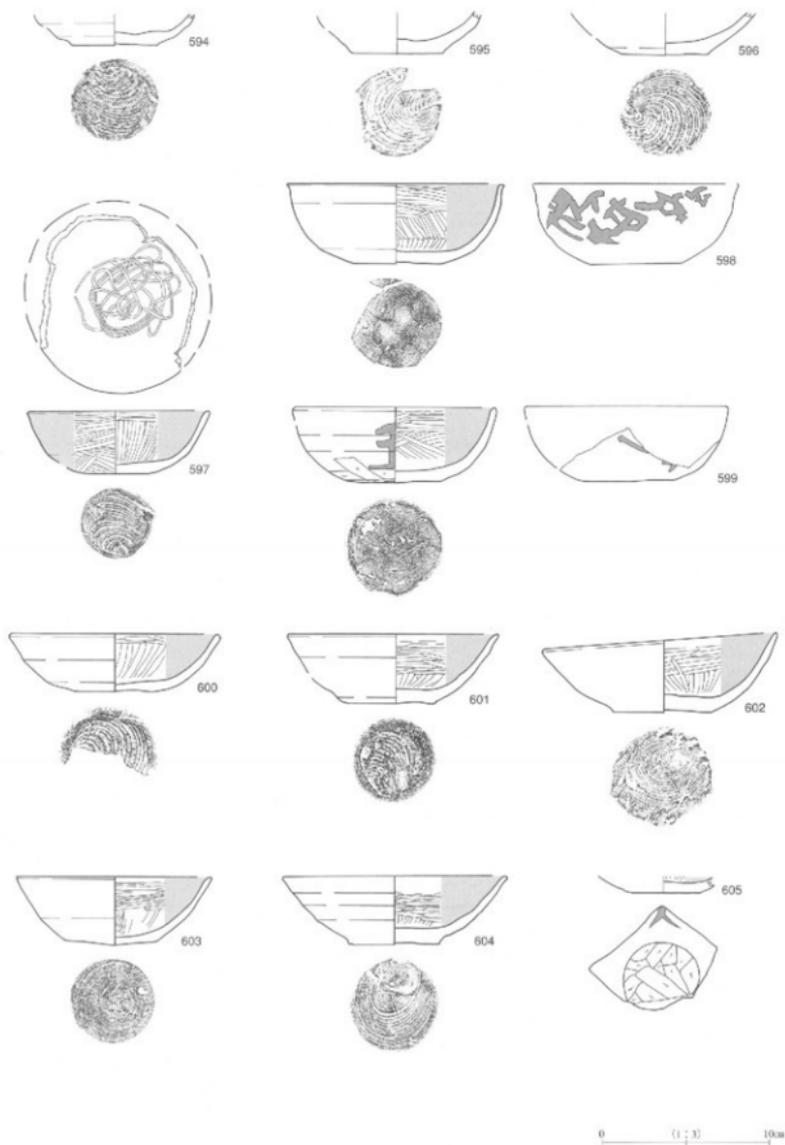
第151図 RA130カマド



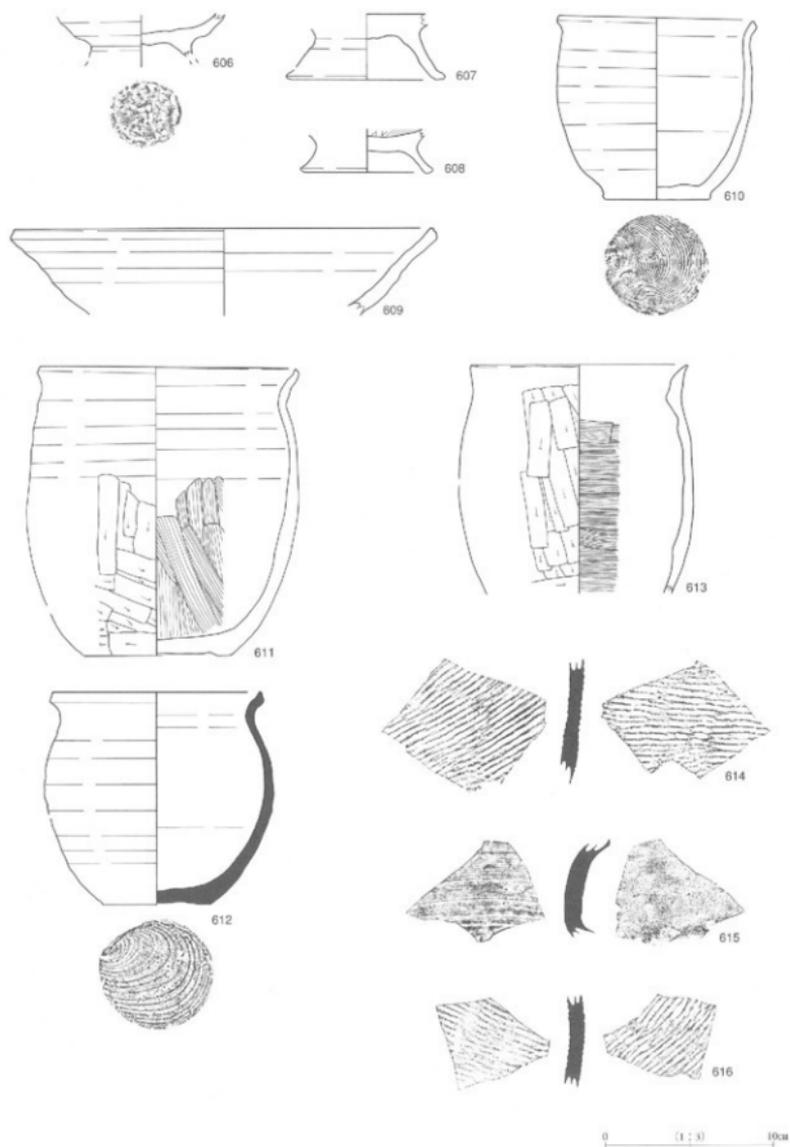
第152図 RA130出土遺物 (1)



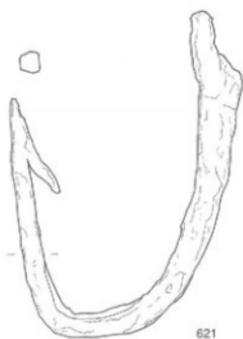
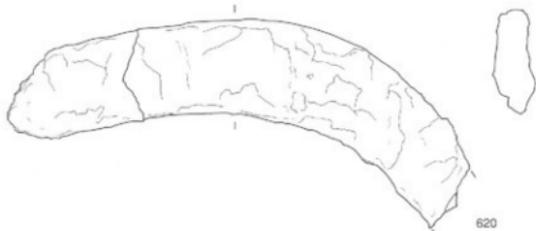
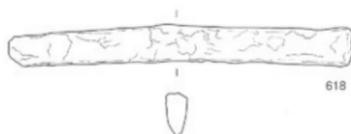
第153図 RA130出土遺物(2)



第154図 RA130出土遺物 (3)



第155図 RA130出土遺物(4)



0 1:2 5cm

第156図 RA130出土遺物 (5)

土坑

R D 201土坑

- [位置・検出層位] 5 L 13・14aグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。
- [平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は2.35×2.23m、深さは49cmである。
- [壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は中央が凹む皿状である。
- [堆積土] 黒褐色土主体で7層に細分した。3層と4層は地山崩落土をブロック状に多く含まれていることから、人為堆積と思われる。それより上層は自然堆積である。
- [遺物] 土器15点、礫19点が埋土下位から出土している。624は須恵器甕の肩部である。
- [遺構時期] 平安時代に属すると思われるが詳細は不明である。

R D 224土坑

- [位置・検出層位] 5 N 14u・wグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。
- [平面形・規模] 平面形は不整形門形である。規模は2.46×0.97m、深さは36cmである。
- [壁・底面] 東西壁は垂直気味に、南北壁は外傾しながら立ち上がる。底面は僅かに凹凸が認められるものの概ね平坦である。
- [堆積土] 黒色・黒褐色土主体で5層に細分した。
- [遺物] 土器35点が底面付近から出土している。625は土師器坏である。
- [遺構時期] 平安時代に属すると思われるが詳細は不明である。

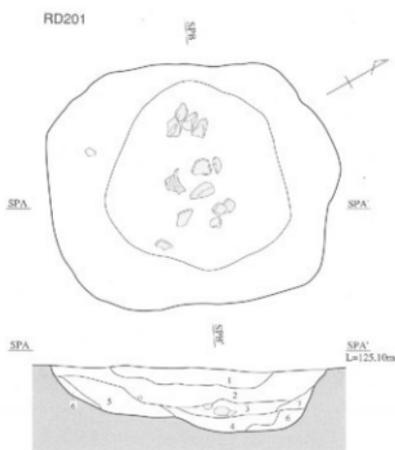
R D 225土坑

- [位置・検出層位] 5 N 22xグリッドに位置する。検出層位はⅣ層である。
- [平面形・規模] 平面形は長方形である。規模は1.59×1.06m、深さは24cmである。
- [堆積土] 黒褐色土主体で6層に細分した。3層中に白色土が少量入り込んでいる。
- [壁・床面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦であるが僅かに中央が凹んでいる。
- [遺物] 土器33点が埋土から出土している。626～628は土師器坏である。628は墨青土器であるが記されている文字は不明である。
- [遺構時期] 平安時代に属すると思われるが詳細は不明である。

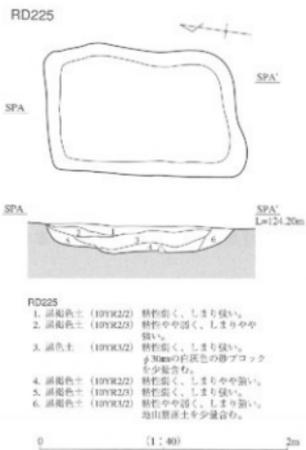
溝跡

R G 138溝跡

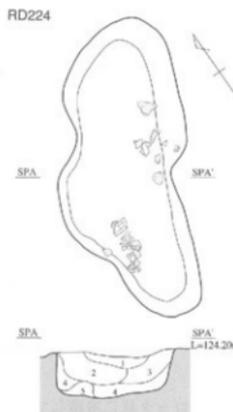
- [位置・検出層位] 5 J 16b～5 J 22jグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。
- [平面形・規模] 上端・下端共に平行している。検出長は23.6m、幅は0.7～2.1m、深さは28～42cmである。
- [壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。
- [軸線方向] N-56°-W。
- [堆積土] 黒褐色土主体で7層に細分した。3・6層には十和田a火山灰がブロック状に堆積している。
- [遺構時期] 堆積土状況と過去の成果と合わせて判断して平安時代としている。



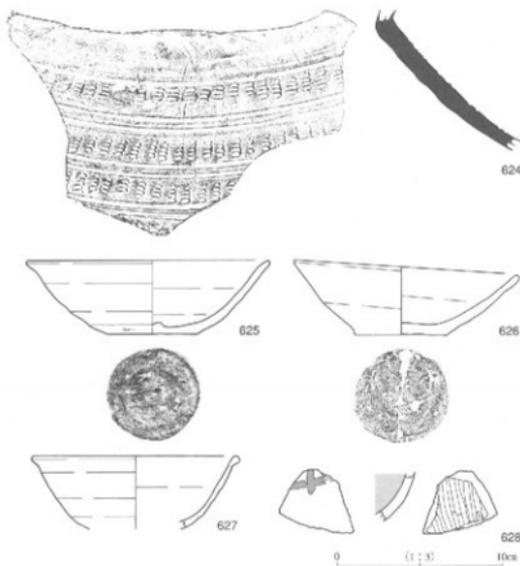
- RD201
1. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒多し、しまり強い。
 2. 黒褐色土 (10YR5/1) 粘粒やや多し、しまり強い。
 3. 黒色土 (10YR5/7) 粘粒多し、しまり強い。湖山崩落土を少量含む。
 4. 灰黄褐色土 (10YR6/2) 粘粒やや多し、しまりやや強い。湖山崩落土をやや多く含む。
 5. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘粒多し、しまり強い。
 6. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒多し、しまり強い。
 7. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒多し、しまり強い。湖山崩落土を多く含む。



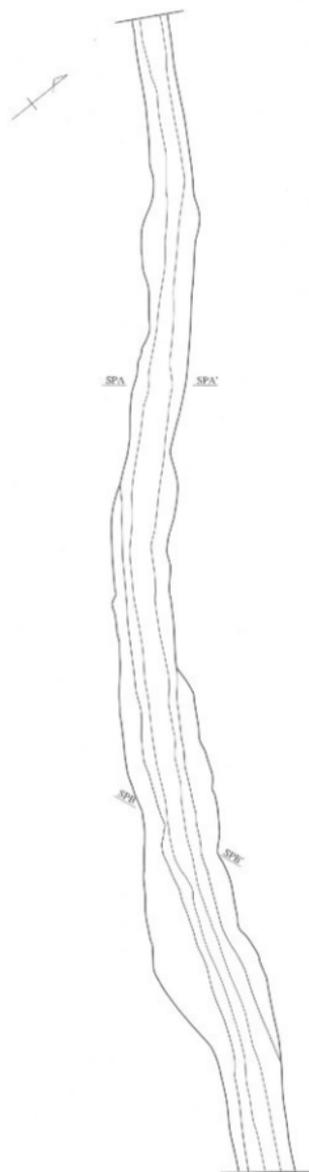
- RD225
1. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒多し、しまり強い。
 2. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒やや多し、しまりやや強い。
 3. 黒色土 (10YR5/2) 粘粒多し、しまり強い。赤褐色の灰土の層アソックスを少量含む。
 4. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒多し、しまりやや強い。
 5. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒多し、しまり強い。
 6. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒やや多し、しまり強い。湖山崩落土を少量含む。



- RD224
1. 黒色土 (10YR5/3) 粘粒多し、しまり強い。
 2. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒多し、しまり強い。
 3. 黒色土 (10YR5/7) 粘粒多し、しまり強い。
 4. 黒褐色土 (10YR5/3) 粘粒やや多し、しまり強い。湖山崩落土を少量含む。
 5. 黒褐色土 (10YR5/2) 粘粒多し、しまり強い。

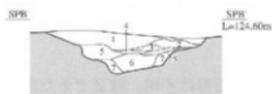


第157図 RD201・224・225・出土遺物



RG138A-A'

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘土やや強く、しまり甚。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘土甚、しまりやや強い。十数箇aフタをブロック状に含む(φ2~3cm)。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘土強く、しまり強い。
4. 灰黄褐色土 (10YR4/7) 粘土、しまり共に強い。
5. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘土、しまり共に強い。φ5~10cmの十数箇aフタを散在に含む。
6. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘土やや強く、しまり強い。
7. 黒色土 (10YR3/1) 粘土、しまり共にやや強い。黒色土ブロックを散在含む。



RG138B-B'

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強く、しまり甚。
2. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性甚、しまりやや強い。十数箇aフタをブロック状に含む(φ2~3cm)。
4. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強く、しまり強い。黒色土ブロックが少量入る。
5. 黒褐色土 (10YR3/0) 粘性強く、しまり強い。
6. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性、しまり共に強い。十数箇aフタをブロック状に含む(φ1cm程度)。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性、しまり共に強い。φ10cm程度の黒色土ブロックを散在含む。



第158図 RG138

(4) 奈良～平安時代の遺構

R A 103 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 N19q・rグリッドに位置する。R A 128の床面精査中に本遺構を確認する。床面とカマド燃焼部のみ精査となる。遺構検出層位はV層である。

[住居の方向] N-62°-E。南壁を基準としている。

[平面形・規模] 確認できた平面形は東西に長い長方形である。規模は東西1.71×南北1.23mである。

[壁・床面] 床面のみ確認され、貼床が僅かに残存している。

[カマド] 残存する東壁の中央に燃焼部の底面が検出された。

[遺物] なし。

R A 117 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 N21g・hグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[住居の方向] N-80°-W。北壁を基準としている。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は西壁4.28m、北壁3.59m、東壁3.72m、南壁3.45mである。

[堆積土] 黒色土主体で5層に細分した。1層上面に十和田a火山灰がブロック状に堆積していた。

[壁・床面] 壁は開き気味に立ち上がる。壁高は10～18cmである。床面はほぼ平坦である。V層を掘り込んで形成されているため、隙が多く見られている。貼床は確認されていない。

[カマド] 西壁中央に設置されている。軸線方向はN-88°-Wである。煙道のみ検出した。煙道は壁から1.28mを測る。

[遺物] 埋土中から土器が数点出土しているが、奈良から平安時代にかけてのものである。

[遺構時期] 埋土中に十和田a火山灰を確認できたことから平安時代の可能性があるが、詳細は不明である。

R A 122 竪穴住居跡

[位置・検出層位] 5 L22・23aグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。調査区の中でも標高の高い所にある。本遺構周辺は擾乱により削平されていることから、カマドと床面の一部の確認となる。

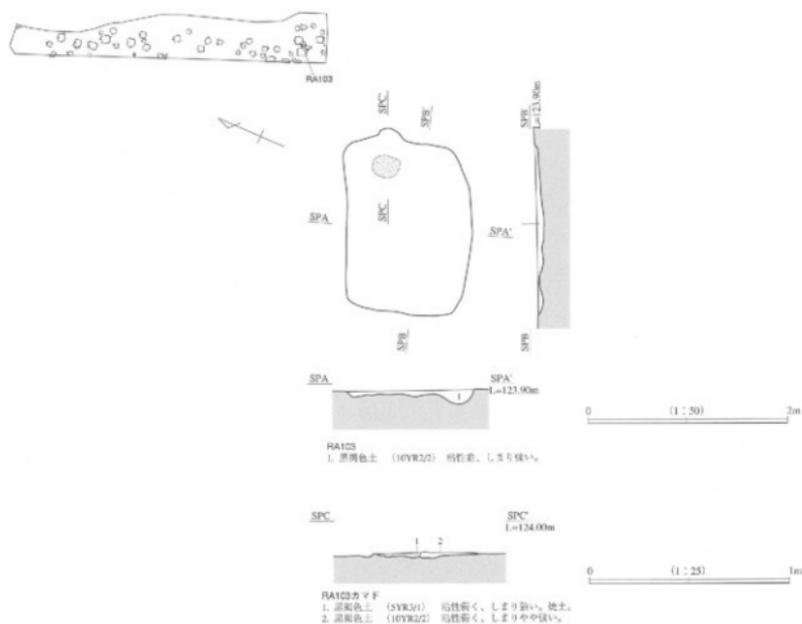
[住居の方向] 不明。

[平面形・規模] 平面形は不明。確認できた床面の規模は南北の長軸が2.61mである。

[壁・床面] 壁は残存していない。床面はほぼ平坦であり、VI層を掘り込んで形成されている。貼床等は確認されていない。

[カマド] 西壁に設置され、軸線方向は残存している焼土と袖からN-110°-W付近と思われる。左袖と燃焼部のみ検出した。左袖は灰黄褐色土を貼付て構築している。燃焼部は甌ね皿状をしており、平面形は円形、規模が40×38cm、層厚5cm前後の焼成面がある。

[遺物] なし。



第159図 RA103

竪穴状遺構

R E 017竪穴状遺構

[位置・検出層位] 5 K 22g・h、23g・hグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。

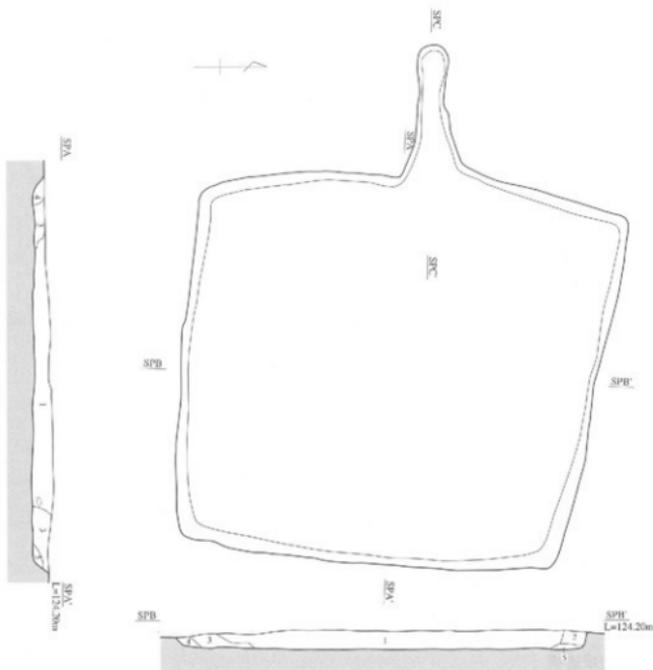
[平面形・規模] 平面形は東西に長い長方形である。規模は北壁2.61m、東壁1.92m、南壁2.74m、西壁2.06mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で19層に細分した。1層中には十和田a火山灰がブロック状に堆積している。

[壁・床面] 壁は開き気味に立ち上がる。壁の残存状況が良く、壁高は42～50cmである。床面はほぼ平坦であるが、中央部分がやや凹む。

[遺物] 縄が1点出土しているが自然踏である。

2 検出された遺構・遺物



RA117

1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱く、しっとり重。φ5cm前後の黒山灰等土を散見含む。本は土層で十層以上がワラをゴッコク状に混入。
2. 黒色土 (10YR1/1) 粘性弱く、しっとりやや軽い。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しっとりやや軽い。φ3~5cmの黒山灰等土を散見含む。
4. 黒色土 (10YR1/1) 粘性弱く、しっとり軽い。φ1~5cmの黒山灰等土を少量含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しっとり重。

0 (1:50) 2m

SPC

SPC
L=124.20m

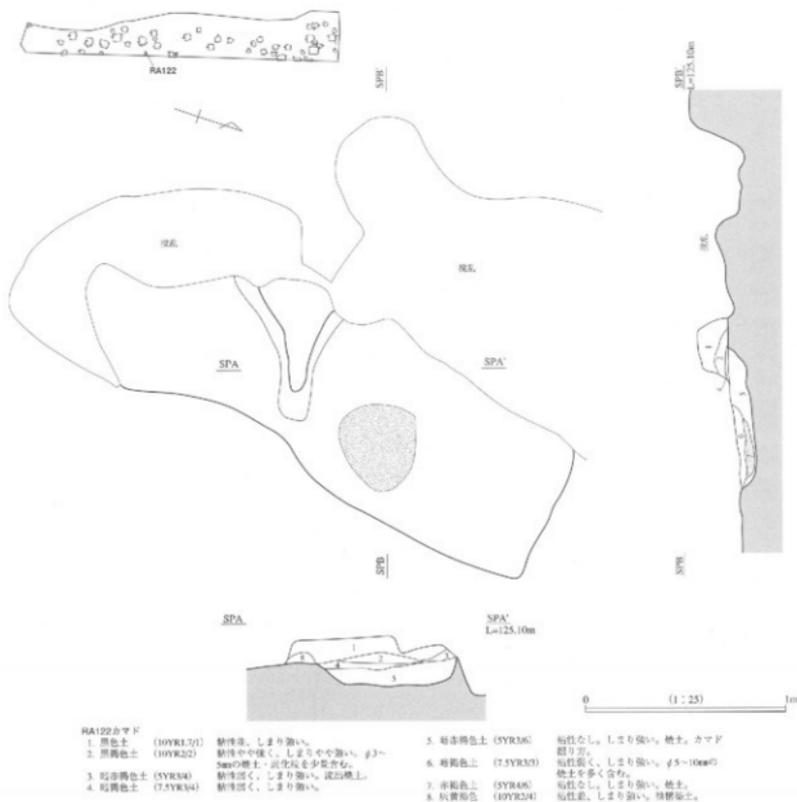


RA117カマド

1. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しっとり重。

0 (1:25) 1m

第160図 RA117



第161図 RA122第161図

R E 018 竪穴状遺構

[位置・検出層位] 5 N12o・p、13o・pグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。本遺構は北側に向かって緩やかに下っていく段丘縁辺部にあり、北壁から8m北には段丘崖が存在している。

[平面形・規模] 平面形は残存箇所よりやや東西に長い長方形である。規模は北壁1.81m、東壁2.69m、南壁3.31m、西壁2.99mである。

[堆積土] 黒褐色土主体で5層に細分した。

[壁・床面] 壁は外積して立ち上がる。壁高は16~24cmである。床面はほぼ平坦である。

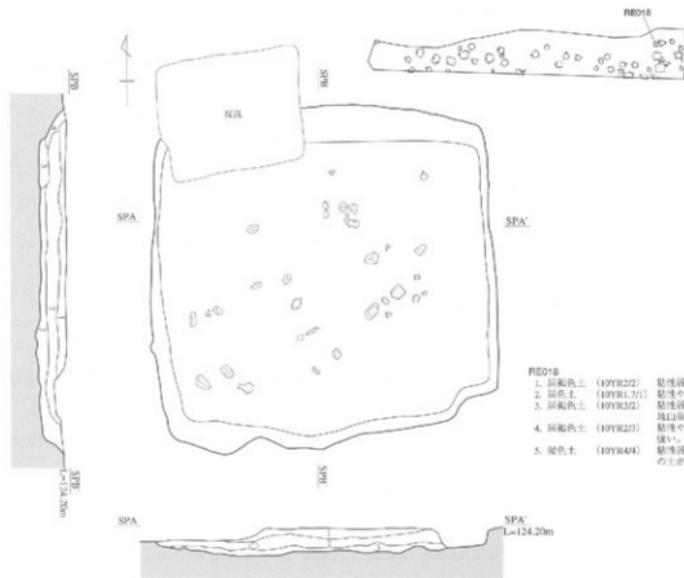
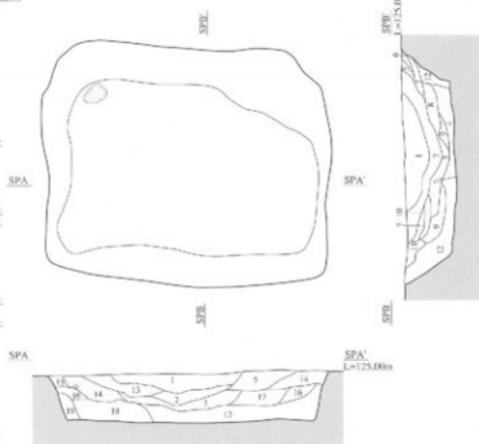
[遺物] 竈が32点出土している。被熱しているものも含まれるがすべて自然窯である。

2 検出された遺構・遺物



RE017

1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱く、しまりやや強い。上面にフコク状の十稜田字ワラを露出。
2. 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまりやや強い。φ3~5cmの底土粒を露出含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
4. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまりやや強い。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。残土面層を少量、φ5cm前後の炭化灰を露出含む。
6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまりやや強い。φ10cm前後の底土粒を露出含む。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
9. 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。
10. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。残土面層を少量含む。
12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまり強い。残土面層を露出含む。
13. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱く、しまりやや強い。
14. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
15. 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。φ20cmの残土面層を露出含む。
16. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
17. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。φ5cmの底土粒を露出含む。
18. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
19. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。φ3cmの残土面層を少量含む。



RE018

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまりやや強い。
2. 褐色土 (10YR1/7) 粘性やや弱く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。残土面層を少量露出。
4. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
5. 褐色土 (10YR1/4) 粘性弱く、しまり強い。上層の土がフコク状に露入。

0 (1:50) 2m

(5) 所屬時期不明の遺構・遺物

土坑

RD191土坑

[位置・検出層位] 5 K22kグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は1.31×1.2m、深さは30cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は皿状である。

[堆積土] 黒褐色土主体で5層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RD192土坑

[位置・検出層位] 5 K20nグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は1.44×0.67m、深さは14cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は僅かに門凸があるものの中央が凹む皿状である。

[堆積土] 黒褐色土主体で3層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RD194土坑

[位置・検出層位] 5 K18tグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。

[重複] RG142と重複しており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.29×1.07m、深さは38cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は中央が凹む皿状である。

[堆積土] 黒褐色土主体で3層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RD195土坑

[位置・検出層位] 5 K20uグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.24×0.69m、深さは55cmである。

[壁・底面] 壁は底面から中端にかけてやや垂直に、中端から上端へは外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒褐・暗褐色土主体で4層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RD197土坑

[位置・検出層位] 5 K20vグリッドに位置する。遺構検出層位はⅥ層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は1.09×0.99m、深さは33cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は西側は一段高く平坦面が形成され、中央から東側は皿状である。

[堆積土] 暗褐色～黒褐色土主体で4層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RD199土坑

[位置・検出層位] 5 L16fグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は85×83cm、深さは18cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は皿状である。

[堆積土] 黒褐色土主体で4層に細分した。2層には炭化粒を多く含んでいる。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RD200土坑

[位置・検出層位] 5 K21wグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.67×1.01m、深さは22cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で3層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RD202土坑

[位置・検出層位] 5 M15d・cグリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.92×1.11m、深さは12cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、南東隅はビット状の掘り込みが存在し一段低くなる。

[堆積土] 黒褐色土主体で5層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RD203土坑

[位置・検出層位] 5 M22cグリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形楕円形である。規模は1.56×1.18m、深さは16cmである。

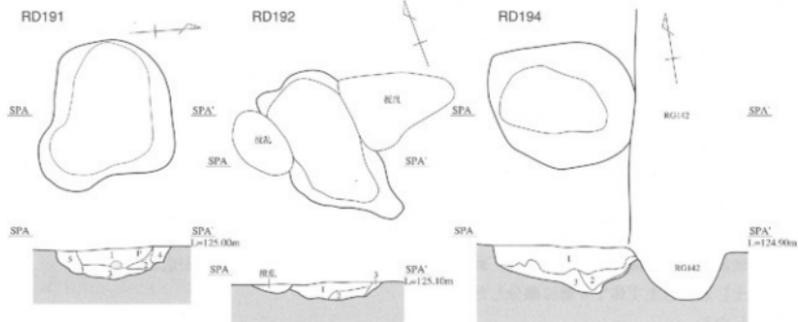
[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。底面において焼土範囲を確認できたが層厚は1cm前後である。

[堆積土] 黒色・黒褐色土主体で2層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

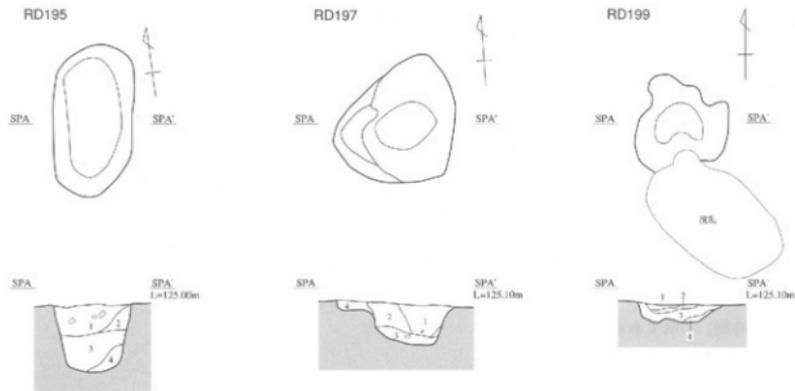
[遺物] 礫が4点出土している。この4点中3点は被熱しているが、使用痕跡が認められない自然礫



- RD191**
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまりや強い。
 2. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強く、しまり強い。
 3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。
 4. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性、しまり共に強い。地山崩落土を少量含む。
 5. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性、しまり共に強い。地山崩落土を少量含む。

- RD192**
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。
 2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまりや強い。地山崩落土をやや多く含む。
 3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。地山崩落土を少量含む。

- RD194**
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまり弱い。
 2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり強い。地山崩落土を少量含む。
 3. 暗褐色土 (10YR3/0) 粘性強く、しまり強い。地山崩落土を多く含む。



- RD195**
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。
 2. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性強く、しまり強い。約3~5cmの灰に際し黒白腐葉土を少量含む。
 3. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性強く、しまり強い。
 4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。地山崩落土を少量含む。

- RD197**
1. 赤色土 (10YR1/7) 粘性弱く、しまり強い。
 2. 暗褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまり強い。地山崩落土をやや多く含む。
 3. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性なし、しまり強い。地山崩落土を多く含む。
 4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまり強い。地山崩落土を少量含む。

- RD199**
1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし、しまり弱い。粘性弱く、しまり強い。約3~5cmの灰に際し黒白腐葉土を多く含む。
 2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり強い。
 3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。
 4. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまりや強い。

0 (1:40) 2m

第163図 RD191・192・194・195・197・199

である。

[備考] 焼土と被熱された礫を底面において確認できたが遺構の性格は不明である。

R D 204土坑

[位置・検出層位] 5 M18iグリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。

[重複] R A104とP35と重複し、R A104→本遺構→P35の順に新しくなる。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.77×0.81m、確認できた深さは20cmである。精査段階でR A104と間違っって掘り進めたため、このような断面の状況となる。本来ならばあと10cm前後上層の断面を確認できていた。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。部分的に焼土が広がっている。

[堆積土] 黒褐色土主体で6層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] R A104の所属時期が奈良時代であることから、それ以降であるが詳細な時期は不明である。

R D 205土坑

[位置・検出層位] 5 N23iグリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。

[平面形・規模] 平面形は方形である。規模は南北1.37×東西1.26m、深さは14cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒色土主体で2層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D 206土坑

[位置・検出層位] 5 M17hグリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。

[平面形・規模] 平面形は円形である。規模は96×87cm、深さは7cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D 207土坑

[位置・検出層位] 5 M16dグリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。

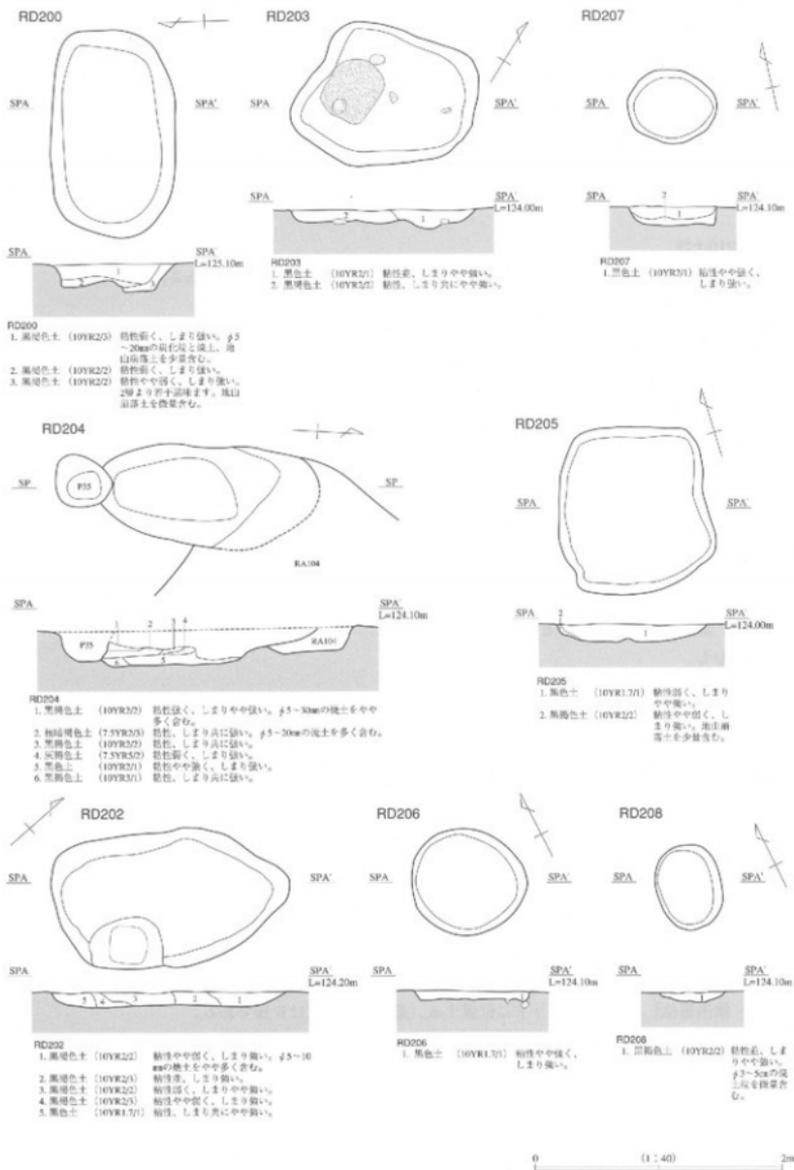
[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は73×62cm、深さは10cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。



第164図 RD200・202~208

R D 208土坑

〔位置・検出層位〕 5 M18iグリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。

〔平面形・規模〕 平面形は円形である。規模は69×53cm、深さは10cmである。

〔壁・底面〕 壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

〔堆積土〕 黒褐色土である。

〔遺物〕 なし。

〔遺構時期〕 不明である。

R D 210土坑

〔位置・検出層位〕 5 M20・21rグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

〔重複〕 RD214と重複するが本遺構のほうが古い。

〔平面形・規模〕 平面形は長楕円形である。規模は3.11×0.69m、深さは26cmである。

〔壁・底面〕 壁は東西壁は外傾、南北壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 黒色・黒褐色土主体で2層に細分した。

〔遺物〕 なし

〔遺構時期〕 不明である。

R D 211土坑

〔位置・検出層位〕 5 M22rグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形である。規模は1.18×0.78m、深さは27cmである。

〔壁・底面〕 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は中央が凹んでいる。

〔堆積土〕 黒色・黒褐色土主体として3層に細分した。

〔遺物〕 なし。

〔遺構時期〕 不明である。

R D 212土坑

〔位置・検出層位〕 5 M17rグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

〔平面形・規模〕 平面形は円形である。規模は1.18×1.08m、深さは7cmである。

〔壁・底面〕 壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

〔堆積土〕 黒褐色土である。

〔遺物〕 なし。

〔遺構時期〕 不明である。

R D 213土坑

〔位置・検出層位〕 5 M23pグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

〔重複〕 RA107と重複し、本遺構の方が新しい。

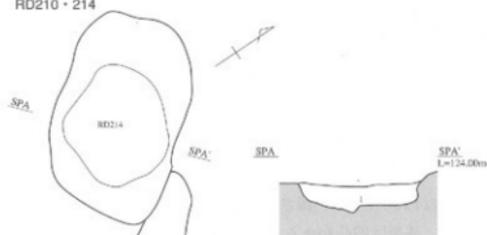
〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形である。規模は南北1.51×東西1.43m、深さは30cmである。

〔壁・底面〕 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 黒色・黒褐色土主体で6層に細分した。

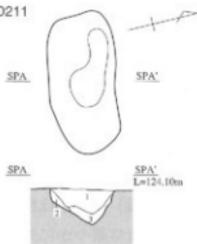
〔遺物〕 土器12点、礫3点が埋土中から出土しているが、これらは重複しているRA107から流れ込

RD210・214



RD214
1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い、
約5-7cmの
粘土礫土
を埋没含む。

RD211

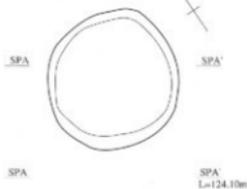


RD211
1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性強、しまりや強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり強い。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強、しまり強い。



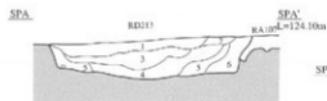
RD210
1. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性やや強く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強、しまりやや強い。

RD212



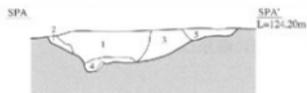
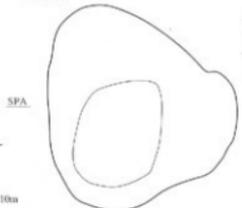
RD212
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり強い、約5-20mmの
炭化粒を散見含む。

RD213



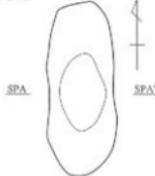
RD213
1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまりや強い。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまりや強い。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまりや強い。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。

RD215

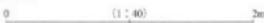


RD215
1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
3. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまりや強い。
4. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性やや強く、しまりや強い。
5. 黒色土 (10YR2/1) 焼瓦。

RD216



RD216
1. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性弱く、しまり強い。
2. 黒褐色土 (10YR3/0) 粘性弱く、しまり強い。



第165図 RD210~216

んだものと思われる。土器は磨滅しているため図化していない。礫はすべて自然礫である。

[遺構時期] R A107の所属年代は奈良時代であることから、それ以降であるが詳細な時期は不明である。

R D214土坑

[位置・検出層位] 5 M20q・rグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[重複] R D210と重複し、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.75×1.16m、深さは17cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸があるものの概ね皿状である。

[堆積土] 黒褐色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D215土坑

[位置・検出層位] 5 N14cグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形である。規模は1.68×1.52m、深さは33cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね皿状であるが、西壁付近はやや強く凹む。

[堆積土] 黒色・黒褐色土主体で5層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D216土坑

[位置・検出層位] 5 N20fグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.43×0.54m、深さは21cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は中央が凹む皿状である。

[堆積土] 黒色・黒褐色土主体で2層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D217土坑

[位置・検出層位] 6 N1iグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は82×57cm、深さは16cmである。

[壁・底面] 東壁は緩やかに外傾するが、その他の壁はやや垂直気味に立ち上がる。底面は凹凸はあるものの概ね皿状である。

[堆積土] 黒褐色土主体で2層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D219土坑

[位置・検出層位] 5 N19dグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は75×45cm、深さは22cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で3層に細分した。

[遺物] 土器が5点埋土上から出土している。磨滅しているため不明な点が多いが、奈良から平安時代の土器と思われる。

[遺構時期] 不明である。

R D221土坑

[位置・検出層位] 5 N12mグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。

[平面形・規模] 平面形は円形である。規模は1.05×0.87m、深さは13cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土である。

[遺物] 礫が2点埋土上位から出土しているが、使用痕跡が認められない自然礫である。

[遺構時期] 不明である。

R D222土坑

[位置・検出層位] 5 N12lグリッドに位置する。遺構検出層位はⅣ層である。北西側が攪乱により一部削平されている。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.81×1.57m、深さは40cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒色・黒褐色土主体で4層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D226土坑

[位置・検出層位] 5 N19nグリッドに位置している。遺構検出層位はⅣ層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は79×77cm、深さは16cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で4層に細分した。1・2層に十和田アテフラがブロック状に少量混入している。

[遺物] 土器6点、礫1点が埋土から出土している。土器はいずれも土師器であるが、磨滅しているため詳細は不明である。

[遺構時期] 不明である。

R D227土坑

[位置・検出層位] 5 N20rグリッドに位置する。検出層位はⅣ層である。

[平面形・規模] 平面形は円形である。規模は81×71cm、深さは21cmである。

[壁・底面] 北壁は外傾して立ち上がる。底面は皿状である。

[堆積土] 黒色・黒褐色土主体で2層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D 228土坑

[位置・検出層位] 5 N24sグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.32×0.84m、深さは22cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は凹凸が認められるものの概ね皿状である。

[堆積土] 黒褐色土主体で3層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D 229土坑

[位置・検出層位] 5 N19o・pに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.71×1.02m、深さは26cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は凹凸が認められ中央が強く凹む。

[堆積土] 黒色・黒褐色土主体で4層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D 230土坑

[位置・検出層位] 5 N17mグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は86×81cm、深さは11cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D 232土坑

[位置・検出層位] 6 N1vグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は円形である。規模は76×66cm、深さは22cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は中央が凹む皿状である。

[堆積土] 黒色土・黒褐色土主体で2層に細分した。

[遺物] なし。

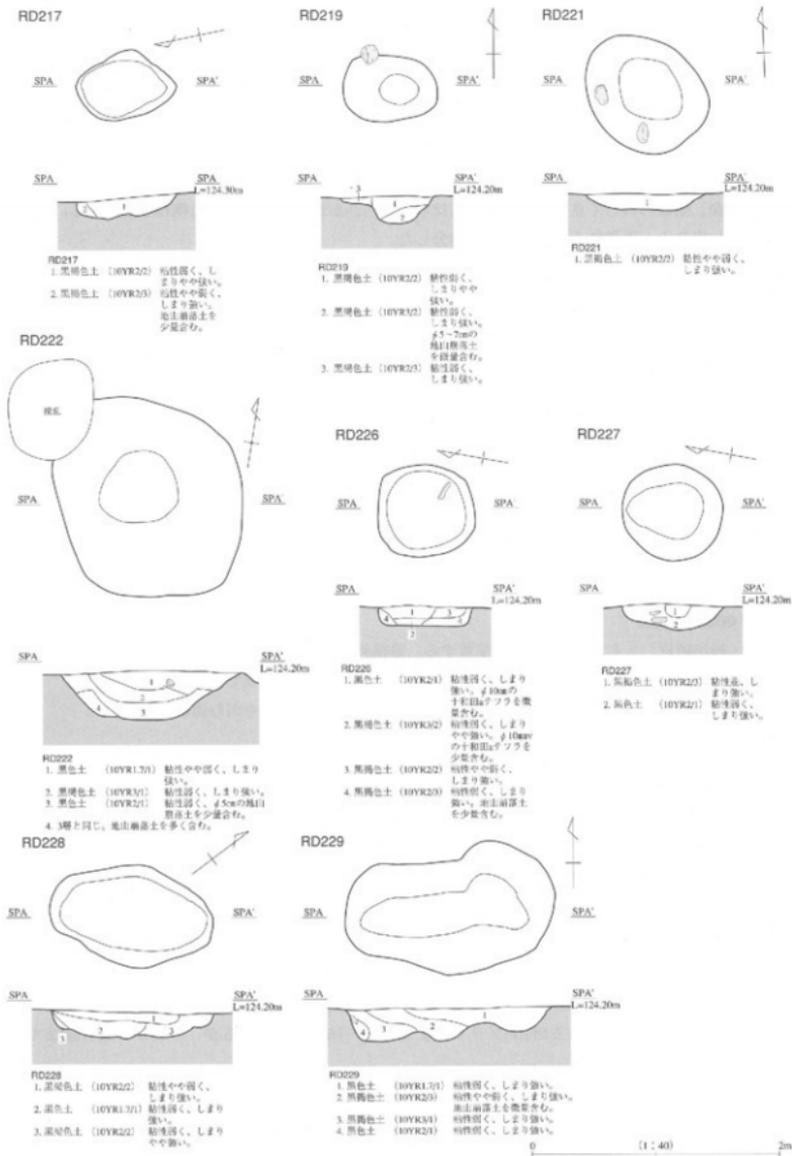
[遺構時期] 不明である。

R D 233土坑

[位置・検出層位] 5 N17nグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は91×67cm、深さは14cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は概ね平坦である。



第166図 RD217・219・221・222・226~229

[堆積土] 黒褐色土主体で2層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R D 234土坑

[位置・検出層位] 5 N22kグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は1.37×1.06m、深さは29cmである。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は多少の凹凸が認められるものの概ね平坦である。

[堆積土] 黒色土・黒褐色土主体で2層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

焼土遺構

R F 002焼土遺構

[位置・検出層位] 5 L23dグリッドに位置する。遺構検出層位はIV層である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は90×84cm、厚さは10cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は中央が凹む皿状である。

[堆積土] 明褐色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

R F 003焼土遺構

[位置・検出層位] 5 L23dグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は60×39cm、厚さは17cmである。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は中央がやや凹む皿状である。

[堆積土] におい赤褐色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

溝跡

R G 118溝跡

[位置・検出層位] 5 M11a～22pグリッドに位置する。遺構検出層位はIV～V層である。

[重複] R A 104と重複しており、本遺構が新しい。

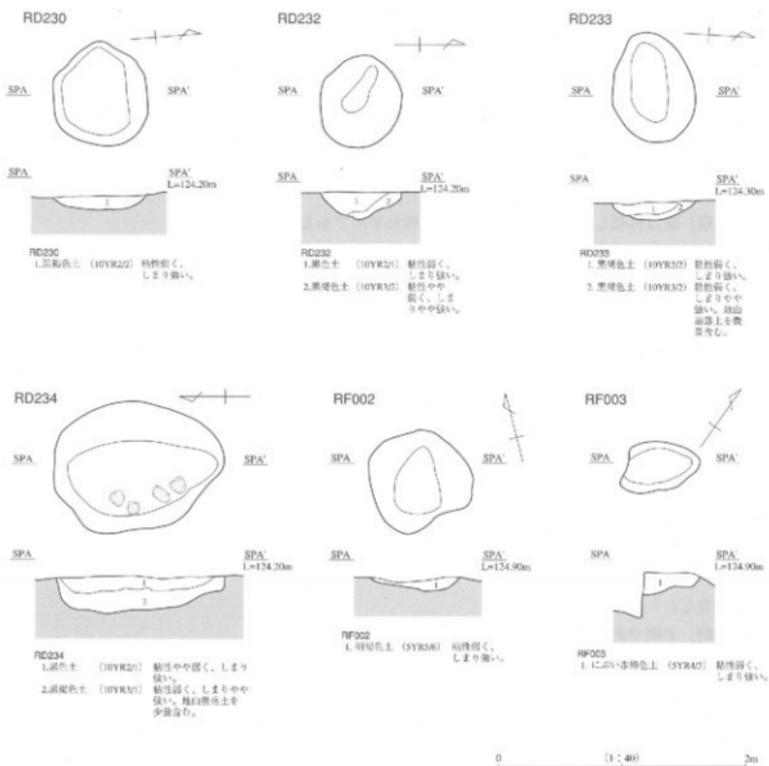
[平面形・規模] 上端と下端共に平行して延びている。遺構は段丘崖と接触するところで本遺構は途切れる。規模は検出長は23.3m、幅は0.45～2.2m、深さは84cmである。

[軸線方向] 調査区の南から5 M19oグリッドまではN-16° -Wであるが、そこから段丘崖まではN-57° -Wへと変更する。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で6層に細分した。

[遺物] 陶磁器1点が埋土から出土している。図化していないが近世以降のものである。



第167図 RD230・232～234、RF2・3

[遺構時期] 近世以降と思われるが詳細は不明である。

R G141溝跡

[位置・検出層位] 5 J14b～5 J19jグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。

[平面形・規模] 上端と下端共に平行して延びている。5 J19kグリッドにて本遺構は途切れる。規模は検出長は20.68m、幅は0.35m、深さは6cmである。

[軸線方向] N-61°-W。R G138と平行する。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は中央が凹んでいる。

[堆積土] 黒色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RG142溝跡

[位置・検出層位] 5 K16t~23sグリッドに位置する。遺構検出層位はVI層である。

[重複] RA097とRD194と重複しているが、それらより新しい。

[平面形・規模] 上端と下端共に平行して延びている。検出長は16.3m、幅は0.3~1.05m、深さは41cmである。

[軸線方向] N-9°-E。

[壁・底面] 壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 黒褐色土主体で4層に細分した。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

RG143溝跡

[位置・検出層位] 5 M14・15eグリッドに位置する。遺構検出層位はV層である。

[重複] RG118と重複しており、本遺構→RG118の順に新しくなる。

[平面形・規模] 上端と下端共に平行して延びている。検出長は2.04m、幅は48~62cm、深さは14cmである。

[軸線方向] N-12°-E。

[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は中央が凹んでいる。

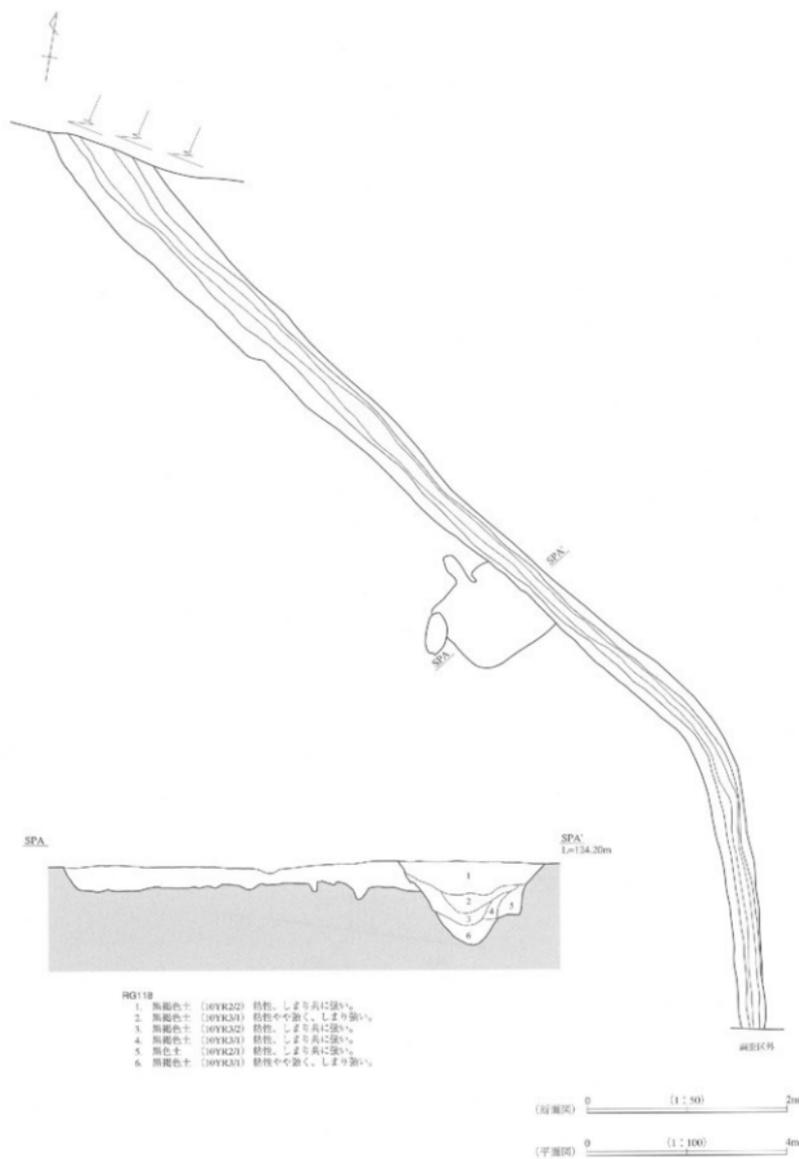
[堆積土] 黒色土である。

[遺物] なし。

[遺構時期] 不明である。

柱穴状土坑

柱穴状土坑は調査区から74個検出された。集中して見られる範囲が5箇所確認できたので分割して報告する。それぞれまとまっているものの、いずれも建物が建つ要素は認められない。遺物が出土せずこれらの所属時期は不明である。柱穴の規模・平面形状は第1表の通りである。

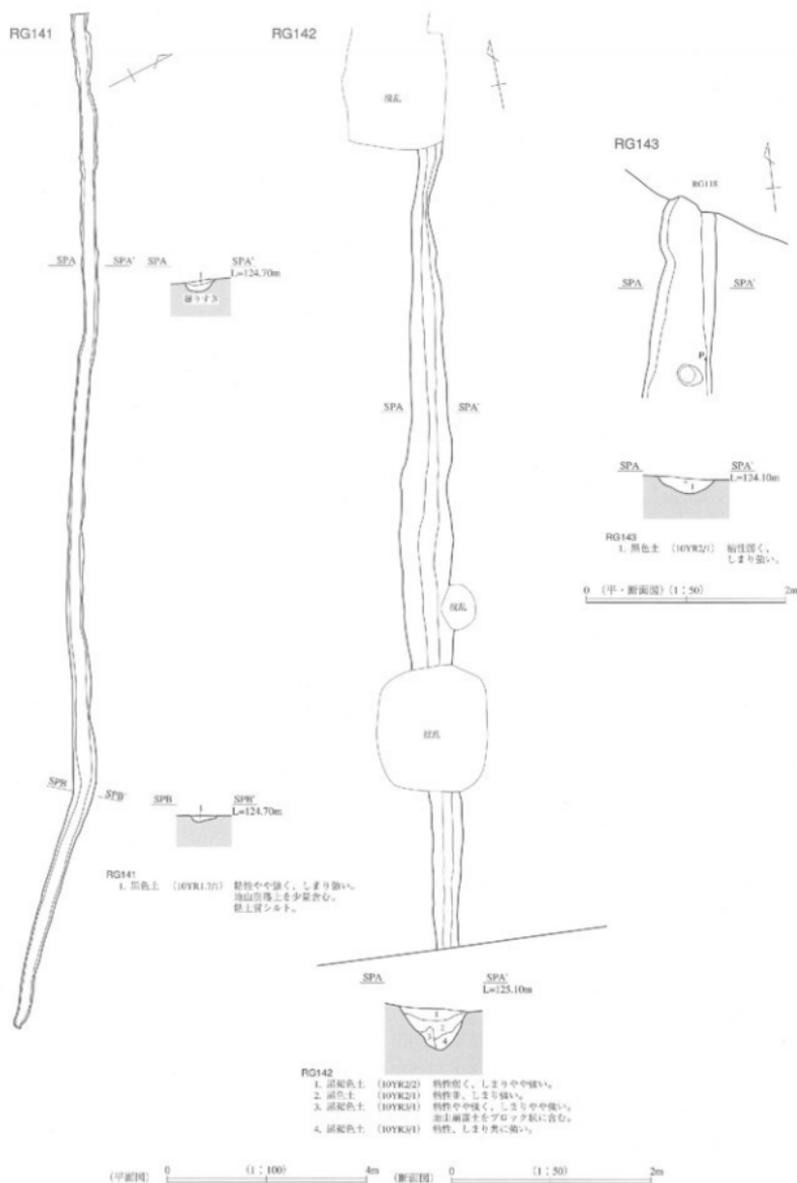


RG118

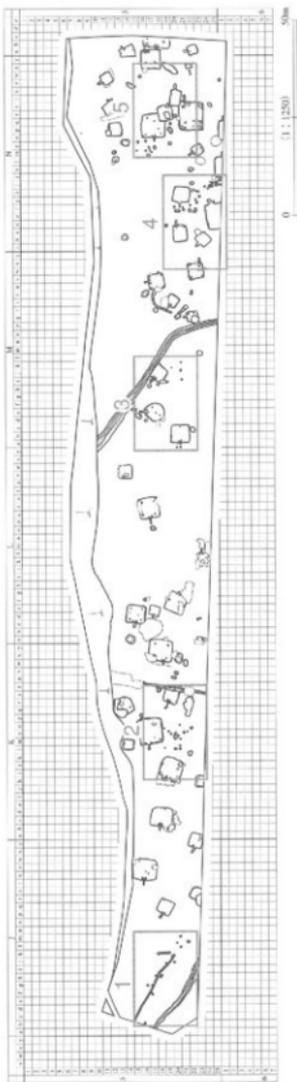
1. 黒褐色土 (09YK22) 砂性、しまり共に強³%。
2. 黒褐色土 (09YK3A) 砂性やや強く、しまり強¹%。
3. 黒褐色土 (09YK3Z) 砂性、しまり共に強³%。
4. 黒褐色土 (09YK3B) 砂性、しまり共に強³%。
5. 黒色土 (09YK23) 砂性、しまり共に強³%。
6. 黒褐色土 (09YK3I) 砂性やや強く、しまり強¹%。

第168図 RG118

2 検出された遺構・遺物



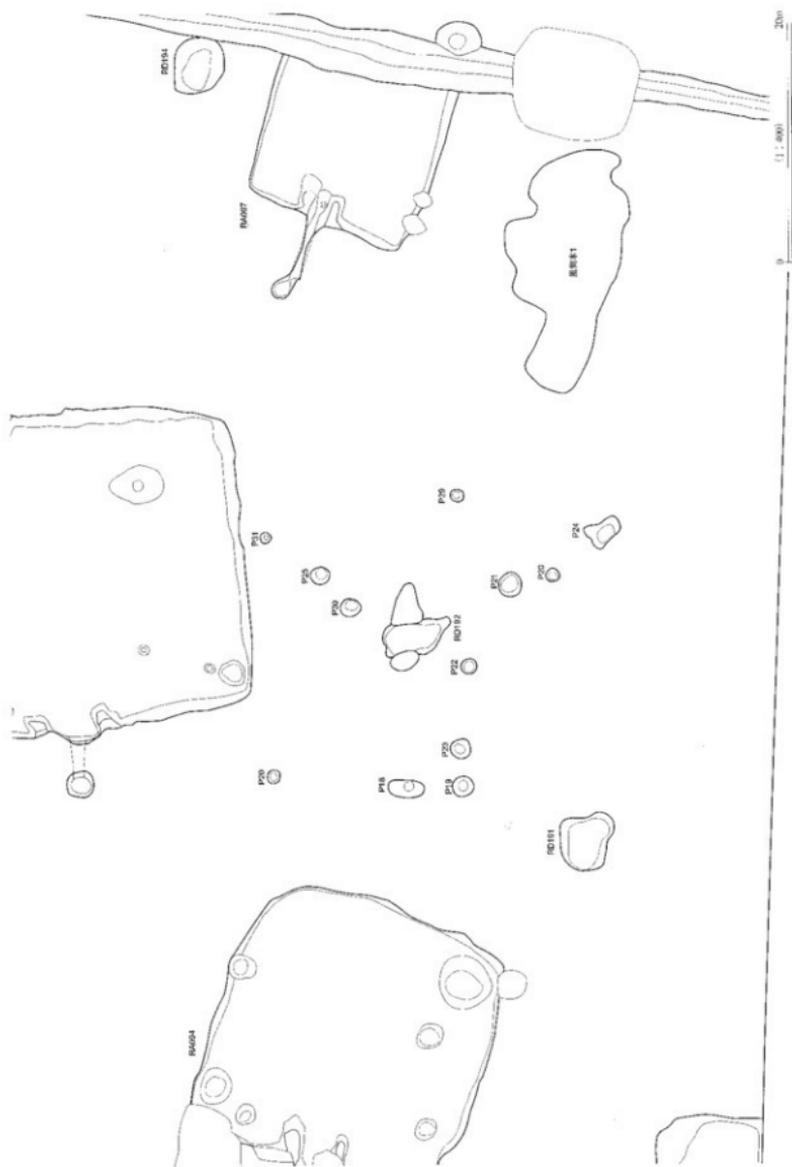
第169図 RG141~143



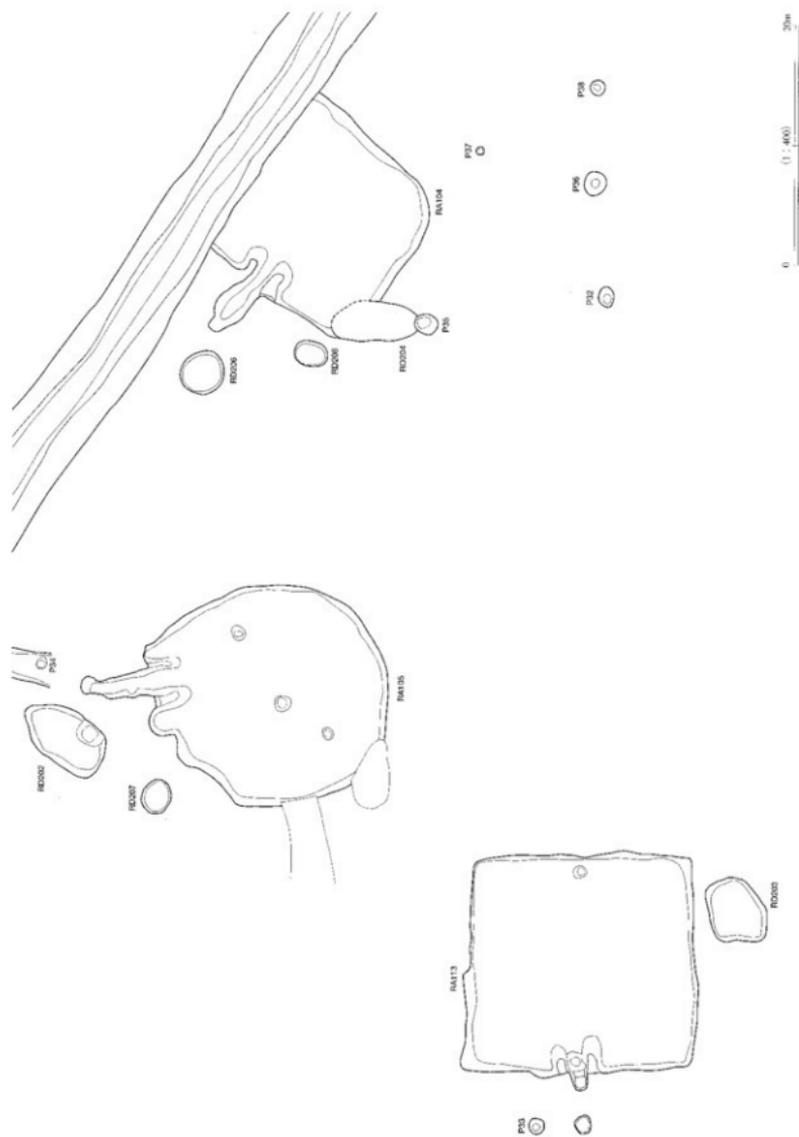
第170図 柱穴配座索引図 (1/1250)



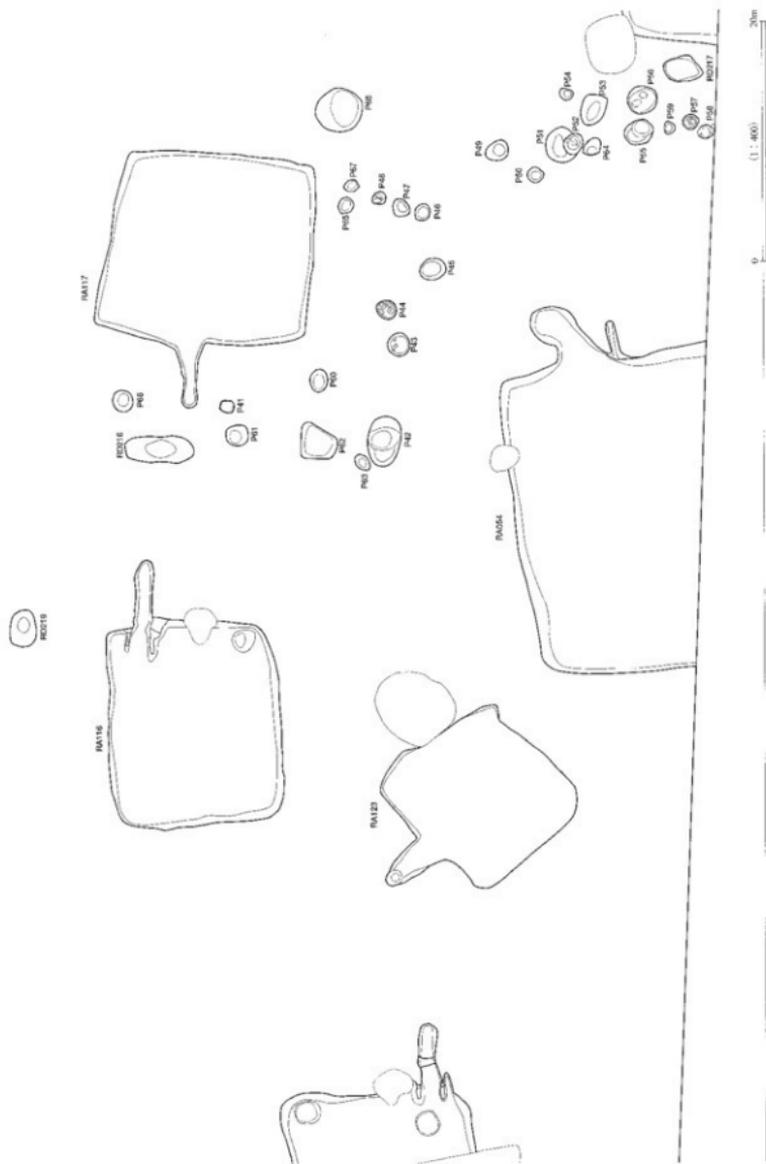
第171図 柱穴配置図 (1)



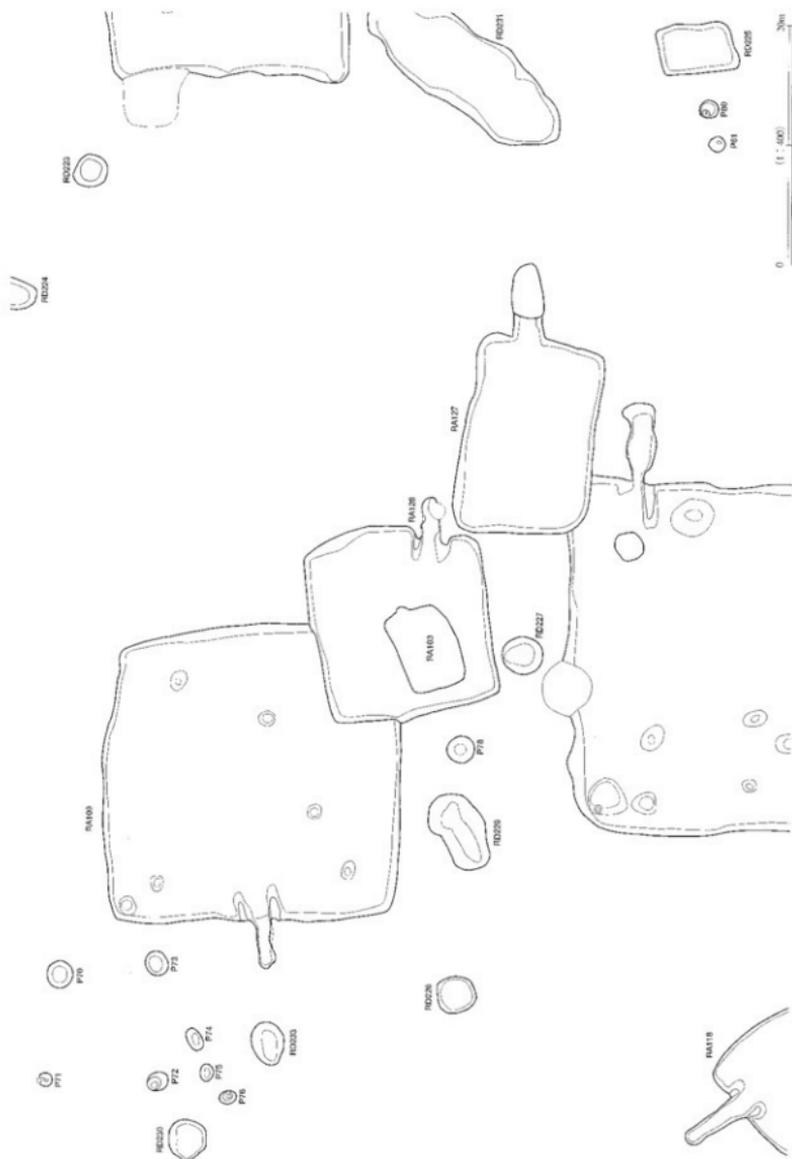
第172図 柱穴配置図(2)



第173図 柱穴配置図 (3)



第174図 柱穴配置図(4)



第175図 柱穴配置図 (5)

第1表 柱穴観察表

	グリッド	径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
1	5J16b	71	17.0	124.1
2	5J17f	43	16.6	124.3
3	5J17f	34	10.8	124.3
4	5J16g	49	19.0	124.4
5	5J17g	39	10.4	124.4
6	5J18h	50	17.7	124.3
7	5J18i	44	10.1	124.4
8	5J18i	37	16.1	124.4
9	5J19j	29	10.7	124.4
10	5J20k	57	29.8	124.1
11	5J20k	42	18.3	124.3
12	5J20j	48	25.2	124.2
13	5J21i	48	18.6	124.3
14	5J20m	34	13.3	124.5
15	5J21m	60	28.6	124.3
16	5J22m	66	36.4	124.0
17	5J19j	84	13.6	124.3
18	5K21l	74	60.2	124.4
19	5K21l	43	31.9	124.7
20	5K21n	30	20.1	124.8
21	5K21n	32	32.8	124.7
22	5K21m	32	35.8	124.7
23	5K21l	42	43.6	124.6
24	5K22o	76	57.3	124.4
25	5K20n	43	49.8	124.6
26	5K19i	30	32.7	124.6
29	5K21o	28	33.1	124.8
30	5K20n	28	20.2	124.8
31	5K19o	23	15.5	124.9
32	5L21j	43	5.5	123.8
33	5M20a	33	23.2	123.8
34	5M16f	27	14.8	123.7
35	5M19i	48	21.9	123.7
36	5M21k	50	31.5	123.6
37	5M20l	18	20.3	123.8
38	5M21l	32	38.8	123.6
41	5N21f	40	19.0	123.6

	グリッド	径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
42	5N23o	104	49.3	123.7
43	5N23o	49	10.3	124.1
44	5N23g	44	6.9	124.1
45	5N23h	55	15.7	124.0
46	5N24h	37	9.4	124.1
47	5N23h	40	16.2	124.0
48	5N23h	31	18.5	124.0
49	5N24i	50	25.8	123.9
50	5N24i	33	11.6	124.1
51	5N25i	73	17.0	124.0
52	5N25i	46	47.9	123.6
53	5N25i	69	22.0	123.9
54	5N25i	27	13.3	124.0
55	5N25j	60	25.0	123.9
56	5N25j	62	14.1	124.0
57	6N1i	34	25.7	123.9
58	6N1i	34	45.8	123.7
59	6N1i	27		0
60	5N22f	49	27.4	123.8
61	5N21f	48	14.3	124.0
62	5N22f	89	15.4	124.0
63	5N22f	48	16.8	124.0
64	5N25i	(40)	0	0
65	5N22h	(36)	0	0
66	5N20f	44	38.7	123.8
67	5N23h	(30)	0	0
68	5N22i	(91)	0	0
70	5N15n	57	17.3	124.0
71	5N15m	29	19.7	124.0
72	5N16m	45	40.8	123.8
73	5N16n	51	15.1	124.0
74	5N17n	49	31.3	123.8
75	5N17m	36	13.5	124.0
76	5N17m	35	44.0	123.7
78	5N19q	57	21.9	123.9
80	5N22w	40	30.5	123.8
81	5N22w	35	18.5	123.9

第2表 本宮熊堂A遺跡観察表

土器

遺体名	部位等	器種・種類	残存部位	分型	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	施文	色調	備考
1 旧河道	Aエリア東側、3層	土師器、美	輪文形	B11	183	94	235	ハケ	ハケ	良好	浅黄褐色	
2 旧河道	Aエリア東側、3層下位	土師器、美	口縁	-	189	-	43	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	外面に朱
3 旧河道	Bエリア東側、3層	土師器、美	口縁	-	140	-	41	回転ナデ	回転ナデ	やや良好	にぶい黄褐色	
4 旧河道	Bエリア東側、3層	土師器、美	口縁	-	-	-	84	ハケ	ハケ	やや良好	にぶい黄褐色	
5 旧河道	Aエリア東側、3層下位	土師器、美	口縁	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	小良	灰青褐色	外面に朱
6 旧河道	Cエリア西側、3層下位	土師器、美	口縁	-	200	-	70	回転ナデ	回転ナデ+ハケ	良好	藍	
7 旧河道	Bエリア東側、3層下位	土師器、灰	口~底1/4	B12c	109	49	69	ヘラケズリ	ミガキ	良好	灰白	内面黒色処理
8 旧河道	Bエリア西側中、3層上位	土師器、灰	口縁	-	-	-	38	ヘラケズリ	ミガキ	やや不良	明黄褐色	内面黒色処理
9 旧河道	Bエリア東側、3層下位	須恵器、灰	口縁	-	-	-	31	回転ナデ	回転ナデ	良好	灰	

4層

遺体名	部位等	器種・種類	残存部位	分型	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	施文	色調	備考
10 旧河道	Cエリア西側、4層上位	縄文土器、赤	底	-	-	-	70	32、美文	無文	やや良好	にぶい褐色	
11 旧河道	Cエリア西側、4層	縄文土器、赤	口縁	-	-	-	48	沈線	ミガキ	良好	にぶい黄褐色	
12 旧河道	Aエリア西側、4層	縄文土器、深鉢	胴	-	-	-	38	L.R.縦	ナデ	やや良好	灰青	
13 旧河道	Cエリア東側、4層	縄文土器、赤	胴	-	-	-	33	L.R.縦	-	やや良好	にぶい黄褐色	
14 旧河道	Bエリア西側中、4層	縄文土器、深鉢	胴	-	-	-	40	L.R.横	-	良好	灰青褐色	
15 旧河道	Cエリア東側、4層	縄文土器、深鉢	胴	-	-	-	38	L.R.縦	ナデ	不良	にぶい黄褐色	
16 旧河道	Bエリア東側、4層	縄文土器、深鉢	胴	-	-	-	52	L.R.縦	-	やや良好	にぶい黄褐色	
17 旧河道	Dエリア西側、4層	縄文土器、赤	口縁	-	-	-	21	無文	沈線、ミガキ	良好	黒褐色	
18 旧河道	Cエリア東側、4層	縄文土器、深鉢	胴	-	-	-	30	L.R.縦	-	不良	にぶい黄褐色	
19 旧河道	Dエリア西側、4層	縄文土器、深鉢	胴	-	-	-	31	L.R.縦	ナデ	良好	にぶい黄褐色	
20 旧河道	Cエリア東側、4層	縄文土器、深鉢	胴	-	-	-	49	L.R.縦	ナデ	やや良好	灰青褐色	
21 旧河道	Bエリア東側、4層	縄文土器、赤	胴	-	-	-	32	沈線、L.R.横	-	やや良好	灰青褐色	
22 旧河道	Bエリア東側、4層	縄文土器、深鉢	口縁	-	-	-	51	沈線	-	不良	藍	
23 旧河道	Aエリア西側、4層	縄文土器、赤	胴	-	-	-	27	L.R.横	-	良好	にぶい黄褐色	底平土器か
24 旧河道	Cエリア東側、4層	縄文土器、深鉢	胴	-	-	-	34	L.R.縦	-	不良	にぶい黄褐色	

石器

遺体名	遺体位置	層位	長さ(cm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石種	産地	
1	打製石斧	Cエリア西側	4層	197.92	106.86	29.94	頁岩	北上山産
2	敵部器	Aエリア東側	3層	96.96	92.88	28.92	凝灰岩	奥羽山脈
3	敵部器	Aエリア東側	4層	114.92	114.96	30.43	安山岩	奥羽山脈
4	敵部器	Aエリア東側	4層	110.93	54.21	71.31	安山岩	奥羽山脈
5	敵部器	Bエリア西側	4層下位	30.8	71.29	29.98	片付石	奥羽山脈
6	石核	Cエリア西側	4層上位	57.65	34.91	10.21	頁岩	奥羽山脈
7	スライス	Cエリア西側	4層下位	69.37	31.71	9.18	頁岩	奥羽山脈
8	石核	Cエリア東側	4層下位	58.46	67.36	31.22	頁岩	奥羽山脈
9	石核	Cエリア東側	5層	48.03	46.33	29.5	頁岩	奥羽山脈
10	刺片	Bエリア西側	4層	37.2	13.80	4.32	頁岩	奥羽山脈
11	刺片	Bエリア東側	4層	37.02	41.38	7.7	頁岩	奥羽山脈
12	刺片	Cエリア東側	4層下位	60.04	85.71	13.47	頁岩	奥羽山脈
13	刺片	Cエリア東側	4層下位	64.07	70.96	22.06	頁岩	奥羽山脈

木製品

番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	断面形状	加工	備考	
38	柱材小	3層	184.0	17.0	丸	木1	自然科学分析No14	
39	杭	3層	79.7	2.7	丸	木口		
40	不明	3層	30.1	3.0	方	体部		
41	不明	3層	37.1	5.1	29	方	体部全体を方形に加工している	
42	不明	3層	40.7	5.8	6.1	丸	木口	
43	柱材小	3層	-	-	丸	木1		
44	不明	3層	79.0	53.0	28.0	-	方	材を取るため、切断したものか
45	板材	3層	-	-	-	方		
46	杭小	3層	42.5	5.6	3.2	丸		
47	杭小	3層	65.6	9.2	5.7	丸		
48	不明	3層	92.3	20.1	6.4	丸		
49	不明	3層	-	-	-	丸	体部	
50	板材	3層	63.0	24.3	8.3	方	体部全体を方形に加工している	
51	不明	3層	14.7	3.7	1.6	-	体部	

◎黄皮 ○○黄皮が残るもの。

第3表 木宮熊堂B遺跡観察表(1) 土師器・須恵器

図号 番号	調査者 番号	所在寺	種別・形種	部位	分期	法量 (cm)		調整法			色澤	備考	小皿 寸法				
						口徑(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面				底面			
25	RA01	RP4	土師器・杯	口縁-底縁	I A1c	20.0	-	7.6	1.4	濃色黒	ミダキ	ミダキ	ミダキ	33	55	内面黒色地	
26	RA01	RP	土師器・杯	口縁-底縁	I B2	15.0	0.0	4.7	ミダキ	ミダキ	ミダキ	ミダキ	良好	33	55	内面黒色地	
27	RA01	調出土	土師器・杯	口縁-底縁	I A1a	15.0	-	[4.5]	ミダキ	ミダキ	ミダキ	ミダキ	良好	33	78	内面黒色地	
28	RA01	RP2	須賀瀬池畔中環土	口縁-底縁	IV	12.7	7.9	8.6	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	34	65	内面黒色地	
29	RA01	RP2	須賀瀬池畔中環土	口縁-底縁	A1 E	16.5	-	22.8	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	34	65	内面黒色地	
30	RA01	RP15	瓦・刺木	口縁-底縁	A1 E	19.1	19.4	27.4	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	34	65	内面黒色地	
31	RA01	RP00	102, 刺木	口縁-底縁	A1 I	18.4	9.5	28.1	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	34	65	内面黒色地	
32	RA01	RP11	刺木	底縁	A1 E	20.7	8.0	30.1	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	34	66	内面黒色地	
33	RA02	RP4	土師器・杯	口縁-底縁	I B2a	13.3	6.3	5.7	ミダキ	ミダキ	ハナ	ミダキ	ハナ	良好	37	53	内面黒色地
34	RA02	RP25	土師器・杯	口縁-底縁	I A1a	12.3	-	[3.5]	ミダキ	ミダキ	ハナ	ミダキ	ハナ	良好	37	78	内面黒色地
35	RA02	RP19	土師器・要	底縁-底縁	A	-	8.1	[3.3]	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	37	66	内面黒色地	
36	RA02	RP1	土師器・要	口縁-底縁	A1 b	16.0	5.0	32.8	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	37	66	内面黒色地	
37	RA03	RP8	土師器・杯	口縁-底縁	I B2a	11.0	5.3	2.8	ミダキ	ミダキ	ハナ	ミダキ	ハナ	良好	40	33	内面黒色地
38	RA03	RP9	土師器・要	口縁-底縁	A1 b	18.2	-	[10.6]	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	40	78	内面黒色地	
39	RA03	RP1	土師器・要	口縁-底縁	A1 b	19.2	-	[18.5]	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	40	78	内面黒色地	
40	RA03	RP5	刺木	底縁-底縁	I	-	10.0	[9.5]	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	40	66	内面黒色地	
41	RA03	RP3	香皿・小杯	底縁	-	-	-	[1.5]	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	40	90	内面に黒化、底縁半の濃赤系小。	
47	RA04	RP56	土師器・杯	口縁-底縁	I A1a	11.6	-	[4.0]	ミダキ	ミダキ	ハナ	ハナ	良好	43	35	内面黒色地	
48	RA04	RP28	土師器・杯	口縁-底縁	I A1d	12.8	-	[4.0]	ミダキ	ミダキ	ハナ	ハナ	良好	43	35	内面黒色地	
49	RA04	RP1	土師器・杯	口縁-底縁	I A1a	12.9	-	3.1	ミダキ	ミダキ	ハナ	ハナ	良好	43	35	内面黒色地	
50	RA04	P1覆土	土師器・杯	口縁-底縁	T A1a	15.3	-	4.1	ミダキ	ハナ	ハナ	ハナ	良好	43	79	外縁のミダキは小皿際、内面黒色地。	
51	RA04	刺木	底縁	底縁	T A1d	15.2	-	6.4	ミダキ	ミダキ	ハナ	ハナ	良好	43	55	内面黒色地	
52	RA04	RP71	土師器・杯	口縁-底縁	I A	-	-	[4.1]	ミダキ	ミダキ	ハナ	ハナ	良好	43	79	外縁はミダキが拓かれたと思われ、底面不明である。	

(○) は黒化係、(□) は赤化係

第4表 本管照堂B遺跡観音表(2) 土師器・須恵器

履形番号	履形名	履形等	種類・器種	部位	分類	法量 (cm)		際整方法		状態	備考	履形寸法	
						口径(E) 底径(B)	器高(H)	内面	外面				
53	R491	ED490Ⅱ土	土師器・鉢	口縁-外縁	Ⅱ	-	568	ミガキ	ミガキ ハナリ	良好	内面黒色色澤。	43.36	
54	R491	EP72, 77, SK02Ⅱ土	土師器・鉢	口縁-外縁	A1Ⅱ	72	138	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	43.66	
55	R494	EP23	土師器・甕	口縁-外縁	A1Ⅴ	310	565	ハナ	ハナ	良好	黒	43.79	
56	R491	EP76	土師器・甕	口縁-外縁	A1Ⅴ	301	-	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	43.66	
57	R494	EP20, 胎赤カマド付土	土師器・甕	口縁-外縁	A1Ⅴ	356	-	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	43.79	
58	R494	EP21	土師器・甕	体部-底縁	A	-	79	565	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	43.67
59	R494	SK02Ⅱ土	土師器・甕	体部	B	-	108	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	43.79	
60	R494	Ⅱ土, EP72	土師器・甕	体部-底縁	A	-	99	578	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	44.67
61	R494	EP69	須恵器・甕	口縁-外縁	-	329	-	116	-	良好	黒	41.67	
68	R495	EP46, 106, Ⅱ土	土師器・甕	完形	B1Ⅰ	148	75	206	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	46.79
69	R495	EP9, 81, 82, Ⅱ土	土師器・甕	口縁-外縁	A1Ⅴ	145	-	64	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	46.79
70	R496	EP11, 112, 113, 121, 122, Ⅱ土	土師器・甕	口縁-外縁	A1Ⅴ	187	-	107	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	46.67
71	R496	EP105	土師器・甕	口縁-外縁	A1Ⅴ	178	-	68	-	良好	内面黒色色澤。	46.79	
72	R495	EP85, 87	土師器・甕	口縁-外縁	A1Ⅴ	230	-	73	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	46.79
73	R495	EP8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, Ⅱ土	土師器・甕	体部-底縁	A	-	76	165	ミガキ	ハナ	良好	実蓋置	46.67
74	R495	EP163	土師器・甕	体部-底縁	A	-	71	144	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	46.67
76	R496	EP4	土師器・鉢	口縁-外縁	A1Ⅱ	138	-	40	ミガキ	ミガキ	今や良好	内面黒色色澤。	49.55
77	R496	EP13, Ⅱ土	土師器・鉢	体部-底縁	A1Ⅱ	-	70	160	ミガキ	ミガキ	良好	内面黒色色澤。	49.55
78	R496	EP5, 10	土師器・鉢付	口縁-外縁	B1	153	79	81	ミガキ	ミガキ	良好	内面黒色色澤。	49.55
79	R496	EP16, Ⅱ土	土師器・甕	口縁-外縁	A1Ⅴ	222	83	315	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	49.68
80	R496	EP12, 13, Ⅱ土	土師器・甕	口縁-外縁	A1Ⅴ	193	-	164	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。 1~3mmの小片を多く含む。	49.68
81	R496	EP9, Ⅱ土, 胎赤	土師器・甕	体部-底縁	A	-	83	139	ハナ	ハナ	良好	内面黒色色澤。	49.68
84	R497	EP18	土師器・鉢	完形	v	133	74	71	ミガキ	ミガキ	良好	内面黒色色澤。蓋置として使用。	52.36

第5表 本宮熊鷹B遺跡観察表(3) 土師器・須器

図号 番号	器名	形状等	部位	分類	法量 (cm)			調査技法			焼成	色調	備考	図版 写真
					口徑(深)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	底面				
85	E107	甕土、甕土、褐色(黒)	口縁・底面	b	(130)	(64)	42	目付十字	目付十字	目付十字	良好	灰		E2 56
86	E107	EP14, 11, 10, 15, 11, 甕土	口縁・底面	A 11 ii	153	69	203	ハク	ハク	ハク	良好	黄褐色	底面に黒点有。	E2 68
87	E107	EP1, 2, 4, 5, 8, 30, 21, 甕土	口縁・底面	-	(140)	(53)	203	ハク	ハク	ハク	良好	灰黄褐色		E2 68
88	E107	EP11, 20, 甕土	口縁・底面	A 11 i	139	64	282	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄		E2 68
89	E107	EP20, 622	口縁・底面	A 11 v	172	94	308	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄		E2 69
90	E108	甕土	口縁・底面	A 12a	113	127	319	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄		E1 56
91	E108	甕土一筋	口縁・底面	A 12a	123	-	45	ハク	ハク	ハク	良好	黒	内外面黒色色調。	E4 56
92	E108	EP104	口縁・底面	A 12a	-	(63)	202	ハク	ハク	ハク	良好	黒	内外面黒色色調。	E4 56
93	E108	甕土一筋	口縁・底面	A 12a	(150)	-	39	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄褐色		E4 70
94	E108	甕土	口縁・底面	A 1	-	(45)	319	ハク	ハク	ハク	良好	黒	内外面黒色色調。	E4 70
95	E108	甕土	口縁・底面	A 1	-	(55)	319	ハク	ハク	ハク	良好	黒	内外面黒色色調。	E4 70
96	E108	甕土	口縁・底面	A 1	-	(25)	319	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄		E4 70
97	E108	EP98	口縁・底面	A 14 b	102	64	45	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄褐色		E5 56
98	E108	EP99	口縁・底面	A 14 b	118	71	41	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄褐色		E5 56
99	E108	EP99	口縁・底面	A 14 b	118	71	41	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄褐色		E5 56
100	E108	甕土一筋	口縁・底面	A 1	(89)	-	361	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄褐色		E5 56
101	E108	EP93	口縁・底面	ii	(114)	-	(76)	ハク	ハク	ハク	良好	灰黄褐色		E5 80
102	E108	EP97, 80, 92, 甕土一筋	口縁・底面	v	(103)	-	63	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄		E5 70
103	E108	甕土一筋	口縁・底面	ii	(144)	-	(41)	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄褐色		E5 56
104	E108	甕土	口縁・底面	ii	(108)	(50)	72	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄褐色		E5 56
105	E108	EP70, 86, 甕土一筋, 甕土	口縁・底面	v	152	65	67	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄褐色		E5 56
106	E108	甕土	口縁・底面	-	-	-	(31)	ハク	ハク	ハク	良好	にぶい黄		E5 56
107	E108	甕土	口縁・底面	A 13 v	(140)	-	272	ハク	ハク	ハク	良好	灰褐色		E5 80

第6表 本宮熊堂白遺跡観察表(4) 土器類・須器類

調査 番号	器名	層位等	種別・器種	部位	分類	質量 (cm)		調整技法			焼成	色調	備考	図記 番号
						口徑(長)	底径(厚)	内面	外面	断面				
108	EA08	109, 110, 112, Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	A 1 Ⅱ	13.6	-	9.2	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		55, 69
109	EA08	EP1, 5, 15, 17, 20, 31, 32, Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	A 1 Ⅱ	18.2	-	17.0	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		55, 69
110	EA08	EP8, 78, 94, 98, 99	土器類・甕	口縁・体部	A 1 Ⅱ	10.1	-	3.6	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		55, 80
111	EA08	EP104, Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	A 1 Ⅱ	19.3	-	12.7	ハク	ハク	ハク	灰濁		56, 69
112	EA08	EP21, 65, Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	A 1 Ⅱ	10.8	-	7.7	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		56, 69
113	EA08	Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	B 1 Ⅱ	23.9	-	18.6	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		56, 80
114	EA08	EP15, 67, 100, Ⅱ上	土器類・甕	体部	B	-	12.7	ハク	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		56, 80
115	EA08	EP12, 115, Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	C 1	-	12.0	34.3	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		57, 69
116	EA08	Ⅱ上	土器類・甕	体部	A	-	7.5	14.7	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		57, 70
117	EA08	Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	A	-	17.6	18.4	ハク	ハク	ハク	濁		57, 70
118	EA08	1077	土器類・甕	口縁・体部	A	-	8.5	38.3	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		57, 70
119	EA08	Ⅱ上	土器類・甕	体部	A	-	19.3	-	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		57, 80
120	EA08	Ⅱ上	土器類・甕	体部	B	-	1.4	-	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		57, 80
121	EA08	Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	B	-	2.5	-	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		57, 80
122	EA09	Ⅱ上	土器類・片	口縁・体部	I A 2, 4	10.3	-	3.7	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		60, 80
124	EA09	Ⅱ上	土器類・片	口縁・体部	I A 1, 2	14.8	-	3.4	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		60, 80
125	EA09	EP24	土器類・片	口縁・体部	Ⅱ	11.7	-	6.8	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		60, 80
130	EA09	EP28, 382	土器類・片	口縁・体部	Ⅱ	19.8	-	9.6	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		60, 80
127	EA09	Ⅱ上	土器類・片	口縁・体部	I	-	-	4.5	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		59, 81
128	EA09	Ⅱ上	土器類・片	口縁・体部	I	-	-	3.4	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		59, 80
129	EA09	EP1, 2, 10, 13, 15, 28, Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	A 1 Ⅱ	15.9	-	7.9	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		60, 70
130	EA09	EP25	土器類・甕	口縁・体部	A 2	13.8	-	7.4	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		60, 80
131	EA09	Ⅱ上	土器類・甕	口縁・体部	A 1 Ⅱ	17.8	-	7.0	ハク	ハク	ハク	に赤い濁		60, 81

第7表 本宮熊堂B遺跡調査表(5) 土師器・須器

発掘 番号	遺器名	部位等	種別・器種	部位	分類	法量 (cm)			調査技法	完成	色澤	備考	図録 写真
						口徑(長)	底径(短)	高さ(厚)					
132	RA59	RF18	土師器・甕	体部・底足	A	-	570	368	ハク	ハク	良好	にぶい青	69 70
133	RA59	RF18, RA10, RA11, RA12, RA13, RA14	土師器・甕	体部・底足	A	-	72	394	ハク	ハク	良好	青	69 70
134	RA59	甕土	土師器・甕	口縁	A1 V	-	-	319	ハクナメ	ハクナメ	良好	灰青	69 81
136	RA101	甕	土師器・甕	口縁	IA1d	130	-	338	ミガキ	ミガキ	良好	灰	64 81
137	RA101	RF20, 31, 36, 79, 80, 81, 82	土師器・甕	口縁・体部	IA1b	162	580	43	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい青	64 56
138	RA101	RF53, 73, 75, 甕土	土師器・甕	口縁・体部	A1 H	187	-	221	ハク	ハク	良好	にぶい青	64 70
139	RA101	RF6	土師器・甕	口縁・体部	A1 E	160	-	64	ハク	ハク	良好	灰青	64 81
140	RA101	RF44, 47, 74, 甕土	土師器・甕	口縁・体部	A1 H	173	-	335	ハク	ハク	良好	にぶい青	64 70
141	RA101	RF35, 90	土師器・甕	口縁・体部	A1 H	210	-	197	ハク	ハク	良好	にぶい青	61 81
142	RA101	RF9, 11	土師器・甕	体部・底足	B	-	82	338	ハク	ハク	良好	にぶい青	61 71
143	RA101	RF10	土師器・甕	体部・底足	A	-	82	303	ハク	ハク	良好	灰	64 71
145	RA102	カタ下	土師器・甕	口縁・体部	V	162	-	391	ミガキ	ミガキ	良好	引	66 81
146	RA102	RF1	土師器・甕	体部・底足	A	-	85	182	ハク	ハク	良好	にぶい青	66 71
147	RA101	RF7	土師器・甕	口縁	IA1c	98	-	36	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい青	69 36
148	RA101	RF18, 19, 甕土一団	土師器・甕	口縁	IA1c	114	-	39	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい青	69 36
149	RA101	RF1, 15	土師器・甕	口縁・体部	A1 H	200	27	305	ハク	ハク	良好	にぶい青	69 71
150	RA101	RF14, 甕土一団	土師器・甕	口縁・体部	A1 H	189	60	255	ハク	ハク	良好	灰	69 71
151	RA105	RF6, 7, 8	土師器・甕	口縁	IA1a	114	-	44	ミガキ	ハクナメ	良好	青	71 56
152	RA105	カタF	土師器・甕	口縁	IA1d	149	-	44	ミガキ	ミガキ	良好	灰	71 81
153	RA108	RF5	土師器・甕	口縁・体部	IA	103	-	26	ミガキ	ミガキ	良好	青	71 81
154	RA108	RF2, 甕土	土師器・甕	口縁	IA	-	-	119	ミガキ	ハク	良好	にぶい青	71 81
156	RA108	RF24	土師器・甕	口縁・体部	I	142	-	27	ミガキ	ハク	良好	にぶい青	74 81
157	RA108	RF3	土師器・甕	口縁・体部	IA	-	82	23	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい青	74 81

第8表 本宮熊鷹B遺跡観察表(6) 土師器・須恵器

編年 番号	埋藏層	種別・名称	部位	分類	法尺 (cm)	調査技法		焼成	色調	備考	図版番号
						内面	外面				
158	R106	RF13, 30, 32	土師部・蓋 口縁-底部	A111	(84.0)	-	[153] ハテ	良好	にぶい赤褐色		74, 81
159	R106	RF13, 17, 30, 32	土師部・蓋 口縁-底部	A111	(75.0)	-	[83] ハテ	良好	にぶい赤褐色		74, 81
160	R106	RF18	土師部・蓋 口縁-底部	A111	(17.0)	-	[58]	良好	にぶい赤褐色		74, 81
161	R106	RF5, 8, 27, 31, 36A	土師部・蓋 底部-底部	A	-	70	[135] ハテ	良好	にぶい赤褐色		74, 71
162	R106	埋土	須恵部・蓋 底部	-	-	-	[11] 同編年ナテ	良好	灰		74, 81
163	R106	RF23	須恵部・蓋 底部	-	-	-	[23]	良好	灰		74, 81
164	R107	RF7	土師部・杯 文部	F152a	88	57	28 ミガキ	良好	にぶい赤褐色	縦点線部(×)上, 内面黄色色部	75, 56
165	R108	RF15, 40, 41, 埋土	土師部・杯 口縁-底部	F149	(13.6)	-	[35] ミガキ	良好	埋	内面黄色色部	77, 56
166	R108	埋土	土師部・杯 口縁-底部	皿	(10.3)	-	53 ハテ	良好	灰褐色		78, 81
167	R108	RF50, 62	土師部・蓋 口縁-底部	A114	(16.2)	-	[154] ハテ	良好	にぶい赤褐色		78, 81
168	R108	埋土	土師部・蓋 口縁-底部	A114	(22.0)	-	[101] ハテ	やや良好	にぶい赤褐色		78, 81
169	R108	RF25, 30	土師部・蓋 底部	A	-	-	126 ハテ	良好	にぶい赤褐色		78, 81
170	R108	RF22	土師部・蓋 底部-底部	A	-	73	[33] ハテ	良好	埋		78, 71
171	R108	RF5, 8, 10, 埋土	土師部・蓋 底部-底部	A	-	(10.3)	[67] ハテ	良好	にぶい赤褐色	赤点線部	78, 71
173	R109	RF43	土師部・杯 口縁-底部	F149	(14.2)	-	69 ミガキ	良好	埋	内面黄色色部	82, 56
174	R109	ホヤ下埋土, 埋土	土師部・杯 口縁-底部	F152a	(14.8)	-	[46] ミガキ	良好	にぶい赤褐色	内面黄色色部	82, 56
175	R106	埋土	土師部・杯 口縁-底部	F1C1	(13.1)	53	43 同編年ナテ	良好	同編年ナテ		82, 56
176	R106	RF25, 埋土	土師部・杯 口縁-底部	F1A16	148	-	[4] ミガキ	良好	にぶい赤褐色	内面黄色色部	82, 82
177	R109	埋土	土師部・杯 底部-底部	F1A	-	-	[31] ミガキ	良好	にぶい赤褐色	内面黄色色部	82, 82
178	R109	RF90	土師部・杯 文部	F1E2a	68	40	30 ナテ	良好	にぶい赤褐色		82, 56
179	R109	RF98	土師部・杯 口縁-底部	F1C2	(14.3)	63	同編年ナテ	良好	同編年		82, 57
180	R109	埋土	土師部・杯 底部-底部	F1C1a	-	(5.2)	[15] ミガキ	良好	にぶい赤褐色	内面黄色色部	82, 57
181	R109	RF40, 63, 65, 77埋土, 埋土	土師部・蓋 口縁-底部	A114	(14.7)	(8.2)	[16] ハテ	良好	にぶい赤褐色		82, 72

第9表 本宮熊堂B遺跡調査表(7) 土師器・須器

発掘 番号	遺物名	形造等	種類・部類	部位	分類	数量 (cm)		調査技法			焼成	色調	備考	規格 寸法
						口径(内)	底径(深)	器高(厚)	内面	外面				
182	RA109	PP86, カマド埋蓋	土師器・土	口縁・体部	A11b	-	182	ハク	ハク		良好	灰濁		82
183	RA109	PP82, 96	土師器・土	口縁・体部	A11b	162	-	185	ハク	ハク	良好	に濃い濁		82
184	RA109	PP75, 6, 7, 13, 14, 覆土	土師器・土	口縁・体部	A11b	200	-	192	ハク	ハク	良好	に濃い濁		82
185	RA109	PP27, 31, 覆土	土師器・土	口縁・体部	A11b	199	-	191	ハク	ハク	良好	に濃い水濁		82
186	RA109	PP73	土師器・土	口縁・体部	A11b	213	-	140	ハク	ハク	良好	に濃い濁		82
187	RA109	PP86	土師器・土	口縁・体部	A11b	-	-	175	ハク	ハク	良好	に濃い水濁		82
188	RA109	PP82, 89	土師器・土	口縁・体部	A11b	203	-	180	ハク	ハク	良好	に濃い水濁		82
189	RA109	PP23, 25, 27, 82, 覆土	土師器・土	口縁・体部	A11c	155	-	146	ハク	ハク	良好	に濃い濁		82
190	RA109	PP70	土師器・土	口縁・体部	A11b	217	-	171	ハク	ハク	良好	に濃い濁		82
191	RA109	PP81	土師器・土	口縁・体部	A11b	174	-	170	ハク	ハク	良好	に濃い濁		82
192	RA109	PP	土師器・土	口縁・体部	A11b	263	-	249	ハク	ハク	良好	に濃い濁		82
193	RA109	PP23, 25, 覆土	土師器・土	口縁・体部	A11b	140	-	184	ハク	ハク	良好	に濃い濁		82
194	RA109	PP21, カマド埋土	土師器・土	体部	A	-	-	121	ハク	ハク	良好	に濃い水濁		82
195	RA109	PP14, 22, 84, 85, 86, 117, 覆土	土師器・土	体部	A	-	-	120	ハク	ハク	良好	に濃い水濁		82
196	RA109	PP23, 25, 27, カマド埋土, 覆土	土師器・土	体部・底部	A	225	-	192	ハク	ハク	良好	水濁気 子ナ		84
197	RA109	覆土	土師器・土	体部・底部	A	-	-	90	29	ハク	ハク	水濁気		84
198	RA109	PP72	土師器・土	体部・底部	A	-	-	83	30	ハク	ハク	良好	に濃い水濁 底部水濁気。	84
199	RA109	覆土	土師器・土	体部・底部	A	-	-	92	32	ハク	ハク	水濁気		84
203	RA110	PP1	土師器・土	口縁・体部	A11a	167	-	37	ミガキ	ミガキ	良好	に濃い水濁 内面無色濁気。	85	
204	RA121	埋土	土師器・土	体部・底部	A	-	-	12	ミガキ	ハク	ハク	良好	に濃い濁 内面無色濁気。	87
205	RA121	埋土	土師器・土	口縁	A11b	-	-	18	-	-	良好	に濃い濁		87
206	RA121	埋土	土師器・土	体部・底部	A	-	-	32	-	ハク	ハク	良好	に濃い水濁	87
207	RA121	埋土	土師器・土	体部・底部	A	-	-	31	-	ハク	ハク	良好	に濃い水濁	87

第10表 本宮熊堂日蓮跡観音表 (8) 土師器・須恵器

調査 番号	発掘 場所名	層位号	種別・器種	部位	分類	法管 (cm)		調査技法			発成	色澤	備考	出所 開口
						山径 (E) 底径 (E)	器高 (F)	内径	外周	底面				
308	RA121	埋土	土師器・甕	甕底	Ⅱ	-	-	[25]			良好	にぶい黄橙	全五箇を多く含む。	87-84
210	RA122	RP1	土師器・鉢	口縁・外底	Ⅴ	[125]	-	90	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい黄	内面褐色斑。	88-01
211	RA123	埋土	土師器・小	口縁・外底	I A1d	128	-	[36]	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい黄	内面褐色斑。	90-85
212	RA125	埋土	土師器・甕	口縁・外底	A111	162	-	34	ハク	ハク	良好	にぶい黄		90-85
213	RA125	RP7, A, 10	土師器・甕	甕底・底底	A, B	-	95	[23]	ハク	ハク	良好	にぶい黄	底部褐色斑。	90-71
214	RA125	RP1	土師器・甕	外底・底底	A	-	69	[32]	ハク	ハク	良好	にぶい黄		90-71
215	RA128	RP18	土師器・杯	外底・底底	I B2	-	[20]	[36]	ミガキ・軸切	ミガキ	良好	にぶい黄橙		93-61
216	RA128	RP41, 41	土師器・甕	口縁・外底	A111	208	-	[31]	ハク	ハク	良好	にぶい黄橙		93-71
217	RA128	RP39, 44	土師器・甕	口縁・外底	A111	159	-	[29]	ハク	ハク	良好	にぶい黄		93-74
218	RA128	RP37, 45	土師器・甕	外底	A	-	-	[33]	ハク	ハク	良好	明褐色		93-85
219	RA128	RP29, 30, 31, 脚木・基	土師器・甕	外底・底底	A	-	85	[25]	ハク	ハク	良好	にぶい黄橙		93-75
220	RA128	RP37, 39	土師器・甕	外底・底底	A	-	82	[12]	ハク	ハク	良好	にぶい黄橙		93-75
221	RA128	RP16	土師器・甕	外底・底底	A	-	78	[25]	ハク	ハク	良好	にぶい黄橙		93-75
222	RA128	RP1	土師器・甕	口縁・外底	A111	200	-	[26]	ハク	ハク	良好	灰黄		95-76
223	RA128	RP1, 61	土師器・杯	口縁・外底	I A1d	113	-	[32]	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい黄橙		95-61
225	RA129	RP36, 38, 39	土師器・杯	外底	A11d	126	-	49	ミガキ	ミガキ	良好	灰黄	内面褐色斑。	95-64
226	RA129	RP19, 20, 21, 24, 25	土師器・甕	甕底・底底	A	-	74	[60]	ハク	ハク	良好	灰黄	内面褐色斑。	95-76
227	RA129	RP2, 5	土師器・杯	口縁・外底	I B2	210	122	89	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい黄	内面褐色斑。	95-64
228	RA129	RP11, 15, 22, 脚土	土師器・甕	口縁・外底	A111	116	66	167	ハク	ハク	良好	にぶい黄	内面褐色斑。	95-76
229	RA129	RP1	土師器・甕	口縁・外底	A111	210	-	[21]	ハク	ハク	良好	にぶい黄橙		95-86
230	RA121	001	土師器・杯	口縁・外底	I A1a	144	-	[41]	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい黄橙	内面褐色斑。	95-86
231		黒樹土	土師器・杯	外底	I A1d	110	-	46	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい黄	内面褐色斑。	95-64
232		黒樹土	土師器・杯	口縁・外底	I A1a	135	-	[41]	ミガキ	ハク	良好	にぶい黄橙	内面褐色斑。	95-86

第11表 本宮熊堂B遺跡調査表(9) 土師器・須置器

図録番号	遺器名	所在地	種類・形態	部位	分類	法尺 (cm)		調査技法		地蔵	色澤	備考	図録番号
						山度(底径)	器高(厚)	外面	底面				
						(D1)	(H1)	ハヤ	ハヤ				
223	風刺(袋-1)		土師器・壺	口縁-片巻	A11	-	[121]	ハヤ		良好	にぶい滑		95
224	RA50 RP138, 143, 154		土師器・杯	底部	Ic1	35.1	50	前後ナヤ	前後糸切	良好	滑	1~3mmの小片を多く含む。	98
225	RA50 RP17, 141		土師器・杯	口縁-片巻	Ia	13.9	55	前後ナヤ	前後糸切	良好	滑		98
226	RA50 RP1, 5		土師器・杯	底部	Ic1	12.9	50	前後ナヤ	前後糸切	良好	滑		98
227	RA50 RP4, 151		土師器・杯	底部	Ic1	14.8	58	前後ナヤ	前後糸切 再調整	良好	滑		98
228	RA50 RP128		土師器・杯	口縁-片巻	Ic1	(11.0)	(6.2)	3.1 前後ナヤ	前後糸切	良好	にぶい滑		98
229	RA50 RP70		土師器・杯	口縁-片巻	Ia	(14.1)	-	(4.5) 前後ナヤ		良好	滑		98
230	RA50 一軒		土師器・杯	口縁-片巻	Ic1	(14.1)	-	(3.8) 前後ナヤ		良好	にぶい滑	金堂跡を多く含む。	98
241	RA50 魁球		土師器・杯	口縁-片巻	Ic	-	-	- 1 前後ナヤ		良好	にぶい滑	器部外側器口「直方」。	98
242	RA50 RP203		土師器・杯	口縁-片巻	I	-	3.0	(1.1) 前後ナヤ	前後糸切	良好	にぶい滑	1~3mmの小片を多く含む。	98
243	RA50 埋土		土師器・杯	口縁-片巻	I	-	(3.2)	(0.7) 前後ナヤ	前後糸切	良好	にぶい滑		98
244	RA50 RP1, 7		土師器・杯	底部-片巻	Ic1	33.1	3.9	3.1 片巻	前後糸切	良好	にぶい滑	内面凹面器底	98
245	RA50 RP15, 164		土師器・杯	口縁-片巻	Ic1	(15.0)	(6.4)	3.8 1片巻	前後糸切	良好	にぶい滑	内面凹面器底	98
246	RA50 RP203, 147, 埋土		土師器・杯	口縁-片巻	Ic1	(14.8)	-	(3.8) 3片巻		良好	にぶい滑	内面凹面器底	98
247	RA50 RP172, 147, 埋土		土師器・杯	口縁-片巻	Ic1	(14.2)	(8.7)	5.3 3片巻	前後糸切	良好	にぶい滑	内面凹面器底	98
248	RA50 RP154		土師器・杯	口縁-片巻	Ic1	(15.5)	(5.6)	5.0 3片巻	前後糸切	良好	にぶい滑	内面凹面器底	98
249	RA50 RP114		土師器・杯	底部-片巻	Ic1	-	5.9	(2.0, 2.1) 片巻	前後ナヤ	良好	にぶい滑	内面凹面器底	98
250	RA50 RP138		土師器・杯	口縁-片巻	Ic1	-	(8.5)	(2.8) 前後ナヤ	前後糸切	良好	にぶい滑	内面凹面器底	98
251	RA50 散佈		土師器・片	口縁-片巻	Ic1	-	(11.0)	5.2	前後ナヤ	良好	滑		98
252	RA50 RP98		土師器・片	口縁-片巻	Ic1	-	(14.0)	-	前後ナヤ	良好	滑		98
253	RA50 RP137		土師器・片	口縁-片巻	Ic1	-	(14.5)	-	前後ナヤ	良好	滑		98
254	RA50 RP105(40)		土師器・片	口縁-片巻	Ic1	-	(20.0)	-	前後ナヤ	良好	滑		98
255	RA50 RP97		土師器・片	口縁-片巻	Ic1	-	(20.0)	-	ナヤ	良好	滑		98

第12表 本堂前堂B通廊観察表(10) 土師器・須恵器

観測番号	観測名	層位等	棟切・器位	器位	分類	法量 (cm)			調整技法			産地	色澤	装束	図説番号
						口径(△)	底径(□)	器高(▽)	内面	外面	底面				
256	RA50	FR08, 器位	土師器・甕	口縁-体部	-	31.4	-	[12]	同様ナテ	同様ナテ		良好	におい気味		99/77
257	RA50	FR07	土師器・甕	体部-底面	-	(15.0)	[23]	ハテ		ヘラナテリ		良好	におい気味		99/65
258	RA50	同上	土師器・甕	底面	-	(11.0)	-	[12]		タタテ	砂流	やや良好	におい気味		99/65
259	RA50	同上	須恵器・甕	口縁-体部	-	-	-	[10.6]		タタテ		良好	灰		99/77
300	RA20	同上	須恵器・甕	体部	-	-	-	[3.9]		タタテ		良好	灰		99/77
361	RA20	RO1, 器位	須恵器・甕	体部	-	-	-	[6.5]		ヘラナテリ		良好	灰		99/77
269	RA31	RF8, RF2, 兼土須恵	土師器・杯	底面	1 < 1	142	38	3.05	同様ナテ	同様ナテ	同様糸切	良好	におい気味		103/51
270	RA31	RF12, 036, 器位・折	土師器・杯	底面	1 < 1	149	58	4.6	同様ナテ	同様ナテ	同様糸切	良好	靑	体部筋線あり。	103/54
271	RA51	同上	土師器・杯	口縁-底面	1 < 1	138	54	4.9	同様ナテ	同様ナテ	同様糸切	良好	靑		103/54
272	RA51	RF6, 7, 10, 033	土師器・杯	底面	1 < 1	143	5.0	5.4	同様ナテ	同様ナテ	同様糸切	良好	靑		103/54
273	RA51	同上	土師器・杯	口縁-体部	1 < 1	168	-	[1.0]	同様ナテ	同様ナテ		良好	におい気味		103/77
274	RA51	同上	土師器・杯	口縁-体部	1 < 1	(11.9)	-	[3.7]	同様ナテ	同様ナテ		良好	須恵器		103/77
275	RA51	RF9, 034	土師器・杯	口縁-体部	1 < 1	(15.0)	-	[4.3]	同様ナテ	同様ナテ		良好	におい気味		103/77
276	RA30	兼土須恵	土師器・杯	体部-底面	1 < 1	-	34.0	[1.6]	同様ナテ	同様ナテ	同様糸切	良好	靑		103/51
277	RA31	RF19	土師器・杯	底面	1 < 1	-	77.0	[3.1]	同様ナテ	同様ナテ	同様糸切	良好	におい気味		103/54
278	RA31	RF23	土師器・杯	体部-底面	1 < 1	-	64	[2.4]	同様ナテ	同様ナテ	停止糸切	良好	須恵器		103/54
279	RA31	RF25	土師器・杯	口縁-体部	1 < 1	(21.1)	-	[6.4]	同様ナテ	同様ナテ		良好	須恵器		103/77
280	RA51	兼土須恵	土師器・杯	底面	1 < 1	-	-	[1.5]	同様ナテ	同様ナテ	同様糸切	良好	におい気味		103/51
281	RA51	同上	土師器・底面	底面	1 < 1	-	7.0	[2.3]	同様ナテ	同様ナテ	停止糸切	良好	におい気味		103/54
282	RA51	兼土須恵	土師器・甕	底面	-	-	8.8	[1.8]		ヘラナテリ	水車痕	やや良好	靑灰		103/65
283	RA51	RF15	土師器・甕	体部-底面	1 < 1	-	-	[4.7]	同様ナテ	同様ナテ	停止糸切	良好	におい気味		103/54
284	RA51	RF22	土師器・甕	体部	-	-	-	[5.1]	7ナテ	タタテ		良好	靑オリーブ灰		103/77
285	RA31	RF21	土師器・甕	体部	-	-	-	[7.0]		ヘラナテリ		良好	靑灰		103/77

第13表 本宮階堂口通防動跡表 (11) 土師器・須恵器

発掘調査 番号	発掘調査 名	階位等	種別・器種	部位	分類	法量 (cm)		調査技法				色澤	備考	図号
						口徑(長)	底徑(短)	器高(厚)	内径	外径	底面			
288	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	3.8	3.7	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 51
289	R454	R756	土師器・杯	底部	Ic 11	11.65	3.0	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 54
290	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	13.5	5.7	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 51
291	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	12.8	-	14.5	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 77
292	R454	越前段土-強	土師器・杯	口縁-底部	Ia	12.0	4.2	4.3	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 77
293	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	12.0	-	4.0	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 77
294	R454	越前段土-強	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	13.0	-	14.1	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 77
295	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	4.9	12.4	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 54
296	R454	越前段土-強, 階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	5.2	13.0	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 65
297	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	5.2	12.1	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 65
298	R454	R762	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	5.0	2.1	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 65
299	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	4.7	14.1	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 55
300	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	4.0	11.7	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 55
301	R454	越前段土-強	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	13.4	-	14.4	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 77
302	R454	越前段土-強	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	13.8	-	13.4	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 77
303	R454	越前段土-強	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	5.6	2.1	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 55
304	R454	越前段土-強, 階上-強	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	5.1	2.7	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 55
305	R454	R729, 10	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	3.7	2.1	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 55
306	R454	R763	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	5.7	10.6	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 55
307	R454	R762	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	4.2	11.7	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 55
308	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	7.4	12.7	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 55
309	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	-	14.0	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 55
310	R454	階上	土師器・杯	口縁-底部	Ic 11	-	12.0	14.3	同底ナテ	同底ナテ	同底ナテ	良好		106 77

第14表 本宮熊鷹日舞跡跡群表(12) 土師器・須恵器

編年 番号	遺跡名	層位等	種別・器型	部位	分類	法長 (cm)		調査技法		焼成	色調	備考	出土層
						口徑径(横)	高さ(径)	内面	外面				
311	RA54	Ⅷ上	須恵器・壺	口縁一部分	-	(225)	-	タナキ	-	良好	黄灰		107 77
312	RA54	Ⅷ上	土師器・壺	口縁一部分	-	(145)	-	同様ナテ	-	良好	灰黄		107 78
313	RA51	ⅧB, ⅧA, Ⅷ上	須恵器・壺	口縁一部分	-	(75)	(65)	同様ナテ	同様糸切	良好	黄灰		107 65
314	RA54	ⅧB25	土師器・壺	底部	-	-	110	コナナテ	ヘラナズリ	良好	こい白焼		107 65
315	RA54	Ⅷ上	須恵器・壺	口縁	-	-	-	同様ナテ	同様ナテ	良好	灰		107 77
316	RA51	ⅧA3, ⅧA, Ⅷ上	須恵器・壺	底部	-	-	104	タナキ	-	良好	こい白焼		107 78
317	RA51	ⅧB2, Ⅷ上	須恵器・壺	底部	-	-	(67)	タナキ	-	良好	黄灰		107 78
318	RA51	ⅧB8, Ⅷ上	須恵器・壺	底部	-	-	(144)	タナキ	-	良好	黄灰		107 77
319	RA51	Ⅷ7, ⅧB, ⅧA出土・Ⅷ上	須恵器・壺	底部	-	-	(101)	タナキ	-	良好	黄灰		108 78
320	RA54	Ⅷ上	須恵器・壺	底部	-	-	307	タナキ	-	良好	黄灰		108 78
321	RA51	Ⅷ上	須恵器・壺	底部	-	-	(21)	タナキ	-	良好	灰		108 78
322	RA51	ⅧB5	須恵器・壺	底部	-	-	(137)	タナキ	-	良好	灰		108 78
323	RA51	ⅧB6	須恵器・壺	底部	-	-	(106)	タナキ	-	良好	黄灰		108 78
324	RA51	ⅧF131	須恵器・壺	底部	-	-	(75)	タナキ	-	良好	黄灰		108 78
325	RA51	ⅧF131	須恵器・壺	底部	-	-	67	タナキ	-	良好	灰白		108 78
326	RA54	ⅧF45	須恵器・壺	底部	-	-	67	タナキ	-	良好	黄灰		108 78
327	RA54	Ⅷ上	須恵器・壺	底部	-	-	25	タナキ	-	良好	灰		108 78
331	RA10	ⅧB3	須恵器・杯	底部	a 1	130	68	同様ナテ	同様ヘラナズリ	やや良好	こい白焼・こい白		112 57
332	RA10	ⅧB7	須恵器・杯	底部	b	127	68	同様ナテ	同様ヘラナズリ	良好	灰		112 57
333	RA10	ⅧF, 4	須恵器・杯	底部	b	129	64	同様ナテ	同様ヘラナズリ	良好	灰白	外部の須恵器層に上	112 57
334	RA10	ⅧF, 兼上内一6 (須恵)	須恵器・杯	底部	a 1	126	74	同様ナテ	同様ヘラナズリ	やや良好	こい白焼・こい白		112 57
335	RA10	ⅧB26, 27	須恵器・杯	底部	b	130	70	同様ナテ	同様ヘラナズリ	良好	灰	須恵器層に上	112 57
336	RA10	ⅧB8	須恵器・杯	底部	b	134	60	同様ナテ	同様ヘラナズリ	良好	灰		112 57

第15表 本宮熊堂口遺跡調査表 (13) 土師器・須恵器

調査番号	遺跡名	層位等	種別・器種	部位	分類	法尺 (cm)		調整技法		完成	色澤	備考	調査年度
						口径(土)	高さ(土)	内面	外面				
337	EA10	最上層	須恵器・杯	文形	a I	12.4	7.2	3.6	同様ナテ	平口縁付	灰 二色混濁		112 57
338	EA10	RP5, 12	須恵器・杯	口縁・底部	b	12.5	6.2	4.6	同様ナテ	同様ヘウ型	灰	須恵器工	112 57
339	EA10	RP16, 12	須恵器・杯	口縁・底部	b	12.4	6.8	5.1	同様ナテ	同様ヘウ型	灰白		112 57
340	EA10	RP28, 81, 86, 直上	須恵器・杯	文形	a II	11.7	3.4	3.7	同様ナテ	同様ヘウ型	灰		112 57
341	EA10	RP25	須恵器・杯	文形	b	12.8	6.8	4.3	同様ナテ	同様ヘウ型	灰		112 57
342	EA10	RP27	須恵器・杯	文形	b	12.8	5.8	4.9	同様ナテ	同様ヘウ型	灰		112 57
343	EA10	RP21	須恵器・杯	口縁・底部	a I	12.2	6.2	3.8	同様ナテ	同様ヘウ型	灰白		112 57
344	EA10	RP16, 10, 11, 112, 113	須恵器・杯	口縁・底部	b	13.0	6.6	4.8	同様ナテ	同様ヘウ型	灰白		112 57
345	EA10	RP17, 75, 76, 77	須恵器・杯	口縁・底部	b	12.3	6.0	4.9	同様ナテ	同様ヘウ型	灰		112 57
346	EA10	RP12, 31, 32, 34, 35, 36, 37, 38, 39	須恵器・杯	口縁・底部	a II	15.0	7.6	6.1	同様ナテ	同様ヘウ型	灰		112 57
347	EA10	RP26, 65	須恵器・杯	文形	a III	14.6	7.5	6.5	同様ナテ	同様ヘウ型	灰		112 57
348	EA10	RP4	土師器・杯	口縁・底部	I c I	13.3	-	3.2	同様ナテ	同様ナテ	灰好	におい濁	113 83
349	EA10	RP15	土師器・杯	口縁・底部	I a	13.0	-	1.0	同様ナテ	同様ナテ	灰好	におい濁	113 83
350	EA10	RP15	土師器・壺	口縁・底部	-	20.0	-	6.6	ナテ	ナテ	灰好	濁	113 83
351	EA10	RP28	土師器・壺	口縁・底部	-	-	-	11.6	ヘウナテ	ヘウナテ	灰好	灰	113 83
352	EA10	RP5	土師器・壺	口縁・底部	-	-	-	28.0	ハテ	ハテ	灰好	におい濁	113 83
353	EA10	RP3	土師器・壺	口縁・底部	A, I II	20.3	-	6.4	同様ナテ	同様ナテ	灰好	におい濁	113 73
354	EA10	RP28, RP2	土師器・壺	底部	-	-	-	7.4	ハテ	ハテ	灰好	濁	113 73
355	EA10	RP22, 65	土師器・壺	口縁・底部	A	-	-	14.2	同様ナテ	同様ナテ	灰好	におい濁	116 57
356	EA10	RP28, 70, 76, 77	土師器・杯	文形	I c II	14.2	6.3	5.3	同様ナテ	同様ナテ	灰好	におい濁	116 57
357	EA10	RP24, 26	土師器・杯	文形	I a	12.65	5.2	4.3	同様ナテ	同様ナテ	灰好	におい濁	116 58
358	EA10	RP24, 26	土師器・杯	口縁・底部	I c II	14.2	5.0	4.4	同様ナテ	同様ナテ	灰好	におい濁	116 58
359	EA10	RP29, 30	土師器・杯	口縁・底部	I c I	14.1	-	4.1	同様ナテ	同様ナテ	灰好	におい濁	116 53

第16表 本宮熊堂B遺跡観察表(14) 土師器・須器

調査番号	遺跡名	層位等	種類・器種	部位	分類	寸法 (cm)		調査技法		焼成	色調	備考	図面番号
						口径(底径)	高さ(厚)	内径	外径				
364	EA111	RF5, 79, 灰色, 瀬土	土師器・埴	口縁・体部	I c ii	14.4	6.2	内径ナシ	同径ナシ	良好	にない色		116, 58
365	EA111	RF5b, 80	土師器・埴	体部・底面	I c i	7.5	13.1	同径ナシ	同径ナシ	良好	にない黄褐色	金葉片多く含む。	116, 58
366	EA111	RF30	土師器・埴	底面	I c iii	-	2.4	同径ナシ	同径ナシ	良好	黒		116, 58
367	EA111	RF13, 72, 85, 灰茶	土師器・埴	口縁・体部	II a	15.4	7.3	6.4	ミガキ	良好	黒	内外面黄褐色。	116, 58
368	EA111	RF23	土師器・埴	口縁・体部	III C 1	13.1	6.0	4.9	ミガキ	良好	にない黄褐色		116, 58
369	EA111	RF43, 41, 79	土師器・埴	底面	II a	1.1	6.2	5.5	ミガキ	良好	にない黄褐色	内外面黄褐色。	116, 58
370	EA111	RF36, 瀬土	土師器・埴	口縁・体部	II c i	13.5	-	13.8	ミガキ	良好	にない黄褐色	内外面黄褐色。	116, 58
371	EA111	RF26, 灰褐色	土師器・埴	体部・底面	II c	-	6.0	2.3	ミガキ	良好	黄褐色	内外面黄褐色。	116, 58
372	EA111	瀬土	土師器・埴	体部・底面	II c i	-	6.0	2.0	ミガキ	良好	にない黄褐色	内外面黄褐色。	116, 58
373	EA111	RF56, 灰茶, 瀬土	土師器・埴	底面・高台部	II 2	-	-	12.2	同径ナシ	良好	にない黒		116, 58
374	EA111	RF27	土師器・埴	底面・高台部	II 2	-	-	10.7	同径ナシ	良好	にない黄褐色		116, 58
375	EA111	RF19	土師器・埴	底面・高台部	II 2	-	6.0	2.5	同径ナシ	良好	にない黒	1~3mmの小石多く含む。	116, 58
376	EA111	RF2, 3, 38, 73, 74	土師器・埴	口縁・体部	A 2	19.0	11.9	27.2	ハナ	良好	にない黄褐色		117, 73
377	EA111	RF3, 5, 6, 10, 15, 25, 55, 56	土師器・埴	口縁・体部	A 2	19.7	12.2	20.3	ハナ	良好	灰黄褐色		117, 73
378	EA111	RF5, 667	土師器・埴	体部	-	-	8.1	15.4	ハナ	良好	にない黄褐色		117, 73
379	EA111	RF57	土師器・埴	体部	-	-	10.9	-	ハナナズリ	良好	黒		117, 83
380	EA111	RF4, 7, 8, 11, 瀬土	土師器・埴	口縁・体部	I c i	12.5	3.0	3.7	同径ナシ	良好	にない黒	金葉片多く含む。	121, 56
381	EA111	RF4, 8, 11, 瀬土	土師器・埴	口縁・体部	II a	13.5	5.8	4.4	同径ナシ	良好	にない黒		121, 56
382	EA111	RF7, 瀬土	土師器・埴	口縁・体部	I c i	11.8	-	13.5	同径ナシ	良好	灰褐色		121, 83
386	EA111	8, 11, 瀬土	土師器・埴	口縁・体部	I c i	13.0	-	14.2	同径ナシ	良好	にない黄褐色		121, 83
387	EA111	RF22, 25	土師器・埴	口縁・体部	II c ii	13.1	5.4	3.0	ミガキ	良好	にない黒	内外面黄褐色。	121, 56
388	EA111	RF4, 瀬土	土師器・埴	口縁・体部	I 2 a	14.1	7.0	3.8	ミガキ	良好	にない黄褐色	内外面黄褐色。	121, 56
389	EA111	RF2	土師器・埴	底面・高台部	II 2	-	7.7	12.3	同径ナシ	良好	黄褐色		121, 56

第17表 本宮飛雲日道跡調査表 (15) 土師器・須恵器

調査番号	遺跡名	層位等	種類・器種	部位	分類	法量 (cm)		調査技法			焼成	色澤	備考	図録頁
						口徑(採)	底径(採)	器高(採)	内面	外面				
300	BA112	5A, 13	土師器・甕	口縁・体部	-	25.0	-	[144]				青	121	73
301	BA112	EP26	須恵器・甕	体部・高台部	-	-	37.1	[141]				灰	121	73
305	BA113	878	須恵器・甕	口縁・体部	-	21.6	-	3.1	同様ナテ			灰	122	83
306	BA113	男上	須恵器・甕	体部・底部	-	-	13.0	2.6				灰	122	74
307	BA113	EP6	須恵器・甕	体部	-	-	-	3.0				灰	122	83
308	BA113	EP15	須恵器・甕	体部	-	-	-	11.1				灰	122	83
309	BA113	876, 24, 33, 43, 52	土師器・外	文部	Ic 1	15.3	6.0	4.9	同様ナテ			にぶい青黒	126	58
400	BA114	EP209	土師器・外	口縁・体部	Ic 2a	13.0	5.2	4.9	同様ナテ			にぶい青黒	126	58
401	BA114	EP22	土師器・外	文部	Ia	12.5	5.0	4.4	同様ナテ			にぶい青	126	58
402	BA114	EP2	土師器・外	文部	Ic 1a	12.5	5.4	4.1	同様ナテ			にぶい青	126	58
403	BA114	EP16, 10, 11	土師器・外	文部	Ic 1b	14.1	3.5	4.6	同様ナテ			にぶい青黒	126	58
404	BA114	EP1, 31	土師器・外	文部	Ic 1c	13.2	3.4	4.3	同様ナテ			同様	126	58
405	BA114	872b, 31, 48	土師器・外	文部	Ic 1b	12.3	4.9	4.5	同様ナテ			同様	126	58
406	BA114	EP7	土師器・外	口縁・体部	Ic 1	12.1	4.5	4.7	同様ナテ			同様	126	58
407	BA114	男上	土師器・外	口縁・体部	Ic 2b	12.3	3.0	3.6	同様ナテ			にぶい青黒	126	58
408	BA114	875	土師器・外	口縁・体部	Ic 1	12.6	-	3.0	同様ナテ			にぶい青	126	58
409	BA114	874b	土師器・外	口縁・体部	Ic 1b	12.2	5.1	4.1	同様ナテ			にぶい青	126	58
410	BA114	871a	土師器・外	体部・底部	Ic 1	-	4.4	[18]	同様ナテ			灰	126	59
411	BA114	874b	土師器・外	体部	Ic 1	-	5.2	[11]	同様ナテ			にぶい青黒	126	59
412	BA114	872b	土師器・外	体部・底部	Ic 1	-	5.6	[21]	同様ナテ			灰	126	59
413	BA114	8712	土師器・外	体部・底部	Ic 1a	-	5.5	[14]	同様ナテ			にぶい青	126	59
414	BA114	873, 10, 11	土師器・外	口縁・底部	IIc 1	14.0	5.5	3.7	同様ナテ			灰	126	59
415	BA114	8757	土師器・外	口縁・底部	IIc 1	13.0	4.8	3.7	同様ナテ			にぶい青黒	126	59

第18表 本宮熊堂日蓮法親宗表 (16) 土師器・須恵器

氏名 番号	部位等	種類・器名	部位	分類	数量 (cm)		調査技法		焼成	色調	備考	同出 番号
					口径(他) 底径(他)	器高(厚)	内径	外径				
416	RA114	RF28	十種器・杯	Ⅱc	102	36	52	ミガキ	良好	黒黒	内外両面色処理。	136
417	RA114	RF28	十種器・杯	Ⅱc-1	133	55	54	円底ナテ	良好	にぶい黄緑	内面両面色処理。	137
418	RA115	RF29	土師器・杯	Ⅱc	159	60	40	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	内面両面色処理。金網付多く含む。	137
419	RA114	RF41	十種器・杯	Ⅱc-11	118	-	34	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	内面両面色処理。	137
420	RA114	RF11	十種器・杯	Ⅱc-10	165	66	50	圓底ナテ	良好	にぶい黄	内面両面色処理。金網付をやや多く含む。	137
421	RA111	RF20	土師器・杯	Ⅱc	-	50	11	円底ナテ	良好	にぶい黄	内面両面色処理。	137
422	RA114	RF25, 54, 57	土師器・杯	Ⅱc-10	-	51	20	円底ナテ	良好	にぶい黄	内面両面色処理。	137
423	RA111	RF17	土師器・杯	Ⅱc-1	-	58	31	圓底ナテ	良好	灰黒	内面両面色処理。金網付を多く含む。	137
424	RA114	RF28	土師器・者形等	Ⅱa	138	-	16	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	高台割部。	137
425	RA114	RF28	十種器・盞	-	118	-	50	円底ナテ	良好	にぶい黄	中央に穿孔。乳白土粒子多。蓋部條に土層質や灰を混入。	137
428	RA115	RF29	土師器・杯	Ⅱc	146	54	49	圓底ナテ	良好	にぶい黄	條部が厚。黄緑色帯「底」。	139
429	RA115	RF54	土師器・身	Ⅱc	131	52	42	円底ナテ	良好	にぶい黄	條部が厚。黄緑色帯「底」。	139
430	RA115	RF25, 64	土師器・身	Ⅱc-1	136	31	39	圓底ナテ	今令良好	にぶい黄	金網付を多く含む。	139
431	RA115	RF74	十種器・杯	Ⅱc	115	44	43	圓底ナテ	良好	にぶい黄	金網付を多く含む。	139
432	RA115	RF61, 63	土師器・杯	Ⅱa	132	50	43	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	金網付を多く含む。	139
433	RA115	RF91	土師器・杯	Ⅱa	124	54	52	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	金網付を多く含む。	139
434	RA115	RF25, 71	土師器・杯	Ⅱc	126	31	42	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	金網付を多く含む。	139
435	RA115	RF46	土師器・杯	Ⅱc	136	52	45	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	金網付を多く含む。	139
436	RA115	RF61, 78	土師器・杯	Ⅱc-1	122	16	17	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	金網付を多く含む。	139
437	RA115	RF72	土師器・杯	Ⅱc	123	50	45	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	金網付を多く含む。	139
438	RA115	RF64, 78	土師器・杯	Ⅱc	127	48	47	圓底ナテ	良好	にぶい黄緑	金網付を多く含む。	139
439	RA115	RF78	土師器・杯	Ⅱc-1	129	50	45	圓底ナテ	良好	にぶい黄	金網付をやや多く含む。	139
440	RA115	RF27	土師器・杯	Ⅱc	127	58	44	圓底ナテ	良好	にぶい黄		139

第19表 本宮熊鷹日通跡観察表 (17) 土師器・須恵器

調査番号	遺跡名	層位等	種別・器種	部位	分類	法長 (cm)		測線設法		焼成	色澤	備考	図説番号
						口径 (括弧内)	高さ (厚)	内面	外面				
441	RA15 RP85_77		土師器・杯	口縁一部分	Ic m	12.7	5.4	41	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色	金帯母を多く含む。	131_00
442	RA15 RP85_95		土師器・杯	口縁一部分	Ic m	(12.6)	-	[38]	面取ナテ	良好	赤褐色	金帯母を多く含む。	131_03
443	RA15 覆土		土師器・杯	口縁一部分	Ic i	(13.5)	-	[41]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色		131_05
444	RA15 RP85_52_表上		土師器・杯	口縁一部分	Ic i	(12.4)	-	[37]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色	金帯母を多く含む。	131_03
445	RA15 丸味、覆土		土師器・杯	口縁一部分	Ic	(12.7)	-	[32]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色		131_03
446	RA15 丸味		土師器・杯	口縁一部分	Ic i	(11.9)	-	[47]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色		131_03
447	RA15 覆土		土師器・杯	口縁一部分	Ia	(12.0)	-	[31]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色		131_03
448	RA15 RP85_表部、p41		土師器・杯	口縁一部分	Ic i	(12.0)	-	[32]	面取ナテ	良好	黄		131_00
449	RA15 RP70		土師器・杯	底面	Ic m	-	4.4	[05]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色	金帯母を多く含む。	131_00
450	RA15 RP85_99		土師器・杯	底面	Ic m	-	5.0	[16]	面取ナテ	良好	黄		131_00
451	RA15 RP78		土師器・杯	底面	Ic i	-	4.9	[11]	面取ナテ	良好	黄褐色	金帯母を多く含む。	131_00
452	RA15 RP76		土師器・杯	底面	Ia	-	5.2	[05]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色	金帯母を多く含む。	131_00
453	RA15 RP75		土師器・杯	底面	Ic i	-	4.8	[10]	面取ナテ	良好	黄褐色	金帯母を多く含む。	131_00
454	RA15 草直		土師器・杯	底面	Ia	-	5.2	[13]	面取ナテ	良好	黄		131_00
455	RA15 RP76		土師器・杯	底面	Ic m	-	5.3	[13]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色	金帯母を多く含む。	131_00
456	RA15 覆土		土師器・杯	底面	Ic m	-	5.0	[07]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色		131_00
457	RA15 RP85_丸味		土師器・杯	底面	Ic i	12.9	4.0	[6]	ミガキ	良好	にぶい、黄褐色	内面黒色地肌。	131_00
458	RA15 RP89		土師器・杯	口縁一部分	Ic	11.5	6.0	[6]	ミガキ	良好	赤褐色	内面黒色地肌。	131_00
459	RA15 RP77_98		土師器・杯	口縁一部分	Ic i	(12.5)	-	[45]	ミガキ	良好	にぶい、黄褐色	内面黒色地肌。金帯母を多く含む。	131_03
460	RA15 RP70		土師器・杯	口縁一部分	Ic	-	5.5	[05]	ミガキ	良好	にぶい、黄褐色	内面黒色地肌。	131_00
461	RA15 RP79		土師器・杯	口縁一部分	Ic i	-	5.6	[23]	ミガキ	良好	にぶい、黄褐色	内面黒色地肌。	131_00
462	RA15 RP73		土師器・杯	口縁一部分	Ic 2 a	14.2	7.9	[56]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色	内面黒色地肌。金帯母を多く含む。	131_00
463	RA15 RP72_丸味		土師器・杯	口縁一部分	Ic 2 a	12.9	-	[46]	面取ナテ	良好	にぶい、黄褐色	黒穴底。	131_03

第20表 本宮熊堂B通跡観察表(18) 土師器・夾器器

調査番号	器種名	図印番号	種類・形態	部位	分類	寸量 (cm)		調整技法	焼成	色調	備考	図印番号
						口径(㎜)	底径(㎜)					
464	RA115 RP81		土師器-高脚杯	杯口部	B 2	-	(78)	(20)	良好	にぶい黄		131 60
465	RA115 腹十		須恵器-壺	腹部	-	-	-	(56)	良好	灰藍		132 83
466	RA115 腹上		須恵器-壺	腹部	-	-	-	(39)	良好	黄		132 83
471	RA116 RP28		土師器-小	口縁-外	I a	137	52	47	良好	にぶい黄	全蓋面を多く含む。	134 60
475	RA116 RP28		土師器-杯	口縁-外底	I c Ⅱ	(138)	64	48	良好	にぶい黄		134 60
476	RA116 RP76		土師器-杯	口縁-外底	I c Ⅱ	(131)	56	54	良好	にぶい黄藍		134 60
477	RA116 RP25		土師器-杯	口縁-外底	I c Ⅱ	134	70	47	やや良好	にぶい黄藍	蓋面1~5mmの小石を多く含む。	135 60
478	RA116 RP29		土師器-杯	口縁-外底	I c Ⅱ	133	54	44	良好	にぶい黄	全蓋面を多く含む。	135 60
479	RA116 RP27		土師器-杯	口縁-外底	I c Ⅱ	(162)	60	56	良好	にぶい黄藍	外周外底蓋面・内上蓋面を多く含む。	135 60
480	RA116 RP72		土師器-杯	口縁-外底	I c Ⅱ	(127)	54	43	良好	にぶい黄	全蓋面を多く含む。	135 60
481	RA116 1号十瓦		土師器-小	口縁-外底	I c Ⅱ	(128)	(63)	45	良好	にぶい黄		135 84
482	RA116 RP73		土師器-杯	口縁-外底	I c Ⅱ	(121)	-	(40)	良好	にぶい黄		135 84
483	RA116 腹上		土師器-杯	口縁-外底	I c Ⅱ	(123)	-	(33)	良好	にぶい黄		135 84
484	RA116 RP27, 38		土師器-小	口縁-外底	I c Ⅱ	(165)	-	63	良好	にぶい黄		135 84
485	RA116 RP25		土師器-杯	口縁-外底	I c Ⅱ	(128)	-	33	良好	にぶい黄藍		135 84
486	RA116 RP1, 8		土師器-杯	口縁-外底	I c	(137)	-	25	良好	黄		135 84
487	RA116 RP28		土師器-杯	腹部	I c Ⅱ	-	52	(13)	良好	にぶい黄		135 60
488	RA116 RP11		土師器-杯	腹部	I c Ⅱ	-	37	(10)	やや良好	にぶい黄藍		135 60
489	RA116 RP24		土師器-杯	腹部	I c Ⅱ	-	71	(10)	良好	にぶい黄		135 60
490	RA116 RP26		土師器-杯	腹部	I c Ⅱ	-	37	(10)	良好	にぶい黄		135 60
491	RA116 RP4		土師器-小	口縁-外底	B c Ⅱ	(122)	-	(41)	良好	にぶい黄藍	内周外底蓋面。	135 61
492	RA116 RP9, 1号土瓦		土師器-壺	口縁-外底	-	(146)	-	(97)	良好	にぶい黄		135 84
493	RA116 腹上		土師器-壺	口縁-外底	-	(134)	-	(44)	良好	にぶい黄	外周外底蓋面付蓋面。	135 84

第21表 本宮熊鷹B道跡踏査表 (19) 土師器・須屋器

調査 番号	調査 地名	所在地	種類・器種	部位	分類	径長 (cm)		調整技法		焼成	色澤	備考	把握 寸長	
						口径(底径)	器高(厚)	内面	外面					底面
						口径(底径)	器高(厚)	内面	外面					底面
04	RA106	宮704	土師器・甕	1線-1体部	-	-	[36]	同底寸	同底寸	良好	におい消臭		135 84	
05	RA106	宮704	須屋器・甕	胴部	-	-	[46]			良好	灰濁		135 84	
07	RA109	宮721, 墓土	土師器・杯	文部	I c 1	128	50	44	同底寸	同底寸	良好	におい消臭	全蓋部多く含む。	138 61
08	RA109	宮722	土師器・杯	文部	I a	126	58	39	同底寸	同底寸	良好	におい消臭		138 61
09	RA109	宮721, 墓土	土師器・杯	1線-胴部	I c 1	138	60	44	同底寸	同底寸	良好	におい消臭		138 61
300	RA109	宮721, 墓土	土師器・杯	文部	I c 1	153	48	44	同底寸	同底寸	良好	におい消臭		138 61
301	RA109	宮728, 墓土	土師器・杯	文部	I a	158	52	[52]	同底寸	同底寸	今や良好	におい消臭		138 61
302	RA109	墓土, 須屋土	土師器・杯	文部	I c 1	119	51	45	同底寸	同底寸	良好	におい消臭		138 61
303	RA109	墓土, 須屋土	土師器・杯	1線-胴部	I c 1	149	60	38	同底寸	同底寸	良好	明黄濁		138 61
304	RA109	宮7103, 土師器	土師器・杯	1線-胴部	I a	129	70	38	同底寸	同底寸	良好	におい消臭		138 61
305	RA109	宮721, 墓土	土師器・杯	1線-胴部	I c 1	122	52	33	同底寸	同底寸	良好	におい消臭		138 61
306	RA109	宮729	土師器・杯	1線-胴部	I c 1	122	-	[40]	同底寸	同底寸	良好	明濁		138 84
307	RA109	土師器	土師器・杯	1線-胴部	I c 1	140	-	[40]	同底寸	同底寸	良好	静		138 84
308	RA109	墓土	土師器・杯	胴部-底部	I c 1	-	(48)	[38]	同底寸	同底寸	良好	におい消臭		138 61
309	RA109	宮722	土師器・杯	文部	II c 1	127	56	[47]	同底寸	同底寸	良好	におい消臭	内面黒色染層。	138 61
310	RA109	宮729	土師器・杯	文部	II c 1	136	60	45	同底寸	同底寸	良好	におい消臭	内面黒色染層。	138 61
511	RA109	土師器	土師器・杯	1線-胴部	II c 1	136	(57)	45	同底寸	同底寸	良好	におい消臭	内面黒色染層。全蓋部多く含む。	138 61
512	RA109	墓土	土師器・杯	1線-胴部	II c 1	130	(62)	49	同底寸	同底寸	良好	におい消臭	内面黒色染層。	138 61
513	RA109	墓土	土師器・杯	胴部-底部	II c 1	-	61	[11]	同底寸	同底寸	良好	黒	内面黒色染層。	139 61
514	RA109	墓土	土師器・杯	胴部-底部	II 2	-	(70)	[21]	同底寸	同底寸	良好	静	内面黒色染層。	139 61
515	RA109	土師器	土師器・杯	1線-胴部	II 2 a	151	(58)	67	同底寸	同底寸	良好	におい消臭	内面黒色染層。	139 61
516	RA109	宮725, 墓土, 須屋土	土師器・杯	文部	II 2 a	148	82	64	同底寸	同底寸	良好	におい消臭	内面黒色染層。	139 61
517	RA109	宮725	土師器・甕	1線-1体部	-	(110)	-	[60]	同底寸	同底寸	良好	におい消臭		139 84

第22表 本宮熊堂B遺跡観察表(20) 土師器・須器

編年番号	器名	形状等	性別・器種	部位	分類	法量 (cm)		測定方法		焼成	色調	備考	図説番号
						口径(長)	底径(厚)	内面	外面				
318	RA19 RP04	-	土師器・甕	体部-底足	-	70	32	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	灰		139 71
319	RA19 RP05	30% 黒	土師器・甕	口縁-底足	-	30.2	33.8	ヘラナズリ	ヘラナズリ	良好	にぶい黒		139 74
320	RA19 甕上	-	須器・甕	体部	-	-	7.3	タタキ	タタキ	良好	灰		139 81
321	RA19 RP13	-	須器・甕	体部	-	-	9.5	タタキ	タタキ	良好	灰		139 84
325	RA120 甕上	-	須器・甕	口縁-底足	-	-	5.0	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	灰		140 84
326	RA126 RP21 甕上	-	土師器・甕	口縁-底足	I a	14.2	3.7	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	淡黄褐色		142 81
327	RA125 甕上	-	土師器・甕	口縁-底足	I c 1	13.4	-	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	にぶい黄		142 84
328	RA125 RP18, 29	-	土師器・甕	口縁-底足	I c 1	13.7	-	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	にぶい小黒		142 81
329	RA124 RP18	-	土師器・甕	体部-底足	II c 1	-	5.3	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい黄褐色		142 61
330	RA124 RP20	-	土師器・甕	体部-底足	-	-	8.0	ヘラナズリ	ヘラナズリ	良好	にぶい黄		142 71
331	RA124 甕上	-	土師器・甕	体部	I c	-	14.0	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	にぶい黄褐色		142 -
332	RA127 甕上	-	土師器・甕	口縁-底足	I a	12.9	-	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	淡黄褐色		142 -
333	RA127 RP28	-	土師器・甕	体部-底足	-	-	7.4	ハヤ	ハヤ	良好	灰白		144 85
334	RA127 RP27	-	須器・甕	体部	-	-	3.4	アケテ	アケテ	良好	黒褐色		144 85
335	RA127 甕上	-	須器・甕	体部	-	-	12.0	アケテ	アケテ	良好	黒褐色		144 85
336	RA128 RP25, 26	-	土師器・甕	文部	I a	13.4	6.0	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	黄		145 61
337	RA128 甕上	-	土師器・甕	口縁-底足	I a	13.1	5.0	図帳ナリ	図帳ナリ	やや良好	にぶい黄		145 61
338	RA128 RP17, 甕保	-	土師器・甕	口縁-底足	I a	12.0	5.3	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	黄	1~2mmの小石を多く含む。	145 61
339	RA128 RP16	-	土師器・甕	口縁-底足	I a	12.2	5.0	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	明褐色		145 62
340	RA128 RP26	-	土師器・甕	文部	II c 1	12.6	4.5	図帳ナリ	図帳ナリ	良好	にぶい黄		145 62
341	RA128 RP43	-	土師器・甕	文部	II c 1	12.4	4.8	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい黄		145 62
342	RA128 RP7	-	土師器・甕	文部	II c 1	12.1	4.8	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい黄		145 62
343	RA128 RP24	-	土師器・甕	口縁-底足	II c	13.5	5.0	ミガキ	ミガキ	良好	黄		145 62

第23表 本宮熊鷹B遺跡簡略表(21) 土師器・須恵器

国庫登録番号	器名	器位等	器別・器種	部位	分類	法量 (cm)			調整技法			地成	色調	備考	国庫登録	
						口徑(内)	底徑(内)	器高(原)	内周	外面						底面
										口徑(外)	底徑(外)					
344	EA128	甕上	十輪器・坏	口縁~底部	ⅡcⅡ	(13.3)	(5.0)	47	ミガキ	同径(外)	同径(外)	良好	にぶい青黒	内面褐色地肌、 外口割重。	146	62
345	EA128	甕上	十輪器・若竹筒	口縁~底部	ⅡcⅡ	(11.6)	-	(5.6)	同径(外)	同径(外)	良好	にぶい青黒	にぶい青黒	外口割重。	146	65
346	EA128	甕上	十輪器・甕	底部	-	-	-	(5.3)	-	-	良好	にぶい青黒	-	-	146	65
347	EA128	RF90	須恵器・甕	外部	-	-	-	(10.4)	-	-	良好	灰黄黒	-	-	146	65
348	EA128	RF90	須恵器・甕	外部	-	-	-	(11.3)	-	-	良好	黒	-	-	146	65
349	EA128	RF12	須恵器・甕	外部	-	-	-	(6.2)	-	-	良好	黒灰	-	-	146	65
350	EA128	RF1	須恵器・甕	外部	-	-	-	(7.8)	-	-	良好	黒	-	-	146	65
351	EA128	RF5	須恵器・甕	外部	-	-	-	(9.6)	-	-	良好	黒	-	-	146	65
352	EA128	輪鉢	十輪器・坏	底部	ⅠcⅠ	147	45	57	同径(外)	同径(外)	良好	にぶい青	-	-	146	62
353	EA128	RF21	土師器・外	文部	Ⅰa	135	52	43	同径(外)	同径(外)	良好	にぶい青	-	-	146	62
354	EA128	RF12	十輪器・甕	外部~底部	-	-	-	54	(4.3)	同径(外)	同径(外)	良好	黒	-	146	62
355	EA128	RF4	十輪器・坏	底部	Ⅰ	-	-	70	(1.0)	同径(外)	同径(外)	良好	にぶい青	-	146	62
356	EA128	RF23	土師器・坏	外部~底部	ⅠcⅡ	-	-	54	(2.3)	同径(外)	同径(外)	良好	黒	-	146	62
357	EA110	KF82	土師器・甕	底部	-	-	-	74	(2.8)	同径(外)	ヘラナテ	今令良好	にぶい青	-	146	62
358	EA128	RF11_22	十輪器・外	口縁~底部	ⅡcⅠ	134.6	5.8	49	ミガキ	同径(外)	同径(外)	良好	にぶい青	内面褐色地肌、金襴片を多く含む。	146	62
359	EA128	RF1	十輪器・耳皿	文部	-	101	47	56	同径(外)	滑子ナエ	良好	にぶい青	-	-	146	62
360	EA128	輪鉢	十輪器・坏	外部	ⅠcⅡ	-	-	(3.2)	ミガキ	同径(外)	良好	にぶい青	外部外周部より口内、内面褐色地肌。	-	146	-
361	EA128	甕上	須恵器・甕	外部	-	-	-	(3.7)	-	-	良好	黒灰	-	-	146	65
362	EA128	甕上	須恵器・甕	口縁~外部	-	(11.8)	-	(4.4)	同径(外)	-	良好	黒灰	-	-	146	65
363	EA128	RF2	須恵器・甕	口縁~底部	-	(41.8)	-	(11.6)	-	-	良好	黒灰	-	-	146	75
365	EA110	KF85	十輪器・坏	底部	ⅠcⅡ	123	47	45	同径(外)	同径(外)	良好	にぶい青	金襴片を多く含む。	-	132	62
366	EA110	KF85	土師器・坏	口縁~底部	ⅠcⅡ	(13.1)	5.6	47	同径(外)	同径(外)	良好	にぶい青	-	-	132	62
367	EA110	KF77	十輪器・坏	底部	ⅠcⅡ	134	5.2	43	同径(外)	同径(外)	良好	にぶい青	外部外周部は割重(上)。	-	132	62

第24表 本宮熊堂B遺跡觀察表(22) 土師器・須恵器

編號 番号	編號名	陶器等	種類・器種	部位	分類	法長 (cm)		調整技法		地成	色調	備考	規格寸法	
						口徑(φ)	底徑(φ)	内面	外面					
568	RA130 R264		土師器・環	口縁~底縁	I c II	56	48	同底ナテ	同底ナテ	良好	褐色		132 62	
569	RA130 R177		土師器・環	口縁~底縁	I c II	55	44	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	製品・金粟粉を多く含む。	132 62	
570	RA130 R178		土師器・環	底部	I c III	128	48	同底ナテ	同底ナテ	良好	褐色	金粟粉を多く含む。	132 62	
571	RA130 R290		土師器・環	口縁~底縁	I c III	55	37	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色		132 62	
572	RA130 R212		土師器・環	底部	I c III	124	37	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	製品(調整)を多く含む。	132 62	
573	RA130 腹上		土師器・環	口縁~底縁	I c I	1037	50	43	同底ナテ	同底ナテ	良好	褐色	132 62	
574	RA130 腹上		土師器・環	口縁~底縁	I c II	1144	60	48	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	132 62	
575	RA130 R255, 57		土師器・環	底部	I c II	129	49	43	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
576	RA130 腹上		土師器・環	底部	I c III	129	54	15	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	132 62	
577	RA130 R272		土師器・環	口縁~底縁	I c III	134	42	385	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
578	RA130 R273		土師器・環	口縁~底縁	I c III	118	54	385	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
579	RA130 腹上, カマ下腹上		土師器・環	底部	I a	124	54	37	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
580	RA130 R276, 腹上		土師器・環	底部	I c III	135	48	44	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
581	RA130 腹上		土師器・環	口縁~底縁	I c III	129	54	44	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
582	RA130 R274		土師器・環	底部	I c III	130	58	41	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
583	RA130 R288		土師器・環	底部	I c III	132	72	43	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
584	RA130 腹上		土師器・環	底部	I c III	110	54	385	同底ナテ	同底ナテ	良好	褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
585	RA130 R275		土師器・環	口縁~底縁	I c III	134	51	41	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
586	RA130 カマ下		土師器・環	口縁~底縁	I c III	1116	56	42	同底ナテ	同底ナテ	良好	褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
587	RA130 R278		土師器・環	底部	I c III	132	615	50	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	金粟粉を多く含む。	132 62
588	RA130 カマ下腹上, 腹上		土師器・環	底部	I c III	126	58	48	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色	外周部。	132 62
589	RA130 腹上		土師器・環	口縁~底縁	I c III	1220	50	同底ナテ	同底ナテ	良好	にぶい黄褐色		132 62	
590	RA130 腹上		土師器・環	底部	I c III	137	46	55	同底ナテ	同底ナテ	良好	褐色	口縁部・内周部に黄褐色。	132 62

第25表 本宮熊堂口遺跡観察表 (23) 土師器・須恵器

調査 番号	遺跡名	方位号	種類・器種	形状	分類	法量 (cm)		調査技法				焼成	色層	備考	図紙番号
						口径(内)	底径(内)	内径	外径	測置					
301	R130 瓦鉢、甕土		土師器・土	口縁一部	Ic 3	(11.2)	5.2	5.0	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱		151 62
302	R130 7770		土師器・土	口縁一部	Ic 4	(13.0)	(5.0)	1.8	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱		151 63
303	R130 1号土		土師器・土	口縁一部	Ic	12.5	-	2.1	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	灰濁		151 65
304	R130 甕土		土師器・土	胴部一部	Ic 1	-	5.0	2.9	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱	金網多くなる。	151 63
305	R130 べし土		土師器・土	底部	Ic 4	-	5.4	2.2	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱		151 67
306	R130 甕鉢		土師器・土	胴部一部	Ic 1	-	5.2	2.6	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱		151 63
307	R130 2096, 20104		土師器・土	口縁一部	Ic 1	(10.0)	(4.0)	3.8	ミギキ	同径ナ	同径ナ	良好	互		151 63
308	R130 2093, 甕土		土師器・土	口縁一部	Ic 4	13.0	5.3	4.9	ミギキ	同径ナ	ヘラケズリ	良好	におい弱	胴部が濃赤褐色「二工」土上。内面褐色処理。	151 63
309	R130 2091, 62		土師器・土	口縁一部	Ic 1	(12.0)	5.7	5.6	ミギキ	同径ナ	ヘラケズリ	良好	におい弱	胴部が濃赤褐色「二工」土上。内面褐色処理。	151 64
600	R130 2092		土師器・土	口縁一部	Ic 4	(12.0)	4.8	3.5	ミギキ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱		151 64
601	R130 2094, 56		土師器・土	口縁一部	Ic 4	(12.0)	5.2	4.7	ミギキ	同径ナ	同径ナ	良好	灰濁		151 64
602	R130 2093		土師器・土	底部	Ic 4	14.2	5.8	4.9	ミギキ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱	内面褐色処理。	151 64
603	R130 2096		土師器・土	底部	Ic 1	11.6	5.3	4.2	ミギキ	同径ナ	ヘラケズリ	良好	におい弱	内面褐色処理。	151 64
604	R130 2092		土師器・土	底部	Ic 4	13.4	5.5	4.2	ミギキ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱	内面褐色処理。金網多くなる。	151 64
605	R130 甕土		土師器・土	胴部一部	Ic 1	-	4.5	1.0	ミギキ	同径ナ	ヘラケズリ	良好	におい弱	修復外観。口。	154 -
606	R130 2093		土師器・高付鉢	底部一部	B 2	-	3.0	同径ナ	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱		153 61
607	R130 2099		土師器・高付鉢	底部一部	B 2	-	0.2	4.0	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱	本底は多くなる。	153 61
608	R130 甕土		土師器・高付鉢	胴部一部	I 2a	-	7.2	2.3	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱	内面褐色処理。	153 64
609	R130 2095		土師器・鉢	胴部	I 2b	(25.1)	-	2.3	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	におい弱		153 65
610	R130 2090		土師器・甕	底部	-	11.9	6.2	11.6	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	灰濁	内面赤土手取に灰付。	153 75
611	R130 2090		土師器・甕	口縁一部	-	15.5	9.8	7.8	ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂灰	良好	におい弱		153 75
612	R130 2096, 69		土師器・甕	口縁一部	-	12.0	6.5	1.9	同径ナ	同径ナ	同径ナ	良好	硝灰		153 75
613	R130 2098		土師器・甕	胴部一部	-	13.0	-	11.0	ヘラケズリ	ヘラケズリ	良好	におい弱		153 75	

第26表 本宮前臺B通廊軒架(24) 土師器・須器器

図形 番号	通廊名	層高等	柱頭・器型	部位	分類	法量 (cm)		調査技法		色調	備考	図形番号
						口径(深)	底径(深)	内面	外面			
614	R113B 地上		須器器・変	体部	-	-	[73]			黒灰		157 45
615	R113B へさ下層土		須器器・変	口縁	-	-	[53]			黒灰		156 45
616	R113B 礎土		須器器・変	体部	-	-	[56]			黒灰		155 45
624	R2021 R214		須器器・変	口縁	-	-	[93]			黒灰	注線と刺突を基文。	157 46
625	R2224 礎土		土師器・坏	突部	IcE	14.6	4.5	内輪ノ字	径6.7(外径)	へろケズリ		157 61
626	R2225 礎土		土師器・坏	突部	IcE	13.5	4.5	内輪ノ字	同輪ノ字	同輪ノ字	明赤褐色	157 64
627	R2225 礎土		土師器・坏	体部	IcE	-	[30]	3.7片生	同輪ノ字	同輪ノ字	同輪ノ字	157 -
628	R2225 礎土		土師器・坏	口縁・体部	IcE	12.0	-	[43]	同輪ノ字	同輪ノ字	1.5(外)内面	157 46

第27表 本宮無堂日蓮宗観音堂 (25) 阿文土器

掲載番号	遺構名	州上部位	種別	部位	長さ	幅	厚さ	文様	図版	写真	
1	RD183	RP15.10.1317.2024	縄文土器・漆鉢	底部	14.3	7.2	19.9			29	76
2	RD183	RP212.漆土	縄文土器・鉢	口縁~底部	(10.0)	4.4	19.3			29	76
3	RD183	RP15.14.1516.數十	縄文土器・漆鉢	口縁~底部	(9.15)	-	[9.1]	波状口縁・波縁・LR・内面に大量の黒付着		29	86
4	RD183	RP23	縄文土器	口縁~底部	-	-	[3.5]	波縁・LR		29	86
5	RD183	埋土	縄文土器・鉢	口縁~底部	-	-	[4.3]	口縁部：波状口縁、突起あり、波縁		29	86
6	RD183	埋土	縄文土器・鉢	口縁~底部	-	-	[4.1]	口縁部：波状口縁・波縁		29	86
14		表採	縄文土器・漆鉢	口縁~底部	-	-	[2.8]	波彩工文字、口唇部に波縁		31	86
15	5L20b	表採	縄文土器・鉢	口縁~底部	-	-	[3.2]	口唇部に波縁・波縁・LR		31	86
16	5N28b	横山面	縄文土器・鉢	口縁部	-	-	[2.5]	口唇部に黒みあり、口唇部直下に内外面に波縁		31	86
17	5N29f	横山面	縄文土器・鉢	口縁~底部	-	-	[3.9]	波彩工文字、口唇部に突起と波縁、ミダキ		31	86
18	5L20b	表採	縄文土器・漆鉢	口縁~底部	-	-	[3.1]	工文字、口唇部直下に内外面に波縁		31	86
19	5N18f	表採	縄文土器・鉢	口縁~底部	-	-	[3.4]	口唇部直下に内外面に波縁・LR		31	86
20	5N29f	横山面	縄文土器・漆鉢	口縁~底部	-	-	[6.0]	口唇部直下に内外面に波縁		31	86
21	5N29f	横山面	縄文土器・鉢	口縁~底部	-	-	[7.8]	口唇部：波状口縁・LR		31	86
22	5N29f	横山面	縄文土器・鉢	口縁~底部	-	-	[4.2]	工文字、口唇部に波縁・口唇部直下に内外面に波縁・LR		31	86
23	5N19f	表採	縄文土器・鉢	口縁~底部	-	-	[6.9]	波彩工文字、口唇部に突起と波縁・LR		31	86
24	5L15a	表採	縄文土器・台付鉢	底部~縁台部	-	-	[2.6]			31	64

第28表 本宮熊堂B遺跡観察表(26) 石器

掲載番号	遺跡名	出土層位	種別	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	回数	写真
7	RD193	黒土	スクレイパー		75.5	48.6	13.4	41.6	頁岩	29	90
8	RD193	同上	二次加工のある割片		[31.8]	24.8	8.6	7.0	頁岩	29	90
9	RD193	黒土	二次加工のある割片		40.4	40.8	12.2	23.6	頁岩	29	90
10	RD193	黒土	二次加工のある割片		33.1	[50.0]	12.7	13.3	頁岩	29	90
11	RD193	黒土	二次加工のある割片		91.7	60.5	18.6	116.5	頁岩	30	90
12	RD193	黒土	鎌形		113.9	76.2	49.2	261.6	頁岩	30	90
43	RA93	RP15	破石	I	9	[100]	3.7	600	安山岩	40	87
44	RA93	粘埃	破石	I	14.8	11.4	7	896	燧石	40	87
45	RA93	RP21	破石	II	[13.8]	12	3.4	507	砂岩	40	87
46	RA93	RP14	破石	II	17.7	8.7	2.5	539	砂岩	40	87
62	RA94	RP51	凹石	III	19.9	9	5.9	1892	安山岩	44	87
63	RA94	同上一括	凹石	III	17.9	12.1	3.8	1183	安山岩	44	87
64	RA94	粘埃	凹石	IV	[13.7]	6.9	6.1	830	石英	44	88
65	RA94	RP62	破石	I	14.9	5.7	4.9	634	凝灰岩	44	87
66	RA94	RP16	凹石	III	9.5	7.9	5.6	454	安山岩	44	88
67	RA94	同上一括	破石	III	2.3	[3.4]	2.7	233	?	44	87
83	RA98	RP51	破石	I	[12.4]	6.7	3.5	526	頁岩	49	88
135	RA99	RP16	磨石		15.4	9.5	5.1	1291	凝灰岩	60	88
144	RA101	RP60	磨石	II	8.5	7.6	6.1	319	安山岩	64	88
153	RA105	RP27	凹石	III	14.5	6.3	3	304	砂岩	71	88
172	RA108	RP2	破石	II	15.6	12.9	9.9	2240	砂岩	78	88
200	RA109	RP70	破石	I	[17.0]	8.2	4.3	315	凝灰岩	84	88
201	RA109	RP64	磨石・凹石	V	21.2	14.7	9.2	3131	凝灰岩	84	88
202	RA109	RP67	凹石	III	17.3	11.4	5.7	1642	安山岩	84	88
209	RA121	RP2	凹石	VI	[13.2]	18.6	7.5	2041	安山岩	87	90
222	RA126	RP9	磨石	I	11.1	9.6	5.6	776	安山岩	93	90
266	RA50	RP29	破石	I	9.2	6.6	5.3	480	石英	100	87
267	RA50	RP65	磨石	II	11.9	5.8	5.0	535	凝灰岩	100	87
268	RA50	RP156	磨石	V	16.4	13.4	8.8	2417	安山岩	100	87
267	RA51	RP17	凹石	III	10.7	7.35	4.4	385	砂岩	103	87

第29表 本宮熊堂B遺跡觀察表 (27) 石礎

調査番号	遺構名	出土層位	産別	分類	長さ	幅	厚さ	重量	石材	面積	存数
330	RA54	RP132	円石	Ⅱ	30.5	22.5	13	7800	安山岩	108	87
357	RA10	RP88	礎石	I	113.71	8.8	6.81	781	安山岩	113	88
358	RA10	RP105	礎石	I	17.3	7.1	4.6	783	安山岩	113	88
359	RA10	RP51	礎石	Ⅱ	16.1	8.9	8.2	1462	燧石	113	88
380	RA11	RP15	礎石	Ⅱ	15.9	9.3	5.5	636	安山岩	118	89
381	RA11	RP51	礎石	I	10	7.3	5.7	435	安山岩	118	89
382	RA11	RP42	礎石・円石	Ⅲ	22.1	25.5	14.1	5756	安山岩	118	89
393	RA12	RP28	礎石	Ⅱ	16.6	10.3	4.9	1322	安山岩	121	89
394	RA12	RP27	円石	Ⅲ	15.7	7.1	6.3	1144	安山岩	121	89
427	RA14	RP17	礎石	Ⅱ	9.7	7.6	5.4	533	安山岩	127	89
469	RA15	RP17	礎石	Ⅱ	8.7	7.4	5.4	483	燧石	132	89
470	RA15	RP44	円石	Ⅲ	10	4.7	2.2	119	安山岩	132	89
471	RA15	RP00	礎石	Ⅱ	13.3	9.7	4.2	692	安山岩	132	89
472	RA15	RP18(1)	円石	Ⅲ	9.7	7.1	4.8	472	燧石	132	89
473	RA15	RP39	円石	Ⅲ	9.9	10	8.1	1066	安山岩	132	89
496	RA16	RP1	礎石	Ⅱ	15	9	6.1	1022	安山岩	135	89
522	RA19	RP56	礎石	Ⅱ	9.4	6.7	3.8	352	燧石	139	90
523	RA19	RP46	礎石	I	[11.0]	8.7	4.9	508	石英	139	90
504	RA19	RP79	礎石	Ⅲ	[32.7]	[18.8]	[9.5]	5625	燧石	139	90
561	RA129	RP5	礎石	Ⅱ	11.9	8	6.9	841	燧石	145	90

第30表 本宮熊堂B遺物観察表(28)

鉄製品

掲載番号	器種	遺構名	層位等	残存部位	法 量 (cm)			備 考	図版	写真
					長さ	幅	厚さ			
42	刀子	RA93	床面	刀身欠損	9.4	1.9	0.6	本室部残存。	40	91
82	釘	RA096	礎土	不明	7.4	0.8	0.7		49	91
282	刀子	RA50	床面	ほぼ完形	9.6	1.4	0.5		100	91
203	鋸片	RA50	RP2	完形	13.2	16.9	2.1		100	91
254	鉄鏃	RA50	礎土	鏃身欠損	5.4	1.9	0.6		100	91
286	鉄鏃中	RA51	礎上	軸部欠損	11.8	4.9	4.9		103	91
328	鉄鏃	RA51	RP1	ほぼ完形	9.6	2.7	0.6		108	91
329	鏃状	RA54	礎上	不明	2.7	2.3	0.3		106	-
306	刀子	RA110	礎上	鏃部欠損	7.6	1.4	0.3		113	91
392	鉄鏃中	RA51	能床	鏃部欠損	12.6	6.7	6.7		121	91
426	刀子	RA114	RP1	両端欠損	11.0	1.3	0.4		127	91
467	鏃状	RA115	RP1	不明	9.3	0.6	0.5		132	91
488	鏃状	RA115	RP2	不明	5.7	3.1	0.9		132	91
617	刀子	RA130	RP3	両端欠損	11.3	1.5	0.3	器物付着?	156	91
618	不明	RA130	床面	刀身部	14.3	1.3	0.7		156	91
619	刀子	RA130	RP7	刀身部欠損	15.2	1.4	0.3		156	91
620	鏃	RA130	RP84	刃部	18.2	8.1	1.6		156	91
621	鏃	RA130	RP6	完形	13.1	9.3	0.8		156	91
622	釘	RA130	RP1	完形	13.4	0.5	0.6		156	91
623	釘	RA130	床面	ほぼ完形	11.4	0.6	0.5		156	91

土製品

掲載番号	遺構名	層位等	種 別	長さ	幅	厚さ	備 考	図版	写真
13	RD193	RP26	土偶	3.2	5.4	4.9	表裏面共に沈澱・ミガキが施されている。	30	86
75	RA95	RP1	土製鉄鏃中	5.3	5.3	2.2		46	90
122	RA98	貼床	勾玉	3.6	-	1.4	表面は消色が激しいが一部ミガキが残る。	57	90
205	RA50	RP81	土製鉄鏃中	5.1	5.2	1.9	外面にミガキあり。	100	90

鉄滓

No.	分 類	遺構名	層位等	重量	備 考
6	鍛冶流鉄滓	RA51	礎土	41.2	
1	鍛冶滓鍛冶滓	RA54	床面	353.2	成分分析
2	鍛冶滓含鉄鉄滓	RA51	貼床	212.8	
3	鍛冶滓鉄塊系遺物	RA54	礎土	77.4	
4	鍛冶流鉄滓	RA54	床面	74.8	
5	鍛冶流鉄滓	RA54	礎土	40.4	
6	鉋形鍛冶滓	RA54	貼床	120.3	成分分析
9	鍛冶滓含鉄鉄滓	RA54	床面	118.6	
7	鍛冶滓鉄塊系遺物	RA111	床面	110.2	

自然科学分析

Ⅷ 岩手県本宮熊堂A遺跡の自然科学分析

株式会社古環境研究所

1 本宮熊堂A遺跡の火山灰分析

(1) はじめに

岩手県盛岡市とその周辺には、岩手、秋田駒ヶ岳、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、御岳、三瓶、阿蘇、始良など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、火山灰層が認められた本宮熊堂A遺跡においても、発掘調査担当者により採取された試料を対象として、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行って、指標テフラの同定を行うことになった。

(2) 火山ガラス比分析

1) 分析方法

試料を対象として、火山ガラス比分析を行い、火山ガラスの色調・形態別比率を求めた。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。

2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図1に、その内訳を表1に示す。試料1層上面には、少量の火山ガラスが含まれている（5.6%）。この試料に含まれる火山ガラスは、量が多い順に分厚い中間型（2.0%）、繊維束状に発泡した軽石型（1.6%）、透明のバブル型（1.2%）、スポンジ状に発泡した軽石型（0.8%）である。

(3) 屈折率測定

1) 測定方法

3層に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（MAIOT）により、屈折率（ n ）の測定を行った。

2) 測定結果

屈折率測定結果と仙台市域に分布する代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率（ n ）を表2に示す。試料1層上面に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.497-1.509のrangeに入る。

(4) 火山ガラスの主成分化学組成分析

1) 分析方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるために、試料に含まれる火山ガラスについて波長分散型エレクトロンプローブX線マイクロアナライザー（以下、WDS型EPMAとする）により主成分化学組成分析を行った。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子JXA8600MWDS型EPMAである。加速電圧15kV、照射電流0.01 μ A、ビーム径5 μ mの条件で行った。補正法はOxide ZAF法を用いた。

2) 分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を表3に示す。さらにこの表には、本遺跡とその周辺に分布するおもな指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分化学組成を示した。試料1層上面には、主成分化学組成上、3種類の火山ガラスが含まれている。

(5) 考 察

分析対象となった試料には、火山ガラスの形態や屈折率、さらに主成分化学組成から、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田a火山灰（To-a、町田ほか、1981）に由来する火山ガラスが含まれていると考えられる。ただし、本試料に含まれる火山ガラスは、その屈折率のrangeがとくに広く、化学組成上複数の種類の火山ガラスが含まれていることから、テフラの一次堆積層の可能性は低いと思われる。テフラ層の一次堆積層の認定には、野外での層相の観察が不可欠である。本試料が採取された層位については、To-aかそれより上位にある可能性が高いと思われる。

なお、本試料に含まれる火山ガラスの中には、主成分化学組成上の特徴から、約2.4~2.5万年前*1に南九州地方の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995）に由来する火山ガラスの混在している可能性が考えられる。この火山ガラスの混入が、屈折率のrangeを低い方に拡大させているのかも知れない。

(6) ま と め

本宮熊堂A遺跡において採取された試料を対象に、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。その結果、十和田a火山灰（To-a、915年）に由来する可能性が高い火山ガラスを検出することができた。

*1 放射性炭素 (^{14}C) 年代、暦年較正年代については、ATが約2.6~2.9万年前と考えられている（町田・新井、2003）。

文献

- 青木かおり・新井房夫（2000）三陸沖海底コアKH94-3、LM-8の後期更新世テフラ層序。第四紀研究。39, p.107-120。
池田見子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州、始良カルデラ起源の大降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による ^{14}C 年代。第四紀研究。34, p.377-379。
町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義。科学。46, p.339-347。
町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会、276p。
町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会、336p。

町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p.562-569.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰(AT)の¹⁴C年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデム加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代. 地質雑誌, 99, p.787-798.

表1 火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
1層上面	3	0	0	5	2	4	236	250

数字は粒子数. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, cl:透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:繊維束状.

表2 屈折率測定結果

遺跡(テフラ)	試料	火山ガラスの屈折率(n)
本宮熊堂A	1層上面	1.497-1.508
十和田 a (To-a, AD915)		1.496-1.508(1.500-1.508)
十和田中掾 (To-Cu, 5.5k.yBP)		1.508-1.512
肘折尾花沢 (Hj-O, 10k.yBP)		1.499-1.504
十和田八戸 (To-H, 12-13k.yBP)		1.505-1.509
浅間草津 (As-K, 13-14k.yBP)		1.502-1.504
始良Tn (AT, 24-25k.yBP)		1.499-1.501
鳴子柳沢 (Nr-Y, 41-63ka)		1.500-1.503
鳴子荷坂 (Nr-N, 90ka)		1.500-1.502
肘折北原 (Hj-Kth, 90-100ka)		1.499-1.502
洞爺 (Toya, 112-115ka)		1.494-1.498

屈折率測定は, 温度変化型屈折率測定装置 (MA10T) による. 指標テフラのデータは, 町田・新井 (1992, 2003) による. k.yBP: 1,000年前 (¹⁴C年代). ka: 1,000年前. To-aの()の値は, 岩手・秋田地域での一般的な屈折率.

表3 試料と代表的指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分化学組成分析結果

試料/テフラ	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Total	n
1層上面	77.81	0.28	12.70	1.68	0.15	0.33	1.90	3.73	1.40	0.03	100.01	4
	0.50	0.09	0.23	0.25	0.06	0.16	0.12	0.08	0.04	0.04		
	78.80	0.13	12.06	1.21	0.03	0.11	1.10	2.94	3.60	0.02	100.00	3
	0.55	0.02	0.13	0.08	0.04	0.04	0.08	0.48	0.27	0.02		
	78.69	0.15	11.99	1.78	0.09	0.16	1.50	3.25	2.33	0.06	100.00	3
0.81	0.11	0.40	0.32	0.08	0.06	0.10	0.31	0.07	0.03			
十和田 a (To-a)	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34	0.06	100.01	-
十和田八戸 (To-H)	78.30	0.29	12.67	1.52	0.06	0.29	1.73	3.84	1.30	-	100.00	15
浅間草津 (As-K)	78.61	0.29	11.97	1.37	0.06	0.24	1.26	3.19	2.97	-	99.96	-
始良Tn (AT)	78.83	0.12	12.13	1.10	0.04	0.11	0.98	3.33	3.36	-	100.00	128
鳴子柳沢 (Nr-Y)	79.67	0.16	11.94	1.30	0.06	0.17	1.31	3.62	1.78	-	100.01	40
鳴子荷坂 (Nr-N)	79.28	0.11	12.09	1.23	0.11	0.11	1.05	4.18	1.83	0.01	100.00	-
肘折北原 (Hj-Kth)	78.63	0.09	12.26	0.70	0.08	0.07	0.68	3.58	3.87	0.03	99.99	-
洞爺 (Toya)	79.37	0.06	12.48	0.92	0.08	0.03	0.37	3.75	2.94	-	100.00	-

n : 分析ポイント数。上段が平均値, 下段は標準偏差。指標テフラのデータは, 青木・新井 (2000) および八木 (未公表資料) による。

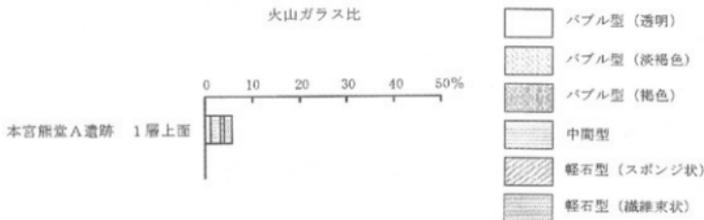


図1 火山ガラス比ダイアグラム

2 本宮熊堂A遺跡における植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

(2) 試料

分析試料は、縄文時代晩期～古代とされる旧河道のBベルトから採取された8点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヒエ属 (ヒエ) の換算係数は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、チマキザサ節・チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(4) 分析結果

1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)、Bタイプ

〔イネ科-タケ亜科〕

チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、莖部起源、未分類等

2) 植物珪酸体の検出状況

1 g層から4 a層までの層準について分析を行った。その結果、最下位の4 a層 (上、下) では、ヨシ属が比較的多く検出され、ヒエ属型、キビ族型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども検出された。また、同層下部ではヨシ属などの莖部で形成される植物珪酸体が多量に検出された。3 g層ではヨシ属が大幅に増加しており、ヒエ属型は見られなくなっている。3 c層から2 d層にかけては、ススキ属型が出現しており、ヨシ属はやや減少している。1 m層および1 g層ではヨシ属が大幅に減少している。おもな分類群の推定生産量によると、4 a層から2 d層にかけてはヨシ属が優勢であり、とくに3 g層ではヨシ属が圧倒的に卓越している。

(5) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

縄文時代晩期とされる旧河道の埋土底部 (4 a層) の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはヒエ属、キビ族、ウシクサ族、およびササ属などが生育していたと推定される。

ヒエ属型にはイヌビエなどの野生種の他に栽培種のヒエが含まれるが、植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である (杉山ほか, 1988)。また、密度も700~1,400個/gと低いことから、ここでヒエが栽培されていた可能性は低いと考えられる。なお、青森県三内丸山遺跡 (縄文時代前期) ではイヌビエが食糧として利用されていた可能性が指摘されており (藤原, 1998)、当時の生業を考える上で興味深い。

古代とされる3 g層から2 d層にかけては、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であり、とくに3 g層ではヨシ属が繁茂するような状況であったと考えられる。その後、1 m層および1 g層の時期には、堆積環境の乾燥化など何らかの原因でヨシ属が大幅に減少し、周辺にはススキ属やチガヤ属、キビ族、ササ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥したところが分布していたと推定される。

文献

- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用-古代農耕追跡のための基礎資料として-。考古学と自然科学, 20, p.81-92.
 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p.189-213.
 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
 藤原宏志 (1998) 稲作の起源を探る。岩波新書。

表1 岩手県、本宮地区A遺跡における植物体微体分析結果

分類群	学名	旧河道Bベルト							
		1g	1a	2d	3a	3c	3g	4a上	4a下
イネ科									
Gramineae (Grasses)									
ヒコ属型	<i>Echinochloa</i> type							14	7
キビ族型	Panicone type	22	14	36	29	58	15	34	15
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	22	14	129	66	80	253	61	58
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	36	7	21	7	29		7	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	73	29	36	15	72	30	55	29
Bタイプ	B type		7						
タケ亜科									
Bambusoideae (Bamboos)									
アマキザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	7	29	7	7	7		14	7
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinon</i>	29	14	7	15		15	55	37
未分類等	Others	7	29	14	7	14	22	27	22
その他のイネ科									
Others									
表皮毛起源	Beak hair origin	29	14	14	29	36	15	14	22
棒状微体	Rod-shaped	218	383	358	612	672	537	293	497
茎部起源	Stem origin		7	7		43	22	7	534
未分類等	Others	262	412	473	501	672	611	569	651
(海陸骨計)	Sponge				7	22	7		7
植物体微体総数	Total	706	962	1103	1290	1684	1521	1138	1679
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出									
ヒコ属型	<i>Echinochloa</i> type							1.14	0.61
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.38	0.91	8.14	4.19	5.02	15.90	3.87	3.69
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.45	0.09	0.27	0.09	0.36		0.08	
アマキザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05	0.22	0.05	0.06	0.05		0.10	0.05
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinon</i>	0.09	0.04	0.02	0.04		0.04	0.16	0.11
タケ亜科の比率 (%)									
アマキザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	38	83	71	56	100		38	33
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinon</i>	62	17	29	44		100	62	67

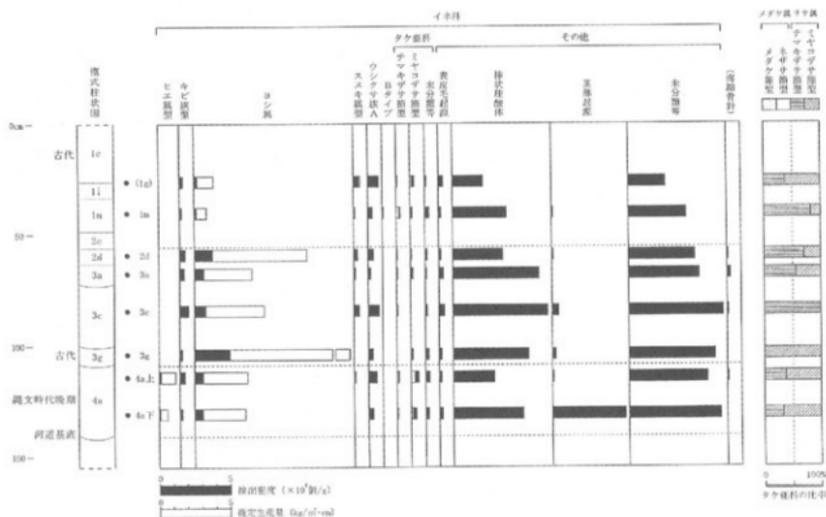


図1 本宮地区A遺跡、旧河道Bベルトにおける植物体微体分析結果



ヒエ属型
4a上



ヒエ属型
4a下



キビ族型
1g



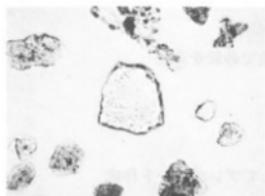
ヨシ属
3g



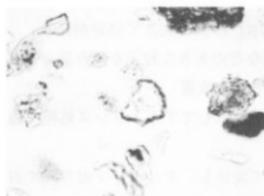
ヨシ属
4a上



ススキ属型
3c



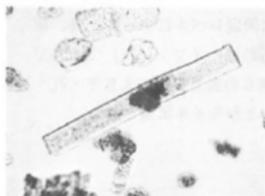
チマキザサ節型
1m



ミヤコザサ節型
4a上



表皮毛起源
3a



棒状硅酸体
3c



イネ科の茎部起源
4a下



海绵骨針
3a

植物硅酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

————— 50 μm

3 本宮熊堂A遺跡における花粉分析

(1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 試料

分析試料は、縄文時代晩期～古代とされる旧河道のBベルトにおいて、1g層(黒褐色粘土)、1m層(褐灰色シルト)、2d層(黄灰色粘土)、3a層(黒褐色シルト)、3c層(黒褐色シルト)、3g層(黒褐色シルト)、4a層上位(暗オリーブ褐色シルト)、4a層下位(暗オリーブ褐色シルト)の上下から採取された8点である。

(3) 方法

花粉粒の分離抽出は、中村(1973)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%りん酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

(4) 結果

1) 分類群

産出した分類群は、樹木花粉27、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉23、シダ植物胞子2形態の計55である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。主要な分類群は写真に示した。なお、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記す。

[樹木花粉]

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシダ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ

属—ムクノキ、キハダ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、シナノキ属、トネリコ属
〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科—ヒユ科、コウホネ属、キンボウゲ属、アブラナ科、ワレモコウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より4帯の花粉分帯を行った。

1) I帯 (3g層、4a層上位、4a層下位)

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が優占し、スギ、ハンノキ属などが伴われる。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが比較的多く産出する。上位ではガマ属—ミクリ属が産出する。

2) II帯 (3c層)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が下位の分帯より減少し、スギ、ハンノキ属などが伴われる。草本花粉では、ヨモギ属が増加し、ガマ属—ミクリ属、イネ科、カヤツリグサ科などが伴われる。

3) III帯 (2d層、3a層)

樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高くなる。樹木花粉では、クマシデ属—アサダ、ブナ属が下位のより増加し、スギ、コナラ属コナラ亜属などとともに優占する。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科などが比較的多く、ガマ属—ミクリ属は減少する。

4) IV帯 (1g層、1m層)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高くなる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、ブナ属などが低率で出現する。草本花粉では、ヨモギ属を上に、カヤツリグサ科、イネ科などが伴われる。

(5) 花粉分析から推定される植生と環境

花粉分帯にそって、植生と環境の復元と変遷の推定を行う。

1) I帯期 (3g層、4a層上位、4a層下位)

コナラ属コナラ亜属が優占するが、生態上からミズナラと考えられ、周囲はミズナラ林を主とする落葉広葉樹林が分布していた。また、近隣にはスギ林が分布していた。堆積地周辺はハンノキ属やイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の生育する沼沢地や湿原の環境であったと推定される。上位ではガマ属—ミクリ属もやや多く生育し、浅水域から湿地の環境がやや拡大した。

2) II帯期 (3c層)

周囲の落葉広葉樹林が縮小または後退し、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科、ガマ属—ミクリ属の生育するやや乾燥した湿地から沼沢地の環境が拡大し分布していたと推定される。

3) III帯期 (2d層、3a層)

周囲はイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が生育し、湿地から沼沢地の環境であるが、クマシデ属-アサダ、ブナ属、スギの樹木がやや増加し、温帯中間林要素あるいは二次林要素の可能性もある。

4) IV帯期 (1 g層, 1 m層)

ヨモギ属を主に、カヤツリグサ科、イネ科の草本が増加し、これら草本の繁茂する沼沢地が拡大した。上部ではイネ属型が伴われ、周辺で水田が営まれていたと推定される。

(6) ま と め

本宮熊堂A遺跡の旧河道Bベルトにおいて花粉分析を行い、植生と環境について検討を行った。その結果、下位より3 g層・4 a層の時期 (I帯期) は周囲にミズナラ林を主とする落葉広葉樹林が分布し、堆積地周辺はハンノキ属やイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が生育する沼沢地や湿原の環境であった。3 c層の時期 (II帯期) では落葉広葉樹林が縮小し、草本の生育するやや乾燥した湿地から沼沢地が拡大した。クマシデ属-アサダ、ブナ属、スギの樹木がやや増加する2 d層・3 a層の時期 (III帯期) を経て、草本の繁茂する沼沢地の卓越する1 g層・1 m層の時期 (IV帯期) へと変遷したことが推定された。

参考文献

- 中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.
金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
高倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
中村純 (1980) 日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
辻誠一郎 (1984) 栃木県市部、二ノ宮町における立川期の植物遺体群集, 第四紀研究, 23, p.21-29
安田喜憲・三好教夫 (1998) 図説日本列島植生史, 朝倉書店

表1 本宮熊堂A遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	計列値(個/1cm ³)								
		lg	lm	2d	2a	2c	2e	4a+b	4a+d	
Aheral pollen										
<i>Alnus</i>	樹木花粉		1							
<i>Zaiga</i>	ツグミ		2							
<i>Pinus subgen. Diploxyon</i>	マツ属深葉型常葉種	1	3	2	1	1	2	2	3	
<i>Pinus subgen. Haploxyon</i>	マツ属浅葉型常葉種				1			2	1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1	5	41	22	33	25	24	33	
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cepuaceae</i>	イタイイタイノミカヤ科・ヒノキ科					3	5	2	4	
<i>Salu</i>	ヤナギ属		1	3	1				1	
<i>Ulmus</i>	ウルミ	1	3	3	5	1	2	8	6	
<i>Parocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	1	4	5	3	4	4	5		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	3	11	7	1	12	20	20	19	
<i>Betula</i>	カバノキ属		4	5	4	5	1	3	3	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	1						1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシラギ属・アサギ	1	1	22	47	6	9	9	7	
<i>Castanea crenata</i>	クリ	7	5	4	1		2			
<i>Castanopsis</i>	シイ属	1	1			1	1	1	1	
<i>Fagus</i>	ブナ属	4	10	25	26	9	6	13	6	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	9	28	46	40	42	99	137	155	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1	2	4	4		3	5	7	
<i>Libania-Zelkova serrata</i>	ニレ属・ケヤキ	2	3	5	12	7	11	9	5	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属・ムクノキ			5	1	4		6		
<i>Phellodendron</i>	キハダ属								1	
<i>Ilex</i>	イチノミ属	1								
<i>Colobanaceae</i>	ニシキヤ科			1						
<i>Aster</i>	カスガ属		3	1	1					
<i>Asteris tuberosa</i>	トチノキ	5	8	5	1	8	1	2	4	
<i>Tilia</i>	シナノキ属			1	1					
<i>Prunus</i>	トネリコ属		2	6	1	2	5	3		
Aheral・Nonheral pollen										
<i>Moraceae-Urticaceae</i>	クワ科・イラクサ科	3	3	6	3			2	2	
<i>Leguminosae</i>	マメ科	1	1	1			1	1	1	
<i>Amelanchier</i>	ウツコ科	1							1	
Nonheral pollen										
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ科・ミドリ属		2	4	9	35	22			
<i>Alisma</i>	サジメノカタガシ	1	1	3	1					
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属			1						
<i>Callitriche parvifolia</i>	マルバノオモダカ		1							
<i>Grassinae</i>	イネ科	56	41	57	81	37	30	31	52	
<i>Oryza type</i>	イネ属類	4	1				2			
<i>Cyperaceae</i>	カキワリダマ科	16	105	26	51	28	29	28	24	
<i>Eriocaulon</i>	ホシグサ属		1							
<i>Polygonum</i>	タデ属		2	1						
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ類								1	
<i>Phlox</i>	ギンギン属					1				
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	アカザ科・ヒユ科		1			1				
<i>Nyctaginia</i>	ヨウホホ属					1				
<i>Ranunculaceae</i>	キンポウゲ属			1	1	1				
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科	1								
<i>Sonchaceae</i>	ソレノコ属	1								
<i>Hydrocotylaceae</i>	サドノヂヤウ科	1								
<i>Apididae</i>	セリ属科	5	5	1	1	1	2		3	
<i>Labiatae</i>	シソ科					1				
<i>Valerianaceae</i>	オミナエシ科								2	
<i>Labiatae</i>	タンポポ属科	4	4		1	1				
<i>Asteraceae</i>	キク属科	5	2	2	3	5	1			
<i>Asteraceae</i>	ヨモギ属	113	69	46	98	99	50	22	41	
Fern spore										
<i>Mosslike type spore</i>	肝葉類胞子	33	90	11	8	24	10	8	6	
<i>Trilete type spore</i>	三葉類胞子	8	24	6	7	9	5	1		
Aheral pollen										
	樹木花粉	38	95	211	178	176	193	250	258	
Aheral・Nonheral pollen										
	樹木・草木花粉	3	5	6	4	6	1	5	3	
Nonheral pollen										
	草木花粉	237	289	141	192	211	139	84	122	
Total pollen	花粉総数	240	365	358	374	327	333	337	382	
Pollen suspension of 10ml³	試料10ml ³ 中の花粉濃度	1.0	4.7	3.5	2.8	5.6	5.8	2.6	1.9	
		$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	
Unknown pollen	未同定花粉	7	11	6	5	1	6	3	12	
Fern spore										
	シダ植物胞子	41	132	17	15	23	15	9	5	
Microbial spore	菌糸胞子	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Digestion residue	明らかでない残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	

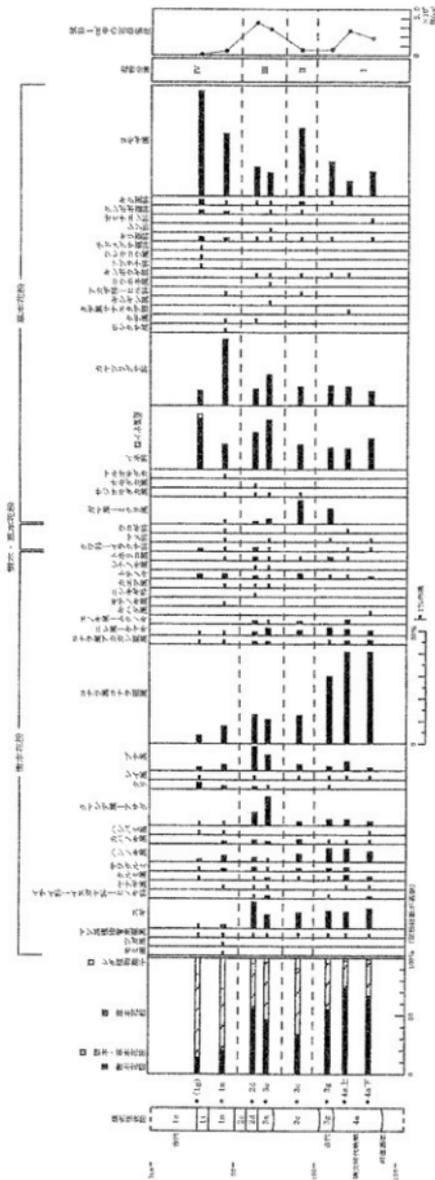
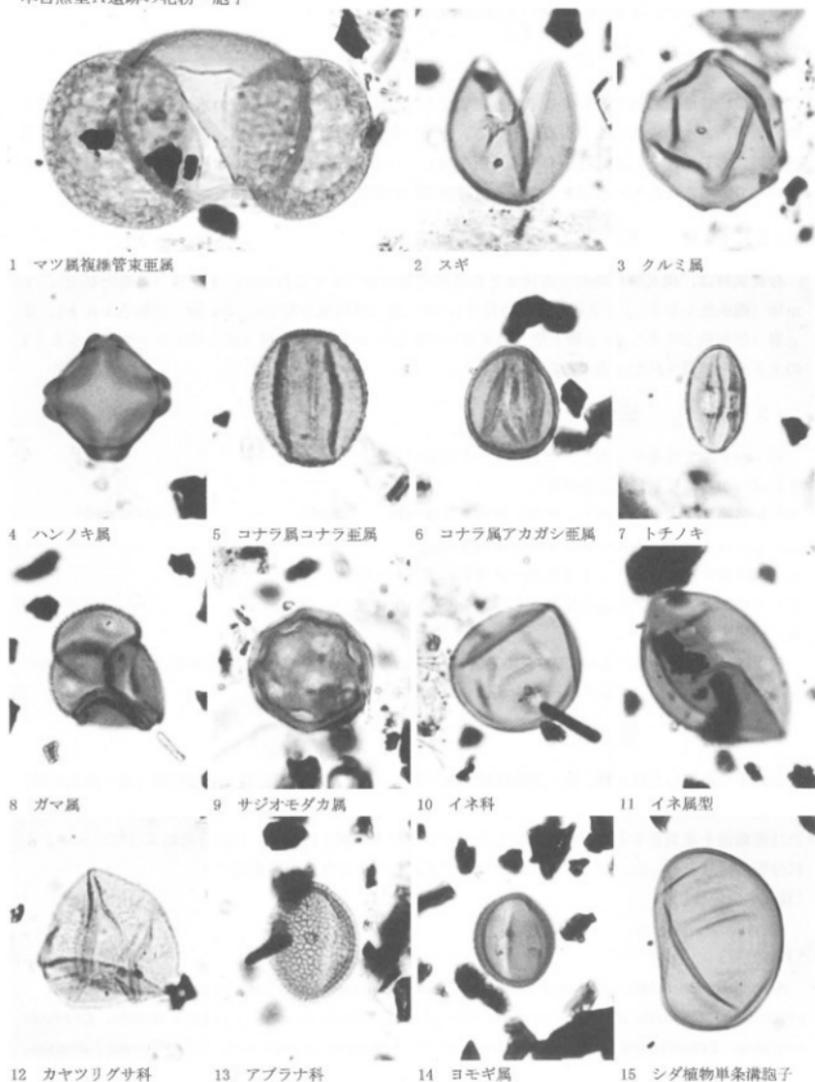


図1 本宮熊鷹A集約の旧河津川ベルトにおける花開ダイアグラム

本宮熊堂A遺跡の花粉・胞子



—10 μ m

4 本宮熊堂A遺跡における珪藻分析

(1) はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

(2) 試料

分析試料は、縄文時代晩期～古代とされる旧河道のBベルトにおいて、1g層（黒褐色粘土）、1m層（褐灰色シルト）、2d層（黄灰色粘土）、3a層（黒褐色シルト）、3c層（黒褐色シルト）、3g層（黒褐色シルト）、4a層上位（暗オリーブ褐色シルト）、4a層下位（暗オリーブ褐色シルト）の上下から採取された8点である。

(3) 方法

以下の手順で珪藻を抽出し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1gを秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

(4) 結果

試料から出現した珪藻は、中-真塩性種（汽-海水生種）4分類群、貧-中塩性種（淡-汽水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）116分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表1に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図1に示す。珪藻分析結果は図に示すように分帯の区分を行った。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔貧-中塩性種〕

Rhopalodia gibberula

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata, *Aulacoseira ambigua*, *Aulacoseira crenulata*, *Aulacoseira distans*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella cistula*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella sinuata*, *Cymbella tumida*, *Cymbella turgidula*, *Eunotia minor*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema acuminatum*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema spp.*, *Hantzschia amphioxys*, *Meridion circulare* v. *constrictum*, *Synedra ulna*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

- 1) 旧河道bベルト（1g層、1m層、2d層、3a層、3c層、3g層、4a層上位、4a層下位）

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より3帯の珪藻分帯を行った。

・Ⅰ帯（4 a層上位、4 a層下位）

検出された珪藻は、ほとんど貧塩性種（淡水生種）の止水性種で占められる。*Aulacoseira crenulata*、*Aulacoseira distans*ではほぼ2分され、止水性種で沼沢湿地付着性環境指標種群の*Eunotia minor*、流水性種で中～下流水性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*などが伴われる。

・Ⅱ帯（2 d層、3 a層、3 c層、3 g層）

流水性種および流水不定性種の占める割合が激増する。下位で優占した*Aulacoseira crenulata*、*Aulacoseira distans*が消失し、止水性種で沼沢湿地付着性環境指標種群の*Tabellaria fenestrata-flocculosa*を主に、*Eunotia minor*、*Aulacoseira ambigua*が大半を占め、流水性種の*Gomphonema parvulum*、流水不定性種の*Fragilaria capucina*などが伴われる。

・Ⅲ帯（1 g層、1 m層）

流水性種の占める割合が止水性種とほぼ同じになり、中～下流性河川環境指標種群でもある*Cymbella turgidula*、*Cymbella sinuata*、沼沢湿地付着性環境指標種群の*Cocconeis placentula*などが比較的多くなる。止水性種で沼沢湿地付着性環境指標種群の*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、*Eunotia minor*などは半減する。

（5）珪藻分析から推定される堆積環境

珪藻分帯に沿って、下位より堆積環境を推定する。

1) Ⅰ帯期（4 a層上位、4 a層下位）

止水性種で占められ、やや深い池沼の環境が示唆される。河川または河辺の水の淀み停滞したやや深い水域が推定される。

2) Ⅱ帯期（2 d層、3 a層、3 c層、3 g層）

沼沢湿地付着性環境指標種群の止水性種が優占し、流水性種および流水不定性種が伴われる。やや流水の影響を受ける水生植物の生育する浅い池沼の環境が示唆される。河川の影響を受ける河辺の水生植物の繁茂する浅水域が推定される。

3) Ⅲ帯（1 g層、1 m層）

中～下流性河川環境指標種群を主とする流水性種に沼沢湿地付着性環境指標種群の止水性種が伴われる。浅い河川の間であるが、水生植物の生育する沼沢地が付随する。

（6）ま と め

本宮龍堂A遺跡の旧河道bベルトにおいて珪藻分析を行った結果、下部の4 a層上位・4 a層下位（Ⅰ帯）は、河辺のやや深い池沼、2 d層・3 a層・3 c層・3 g層（Ⅱ帯）は、やや河川の影響を受ける水生植物の生育する浅い沼沢地の環境、1 g層・1 m層（Ⅲ帯）は水生植物の生育する池沼の付随する浅い河川の間が推定され、上部に向かいやや深い池沼から浅い河川へと変遷したことが推定された。

参考文献

- Hustedt, F.(1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol. Suppl. 15, p.131-506.

- Patrick, R.eimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 614p.
- Lowe, R.L.(1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p. National Environmental Reserch.Center.
- Patrick, R.eimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.
- Asai, K.&Watanabe, T.(1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom, 10, p.35-47.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.
- 安藤・男 (1990) 淡水珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.

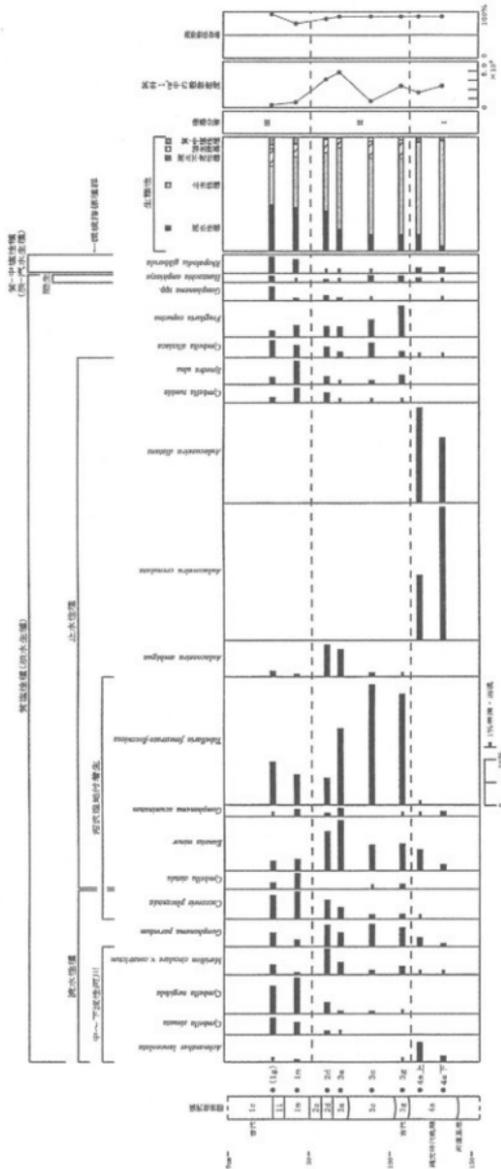


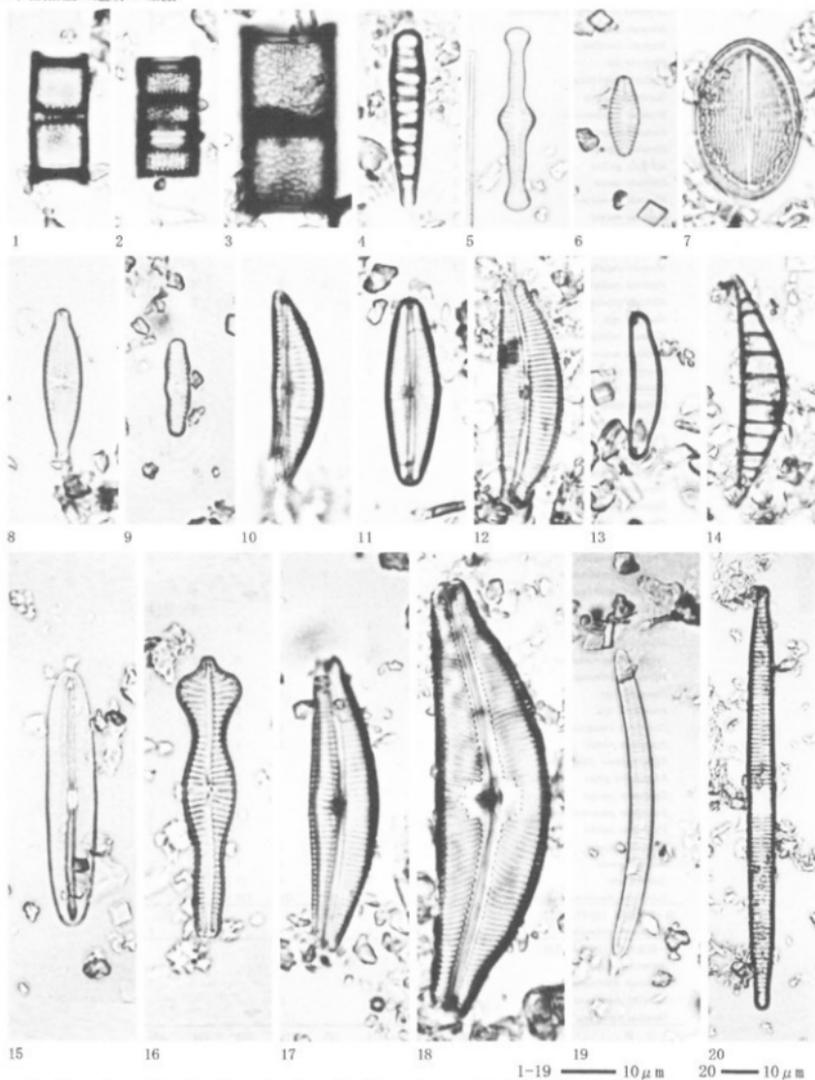
図1 本宮熊堂A遺跡の田町遺址へベルトにおける土層連続ダイアグラム

表1 本宮熊堂A遺跡における珪藻分析結果

分類群	旧円遺ヒールト							
	1g	1p	2d	3p	3c	3g	4a上	4a下
異造性種 (淡水産)								
<i>Achnanthes infata</i>		1						
<i>Achnanthes lanceolata</i>	2	2				1	27	8
<i>Achnanthes</i> sp.								1
<i>Amphora capitata</i>		1	4	1	2	1	5	3
<i>Amphora moniana</i>	4	1						
<i>Asiatococconeis ambigua</i>	5	2	33	27	4	1		
<i>Asiatococconeis cuspidata</i>	8	3	2		1			
<i>Asiatococconeis cremulata</i>							91	200
<i>Asiatococconeis distans</i>							132	96
<i>Asiatococconeis granulata</i>	1							
<i>Asiatococconeis</i> spp.	7	1	1	5	1	1	3	
<i>Caloneis bacillans</i>								1
<i>Caloneis silicula</i>			1	1		1		
<i>Coroneis placensula</i>	22	24	19	11	4	6	3	
<i>Cyclotella</i> spp.	1	1	1					
<i>Cymbella amphioxys</i>	1				1	1		
<i>Cymbella curvata</i>	6	14			1	5		
<i>Cymbella gracilis</i>	1		5		5	3		1
<i>Cymbella lanceolata</i>				1				
<i>Cymbella minus</i>	8			4				
<i>Cymbella naviculiformis</i>			2	2	2	2		1
<i>Cymbella silicica</i>	16	11	11	5	15	7	2	1
<i>Cymbella sinuata</i>	16	11	4	2				
<i>Cymbella subaequalis</i>	2	1	1	4	2	2		
<i>Cymbella tenuis</i>	5	13	10	1	1	1		
<i>Cymbella turpidula</i>	26	32	12	3	3	1		
<i>Diatoma ehrenbergii</i>			1		1	5	4	2
<i>Diatoma hyemale</i> v. <i>metodum</i>	3	2		1				
<i>Diploneis elliptica</i>							3	1
<i>Diploneis foenicis</i>	2	2		2			1	1
<i>Diploneis</i> spp.	2	1	3	5	1			
<i>Diploneis subovata</i>							1	
<i>Diploneis yutshisanensis</i>	2	1						
<i>Epithemia turpida</i>		2			1		3	
<i>Eisotia bilanaris</i>	1			3	2	5	1	
<i>Eisotia formica</i>						2		
<i>Eisotia minor</i>	9	10	41	50	27	31	29	8
<i>Eisotia pectinatis</i>		1	2			1		
<i>Eisotia praerupta</i>	1							
<i>Eisotia</i> sp.				4				
<i>Eisotia</i> spp.						2	2	1
<i>Fragilaria arvensis</i>	3	5						
<i>Fragilaria brevistriata</i>			4	10	3		1	
<i>Fragilaria capricornis</i>	6	10	11	10	18	36		
<i>Fragilaria coarctata</i> v. <i>venter</i>		1	2	1	2	1	3	5
<i>Fragilaria exigua</i>			1	10				
<i>Fragilaria pinnata</i>	1							
<i>Frustula rhomboidalis</i> v. <i>saucica</i>			1	1	2	2		
<i>Frustula vulgaris</i>	6	3	4	1	4	3	4	
<i>Gomphonema acuminatum</i>	2	6	3	8			1	3
<i>Gomphonema angustatum</i>				1				
<i>Gomphonema angustum</i>	3	5		4	2	3	7	
<i>Gomphonema olevis</i>	4	6						
<i>Gomphonema globiferum</i>			1	1	1	5		
<i>Gomphonema gracile</i>	1	2	1	1	2	1	1	1
<i>Gomphonema minutum</i>	4	6	5	2	3			
<i>Gomphonema parvum</i>	13	6	22	14	23	22	12	4
<i>Gomphonema sphaerophorum</i>					1		1	
<i>Gomphonema</i> spp.	13	2	5	3	2			2
<i>Gomphonema truncatum</i>	2	4	1	1		1		1
<i>Gyrodinium</i> spp.	1	6	3	2			2	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	6	1	3	1	7	7	6	1
<i>Meridion circulare</i>			6	6				

分類群	岩手遺跡							
	1g	1a	2d	3a	3c	3g	4a上	4a下
<i>Meridion circulare</i> v. <i>constrictum</i>	9	2	26	12	4	9	3	3
<i>Navicula americana</i>								1
<i>Navicula bacillum</i>							1	
<i>Navicula cari</i>							1	
<i>Navicula confervacea</i>	1							
<i>Navicula contenta</i>			1					
<i>Navicula cryptotenella</i>						1		
<i>Navicula cuspidata</i>		3						
<i>Navicula elgionensis</i>	2	1	1	1	1	1	6	3
<i>Navicula gallica</i>	4				2	7		
<i>Navicula ignota</i>	1					1		
<i>Navicula laevissima</i>	2			1	1	1	1	2
<i>Navicula mutica</i>	5	6	1				2	
<i>Navicula placenta</i>				1				
<i>Navicula pseudolanceolata</i>			1	3	6	2	1	
<i>Navicula pupula</i>	1		2			3	3	3
<i>Navicula radicum</i>			4	1	4	2	4	2
<i>Navicula rhychocephala</i>							3	
<i>Navicula</i> spp.						1		
<i>Navicula subrotulata</i>							1	2
<i>Navicula zaccorum</i>	1	5	1					
<i>Navicula tokoyonisi</i>		1	1	3				
<i>Navicula viridula</i> v. <i>ovellata</i>						2		
<i>Neidium affine</i>	1	1				1	5	
<i>Neidium ampliatum</i>							1	1
<i>Neidium bitricatum</i>				1				
<i>Neidium</i> sp.		1						
<i>Nitzschia brevissima</i>		1		3	1		1	
<i>Nitzschia frustulum</i>				1		3	2	
<i>Nitzschia palea</i>						1		
<i>Pinularia acrophoaria</i>					2	2	1	
<i>Pinularia borealis</i>	3	3		1	8	3		2
<i>Pinularia braueri</i>						1		
<i>Pinularia brevicostata</i>				2	2			
<i>Pinularia apiculata</i>							1	
<i>Pinularia gibba</i>		2		1			5	2
<i>Pinularia interrupta</i>			1	4		1		
<i>Pinularia karelica</i>							1	
<i>Pinularia micostarum</i>	5	5	4	3	2	3	2	1
<i>Pinularia schroederii</i>								1
<i>Pinularia</i> sp.					1		2	
<i>Pinularia</i> spp.						2		
<i>Pinularia subcapitata</i>					1	3	3	
<i>Pinularia viridis</i>	5	3	1	1	1	4	1	2
<i>Rhizocapsus abbreviata</i>	2	7	2					
<i>Rhopalodia gibba</i>	4	4	1				3	3
<i>Stauroneis acuta</i>							1	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>		1	1			1	1	3
<i>Stauroneis zaitiki</i>			1				2	1
<i>Sartrella angusta</i>					1	2		
<i>Sartrella ovata</i>					2	1	1	1
<i>Synedra alata</i>	7	21	8	2	4	11		
<i>Tabelleira fenestrato-flocculosa</i>	41	27	29	75	126	129	3	
第一中域性種 (汽水-汽水種)								
<i>Rhopalodia gibberula</i>	15	12	2	2	2		7	8
中-真塩性種 (汽水-海水種)								
<i>Aetococcus</i> sp.	1	1						
<i>Diploneis interrupta</i>	1							
<i>Navicula meniscusula</i>					2			
<i>Navicula peregrina</i>			1					
合計	324	307	314	325	316	361	416	388
未同定	137	31	13	17	17	23	19	4
残片	31	125	55	48	43	45	37	43
試料 1 cm ² 中の個体密度	2.8	6.0	3.1	2.9	7.1	2.4	1.7	2.4
	$\times 10^5$							
総形態保存率 (%)	93.7	73.0	85.6	87.7	88.6	89.5	92.2	90.1

本宮熊堂A遺跡の珪藻



1. *Aulacoseira ambigua* 2. *Aulacoseira distans* 3. *Aulacoseira crenulata* 4. *Meridion circulare* v. *constrictum*
 5. *Tabellaria fenestrata-flocculosa* 6. *Achnanthes lanceolata* 7. *Cocconeis placentula* 8. *Gomphonema parvulum*
 9. *Cymbella sinuata* 10. *Cymbella silesiaca* 11. *Cymbella subaequalis* 12. *Cymbella turgidulo* 13. *Eunotia minor*

5 本宮熊堂A遺跡における種実同定

(1) はじめに

植物の種子や果実是比较的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

(2) 試料

試料は、縄文時代晩期後葉とされる旧河道Aエリア4層の1点、旧河道Bエリア西側4層の1点、旧河道Bエリア中央3層の1点・3~4層の1点・4層の1点、旧河道Bエリア東側4層の1点、旧河道Bエリア東側4層の1点、旧河道Bエリア東側4層下位の1点、旧河道Cエリア西側4層の1点、旧河道Cエリア西側4層上位の1点、旧河道Cエリア中央5層の1点、旧河道Cエリア東側4層の1点、旧河道Cエリア西側付近3~4層の1点、旧河道Dエリア西側4層の1点、旧河道Dエリア中央4層の1点、旧河道Cエリア東端4層の1点の計16点である。(採集地点については第14~20図を参照。)

(3) 方法

以下の方法で、種実の抽出と同定を行った。

- 1) 試料200ccに水を加えて泥化
- 2) 攪拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 双眼実体顕微鏡で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(4) 結果

1) 分類群

樹木7、樹木・草本を含むもの1、草本2の計14分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

[樹木]

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核 クルミ科

茶褐色で円形~楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* 堅果片・殻斗・幼果 ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

殻斗は、腐食が進み鱗片の残りが悪いため属レベルの同定までである。

ハンノキ属 *Alnus* 毬果 カバノキ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する。やや未成熟である。

シキミ *Illicium anisatum* L. 種子 シキミ科

黄褐色で楕円形や狭楕円形を呈し、光沢はなく、やや扁平。背面には凹みがあり、へその一端が嘴状に突出し、卵形で斜切形。

コブシ *Magnolia borealis* Kubo 種子 モクレン科

種子は黒褐色で広卵形を呈す。断面は腎形。下端にへそがある。種皮は薄く堅い。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子・幼果・果実 トチノキ科

黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

幼果は茶褐色で倒卵形を呈す。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 種子 スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

[樹木・草本]

ウコギ科 Araliaceae 種子

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺臓側には浅い溝が2～3本走る。表面はざらつく。

[草本]

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平のものと三角形のものがある。

2) 種実群集の特徴

1) 旧河道Aエリア4層

コナラ属コナラ節2、シキミ5、トチノキ1、カヤツリグサ科2が検出された。

2) 旧河道Bエリア西側4層

コナラ属コナラ節3が検出された。

3) 旧河道Bエリア中央3層

検出されなかった。

4) 旧河道Bエリア中央3～4層

検出されなかった。

5) 旧河道Bエリア中央4層

コナラ属コナラ節18、コブシ1が検出された。

6) 旧河道Bエリア東側4層

シキミ19が検出された。

7) 旧河道Bエリア東側4層

コナラ属コナラ節1が検出された。

8) 旧河道Bエリア東側4層下位

コナラ属コナラ節5が検出された。

9) 旧河道Cエリア西側4層

コナラ属コナラ節1、ハンノキ属1が検出された。

10) 旧河道Cエリア西側4層上位

コナラ属コナラ節6が検出された。

- 11) 旧河道Cエリア中央5層
オニグルミ3が検出された。
- 12) 旧河道Cエリア東側4層
コナラ属コナラ節18、シキミ3が検出された。
- 13) 旧河道Cエリア西側付近3～4層
シキミ11が検出された。
- 14) 旧河道Dエリア西側4層
コナラ属コナラ節12、シキミ92が検出された。
- 15) 旧河道Dエリア中央4層
オニグルミ67、コナラ属コナラ節4、シキミ50、トチノキ51、ニワトコ1、ウコギ2、ホタルイ属1、カヤツリグサ科1が検出された。
- 16) 旧河道Cエリア東端4層の1点、
オニグルミ11、コナラ属コナラ節12、シキミ7、トチノキ38が検出された。

(5) 考 察

縄文時代晩期後葉の旧河道の4層を主とする種実遺体群集は、主要な森林構成要素として、コナラ属コナラ節の堅果と殻斗が同定された。生態的にみてミズナラと考えられ、周辺に地域的な基本的森林としてミズナラを主とする落葉広葉樹林の分布が示唆される。他にはオニグルミ、トチノキが多く、これらは河辺の肥沃な湿地に河辺林ないし湿地林を形成し、自然度の高い樹種である。旧河道にはこれらの森林が分布していたと推定される。シキミも多く、近隣にやや温暖な向陽地の分布が示唆される。ウコギ科は林縁に多く、河川際の林縁の環境を生育していたと考えられる。

以上のように、本宮熊堂A遺跡の縄文時代晩期後葉の旧河道の4層を主とする種実遺体群集は、落葉広葉樹林の照葉樹林要素がやや混在し、河辺林ないし湿地林がやや多い特徴を示す。

参考文献

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.
 笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類, 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
 南木睦彦 (1991) 栽培植物, 古墳時代の研究第4巻生産と流通 I, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.
 南木睦彦 (1992) 低湿地遺跡の種実, 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.18-22.
 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子, 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.
 吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.2-14.
 渡辺 誠 (1975) 縄文時代の植物食, 雄山閣, 187p.
 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種, 月刊考古学ジャーナルNo.409, ニューサイエンス社, p.15-19.

本宮熊堂A遺跡の種実



1 オニグルミ核



2 オニグルミ核

— 10.0mm



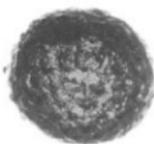
3 コナラ属コナラ節堅果

— 5.0mm



4 コナラ属コナラ節堅果

— 5.0mm



5 コナラ属コナラ節殻斗

— 5.0mm



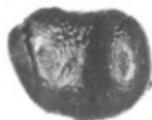
6 コナラ属コナラ節殻斗

— 5.0mm



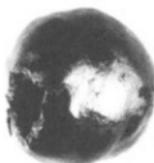
7 ミツバウツギ種子

— 1.0mm



8 コブシ種子

— 5.0mm



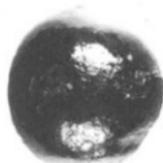
9 トチノキ種子

— 10.0mm



10 トチノキ幼果

— 10.0mm



11 トチノキ果実

— 10.0mm



12 ニワトコ核

— 0.5mm



13 ウコギ科種子



14 ウコギ科種子

— 0.5mm



15 ホタルイ属果実

— 0.5mm



16 カヤツリグサ科果実

— 0.5mm

6 本宮熊堂A遺跡における樹種同定

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、本宮熊堂A遺跡より出土した木材35点である。

(3) 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus* sect. *Gymnothyrsus* カバノキ科 図版1

横断面：小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の形質よりハンノキ属ハンノキ節に同定される。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木であり、材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2・3・4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図版5

横断面：小型の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して多数散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、導管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。繊維状仮道管がしばしば薄い横隔壁で仕切られている。放射組織は上下端のみときに直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅であるが2細胞幅のものが多い。

以上の形質よりモクレン属に同定される。モクレン属にはホノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。常緑または落葉の高木ないし低木である。

樹皮 bark

師部柔細胞、師部放射柔細胞が見られる。

以上の形質より、樹皮に同定される。

(5) 所 見

同定の結果、本宮熊堂A遺跡の木材はハンノキ属ハンノキ節7点、コナラ属コナラ節26点、モクレン属1点、樹皮1点であった。最も多いコナラ属コナラ節は、温帯域に広く分布する落葉広葉樹で、ここではミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素とみられる。ハンノキ属ハンノキ節は、温帯域に広く分布する落葉広葉樹で低湿地などに成育し、湿地林や河辺林を形成する。

以上、本宮熊堂A遺跡の木材群集をみると、遺跡周辺にミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林とハンノキ属ハンノキ節の湿地林や河辺林が分布していたことが示唆される。

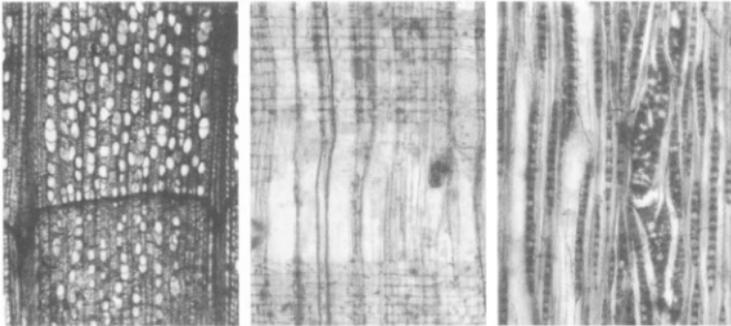
参考文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版, p.20-48.
 佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版, p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣, p.296
 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成。植生史研究特別第1号。植生史研究会, p.242

表1 本宮熊堂A遺跡における樹種同定結果

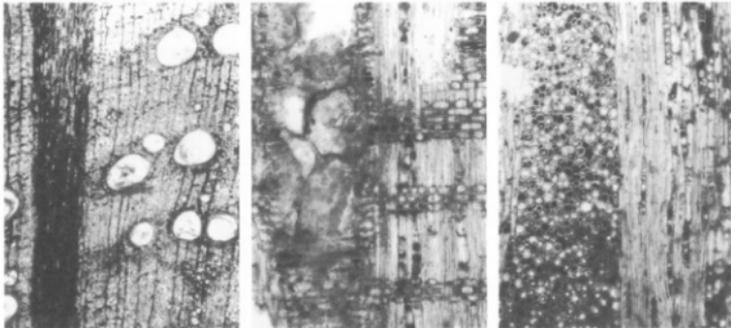
No.	試料名	結果 (学名/和名)	
1	S-1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
2	S-5	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i>	ハンノキ属ハンノキ節
3	S-6	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
4	S-10	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
5	S-15	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i>	ハンノキ属ハンノキ節
6	1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
7	3	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
8	5	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i>	ハンノキ属ハンノキ節
9	10	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i>	ハンノキ属ハンノキ節
10	11	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i>	ハンノキ属ハンノキ節
11	13	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
12	14	<i>Magnolia</i>	モクレン属
13	22	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
14	25	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
15	27	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
16	29	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
17	30	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
18	39	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i>	ハンノキ属ハンノキ節
19	40	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
20	42	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
21	45	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
22	47	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
23	48	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i>	ハンノキ属ハンノキ節
24	49	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
25	53	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
26	59	bark	樹皮
27	60	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
28	61	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
29	64	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
30	67	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
31	72	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
32	73	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
33	74	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
34	75	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
35	79	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節

本宮熊堂A遺跡の木材 I



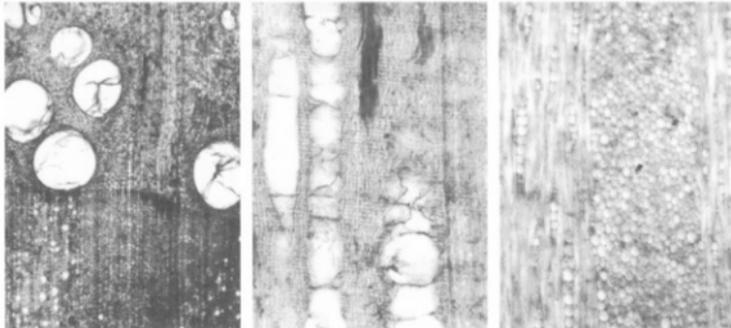
横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm

1. No.2 S-5 ハンノキ属ハンノキ節



横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm

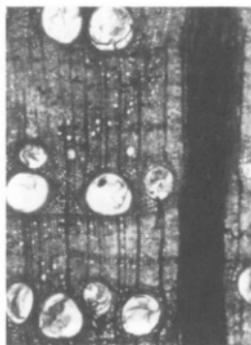
2. No.1 S-1 コナラ属コナラ節



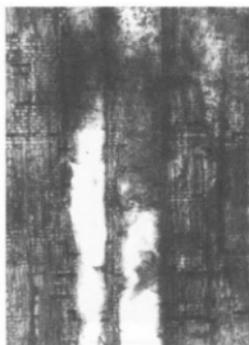
横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm

3. No.20 42 コナラ属コナラ節

本宮熊堂A遺跡の木材 II



横断面 : 0.5mm

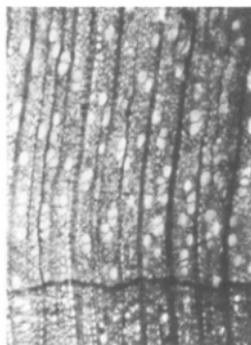


放射断面 : 0.5mm

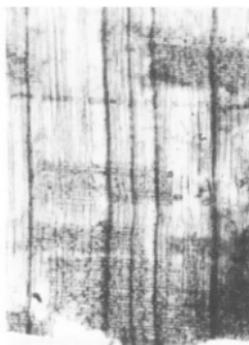


接線断面 : 0.5mm

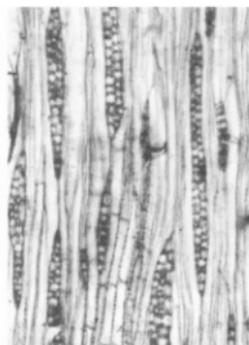
4. No.30 67 コナラ属コナラ節



横断面 : 0.5mm



放射断面 : 0.5mm



接線断面 : 0.2mm

5. No.12 14 モクレン属

7 本宮熊堂A遺跡の昆虫同定

(1) はじめに

本宮熊堂A遺跡は、半石川の南岸にあたる河岸段丘上に立地する。ここでは、古環境に関する情報を得ることを目的として、昆虫遺体の同定を行った。試料は、調査区の旧河道内から検出されたものである。昆虫遺体この河道は、縄文時代晩期～古代まで存在したとされるが、昆虫遺体が検出されたのは縄文時代晩期に相当する4層である。

(2) 試料

試料は旧河道4層から検出された10点である(表1参照)。昆虫遺体は、周囲の土壌も含めて取り上げられている。1点には1片の昆虫遺体が存在するが、一部の試料では2片入っているものもある。そのため便宜上、試料毎に番号を付し(1-10)、1点につき複数入っている場合には枝番号を付した。

(3) 分析方法

土壌中から、昆虫遺体を注意深く取り出して洗浄し、試料を肉眼および顕微鏡にて観察し、種類および部位の同定を行う。試料は乾燥を防ぐため水入りの瓶に保管する。なお同定解析には、川那部真氏(株式会社人と自然の環境研究所)の協力を得た。

(4) 結果および考察

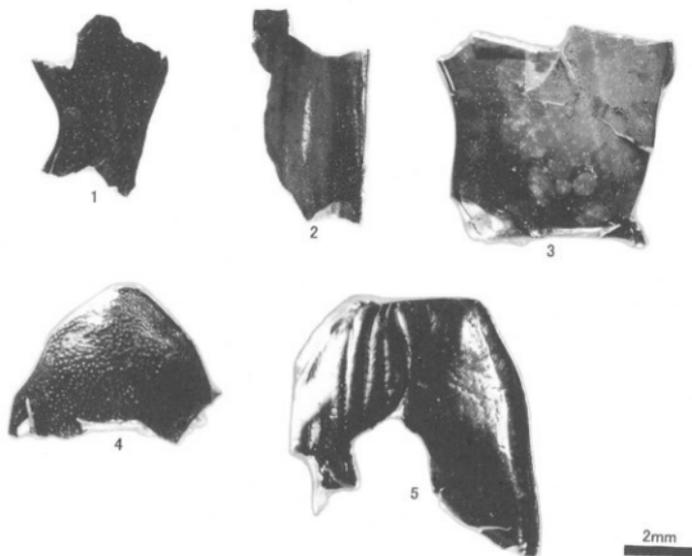
結果を表1に示す。検出されたのは以下の4種類である。アカガネオオゴミムシ(*Trigonognatha cuprescens*)は、昆虫綱コウチュウ目オサムシ科に属する。地表を徘徊しながらミミズや小動物などを捕食する、典型的な捕食性甲虫類である。平地から山地にかけて生息し、本州、四国、九州に分布する。サクラコガネ属の一種(*Anomala* sp.)は、コガネムシ科に属する。日本における本属には、サクラコガネやヒメコガネなど約30種が含まれる。今回は、破片であるため分類が難しく、種までの同定ができなかった。いずれの種も、幼虫および成虫ともに食植性であり、成虫はおもに広葉樹の葉上で葉を摂食する。ときに大量発生することがある。アオカナブン(*Rhomborrhina unicolor*)もコガネムシ科に属する。平地から山地のおもに落葉広葉樹林に生息する。幼虫は地中で腐植物などを摂食し、成虫になるとコナラやクヌギなどの樹液、熟果にあつまるところ。成虫は7～8月に見られる。北海道、本州、四国、九州に分布する。ハナムグリ(*Eucetonia pilifera*)もコガネムシ科である。平地から山地にかけて生息し、成虫は4月～7月にかけて各種の花に集まる。北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、対馬、屋久島など日本全国に広く分布する。

以上のように今回検出された種類は、山野に普通にみられる種類であり、また分布域も広いものばかりであった。これらが当時周辺に生育していたと考えられる。

表1 昆虫同定結果

番号	試料名	種類	部位
1	1028 旧河道 a・b ⁺ 跡の中間	4層 ハナムグリ	上翅の一部
2	1101 旧河道 a ⁺ 跡東側	4層 サクラコガネ属の一種	上翅の一部
3	1102 旧河道 a ⁺ 跡西側	4層 サクラコガネ属の一種	上翅の一部
4-1	1104 旧河道 c ⁺ 跡東	4層 アオカナブン	左上翅の一部
4-2	1104 旧河道 c ⁺ 跡東	4層 アカガネオオゴミムシ	右上翅の一部
5	1105 旧河道 d ⁺ 跡西	4層 アカガネオオゴミムシ	左右上翅の一部
6	1105 旧河道 c ⁺ 跡東	4層 ハナムグリ	前胸背板の一部
7	1105 旧河道 c-d ⁺ 跡中間	4層 ハナムグリ	上翅の一部
8	1108 旧河道 c-d ⁺ 跡中間	4層 アカガネオオゴミムシ	左上翅の一部
9	1109 旧河道 e ⁺ 跡東	4層 ハナムグリ	右上翅の一部
10	1111 旧河道 c-d ⁺ 跡中間	4層 サクラコガネ属の一種	上翅の一部

図版1 昆虫



1. ハナムグリ(1028)

3. アオカナブン(1104)

5. アカガネオオゴミムシ(1104)

2. サクラコガネ属の一種(1102)

4. ハナムグリ(1105)

8 調査者のコメント

(1) 分析依頼の目的について

今回、多岐にわたる自然化学分析を試みた目的は、本遺跡で確認した旧河道の土壌や出土した自然遺物を分析することによって、本宮熊堂A・B両遺跡に関わる当時の生活環境を可能な限り復元することである。旧河道は埋土の堆積様相、および出土土器から、3層は8世紀代に、4層は縄文時代晩期に相当する。また旧河道より新しい溝（第26次調査のRG055）の埋土中から10世紀前半の土師器が出土しており、その頃には旧河道は埋没していたことが考えられる。このように河川として機能した存続時期が明確であり、なおかつ、内包される土壌や遺物の年代も比較的限定できるものと考え、分析試料として適したものであると思われる。

(2) 試料の選択について

分析対象とする資料の選別は、調査者（須原）が行った。試料の選択基準について、簡単に述べる。まず火山灰は旧河道の東側半分、検出面上に点在していたものを試料として選んだ。

次に植物珪酸体、花粉、珪藻分析の試料については断面観察に使用したBベルト（第13図参照）から採取した土壌を試料とした。従ってⅡ～Ⅳ章中の層名（例えば3層、4a層など）は全て、Bベルト断面に表記された層名を指している。

種実同定、昆虫同定については、旧河道東側半分（5N6aグリッド付近）の4層中（縄文時代晩期の層）から出土したものの中から、特に残りの良いものを試料とした。

樹種同定は、旧河道3層（8世紀の層）全域から検出した樹木類の中で、地点に偏りなく選んでいる。選んだ試料の位置については第12～18図の出土状況図に番号を付しており、それらの番号がⅤ章の樹種同定結果表にある試料番号に相当する。

(3) 分析結果に対する調査者の見解

まず、分析結果とそれぞれの考察については、調査者として異論はない。各試料の採取地点や層から推定される時代観と各資料の分析結果は大きくずれるものではないと捉えている。

火山灰が十和田aテフラである可能性が高いという同定結果は、旧河道が十和田aテフラ降下期（915年）前後には埋没したという推測が導き出せる。第26次調査で見つかった旧河道を切る溝（RG055）の埋土から10世紀前半の土師器がまとまって検出しており、発掘調査の事象からも、この同定結果は矛盾しない。

樹種同定の結果から、試料の多くが建築材などに利用されるコナラ節であることが判明した。試料のほとんどには加工痕が見受けられず、柱材や部材であった可能性は低い。炭化した試料中、第26図38は柱材の可能性が高いと考えているが、結果はやはりコナラ節であった。ただし、本宮熊堂B遺跡から見つかった焼失住居の炭化材はクリ材であり、本遺跡の試料とは異なる結果が出ている。どちらも柱材だと考えれば、柱材として用いられる材質が複数あるとも推測できる。

種実同定で、4層中から出土したものの多くがオニグルミであったことが確認された。第17次調査で、土坑や炉跡から炭化したオニグルミの殻が多量に見つかっており、同種のものであろうと思われる。これらの事象は集落と旧河道とが同時期に存在していたことを示す根拠となるだろう。

土壌分析に関しては、「まとめ-旧河道」の項で詳しく触れた。

IX 本宮熊堂B遺跡自然科学分析

株式会社古環境研究所

1 本宮熊堂B遺跡火山灰分析

(1) はじめに

岩手県盛岡市とその周辺には、岩手、秋田駒ヶ岳、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、御岳、三瓶、阿蘇、始良など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、火山灰層が認められた本宮熊堂B遺跡においても、発掘調査担当者により採取された試料を対象として、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行う、指標テフラの同定を行うことになった。測定分析の対象となった試料を表1に示す。

(2) 火山ガラス比分析

1) 分析方法

試料を対象として、火山ガラス比分析を行い、火山ガラスの色調・形態別比率を求めた。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。

2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図1に、その内訳を表1に示す。試料R A092には、量が多い順に繊維束状に発泡した軽石型（9.6%）、スポンジ状に発泡した軽石型（2.8%）、透明のバブル型（1.6%）、中間型（0.4%）が含まれている。試料R A094には、量が多い順に繊維束状に発泡した軽石型（18.0%）、スポンジ状に発泡した軽石型（6.4%）、中間型（2.0%）、透明のバブル型（1.6%）が含まれている。試料R A110にも、量が多い順に繊維束状に発泡した軽石型（16.8%）、スポンジ状に発泡した軽石型（4.0%）、中間型（1.6%）、透明のバブル型（1.2%）が含まれている。試料R A111には、量が多い順に繊維束状に発泡した軽石型（6.0%）、スポンジ状に発泡した軽石型（4.0%）、透明のバブル型（1.6%）、中間型（1.2%）が含まれている。試料R A109にも、量が多い順に繊維束状に発泡した軽石型（20.0%）、スポンジ状に発泡した軽石型（9.2%）、中間型（3.2%）、透明のバブル型（1.2%）が含まれている。

(3) 屈折率測定

1) 測定方法

3層に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)により、屈折率(n)の測定を行った。

2) 測定結果

屈折率測定結果と仙台市域に分布する代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率(n)を表2に示す。試料R A092、試料R A094に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.497-1.509のrangeに入る。一方、試料R A110、R A111、R A109に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.501-1.511のrangeに入る。

(4) 火山ガラスの主成分化学組成分析

1) 分析方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるために、6試料に含まれる火山ガラスについて波長分散型エレクトロンプローブX線マイクロアナライザー(以下、WDS型EPMAとする)により主成分化学組成分析を行った。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子JXA8600MWDS型EPMAである。加速電圧15kV、照射電流0.01 μ A、ビーム径5 μ mの条件で行った。補正法はOxide ZAF法を用いた。

2) 分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を表3に示す。さらにこの表には、本遺跡とその周辺に分布するおもな指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分化学組成を示した。試料R A092には、2種類の火山ガラスが含まれている。これらの中には、TiO₂を比較的多く含む火山ガラスがあり、これらの試料とよく似た火山ガラスは、ほかの試料でも多く認められる。

(5) 考 察

分析対象となつたいずれの試料にも、火山ガラスの形態や屈折率、さらに主成分化学組成から、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田a火山灰(To-a, 町田ほか, 1981)に由来する火山ガラスが含まれていると考えられる。ただ、火山ガラスの屈折率のrangeがとくに広い、試料R A092には、化学組成上複数の種類の火山ガラスが含まれていることから、テフラの一次堆積層の可能性は低いと言わざるを得ない。テフラ層の一次堆積層の認定には、野外での層相の観察が必要である。したがって、これらの試料が採取された層位については、To-aがそれより上位にある可能性が高いと思われる。なお、R A092に含まれる火山ガラスの中には、主成分化学組成上の特徴から、約2.4-2.5万年前*1に南九州地方の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995)に由来する火山ガラスの混在している可能性が考えられる。この火山ガラスの混入が、屈折率のrangeを低い方に拡大させているのかも知れない。

(6) ま と め

本宮熊堂B遺跡において採取された試料を対象に、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。その結果、十和田a火山灰(To-a, 915年)に由来する可能性が高い火山ガラスを検出することができた。

*1 放射性炭素 (^{14}C) 年代。暦年較正年代については、ATが約2.6~2.9万年前と考えられている (町田・新井, 2003)。

文献

- 青木かおり・新井房夫 (2000) 三陸沖海底コアKH94-3, LM-8の後期更新世テフラ層序。第四紀研究, 39, p.107-120.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入江火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による ^{14}C 年代。第四紀研究, 34, p.377-379.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義。科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p.562-569.
- 松本英二・前田保夫・竹村志二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の ^{14}C 年代。第四紀研究, 26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデムロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の ^{14}C 年代。地質雑誌, 99, p.787-798.

表1 大出ボラス北谷台発掘結果

層別	ba-6FD	ba-6gb	ba-6h	nd	ps(g)	no(th)	その他	合計
E.A202	4	0	0	1	7	21	214	250
E.A204	4	0	0	1	5	10	180	200
E.A110	7	0	0	1	13	42	151	200
E.A111	4	0	0	3	13	13	238	250
E.A109	7	0	0	0	0	23	89	100

層別内容記号: ba-7バブル型, nd:半埋型, ps:壁石型, at:遺構, ba:灰褐色, ka:土褐色,
#1:土器片断, #b:土器断面

表2 櫛形半圓筒記号表

遺構(ツアラ)	層別	大出ボラスの層別号(n)
本宮熊倉B	E.A202	1,688-1,689
本宮熊倉D	E.A204	1,689-1,697
本宮熊倉C	E.A110	1,693-1,697
本宮熊倉B	E.A111	1,681-1,687
本宮熊倉A	E.A109	1,687-1,631
一斗缶型I (Ia-K, 8091)	E.A202	1,689-1,689(1089-1,689)
一斗缶型II (Ic-C, 818, 807)	E.A202	1,688-1,612
一斗缶型III (Ib-J, 806, 806)	E.A204	1,689-1,681
一斗缶型IV (Ic-G, 813, 809)	E.A110	1,693-1,689
一斗缶型V (Ia-K, 13-18, 809)	E.A110	1,692-1,694
一斗缶型VI (Ia, 24-25b, 806)	E.A111	1,689-1,694
一斗缶型VII (Ia-Y, 41-43a)	E.A111	1,689-1,683
一斗缶型VIII (Ib-X, 808a)	E.A110	1,681-1,682
一斗缶型IX (Ic-K, 90-108a)	E.A110	1,681-1,682
一斗缶型X (Ic-K, 112-113a)	E.A110	1,681-1,682

遺構内容記号は、遺構番号/櫛形半圓筒記号表番号(例:8091)による。遺構ツアラの番号は、
町立・市立(1982, 2002)による。b, b(伊):1,600年代の¹⁴C年代記、ka:1,500年代、
7a-b:60年代前半、7a:第一層地域での一般的な遺構番号。

表3 検討した遺物群のツアラに含まれる大出ボラスの定量的な化学組成分析結果

試料ツアラ	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	MgO	CaO	Mg ₂ O	K ₂ O	Na ₂ O	P ₂ O ₅	SiAl	n
E.A202	72.30	0.40	12.83	1.67	0.12	0.43	2.01	3.67	1.45	0.04	108.01	8
	6.24	0.34	0.14	0.10	0.05	0.04	0.14	0.06	0.08	0.02		
E.A204	72.42	0.38	12.74	1.74	0.09	0.42	1.98	3.78	1.43	0.04	108.00	9
	0.24	0.34	0.08	0.10	0.05	0.02	0.06	0.16	0.08	0.04		
E.A110	72.00	0.34	12.75	1.74	0.11	0.29	1.87	3.66	1.46	0.04	108.99	10
	0.36	0.38	0.11	0.15	0.04	0.02	0.11	0.22	0.07	0.04		
E.A111	72.37	0.38	12.80	1.76	0.09	0.40	1.87	3.46	1.58	0.04	108.91	10
	0.33	0.35	0.10	0.14	0.07	0.03	0.09	0.24	0.08	0.02		
E.A109	72.50	0.38	12.75	1.68	0.10	0.42	1.96	3.77	1.38	0.04	108.99	10
	0.23	0.31	0.12	0.16	0.07	0.02	0.06	0.11	0.06	0.02		
十斗缶型I (Ia-K)	72.80	0.29	12.67	1.82	0.08	0.29	1.71	3.84	1.30	0.08	108.91	-
(Ia-C)	70.51	0.29	11.97	1.37	0.05	0.28	1.26	3.13	2.97	0.08	90	-
十斗缶型II (Ic)	70.83	0.12	12.13	1.10	0.04	0.11	0.98	3.23	3.26	0.08	108.00	128
十斗缶型III (Ic-G)	70.97	0.16	11.94	1.30	0.08	0.17	1.31	3.42	1.78	0.08	108.91	80
十斗缶型IV (Ia-K)	70.28	0.11	12.09	1.23	0.11	0.11	1.05	4.18	1.83	0.01	108.00	-
十斗缶型V (Ib-X)	70.53	0.26	12.26	0.70	0.05	0.07	0.69	3.58	3.87	0.03	90	99
十斗缶型VI (Ic-K)	70.37	0.30	12.48	0.82	0.08	0.03	0.37	3.71	2.84	0.08	108.00	-

n:1斗缶型Iの試料数、2斗缶型IIの試料数、3斗缶型IIIの試料数、4斗缶型IVの試料数、5斗缶型Vの試料数、6斗缶型VIの試料数、7斗缶型VIIの試料数、8斗缶型VIIIの試料数、9斗缶型IXの試料数、10斗缶型Xの試料数、11斗缶型XIの試料数、12斗缶型XIIの試料数、13斗缶型XIIIの試料数、14斗缶型XIVの試料数、15斗缶型XVの試料数、16斗缶型XVIの試料数、17斗缶型XVIIの試料数、18斗缶型XVIIIの試料数、19斗缶型XIXの試料数、20斗缶型XXの試料数

大出ボラス水

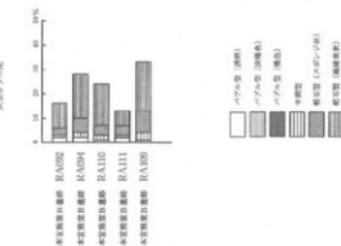


図1 大出ボラス北谷台ツアラ

2 本宮熊堂B遺跡出土炭化米のDNA分析

株式会社古環境研究所

(1) はじめに

本宮熊堂B遺跡は半石川南岸の段丘に位置し、北側には本宮熊堂A遺跡が存在している。本宮熊堂A遺跡は縄文時代から平安時代にかけての遺跡であったが、今回の本宮熊堂B遺跡は縄文時代と奈良時代から平安時代の遺構が発見され、大規模な集落跡が確認された。奈良時代の竪穴住居跡が23棟発掘され、調査区域のほぼ中央の1棟（遺構番号RA105）より炭化米が塊で発見された。

本研究では遺跡から出土したイネ種子を形態観察し、DNA分析によって遺伝形質の解析を試み、他の遺跡から出土した炭化米と比較した。

(2) 分析材料と方法

出土した炭化米の塊をデジタル顕微鏡で撮影し、表面観察をおこなったところ、図1の上図の矢印のように一部に被熱跡が確認された。また、下の矢印の部分には籾殻の縦模様を確認でき、塊全体的に籾殻の付着が見受けられた。被熱のあるものや空洞化したものを除外し、サンプルとして完形の炭化米を10粒用い（図2）、その長さと幅を計測した。分析に用いた材料の一覧を表1に示す。

これらサンプルを超音波洗浄器で洗浄後、それぞれから以下の方法によって全DNAの抽出をおこなった。ここでいう全DNAとは、含まれるDNAを核、葉緑体などと区別せずに抽出したものをいう。まず、サンプルの表面を70%エタノールで洗浄後、粉砕のためのマルチビーズとともに1つずつチューブに入れ、マルチビーズショッカー（安井器械製）によって粉砕し、SDS法によって全DNAを抽出した。機器および使い捨てチューブやチップはすべて事前に滅菌消毒あるいはUV照射をおこなった。なお抽出法の詳細はNakamura（1990）を参照していただきたい。抽出されたDNAは以下の3つの領域について、PCR法によりDNA断片を増幅させた。

1) ランダムプライマーの1つであるCMN-A10、CMN-B20、CMN-B22によって増幅される領域。染色体上の位置は不明ながら、以前よりジャポニカ品種を温帯型と熱帯型にわけの用に用いられてきた。

2) 葉緑体DNAのPS-ID領域。これはNakamura et al.（1997）によって開発された主に品種あるいは品種群を同定できる葉緑体DNA領域の一部分で、*rpl14*遺伝子と*rpl16*遺伝子に介在する塩基配列である。

3) 核DNAにあり、アミロース合成にかかわる遺伝子座（Wx遺伝子座）の第2エクソン部分。

領域1）はPCR法により増幅したバンドの位置により、当該イネ種子が熱帯ジャポニカに属するか温帯ジャポニカに属するかを判定する。プライマーの配列を表2に示す。

領域2）は品種の同定、プライマーの配列を表2に示すが、PSID-A 4Lに関してはまだ未公開である。

領域3）はモチ、ウルチを判別するためDNAのWaxy領域を増幅し、判定するものである。この配列の有無によってイネのモチ性（胚乳のでんぷんのうちアミロースを欠き粘りが強くなった性質）かウルチ性かの判定が可能である。モチ性胚乳を持つ系統では、この遺伝子のある部分に23塩基分の重複がみられることが知られている。2）および3）については2回のPCR増幅後、ダイレクトシーケ

ンス法により当該部分の塩基配列を特定する方法である。いずれもPCR法の温度条件、反応液の組成などは定法によった。遺物のDNAは通常のPCR法では増幅されない。そこでここでは、1回目の増幅産物をテンプレートとして2回目のPCRをおこなう、いわゆる2段階PCRをおこなった。PCR反応によって増幅されたDNAは寒天を支持体とする電気泳動をおこなってDNAを視覚化させた。

(3) 分析結果および考察

形態観察をおこなった結果を表3に示す。籾殻つきのサンプルの平均は長さ5.63mm、幅2.83mm、長幅比1.99、粒大15.9であり、その他のサンプルの平均は長さ5.05mm、幅2.82mm、長幅比1.79、粒大14.3であった。したがって、全サンプルの平均は長さ5.34mm、幅2.82mm、長幅比1.89、粒大15.1であった。各サンプルのデータをもとに図3を作成した結果、籾殻つきサンプル(サンプル1、4、6、7)と玄米サンプルも幅はほとんど変わらなかった。

さらにサンプルの粒形と傾向を表3に示した。通常は玄米の炭化米出上がほとんどなので、籾殻つきサンプルはカッコ内に記した。通常の玄米サンプルにおいて、長粒サンプルもあったが、全体的に短粒の傾向が認められた。

DNAの分析では領域1)のプライマーによるDNA断片を増幅した結果、CMN-A10プライマーでPCR増幅した泳動写真を図4に示す。図の矢印のバンドの断片が熱帯ジャポニカに特徴的なバンドである。同様に他の2プライマーで増幅し、泳動写真撮影をおこなった結果のバンドの判定を表4に示した。CMN-A10では+のあるサンプルが熱帯ジャポニカ、B20は+が温帯ジャポニカ、B22は温帯熱帯を区別可能な2つのバンドがあり、Trは熱帯ジャポニカ、Tmは温帯ジャポニカに固有のバンドを示す。いずれのバンドもある場合を雑種とした。これより熱帯ジャポニカが2サンプル、温帯ジャポニカが2サンプル、雑種が4サンプル確認された。

領域2)のプライマーでは1回目のPCRをPSID-A・B、2回目をPSID-A2・Bで図5のとおり増幅した。確認のため、PSID-A・BとPSID-A4L・Bのプライマー組合せで増幅をおこなった(図5の下部)。その結果、2サンプル(サンプル1、サンプル6)の増幅が矢印の位置に確認されたが、シーケンスできたものは1サンプルであった。サンプル6の塩基配列は図6のとおり、TAAのストップコドンの後に6C7Aの配列が確認され、この配列は温帯ジャポニカ、熱帯ジャポニカのいずれも分類されるものであった。

領域3)を増幅したが、乾燥と被熱のためか、アミロース合成遺伝子の増幅を確認することはできなかった。

本遺跡の結果と古墳時代から中世にかけて出上した炭化米の分析結果の比較を表5に示した。同じ奈良時代の遺跡から出土した炭化米は箱根田遺跡(静岡県三島市)から出土したサンプルのみで、箱根田遺跡の分析結果は温帯ジャポニカ型の存在のみが確認されていたが、本遺跡から熱帯ジャポニカ型を示すサンプルが出土したことは注目されることである。

東北地方の遺跡から出土しているサンプルとの比較を表6に示す。まだ出土例が少ないが、他の遺跡と比べて温帯ジャポニカ型と熱帯ジャポニカ型の両方の遺伝子を持つ雑種型が多いことが示唆された。東北地方の遺跡から出上する炭化米はきわめて少なく、また、奈良時代の炭化米としては全国的にも珍しく、本遺跡の分析は貴重な資料となった。今後はさらに東北地方や全国の奈良時代の遺跡から炭化米が出上ることによって、東北地方や奈良時代のイネ品種の変遷を解明することが可能となるだろう。

参考文献

- 佐藤洋一郎 (2002) DNA考古学のすすめ 丸善ライブラリー pp164
- 佐藤洋一郎 (2000) 縄文農耕の世界 PHP新書 pp218
- 佐藤洋一郎 (1999) DNA考古学 東洋書店 pp201
- 佐藤洋一郎 (1998) DNA考古学事始 DNA多型6: 1-4
- 佐藤洋一郎 (1998) DNAから栽培と農耕の歴史を探る 遺伝52 (6) : 29-33
- 佐藤敏也、粉川昭平 (1987) 弥生のイネ 食用植物: p97-111
- 中村郁郎 (1995) DNAフィンガープリント法。『植物遺伝育種学実験法』 朝倉書店: p113-117
- 花森功子 (2003) 都城市の遺跡群から出土したイネ種子の遺伝形質の時期的変遷 日本文化財科学会: p212-213
- Nakamura, I. (1990) New DNA Fingerprinting Procedure. Amplified Fragment Length Polymorphism of Hazy Association (ALPHA). Annu. Rep. Natl. Inst. Genet. 41: 105-106
- Nakamura, I. and Y.I.Sato (1991) Amplification of DNA fragments Isolated from a Single Seed of Ancient Rice(AD800) by Polymerase Chain Reaction. Chinese J.Rice Sci.5: 175-179
- Nakamura, I., N.kameya, Y.Kato, S.Yamanaka, H.Jomori and Y.I.Sato (1997) A proposal for identifying the short ID scquence which addresses the plastid subtype of higher plants. Breed.Sci.47: 385-388

表1 サンプルリストと長幅比

サンプル番号	長さ (mm)	幅 (mm)	長幅比	粒大	備考
1	5.7	3.1	1.84	17.7	初殻つき
2	5.0	2.9	1.72	14.5	
3	5.0	3.1	1.61	15.5	
4	5.8	2.8	2.07	16.2	一部初殻つき
5	4.9	2.6	1.88	12.7	
6	5.4	2.8	1.93	15.1	初殻つき
7	5.6	2.6	2.15	14.6	一部初殻つき
8	5.2	3.2	1.63	16.6	
9	5.2	2.4	2.17	12.5	
10	5.0	2.7	1.85	13.5	

表2 PCR増幅に使用したプライマー

プライマー名	配列	判定
A-10	GCC TGC CTC ACG	Tr
B-20	GTC GCC TTA CCA	Tm
B-22	TCT GCT GAC CGG	Tr/Tm
PSID-A	AAA GAT CTA GAT TTC GTA AAC AAC ATA GAG GAA GAA	
PSID-A2	AAT ATA CGT ACC CAG ATT TTT CCA CCA CGA CG	
PSID-B	ATC TCG TAC ATT TAA AAG GGT CTG AGG TTG AAT CAT	

Tr: 熱帯ジャポニカ Tm: 温帯ジャポニカ

表3 炭化米の粒形と傾向

粒形	傾向				合計
	粒大	極極小	極小	小	
長粒 (L)	2.6-3.0	<8	8.1-12.0	12.1-15.9	
	2.3-2.6				
	2.0-2.3			1 (1)	0 (1)
短粒 (S)	1.8-2.0			2 (1)	0 (1)
	1.6-1.8			2	1
	1.4-1.6				
円粒 (R)	1.2-1.4				
	1.0-1.2				
合計			0	5	1
カッコ内は初殻つきのサンプル数					

表4 DNA断片が増幅されたサンプル

サンプル番号	A10	B20	B22	遺伝子型	PS-ID
1	+	+		雑種	○
2					
3	+		Tr	熱帯ジャポニカ	
4	+			熱帯ジャポニカ	
5	+	+		雑種	
6		+	Tr	雑種	○
7	+		Tm	雑種	
8		+		温帯ジャポニカ	
9		+	Tm	温帯ジャポニカ	
10					

A10の+は熱帯型を示す。

B20の+は温帯型を示す。

B22のTmは温帯型、Trは熱帯型の位置にバンドを確認したことを示す。

○はPS-ID領域にPCR産物が確認されたことを示す。

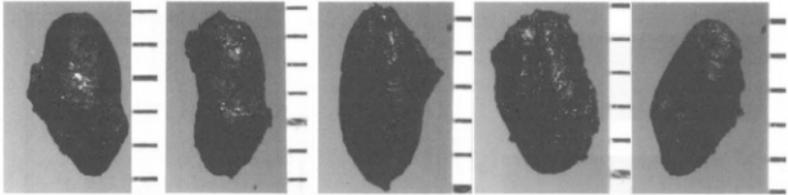
表5 各地の遺跡から出土した炭化米の熱帯japonica - 温帯japonicaの判定

遺跡	時代	2005年3月現在				
		熱帯	構成比%	温帯	雑種等	
東田(新潟県新潟市)	古墳前期	2	14.3	4	8	14
北金目(神奈川県平塚市)	古墳中期	1	14.3	1	5	7
一ノ坪(山形県山形市)	古墳時代後期	2	40.0	2	1	5
西沼田(山形県天童市)	古墳時代後期	2	50.0	2	0	4
泉沢(群馬県前橋市)	古墳時代(5世紀後半~6世紀)	0	0.0	4	2	6
本宮熊堂B遺跡(岩手県盛岡市)	奈良時代	2	25.0	2	4	8
箱根田(静岡県三島市)	奈良時代末~平安初頭	0	0.0	2	1	3
三内丸山(青森県青森市)	平安~鎌倉時代	1	25.0	3	0	4
鎌名平(長野県佐久市)	(中世)	2	25.0	0	6	8
霞(鳥取県日南町)	(中世)	0	0.0	1	5	6
川入(岡山県岡山市)	室町時代(15世紀半ば)	0	0.0	5	3	8
佐古谷(岡山県瀬戸町)	室町~戦国時代	1	33.3	0	2	3
合	計	13	17.1	26	37	76

※ 印刷中の報告書あり

表6 東北地方の遺跡から出土した炭化米の熱帯japonica - 温帯japonicaの判定

遺跡	遺構	時代	2005年3月現在				
			熱帯	構成比%	温帯	雑種等	
高橋田(青森県田舎館村)	—	弥生時代	1	33.3	2	0	3
一ノ坪(山形県山形市)	住居	古墳時代後期	2	40.0	2	1	5
西沼田(山形県天童市)	—	古墳時代後期	2	50.0	2	0	4
本宮熊堂B遺跡(岩手県盛岡市)	住居	奈良時代	2	25.0	2	4	8
三内丸山(青森県青森市)	住居	平安~鎌倉時代	1	25.0	3	0	4
合	計		8	33.3	11	5	24



サンプル2

サンプル4

サンプル6

サンプル8

サンプル10

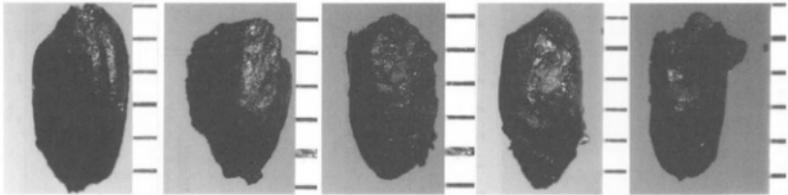


図2.1 サンプル画像
サンプル1

サンプル3

サンプル5

図2.2 サンプル画像
サンプル7

サンプル9

図1 サンプル画像

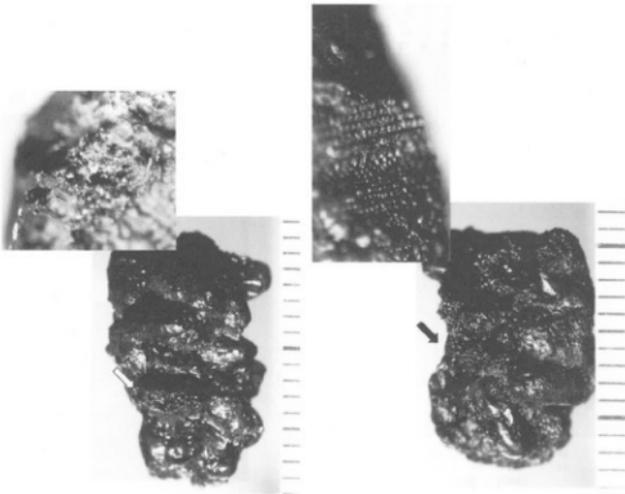


図3 サンプルの長細分布

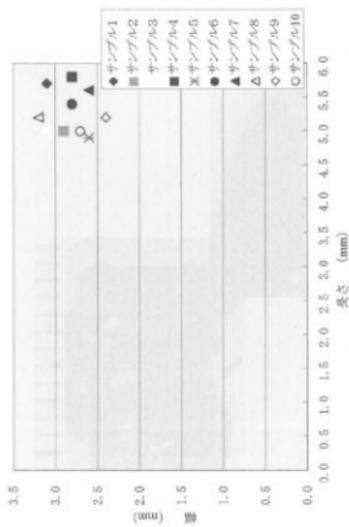


図4 FCR後の泳動写真

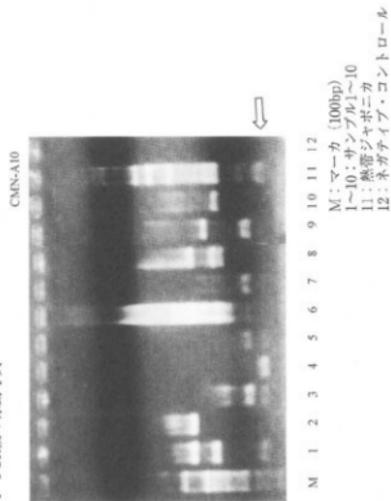


図5 サンプル画像

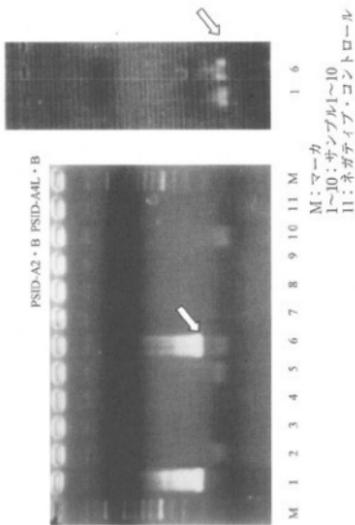
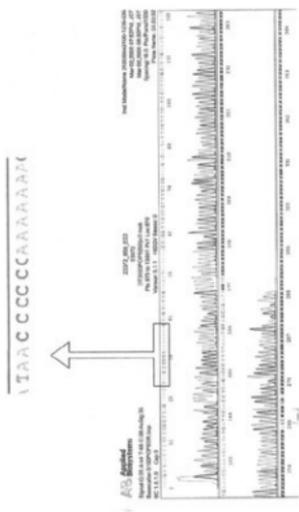


図6 PSID領域の塩基配列



3 本宮熊堂B遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

(1) 試料と方法

試料No	遺構・採取地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	RA111	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	RA130	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.3	RA105	炭化米	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

(2) 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	δ^{13} C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 (西暦)
No.1	201567	1250 ± 40	-24.9	1250 ± 40	交点: cal AD 770 1 σ : cal AD 700 ~ 790 2 σ : cal AD 680 ~ 880
No.2	201568	1170 ± 40	-25.2	1170 ± 40	交点: cal AD 880 1 σ : cal AD 790 ~ 900 2 σ : cal AD 770 ~ 980
No.3	201569	420 ± 40	-24.4	430 ± 40	交点: cal AD 1450 1 σ : cal AD 1430 ~ 1470 2 σ : cal AD 1420 ~ 1510 : cal AD 1600 ~ 1620

1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2) δ (デルタ) δ^{13} C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C/¹²C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正¹⁴C年代値

δ^{13} C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を校正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と暦年代校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ （シグマ） σ （68%確率）と2 σ （95%確率）は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

4 本宮熊堂B遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社古環境研究所

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、機ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試料

試料は、本宮熊堂B遺跡のRA111より出土した炭化材3点(No.2, No.11, No.12)と、RA130より出土した炭化材2点(No.109, No.110)である。時期は平安時代である。

(3) 方法

試料を剖折して、炭化材の新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柀目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

同定結果を表1に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1・2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

草本? Grass?

肉眼での観察において、束状になった炭化物が観察される。顕微鏡下の観察においても、木材の形質を呈していない。以上の形質より、草本などの炭化物が束状に重なったものと考えられる。

(5) 所見

同定の結果、本宮熊堂B遺跡の炭化材は、クリ4点、草本? 1点であった。クリは、温帯に広く分布する落葉広葉樹であり、暖温帯と冷温帯の間域では、純林を形成することもある。乾燥した台地

や丘陵地に生育する。また、二次林としての性格も持つ。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48。
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100。
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遠跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

本宮熊堂B遺跡の炭化材

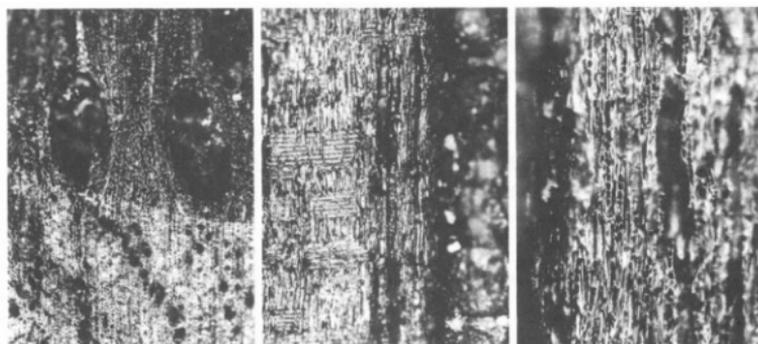


横断面 ————— : 0.4mm

放射断面 ————— : 0.4mm

接線断面 ————— : 0.2mm

1. RA111 No.2 クリ



横断面 ————— : 0.4mm

放射断面 ————— : 0.4mm

接線断面 ————— : 0.2mm

2. RA130 110 クリ

表1 本宮熊堂B遺跡における樹種同定結果

試料	結果 (学名/和名)
RA111 No.2	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
RA111 No.11	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
RA111 No.12	grass? 草本?
RA130 109	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
RA130 110	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ

5 岩手県盛岡市本宮熊堂B遺跡（第25次調査）出土の炭化種子

高瀬克範（東京都立大学人文学部）

はじめに

岩手県盛岡市本宮熊堂B遺跡は、古代を中心とする集落跡である。ここでは、その25次調査において得られた炭化種子について報告を行う。筆者が調査担当者から事前に得た遺跡に関する情報は以下の通りである。炭化種子はカマドが残存する焼土直上でサンプリングをおこない洗浄した結果検出された。水洗の具体的な手づぶきや用いられたメッシュサイズ等については不明である。

遺跡の所在地：岩手県盛岡市本宮字熊堂ほか

発掘調査期間：2004年6月1日～2004年11月22日（7,366㎡）

調査委託者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

調査機関：（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

調査担当者：村木 敬・林 勲・戸根貴之・溜 浩二郎・石崎高臣

遺跡の性格：集落跡（竪穴住居跡、住居状遺構、土坑、焼土遺構、溝などが検出された）

資料の年代：奈良時代（8世紀前葉～後葉）

平安時代（9世紀初頭～10世紀初頭）

炭化種子は遺構ごとにプラスチック製のシャーレに保管された状態で、2005年1月に受領した。そのなかには、炭化種子以外にも炭化材・砂・陸棲貝類、明らかに混入したと思われる炭化していない種子も含まれていたが、ここでは炭化種子のみを報告する。資料は分類をしたうえで、2005年2月に木レポートの提出と同時にすべて調査担当者へ返却した。

（1）出土植物種名表 List of plant remains from the 25th investigation of Kumado-B site

被子植物亜門

双子葉植物綱

離弁花亜綱

タデ科 POLYGONACEAE

タデ属 *Polygonum*

アカザ科 CHENOPODIACEAE

アカザ属 *Chenopodium*

ブドウ科 VITACEAE

ブドウ属 *Vitis*

単子葉植物綱

イネ科 POACEAE (GRAMINEAE)

イネ *Olyza sativa*

(2) 炭化種子の特徴

(1) タケ属

RA094, RA112, RA128, RA105より8点が出土している。重度のダメージを受け、表面には炭化による変形が生じているものが多い(写真図版2・3)。

(2) ブドウ属

RA112より2点のみが出土している。ほぼ完全な形態をとどめて出土している(写真図版1)。

(3) アカザ属

RA118, RA093, RA112, RA097, RA117より8点が出土している。重度のダメージを受けているものが多く、表皮だけが確認できるものが多い(写真図版4)。

(4) イネ科

外観を残し雑穀の可能性のあるイネ科の種子(写真図版5)がある。

(5) イネ

RA111, RA130, RA093, RA112, RA097, RA105より比較的少量に出土している(写真図版7~14)。RA105出土のものは数が最も多いが、胚乳のみのものは少なく、ほとんどが少なくとも一部に穎が残されており、脱穀をしていない、もしくは脱穀が不十分なものが多く含まれている。単独では267個が検出されているが、2個以上が癒着して炭化しているものが37個存在しているの少なくともさらに74個以上は存在していることとなる。

それ以外の遺構から出土したものはおおむね胚乳のみである。いずれの資料も長粒タイプであるが、サイズ・形態の変異が比較的大きく、未熟なものも2~3割以上の割合で含まれている。

(6) 不明

炭化による発泡のため同定不能のものなどがある(写真図版6)。

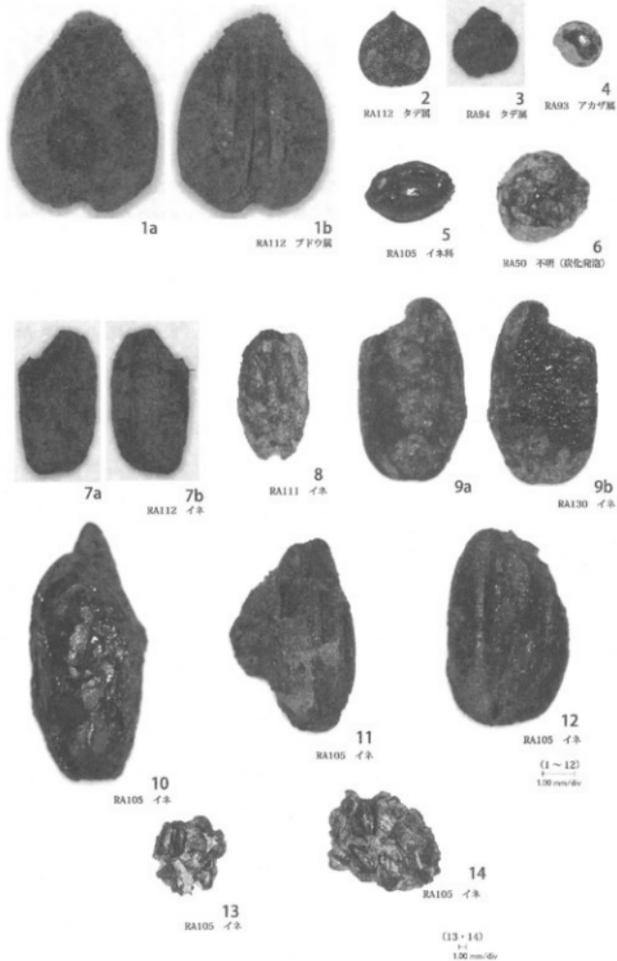
(3) ま と め

出土した炭化種子はすべて堅穴住居のカマドに関わる可能性が高いこともあり、比較的単純な構成となっている。そのなかで圧倒的に量が多いのはイネであり、それ以外のイネ科の栽培植物は明確にはみとめられなかった。RA105のイネ以外のイネ科種子はアワもしくはヒエの可能性があると断定し得ない(電子顕微鏡による細胞の観察によって同定し得る可能性がある)。そのほかの不明種子はムギや雑穀の可能性はほとんどないと考えられ、出土した資料に関していえば穀物の中心はイネと判断できる。数百点の資料だけでは定量的な評価にまで踏み込むことはできないが、フローテーションは岩手県の内陸部においても植物遺体回収の有効な手段であり、地道な資料回収の努力なくしては植物資源利用にかかわる議論も推測の域にとどまらざるをえないことも確かである。今後も継続してデータの蓄積をおこなってゆく必要がある。

今回の資料観察にあたっては、(財)岩手県文化振興事業同埋蔵文化財センターの村木 敬氏・丸山浩治氏にお世話になった。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

2 観察表

分類群	高古期代										平安時代						時期不明	
	RA91	RA92	RA93	RA94	RA97	RA105	RA50	RA110	RA111	RA112	RA113	RA114	RA117	RA128	RA130	RA118	RA124	
タデ属 <i>Polygonum</i>			1						5				1					
カデ属 <i>Chenopodium</i>		2		1					1				2					
ドク属 <i>Faba</i>																	2	
イネ科 (GRAMINEAE)						1												
イネ (免形) 不明		1		3		267 (絶量37)		1	9						1			
計	0	0	3	1	4	341以上	15	1	1	15	0	0	2	16	1	2	0	



6 本宮熊堂B遺跡出土資料鉄製品および鉄滓の成分分析

(株) ニッテツファインプロダクツ
釜石文化財保存センター

(1) い き さ つ

岩手県盛岡市に位置する本宮熊堂B遺跡の第25次調査では、農具・刀子・釘などの鉄製品19点および鉄滓2点が出土している。そのうち、鉄滓2点と鉄製品5点の自然科学的分析を行うとともに、岩手県内の他の遺跡の調査例との比較検討も行った。

(2) 分 析 試 料

- ①鉄滓2点：No.20、21
②鉄製品5点：No.3、4、5、6、8

(3) 分 析 項 目

表1に試料の大きさ並びに分析項目を示した。外観観察・断面組織観察・成分分析は全試料に実施し鉄滓の2点は粉末X線回折を、鉄製品5点については非金属介在物の組成分析ならびに金属鉄に介在するものについては硬さの測定を行った。以下には分析方法および装置を示した。

(4) 分析方法および装置

- ①外観観察：遺物の特徴をデジタルカメラに記録した。
Finepix F401型（富士写真フィルム製）
- ②組織観察：遺物の平均的な部位を切り取り洗浄後、エポキシ系樹脂により真空下で埋め込み組織を固定後、鏡面までに研磨して光学顕微鏡にて観察・記録した。
金属顕微鏡 BX51M型（オリンパス光学工業製）
- ③X線回折：鉄滓2点について、平均的な箇所を切り取り洗浄・乾燥後、100メッシュ以下に粉砕し測定に供した。
RAD-3C型（リガク電機製）
- ④成分分析：鉄滓2点および鉄製品5点について以下の方法により含有元素を求めた。
 (鉄滓) T-Fe : 全鉄定量方法 JIS M8212
 M-fe、FeO : 酸可溶性定量方法 JIS M8212
 その他の成分 : ICP発光分光分析方法 ICPS-8100型（島津製作所）
 (鉄製品) C、S : 赤外燃焼分析方法 EMIA-520型（堀場製作所）
 その他の元素 : ICP発光分光分析方法 ICPS-8100型（島津製作所）
- ⑤介在物組成：鉄製品5点について、金属鉄あるいは黒錆層中に存在する非金属介在物の組成をX線マイクロアナライザーにより測定した。
X線マイクロアナライザー（EPM A） JXA-8100型（日本電子製）
- ⑥硬度試験：鉄製品1点について以下の装置により硬度値を求めた。
マイクロピッカーズ硬度計 SMT-7型（マツザワ精機製）

(5) 分析結果

5.1: 鉄滓

No.20鉄滓の外観および断面マクロ・ミクロ組織を写真1に、また成分分析結果を表2におよびX線回折結果を表3と図1に示した。重量感のある遺物が塊型状を呈し、数枚の板状鉄滓が重なった状況が観察される。おそらく、数回の作業を繰り返した結果と思われる。内部は大小の空孔が多く存在するとともに表面近傍および空孔内壁面には鉄錆（元は溶解あるいは半溶解していた金属鉄と思われる）が薄く皮状に存在する。構成鉱物はウスタイト（FeO）とファヤライト（ $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）が主体で、僅かにガラス質スラグからなる。チタン化合物は認められず、チタン分は僅かに0.06%である。また、鉄錆中には金属鉄も残存し、鉄分が高く造滓成分の少ない鉄滓である。外観の形状および成分構成から、比較的長時間にわたって、炉底に堆積しながら形成したものと考えられる。

一方、No.21鉄滓の外観および断面マクロ・ミクロ組織を写真2に、成分分析結果を表2におよびX線回折結果を表3と図2に示した。No.20と同様に重量感があり中央部は凹みを形成する塊型鉄滓である。内部は大小の空孔が存在し、表面近傍および空孔内壁面にはNo.20と同様に薄く鉄錆が存在する。構成鉱物はNo.20と同様に、ウスタイトとファヤライトを主体とするもので、鉄錆中に金属鉄が僅かに存在する。チタン化合物は認められず、平均化学組成はNo.20とほぼ同様であり、チタン分は0.05%であった。造滓成分も少なく、No.20と同様の作業過程で生成したものと考えられる。

5.2: 鉄製品

鉄製品は刀子5点で、No.8を除く4点はすべて錆化したものであった。以下に各刀子の特徴を述べる。なお、各刀子の平均化学組成および黒錆中に存在する非金属介在物の組成をまとめて表4と5に示した。

No.3刀子の外観と断面マクロ・ミクロ組織を写真3に、図3には非金属介在物の分析結果を示した。断面中央部は錆化による膨張のため空洞となっている（b）。地金部分は錆化しており金属鉄は極一部に存在する。刃先に相当する部分は錆化しているもののその形状はよく残っている（e）。また、黒錆層中には $10\mu\text{m}$ 程度の非金属介在物が存在し、組成分析からはイルメナイト（ $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）に近い組成のものであった（表5、図3）。したがって、この遺物の製造過程では砂鉄が使われたものと考えられる。

No.4刀子の外観および断面マクロ・ミクロ組織を写真4に、図4に非金属介在物の分析結果を示した。No.3刀子と同様に断面中央部は錆化により空洞となっている（b）。また、黒錆層のマクロ模様からみてこの遺物は、2枚の鉄片錆が重なり合っている様子が伺える。地金には金属鉄は見当たらず錆化が著しい。僅かに残る黒錆層の組織中には、「ひも」状の黒錆が存在することから（図4）、この遺物は鑄鉄と判断される。また、非金属介在物は見当たらなかった。この遺物は別の用途に使われた製品の破片か、あるいは鉄素材を得るための原料とする見方も考えられるが、後者の場合は当地で精錬操作が行われていた証拠として精錬滓の検出が不可欠であるがそのような遺物は検出していないため、前者の可能性が高いと思われる。

No.5刀子の外観および断面マクロ・ミクロ組織を写真5に、図5に非金属介在物の分析結果を示した。前記の2試料と同様に、全体的に錆化しており金属鉄は見当たらない。平均化学組成のうち、微量成分の磷（P）が高いことが特徴的である。黒錆中に存在する非金属介在物はチタン（Ti）とヴァナジウム（V）を含むウスタイト（基本化学組成：FeO）およびファヤライト（基本化学組成： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）であった（表5、図5）。したがって、この遺物の製造工程で砂鉄が使用されたものと考え

えられる。

No. 6 刀子の外観と断面マクロ・ミクロ組織を写真 6 に、図 6 に非金属介在物の分析結果を示した。全面的に錆化が進んでおり金属鉄は存在しない (b)。しかし、僅かに残る黒錆から、元の金属組織は高炭素の鋼であったことが伺える。一方、黒錆中に存在する非金属介在物は、ルチル (基本組成; TiO_2) に近い鉱物である (表 5、図 6)。通常、砂鉄原料で造られた鉄器中には、ウルボスピネル (基本化学組成; $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$) またはイルメナイト (基本化学組成; $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$) を介在物とするものが普通であるが、本遺物はそれよりも高濃度のチタン化合物が存在していることになる。この遺物は高還元性状態で製造 (製鉄・精練) され、急冷された鉄素材 1、2) が使われたものと推測される。

No. 8 刀子の外観と断面マクロ・ミクロ組織を写真 7 に、図 7 に非金属介在物の分析結果を示した。周辺は錆化し空洞も存在するが中央部は金属鉄が残存している (b)。金属組織はフェライト ($\alpha\text{-Fe}$; 殆ど炭素を含まない鉄) で、極一部にパーライト ($\alpha\text{-Fe} + \text{Fe}_3\text{C}$) の固溶体; 鋼の共晶組織) を伴う組織である。遺物の中央部に相当する領域は、フェライト結晶が $50\sim 100\mu\text{m}$ と比較的大きな粒子径になっているが (d)、周辺部は $10\mu\text{m}$ 前後の微細な結晶粒子径である (c)。これは、加熱・鍛打時に周辺が急冷され結晶組織が微細化したためである。金属鉄中に存在する非金属介在物の組成は、ルチル (TiO_2) に近い組成の鉱物が存在し、製造過程で砂鉄を使用したことが判るとともに、No. 6 刀子の素材と同様にこの鉄素材も高還元性雰囲気にて造られたことが伺える (表 5、図 7)。また、表 6 に金属鉄部分の硬さ測定結果を示した。ピッカース硬度値で 190.4 と一般的な刀剣の棟部硬さと同様である 3)。棟部の結果ではあるが、刃部はもっと高い硬さを示すものと考えられることから、実用的な利器と推測される。

(6) まとめと考察

2 点の鉄滓および 5 点の鉄製品の自然科学的調査から以下のことが判明した。

2 点の鉄滓は、鉄錆を伴う碗型状で重量感のあるもので、チタン化合物は見当たらず、平均組成のチタン分は 0.0 数% であった。岩手県内の島田 II 遺跡 (宮占) 4) や川原遺跡 (釜石) 5) 出土鉄滓のうち、チタン分の少ないものを表 2 に併記したが (いずれも、精練滓と判断されている)、その分析値と比べると鉄分が多く造滓成分の少ないことが判る。2 試料の構成成分およびマクロ・ミクロ組織構造から、いずれも鍛錬鍛冶に伴って炉底に長時間堆積しながら生成した鉄滓と判断された。

一方、5 点の鉄製品はいずれも錆化が著しく金属鉄の残存が極めて少なかったが、黒錆層の組織的特徴から、No. 3・No. 5・No. 6・No. 8 は鋼材と判断された。また、No. 4 は全面が錆化しているものの元の金属組織の形骸をよく残しており、その特徴から鋳物製品と判断された。4 点の鋼材のうち、No. 6 は特に炭素量の高い材質と推定された。一方、非金属介在物からは、いずれの鉄製品中にもチタン分の高い鉱物の存在が認められた。今までの鉄製品の調査例のうち、岩手県内の他の鍛冶遺構から出上した鉄製品について、川原遺跡 (釜石) の結果の一部を表 4 に併記したが、この鉄製品中に存在する非金属介在物もチタン化合物が主体のものであった。

本遺構は岩手県内の他の遺跡と同様に、砂鉄系原料から造られた鉄素材を使用した鉄製品造りの鍛冶工房址であったものと考えられる。

引用文献

- 1) 東京工業大学製鉄史研究会 「古代日本の鉄と社会」 平凡社
- 2) 柴部等 「 $\text{Fe}_2\text{SiO}_4\text{-TiO}_2$ 系酸化物の平衡状態図」 鉄と鋼 Vol.91 No.1
- 3) 尾等 「日本刀素材の金属学的解析—実用刀を中心に」 鉄と鋼 Vol.91 No.1
- 4) 岩手県歴史文化財センター 「島田 II 遺跡第 2~4 次発掘調査報告書」 16, 3
- 5) 釜石市教育委員会 「川原遺跡発掘調査報告書」 16, 3

表5 懸濁中に存在する非金属成分物の組成

試料 No.	FeO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	V ₂ O ₅	MnO	Fe ₂ O ₃
3	49.7	4.59	6.21	38.8	0.69
4	非金属成分物はみあたらず。								
5-1	82.0	1.27	4.21	0.46	5.80	1.82	4.38
5-2	63.5	28.0	0.95	0.67	2.46	0.23	0.93	3.65
6-1	11.4	4.84	80.6
6-2	10.5	39.8	9.74	9.74	2.74	30.2	0.45
8-1	11.3	0.28	5.39	75.7	3.12	0.84
8-2	6.29	53.2	4.87	4.87	10.5	6.06	1.29

表6 No.8 懸濁、金屬部分の硬さ測定結果 (単位: Hv)

1回目	2回目	3回目	平均
195.8	196.2	199.3	190.1

表1 調査試料と調査項目

試料 No.	種類	出上位置	試料の大きさ	外観	組成	成分	EP	X線	硬さ	硬度
3	刀子	RA093	8.8	1.3	0.6-1.3	28.9	○	○	○	×
4	刀子	RA110	7.8	1.7	0.9	17.8	○	○	○	×
5	刀子	RA150	18.9	2.2	1.5	27.8	○	○	○	×
6	刀子	BA114	10.7	2.3	1.6	37.8	○	○	○	×
8	刀子	BA130	11.4	1.6	0.4	17.7	○	○	○	×
20	粉体	BA150	70	71	42	353.4	○	○	×	○
21	粉体	BA154	60	66	23	110.3	○	○	×	○

*印: 差出資料から抜粋 (単位は cm, gm)

表2 鉄滓の化学組成分析結果 (単位: wt%)

試料 No.	TFe	MFe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	比率 (%)
20	61.7	0.15	82.8	17.1	10.7	1.37	0.51	0.26	0.08	0.17	21.4
21	60.5	0.17	83.1	18.0	13.4	2.35	0.60	0.28	0.08	0.44	22.2

試料 No.	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Co	CW	C	V	Cu	TiO ₂ /TFe	MnO/TiO ₂	渣滓成分-SiO ₂ +Al ₂ O ₃ +CaO+MgO+Na ₂ O+K ₂ O
20	0.06	0.04	0.30	0.01	1.33	0.02	0.11	0.02	0.001	0.67	13.1
21	0.05	0.04	0.20	0.01	1.41	0.03	0.15	0.02	0.001	0.80	19.2

表3 鉄滓の化学組成分析結果 (単位: wt%)

試料 No.	TFe	Sh	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V	Ti	Cu	Mg
3	88.2	0.01	0.03	0.08	0.04	0.15	0.01	0.01	0.03	0.02	0.08	0.16	0.01
4	92.1	0.01	0.03	0.13	0.12	0.01	0.04	0.10	0.02	0.01	0.03	0.11	0.02
5	94.7	0.01	0.04	0.96	0.10	0.01	0.01	0.08	0.01	0.01	0.04	0.08	0.02
6	93.3	0.10	0.03	0.07	0.25	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.03	0.02
8	96.7	0.03	0.02	0.18	0.15	0.01	0.03	0.01	0.01	0.01	0.03	0.03	0.01

表4 X線回折から得られた鉄滓試料の構成鉱物

試料 No.	得られた鉱物
20	W: クラスタイト (FeO), F: ファヤライト (2FeO·SiO ₂), Co: ガーゼイト (Fe ₂ O ₃ H)
21	W: クラスタイト (FeO), F: ファヤライト (2FeO·SiO ₂), Co: ガーゼイト (Fe ₂ O ₃ H)

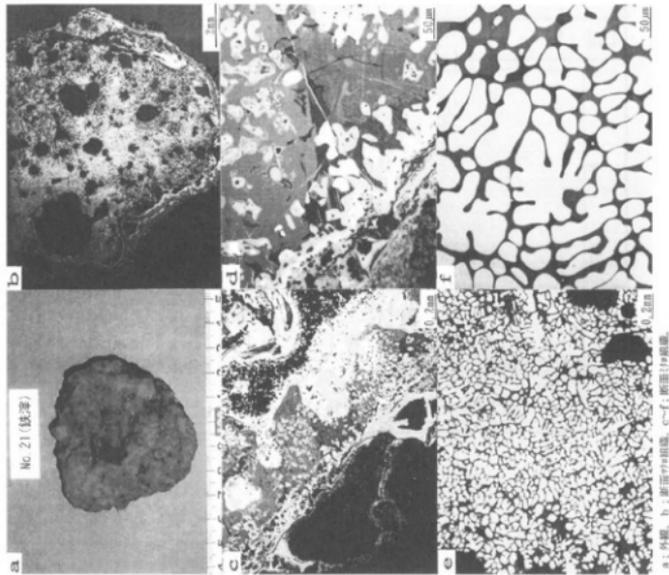


写真2 No.21 獣骨の外観と断面マクロ・ミクロ組織

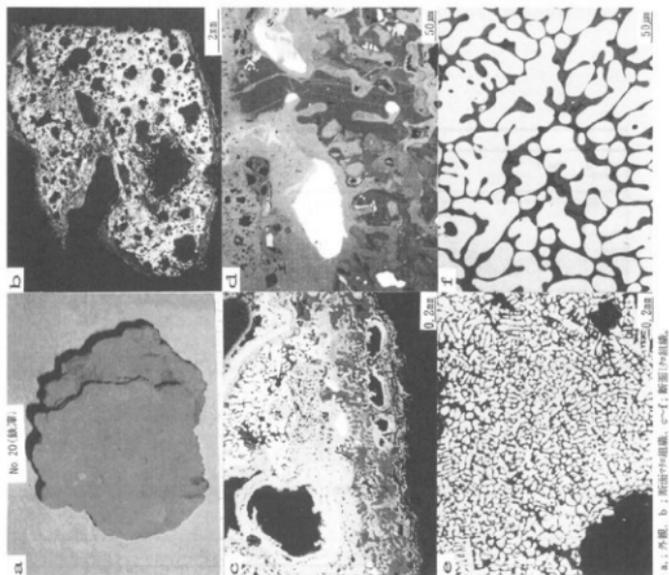


写真1 No.20 獣骨の外観と断面マクロ・ミクロ組織

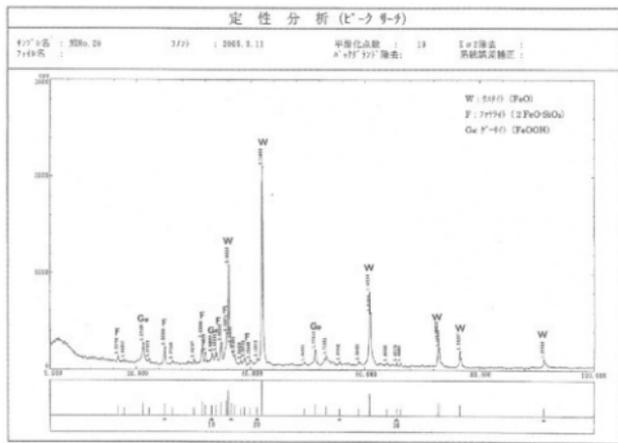


図 1 No.20 標準の X線分析結果

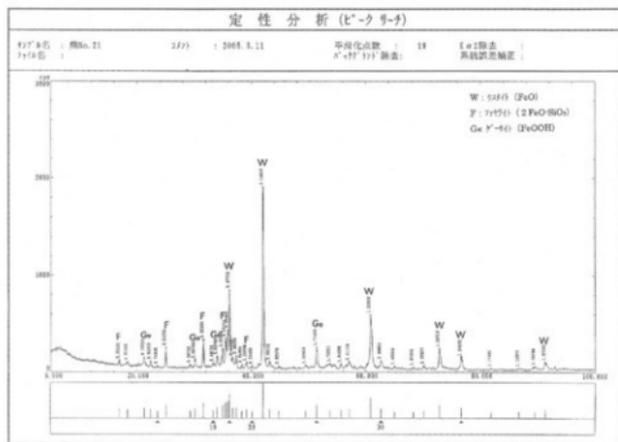


図 2 No.21 標準の X線分析結果

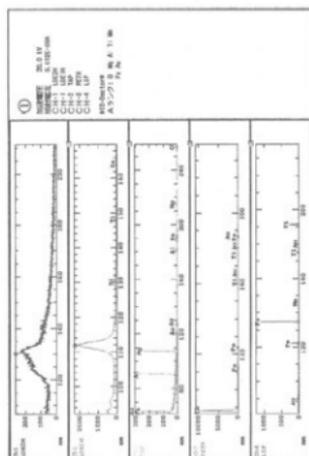
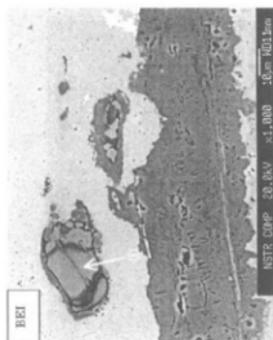
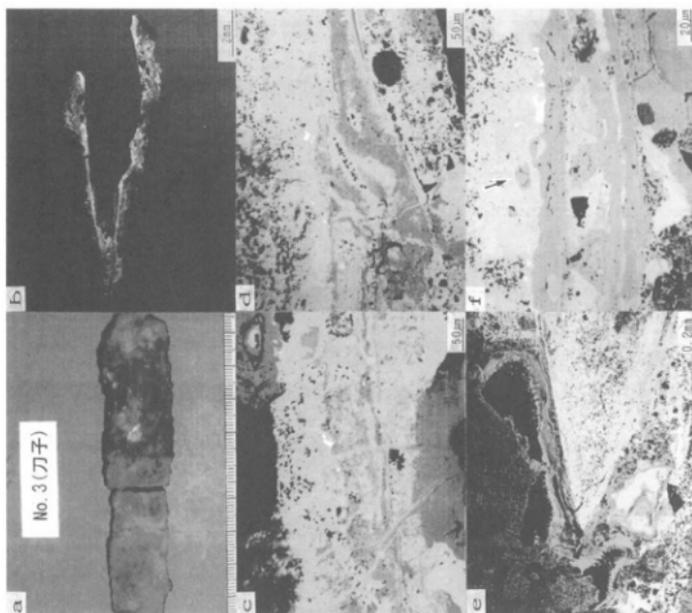


図3 試料#3



a: 外観, b: 断面の組織, c-f: 断面の組織, f: 合金層を含む (SEM).

写真3 No.3刀丁の外観と断面マクロ・ミクロ組織

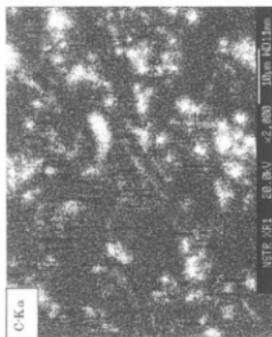
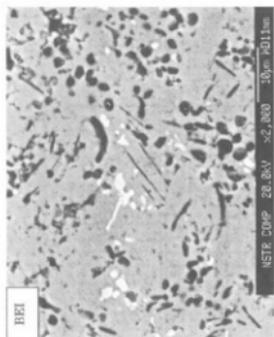


図4 試料#4

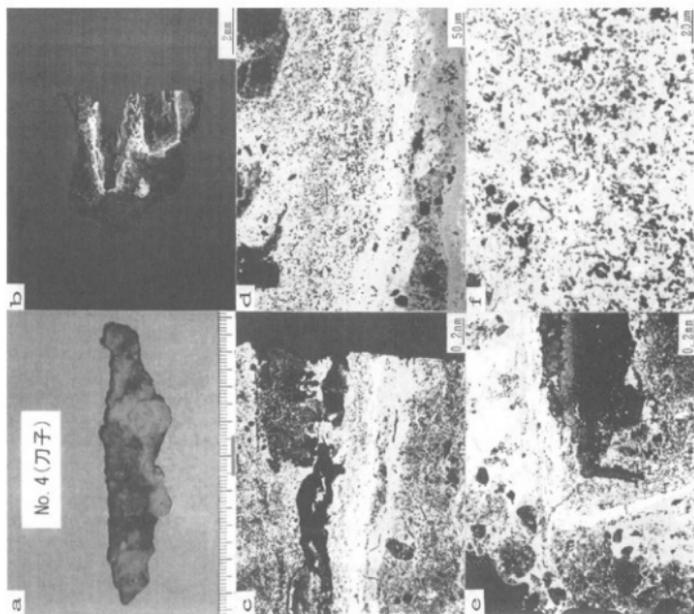


写真4 No.4(刀子)の外観と断面マクロ・ミクロ組織。

写真4 No.4(刀子)の外観と断面マクロ・ミクロ組織

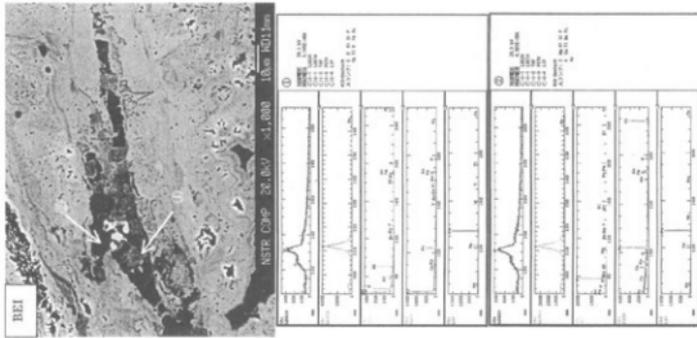


図5 試料#5

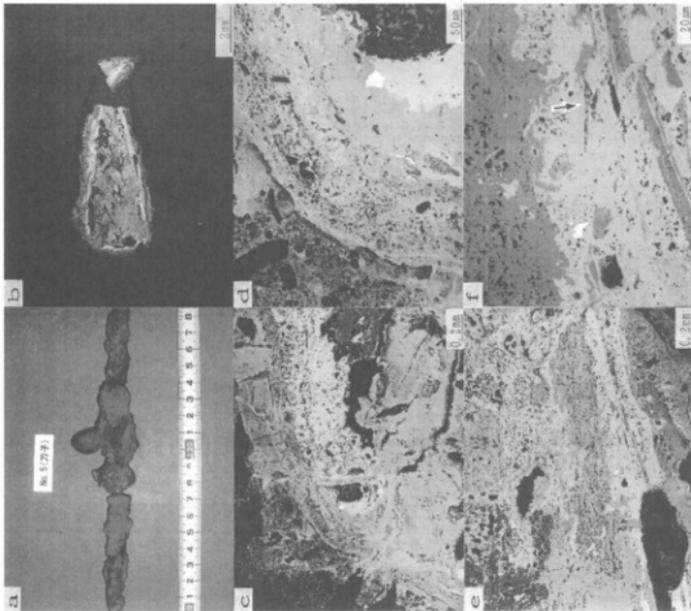


写真5 No.5打刀の外観と断面マクロ・ミクロ組織

g: 外観, b: 断面マクロ組織, c-d: 断面ミクロ組織, f: 非金属材料

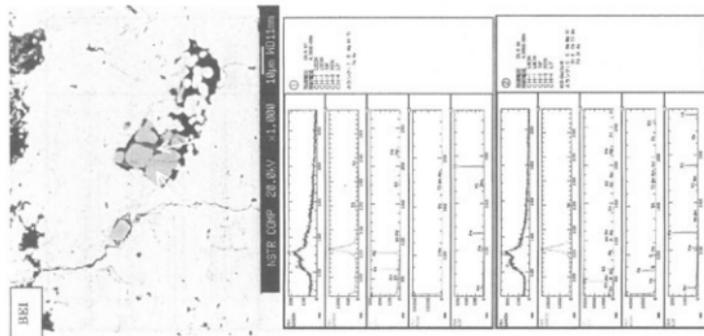
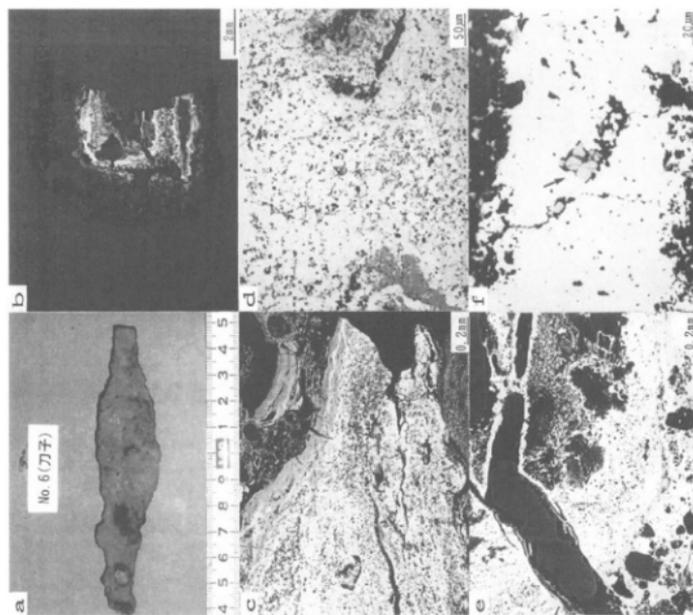


図6 試料#6



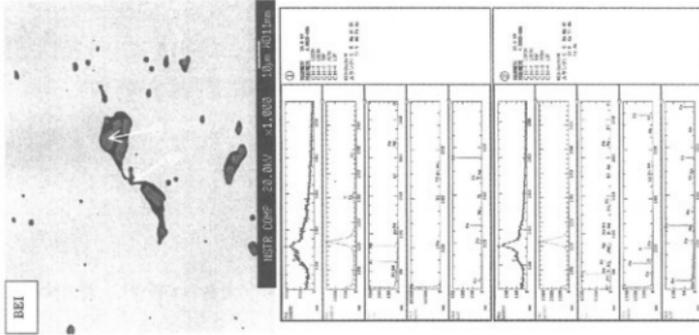
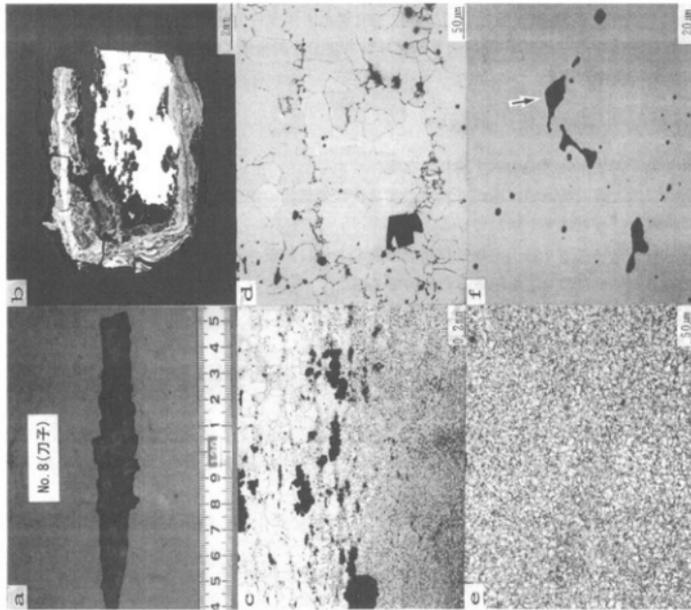


図7 試料#8

写真7 No.8刀子の外観と断面マクロ・ミクロ組織
a：外観、b：断面マクロ組織、c-f：断面マクロ・ミクロ組織、f：非金属介在物（矢印）。

7 本宮熊堂B遺跡出土須恵器胎土分析

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

X線回折試験及び化学分析試験

(1) 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は上器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02° 計数時間: 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

(2) X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイヤグラム

第1図に示すように三角ダイヤグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont、Mica、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイヤグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mont}/(\text{Mont}+\text{Mica}+\text{Hb}) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMica、Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1~4はMont、Mica、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb菱形ダイヤグラム

第2図に示すように菱形ダイヤグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の内、

- a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、
- c) Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。菱形ダイヤグラム内にある1～7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO₂-Al₂O₃図、Fe₂O₃-MgO図、K₂O-CaO図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

(3) X線回折試験結果

3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には中半入遺跡・内屋敷遺跡・本宮熊堂B遺跡から出土した土器が記載してある。

第1表に示すように胎土はDの1タイプが検出された。H15年度に分析した中半入遺跡の土器との対比でDタイプに該当したものである。

Aタイプ：Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Bタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。

Cタイプ：Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Dタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。

あかやき土器と土師器は焼成温度が低く本来の組成に近いもので、成分が含まれない胎土であるが、須恵器は高温で焼成されているため鉱物がガラスに変質して4成分が検出されないもので、その意味するところに差がある。本宮熊堂B遺跡の6個が該当する。

3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといったことは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第5図には中半入遺跡・内屋敷遺跡・本宮熊堂B遺跡から出土した土器が記載してある。図に示す

ように、4タイプと“その他”に分類される。

Qt : 小・須恵器 1 - Qtが800~2300、Plが0~220の領域に分布する。
本宮熊堂B-2, 4, 5, 6の4個が該当する。

Qt : 大・須恵器 2 - Qtが2300~3300、Plが50~300の領域に分布する。
本宮熊堂B-1と3の2個が該当する。

(4) 化学分析結果

第2表化学分析表には中半入遺跡・内屋敷遺跡・本宮熊堂B遺跡から出土した上器が記載してある。

4-1 SiO₂-Al₂O₃の相関について

第6図SiO₂-Al₂O₃図に示すように土器はI~IIIの3タイプと“その他”に分類される。

Iタイプ: SiO₂が62~70%、Al₂O₃が18~27%の領域に分布する。
須恵器、土師器、あかやき上器のほとんどが集中する。
本宮熊堂B-2, 4, 6の3個が該当する。

IIタイプ: SiO₂が63~65%、Al₂O₃が16~18%の領域に分布する。

IIIタイプ: SiO₂が60~64%、Al₂O₃が18~25%の領域に分布する。
本宮熊堂B-1と3の2個が該当する。

“その他”: 本宮熊堂B-5はどのグループにも属さず、異質である。

4-2 Fe₂O₃-MgOの相関について

第7図Fe₂O₃-MgO図に示すように土器は5のグループに分類される。

Fe₂O₃: 小: Fe₂O₃が2.2~5.8%、MgOが0%の領域に分布する。
本宮熊堂B-1が該当する。

Fe₂O₃: 中: Fe₂O₃が5.8~8.3%、MgOが0%の領域に分布する。
本宮熊堂B-2と6の2個が該当する。

Fe₂O₃: 大: Fe₂O₃が11.8~12.2%、MgOが0%の領域に分布する。
本宮熊堂B-1と3の2個が該当する。

MgO: 高: Fe₂O₃が2~12%、MgOが0~0.6%との領域にある。
本宮熊堂B-4が該当する。

4-3 K₂O-CaOの相関について

第8図K₂O-CaO図に示すように土器は2つのグループと“その他”に分類される。

K₂O: 小: K₂Oが1.0~1.8%、CaOが0.2~1.0%の領域に分布する。
本宮熊堂B-1と5の2個が該当する。

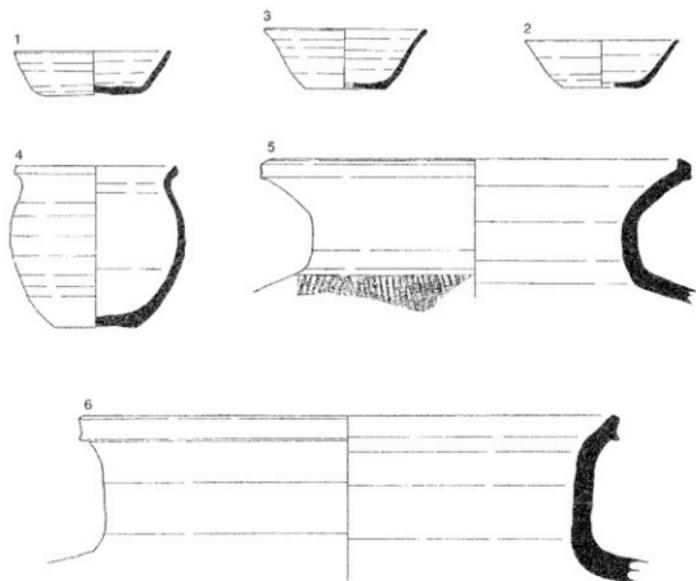
K₂O: 中: K₂Oが1.7~2.8%、CaOが0~0.8%の領域に分布する。
本宮熊堂B-3が該当する。

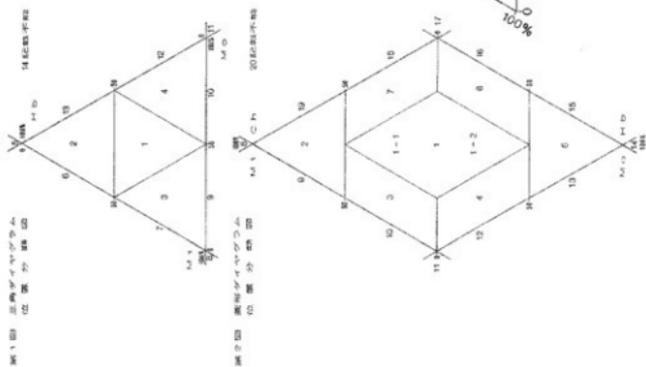
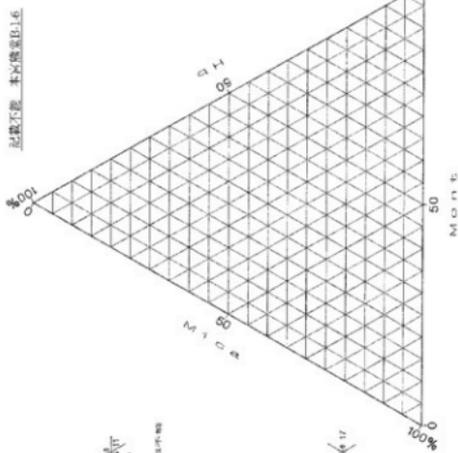
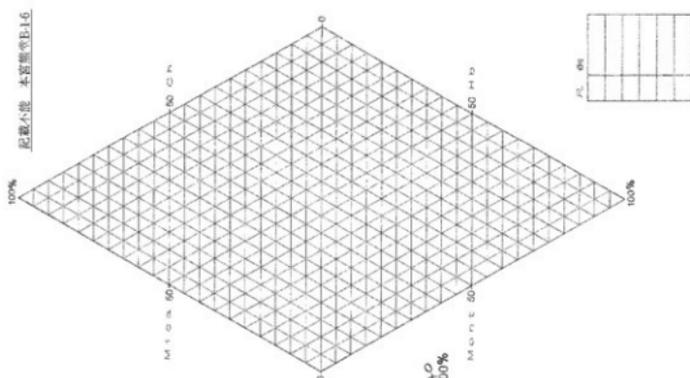
K₂O: 大: K₂Oが2.8~3.5%、CaOが0.3~0.8%の領域に分布する。
本宮熊堂B-2, 4, 6の3個が該当する。

(5) ま と め

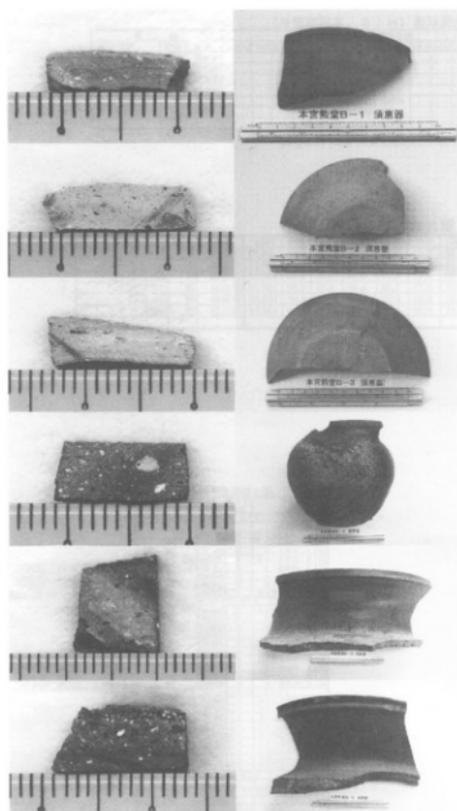
分析結果に基づいて第4表組成分類表を作成した。表に示すように中半入遺跡・内屋敷遺跡・本宮熊堂B遺跡から出土した土器が記載してある。

- 1) 土器胎土はA～Dの4タイプに分類されたもののうち内屋敷遺跡の土器はDタイプのみが検出された。あかやき土器と土師器は焼成温度が低く本来の組成に近いもので、4成分が含まれない胎土であるが、須恵器は高温で焼成されているため鉱物がガラスに変質して4成分が検出されないもので、その意味するところが異なる。本宮熊堂B遺跡の土器はすべてDタイプである。
- 2) 土器の胎土のX線回折試験と蛍光X線分析では、12タイプに分類された。本宮熊堂B遺跡の須恵器は「Iタイプ:Qt小・Fe₂O₃中:須恵器」に該当する本宮熊堂B-2と6、「IIIタイプ:Qt大・須恵器」に該当する本宮熊堂B-1と3、「その他」に該当する本宮熊堂B-4と5に分類された。
- 3) 本宮熊堂B-2と6の2個は中半入遺跡の須恵器; 甕の「Iタイプ:Qt小・Fe₂O₃中:須恵器」と組成が類似する。本宮熊堂B-1と3の「IIIタイプ:Qt大・須恵器」は既分析のタイプとは組成が異なり、別のタイプである。本宮熊堂B-4と5はともに組成が異なり、既分析の組成とも異なり、各々が別の産地と思われる。

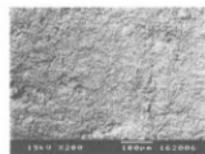
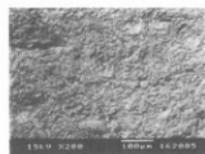
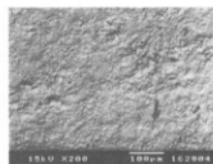
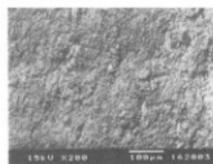
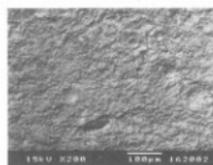
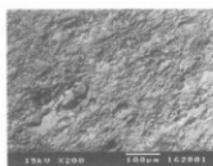


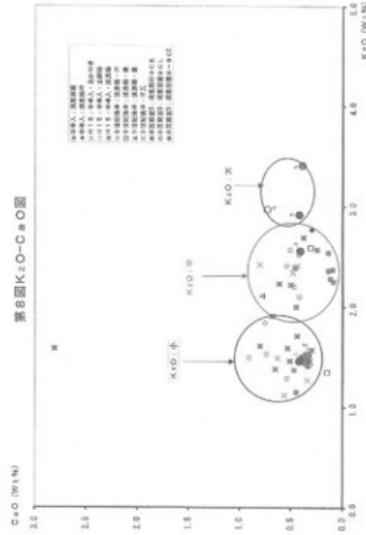
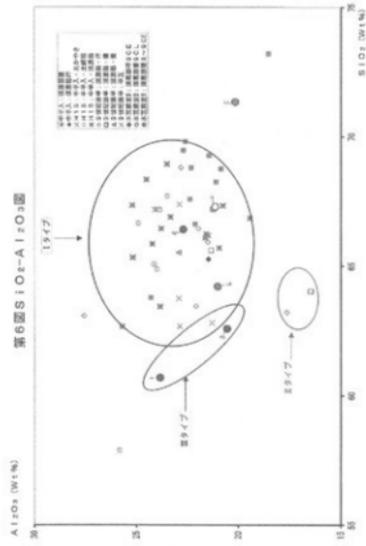
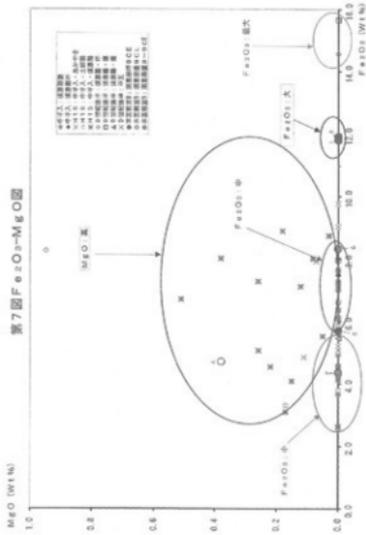
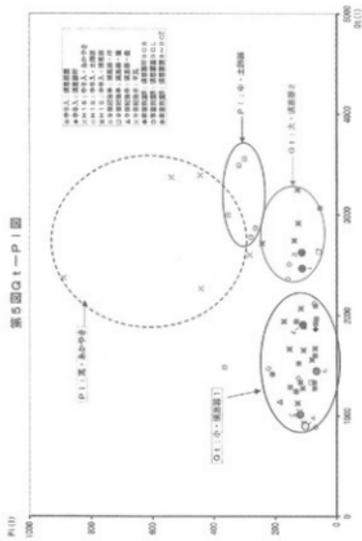
第3図 MO-MI-Hb
三角ダイアグラム第4図 MO-Ch-MI-Hb
菱形ダイアグラム

本宮熊堂B遺跡



本宮熊堂B遺跡電子顕微鏡写真





JEOL JED-2001
SPRINT Ver. 2.18

試料名: Matomiyu(SCE),Sueki,Tsuki-1

測定日時: 18年02月04日 11時42分46秒

分析日時: 18年02月04日 11時45分49秒

---測定---ジオメトリ ボラメータ ---

加速電圧: 15.00 kV 電子出し電圧: 20.32 eV

照射電流: 127.46 枚/秒 照射時間: 100.00 秒

---分析結果---

元素	分析値	標準値	原子番号	化合物	標準値	ZLシフト
Na	K	0.00	NaCl		0.00	0.0000
Al	K	9.48	Al2O3		23.82	7.8127
Si	K	32.27	SiO2		51.98	15.0000
K	K	20.96	K2O		36.0228	10.0000
Ca	K	0.30	CaO		0.42	0.2024
Mg	K	0.30	MgO		0.26	0.1478
Fe	F	8.24	Fe2O3		11.92	7.0068
O	L	47.08	NiO		0.00	0.0000
合計		100.00			100.00	----

JEOL JED-2001
SPRINT Ver. 2.18

試料名: Matomiyu(SCE),Sueki,Tsuki-2

測定日時: 18年02月04日 11時45分24秒

分析日時: 18年02月04日 11時48分27秒

---測定---ジオメトリ ボラメータ ---

加速電圧: 15.00 kV 電子出し電圧: 20.32 eV

照射電流: 127.46 枚/秒 照射時間: 100.00 秒

---分析結果---

元素	分析値	標準値	原子番号	化合物	標準値	ZLシフト
Na	K	0.00	NaCl		0.00	0.0000
Al	K	10.08	Al2O3		20.18	8.2189
Si	K	32.27	SiO2		51.98	15.0000
K	K	21.20	K2O		36.02	11.0234
Ca	K	0.22	CaO		0.41	0.2472
Mg	K	0.45	MgO		0.17	0.2341
Fe	K	8.28	Fe2O3		11.90	0.3927
O	L	47.72	NiO		0.10	0.0000
合計		100.00			100.00	----

JEOL JED-2001
SPRINT Ver. 2.18

試料名: Matomiyu(SCE),Sueki,Tsuki-2

測定日時: 18年02月04日 11時42分46秒

分析日時: 18年02月04日 11時45分56秒

---測定---ジオメトリ ボラメータ ---

加速電圧: 15.00 kV 電子出し電圧: 20.32 eV

照射電流: 125.31 枚/秒 照射時間: 100.00 秒

---分析結果---

元素	分析値	標準値	原子番号	化合物	標準値	ZLシフト
Na	K	0.00	NaCl		0.00	0.0000
Al	K	10.04	Al2O3		20.18	8.2189
Si	K	31.04	SiO2		51.98	15.0000
K	K	20.96	K2O		36.02	11.0234
Ca	K	0.20	CaO		0.42	0.2024
Mg	K	0.37	MgO		0.26	0.1478
Fe	K	8.24	Fe2O3		11.90	0.3927
O	L	46.99	NiO		0.12	0.0000
合計		100.00			100.00	----

JEOL JED-2001
SPRINT Ver. 2.18

試料名: Matomiyu(SCE),Sueki,Tsuki-4

測定日時: 18年02月04日 11時41分29秒

分析日時: 18年02月04日 11時42分56秒

---測定---ジオメトリ ボラメータ ---

加速電圧: 15.00 kV 電子出し電圧: 20.32 eV

照射電流: 125.87 枚/秒 照射時間: 100.00 秒

---分析結果---

元素	分析値	標準値	原子番号	化合物	標準値	ZLシフト
Na	K	0.00	NaCl		0.00	0.0000
Al	K	11.18	Al2O3		20.18	8.2189
Si	K	31.18	SiO2		51.98	15.0000
K	K	20.22	K2O		36.02	11.0234
Ca	K	0.22	CaO		0.41	0.2472
Mg	K	0.27	MgO		0.17	0.2341
Fe	K	8.24	Fe2O3		11.90	0.3927
O	L	46.99	NiO		0.05	0.0000
合計		100.00			100.00	----



JFOI, JFD-2001

S.P.K.: N.T. ver. 2.13

試料名: 800mg/100(82), 800g, kkan-c

測定日時: 1996年02月04日 11時29分48秒

測定日時: 1996年02月04日 11時29分58秒

測定条件: 15.00 kV 照射面: 銅

測定条件: 126.73 秒 照射面: 銅

測定条件: 20.32 度

測定条件: 100.00 秒

測定条件: ---

測定条件: ---

元素	分析値	標準値	偏差	標準差	検出限界
Na	0.83	0.74	0.09	1.12	0.2046
K	16.69	16.20	0.49	20.15	6.2512
Mg	10.60	9.17	1.43	11.03	3.7015
Si	33.34	24.52	8.82	21.23	21.2845
Al	1.24	1.24	0.00	1.24	0.3936
Ca	0.24	0.15	0.09	0.34	0.2026
Ni	0.50	0.22	0.28	1.02	0.4058
Fe	5.66	1.13	4.53	16.20	2.3113
Zn	0.01	0.01	0.00	0.06	0.0029
合計	100.00	100.00	0.00	100.00	

JFOI, JFD-2001

S.P.R.I.N.T. Ver. 2.10

試料名: No.000mg/100(82), 800g, kkan-c

測定日時: 1996年02月04日 11時29分58秒

測定日時: 1996年02月04日 11時30分28秒

測定条件: 15.00 kV 照射面: 銅

測定条件: 125.09 秒 照射面: 銅

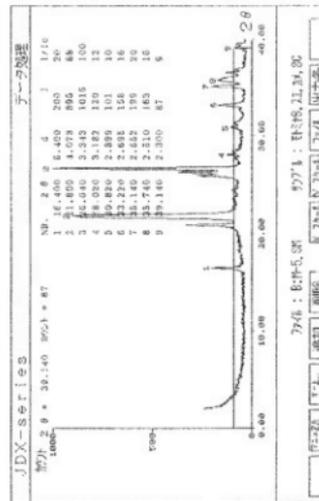
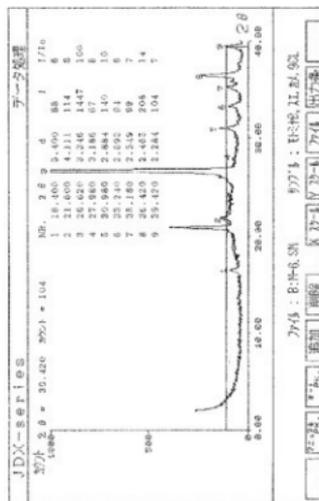
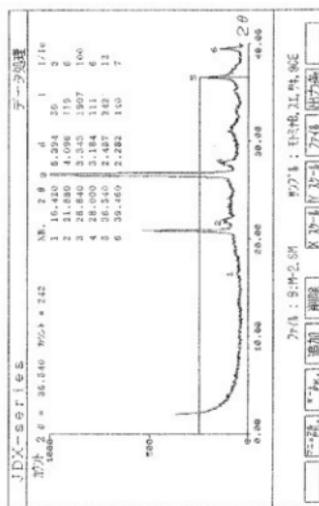
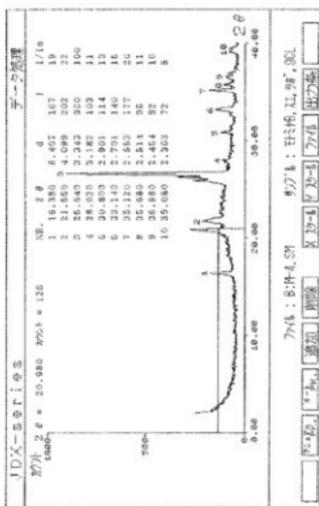
測定条件: 20.32 度

測定条件: 100.00 秒

測定条件: ---

測定条件: ---

元素	分析値	標準値	偏差	標準差	検出限界
Na	0.99	0.74	0.25	1.12	0.2046
K	16.69	16.20	0.49	20.15	6.2512
Mg	10.60	9.17	1.43	11.03	3.7015
Si	33.34	24.52	8.82	21.23	21.2845
Al	1.24	1.24	0.00	1.24	0.3936
Ca	0.24	0.15	0.09	0.34	0.2026
Ni	0.50	0.22	0.28	1.02	0.4058
Fe	5.66	1.13	4.53	16.20	2.3113
Zn	0.01	0.01	0.00	0.06	0.0029
合計	100.00	100.00	0.00	100.00	



8 調査者のコメント

自然科学分析は、各堅穴住居から出土した資料を用いて、火山灰同定、炭化米DNA分析、炭化材・炭化米年代測定、炭化材樹種同定、カマド堆積土内の種実同定、鉄製品・鉄滓の成分分析、須恵器胎土分析を行った。ここでは分析を行うにあたっての目的及びサンプリング方法と資料の抽出方法について述べておく。

(1) 火山灰同定

複数の堅穴住居の床面近く及び堆積土中から十和田aテフラを確認した。それらの堅穴住居と土器から得られた年代観と当該地域で観察できる火山灰の年代に開きが認められたことから、堆積していく環境に何らかの問題が存在しているという疑問をもったことから分析を行っている。また、それらの供給源を特定することを目的としている。分析は8～9世紀後半にかけて土器が出土している堅穴住居を中心に同定作業を行っており、資料は複数取り上げたものを任意に選択している。

(2) 炭化米のDNA分析

RA105の床面直上から出土した炭化米のDNA分析を行い、当該地域の食文化や古環境を明らかにすることを目的としている。分析するにあたって担当者に選別してもらい、残存状況の良好のものをサンプリングしてもらい分析を行っている。

(3) 炭化材・炭化米年代測定

RA111・130から出土した炭化材とRA105から出土した炭化米の年代測定を行った。それぞれの年代測定を目的としている。分析資料は堅穴住居の床面直上から検出したものに限定して取り上げを行っており、分析にあたっては任意に資料を選択している。

(4) 炭化材樹種同定

炭化材RA111・130から出土した炭化材とカヤ状の炭化物の樹種を明らかにすることで、上層構造に用いられた樹種を同定していくことを目的としている。肉眼により組織が観察できた箇所を選別している。分析にあたっては任意に資料を選択している。

(5) カマド内の種実同定

カマド内の焼土直上の上を取り上げ食生活の一端を明らかにすることを目的としている。概ね各住居から9号袋1袋分の堆積土を取り上げた。それらをまずセンターに持ち帰り水洗浄を行い、1mmメッシュのフルイで底に沈殿したものと0.5mmメッシュのフルイで水面に浮遊した物をすくい上げた。それらを乾燥させた後に選別をしている。選別したものはシャーレに保存したもののみ同定を行っている。それ以外の肉眼選別で拾えなかった資料はすべてセンターで保存している。

(6) 鉄製品・鉄滓の成分分析

奈良時代と平安時代の刀子や鉄滓の成分分析を行うことで、鉄生産構造の一端を明らかにすることを目的としている。鉄製品と鉄滓の成分分析にあたっては、X線撮影した後、分析担当者と打ち合わせて鉄の残存状況の良好な箇所を選択している。

(7) 須恵器胎土分析

胎土分析を行うことで、須恵器窯もしくは産地を特定していくこととする。分析資料は8世紀代、9世紀初頭、9世紀後半に属する堅穴住居から出土した須恵器を抽出して分析を行っている。分析にあたっては断面が確認できる資料を選択しており、サンプリングの採取箇所は任意に設定している。

X 調査の成果

1 遺構の検討

(1) 竪穴住居跡

今回の調査では奈良時代が23棟、平安時代が17棟、時期不明が3棟の計43棟を検出した。各項目ごとに検討した結果、以下のような傾向が認められる。

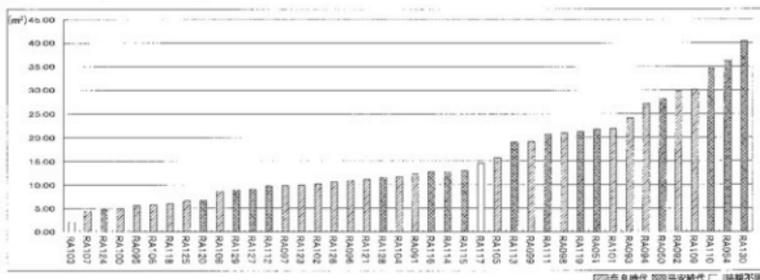
〔立地〕遺跡は宇石川南岸に形成された段丘上に位置しており、本調査区は遺跡の北側、段丘崖に隣接する縁辺部にあたる。調査区内の地形は、「2. 地形・地質」で述べているように5L20cグリッド付近の標高が最も高く、そこから三方向に向かって緩やかに傾斜していく。今回の調査区内において遺構は、希薄な範囲が確認されているものの、概ね密集して存在している。竪穴住居は時期によって立地する場所が異なり、奈良時代は段丘のより縁辺部付近を占地し、平安時代はそれよりやや南方の内陸部に中心を移していく。

〔重複〕竪穴住居が重複関係にあるものは、RA109・103（前後関係不明）→RA128、RA126→RA119、RA130→RA127の3例である。過去の成果においても重複関係が認められる例は少ない。重複しない理由として、段丘上に平坦面が広く存在していることから利用できる土地が多く存在していたことと、「堆積土」の項において後述するが、埋土の堆積過程が遅かったため過去の竪穴住居であった窪地は利用しにくく不向きであったことなどが考えられる。

〔平面形〕平面形は方形や長方形、楕円形などが確認されている。方形が35棟と最も多く、残りは長方形が5棟、楕円形が1棟、不明が2棟である。これらの平面形は、時期や規模とは関係なく出現していたことが窺える。

〔床面・床面積〕床面は、ほぼ全面を貼付することで構築しており、高低差は僅かに認められるもののほぼ平坦で硬くしまっている。38棟で貼床が存在していたがそれ以外の住居では確認できなかった。貼床の薄い所では地山である層層が認められるものもあった。

床面積は、時期を問わず規模を優先して並べると第176図ようになる。これらの中で計測可能であった竪穴住居は42棟あり、床面積は4.71～40.39㎡、平均値が16.70㎡である。この図からは、8㎡以下、9～16㎡、18～24㎡以上、25㎡以上でそれぞれまとまるような傾向が捉えられた。それらのまとまりを小規模から便宜上Ⅰ～Ⅳ類としておく。この図から少なからず各時代ごとに床面積の傾向が捉えられるのでまとめておく。



第176図 竪穴住居床面積

第31表 型穴住居一覧表

住居No.	平面図	東 西 (m)	南 北 (m)	住居面積 (㎡)	主軸方向	状	カマド位置	土柱式	基礎形式
RA50	方形	東2.9・西1.9・北4.5	28.24	N33°・E	東方柱土	東壁中央より中心北壁間	—	—	—
RA51	方形	東1.7・西1.0・北1.0	21.75	N・3°・E	東方柱土	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA54	方形	東4.7・南3.7・北2.9	26.28	N33°・E	東方柱土	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA91	方形	北西3.3・北東3.1・南東3.5・南西3.4	12.23	N40°・W	東方柱土	西壁中央より北壁間	—	—	—
RA92	長方形	東5.6・北2.4・南2.0・西4.6	29.73	N42°・W	東方柱土	西壁中央	—	—	—
RA93	方形	南1.7・北1.0・東1.9・西1.9	24.13	N43°・W	東方柱土	西壁中央	—	—	—
RA99	方形	南3.7・北4.8・東4.6・西4.3	27.00	N47°・W	東方柱土	西壁中央	—	—	—
RA95	方形	北2.9・東2.6・南2.3・西2.4	5.6	N45°・E	東方柱土	北壁中央	—	—	—
RA96	方形	南1.2・東1.7・北1.7・西1.3	10.88	N45°・W	東方柱土	北壁中央	—	—	—
RA97	方形	南1.2・北2.8・東1.3	9.75	N36°・W	東方柱土	西壁中央	—	—	—
RA98	長方形	南1.6・北2.2・東3.3・西4.0	20.07	N48°・W	東方柱土	西壁中央より北壁間	—	—	—
RA99	方形	東1.7・北2.2・東4.3・北3.8	19.1	N84°・W	東方柱土	西壁中央	—	—	—
RA100	方形	南1.4・北1.2・東2.4・西2.2	4.86	N76°・W	東方柱土	西壁中央	—	—	—
RA101	方形	南4.7・北4.8・東4.4・西4.8	21.85	N49°・W	東方柱土	西壁中央	—	—	—
RA102	方形	南3.4・東3.3	10.15	N40°・W	東方柱土	西壁中央	—	—	—
RA103	長方形	東南1.7・南東1.2	2.12	N42°・E	地山	東壁中央	—	—	—
RA104	方形	北西3.1・南東2.9・南東3.5	11.68	N45°・W	東方柱土	北西壁	—	—	—
RA105	長方形	南東2.8・南西4.6	15.72	N7°・W	東方柱土	北壁	—	—	—
RA106	方形	北東1.4・北西1.0・南東2.7・南西2.4	5.69	N49°・W	東方柱土	北西壁中央	—	—	—
RA107	方形	北2.2・東3.7・南1.7・西1.7	4.34	N13°・W	東方柱土	北壁中央	—	—	—
RA108	方形	南4.3・北西2.7・北東2.5・南西2.7	8.67	N47°・W	東方柱土	東壁中央	—	—	—
RA109	方形	東5.5・北3.3・東3.7・南3.0	30.19	N45°・W	東方柱土	東壁中央	—	—	—
RA110	方形	南3.1・北3.1・東6.0・西3.7	34.36	N83°・W	東方柱土	地盤中央より北壁間	—	—	—
RA111	方形	東南1.9・南北2.8	20.8	N26°・E	東方柱土	東壁中央より中心北壁間	—	—	—
RA112	方形	西1.6・北1.7・東1.4	9.72	N48°・E	東方柱土	東壁中央より中心北壁間	—	—	—
RA113	方形	北1.6・東1.5・南3.7・西3.5	12.71	N・8°・W	東方柱土	長壁中央	—	—	—
RA114	方形	東3.6・南4.9・西3.6・北1.0	32.69	N33°・E	東方柱土	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA115	方形	東3.0・南4.9・西3.0・北2.8	32.68	N43°・E	東方柱土	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA116	長方形	南1.2・北1.5・東3.7・西3.4	14.55	N48°・W	東方柱土	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA117	長方形	北西2.3・北東2.7・南東2.2・南西2.1	5.91	N37°・W	地山	西壁中央	—	—	—
RA118	長方形	東4.8・南4.8・西4.6・北4.5	44.55	N48°・W	東方柱土	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA119	方形	東南1.9・北東2.8・南東2.6・南西1.0	6.68	N43°・E	地山	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA120	方形	東3.1・南4.1・西3.3	11.06	N37°・W	地山	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA121	不明	南東2.0	1.79	—	地山	西壁	—	—	—
RA122	方形	北東3.1・北西2.9・南東2.1・南西2.6	9.9	N36°・W	東方柱土	北壁中央	—	—	—
RA123	方形	北2.1・東2.3・南2.0・西2.2	4.71	N27°・W	東方柱土	北壁中央	—	—	—
RA124	方形	北東2.2・北西2.3・南東3.3・南西1.6	6.38	N27°・W	東方柱土	北壁中央より北壁間	—	—	—
RA125	方形	東5.3・北1.4・南1.6	10.6	N7°・W	東方柱土	西壁中央	—	—	—
RA126	長方形	東4.1・南1.6・西3.3・北3.9	9.03	N49°・E	東方柱土	東壁中央より中心北壁間	—	—	—
RA127	不明	東3.5・北東3.3・東3.4・北3.5	11.54	N42°・E	東方柱土	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA128	不明	東3.7・南2.2	8.03	N26°・W	東方柱土	東壁中央より北壁間	—	—	—
RA129	不明	—	—	—	—	—	—	—	—
RA130	方形	東5.5・南東7.7・西5.7・北5.8	40.89	N7°・E	東方柱土	東壁中央より北壁間	—	—	—

奈良時代は17棟存在しており、床面積は4.96～30.19㎡、平均は15.14㎡である。当該期は各層が認められ、Ⅰ類は4棟、Ⅱ類は6棟、Ⅲ類は3棟、Ⅳ類は4棟ある。各層に隔たり無く存在しており分散傾向にある。規模の平均は全体の平均値より小さく、Ⅰ～Ⅱ類の間にまとまる。

平安時代は14棟存在しており、床面積は4.71～40.39㎡、平均は20.43㎡である。当該期は各層が認められ、Ⅰ類は1棟、Ⅱ類は5棟、Ⅲ類は4棟、Ⅳ類は4棟ある。Ⅰ類以外の各層に多くは存在している。規模の平均は全体の平均値より大きく、特にⅡ～Ⅲ類の間にまとまる。

[軸線方向] 竪穴住居の残存状況の良好な壁を基準として計測しており、第31表に示した通りである。軸線方向は南北方向の軸に直交しているものと斜交しているもの両者が存在しており、奈良時代と平安時代では少なからず傾向が異なる。

奈良時代は前者と後者の割合はほぼ同数であるが、平安時代と比べると斜交しているものが日立つ。平安時代は前者が圧倒的に多く、後者は僅かにしか存在していない。

本遺跡に限って言えば調査区の周辺ではほぼ同じような傾向を示しているものの、南東部においては平安時代のものは大半が斜交する。このことから軸線方向は時期により決定されるものではなく、地形や交通路などの何らかの要因により規定されていたと考えられる。

[堆積土] 断面による堆積土の観察では、R A 054の礫を廃棄している状況を確認できた以外は大半が自然堆積によるものである。堆積土中において十和田 a テフラを確認できたのでまとめておく。

十和田 a テフラを8棟 (R A 050・051・092・094・109・110・111・117) で確認できた。面として堆積することはなくブロック状に混入していた。それらの所属時期は、奈良時代が3棟、平安時代が5棟である。前者は床面付近で検出できたものは1棟 (R A 092)、堆積土中で確認できたものは2棟 (R A 094・109) ある。後者は埋土下位から床面にかけて確認できたものは4棟 (R A 050・051・111・117)、埋土上位から中位にかけて確認できたものは1棟 (R A 110) ある。これらの中で、R A 092・094・109・110・111に堆積しているテフラの自然科学分析を行った (292頁参照)。その結果、R A 092に堆積しているもののみ二次堆積である以外は全て一次堆積とのことであった。

一次堆積している竪穴住居の詳細な所属年代は、8世紀代 (R A 094・109) と9世紀初頭 (R A 110)、9世紀後半 (R A 111) である。このテフラが堆積している状況は先述しているように、一次堆積であるにも関わらず、床面より上位の10～30cmの間に収まっている状況を観察でき、竪穴住居の時期とテフラの堆積位置 (深さ) には関係が認められない。このことから8世紀代や9世紀初頭に位置付けられる遺構は堆積土の堆積する過程が緩やかであったと考えられる。同じ遺跡内であっても遺構の立地場所などの地形環境により堆積土の堆積過程の進度が異なっていたことなどが想定される。本遺跡においては、遺物が存在せず堆積土中に一次堆積の十和田 a テフラを確認できたとしても所属時期決定の根拠には不十分だと考えられる。

[カマド] カマドは44基を検出した。天井部が残存することはなく、袖と燃焼部、煙道のみの確認であった。1棟に対して作り替えなどにより複数基が認められているのはR A 054・108・109・110の4棟である。残りはすべて単独で設置されている。複数認められたものの中には、R A 108と110は異なる壁にそれぞれ設置されていたが、R A 109では同一壁において作り替えが認められた。

袖の構築方法は5種類ある。それらは、地山削り出し、構築土のみ、削り出した地山を構築土で覆っているもの、構築材に礫を用い構築土で覆っているもの、土師器甕を用い構築土で覆っているものからなる。

煙道は例杖式と掘込式がある。前者は10棟、後者は24棟、不明は10棟確認されている。奈良時代は両者がほぼ同じ割合で存在しているが、平安時代はやや掘込式の割合が多い。ただしこれらは煙道上

半部が削平されているため不明な点が多い。また、掘込式の中で煙道の脇に礫が配されているのを R A119と130で確認できた。これらは礫が煙道の上端に平行して配置されている状況から暗渠状の形態であった可能性がある。煙道の長さは0.71~1.91mを測り、その長さにまともりは認められない。

支脚を確認できたものは11棟あり、3種類の 방법으로設置されている。楕円形状の礫を直立させているもの、土器を倒立させているもの、両者を組み合わせ土器の中に礫を入れているものからなる。これらは時期を問わず用いられている。土器を使用する支脚は土師器甕を用いる類例が多く認められるが、R A097は土師器鉢、R A119は倒立させた土師器坏3点を重ねて使用している類例が少なからず存在している。

軸線方向は奈良時代と平安時代では大きく異なる。奈良時代は西に振れているのが主体であり、真北方向を向くものは僅かにしか存在しない。平安時代は東に振れているのが主体であり、それ以外の方向を向くものは僅かにしか存在しない。奈良時代と平安時代では設置されている方向が明確に分かれていることから、本調査区及びその周辺においては遺物が出土していなくてもカマドの軸線方向から時代を特定できる要因に成りうるものと思われる。

[土坑・柱穴] 貯蔵穴状土坑を伴うものは7棟ある。柱穴を確認できたものは22棟あり、そのうち主柱穴と判断できるものは15棟ある。

貯蔵穴状土坑は、所属時期を問わず認められており、カマド脇もしくは壁際に設置されている。これらの規模は長軸60~120cm前後、深さは5~23cmである。堆積土中から個体復元できる土器がまわって出土している。

柱穴を確認できたものは検出数の半数近く存在しているが、それらの中で主柱穴としたものは15棟ある。主柱穴の配置には4種類の方法が認められる。住居の四隅の対角線上に配置されている4・6本柱のもの、カマドが壁の中央ではなくどちらかの壁際に寄って設置されていることにより、それ以外の二隅に配置されている3本柱のもの、カマドと相対する壁に2本柱が配置されているものからなる。それらの配置位置は四隅や三隅はほぼ同じであるのに対して、2本柱の場合は住居の隅よりもやや住居の中心に配置されている。柱穴は4本柱の例が最も多く、奈良・平安時代に普遍的にみられる。2本柱と3本柱の配置例は平安時代のみ存在している。住居の規模との関係は、床面積の項で述べた各型においてそれらは確認できているが、18㎡以上の面積を有するⅢ類より大きな堅穴住居に多く認められる傾向がある。

(2) その他の遺構

[土坑] 43基検出した。それらの所属時期の内訳は以下の通りである。縄文時代が2基、奈良時代が5基、平安時代が3基、時期不明なものが33基ある。特筆すべきもののみ挙げておく。R A193は多くの縄文土器が出土しており、それらは大洞A式期に比定される。R D209は奈良時代の土師器坏・甕と土坑が廃棄されている。周辺にR A104~106が存在しており、所属時期はどちらも8世紀代と同時期で平行していることから、それらの廃棄遺構であったと考えられる。

[焼土遺構] 2基検出した。それらは隣接しており、出土遺物もなく所属時期不明である。

[溝] 平安時代が1条、時期不明が3条ある。R G138は堆積土中に十和口aテフラが層状に認められたことと過去の成果と合わせて考えると、平安時代に属するものと思われる。

[柱穴] 全て出土遺物もなく所属時期不明である。それらのまともりは5カ所存在しているものの建物が建つような配置は認められない。

〔旧河道〕本宮熊堂A遺跡から検出した旧河道は、東西方向にのび、調査区外へと続いている。幅幅約10m、水深は検出面から1.6mを測る。本宮熊堂A遺跡は縄文時代晩期後葉の集落遺跡で、過去の調査で2棟の竪穴住居が検出している。しかし、隣接する本宮熊堂B遺跡からは該期の竪穴住居は確認されていない。旧河道は縄文時代晩期集落の南限に位置していた可能性がある。また隣接する本宮熊堂B遺跡は古代を主体とする大規模な集落遺跡であるが、本宮熊堂A遺跡からは古代の竪穴住居はみつからないので、この古代集落は旧河道から北側へは展開しなかったことが窺える。すなわち、旧河道は、時代を隔てた2つの集落それぞれの境界としての役割を果たしていたことが窺え、旧河道が集落の設営に大きな役割を担っていたものと思われる。

旧河道は堆積土が大きく5層に分層できる。そして1・3層中には、水流を示すラミナの形成を数箇所にも確認した。これらのラミナが洪水レベルの水流によって形成されたのか、あるいは通常考えられる河川の水流によって形成されたものかは定かではないが、仮に洪水レベルであったとすれば、このラミナにみられる水流の形跡が志波域にも影響を及ぼしたと考えられている古代の水害と何らかの関係があるのかもしれない。

旧河道の堆積土層以外の面から旧河道の存続時期について検証してみる。まず上限についてであるが、本宮熊堂A遺跡第26次調査において、遺構外から出土した剥片と旧河道4層中から出土した剥片とが接合している。また4層中からはオニグルミが多量に検出しているが、第17次調査でもかや上坑から、炭化したオニグルミが多量に出土している。これらの事象から熊堂A遺跡にみられる縄文晩期集落が存続していた頃は、旧河道は確実に存在していたことが窺える。そして旧河道が埋没した時期についてであるが、第26次調査で旧河道を切って検出した溝（RG055）から、10世紀前半の上師器が一括出土しており、この上師器群から旧河道は10世紀前半には埋没したものと推定できる。すなわち、旧河道は縄文時代晩期後葉前後から存在し、徐々に川底を上昇させながら8世紀代までは機能し、そして10世紀前半頃には完全に埋没してしまったものと推定される。

遺物は3・4層から出土している。4層からは縄文時代晩期後葉の土器、石器が、3層からは奈良時代、8世紀前半の上師器が出土している。また3・4層からは動植物遺体が多量に出土しており、これらも3層出土のものは古代に、4層出土のものは縄文晩期に比定される。この点は明瞭であり、従って多岐に渡る自然化学分析の結果も3層に関わるものは古代に、4層に関わるものは縄文時代晩期に相当する。

今回、旧河道の土壌分析（植物珪酸体、花粉、珪藻分析）を行った中で（第Ⅲ章参照）、旧河道4層の土壌分析の結果、旧河道は縄文時代晩期には河川ではなく、やや深い沼地であったという見解が示された（第Ⅲ章Ⅲ、Ⅳ節）。4層はラミナの形成も見られず、変化に乏しい層であり、1～3層とはやや様相を異にしていたので、この分析結果は納得できるものであった。また東北学院大学教養学部松本秀明教授のご教示によると、旧河道の堆積土の様相から、多少の水流はあったものの積極的に河川として機能していた可能性は低いようである。

本宮熊堂A遺跡からは、縄文時代晩期に比定される石器が、多量にみついている。しかし、その器種毎の組成をみると、石鏃などの狩猟具や敲磨器類などが多いのに対し、漁労具はほとんど見つからず、過去の第17次調査において、石鏃3点が出土したのみである。また、自然遺物が残りやすい状態でありながら、旧河道からは底岡市轄内遺跡で確認された、民漁を示す遺構は確認されなかった。このことも、旧河道が当時から「河川」として機能していなかったことを裏付けている。おそらく、本宮熊堂A遺跡の旧河道は集落の境界として、また廃棄物の捨て場としての役割を担っているが、いわゆる「河川」として、生業などに関わっていたものではないと思われる。

2 遺物の検討

(1) 出土土器

今回検出した奈良時代と平安時代の堅穴住居跡43棟及び各上土坑から、土器が多数出土している。整理するにあたっては14頁に示したような分類基準を用いている。ここでは堅穴住居から一定量出土している非ロクロの土師器坏と鉢、甕、ロクロ整形による土師器坏と須恵器坏に限ってそれぞれ分類ごとにまとめておく。

[奈良時代の土師器坏] 掲載した土師器坏は48点ある。すべて非ロクロで、器形及び器面調整の特徴から11分類している。内面黒色処理の有無でⅠ・Ⅱ類に分けている。

ⅠA1a類は13点ある。体部から口縁部にかけて外傾する。本類には段が1つのもの、47・49のように段の他に稜が形成されているもの、沈線が中位に巡らされているものがある。本来ならばさらに細分できると思われるが、点数が少ないことからここでは行っていない。本類の中には137と165のように、底部から体部にかけての立ち上がりの屈曲が強く、やや平底風に近い形状のものも存在している。分類時に明確な区分ができなかったことから本類に含めているものの、本来の丸底とはやや異なる。点数は少ないことから言及できないが、おそらく本類から区分できると思われる。口径は10.7～16.2cm、器高は3.1～4.3cmである。

ⅠA1b類は2点ある。体部から段までは外傾するが口縁部で大きく外反する。本類は体部にある段より下はハラケズリ・ミガキの順に整形され、外反する口縁はヨコナデである。底部は平底風の形状を呈している。胎土は細かく外面の色調は他類に比べて明るみが増す。口径は10.2と11.8cm、器高は4.4と4.5cmである。99の高坏も本類と同様の口縁部形態を有している。在地産には存在しないことから異系統のものと考えられる。

ⅠA1c類は2点ある。体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる。本類には複数の沈線が体部中位に巡らされているものと段のみのものがある。口径は20.4と9.8cm、器高は7.6と3.6cmである。点数は少ないものの、整形方法や法量が明らかに異なるものが確認できていることからいずれは細分できると思われる。

ⅠA1d類は6点ある。体部に存在する段もしくは稜から口縁部が垂直に立ち上がる。本類には段から直接口縁に立ち上がるものと段の上にある稜から口縁に立ち上がるものが認められるが、これらは点数が少ないことから細分していない。前者が1点存在する以外はすべて後者である。口径は11.3～15.6cm、器高は4.0～6.4cmである。法量を比較すると口径では差が認められないものの、器高において前者が後者より大きいことが窺える。

ⅠA2c類は1点ある。段が存在することなく体部は内湾する。基本的に丸底であるが174の底部は平底に近い形状をしている。口径は14.8cm、器高は4.0cmである。

ⅠA2d類は3点ある。体部から稜までは外傾して立ち上がり、稜より上は口縁まで直立する。稜より下はハラケズリ・ミガキの順に整形され、それより上はヨコナデである。胎土は細かく、外面の色調は他のものに比べ明るみが増す。口径は10.5と11.3cm、器高は2.7と3.2cmである。整形技法と法量が小ぶりであることから他類とは明らかに異なる。在地産に存在しないことから異系統のものと考えられる。

ⅠB1c類は1点ある。口縁部が残存していないことから器形は不明であるが、平底で体部に段を有している。器高は6.0cm、底径は7.4cmである。

I B2a類は3点ある。平底で体部に段を持たず口縁まで外傾する。178は他の坏と比べ小さい器形であるが本類の基準に該当するため含めている。どちらの器形もロクロの土師器坏に類似している。口径は11.0と15.3cm、底径は5.3と6.7cm、器高は2.8と5.7cmである。どちらも同じ調整技法であるが法量は大きく異なる。点数が少ないことから不明な点は多いものの、法量の差異からいずれば細分できると思われる。

I B2c類は3点ある。平底で体部に段を持たず口縁まで内湾し、稜から口縁部にかけては外傾もしくは直立する。I B2a類との差は僅かであるが内面がやや丸味帯びるものを本類としている。口径は15.5と8.8cm、底径は5.7～9.0cm、器高は2.8～4.7cmである。法量において差が認められるものの、点数が少ないことから現段階での分類は困難である。

II A1c類は1点ある。内面が黒色処理されておらず、体部に段を有し口縁部まで内湾する。本遺跡においては本資料のみの存在である。法量はI A類と同じである。

II A2c類は1点ある。内面が黒色処理されておらず、体部に段を持たず口縁部まで内湾する。II A1c類同様、本遺跡において本資料のみの存在である。

[奈良時代の土師器鉢・高台付鉢・高坏] 鉢類は15点、高台付鉢は1点、高坏は2点ある。すべて非ロクロで、鉢類のみ器形の特徴から6分類している。

i類は2点ある。体部に段を持たず、体部下半からやや膨らむものの垂直ないし外傾して口縁部まで立ち上がる。内外面の調整はハケである。どちらも破損しているため底部の形状は不明である。口径は8.9と10.2cmである。

ii類は4点ある。体部に段を持たず、体部上半部に最大径を持ち口縁部が内湾し、底部は平底である。体部にある稜から口縁部まで直立する。体部上半部にある稜を境にして上下でミガキの方向が異なり、稜より下は縦方向、上はヨコ方向である。53と101は底部が欠損しているが、内外面の調整方法と体部上半部の器形から本類に含めている。口径は10.8～12.1cmである。

iii類は3点ある。体部中央に段を持ち、内湾して立ち上がる。すべて底部が破損しているため器形は不明である。内面が黒色処理が施されていることは共通しているが、外面調整はハケとミガキがある。口径は10.3～19.7cmである。

iv類は1点ある。体部に段を持たず、外傾して立ち上がる。器形は甕の底部の器形に類似する。

v類は3点ある。体部上半部に最大径を持ち口縁部が内湾しており、底部は平底である。器高より口径が長い。体部の内外面に細かく丁寧なミガキが施されるという特徴があり、他類とは異なる。口径は13.3～15.2cm、底径は6.5と7.4cm、器高は6.7と7.1cmである。

vi類は2点ある。体部上半部に最大径を持ち口縁部が内湾しており、底部が丸底である。v類に類似した器形であるがやや小ぶりである。内外面の調整はミガキである。口径は10.3と12.5cm、器高は6.3と9.0cmである。

高台付鉢は1点ある。非ロクロのもので体部に段を有し、口縁まで内湾して立ち上がる。内外面の調整はミガキである。土師器坏には本遺物の高台を伴わないような器形は存在しない。類似した器形は須恵器高台付坏に認められることから、模倣して作られたものと想定される。在地産に認められないことから異系統のものと考えられる。

高坏は2点ある。土師器坏でも触れたI A1b類と同じ器形・整形方法で、それに脚部が付けられたものである。土師器坏でも述べたように、この器形は在地産に認められないことから異系統のものと考えられる。

[奈良時代の土師器甕・台付甕] 土師器甕は95点ある。すべて非ロクロで、長胴や球胴など器形によ

りA～C類に分けている。さらにそれぞれ口縁部形態により分類しており、長胴率は6分類、球胴率は2分類できた。基本的に頸部に段を有する。法量により、20cm未満を小型、それ以上を大型としてここでは報告している。

A 1 i類は2点ある。頸部で強く括れ口縁部は外傾し、体部上半部に最大径を持つ。頸部直下に肩部と類似した張りが認められる。器面調整はハケとミガキがある。口径は18.4と19.3cmである。法量は大型のみである。

A 1 ii類は29点ある。口縁部が外反もしくは外傾し、頸部の括れはA 1 i類と比べて弱い。最大径は概ね口径にあり、体部は円筒状をしている。本遺跡の中で最も基本的な器形である。本類は頸部に段を有するものの、段の張りがはっきり認められるものと認められないものがある。外面調整はハケが大半であるが、一部にはミガキを伴うものが存在している。口径は13.0～29.3cm、器高は13.8～28.2cmである。法量は大型が主体である。

A 1 iii類は3点ある。口縁部が直立気味に立ち上がる。基本的にはA 1 ii類で見られるような頸部の括れは存在しない。最大径は口径にあり、体部は円筒状をしている。外面調整はハケが主体である。口径は16.2～20.3cmである。

A 1 iv類は11点ある。口縁部は外反して立ち上がり、口唇部直下に稜を伴う。口縁部に稜が認められることから他類に比べ厚みがある。外面調整はハケが主体であり、僅かにヘラケズリを伴う。口径は14.7～22.2cm、器高は15.5～33.8cmである。法量は大型が主体である。

A 1 v類は3点ある。口縁部が受け口状をしている。口唇部直下にA 1 iv類とは異なり明確な稜を有する。本類は完形品が存在しないことから全体の形状は不明瞭である。確認できた外面調整はハケが主体である。口径は17.2と18.7cmである。

A 1 vi類は9点ある。口縁部は外傾ないし外反して立ち上がるが、口唇部は垂直に摘み上げられる。器形及び口縁部はii・iv類と類似しているものの、口唇部の形状が異なる。外面調整はハケである。口径は14.0～23.0cmである。法量は小型と大型が共に認められており、後者が主体である。

A 2類は1点ある。段を持たないもので、A 1 iii類とほぼ同じ器形である。

B 1 i類は1点ある。体部は球胴、頸部が強く括れ口縁部は外傾する。外面調整はハケ・ミガキの順に施されている。

B 1 ii類は1点ある。体部は球胴、口縁部が直立して立ち上がる。頸部はほとんど括れない。外面調整はハケである。

C 1類は1点ある。頸部直下の体部上半部が強く張り出した肩部を有する。A・B類と異なる器形であることから区分している。外面調整はハケである。口縁部が残存していないことから本来の器形は不明であるが、肩部は須恵器甕に類似している。土師器甕に類似する器形は認められないことから、おそらく須恵器甕を模倣したと考えられる。

台付甕は1点ある。高台以外は甕の底部から口縁部までの器形はA 1 v類と同じである。高台の高さは2cm前後と低い。外面調整も同じである。

[平安時代の土師器環] ロクロ土師器環の一群で226点出土しており、非黒色処理と内面黒色処理、内外面黒色処理のI～III類に大別される。完形の土師器環が出土した堅穴住居ごとに散布図(器高/口径/底径)を作成している。

I a類は27点ある。体部は外傾して立ち上がる。口径は12.0～15.8cm、底径は4.2～7.0cm、器高は3.7～5.2cmである。底部切り離しは回転糸切りが主体である。器高は4.3～4.5cmに集中しており、5cm以上のものは少ない。

I c i 類は41点ある。体部が内湾しながら立ち上がる。口径は11.6～16.8cm、底径は4.8～6.0cm、器高は3.7～5.4cmである。底部切り離しは回転糸切りが主体で、僅かに再調整されているものが含まれる。底径は4.8～5.2cm、器高は4.3～4.9cmにまとまりが認められる。

I c ii 類は21点ある。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部が外反する。口径は11.0～15.1cm、底径は4.9～6.3cm、器高は3.7～5.7cmである。底部切り離しは回転糸切りが主体である。

I c iii 類は71点ある。底部胴縁で屈曲し、そこから内湾して立ち上がる。口径は11.5～16.2cm、底径は3.9～7.1cm、器高は3.7～5.7cmである。底部切り離しは回転糸切りが主体で、僅かに再調整されているものが含まれている。本類は胎土中に金雲母を多く含む点では基本的に他類とは異なる。またII c iii 類にも同様の特徴が多く認められる。

I c iv 類は1点ある。底部が厚く柱状を呈している。底径は4.2cmである。底部切り離しは回転糸切りである。本来は平高台で扱わなくてはならないが、分類当初は他との差が分からなかったため本類として扱っている。

II a 類は1点ある。内面は黒色処理され、体部は外傾して立ち上がる。底部は再調整されている。口径は15.1cm、底径は6.2cm、器高は5.5cmである。他類に比べ法量は大きい。

II c i 類は25点ある。内面が黒色処理され、体部は内湾しながら立ち上がる。底部切り離しは回転糸切りと再調整されているものがある。口径は10.9～15.0cm、底径は4.0～6.4cmである。

II c ii 類は5点ある。内面が黒色処理され、体部は内湾しながら立ち上がり口縁部が外反する。底部切り離しは回転糸切りが主体で、再調整されているものも含まれる。口径は11.8～14.2cm、底径は5.3～6.7cm、器高は4.9～5.3cmである。

II c iii 類は16点ある。内面が黒色処理され、底部胴縁で屈曲し、そこから内湾して立ち上がる。底部切り離しは回転糸切りが主体である。口径は12.6～15.9cm、底径は4.5～6.8cm、器高は3.5～5.0cmである。I c iii 類でも述べたように金雲母を多く含んでいる。器高は3.5～4.2cmと4.7～5.0cmにまとまりが認められる。

II c iv 類は1点ある。内面が黒色処理され、体部下半で屈曲し、そこから碗状にやや直立気味に立ち上がる。II c iii 類と類似しているが口縁部の立ち上がりが異なることから区分している。底部切り離しは回転糸切りである。口径は12.1cm、底径は5.3cm、器高は5.8cmである。

III a 類は1点ある。内外面が黒色処理され、体部が外傾して立ち上がる。底部切り離しは回転糸切り、後に再調整されている。口径は15.4cm、底径は7.3cm、器高は6.4cmである。他類に比べ法量が大きい。

III c 類は4点ある。内外面黒色処理され、体部が内湾して立ち上がる。底部切り離しは回転糸切りとヘラケズリ、再調整されているものがある。口径は10.5～14.5cm、底径は3.6～6.0cm、器高は3.8～5.2cmである。

[平安時代の須恵器環] 須恵器環は19点ある。底部からの立ち上がりを外傾するものと体部中央で外反するものでa・b類に大別し、さらに外傾するa類を3分類した。これらの資料はすべてRA110から一括して出土したもので、それらの散布図(器高/口径/底径)を作成している。底部切り離しは全て回転ヘラ切りである。

a i 類は4点ある。体部が外傾して立ち上がり、器高が低く、底径が広い。口径は12.2～13.0cm、底径は6.2～7.4cm、器高は3.6～4.1cmである。底径が7cm前後に集中する。

a ii 類は1点ある。体部が外傾して立ち上がり、器高はa i 類と変わらないが底径はそれよりも小さい。口径は11.7cm、底径は5.4cm、器高は3.7cmである。点数が少ないことから不明な点が多いものの、

散布図において a i 類と異なることから区分している。

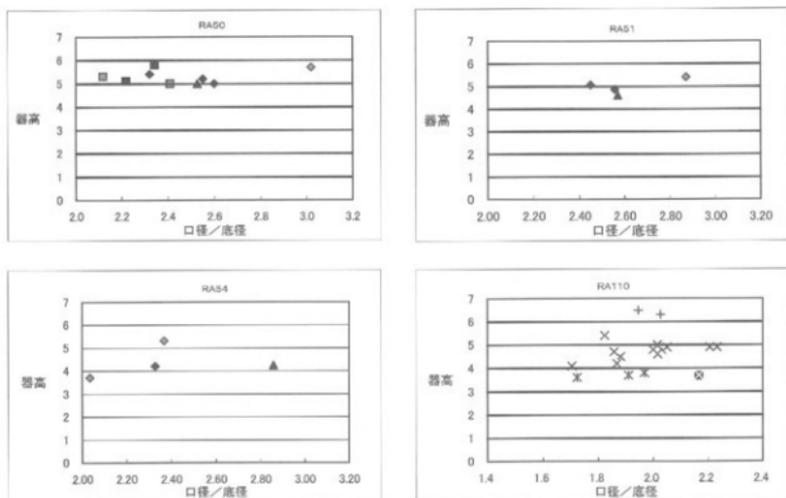
a iii 類は 2 点ある。体部が外傾して立ち上がり、法量が他類と比べて大きく散布図における分布域は明らかに異なる。口径は 14.6 と 15.4cm、底径は 7.5 と 7.6cm、器高は 6.3 と 6.5cm である。

b 類は 12 点ある。体部が外反して立ち上がる。口径は 12.3～13.4cm、底径は 5.8～7.0cm、器高は 4.2～5.4cm である。散布図において器高が 4.7～5.0cm、口径/底径が 1.8～2.2cm 近くにまとまる傾向がある。本類にのみ墨書土器が存在している。

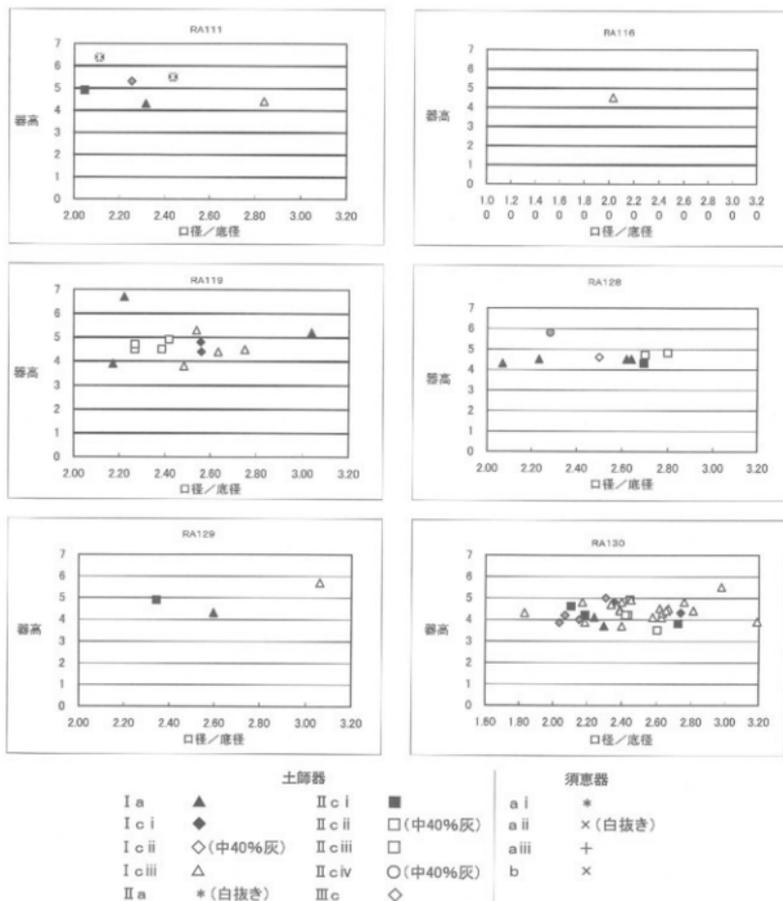
これらの土器と類似した資料が出土している遺跡と比較しておく。a i 類は、志波城跡出土の須恵器環 A 類と胆沢城出土の A1 期の須恵器 A 類、飯岡林崎 II 遺跡 R A 04 から出土している須恵器環の器形と底部切り離しが共通している。法量は、『志波城跡 I』（盛岡市教育委員会 1981）で報告している分布図を参考にすると、志波城よりは胆沢城の環の底径と近似している。また、飯岡林崎 R A 04 出土の環とはほぼ同じである。b 類は、周辺遺跡において類例は極めて少ない。飯岡林崎 II 遺跡 R A 24 から出土した環に類例が認められ、ほぼ同じ法量である。宮城県閩ノ入遺跡の S E K 11 窯に類似した器形が認められる。ただし器高において差が認められ、本遺跡の資料の方が器高が高い。

出土資料のうち a i 類 2 点と b 類 1 点の胎土分析を行った（322 頁参照）。一つは水沢市中半入遺跡や盛岡市台太郎遺跡などの成果と分布が一致する一群、もう一つは今まで分析を行ったものとは全く異なる新たな一群である。このことから須恵器窯が複数存在していたことが想定される。今後は分析の類例を増やしていくことで、窯元の特定や搬入過程を明らかにしていく必要がある。

[出土土器の法量] 完形の環と甕に限って法量を計測している。法量の計測は小林正史氏にお願いしている。土師器環の法量は 0.29～0.88 ℓ、土師器高台付環の法量は 0.48～0.78 ℓ、須恵器環の法量は



第177図 土師器散布図(1)



第178図 土師器散布図(2)

0.33～0.93 ℓである。土師器環と高台付環は分類と法量の関係は認めらず、須恵器環のみ分類と法量の関係を窺え法量分化がなされていたものと思われる。土師器甕の法量は1.08～13.79 ℓ、ロクロと非ロクロ関係なく法量分化が想定される。甕に関しては、法量の分布域を検討することでさらに細分できる可能性がある。

[出土土器の組合せ] 土器の各類と出土状況をまとめたのが第33～35表である。奈良時代・平安時代を通じて R A 110出土の須恵器以外は土師器環・甕が主体の土器群である。竪穴住居から出土した

第32表 土器法量一覧

遺物番号	法量(ℓ)								
30	7.91	331	0.42	404	0.40	479	0.88	572	0.38
31	9.11	332	0.39	405	0.34	480	0.41	573	0.44
32	9.45	333	0.46	406	0.48	481	0.53	574	0.57
36	8.11	334	0.39	407	0.41	497	0.38	575	0.42
54	1.70	335	0.44	409	0.35	498	0.34	576	0.38
68	5.35	336	0.15	414	0.80	499	0.60	577	0.41
79	8.45	337	0.36	415	0.46	500	0.40	578	0.29
86	4.11	338	0.39	416	0.26	501	0.46	579	0.31
87	2.71	339	0.49	417	0.51	502	0.54	580	0.45
88	7.49	340	0.33	418	0.65	503	0.39	581	0.48
89	10.00	341	0.15	420	0.86	504	0.33	582	0.41
149	7.84	342	0.41	424	0.48	505	0.56	583	0.42
150	6.94	343	0.36	428	0.56	509	0.41	584	0.31
181	2.82	344	0.47	429	0.36	510	0.50	585	0.41
228	2.25	345	0.37	430	0.48	511	0.47	586	0.37
231	0.38	346	0.50	431	0.30	512	0.66	587	0.56
234	0.74	347	0.93	432	0.39	515	0.78	588	0.41
235	0.59	348	0.88	433	0.32	516	0.56	589	0.43
236	0.40	360	0.63	434	0.38	519	13.79	590	0.49
237	0.68	361	0.32	435	0.42	536	0.45	591	0.35
238	0.65	362	0.54	436	0.11	537	0.45	592	0.52
244	0.53	367	1.08	437	0.38	538	0.35	597	0.31
245	0.86	368	0.53	438	0.42	539	0.41	598	0.59
247	0.67	369	0.65	439	0.41	540	0.45	599	0.47
248	0.55	376	9.12	440	0.38	541	0.44	600	0.36
251	1.16	377	10.17	441	0.38	542	0.64	601	0.40
269	0.65	383	0.42	457	0.46	543	0.54	602	0.42
270	0.49	384	0.46	458	0.59	544	0.53	603	0.33
271	0.54	387	0.61	462	0.47	552	0.66	604	0.39
272	0.58	388	0.38	463	0.42	553	0.49	625	0.55
288	0.28	399	0.76	474	0.49	558	0.57	626	0.31
289	0.34	400	0.47	475	0.75	565	0.37	610	1.31
290	0.59	401	0.39	476	0.53	569	0.53	611	4.05
292	0.33	402	0.29	477	0.53	570	0.37	612	1.93
313	1.08	403	0.46	478	0.46	571	0.35		

坏・鉢・甕の共伴関係から各時代ごとにそれらの組合せを把握しておく。

[奈良時代の組合せ] 土師器が主体であり、須恵器の頻度は極めて低い。

坏は、内面が黒色処理されているⅠ類が主体を占め、Ⅱ類は極めて少ない。Ⅰ類では、ⅠA1a・Ⅰc・Ⅰd類の在産土器が多数認められ、坏が出土している当該期の遺構の大半に存在している。それらの在産は一定して存在しているが主体となるような組合せは認められない。ⅠB類については出土点数が少ないことからその様相を把握できない。またⅠA・ⅠB類が共伴する例は少なく、各類ごとの関係性は僅かにしか窺えない。ⅠA1b類とⅠA2d類は、在産と同じように内面黒色処理されているものの、先述したように器形や調整方法において在産とは異なることから異系統の土器である。これらはRA098と099にのみ存在しており、点数は少ないものの一つの組合せと捉えられる可能性がある。ⅠA1a類の平底風の底部を有するものとⅠB類が共伴する例が窺えることから、これらも組合せと捉えられる可能性がある。

鉢は器形と段の有無により6分類している。RA098においてそれらの多くは一括して出土している。

土師器高台付鉢は1点出土している。IA・IB類の坏と共存しているものの、不明な点が多い。須恵器高台付坏を模倣したもので、他に類例が認められない。このことから異系統のものと考えられ、組合せの目安になりうるものと想定される。

甕は器形により分類しているが、A類が主体を占めており、B・C類の割合は極めて低い。A類ではAⅱ類が最も多く、甕が出土した当該期の遺構の大半で認められ、組合せは捉えられない。A類とBⅰ類は本遺跡及び周辺遺跡からも多く認められる在地産と考えられるが、Bⅱ・C類については類似した器形を確認できないことから異系統の土器と考えられる。このBⅱ・C類の土器はRA098においてのみ確認できており、組合せとして捉えられる。

坏と甕を合わせて組合せを検討していく。坏IAⅰa・IAⅰb・IAⅰ2d類と鉢類、高坏、甕Bⅰⅱ・C類、坏IAⅰa・IBⅰc類と甕Aⅰⅳ類及び高台付鉢、坏IAⅰa類の平底風のものとしてBⅰ類、甕Aⅰⅱ類の段の張りが弱くなるものに関してはRA91・93・101・107・108などで共存しており、それぞれ組合せとして捉えられる。高台付鉢は、類例がないことと須恵器を模倣していることを積極的に評価したい。坏の平底風のものとの甕の段が弱くなるもの組合せは、それぞれに対して客観的な基準を引けないことから根拠が弱いことは否めないが、少なからずこのような状況を坏と甕において確認できたことは組合せとして捉えられる。遺構致に比べて出土点数が少ないことから上述のように組合せを抽出することはかなり無理があると思われるが、当該期において3つの組合せが想定される。ただし在地産の土師器を中心とした組合せは点数が少ないことから抽出不可能であったため、これらの検討は今後の課題である。

[平安時代の組合せ] 土師器と須恵器の坏と甕がある。土師器坏と須恵器坏の組合せから5つの組合せが捉えられる。

IA類・Icⅰ・ⅱ類・IIcⅰ・ⅱ類からなる一群である。I・II類の土器が存在しており、出現頻度において明確な差は認められない。

IA類・Icⅰ・ⅱ類・cⅰ・ⅱ・ⅲ類からなる一群である。IA類・Icⅰ・ⅱ類・IIcⅰ・ⅱ類が主体を占め、IIcⅲ類を僅かに含む。

IA類・Icⅰ・ⅱ・ⅲ類・IIcⅰ・ⅱ・ⅲ類からなり、Icⅲ類の占める割合が低い一群である。

IA類・Icⅰ・ⅱ・ⅲ類・IIcⅰ・ⅱ・ⅲ類からなり、Icⅲ類が主体となる一群である。

須恵器坏からなる一群である。坏の器形から細分したが、すべてRA110からの出土である。

[墨書土器・刻書土器・暗文土器]

墨書土器17点、刻書土器6点、暗文土器1点が出土している。それぞれ以下にまとめておく。

[墨書土器]

出土した墨書土器は第36表の通りである。いずれも平安時代の遺構から出土しており、記されている土師器坏には内面黒色処理されているものと非黒色処理がほぼ同数の割合で存在している。記されている文字は、一文字ないし二文字が多く、多文字も2点と僅かながら認められている。今回の調査区からは「成」が多く3点出土している。

これらの中で、RA110とRA130から出土しているものが稀な例として挙げられる。前者は9世紀初頭の須恵器坏の一群である。須恵器坏b類のみ記され、しかも4例出土している。後者は出土例が5例あり、598と599のように多文字が記されているものが認められる。これらは文字が重なっていることから、複数回に跨って記された結果と思われる。多文字が記された資料はロクロ土師器IIcⅰ類に分類されるものであるが、焼成は良好、胎土は細かく、底部切り離しはヘラケズリである。この土器の出土量は極めて少なく、他類の上師器坏とは明らかに異なる。

過去の成果と合わせて検討していく。RA110から出土している9世紀初頭に属する須恵器杯は類例は認められず、周辺遺跡と比較しても稀な存在である。先述したように当該期の遺構と遺物そのものが盛岡市内には少なく比較し難い状況にあることから、今後の類例の増加を待つて実態の把握に努めたい。RA110以外の資料は、土師器杯に記されることは共通しているが、使用された杯において非黒色処理と黒色処理の比率はほぼ同数である。記された文字は今回と過去の成果と合わせると29例になり、同一文字が多い順に、「成」が5例、「得」が3例、「生方」が2例である。それらの出土地点は遺跡内でも離れているものの、所属時期は概ね9世紀後半から10世紀前半に収まる。このように同一文字が多く確認でき、周辺遺跡においても同様の傾向にあることから、本遺跡を中心とした集落に「成」という文字が象徴的な意味合いを持って広まっていたことが想定される。多文字が記された資料は過去の成果においても類例が無く、盛南地区の周辺遺跡においても認められていない。これらの資料は先述したような土器であることから製作段階から使用方法に至るまで異なることが想定される。しかし、記された文字の検討や同一遺構から出土する理由など多くの課題を残している。今後は、同一資料の類例の増加を待つと共に、周辺地域の文字資料の出土傾向を把握しながら検討していく必要がある。

第36表 墨書土器一覧

調査番号	出土遺構	種類	器種	部位	訳解	備考
241	RA30	土師器	杯	体部外面	生方	
333	RA110	須恵器	杯	体部外面	上	
335	RA110	須恵器	杯	施面外面	上	
338	RA110	須恵器	杯	底面外面	上	
341	RA110	須恵器	杯	底面外面	—	
387	RA112	土師器	杯	体部外面	上	内面黒色処理
428	RA115	土師器	杯	体部外面	成	
478	RA116	土師器	杯	体部外面	人	
531	RA124	土師器	杯	体部外面	□	
542	RA128	土師器	杯	体部外面	成□	内面黒色処理
560	RA129	土師器	杯	体部外面	□	内面黒色処理
567	RA130	土師器	杯	体部外面	上	
572	RA130	土師器	杯	体部外面	成	
588	RA130	土師器	杯	体部外面	□□□□	多文字。内面黒色処理
599	RA130	土師器	杯	体部外面	上□	多文字。内面黒色処理
665	RA130	土師器	杯	体部外面	□	多文字の可能性あり。内面黒色処理
628	RD225	土師器	杯	体部外面	不明□	内面黒色処理

〔刻書土器〕

出土した刻書土器は第37表の通りである。奈良時代のものは、「×」(147・164)が2点、「」(148)の計3点で、いずれも底部に記されている。

「×」は、過去の成果と合わせて4例目の出土であり、周辺にある台太郎遺跡からも当該期の土師器杯の底部に多く確認されている。この線刻は、内外面の色調が共通していることと周辺を含め類例が多いことから、「」とは異なり記号としての要素が強いものと思われる。

「」は、内外面はミガキが施されており内外面の色調は黒色処理されず褐色を呈しているという特徴がある。本遺跡の過去の調査成果及び、周辺遺跡からの出土例はない。これは「九字」と言われるもので、印刻は魔除けや呪いなどといった要素を持っているものと解釈されている。県内では水沢市林前南館跡で平安時代に属する土師器にそれが認められている(水沢市埋蔵文化財センター2004)。この林前南館跡からは本遺跡と同じ記号は存在していないものの、本遺跡のものより比較的近似した線刻が見受けられることから、同じ要素のもとに線刻されたものと捉えられる。今回、遺跡から出土した資料は所属時期が8世紀前半に位置づけられることから、遺跡が形成された早い段階から呪術行為が行われていたと想定される。

平安時代は、「×」(538)と不明な文字2点の計3点で、いずれも非黒色処理の土師器坏に記されている。「×」は奈良時代と同様の記号として捉えられる。当該期の刻書は、過去の成果と合わせて9例になる。文字が篆刻された例は少なく大半は不明な記号である。「×」は3例認められたが、その他はすべて異なるため不明な点が多い。また、土師器甕に記されている例が1点ある。土師器坏が主体であり、非黒色処理の土師器坏に記されているものが6例、内面黒色処理が3例ある。墨書土器はほぼ同数の割合で存在していたのに対して、刻書土器では非黒色処理の方が多し。どちらも土器に書くという行為は同じであるものの、対象となる土器が異なるということから記された意味合いが異なっていたと想定される。

第37表 刻書土器一覧

掲載番号	出土遺構	種類	器種	部位	文字	備考
147	RA104	土師器	坏	底部外面	×	内面黒色処理。
148	RA104	土師器	坏	底部外面	×	
164	RA105	土師器	坏	底部外面	×	内面黒色処理。
538	RA128	土師器	坏	底部外面	×	
569	RA130	土師器	坏	体部外面	不明	
588	RA130	土師器	坏	体部外面	不明	

[暗文土器] 暗文土器はRA130から出土した597のみで、Ⅲc類に分類されている器形である。内面には複雑な円を放射状に複数回にわたって一筆書きをしている。

過去の成果では第20次調査で検出したRA053から1点出土している。この遺物の所属年代は10世紀前半と位置づけられている。本資料と比較すると、内面黒色処理と所属時期は共通しているが、坏の形態は異なる。点数が少ないことから言及できないものの、本遺跡に限って言えば暗文が広まった時期は両者の時期が同じである概ね10世紀前半と言える。

[縄文土器] 出土点数は僅かながらも確認された。これらは大洞A～A'式期に比定される。調査区西側のRD193は大洞A式、調査区東側の遺構外や攪乱から出土したものは大洞A'式がそれぞれ主体である。いずれも隣接する本宮熊堂A遺跡と平行期にある。

(2) 出土した鉄製品・鉄滓

[鉄製品] 鉄製品は20点が堅穴住居から出土している。調査区東側の9世紀後半から10世紀前半を主体とした住居からの出土量が多く、本遺跡内の過去の成果と比べても突出している。奈良時代であるRA093・099からの出土例は稀である。

[刀子] 堅穴住居の床面から6点出土しており、すべて欠損している。奈良時代は1点と少なく、他はすべて平安時代である。1点のみ木質部の柄が残存していたものが認められ、その木質部が残存する柄の部分には木の皮と思われるものが網目状に確認できたことから、柄に装飾が施されていたと考えられる。

[紡錘車] 2点出土している。どちらも芯棒が欠損している。

[鋤先] 1点出土している。完形で、断面がV字状をしている。

[鎌] 1点出土している。先端部が欠損しているがほぼ完形である。

[釘] 3点出土している。ほぼ同一規模のものである。

[その他] 7点出土している。618は保存処理以前は刀子と判断していたが、それ以後に紙のようなものを2カ所確認できたことから、留め金具のようなものと思われるが本遺物の性格は不明である。

621は釣り針状の製品。根元には装着痕のような筒状の形状が認められたことから、鉤のような用途が想定される。U字ないしL字のものが確認されており、それらは釘の可能性もあるが今回は不明とした。

〔鉄滓〕鉄滓は分類に従って仕分けしている。鍛冶流動滓3点、枕形鍛冶滓2点、鍛冶滓含鉄鉄滓2点、鍛冶滓鉄塊系遺物2点である。主にRA054の埋土及び床面から出土したものが7点、RA051とRA111が1点ずつである。成分分析の結果からも鍛冶が行われていたという結果が得られている(311頁参照)。

〔小結〕堅穴住居と鉄製品との関係をまとめておく。今回の調査においては、調査区東側のRA130・RA050を中心とした平安時代の堅穴住居からは多くの鉄製品が認められているのに対して、奈良時代は1種しか認められず1点のみの出土である。過去の成果と比較しても、今回調査した平安時代の堅穴住居からは出土数が突出している。鉄製品が出土する堅穴住居の規模は、出土していないものより比較的大きなものに集中していることから、規模と鉄製品の出土量は相関関係が想定される。調査区西側の遺構は削平されているものが多いことから、提示した数値が実数として反映しているかという点には若干の疑問を残すが、仮に先述したことを評価すれば、少なからず集落内において富裕の差が生じていたと考えることができ、最も多く出土したRA130は周辺の遺構より規模が大きいことから長期的な役割を果たしていたものと考えられる。

(3) 出土した木製品

本宮熊堂A遺跡の旧河道3層中から、507本に及ぶ樹木類が検出した。これらの出土位置は旧河道の南岸に集中しており、また大きい樹木類の中に、旧河道の長軸と直交するものがある(第14～20図)。旧河道は東西方向に伸びているが、調査区の中央部付近で北東側へとゆるやかにカーブする。もし仮に旧河道に水流があったとすれば、このカーブの影響で、流れてきた樹木類が旧河道南岸へと溜まっていったと解釈する事も出来る。ただし、それでは河道の長軸に直交して見つかった樹木類の説明にはならない。やはり人為によって廃棄された可能性が高いと考えたい。検出した樹木類のうち、加工痕が確認された木製品は、わずかに18点であり、これらも加工痕が見受けられるのみで農具などのでいわゆる「製品」と断定できるものはない。この多量に出土した樹木類が何に使用され、また廃棄されたか判断することは難しい。ただし第25図～38の木材はその点を考える上でヒントを与えてくれる遺物といえる。38は直径17cmを測る比較的大い材である。加工の施されない方の端部には枝がまだ残っており、このままの状態で使用された可能性は低い。ただし、もう一端は両面から加工が施されている。その加工は成形のためというより、伐採の痕跡とも見受けられる。38は長さ・直径から建物の柱材の可能性が高い。しかしその場合、両端を加工しなければ使用できない。となれば38は建物の柱材として伐採した際に残存した部材とも考えられる。このように推測していくと、旧河道から検出した樹木類は、集落において建物を建築する際などに出土した部材が、一括廃棄されたものが考えられる。樹種同定の結果、検出した樹木類の多くは、建築部材に多く用いられるコナラ類であった。この樹木類は古代層である3層中から出土しており、従って、隣接する本宮熊堂B遺跡の古代集落に伴うものと考えられ、これらの樹木類はこの古代集落が存続する時期に廃棄されたものと考えられる。ただし、本宮熊堂B遺跡にみられた焼失住居の炭化材は分析の結果、クリ材であることが判明している。旧河道から出土した樹木類ではクリ材は少なく、この点が矛盾する。

近年、本遺跡から約4kmに位置する向中野館跡遺跡で確認された古代の旧河道から、多量の木製品や土器などが出土しており、旧河道が非日常的な空間としての性格を強くもった水場であったこ

とが窺える。これに対し、本遺跡で確認した旧河道からは、そのような遺物が皆無であり、向中野館跡遺跡とは対照的な様相を呈する。この両遺跡、また周辺の古代集落との関係性は今後の検討課題である。

3 遺物と遺構の変遷

(1) 出土土器の変遷

出土した土器は先述したような特徴が得られたことからそれらの変遷を試みる。非ロクロ整形の土師器については、八木(1993)と村田(2000)、佐藤(2003)を参考にしながら位置づけている。またロクロ整形の土師器環については、八木(2003)と西澤(2003・2004・2005)が編年作業を行っている。ここでは西澤の方法を採用し形態の出現頻度で所属時期を決定している。ただし、本遺跡ではE類が出土していないことから、A～Dの4分類を用いており、各土師器環の組み合わせについては第33～35表を参照願いたい。

本宮熊堂B遺跡Ⅰ期：土師器環I A1a類や甕A1ii類、底部の丸みが強い環と甕が主体の土器群である。土器の組合せにおいて先述したように、土師器環I A1a・I A1b・I A2d類と鉢類、高坏、甕B2・C類と土師器環I A1a・I B1c類や甕A1iv類、高台付鉢の土器群が、この時期に含まれる。前者は土師器環I A1B・I A1d類と高坏、甕B2・C類などの異系統の土器の出現が一つの基準になるものと考えられる。この様相は周辺の台太郎遺跡や飯岡沢田遺跡と同じであり、それらと対比すると8世紀初頭段階に位置づけられる可能性がある。しかし、点数が少なく不明な点も多いことからこの時期で扱っておく。後者は非ロクロの上師器高台付鉢は8世紀前葉に存在する須志器を模倣したものと考えられ、この土器の出現を目安にⅡ期以前と捉えている。両者に挟まれた土器群を8世紀前葉と位置づけている。

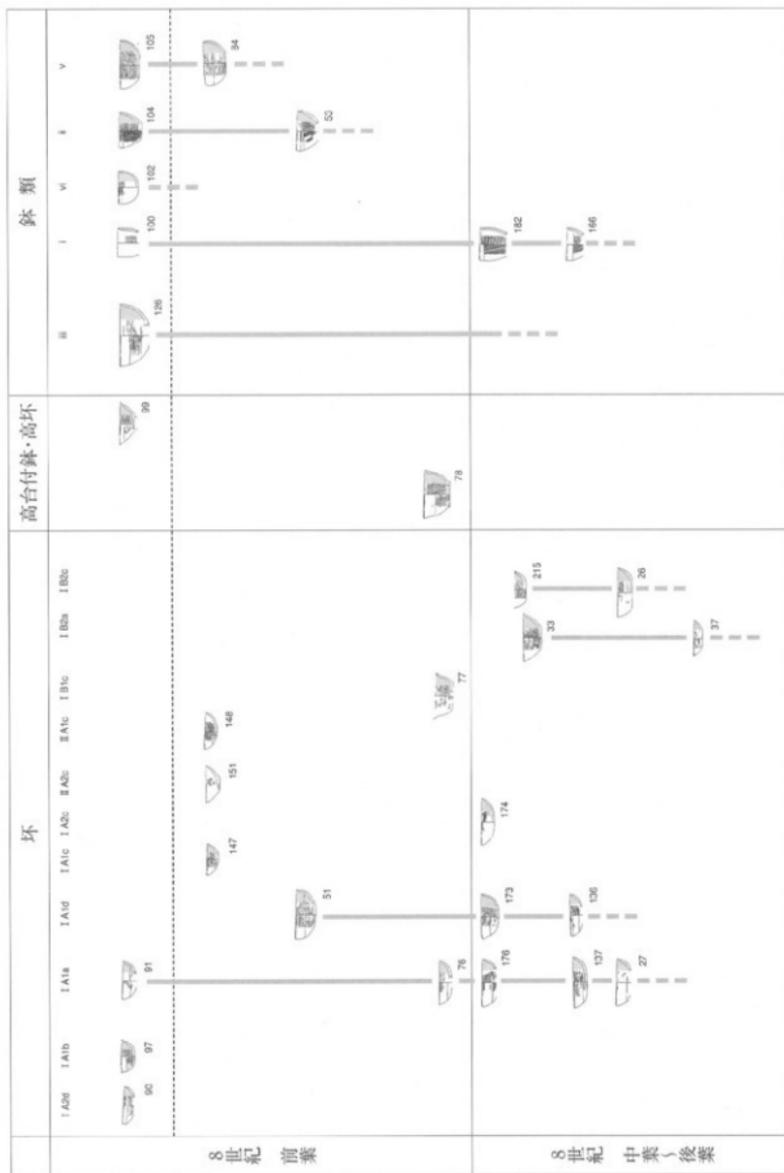
本宮熊堂B遺跡Ⅱ期：土師器環I A1a類に認められた平底風の底部を有するものと土師器環I B類と段の張りが弱くなる上師器甕A1ii類が主体の土器群である。この土器群は福高県江平遺跡5号住居と沢地から出土した土師器と器形が類似している。これらは8世紀中頃に位置づけられている。今回の調査では当該期に含まれる資料が少なく不確定な要素が多いことから、時間幅を持たせ8世紀中葉から後葉と位置づけている。

本宮熊堂B遺跡Ⅲ期：R A110から出土した須志器環の一群である。須志器環a i類は志波城跡や飯岡林崎Ⅱ遺跡から出土している。またb類は本遺跡周辺にはほとんど存在せず、宮城県関ノ入遺跡SE K11窯に類例を求めることができる。どちらも9世紀初頭に位置づけられていることから、本期も同様の年代としても差支えないと考えられる。当該期には西野氏が指摘しているように8世紀代の非ロクロの土師器甕が残っていることが窺える(西野1998)。

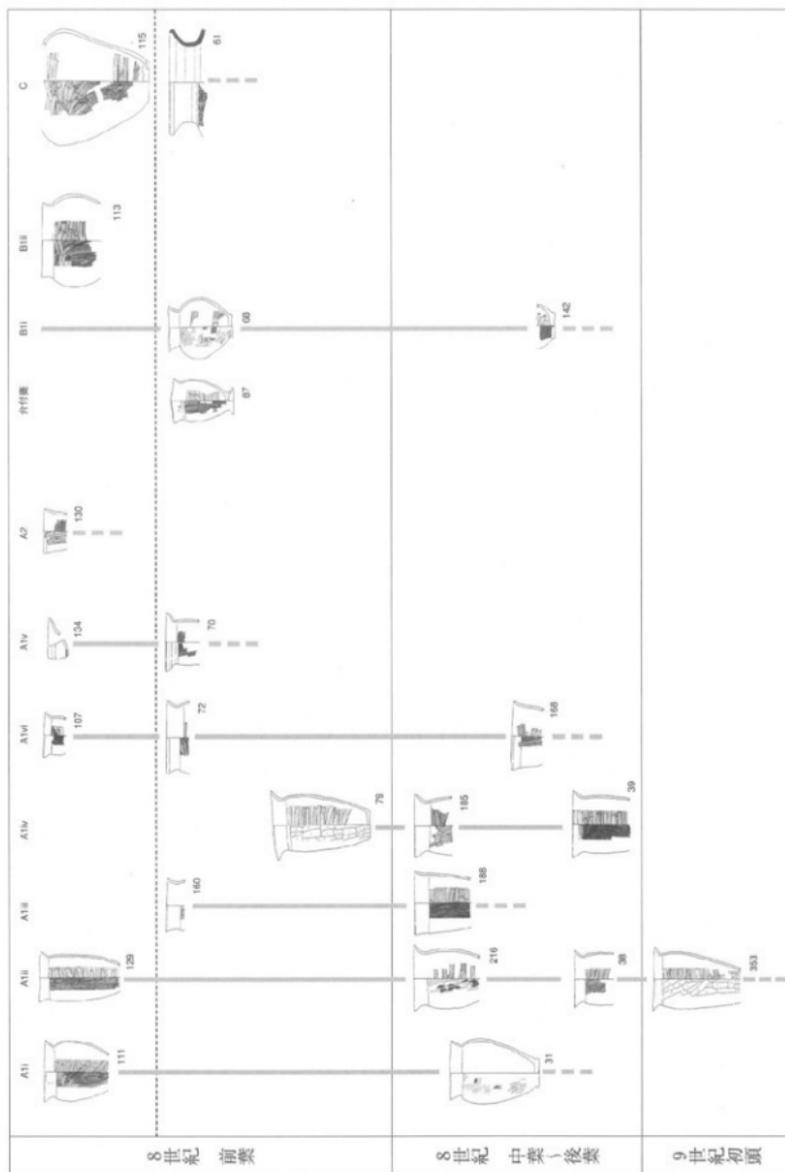
本宮熊堂B遺跡Ⅳ期：土師器環I～Ⅲ a類及びI～Ⅲ c i・ii類が主体の土器群である。先述した土師器環の4つまとまりのうち、上位3つが該当する。この土器群は9世紀後半に位置づけられる。本期はI c i・ii類やⅡ c i・ii・iii類で占められれば9世紀後半に、それにI c iii類が含まれてればより10世紀代に近くなるというような細分が可能と思われるが、出現頻度において明確な差が現れなかったことから、ここではあえて細分していない。

本宮熊堂B遺跡Ⅴ期：土師器環I c iii類が主体の土器群である。先述したまとまり以外の4つめのまとまりが該当する。この土器群は10世紀前半に位置づけられる。

このように調査成果からは5期に区分することができる。



第179図 非口クロ土師坏・鉢類変遷図



第180図 非ロクロ土器変遷図

(2) 竪穴住居の変遷

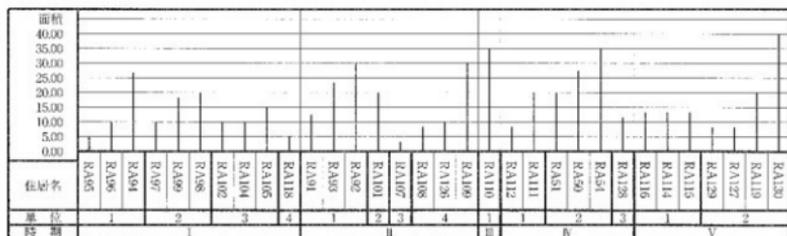
土器の変遷により時期を設定したが、それに該当する竪穴住居を時期ごとに変遷作業を行うと下記ようになる。

	KA88	KA91	KA95	KA102	KA105	KA108	KA110	KA115	KA118	KA121	KA125	KA129	KA130	KA134	KA135	KA136	KA137	KA138	KA139	KA142	
I期																					
II期																					
III期																					
IV期																					
V期																					

第181図 竪穴住居時期変遷図

本調査区においてはI期には、竪穴住居は10棟～15棟が存在する。調査区西側から中央までの広範囲を占める。II期になると竪穴住居はやや減少し8～13棟になり、僅かに西側に残るものの東側へと移動していく。III期は1棟のみの存在する。IV期には竪穴住居が増加し6～9棟になる。V期は6～10棟で、ほぼIV期と同数が存在している。IV期とV期は基本的に中央から東側にかけてが主体となり南東方向に伸びていく様相が窺える。

(3) 各時期における竪穴住居の規模の推移



第182図 各時期ごとの規模の変遷図

ここでは竪穴住居の規模が時期によりどのように推移していたかを検討したい。本調査区に限定しているが住居の単位ごとに掲載した。本調査区からは1～3棟で形成され、14単位を確認できた。単位は各住居との直線距離を計測しているが、それが15m以内の範囲に収まるものもしくはそれを超えてもほぼ等間隔にあるものを抽出している。また、出土遺物から竪穴住居の所属時期が各時期に跨っているものは扱っていない。

I・II期は、単位は床面積IV類とそれ以外の竪穴住居で構成されている。IV期以降は奈良時代と同様の単位と同一規模による単位が形成されるようになり、2極化した単位で構成される。全般的な傾向としてはIV・V期の方が全般的に住居の規模が大きくなっている。またIII期以外の単独である竪穴住居の規模は平均値より小さく、どの時期にも存在する。ただしこれは複数に時期が跨る竪穴住居と時期不明の竪穴住居が除外されているため、それらにより変化するものと思われる。

(4) 集落形成と旧河道

本宮熊堂B遺跡で確認された集落と本宮熊堂A遺跡で検出された旧河道との関わりについて簡単にまとめておく。本来であれば遺跡全体との関係を捉えなくてはならないが、ここでは今回の調査区との時間的経過の把握にとどめておく。旧河道は自然科学分析の結果のように8世紀代までは河道としての役割を果たし、それ以降は湿地化していったことが明らかとなっている。

河道は8世紀前半期はその機能を果たしており、河道近辺にはRA104や105などが立地している。河道からは竪穴住居とほぼ同時期の土器が出土していることが確認できたことから、当時の人々が不要となったものを河道に廃棄していたと考えられる。当該期においては生活と河道が密接に関係していたことが窺える。8世紀後半から9世紀後半にかけては河道は依然として機能していたが、投げ込みはほとんど認められない。その頃には集落が東方もしくは南方に中心を移動させているため、河道との関わりは減っていった可能性がある。それ以降の10世紀代においては、河道は湿地帯へと変化していったが、再びその湿地帯へ遺物が廃棄されている状況が認められている。これは9世紀後半の集落より10世紀代に入り段丘縁辺部側に移動したことにより生活の場として再び利用されるようになったと考えられる。

今回の調査ではカマド埋土中の種子のサンプリングを行った。その結果は258頁にまとめてあるように、多くの竪穴住居から炭化米が検出された。このことは集落にある程度米が供給されていたと思われ、周辺の調査区からは畑のような生産遺構が確認できなかったことと合わせて考えると、湿地帯であったと思われるこの地には田面が広がっていたと想定される。

4 ま と め

ここでは本遺跡の今回と過去の調査成果を合わせた竪穴住居の変遷を行い、各時期ごとのまとまりを捉え本遺跡をまとめていきたい。扱う住居は、当埋蔵文化財センターにより得られた調査成果のみであり、盛岡市教育委員会により行われた発掘成果は含めていない。このことが片手落ちであることは否めないが、8割強の成果が得られていることと概ねその傾向が捉えられると想定されることから積極的に検討することとした。それぞれの所属年代は今回提示した編年案を基にしている。

本宮熊堂B遺跡Ⅰ期：段丘縁辺部付近にまとまっているが、西端から南東にかけて遺跡全体に広がりを見せて点在している。1～4棟を1単位としており、10箇所認められる。西端において最も多く集中して存在している。先述したように当該期の中でも8世紀初頭に位置づけられる可能性がある竪穴住居に触れたが、それに該当するまとまりは西端と南東端において計3カ所存在している。

本宮熊堂B遺跡Ⅱ期：遺跡の西端から中央にかけて点在している。1棟もしくは2～3棟を1単位としており、6箇所認められる。Ⅰ期に比べると減少する。

本宮熊堂B遺跡Ⅲ期：RA110の1棟のみで遺跡の西側に存在している。飯岡林崎Ⅱ遺跡において当該期の竪穴住居が僅かに認められているが、近隣遺跡では確認できない。志波城跡創建期にあたり稀な存在である。

本宮熊堂B遺跡Ⅳ期：遺跡の中央から南東部を中心として、Ⅰ～Ⅲ期に比べ段丘崖よりやや中心を南方に移行していく。遺構数が増加する。1棟もしくは2～5棟を1単位としており、9箇所認められる。この時期の遺構数の増加は周辺の遺跡と同様の傾向にある。

本宮熊堂B遺跡Ⅴ期：遺跡の北西端から南東端にかけて存在する。遺構数はⅤ期とはほぼ同数が存在



第182図 竪穴住居配置図





第182図 竪穴住居配置図

する。2～3棟を1単位としており、10箇所認められる。V期とはほぼ同一箇所が存在しているが、中央部と南東部に多く認められるようになる。

上述したように時期ごとに古地、単位構成などをまとめた。時期ごとでは明確な差が認められなかったものの、時代ごとで看取できたことからまとめておく。

奈良時代（Ⅰ・Ⅱ期）は段丘崖付近を占地する。構成は1～4棟で構成され大半は3棟前後を1単位としている。それらは大規模（Ⅳ類以上）な堅穴住居の周辺にそれより小規模の住居が複数存在して形成されている。平安時代（Ⅳ・Ⅴ期）は奈良時代よりはやや内陸部を占地する。全般的に住居の規模は大きくなる。構成は1～5棟で構成され大半が2～3棟を1単位としている。それらは単位構成を踏襲しているものと比較的同一規模の住居が存在するものと、2極化する傾向にある。当該期の単位は奈良時代のものより密集度が高く各住居が近接して存在するように見える。

このようにⅢ期を扶んだ前後で、堅穴住居の占地と密集度、単位構成の在り方は僅かに異なる。古地と密集度は先述した通りである。単位構成の在り方は、伊藤・西野氏が指摘しているものを参考に検討する（伊藤1998、西野1998）。設定された規模は異なるものの大・中・小規模といった3種の構成の在り方は、Ⅰ期からⅤ期（Ⅲ期を除く）を通じて認められ合致するが、時期が新しくなるにつれ規模の縮小化は認められずここでは逆の傾向を示している。また、Ⅳ・Ⅴ期は従来の単位構成と均一化された住居による構成が混在し、奈良時代から継続した集落構成要素と律令形成期の集落構成要素が同時期に存在していることが窺える。

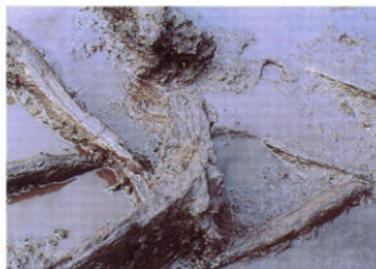
本遺跡は、各時期によって小集落が点在して形成されている。このような集落の在り方から計画村落的な要素は見出せず、自然村落的な集落であると考えられる（伊藤1980、1997）。

以上、本宮熊堂B遺跡の集落の在り方について検討を試みた。8世紀前葉から10世紀前半にかけての集落構成を把握する上では良好な資料を提供をすることができるものと考えられる。まとめにおいて分析を試みたものの大半は不十分な点を多く残すことから、それらは今後の検討課題としたい。

引用・参考文献

- （財）岩手県文化振興事業団歴史文化財センターを岩文選とする。）
 石本 弘1996『丸底から平床へ』『論集しのぶ考古』
 伊藤博幸1989『陸奥黒土器—岩手・宮城地域』『東国土器研究』第2号
 岩文選2004『奥州林崎Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団歴史文化財調査報告書427集
 岩文選2005『本宮熊堂B遺跡13・15・20次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団歴史文化財調査報告書427集
 宇田川洋1994『北方地域の土器底部の刻印記号論』『日本考古学』第1号
 宇田川保1989『青森県における7・8世紀の土器器一馬淵川を中心として』『北海道考古学』第25輯
 大野亨1990『根城跡丸出上の土器について』『研究紀要』第6号八戸市博物館
 河南町教育委員会1990『原江関ノ入遺跡』河南町文化財調査報告書第4集
 佐藤敏幸2003『律令国家形成期の陸奥半島(1)—古代社殿地方の土器様式—』『宮城考古学』第5号
 佐藤敏幸2004『律令国家形成期の陸奥半島(2)—古代社殿地方の歴史動向—』『宮城考古学』第6号
 仲田茂司1989『陸奥国における奈良時代の地域性について』『歴史』第25輯
 西澤正晴2003『台太郎遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団歴史文化財調査報告書417集
 宮城県教育委員会1990『一里塚遺跡』宮城県文化財調査報告書第135集
 （財）水沢市文化振興財団水沢市歴史文化財センター2003『林前南館跡』水沢市歴史文化財調査センター調査報告書第16集
 村田晃一2000『飛鳥・奈良時代の陸奥北辺—移民の時代—』『宮城考古学』第2号
 盛岡市教育委員会1981『志波城跡Ⅰ』
 八木勝枝2003『3. 平安時代の土器』『細谷地遺跡』岩手県文化振興事業団歴史文化財調査報告書414集
 八木正樹1993『古代新渡戸と新渡戸の土器様相』『北日本における律令期の土器様相』第18回古代城郭官衙遺跡検討会シンポジウム
 矢本町教育委員会2004『赤井遺跡Ⅰ』矢本町文化財調査報告書第16集
 （財）福島県文化振興事業団福島県文化財センター2002『江平遺跡』福島空港・あぶくま南遺跡発掘調査報告書12『福島県文化財調査報告書第394集』
 多賀城市教育委員会1992『山王遺跡12次調査』多賀城市文化財調査報告書第30集
 西澤正晴2004『中平人遺跡第2次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団歴史文化財調査報告書第443集
 内澤正樹2005『奥州Ⅱ遺跡川口川遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団歴史文化財調査報告書第464集
 伊藤博幸1980『胆沢城と古代村落—自然村落と村西村跡—』『日本史研究』215
 伊藤博幸1997『律令期村落の基盤構造—胆沢城周辺の平安期集落。』『岩手史学研究』第80号
 伊藤博幸1998『後平期の集落』『岩手考古学』第10号
 西野修1998『城郭と地域社会の変容—北上盆地北部の様相』『第24回古代城郭官衙遺跡検討会資料集』

写真図版



旧河道検出状況



遺跡遠景（南東から）



遺跡全景（直上から）



遺跡近景（東から）



遺跡西半分（上が南）



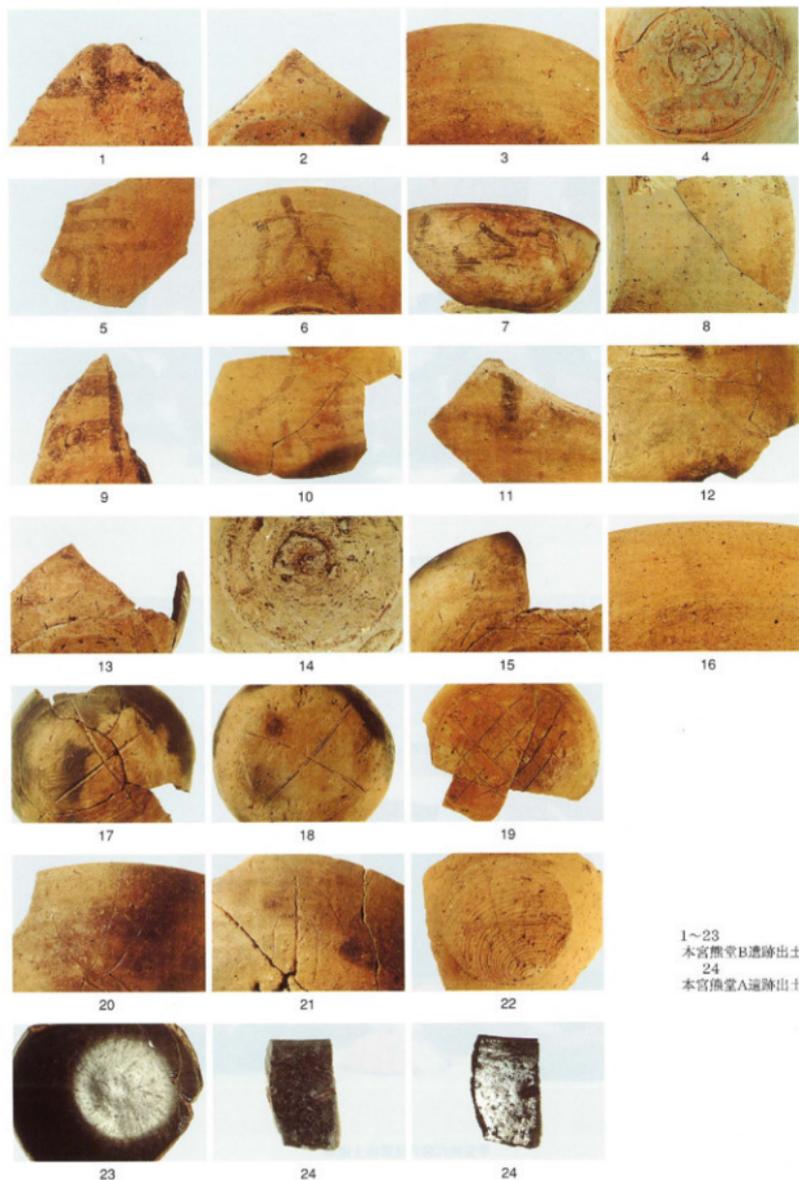
遺跡東半分（上が南）



奈良時代竪穴住居出土遺物



平安時代竪穴住居出土遺物



1~23
本宮熊幸B遺跡出土
24
本宮熊堂A遺跡出土

写真図版4 墨書土器・刻書土器

旧河道西側（南西から）



旧河道中央（南西から）



旧河道東側（西から）





旧河道aベルト断面（西から）



旧河道bベルト断面（西から）



旧河道cベルト断面（西から）



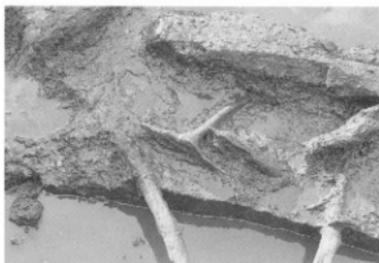
旧河道西側樹木類出土状況①(南から)



旧河道西側樹木類出土状況②(北西から)



樹木類出土状況アップ①(東から)



樹木類出土状況アップ②(東から)



加工痕のある樹木(北から)



旧河道中央樹木類出土状況①(南から)



旧河道中央樹木類出土状況②(南東から)



旧河道中央樹木類出土状況③(南から)



旧河道中央樹木類出土状況④（南から）



旧河道東側樹木類出土状況①（南から）



旧河道東側樹木類出土状況②（北から）



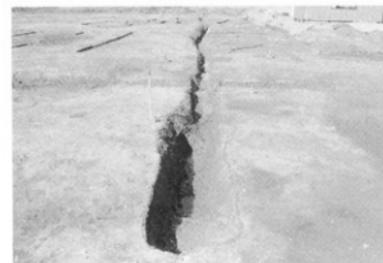
木根出土状況（南から）



作業風景（西から）



作業風景（南西から）



RG054溝跡全景（南から）



RG054溝跡断面（北から）

調査区西側（西から）



調査区東側（南東から）



調査区東側（南西から）

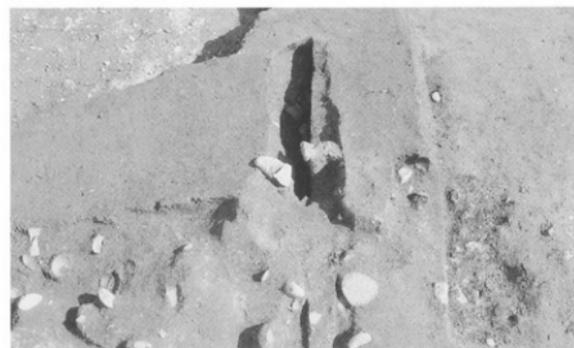




RA050完掘（西から）



RA050断面（南から）



RA050カマド

RA050鉄製品 (No.263) 出土状況



RA051完掘 (西から)



RA051断面 (南から)





RA054完掘（西から）

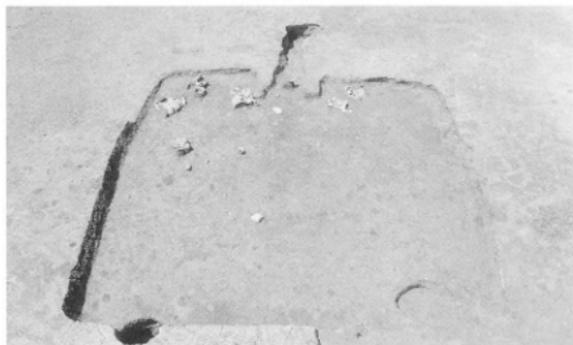


RA054断面（南から）



RA054カマド周辺遺物出土状況
（西から）

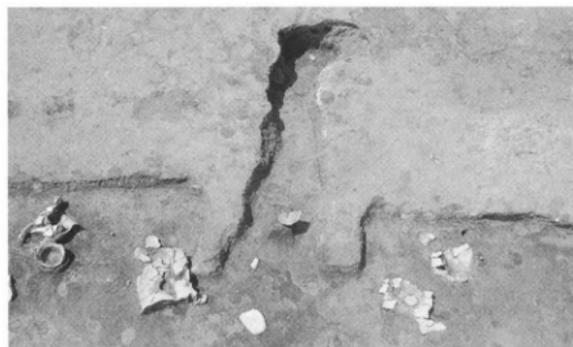
RA091完掘（東から）



RA091断面（東から）



RA091カマド周辺遺物出土状況
（東から）





RA092完掘（東から）



RA092断面（南から）

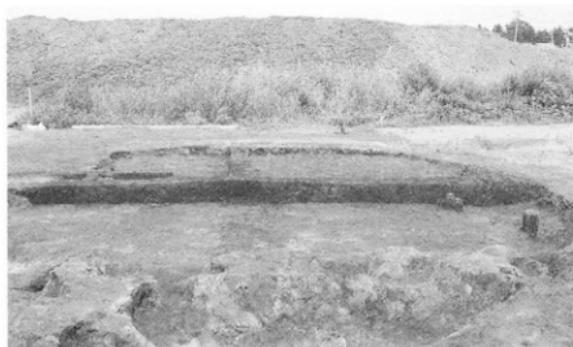


RA092カマド完掘（東から）

RA093完掘（東から）



RA093断面（南から）



RA093カマド完掘（東から）





RA094完掘（東から）



RA094断面（東から）



RA094カマド完掘（東から）

RA095完掘（南から）



RA095断面（南から）



RA096完掘（東から）

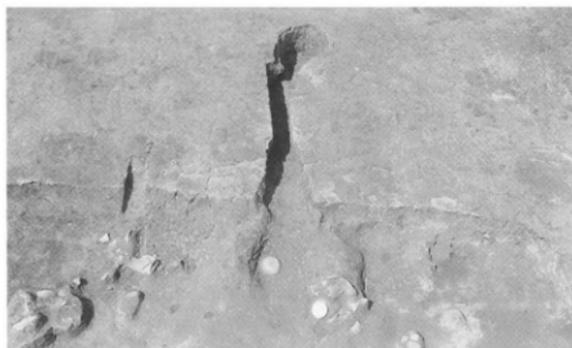




RA097発掘（東から）



RA097断面（東から）



RA097カマド完掘（東から）

RA098完掘（東から）



RA098断面（北から）



RA098カマド完掘（東から）





RA099完掘（東から）



RA099断面（東から）



RA099カマド完掘（西から）

RA100完掘（東から）



RA100断面（東から）



RA100カマド完掘（東から）





RA101完掘 (東から)



RA101断面 (南から)



RA101カマド完掘 (東から)

RA102完掘（東から）

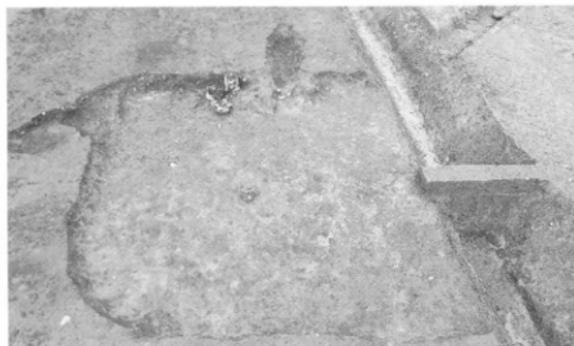


RA102断面（南から）



RA102カマド完掘（東から）





RA104完掘（南東から）

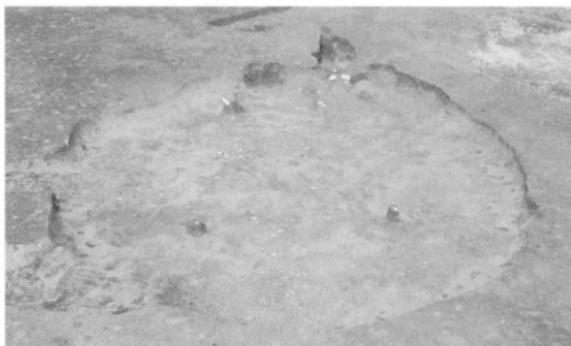


RA104断面（南西から）



RA104カマド完掘（南東から）

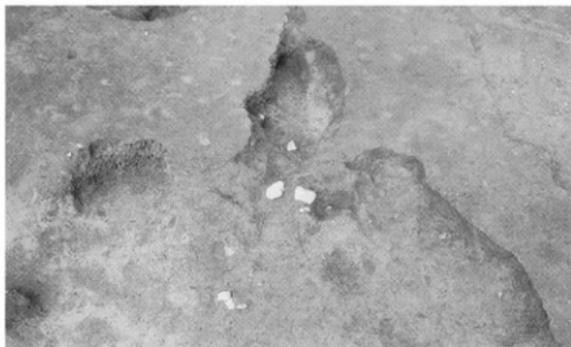
RA105完掘（南から）



RA105断面（南から）



RA105カマド完掘（南から）





RA106完掘 (南東から)



RA106断面 (南西から)



RA106カマド完掘 (南東から)

RA107完掘 (南から)



RA107断面 (東から)



RA107遺物 (No.164) 出土状況 (西から)





RA108完掘（北東から）



RA108断面（北西から）



RA108カマド完掘（北東から）

RA109完掘（東から）



RA109断面（西から）



RA109カマド完掘（東から）





RA110完掘（東から）



RA110断面（南から）



RA110カマド完掘（東から）

RA111完掘（北西から）



RA111西面（南から）



RA111カマド完掘（北西から）





RA112完掘（西から）



RA112断面（南から）



RA112カマド完掘（西から）

RA113完掘（東から）



RA113断面（東から）



RA113カマド完掘（東から）





RA114完掘（南から）



RA114西面（西から）



RA114カマド完掘（南から）

RA115完掘（西から）



RA115断面（西から）



RA115カマド完掘（西から）





RA116完掘（西から）

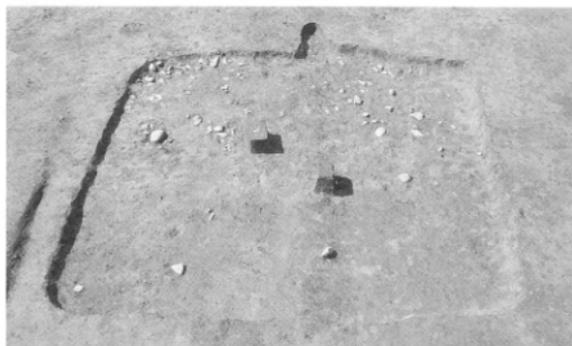


RA116断面（西から）

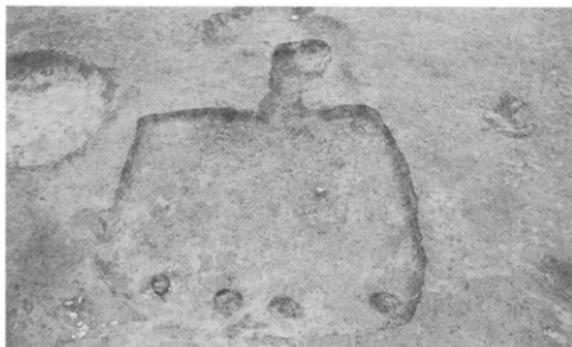


RA116カマド完掘（西から）

RA117完掘 (東から)



RA118完掘 (南から)



RA118断面 (南から)





RA119完掘（西から）



RA119断面（東から）

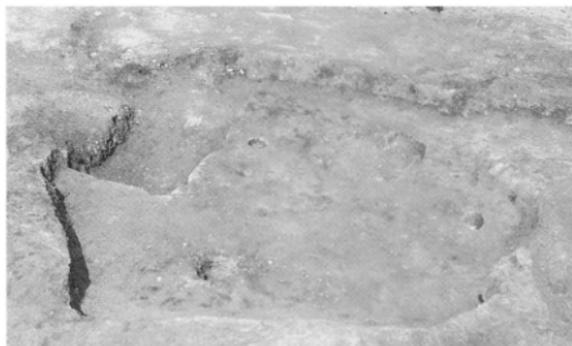


RA119カマド完掘（西から）

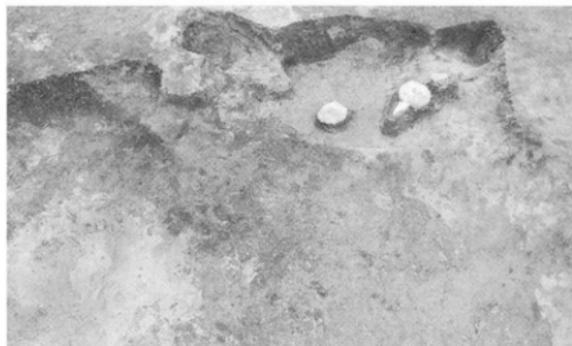
RA120完掘（南東から）



RA121完掘（南から）



RA122完掘（東から）





RA123完掘 (南から)



RA124完掘 (南から)



RA124断面 (西から)

RA124カマド完掘（南から）



RA125完掘（南から）



RA125断面（南から）





RA126完掘（東から）

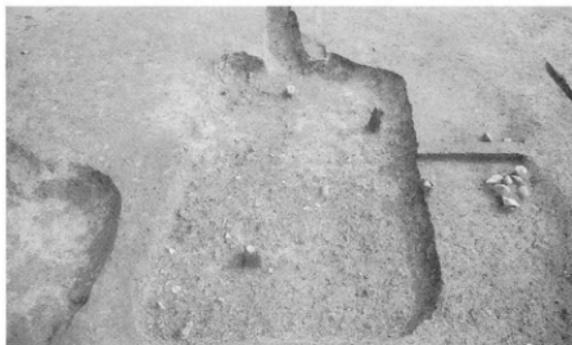


RA126断面（北から）



RA126カマド完掘（東から）

RA127完掘（西から）



RA127断面（西から）



RA128完掘（西から）





RA128カマド完掘（西から）



RA129完掘（西から）



RA129カマド完掘（西から）

RA130完掘（西から）



RA130カマド完掘（西から）



RA103検出状況



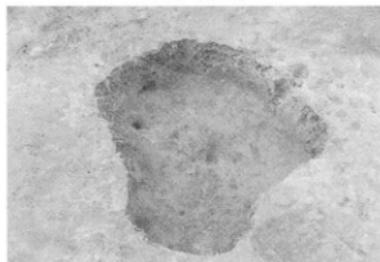
RE017完掘（東から）



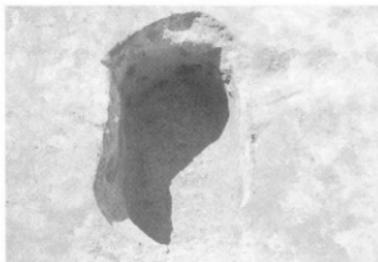
RE018 (西から)



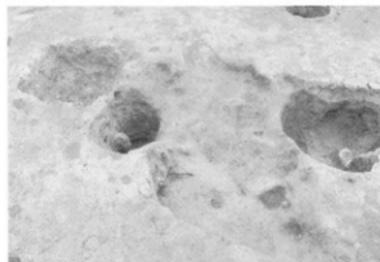
RD194完掘 (東から)



RD191完掘 (南東から)



RD195完掘 (北から)



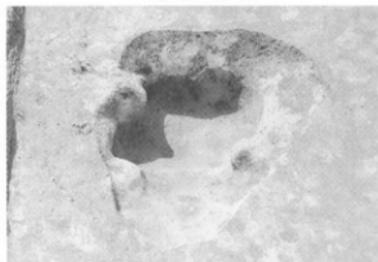
RD192完掘 (南から)



RD196完掘 (南から)



RD193完掘 (南から)

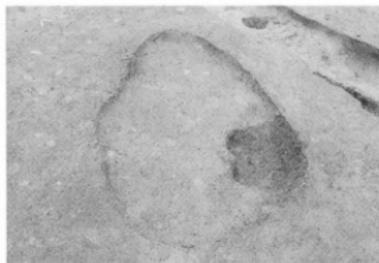


RD197完掘 (南から)

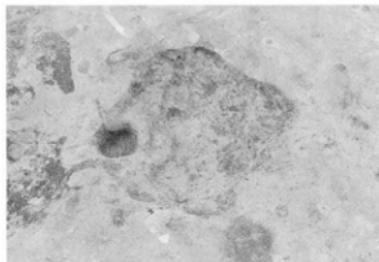
写真図版46 RE018、RD191～197



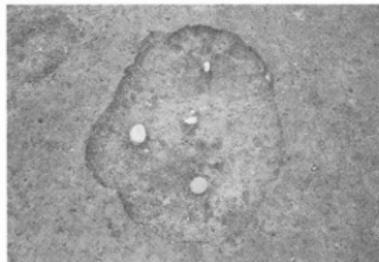
RD198完掘 (南東から)



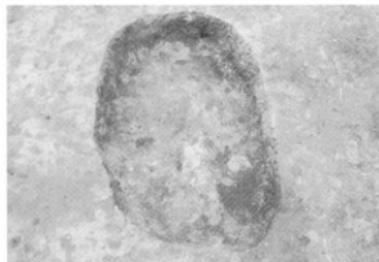
RD202完掘 (南西から)



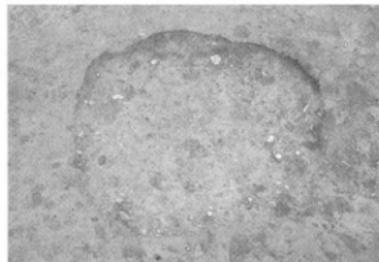
RD199完掘 (南から)



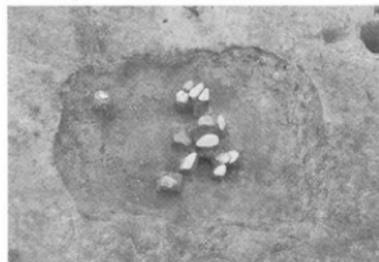
RD203完掘 (南西から)



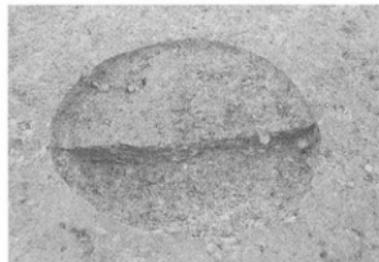
RD200完掘 (東から)



RD205完掘 (南東から)



RD201完掘 (東から)



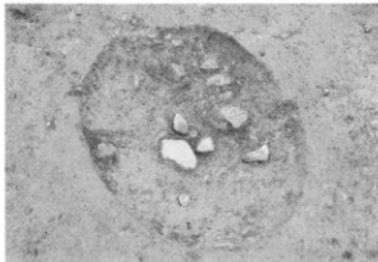
RD206完掘 (南から)



RD207完掘 (西から)



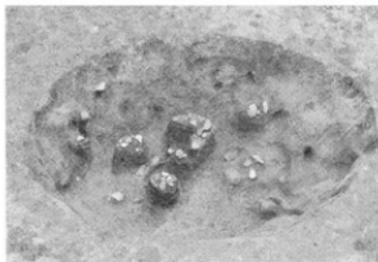
RD211完掘 (南東から)



RD208完掘 (西から)



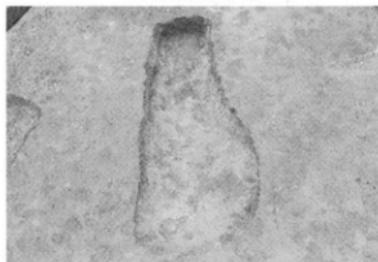
RD212完掘 (西から)



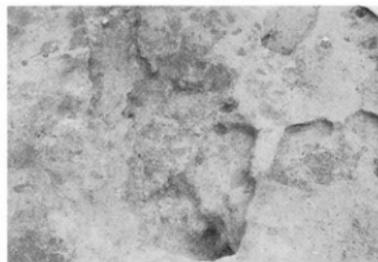
RD209完掘 (西から)



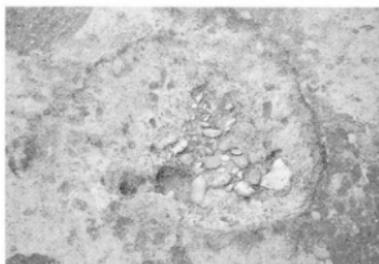
RD213完掘 (南から)



RD210完掘 (東から)



RD214完掘 (北から)



RD215完掘（北から）



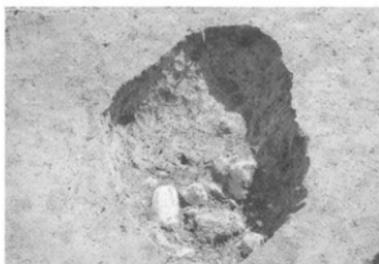
RD220完掘（南東から）



RD216完掘（北から）



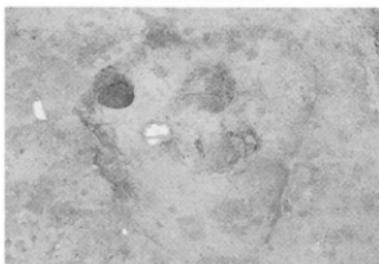
RD221完掘（東から）



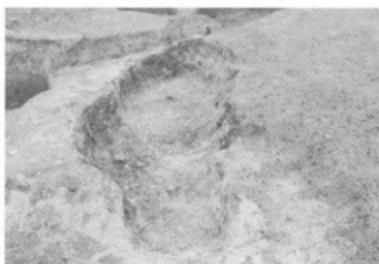
RD217完掘（北から）



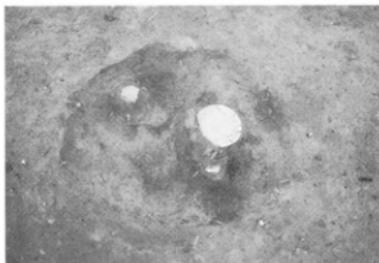
RD222完掘（西から）



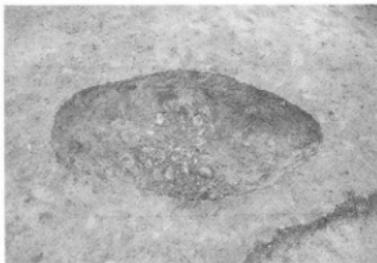
RD219完掘（南から）



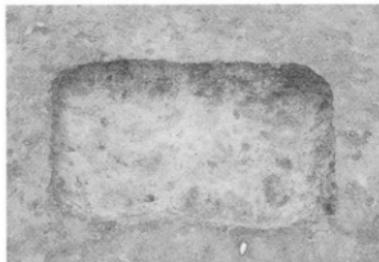
RD223完掘（南から）



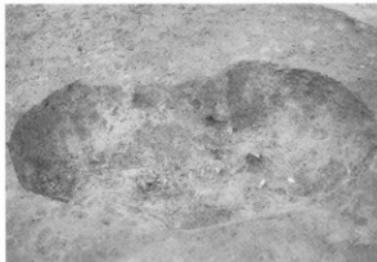
RD224完掘（南東から）



RD228完掘（南東から）



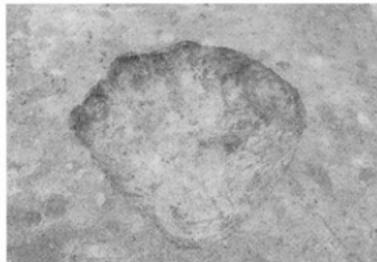
RD225完掘（東から）



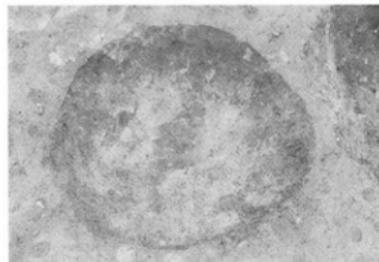
RD229完掘（南から）



RD226完掘（東から）



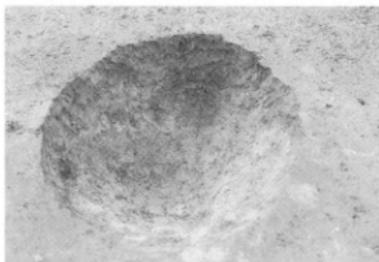
RD230完掘（南から）



RD227完掘（東から）



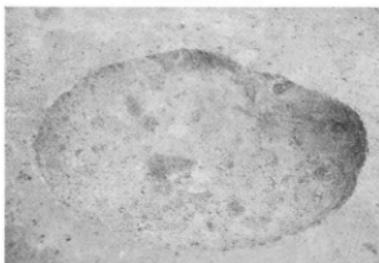
RD231完掘（南西から）



RD232完掘（東から）



RG141完掘（東から）



RD233完掘（北から）



RG142完掘（南から）



RD234完掘（南から）



RG138完掘（南東から）

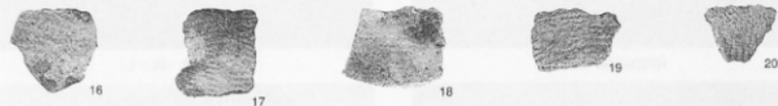


RG143完掘（南から）

3層出土土器



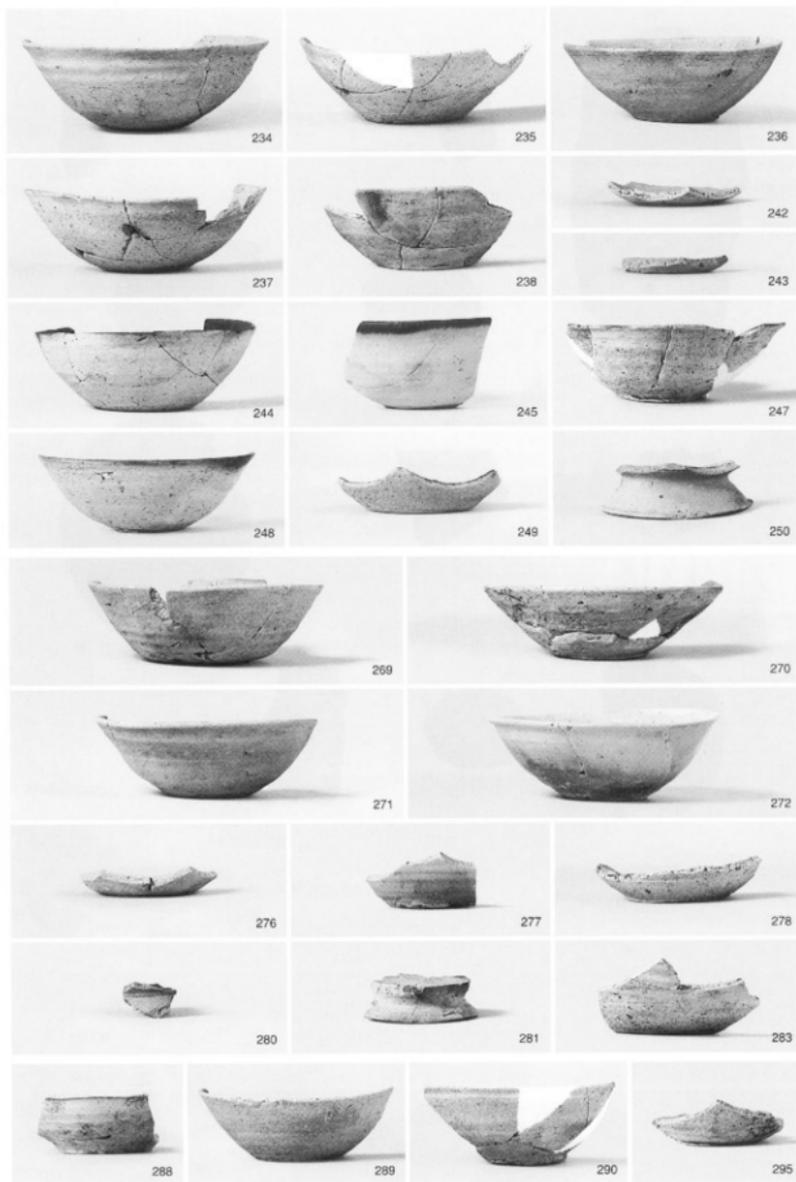
4層出土縄文土器



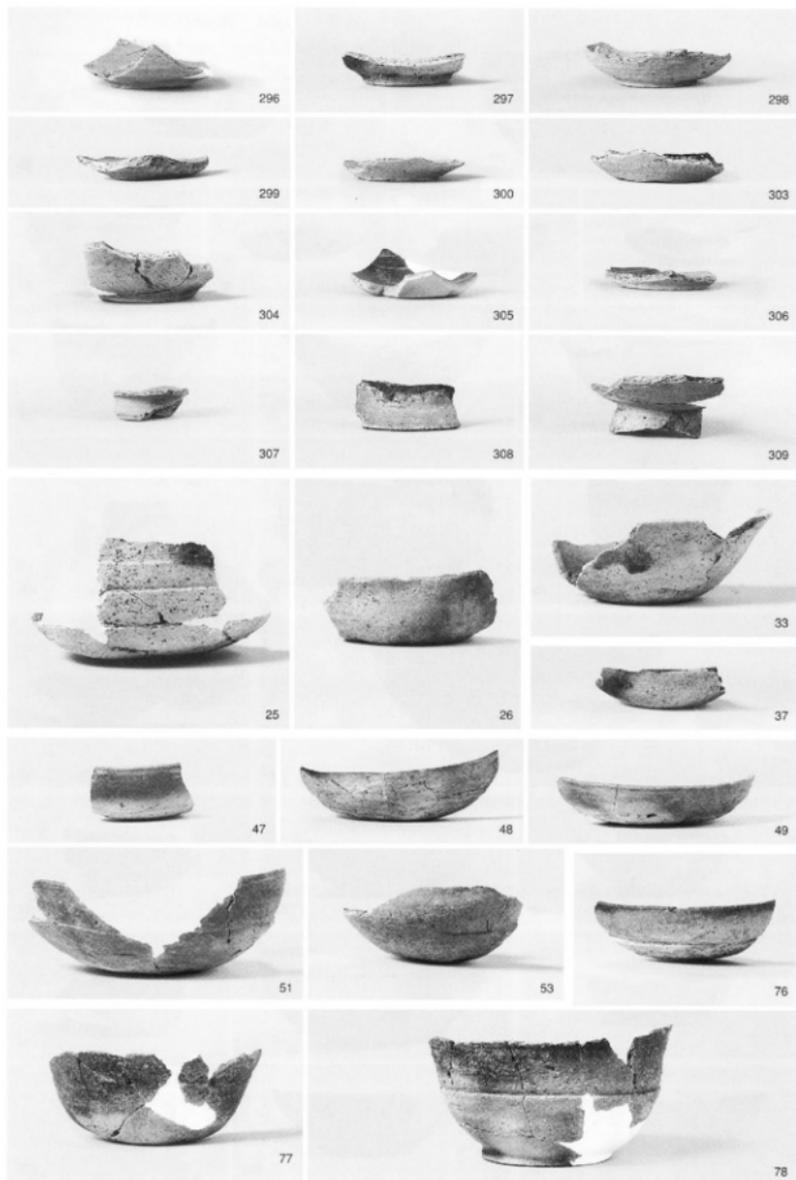
写真図版 52 旧河道出土土器



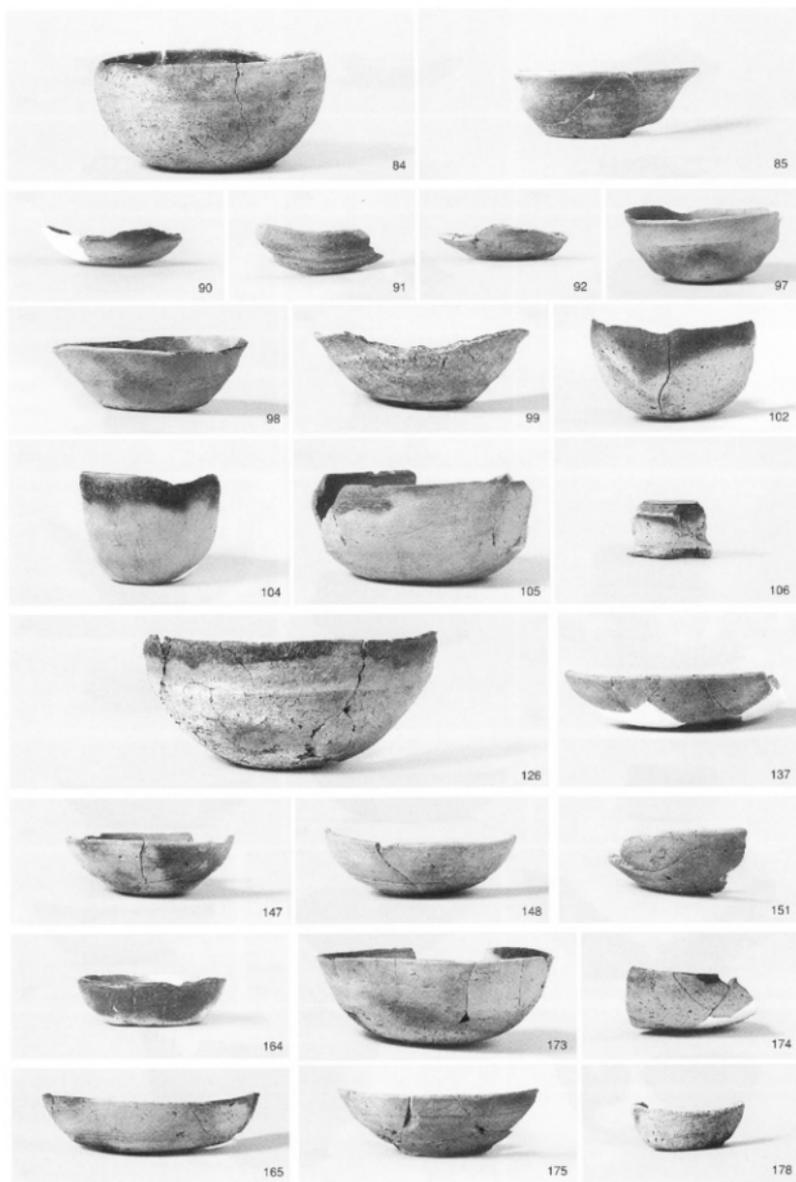
写真図版 53 旧河道出土石器



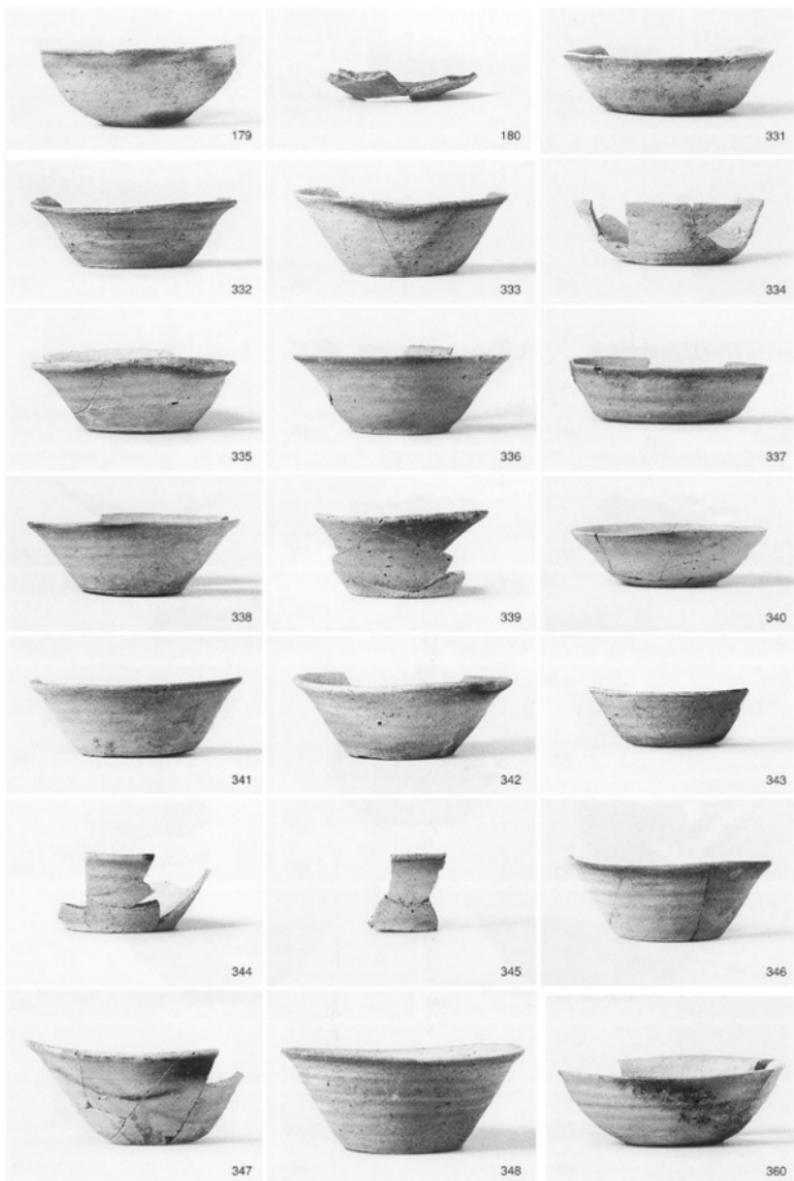
写真図版 54 RA050・051・054 出土土器



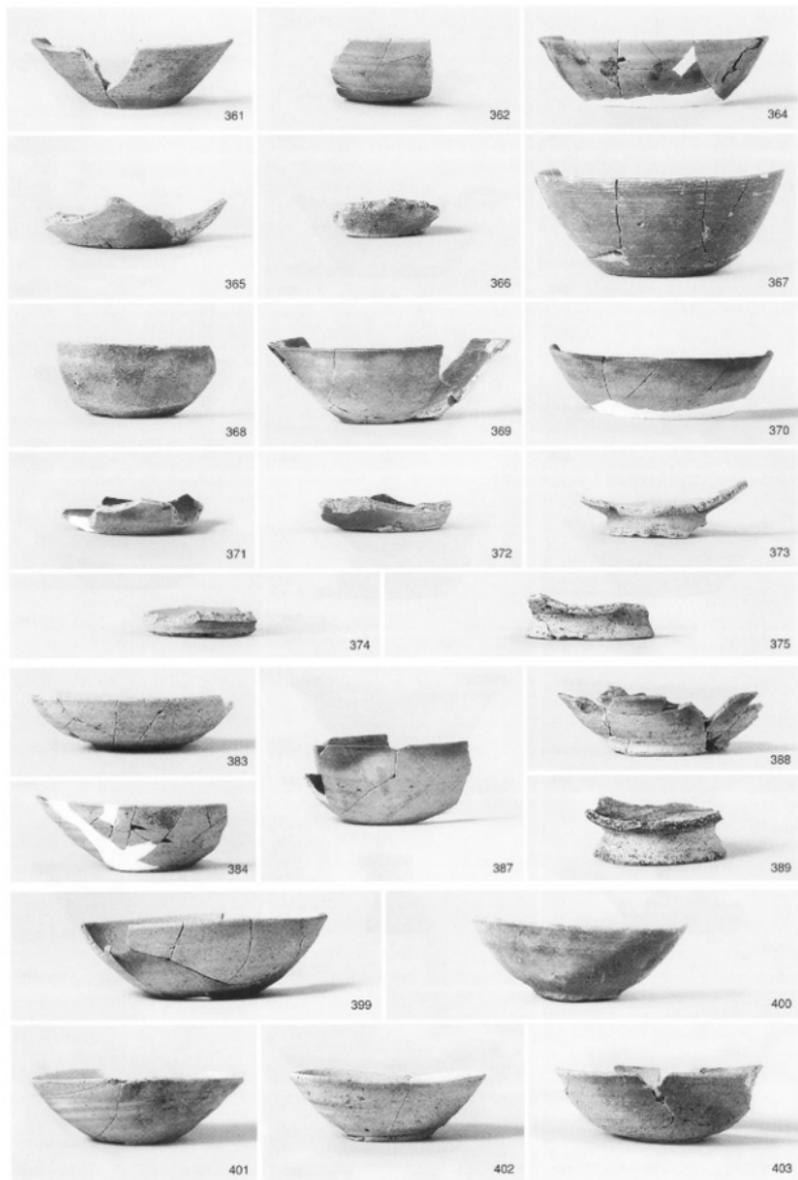
写真図版 55 RA054・091～094・096 出土土器



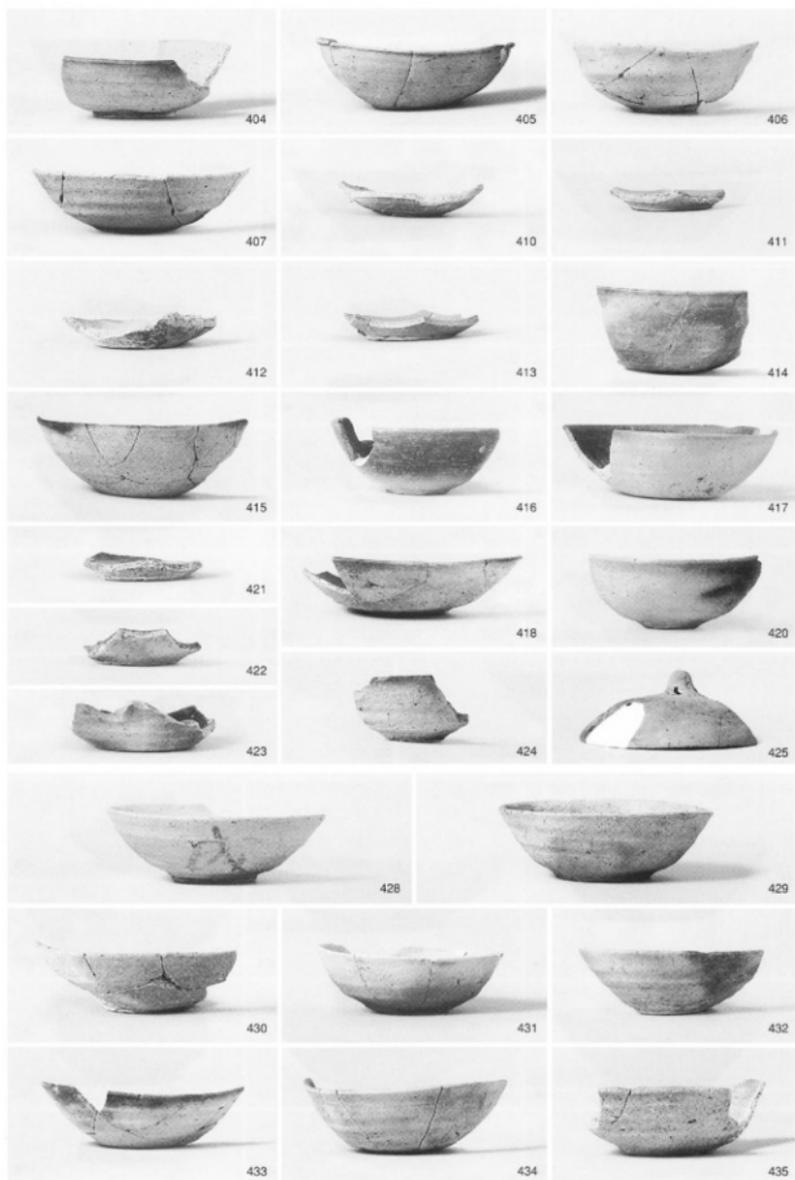
写真図版 56 RA097 ~ 099 · 101 · 104 · 105 · 107 ~ 109 出土土器



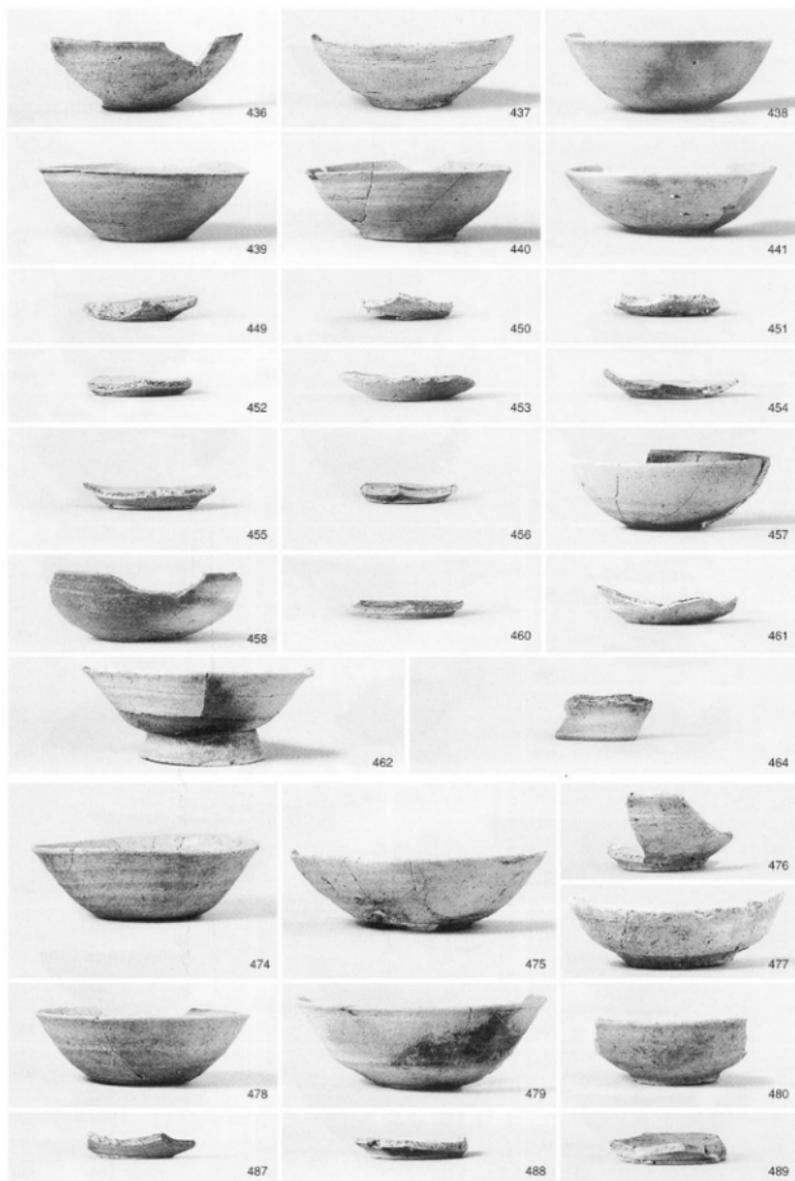
写真図版 57 RA109 ~ 111 出土土器



写真図版 58 RA111・112・114 出土土器



写真図版 59 RA114・115 出土土器



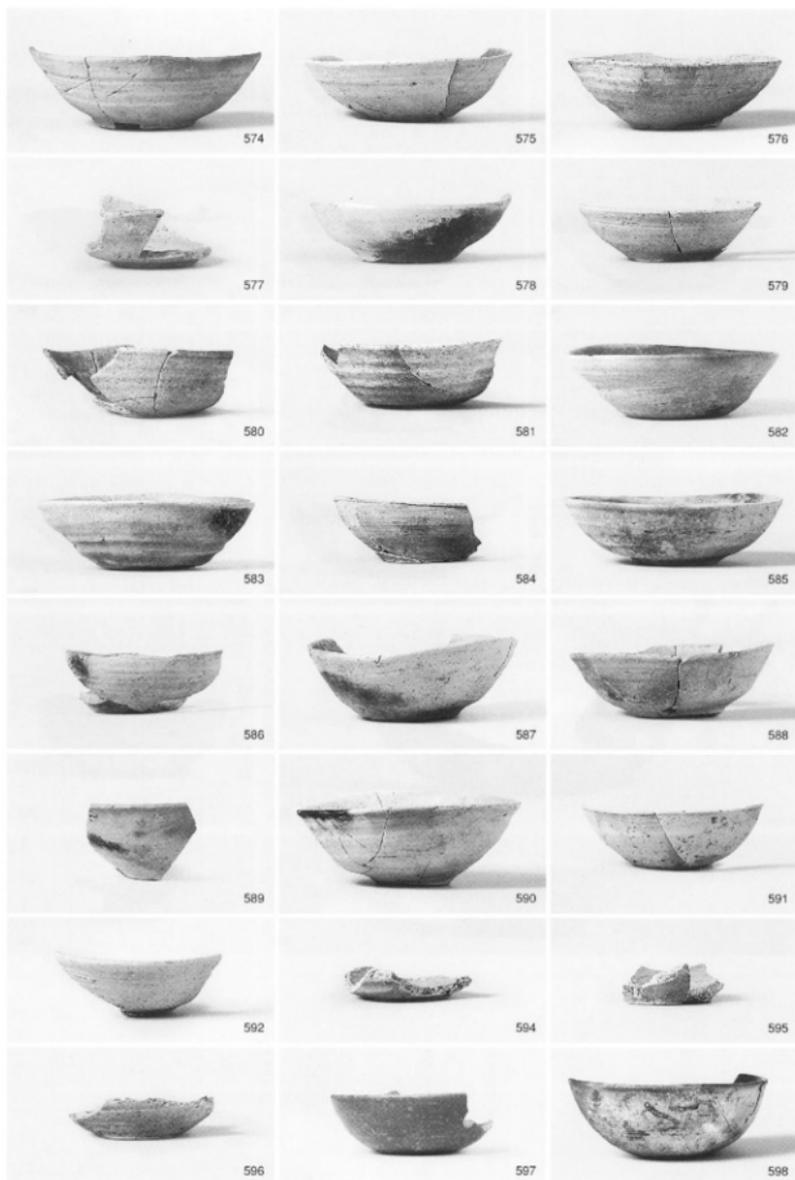
写真図版 60 RA115・116 出土土器



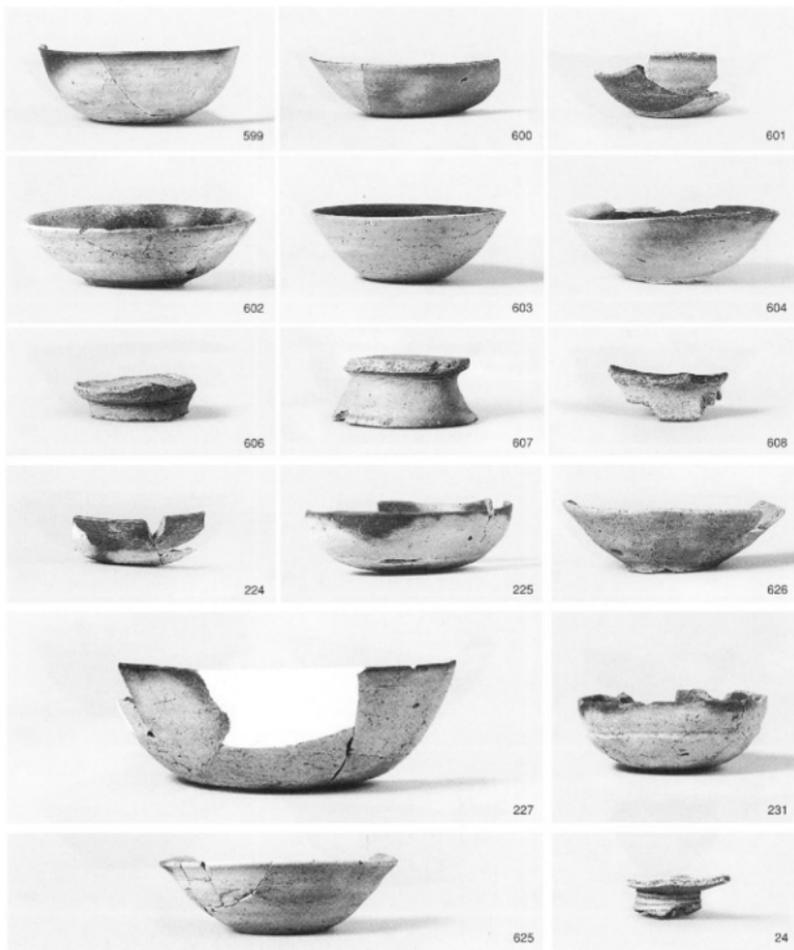
写真図版 61 RA116・119・123・124・126・128 出土土器



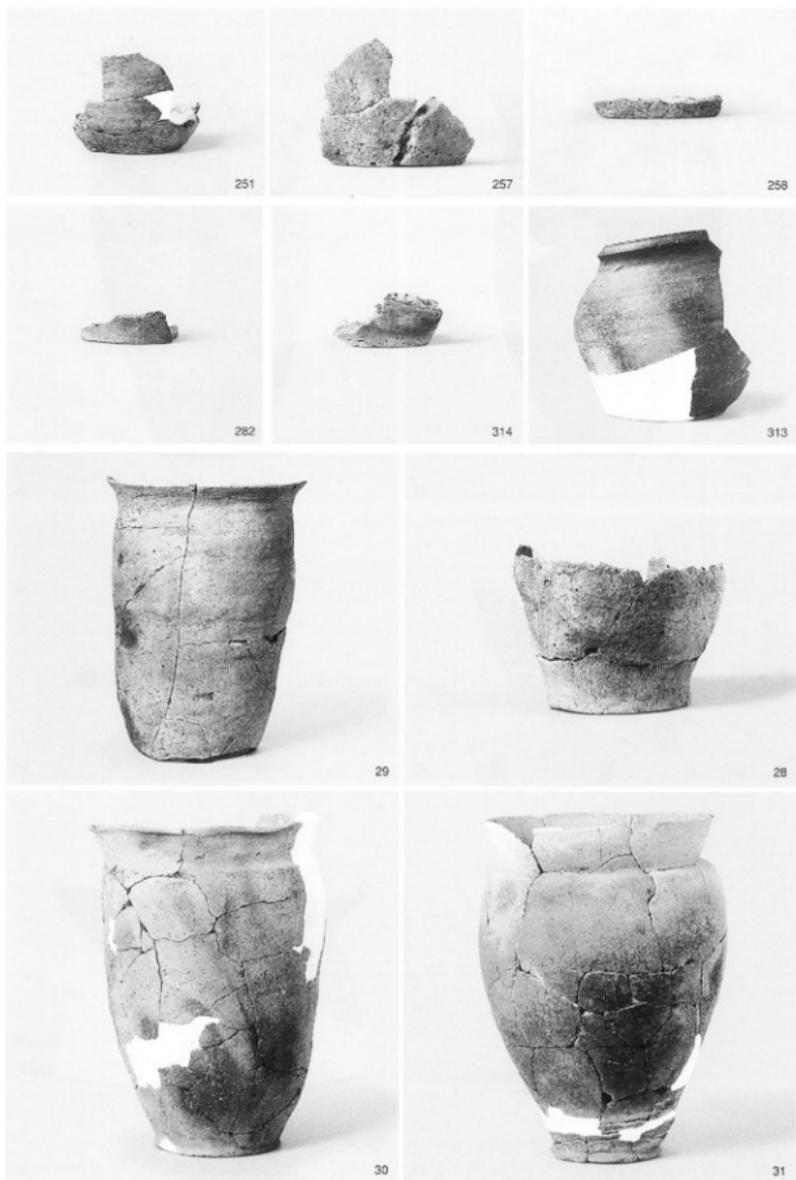
写真図版 62 RA128 ~ 130 出土土器



写真図版 63 RA130 出土土器



写真図版 64 RA130・RD193・209・220・224・225、風倒木1出土土器



写真図版 65 RA050・051・054・091 出土土器



写真図版 66 RA091 ~ 094 出土土器





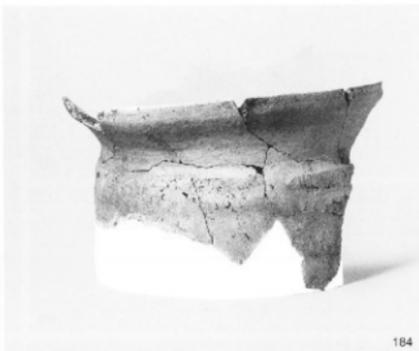
写真図版 68 RA096・097 出土土器



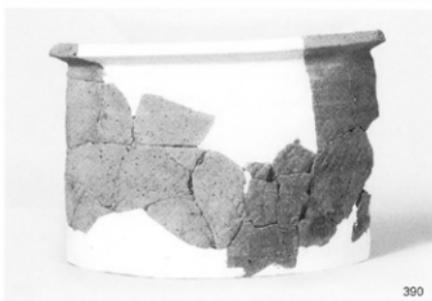


写真図版 70 RA098・099・101 出土土器



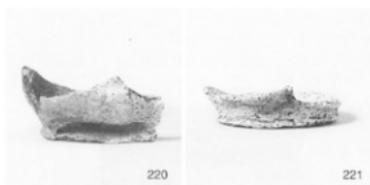


写真図版 72 RA109 出土土器





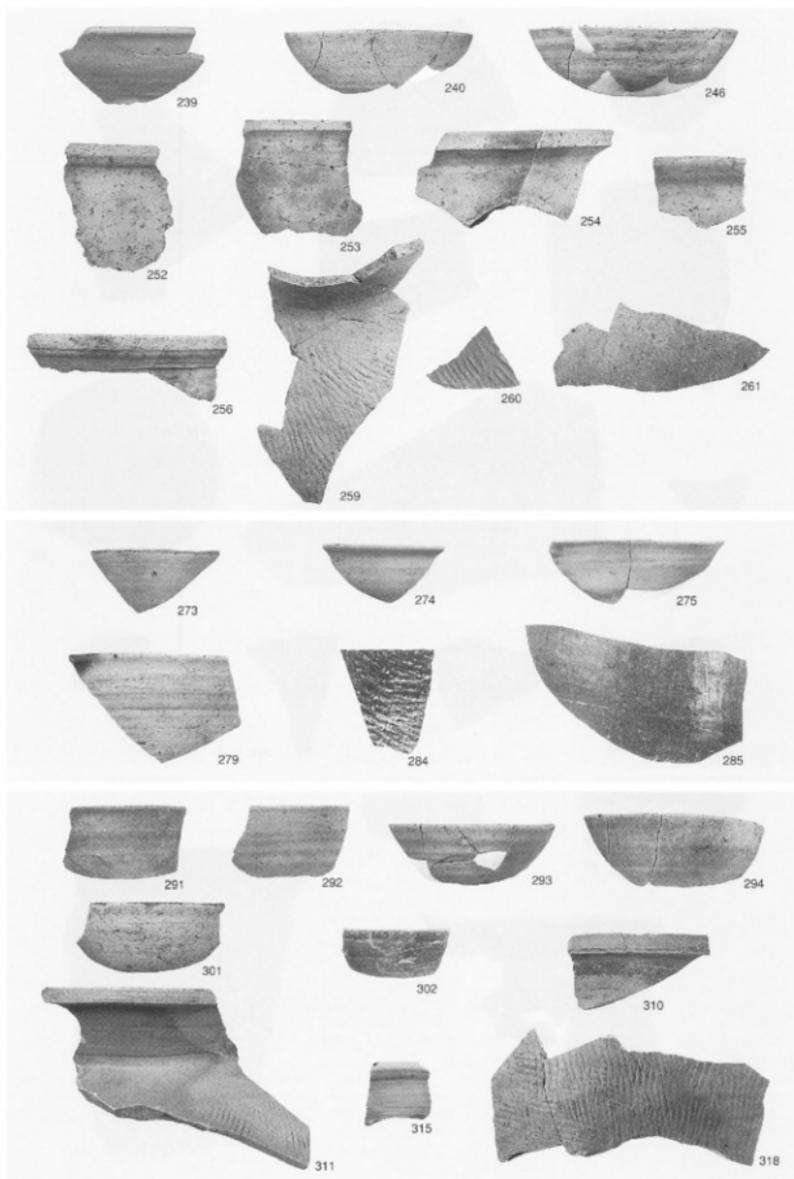
写真図版 74 RA113・119・121・124～126 出土土器



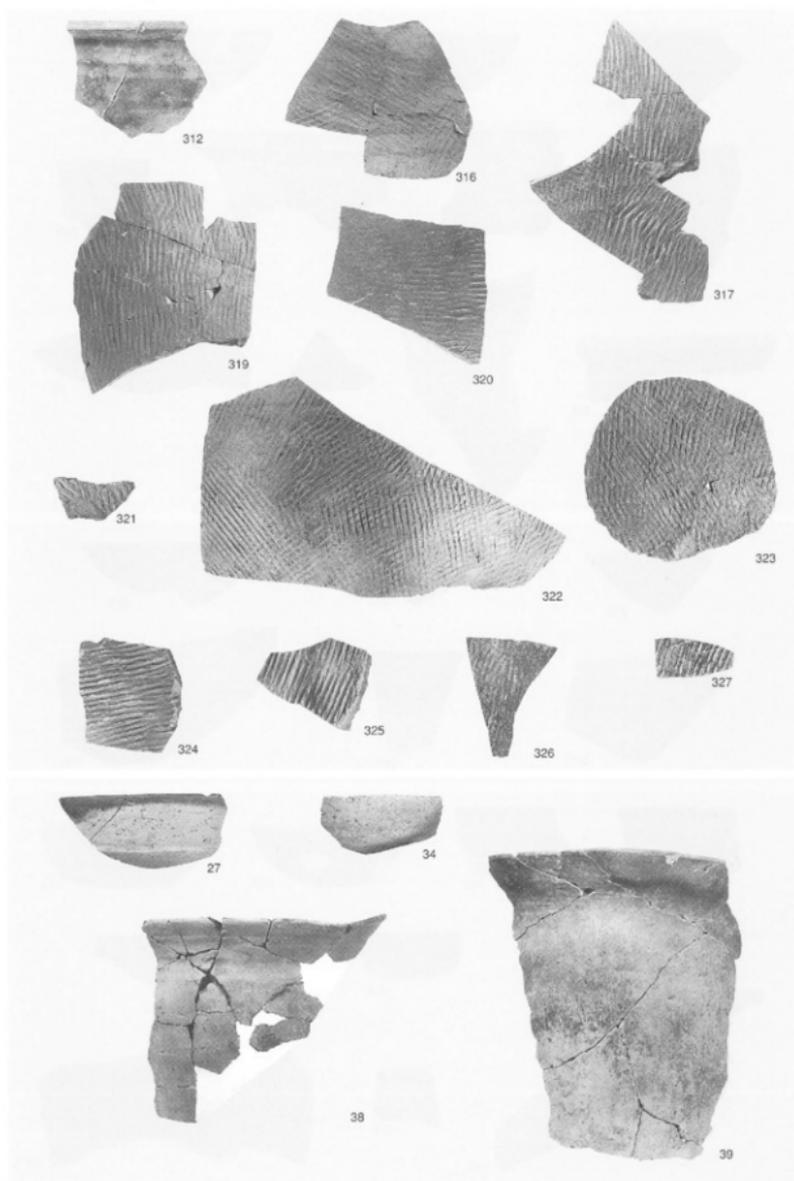
写真図版 75 RA126・127・129・130 出土土器



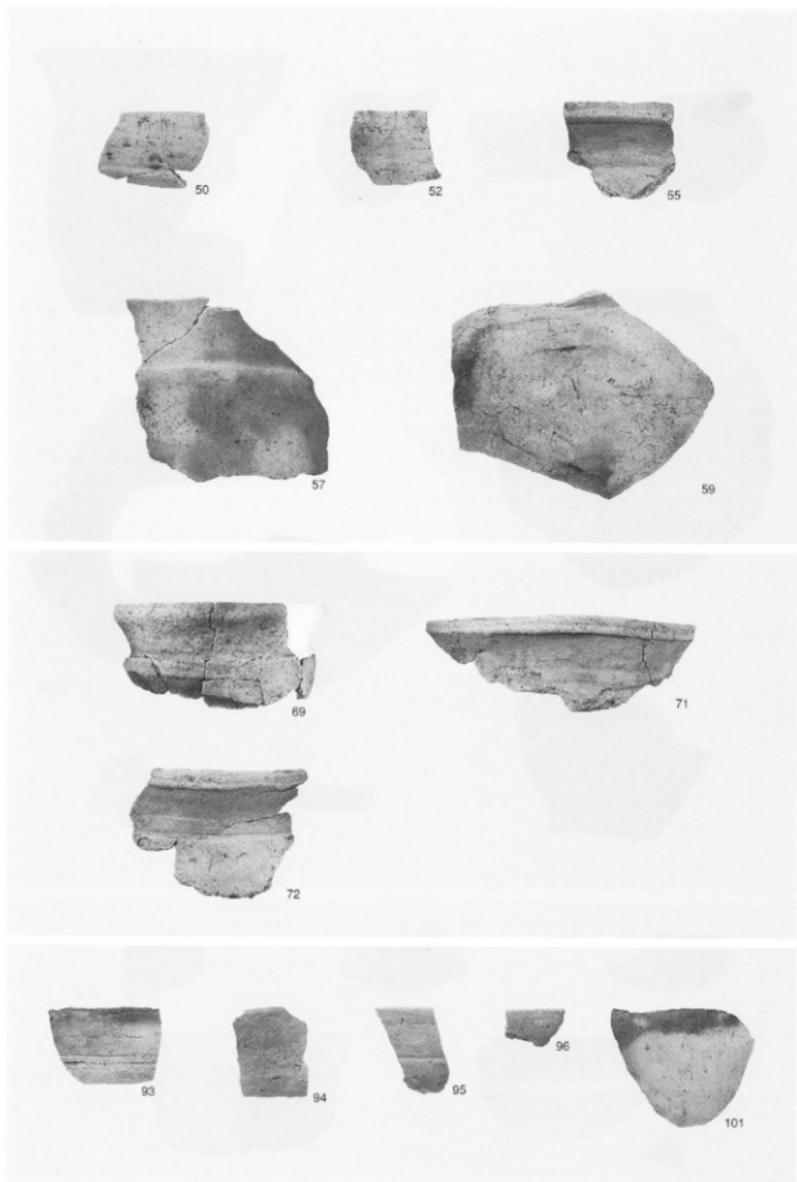
写真図版 76 RD193・198・209・223 出土土器



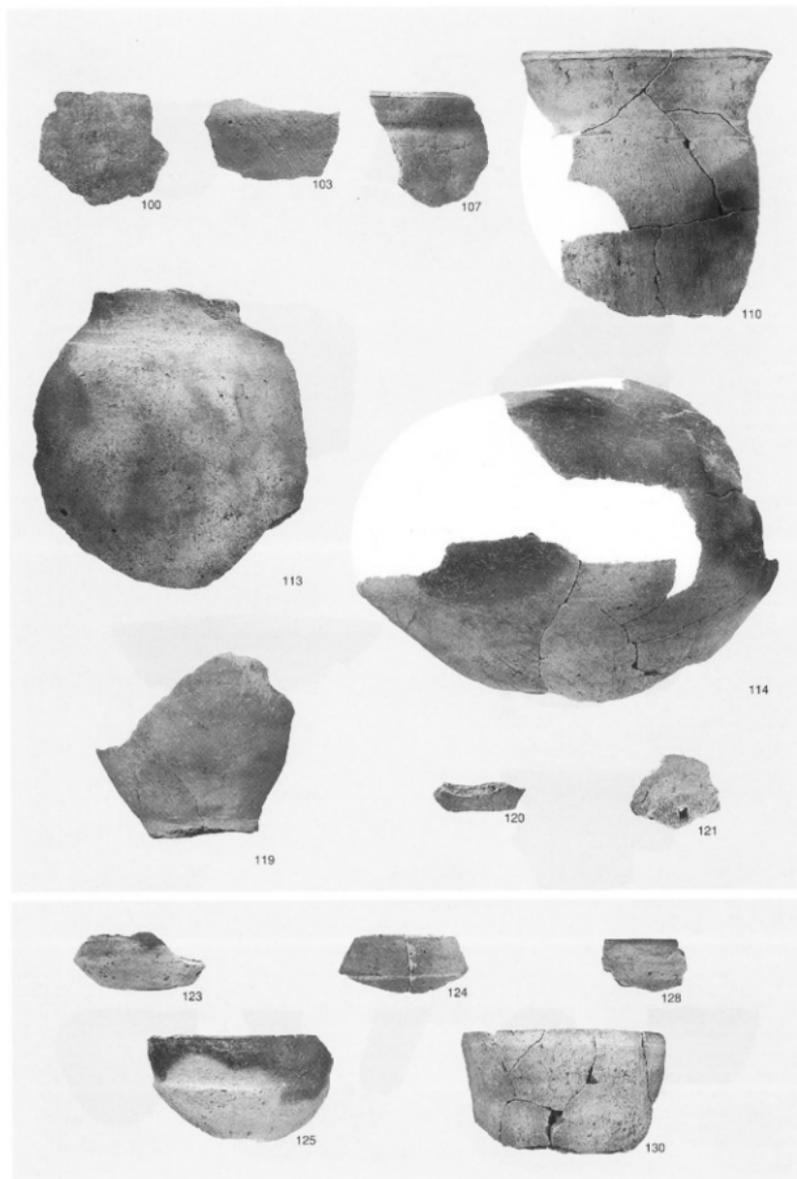
写真図版 77 RA050・051・054 出土土器



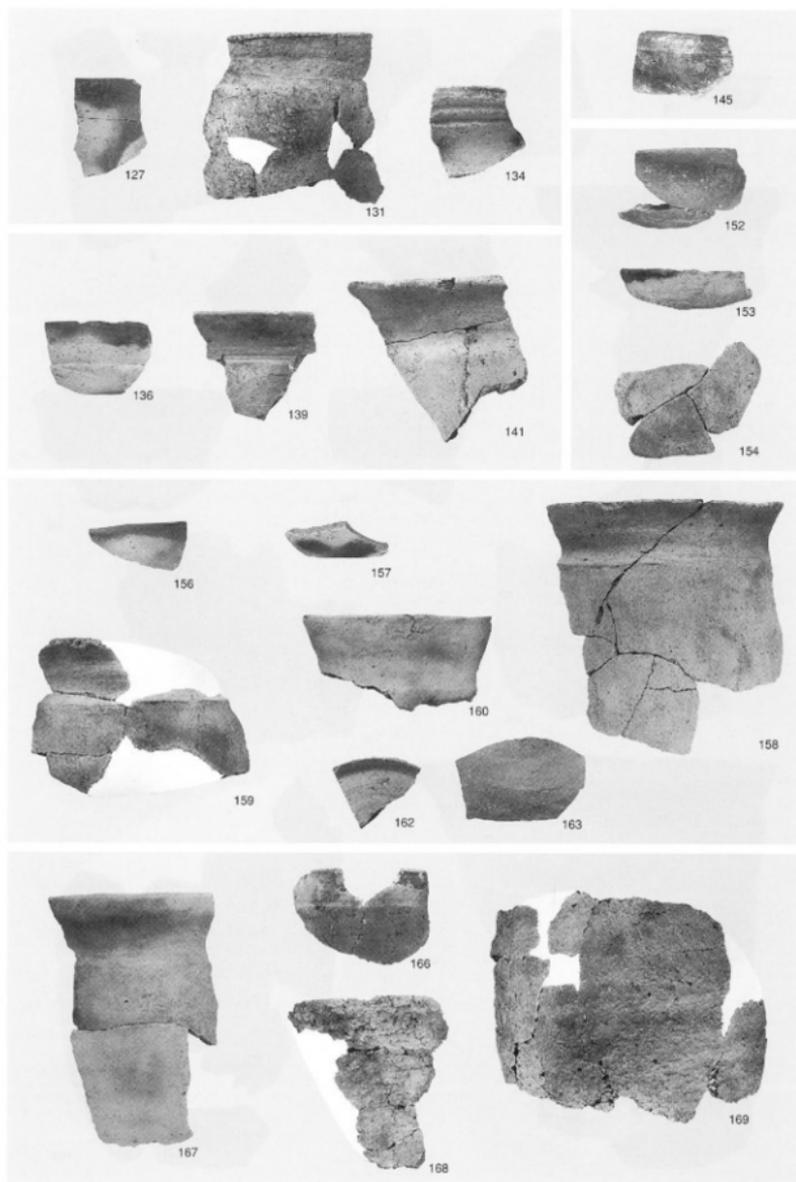
写真図版 78 RA054・091～093 出土土器



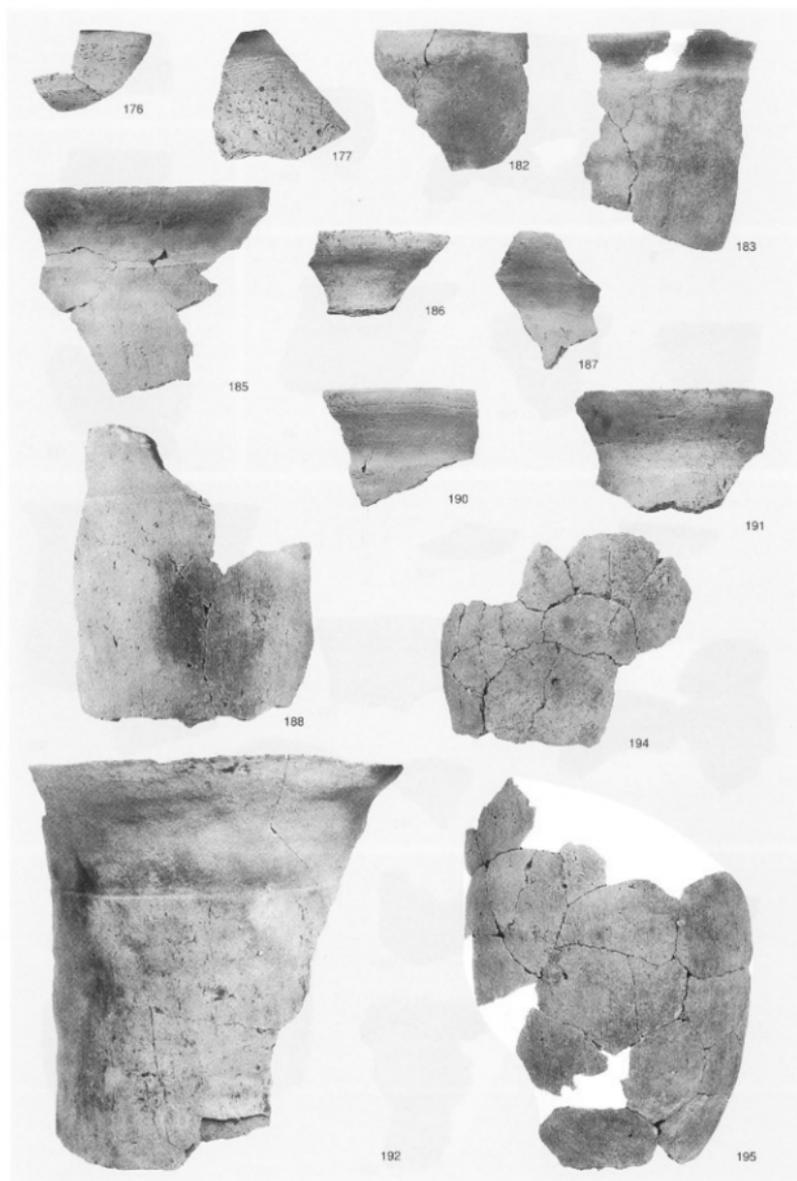
写真図版 79 RA094・095・098 出土土器



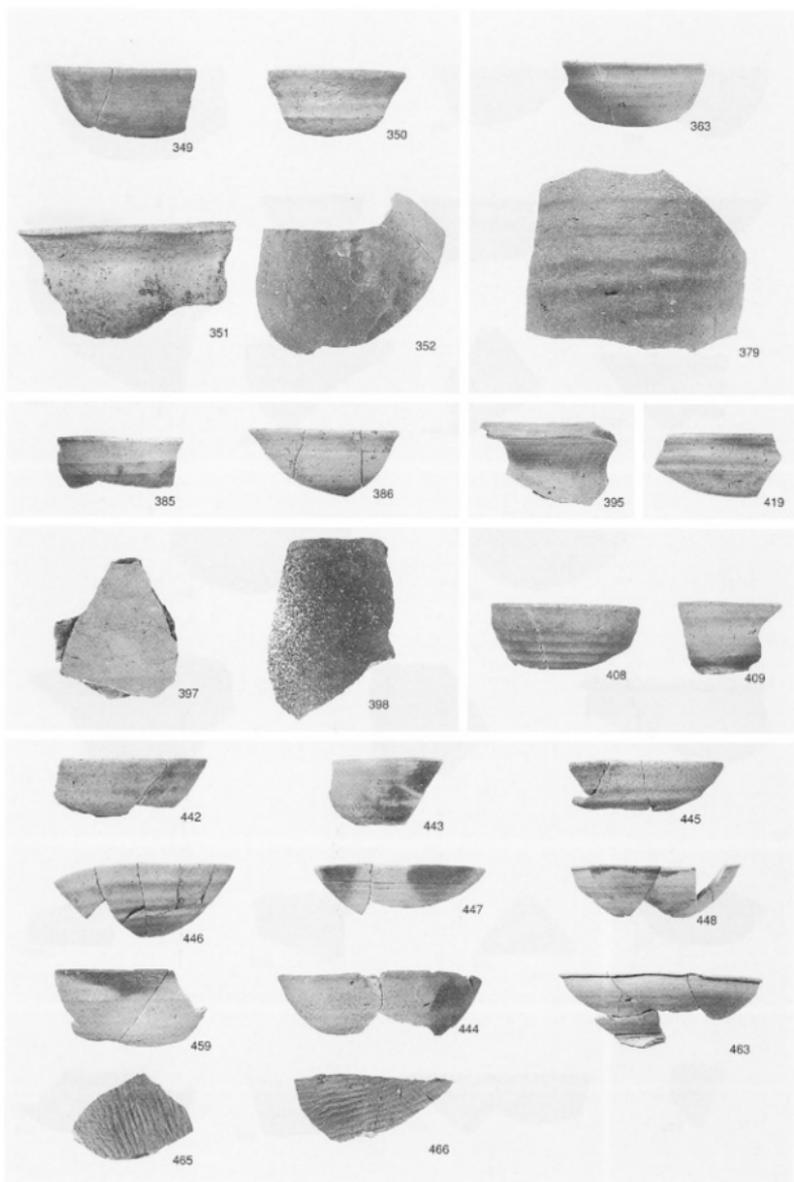
写真図版 80 RA098・099 出土土器



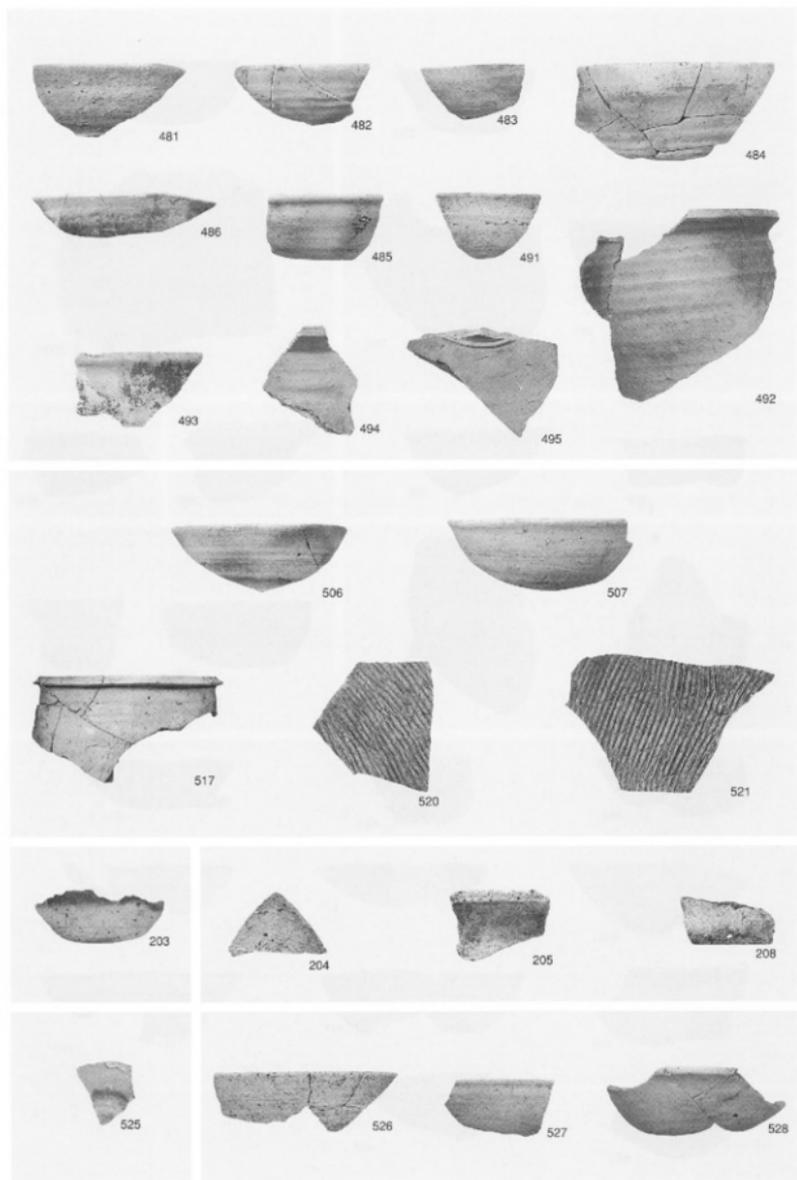
写真図版 81 RA099・101・102・105・106・108 出土土器



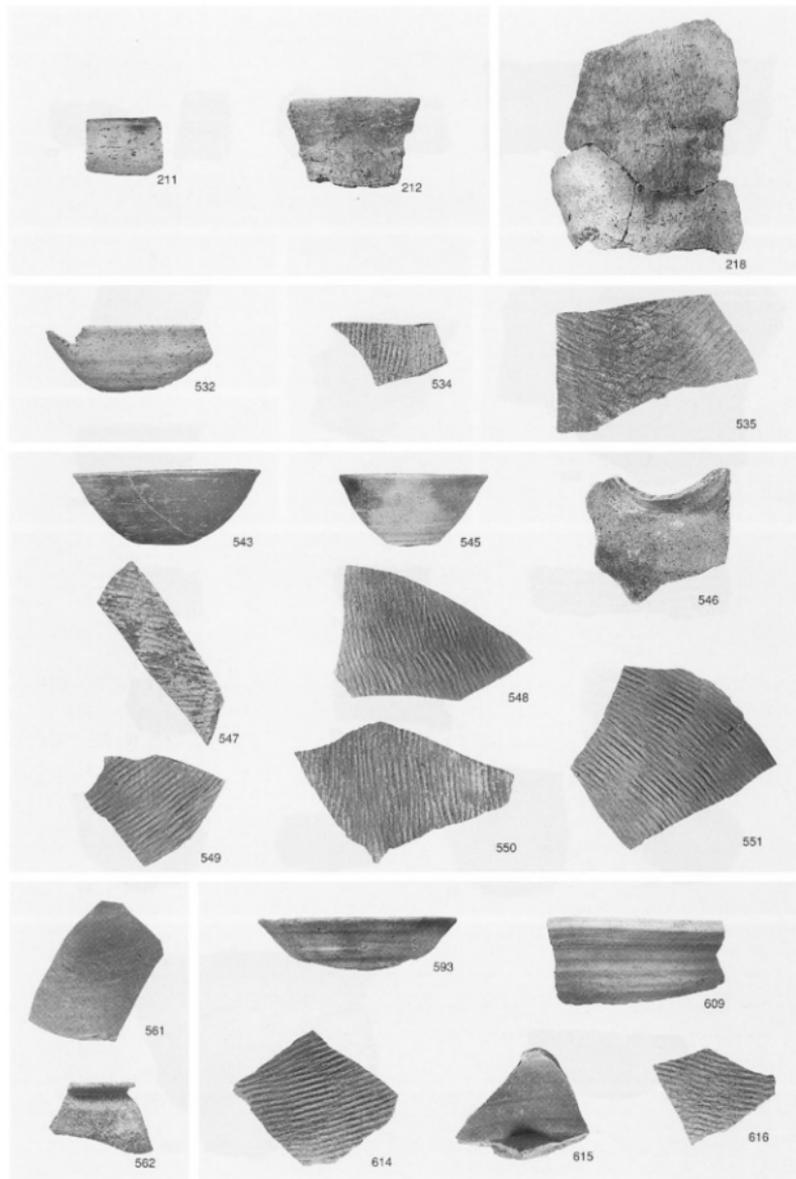
写真図版 82 RA109 出土土器



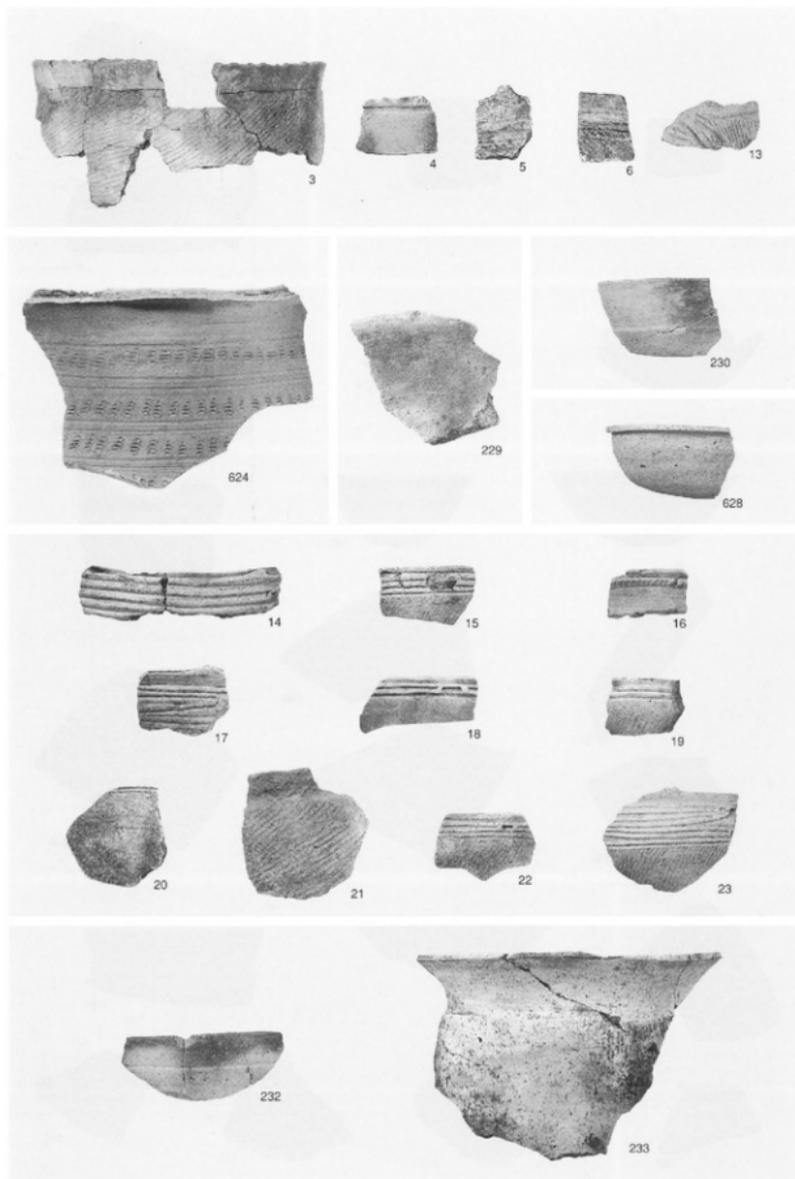
写真図版 83 RA110 ~ 115 出土土器



写真図版 84 RA116・118～121・124 出土土器



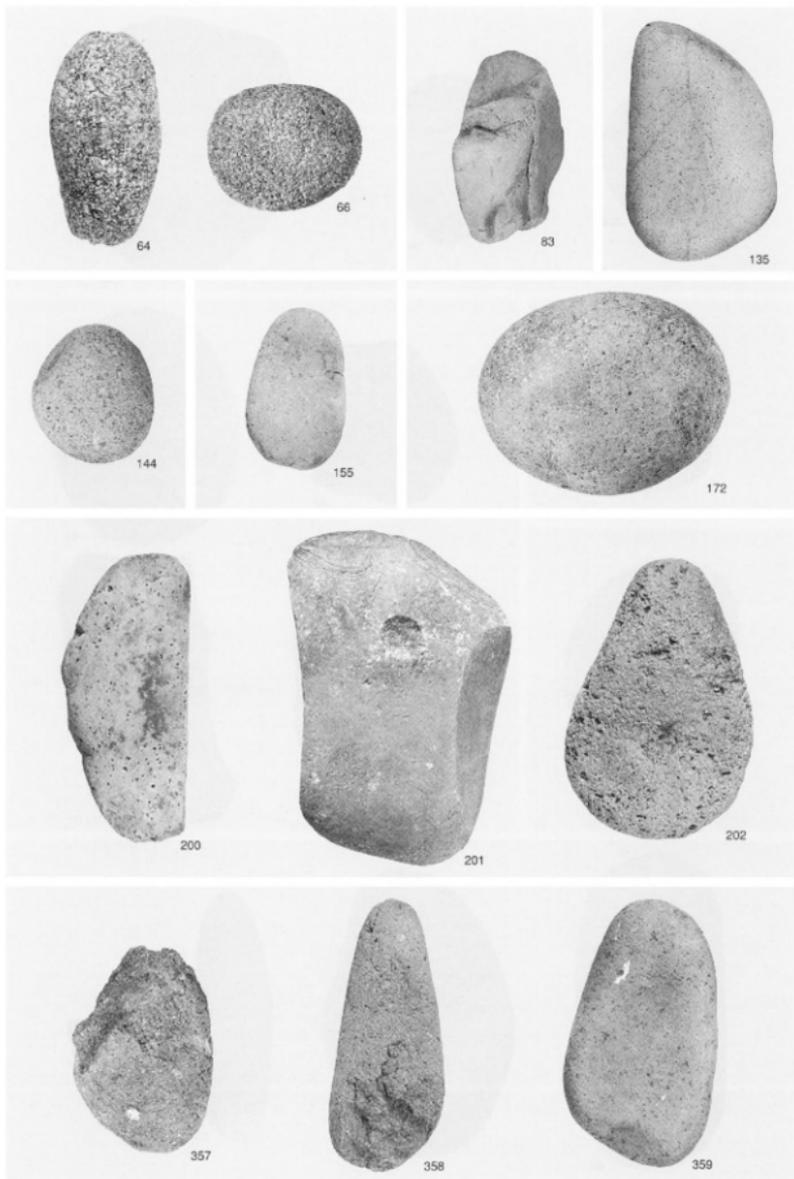
写真図版 85 RA125 ~ 130 出土土器



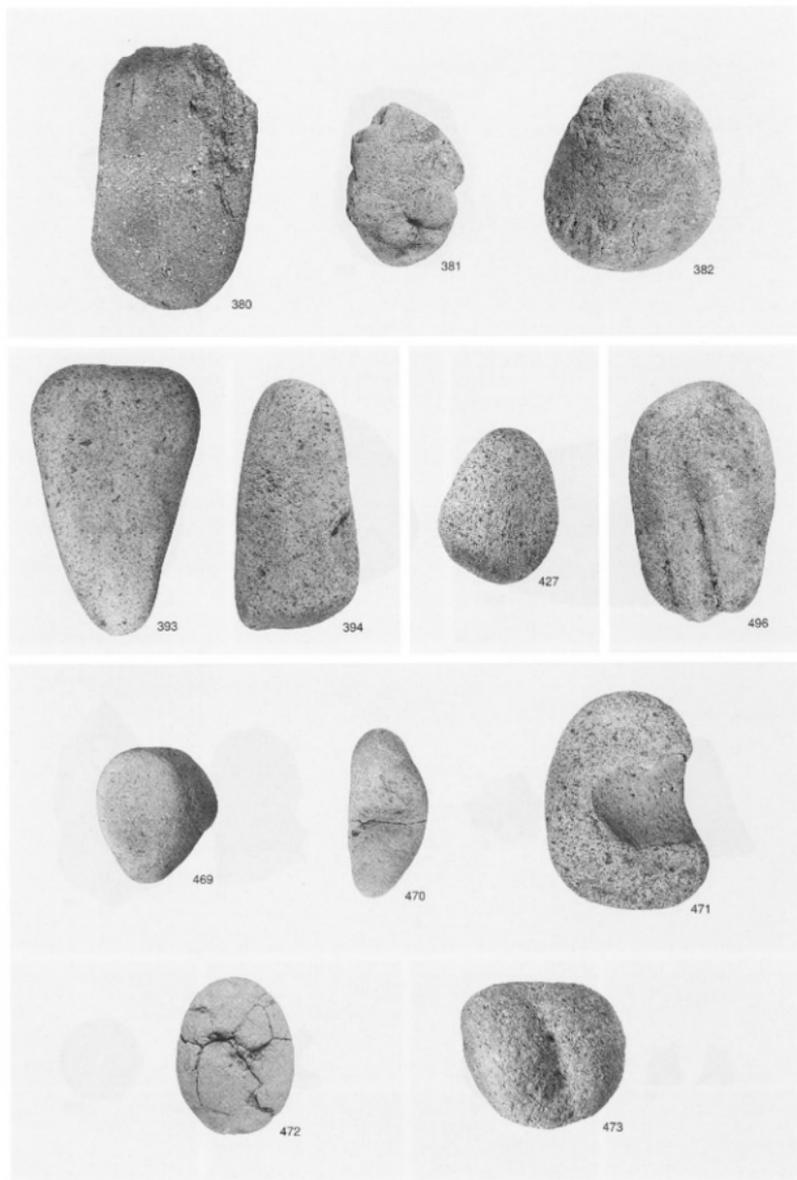
写真図版 86 RD193・201・209・223・225・231、遺構外風倒木出土土器



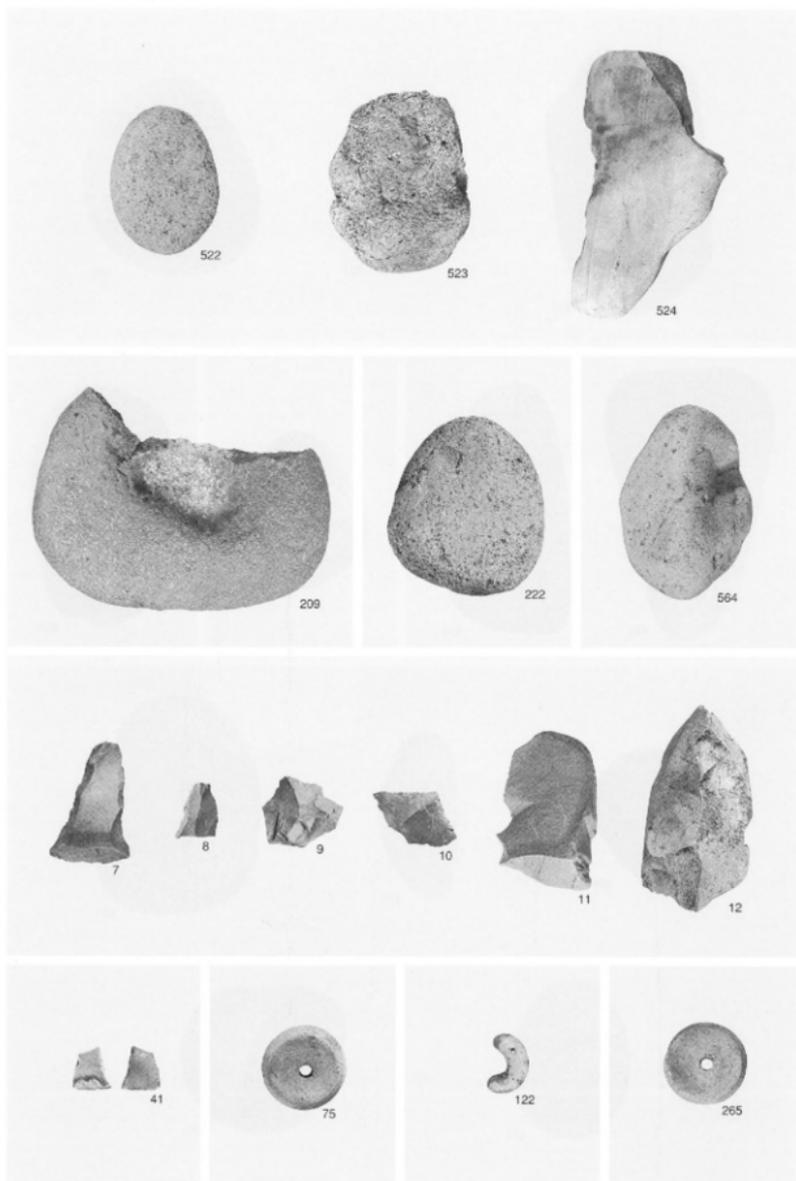
写真図版 87 RA050・051・054・093・094 出土石器



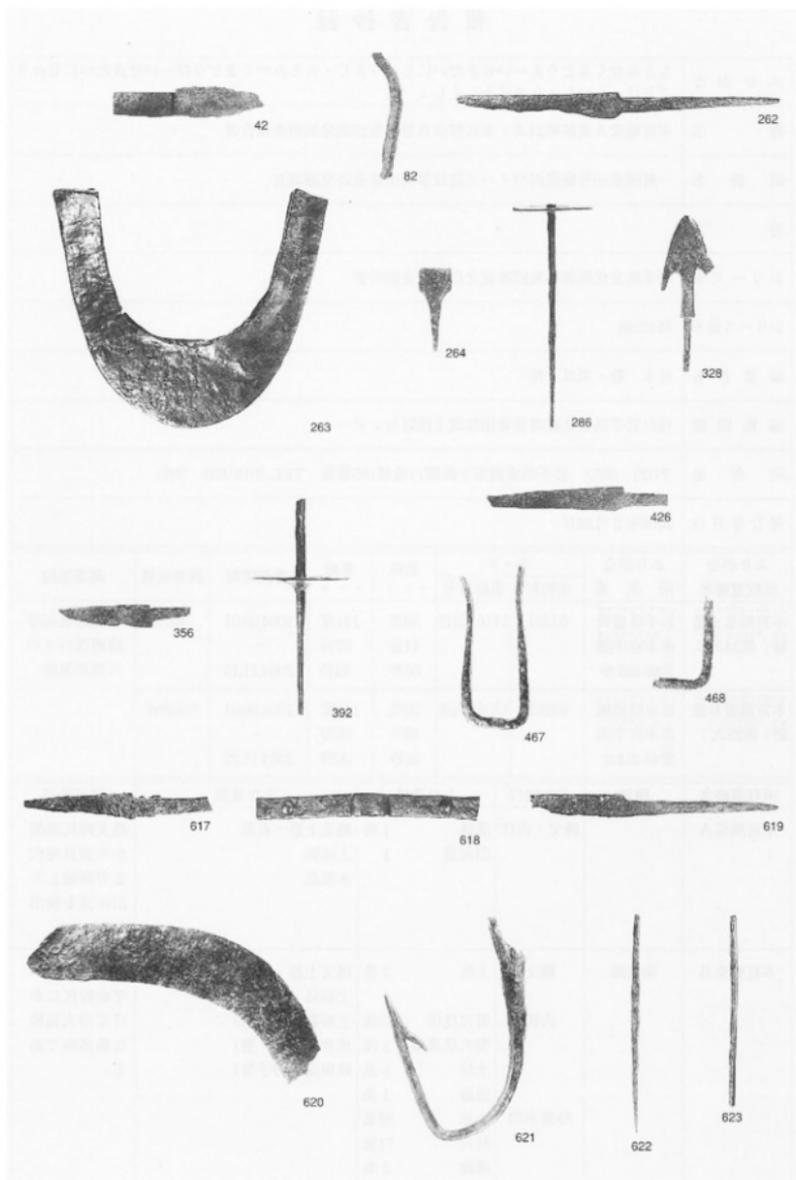
写真図版 88 RA094・096・098・099・101・105・108・110 出土石器



写真図版 89 RA111・112・114～116 出土石器



写真図版 90 RA119・121・126・129、RD193 出土石器、RA 出土土製品・陶磁器



写真図版 91 RA 出土鉄製品

報告書抄録

ふりがな	もとみやくまどうえーいせきだいにじゅうよじ・もとみやくまどうびーいせきだいにじゅうごじはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	本宮熊堂A遺跡第24次・本宮熊堂B遺跡第25次発掘調査報告書							
副書名	一般国道46号盛岡西バイパス建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第470集							
編著者名	村木 敬・須原 拓							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019)638-9001							
発行年月日	2006年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東緯 °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
本宮熊堂A遺跡(第24次)	岩手県盛岡市本宮字熊堂69-6ほか	03201	LE16-2117	39度 41分 08秒	141度 07分 44秒	2004.09.01 ～ 2004.11.15	357m ²	一般国道46号盛岡西バイパス建設事業
本宮熊堂B遺跡(第25次)	岩手県盛岡市本宮字熊堂44-2ほか	03201	LE16-2118	39度 40分 52秒	141度 08分 00秒	2004.06.01 ～ 2004.11.22	7,366m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
本宮熊堂A		縄文・古代	溝跡 旧河道	1条 1	縄文土器・石器 土師器 木製品	縄文時代晩期から奈良時代まで継続した旧河道を検出した。		
本宮熊堂B	集落跡	縄文 古代 時期不明	土坑 竪穴住居 竪穴状遺構 土坑 溝跡 土坑 柱穴 溝跡	2基 43棟 2棟 8基 1条 33基 74個 3条	縄文土器・石器 土製品 土師器(坏・甕) 須恵器(坏・甕) 鉄製品(刀子等)	奈良時代から平安時代にかけての大規模な集落跡である。		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第470集

本宮熊堂A遺跡第24次・本宮熊堂B遺跡第25次発掘調査報告書

一般国道46号盛岡西バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成18年2月22日

発行 平成18年2月28日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡1地割185番地
電話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印刷 山口北州印刷株式会社
〒020-0133 岩手県盛岡市青山4丁目10-5
電話 (019) 641-0585

